KAIZO

改造

十月號

1927

社會科學 十月特輯
マルクス主義全解

マルクス主義の普及は今、怒濤の如く國境を飛び越へて、全人類の心臓と心臓とを結ぶ革命的な世界觀となつた。然るに未だ、その唯物辯證法に發するマルクス主義の全體系は、系統的に把握するに甚だ不便を免れない。其處にマルクス主義の骨抜き俗惡化の種々相がある。玆に本誌はマルクス主義の全體系を大衆に容易に把握せしむることを志し、縱に經濟的下部構造より觀念形態・唯物辯證法に至るまで、横に世界資本主義の現勢・人口問題をも抱擁した。問題の配列、筆者の選擇には大なる苦心を拂ひ、最近頽落しつゝある亞流マルクス主義から眞個のマルクス主義を防衛せんとする學究的試みであると信ず。而も解説の該博、行文の平俗なる、これこそ大衆啓蒙の指南車として「あらゆる人民の層の中へ行く」階級的寶典と云はねばならぬ。

定價壹圓八拾錢

改造社

内容

田中內閣の言論彈壓

——私たちは金輪際臆病になつてはならない。自己の信ずる主張のために進み、若し不幸世の總てが我々をいれてくれることが出來なかつた場合は、いさぎよく我々の屍を本誌の上に横へるのみ——こうした信條のもとに我々は現段階に於ける前衞に立ち、及ばずながら微力を社會、人類の爲に傾けてゐるものである。本誌はいつでも宣言してゐるやうに背後に金權や、政權のたのむものはない、或國の政治家や、大官の如く賄賂もとらねば、世の新聞雜誌によくある銀行や會社よりいろ〳〵の名義で多額の金額をせしめること等は絶對にない。我々の總ては讀者のみによりて支持せられてゐる。そして本誌は多大の犧牲を忍びながら行く先き先きに展開する社會がたのしさにかく勇敢に鬪つてゐるのである。それに時々バサリと發禁の一令が下る。我々は國家が、眞に治安を紊り、風俗を紊るものに或る權力を發動せしめるのはやむを得ないことに思ふ。それは眞にやむを得ないときに限り是認する。しかし田中內閣の如きは始めから內務行政の全部を取締行政と解し、懲罰行政と解し、我が社會多難のときに何等社會進展に關心なき司法官僚であり、懲罰官憲であつた人々を內務の大臣及局長に据えた。階級鬪爭や、人口問題や、財界混亂でやかましい今日、社會問題や財政に何等の交渉、經驗のなかつた人々に全日本民衆の生活に最も關係多き要路を擔當せしめる暴斷（選擧の取締の如きは內務行政の眞の一部分のみ、この他に長所あればとて斷じて內務大臣の適材にあらず）は田中內閣が眞に大衆政治の門外漢であり、時代の逆行者であることを立證する。田中內閣が言論彈壓に於て桂內閣の彿ありと云ふは亦所以ありと首肯できる。我々は發禁は法治國では列擧主義に出づるのが當然であり、そして禁止の理由は堂々と公開すべきものであることを重ねて玆に提言する。さもなくば手心官憲によりていつまでも言論と藝術がそして我々が永劫に斬棄てられるのである。又、九月一日より實施せる分割還付制度の如き、表紙を全部刷かへることによつて再び發賣を許すこと等は斷じて實行の出來ぬ案である。所謂佛つくつて魂入らずの形式制度である。名は還付と云ふも其實に於て發賣不能なるを奈何せん。且つ、雜誌の生命が發行後たか〴〵十日位なるに見て我等は斷じて此案に大斧鉞を加へんことを希望する。田中內閣の言論彈壓が依然として革まらないならば結果の及ぶところは測り知られぬものがあるだらうことを思ふものである。

土地國有問題の歴史的意義

三浦周行

一 緒論

土地國有問題は數千年前からの歴史上の問題である。東洋に於ては、支那では周以前が土地國有の時代であつたといはれ、彼の有名な井田法の如きも、此國有の土地に於て行はれたことになつて居る。秦以來は土地の私有が行はれたが、其後南北朝の時代に、北朝の後魏の孝文帝が土地國有の制度を復舊して以來、隋も唐も皆大體此制を踏襲して唐の中期玄宗の時迄續いて居た。我日本に於ても、唐で國有制度の行はれて居たのと、時を同じうして、孝德天皇の大化の改革で土地國有の制度が採用されたのは周知の事實である。更に現代の我國では農耕に適した國有地は殆どないが、東西諸國、共に多少の國有土地を有たぬはなく、時にソヴエート・ロシヤの如きは、土地はすべて國家の所有に歸せしめ、全農業地は農業的生産の爲めに利用することを許し、其土地利用權は原則として自作農の享有し得るものとして居る。これは地主の意志に反して其土地所有權を奪ひ專ら無產者の利益を圖つたものであるが、我國に於ては近來小作爭議の頻發や其惡化が絕えず地主を脅威する爲めに、田地に對する投資の愈行詰つた結果、地主間に於て土地國有制度の採用を望むの聲が高まり、政府は又最近に頗る大規模な計畫の下に小作農地を買收して自作農の創定を行はんとするやの風說があり、而かも小作農を以て組織された農民組合は却てこれに向つて絕對反對を唱ふるの奇觀を呈して居る。而して此土地國有制度の利害得失及びこれを將來に維持すべきや、減少せしむべきや、將又增加せしむべきやについては、今尙ほ議論の餘地がある。然らば則ち土地國有の問題は啻に過去の問題であつたばかりでなく、現代の問題でも

あり延いては將來の問題でもある。又最も古い問題であると同時に、最も新らしい問題でもあると謂ふことが出來る。唯此問題は其關係するところが頗る廣汎複雜であつて、其歷史的考察丈でも、優に一部の著書となる程であるから、今は主として我國に於て歷史上土地國有の成立した經過、內容を說き、更に其制度の崩壞に至つた經路と、土地私有時代に及ぼした國有の影響とについて概括的な說明をするに止めたい。若しも此概論が多少なりとも本問題の考察に寄與することがあれば望外の光榮である。

二　土地國有制度

我國の上古に於て、土地所有が如何なる形式に於て行はれて居たかは詳らかでない。神話傳說の中には狩獵時代の名殘と覺しきものも絕えて無いではないが、歷史以前はいざ知らず、歷史があつてから以來は、既に農業時代に入つて、重農主義が行はれて居たのみならず、氏族制度が發達して、それが君民の關係に結附けられ、天皇の統治權も確立されて居つたと見るの外はない。今から凡そ千二百餘年前に於ても、同一の氏族の人が四百餘人(中には若干の部民奴婢とを含んで居る)其氏の名を取つた鄉や、鄉を二つに分けた里に居住して居つた實例がある。(大日本國文書一所收聖武神龜三年山背國愛宕郡出雲鄉雲上里及び雲下里の計帳の出雲臣の場合)尤も今殘つて居るのは當時の書類の斷簡に過ぎないから、若し其全文が傳つて居たならば、全戶の戶口は更に何程か增加すべき筈である。而して上古にあつては、斯樣に同一の氏族で一つの村落を占有して居つた實例は、一層多かつたと見なければならぬ。

是等の氏族は祖先以來同一の土地に土着して移らなかつたものもあるが、後にはそれから分れて他地方に移住したものもあつた。今擧げた場合の如きも亦其一例である。而して是等の移動は、戶口の增加に依つて自然に土地の資源が乏しくなつて來たからでもあらうが、彼遊牧生活から。地力の消耗し盡くした土地を放棄して、新らしい土地へ土地へと移つて行つた野蠻民族とは違つて、往く先き〳〵で、祖先の神即ち氏神を祀り、永くそこに安住して血族團體を形作つて居たものが、奈良朝時代迄も續いて、子孫が彌繁殖したものである。尤も後には單純氏族の外に、他の氏族の雜居、若しくは交替に依つて、血族團體が村落團體となり、從つて氏神が產土神となるに至つたこと言ふ迄もない。

然らば斯る場合に於て、土地は氏族の共有であつたか、それとも個人の私有であつたか。土地私有の起源を說く學者は、勞力と財產の形式との間に密接の關係のあることを認めて、勞働單位が集團である場合は、共同的であり、個人若しくは一家族である場合は、個人的であるといふ。成程勞力を土地に費した耕作者が、其土地に執着を覺えるは必然の事であるに相違ない。併し氏族制度及び家族制度の社會にあつては、斯樣な見方は盾の一面を見たものに過ぎないのである。歐洲

でも希臘羅馬の昔にあつた是等の制度が、今や其痕跡だに留めなくなつて居るから、西洋の學者はよく古代の社會現象に向つて、現代の學說を當て嵌めようとする無知を敢てするが、そこになると、東洋には永く此制度が行はれて居つて、今尙ほ其名殘を留めて居る丈に、我々は西洋の學者以上に其眞相を窺ふべき便宜と理解とを有つて居ると信ずるものである。

我々の見るところでは、我上古に於て氏族又は家族間に土地の共有が行はれて居つたと信ずべき理由は充分にある。中古の令（普通大寶令といはれるが、實は養老令）に個人の遺產として分配すべき賤民の事を書いたところに「氏の賤は此限にあらず」といふことが見えて居るから、當時も氏に屬した賤民もあつたことが知れるが、同時に氏の財產は賤民の外に土地もあつたことは明らかである。是等は當時氏の共有として氏の上の保管すべき性質のものであつた。而して上古に於ては斯樣な財產は更に多く存在して居たと見て間違なからう。但し歷史以後の我國に於ては確かに個人の私有地の實例もあるから、當時文化の程度に於て既に私有財產制も相當發達して居たと看做さなければならぬ。

併し乍ら氏族制度や家族制度の社會は共同の祖先を有つて居たものが、氏ノ上又は家長の統制の下に集つて居る精神的結合であるから、これに對しては、單なる勞力や勞働丈を問題とすべきではなく、必ずや物質を超越したところの或者がなくてはならぬ筈である。此雰圍氣に人となつたものが、其氏の起つた土地を本居（ウブスナ）として尊重したのは始めてそこを開いた祖先を崇め、家を重んじたからである。推古天皇の時に、蘇我馬子は皇室御料となつて居つた大和の葛城縣を其本居であり、それを姓名として居るからといつて自身に賜はられんことを奏請したけれども許されなかつたが、後に馬子の子蝦夷は葛城の高宮に其祖先の廟を造つて居る。後の武士が本領や在名即ち名字の地を尊重したのはこれと同じ思想の流れに外ならぬ。

されば斯る時代にあつてはそれが氏の共有地であらうと、又氏を構成する個人の私有地であらうと、苟くも氏や家の爲めになることであれば、これを犧牲に供することを辭せなかつたことも有勝であつたらしい。當時氏や家の長たるものが、朝恩に感じて私有地を獻じたこともあれば、又犯した罪の爲めに私有地を獻じて罪を贖つたこともある。中には死刑に相當する重罪もあつたから、其土地の頗る廣大であつたことが推測され、斯る場合に氏の共有の土地はもとより、氏人の所有地も提供されたことが想像されるのである。殊に上古の末期には氏族專制の弊が甚だしくなつて來て、氏の上が横暴を極めることになつたから、斯る事も一層實現され勝であつたらうと思はれる。

此時代には閥族の手が政治上、社會上に加へられて、あらゆる利權を壟斷するに力めた結果、こゝに露骨な土地の爭奪が行はれ、貧富の懸隔を生じた。大化改革の時、孝德天皇の詔に「或るものは數萬頃の田を兼併し、或るものは全く容針の少地だもなし」と仰せられたのが

即ちそれである。彼等閥族は遂に皇室御領迄も兼併しようと圖つたから、皇室としても、これに對して適當の對策を講ぜられなければならなくなつた。推古天皇が馬子の望を斥けたまうた時の仰に、朕は蘇我氏から出づ、大臣(オホオミ)（馬子）は朕が舅(ヲヂ)であるから、夜に言はれたことは夜も明けず、晝言はれたことは日も晩れぬ中に採用すべきではあるが、朕の世に此皇室御領を失つたならば、愚かな婦人が皇位にあつた爲めにさうであつたと言はれるであらう、これは獨り朕の愚名ばかりか大臣も不忠の惡名を後世に殘すであらうと仰せられた。女帝にましまし乍ら御私情を排したまうて此斷乎たる大御言のあつたのはよく〳〵の御事と思はれると共に、土地爭奪の渦卷が滔々として、皇室に迄波及し、これに對して極力御領の減少を免れんとしたまうた御軫念の程を窺ふべきである。而かもこれは決して消極的な御領の防衛ばかりではなかつた。彼屯倉(ミヤケ)を諸國に置かれ、又天皇、皇后、皇子の御かくれになつた後、御名を附けた部民を御名代・御子代の民として諸國に置かれたのは、積極的に皇室直轄の土地及び人民の增加を圖られたものである。氏族の私有地や私有民を上つることに依つて、其罪を贖ふことを許されたのも亦同一の方針に出でゝ居る。私は當時氏族が其私有地を上つり、皇室がこれを受けられてそこに屯倉を立てられたのは、中古莊園時代に地主が皇族を初め貴族等の所謂權門勢家に表面其所有地を寄附贈與して、自身は管理の職に居り乍ら、事實上の所有を續けて居たのと同一の事實があつたらうと思ふ。

當時に於いて、有名な大化の改新が行はれて、閥族に致命傷が與へられたが、土地國有制度の確立されたのも、實に是時であつた。大化元年には、先づ大和の皇室御領内に於ける戸籍及び田地の調査が行はれ、東國諸國及び畿内との土地調査が進められ、次いで戸口調査が行はれ、土地の兼併及び賣買が禁ぜられたが、それらは何れも土地國有制度實施の準備と見るべきである。斯くて其翌大化二年の正月元日に、堂々たる土地國有の大詔が煥發された。それに據ると、皇室御領たる屯倉を御子代の民及び各氏族の所有した土地人民を廢して、大夫以上には食封即ち封戸を給付し、大夫以下の官吏及び百姓には當時の通貨の用をなして居たところの布帛をそれ〴〵給付された。これ各氏族に隷屬した部民を解放して國家の公民となされたと同時に、其私有地をも國家の公地即ち國有地となされたものである。これに次いで、地方制度、租稅法、行政法の關係諸法律が次々に制定され、殊に一定の田地を均しく人民に班つべき班田の法が初めて實施されることゝなつた。

中古の令も亦此制度に依つて制定されたものであつて、土地は公田と私田とに分たれるが、其中私田は人民に支給さるゝより其名を得たものではあるけれども、私有地の意味では決してなく、其大部分を占めたところの口分田は年齡が六歲に達した男女に給與さるゝが、それは存生中丈であつて、死亡、失踪、及び犯罪に依る沒收處分を受けた場合は、國家に返還せなければならぬ。其他の位階に依る位田、勳功

に依る功田、特に別勅を以て賜はる賜田の如きは一生の間、又官職に依る職官は在官の間丈で、相當の理由ある辭職や免官に限つて支給額を半減して給與することはあつたが、それも當人の存生中に限られた。唯功田は原則としては終身であり乍ら、功勞の等級に依つては、子孫若しくは永久に相續させたものもないではなかつた。これ唯一の例外である。其他宅地は設定者に相續させること、何處の立法も同じ事であつて、園地も同樣所有を許された。從つて宅地、園地の外は賣買を許されて居らぬ。當時公田、私田に通じて賣買と稱して居つたのは年期賣買の外なかつた。例へば公田の場合は一箇年の契約で一定の地子即ち小作米を徴したものである。

偖此土地國有の大詔は表面突如として煥發されたやうに見えるが、仔細に當時の史實を檢討すると、決してさうではなく、種々の原因から當然の推移であつたことが見出だされるであらう。

(第一)は社會上の原因である。前にも説いた如く、氏族制度の弊害から貧富の隔りが甚だしく、土地の分配が一方に偏した場合には、如何なる方法に依つてか、土地の均等化を圖つて、行詰つた局面の展開を期せなければならぬことは、當時の識者の夙に痛感したところであつたやうである。

(第二)は國家的原因である。我國では古來天皇即ち國家と看做され天皇も國家をも共に「ミカド」と訓ませて居る。從つて天皇の統治したまふところ即ち其御領であると思はれた。故に當時氏族が其私地を上つる場合にも謹んで國家の爲めにどこ〳〵の屯倉を置き奉る抔と申して居る(日本書紀安閑天皇紀)。大化改革の時の詔や、此改革の計畫者たる中大兄太子の上奏文を通して見ると、我國は開闢以來君臣の別が定つて居つて、天皇が此國土をしらしたまひ、臣民をして各其所を得させられて居つたのが、後世に至つて、氏族の分裂を來した爲めに互に土地を占有して其私財となし、又皇室に屬する御名代を私民として使役するやうになつた。今や孝徳天皇は昔の天皇の御世に復つて天下を統一するの機運に當られて維新の政を布きたまふであるとの事である。恰かも明治の改革の二つの「モツトー」であつた王政復古、大政維新と正に同一の動機から出でゝ居るものと謂ふべく、頗る興味のある事である。これ畢竟支那に於て三代の制度文物が理想とされた如く、我國に於ても、開闢以來所謂皇祖皇宗の建國の御世が理想時代となつて居たからである。

されば此改革は建國の精神に復つて、閥族權臣の爲めに蔽はれて居つた天皇の統治の大權を確立することを第一義とせなければならぬ。大化の改革に着手される前に、孝徳天皇が群臣を集められて君臣の別を明らかにされ、臣下の服從を誓はせられて居るのはこれが爲めである。

(第三)は支那思想及び制度の影響である。詩經の小雅北山篇に「普天の下、王土にあらざるなく、率土の濱、率臣にあらざるなし」と見え、又禮記には「天に二日なく、土に二王なく、家に二上なし、民に

君臣の別あるを示すなり」と見える。(孟子萬章上)には孔子の言として天に二日なく民に二王なし云々といつて居る)此支那の王道主義は漢學の傳來以來、漸く我識者の間に感化を與へたらしく、安閑天皇の時に皇室の爲めに察Kの地を進めることを命せられた一郡司が惜んで上られなかつたのを責められて「率土の下、王封にあらざるはなく、普天の上、王域にあらざるはない」のに王地を惜み率つたのは不都合であると仰せられたことがある。此思想は聖德太子の憲法十七條に至つて成文法化された。即ち其第十二條に「國に二君なく、民に兩主なく、率土の兆民、王を以て主となす。所任(ヨサシ)る官司は皆是王臣なり、何ぞ敢て公と百姓に賦斂せんや」といつて國司國造の任意に人民に課税するの不法を戒めてある。大化の改革の時に中大兄太子も亦天皇の御諮詢に奉答なされた上奏文中に「天に雙日なく、國に二王なし、是故に天下を兼併せて萬民を使ふべきは唯天皇のみ」と仰せられて居る。即ち支那に於て土地を王土とするが如く、我國に於ても皇土と看做された からである。

次には土地の利益は百姓に均しく分ちて、其間貧富の別なく均等ならしめよとの平等主義であつて、大化の改革の詔にも「藪池水陸の利は百姓と共にせよ」と仰せられたのはこれが爲めである。此點よりすれば、富めるものが貧民の土地を占有するが如きは當然これを矯めなければならぬ。

古來支那の法制は全く此王道主義、平等主義を精神としてこれを具體化せんとしたものである。推古天皇の時、支那に派遣された我留學生が歸朝後、唐は法制の完備した國であることを盛んに詠歎したが、それらの留學生の中から大化の改革に參畫したものが出でゝ居るのを見ても、其感化影響を知るべきであらう。

此くの如き外來思想は疑もなく閥族に對する吊鐘であつた。聖德太子の皇女上宮(カミツ)の大娘姫王(オホイラツメノミコ)が蘇我蝦夷父子の墓を作るに恣に上宮(カミツミヤ)の部民を使役したのを咎めて、「天に二日なく國に二王なきに何故任意に我部民を使役するや」と仰せられたことから、怨を結んで、遂に蘇我氏の爲めに害に遭はれた位であるから、當時の貴族達の反感を吸つたに相違ない。然るに蘇我氏が誅せられて政治上に勢力のあつた閥族の跡を絕つた後は、唯一人これに反對するものもなく、此土地國有といふ一大改革も格別の反對なくして實施さるゝことゝなつたのである。

勿論これに關する大詔が煥發されたからといつて、直に實施されたものとは思はれぬ。それは其後に至つて天皇が屯倉や部民を從前の如く置くの可否を中大兄に御諮問になつたり、太子が御自身御所有の屯倉や部民を奉還されて模範を示されて居ることにも、實施の困難や停頓の事情が反映して居ると見らるゝからである。併しそれは寧ろ當然であつて、斯樣な大改革は決して一朝一夕に遂行さるべきものとも思はれぬ。土地國有の大方針の確立を見た事それ丈でも大化の改革は有意義なものと謂つてよいのである。

三　土地國有制度の崩壞

我國に於て、土地國有制度の實施されたのは後にも前にも唯是時一度丈であつた。當時我國では人口が繁殖したといつても尙ほ不毛地の面積が可なり廣く、例へば近江にしても後世豪腴の田地となつた湖東地方には、蒲生野杯天智天皇頃は狩獵が催されて居た位である。故に大化の班田にも先づ人民の住宅の附近から始めて集約的に口分田を支給することになつて居た。

然るに此制度は初めから種々の缺陷があり、障礙が横つて居たから、遂には實施の困難を來たして崩壞の已むなきに至つた。今其原因の主なるもの丈を列擧して見よう。

（第一）唐制よりも給與を豐にしたこと。唐でも沿革はあるが、開元の制では口分田と永業田とがあつて、十八歲以上の男子に給與するを原則とし、女子の支給を受くるは寡婦（妻妾）に限られ、戶主には相當の加給があつた。幼年少年男女は戶主たる場合にのみ支給を受け、商工業者の如きは班田に堪ふる田地を有せない狹鄕では、全く支給せず、寬鄕でも他の二分の一を給與さるる丈であつた。賤民に至つては園地及び宅地を支給せらるるに止つて居る。然るに我國では男女共六歲に達すれば早くも一定の口分田を支給されたばかりでなく、賤民も官に屬するもの（官戶奴婢）は良民と同額を、私有に屬するは（家人、奴婢）其三分の一を支給された。これも後に實施難に惱まさるゝ一因となつたらしい。

（第二）支給すべき田地の不足したこと。人口の繁殖や死亡者を尙ほ生存して居る如く裝ふ杯種々の不正手段を弄して、口分田を貪るものもあつて、田地の不足を生じた。王朝の黃金時代と思はれて居る延喜年間に三善淸行の上つた有名な意見書には諸國の大帳に載つて居る人民の過半は有りもせぬものを載せたものだといつて居る。嘘のやうな事實であつた。其他私田の增加や寺田の寄附も口分田としての支給地を少らず侵蝕した。されば後には口分田は支給を受くる人民の住宅附近どころか、非常な遠隔の地方について支給するの餘儀なきに至つた。

（第三）地方的に支給すべき田地にムラが生じたこと。これは負擔の重い地方から、輕い地方へ浮動することが行はれたが、其地方では土着を奬勵する方針でこれに口分田を支給した結果である。

（第四）富豪の兼併が行はれたこと。表面は斯る事は行はれさうにないけれども、田地の交換が許されて居つたから、富豪は貧民に貸附けた債務の方に、上田を下田へ交換したこともあらう。土地を抵當に入れたまゝ、抵當流になつたものもあらう。名義は如何樣であつても、兼併についての種々の手段があつたものと見える。

斯る實施難を緩和する爲めに、政府は一方開墾を奬勵したが、初の間こそ開墾者の所有を制限したけれども、後には完全なる所有を認めた爲めに、却て富豪兼併の口實を與へて、豫期の目的は達せられず、政府は窮餘、寺田や功田位田等を沒收して口分田に充つるの非常手段

に出で、更に六年毎に行ふべき口分田の收授を延期して十二年毎に行ふことに改めたものゝ、後には其繼延べられた年にさへ實施が出來ぬ有樣となつた。支給の高についても、女子には男子に支給された殘額を給與し、賤民の給與を廢する等、種々の窮策が案出された。他面には死亡者を生存者の如くに裝うて口分田を貪つて居るものゝ告發者に位階を授けることにしたが、位階よりも目前の利益に目が眩むものが多いので、更に絶戸田を告發したものに三箇年間の地子免除の恩典を與へるといつてこれを奬勵したが、それとて充分の効果があつたとは思はれぬ。斯くて天慶の亂以後には班田の行はれた形跡はなくなつて、土地國有の影が益薄らいで來た。それと反比例して私有地たる莊園は澎湃として全國の土地を包むばかりにはびこつて來た。

四　國有制度の私有制度に及ぼせる影響

土地の國有制度が崩壞して、私有制度が行はれるやうになつた後に於ても、國有制度の名殘や、其影響は種々の形式に於て取殘されて居つた。今是等について少しく考察して見よう。

（第一）は政府の公田増加の方針。土地國有の制度は主として莊園の一角から崩壞し出したものであるが、國有地たる公田は尚ほ諸國に多く、國司がこれを管轄して居つて、其收益を以て國司の俸給に充て、且つ國庫に納めて國費を支辦しつつあつた。故に政府は屢莊園の廢止令を發布して、一令の下に何年以後設置の莊園は廢止すると令し、又は莊園に關する書類を提出させて、手續上の缺陷あるものはどし〳〵沒收して公田となすことゝした。是等は所有權の保障が不充分であつたといへば夫迄であるが、其根底には土地國有の思想の流れが動いて居たものと謂ふべきである。

併し不輸不入の特典ある莊園増加の大勢は、何者もこれを堰きとめることが出來なかつた。國司は中央政府の方針でもあり、又直接に自身等の收入にも關係したことであつたから、命令以上に其權力を行使し、暴力を以て強制することさへ敢て辭せなかつた。これを見て、地主の不安は彌深刻を加へて恐慌狀態となつた。彼等は一面に於て中央の皇族貴族、主なる神社寺院等に其土地を寄進附託してこれを本所領家と戴き自身は其管理者たるに甘んじた。其結果、所謂全國の莊園は殆ど是等の所謂權門勢家の領地となつたと共に、公田は益侵蝕され、皇室の御收入も減少を免れなかつた。後三條天皇の記錄所の御開始は普通莊園廢止の御方針であつたやうにいはれて居るけれども、私の見るところでは、寧ろ皇室御領増加の御目的であつて、上古に於ける皇室の屯倉の御設置と其動機を一にして居たのであらうと思ふ。

それは兎に角、當時の地主は土地放棄の意志は更になく、所有地の寄贈は表面をつくらふ名丈で、實は權門勢家領に隱れて土地の所有權を保有して居たのである。領主に納むる比較的少額の年貢は所有地の安全保障の手段としての名義書替料位にしか感じて居らず、領主をして自身を始め子孫の管理者の地位を絶對變更せないことに同意させ、

他迄も事實上の地主を以て任じて居つた。故に若し彼等にして一人の權門勢家では尙ほ不安と思へば、より權力ある權門勢家をも參加させて、今日の生命保險の場合の如く、二重にも三重にも、保障を附けたが、是等の權門勢家は何れも皆同一の土地の領主と稱して居るの奇觀を呈して居る。此くの如く一つ土地を種々の名義で數人の人が所有して居る形式の下に、收益の幾分を分取しつゝあつたのは、狹い日本の土地を多數の人で有利に取扱ふべく特殊な方法であつたといへよう。

地主は又他力本位ばかりでなく、自身にも兵力を蓄へて國司以下の迫害に對する防衞の手段とした。それが後に武士となつたのである。彼等がどこ迄も其本領に離れまいと力めたところから一所懸命の地なる語の出でたのは、彼等にふさはしい強みであつた。彼等と長袖の權門勢家との間は身分が餘りに懸離し、趣味も感情も違つて、兎角そりが合はなかつたが、一朝源氏平氏の武家と親んで從屬關係を結び、これを以て第二の權門勢家とするに及んではしつくりと双方の意氣が投合し、義家の如きは彼等の命に次いで大切にしたところの所領の爭について、各自の部下を支持する爲めに、弟義綱と戰はんと迄した。此誠意に動かされて、地主の義家に土地を寄附するものが非常に多くなつて來たから時の政府は態宣旨を以てこれを禁止するに至つた位である。其結果として全國の土地は大體國有地たる公田と、私有地たる莊園との二つに分れ、後者は更に皇族、貴族、社寺等を領主としたものと、武家を領主としたものとに分れて、各國司の行政權の埒外に立つて、收稅警察の干渉を受けないものとなつた。

（第二）權門勢家や武家に所有の觀念が強くなかつた。權門勢家の領地の大部分は地主の寄附財與から成つて居たが、賴通の如きは後三條天皇から其所有の莊園の書類の提出を促されて、自身の莊園は地方の地主達から安全の保障を得んが爲めに寄附して呉れたので、只よしよしと言つて受入れた丈のもので、書類も何もありませぬから、それが違法であるならばどしどし御取上になつて苦しう御座らぬと言ひ切つた。これは必ずしも其本意でなかつたとはいへ、彼等が樞要なる地位の前に、田舍の土地抔にはそれ程強い執着を有つて居なかつたことは事實である。彼知足院關白といはれた忠實が鳥羽院領の領家になれとの内命を受けて曩祖大織冠（鎌足）から微臣に至る迄忝くも朝恩を蒙つて攝關の任に居るも未だ領家の職に補せられて田舍の事を知行した例を聞かぬといつて辭退した彼等の詐らざる告白にも其意中が窺はれる。

武家側は如何であつたかといふに、賴朝は全國の土地は其所屬の如何を問はず收稅警察の權を其手に收めんとして、公田莊園に守護地頭を置き、部下の武士たる御家人を以てこれに充てた。これ武家の全國の土地管理であつて、今の ソヴエート・ロシヤが國家の直接占有の下に、農業人民委員に依つて直接に農業地を管理させて居る制度と其間多少の類似點が見出だされぬでもない。然るに當時武家領の大部分を占めつゝあつたものは平氏の舊領地を沒收して後白河法皇から賜つた

所謂平氏沒官領であるが、賴朝はみづからこれを「給はり預かる」と稱して居つた、つまり領土を保管する意味である。これとは事情が少し違ふが、後に尊氏の如きも勅裁に仰いで寺社本所領即ち權門勢家所の收入の二分の一を戰亂中預つて部下の兵士に給與することゝした。これが即ち半濟(ハンセイ)なるものであつて其給與を受けたものは半分の預人と稱して居つた。こゝにも保管の意味の「預り」といふ調寶な語が使用されて居る。併し、戰亂が何時迄も續いて止む時がなかつたから、自然所有と同樣の結果となつた迄である。

戰國時代以後の諸大名は互に武力を以て領土を擴張し、それが自然に公認されたものであるから論外として、德川時代には諸大名の領地は將軍から封ぜられ、而かも一度轉封の命があれば是迄從屬關係のあつた土地人民を其儘として轉任するを餘儀なくされた。是等は領知權であつて、所有權でない。然るに其將軍も諸大名も領土は全く自身のものではなく、天朝の土地を御預り申して居るといふ風にしか考へて居らなかつた。諸大名の中には幕府の親藩のものすらそれを公言したり子孫に遺言したりしたものもある。故に明治維新後にも彼等は版籍を朝廷に返上するといふて居たのである。

(第三)所有地の制限若し所有權の定義を使用收益處分の排他的權利を賦與するところの、物の永久的占有であるとするならば、武家の治下に於ては土地國有の時の如く、殆ど完全なる所有權は存在せなかつたといへよう。鎌倉幕府は貞永式目に就て將軍直轄の武士なる御家人の所領を保護して如何なる理由があるとも原所有者が已れに所有權を主張して土地を取還し得ぬ保障を與へて居るが、唯其處分については、相續買收等に依つて得たとこの私領に限つて、これを許すも、勳功功勞に對して將軍から恩給されたところの恩地に對しては絶對にこれを許さなかつた。然るにそれから僅々八年の後には、其私領の質買さへもこれを禁じて居る。これは御家人をして一切の御家人義務の標準たる所領を喪失させまいとの用意と、殊にそれが是等の義務を負はない御家人以外の侍や平民の手に渡つた重大なる結果を招徠することに對する警戒とからであつた。

此制限が近世德川時代になつて、百姓に對する田畠の處分に關する制限となつた。寛永二十年に幕府が田畠の永代賣買及びこれに類似の質入を禁じたのが即ちそれである。これ富豪の土地兼併から貧富の懸隔を生ずることを恐れたものである。幕府は又百姓が多くもあらぬ田畠を子供に分配するの弊を看取して、一定の高以下では分配を許さぬことゝした。其高については、寛文十三年以來數回の修正を經て居るが、これ畢竟百姓が其持地丈では生計を立てゝ行けなくなることを恐れたものであつて、當時百姓に諭した文中にも餘りに田畠を細分すると、遂には水も飲めなくなるからといふ語がある。當時極貧の百姓を水飲百姓といつたが其水さへ飲めぬやうなどん底生活に陷ることを戒めたものである。

此時代の百姓が田畠の賣買を禁ぜられたのは、鎌倉時代以來御家人

たる武士が所領の賣買を禁ぜられたのと一致して居る。御家人の所領の分配については、分配が一般の慣習であつた當時にあつても、其嫡の多くもないものは、自發的に、家督相續人にのみ讓與して、他の諸子は總領をして扶養させることにした。而して其理由としては、分限が狹少では御家人役即ち彼等の義務を果すことが不可能となるからといふ理由であつた。故に彼等の主君に對する兵役の義務が頻繁苛重に課せられ勝であつた戰國時代には、いつしか從前例外としたところの一子相續が寧ろ原則となつて、分割相續が却て例外となつたのである。此頃になると、社會は所謂下剋上の露骨な表現となつて一般に因襲や傳統の威力が衰へて、是迄社會の下積みになつて居た實力あるものゝ擡頭となつたが、土地の所有についても一切の上は漸や箔が剝げて了つて、軍務に忙しい爲め土地の世話掛して居れなくなつた武士は所謂鄕士を除いては自然土地から離れて主君の給與を受くることゝなり、耕作者たる百姓が地主となつて、專ら領主の爲めに國費の負擔に當り、時には兵役にさへ服せしめられたから百姓は武士の權利は賦與されずに、義務ばかりは武士の分を受繼ぐことゝなつた形である。領主の作つた法律に、百姓の土地に關する規定の目立つて多く現れ出したのも此頃からである。地主をして其土地を失はせまいとする保護干渉の如きも亦從來武士に對して加へられたものが、そつくり其儘百姓におつかぶせられた。武士の所領の賣買の禁止が百姓の田畠賣買の禁止となり、武士の一子相續の精神が又百姓の田畠の分配に適用されたのに不思議はない。田畠の賣買に浪人所有の田畠を除外したこと迄が、御家人以外の非御家人なる侍を除外したのに似通つて居るのも興味あることであらう。

以上何れも武家の治下に於て行はれたことではあるが、富豪の兼併と貧富の懸隔を恐れた動機は、土地國有の精神と一致して居る。もとより此經濟の理法を無視した不自然なる制限には、種々の拔道があつて、完全に行はれて居たものではなく、縱ひ行はれたとしても、所有權に制限があつたからといつてそれが所有權でないとは言へないことは判り切つて居るが、それでも一般に何となく土地は人民の完全なる所有でないとの印象を與へた上に、全國の土地は天子樣のものであるといふ思想も彼等の腦裡にこびりついて居たから、彼等としても餘り土地に執着せなかつたことは事實であらう。明治の維新に際して諸大名の藩籍を奉還したのは亦普天率土天皇の所有にあらざるはなしとの思想から出發して私有の不可なるを悟つての事であつたのは其諸願にも記されて居る通りである。これ諸藩の領土ばかりでなく、個人の所有地の如きも、一時はたゞでも土地の貰ひ手がなかつたり、政府が其所有權を確認する爲めに地劵を交付しようとしたことが、却て農民の爲めに喜ばれなかつたり、田畠山林を家祿奉還の士族拂下地に充てゝ便宜を圖らうとしても、士族は之に應ぜなかつたりしたことは、權利思想で固められた今の個人主義の頭では、到底不可解の奇怪事であらう同時に諸大名が、血を見ずして惜氣もなく其領地を奉還したことも、

今尙ほ一般外人の驚異とするところである。若し明治の初年に於て政府の方針が全國の土地を國有に引直すことにあつたならば、左迄の難事でなかつたかと思はれる。

實際舊物破壞と共に百事刷新の意氣に燃えつゝあつた明治の初年には、すべての改革が餘程行き過ぎた觀がある。これは古來の大改革の一様に免れないところであつて、大化の改革の如きも亦同様であつた。一例を擧ぐれば、彼、、非人の稱を廢して平民籍に編入されたのは明治四年であつたが、爾來國民の一部には此改革を喜ばないものがあつて、一層の反感を高め、彼等の唯一の生活のもとである手工品を買はうとせぬ爲め、彼等をして衣食に窮せしめ、果ては一揆を起して彼等に迫害を加へ、其舊制に復せんことを迫つたものさへあつた。長い間の虐げられた生活に馴れて何等の苦情をも言出し得なかつた彼等がみづから積極的に所謂水平運動なる解放運動を起すに至り、政府も民間も融和事業を以て社會事業中最も重きを置くやうになつたのは、それから更に約五十年の後であつて、それすら今日まだ完全に其效果を擧ぐるに至つて居ないのである。

土地問題の如きも亦さうである。當時一方に於てはフランスのルソーの民約說杯の影響を受けて主權は人民にあるといふもあれば、君民の間にあるといふもあり、立法者にあるといふもある杯、可なり過激な議論をなすものもあれば、又主權は何處迄も天皇がこれを保有したまひ、國土は盡く皇室に屬するものであるといつて私有に反對するものもあつた。明治十五年七月に時の右大臣岩倉具視が太政大臣三條實美に提出したる意見書（若山儀一草）の如きは後者を代表するものといへる。其文中に吾國土は天祖が皇祖に賜はつたもので、其寸壤尺土も失はないで後胤に傳へ給うたのは、吾列朝の天職を盡くし給ふの道であらう、故に諸侯から納められた時は名分を正しく受け給ふたのではないか、如何にして擅にこれを人民に與へ給ふことが出來やうか、曩に賣買の禁を解き、地券を賜ふたのは、土地から出る收穫利益を賣買使用する權を與へられる意味であつて、土地を所有する權を許されたのではあるまい、それが稱謂の誤つた爲めに、人民が土地を有するものゝやうに誤解されるのであるといつて居り、此名分の紊亂を匡正する爲めには從來用ひられて居る官有、民有の稱謂を廢して、民有地は更に永業地と號し、官有地は一切官地と號し、地租其他山林鑛山等の土地から收むる一切の税はこれを國税と稱し、國税は吾皇上の御有たる國土から出るものであるから、人民は必ずこれを輸さねばならぬ義務があることを知らせ、國會・府縣會等では勿論決してこれを議することを許さず、これを使用するも亦吾皇上の聖裁に出で、人臣がこれを恣にすることの出來ないことを示して以て主權の所在を明にすべきであると論じてゐる。民有地の稱は廢したとしても、既に地券を交付したものを如何に處分するかといへば、依然として田主・地主の名を用ゐることを得させ、又其地券を賣買讓與し其田地を使用することも一切舊の如くし、其國税法を遵守して地租を輸す間は其田土を使用す

るの權があるから、官と雖どもこれを奪ふことは出來ぬとして居る。これに據ると、名は改めても其實は前と異つて居らぬから、畢竟名分論に重きを置いたもので、其名稱を改めるのは、唯人民と有土の權のないことを示すばかりであるといつて居る。

斯樣に土地は人民と共に天皇の御有であつて人民は唯使用收益を許される丈であり、收税の權は天皇の掌握し給ふところで、歲入は聖裁に從ひ、門廷の御經費を先にして其餘を官省の經費に充てやうとするのは、主として主權の所在を明らかにして、君臣の名分を正し、世の主權人民にありとか、立法者にありとかいふ議論の餘地なからしめんとしたものに外ならぬのであつて、明治維新の一原動力たる王政復古の精神の一つの現はれである。歐羅巴にすらも國土が君主の所有で地主は其分配に依つて占有するものと法制上に定めて居る英吉利の如きもあるから、矧して永い間君民間特別の關係の下に此思想が國民の腦裡を支配し來つた、我國にあつては、制度上成立ち得ない理由はもとよりない。併し大勢は既に急速度に進展して、論者にすら其實を棄てて名を取るに滿足させる迄になつて居たから、折角の改稱案も其採用を見るに至らずして人民の土地所有權が合法的に成立したのである。

五　結論

斯樣に土地所有權の歷史に於て大地主たる貴族や、社寺や、武家が、天皇又は國家の前には、土地に對する執着がなく、改革の行はるゝ毎に、敢てこれに反抗しやうとせなかつたのは、やがて彼等に對する反抗をも封じたことになつたのであつて、斯る場合に外國の歷史に見るやうな革命も惹起して、彼等を仆すの必要が我國に起きなかつたのも、一つはこれが有力なる原因であつたといへるであらう。

今日地主が土地國有を望み、小作人も自作農たるを欲せないのは、もとより全然別個の理由から出でゝ居るのであるが、單にこれ丈を見ては、土地國有の實現に取つて絕對の時機と看做すものもあらう。併し問題は耕地なる土地の一部に限られ且つ又今日は事情が頗る複雜であつて、其解決はさう容易に出來る譯のものではない。殊に明治五年に土地の永代賣買の禁が解かれて完全なる土地の所有を認められ、且つ日本臣民が如何なる場合と雖ども、其所有權を侵害されることのないことは、憲法に於て保障されて居るところでもあり、國民の權利思想が頗る發達した今日にあつては、土地問題の現在及び將來については、おのづから別個の見地に立つて考究すべきである。

然るに東洋に於ては支那の有する割合に長い土地國有の歷史はもとより、我國の後にも前にも唯一回經驗した同一の歷史がこれを跡附けることに依つて知らるゝ、失敗の痕跡は餘りに鮮かである。今日地主が其所有田地の國有を望むは國家の保護に依賴するものであつて、中古の地主が所謂權門勢家の背後に隱れて彼等の財產の保全を圖つたものと何程かの類似點を有つて居る。假りに地主や小作人の救濟が國家的

社會的見地から必要であるとしても、其方法はおのづから愼重の考慮を要するであらうか。而して ソヴエート・ロシヤが曩にこれを實施し、又修正したところの土地國有の結果が、農民をして申合せた如く最少限度の勞力を拂ふに止めさせたことは個人から見ても、國家から見ても決して其成功を夢想だもすることを許さぬ事情に彷復して居るやうに思はれる。言ふ迄もなく、歷史は過去に於ける國民の經驗の蓄積であるとすれば、國民が新たに一つの改革變法を企てんとする時、冷靜に其利害得失を考へて前車の覆轍を踏まぬやうに努めなければならぬ。彼等は各其獨自の歷史的背景の下に適當に淘汰され訓練されなければならぬ。決して國民多年の國家的生活や彼等の腦裡に去來して居る傳統の力を閑却して單なる外來の功利說の見地からのみ眺むべきではない。況んや過去の世界の歷史事實に於てをや。近來我國の青年學徒の間には唯物史觀を以て我歷史事實を觀察することが行はれて居るが、東洋殊に我日本の歷史事實には物質を超越して居るものが多く、折角唯物史觀の網を張つて見ても、其網の目を漏れ出すものに却て時代を動かす原動力ともなるべきものがあるから戒愼を要するといふことを此機會に警告して置きたい。

人口問題の反批判（二）

高田保馬

七、日本の人口問題

さて今まで述べ來れる人口法則――社會人としての人間の人口法則一般及び資本家的社會の人口法則――を前提として、日本現時の人口問題を考察したいと思ふ。

理論的考察を仕事としてゐる私にとりては、此問題を詳細に取扱ふことがある意味の時間の勞費と思はれる。それで極めて簡單に要領のみを述べる。

日本現時の人口問題は、云ふまでもなく、年々七八十萬の――昨年の如きは百萬に達するとすら云ふ――増加人口を如何に處置するかと云ふことである。第一。今日でさへ既に年々巨額の食糧品特に米麥を輸入してゐる。國内農產物の生產額は現在の人口をすら養ふに足らぬ。年々の増加人口の食糧を如何にして供給せむとするか。第二。現在既に生活難の聲が喧しい。國民は其生活を維持するだけのことに喘いでゐる。將來人口が此勢を以て増加するならば、生活難は此上に甚だしくなるにちがひない。土地の割合に人口は極めて稠密であり、工業のための原料は貧弱であり、海外の廣漠たる沃地は同胞のために封鎖せられてゐる。いづこに解決の策を求めむとするのであるか。問題の混雑をさけるが爲に、これを二分することが必要である（すでに二三の學者により說かれてゐるやうに第一は食糧の問題、第二は生活難の問題。もとより此二者の聯絡するところなしとはしないが其點は後に補說する。

食糧の問題は、之を國防の問題と結び付ける時に重大の問題となる、たゞ生活難の問題として、又は過剩人口の問題として見れば、必ずしもさしたる重要さがない。食糧の供給を海外に仰ぐとしても、國民の經濟的活動によりて十分に之を支拂ふ能力さへあるならば、少くも生活難の問題としては問題がない譯である。否、高價の内地米に代ふるに低廉の外國穀物を以てすることが國民の生計を容易ならしめ、國際間の產業上の競爭にも（生產費の低下によりて）有利の地位を占めさせることになるであらう。たゞ國民の嗜好が到底内地米をはなれがたしと云ふならば、論自ら別であるが、これには今論及しない。國防の點から云ふならば、食糧は自給し得るに越したことはない、又食糧の生產によりて新なる人口を給養しうるならば、それだけ生活難もまた緩和せらるべきである。かくて、私は此食糧問題をも看すごしはしまいと思ふ。

國内に於ける食糧の増加はどこまで可能であるか、從つてどこまで自給の道があるか。その詳細は專門家に非ずして答へうべき問題では

なからうが、たゞ私の狭い知識の範圍に於て答解をのべる。しばらく朝鮮に於ける産米增加の計劃を外にしても、耕地となしうべきもの約二百萬町、その大部分の開墾には多大の費用を要するとしても、それは單に國民の勞力を以て事足る。勿論その計畫の成就には多大の困難が伴ふにしても、可能の見込はつくことと思ふ。現在の耕地に於ける收穫が品種の改良と、肥料の豊質配給に於ける改善と、其他の耕作方法の變化により、なほ幾割かを增加し得ずとは何人が斷言し得よう。前内閣時代農林省の調査に基き農林政務次官の發表したりと稱せらるるところによれば、人口の增加率が現狀を維持する時三十年後の日本の人口は八千五百三萬となる、食糧はその對策當を得るとすれば（これは單に耕地の增加を考に入れたものらしい）今日よりも不足額を減じ、それが今日の三百二十四萬石より二百七十三萬石に減ずるであらう（これには植民地よりの移入が計算せられてある）。さて今手近の一例を見るに、私の居村の反當り米收穫は二十年前の二石より今日の三石五斗に及んでゐる。「技術の變化の法則」の作用するところ、更に幾割かの增收が不可能なる道理はない、特に收穫の少い土地のそれを此地方と同一又はそれに近き水準までに引き上げる事は十分に可能の事と考へなければなるまい。かくて、一方には農業勞力を今日のまゝにしてもなほ國內の穀物の增加は可能であり、他方耕地を增加し利用勞力を增加する時には猶更である。國內の耕作反別、農家戸數、從ひて農業勞力の增加著しからず、固定に近き狀勢を呈してゐるのは農業の十分に酬ひられざることと、都會の商工業に於ける收益の割合に大なるによる。若し、租税又はその他政策により、農村都市に於ける所得を相近づかしむることが出來るならば、新なる耕地が各個人の發意勞力によりて生れ來ることと思ふ。而してこのことは、それ丈け所謂生活難の除去にも役立つ譯である。更に一歩を轉じて考ふるに、國民主食の轉換は決して全然不可能のものではないと思ふ。例へば三十年前まで粟麥、芋のみを常食としたる地方（例へば私の鄉里に近き所にては長崎縣南高來郡の一部）では今日米を常食としてゐる。これが昔日の雜食を全然忍び得ずと云ふ道理はない。同胞の一部が之を忍びうるならば、他の部分が之を忍びえずと云ふ道理もない。主食の轉換の今まで實行せられざりしは事情の壓力の足らざりしが故であらう。國民の大部分の主食が少くも一部づゝ轉換せられるならば、雜穀の增收を計ることによりて食糧自給の道はまた新に開けるわけである。以上の所論、何等計數の上に立つのでなく、極めて粗雜であるが私の意見はほばそれに盡きる。要するに、今の私見によれば、農業收益を高めるか、又は農民に對して何等かの保護を加ふるか、又は國民一般の生活標準の下降によりて未耕地の耕作なほ生活を支へうるに及ぶならば、耕地は擴張せられ、既耕地の耕作は一層集約的となり、食糧は增加すると共に、所謂生活難はそれだけ緩和せられる。

主要の論點である第二の問題に移る。私は現時の日本に生活難の存在を認むるやと問はるゝならば、敢て然りとは答へるがその意味は常識論者又は大多數の學者に於けると同一ではない。しかし此點の議論を後廻しにする。さて、現時の生活難、而して連年の人口增加の爲に甚しくなりゆく生活難を如何にして切り抜くべきかと云ふことについて、今までに提出せられたる數多の解決策がある。今日の時代に武力

的侵略政策を唱ふる人はまづないとしても、移植民によりて此苦境より免れむと主張するものは多い。併しながら、一方過去の成績が其有望ならざることを示す。幾十年間の努力によりて海外に定住せしめてゐる人數は一年間の人口增加數にも足らぬ。將來如何に好都合に運ぶとしても、此方法によりてはけ口を求め得る人口數は知れたものである。他方、理論的に考へても、內地米を喜び、內地の風光と歷史とに執着し海外に出ても金をためて錦を故鄕に飾ることが唯一の目的である日本人は移植民としての資格極めて低きものであると云ふ。その上北米南洋共に門をとぢて同胞を入れない。南米の歡迎もいつまでつゞくことか、つゞくとしても、今日の輸送能力を以てしては送り出す所の人口が極めて限られてゐる。然らば移植民の方策はこれに力を入れるにこすことはないとしても、餘り多くを期待し難い。結局商工業の振興によりて、即ち商工立國策によりて、過剩人口を吸收すべきであるか。振りかへりて考ふるに、農村の人口は久しく殆ど固定したまゝになつてゐる。幾十年間か增加人工はすべて都市に吸收せられ、云はば商工業によりて吸收せられてゐた。從ひて、今後といへども、商工業の發展が急速に其歩をゆるめると云ふ論證のなしがたき限り、增加人口の大部分がそれに吸收せられうべしと考へられぬことはない。たゞ商工業を振興して確實に增加人口を吸收せしめ得べき方策如何と云へば、恐らくは、何人にも明確なる案がないであらう。かくて商工業の振興にまつと云ふのは放任して成行に委せよと云ふのと結果に於て甚だしき大差はない。次に出生制限即ち產兒制限の方策が主張せられてゐる。これが所謂相對的過剩人口を、更にすゝみては、絕對的過剩人口（之を認める人人にとりては）をさへも、取除きうる方策であることは私といへども否認しない。併しながら、これは、一方に於て民族の前途を害ふ仕方であると同時に、他方に於ては、貧乏を其根本から救ふ方法ではない。貧富の懸隔そのものはこれが爲に一歩も取除かれはしない（このことに就いては大阪朝日新聞大正十五年一月十五日以降所載拙稿『除貧の二途』に詳述した）而して、私の見るところによればこれは一の方策として主張せられずとも、資本家的生產そのものの中から必然的に發生し來る事象である。放任してもなほ人口の自己制限は此方策に出づるであらう。

かくて、今までに主張せられたる方策の大部分は効果少きか又は實行の可能乏しきものである。其他の部分は實行が可能でありある種の効果はある。併しながら、それは他方に望ましからざる結果をもたらす。此の如しとすれば如何なる手段に出づべきであるか。私は思ふにたゞ放任あるのみ、私がかつて確めよ殖えよと云へるは此意味に外ならぬ。八方塞りの現狀に於て、人口の增加をそのまゝに放任する時は如何にして人口と生產力との均衡を確立し得るのであるかと詰問するものがあるであらう。答へて云ふ。第一、商工業はなほ多くの增加人口を吸收しうる餘地があるであらう。第二、私共が好まざるにもせよ、資本家的組織から必然に生じ來る出生制限は必ずや人口增加の程度を緩和するであらう。第三、かくしてもなほ均衡の確立せられがたしとするならば、なほ二の道行がある。一方に於ては分配係數のある程度に於ける變化、それは無產者の努力の擡頭によりて不勞所得が削減せられうる。ではあるが今はしばらく討可能に論及しないこととして置

く。而して他方に於ては其蓄積したる貯藏物に手がかけらるるに至るであらう。それは長き年月間に上昇したる生活標準を必要に應じて少しだけ切り下げることである。此貯藏物は手をかけて消費するも決して永久に元本に食ひ入ることはない、云はゞ不盡の資源である。勿論生活標準の切り下げは容易に行はれがたい、併しながら愈行き詰りて他に方法なければ、此方法に出づること、今までの歷史のしばしば教へたるところである。而して、此生活の低下は他に種々なる副次的結果を産む。これによりて前述の如く耕地の擴張、耕作の集約化が行はれ得る(外國との關係を離れて考ふるならば、耕地の擴張はたゞ人口の增加穀價の騰貴によりてのみ行はれるであらうが)。國内の產業は低廉なる生產費によりて海外に市場を開拓し得るであらう。又移植民としての同胞は生活費の低き競爭者に對抗して新なる地方に落ち付きうるに至るであらう。

但し、私はこれだけのことを自ら一の政策として主張するのではない。資本家的社會組織が現在の日本を支配してゐる限り、此制度に何等の變改を加へずとすれば今日世人の憂慮しつゝある人口問題が如何にして解決せられうるか、如何にして人口と生活資料との均衡が確立せられうるかと云ふその道行を云はゞ客觀的なる考察者として記述したるまでのことである。而して、その答解又は道行として、たゞ放任あるのみと答へざるを得なかつた。

八、河上博士への反批判

私は日本の人口問題に關する意見のあらましを述べた。これから進みて、かつて發表したる私見(經濟往來大正十五年七月號所載拙著)に對して河上博士の加へられた批判に對する反批判を述べようと思ふ。

先づ私は問題とせられたる私の隨筆の趣旨を述べて置く。それは當時(今日に於てもさうであるが)人口問題の對策が識者ことに政治家によりて問題とせられたるに對し、これらの人人が求めるところの對策は不必要であると云ふのである。これらの論者、特に政派の人々は現在の資本家的組織を前提として少しもその變革を問題としない、而して、此前提の下に、增加しゆく人口を如何にすべきかの對策に困りぬいてゐる。私はそれの云はゞ內在的批評としてかゝる對策の無用を論じ、よしそれの必要ありとしてもかへつて人口の更に增加することがひとりでに此對策をもたらすものだと說いたのである。資本家的組織そのものの是非は毫末も私が觸れようとした點ではない。私は常に理論の研究者として立つ。而して此立場を守ることによりて、主義、又は政策の理想に關する自己の主張を決して發表せず、然りこれを未だ嘗て發表したることもなく、將來といへども發表しようとは思はない。

さて、河上博士によれば、私の意見は先づ第一に『現代經濟組織の辯護論』であり、これが樣々なる現象形態を取る中の『僧侶的扮裝』の一例であるさうである。(同氏著人口問題批判)私は河上博士に問ふ、私は何故に現代經濟組織論の辯護論者であるか。日本の資本家的組織が現在の人口問題から行き詰ることはない、なほ增加し行く人口をそのままで優に收容し得ると云ふのが、此組織の辯護論であらうか、私

は資本家的組織の歴史性を知る。而してそれの將來に就いても自分だけの考察を試みてゐる（近くは、自著『階級及第三史觀』末章『階級の動學觀』。同『社會關係の研究』（第六章、第七章、參照）ただ此組織が現時の人口問題で行きつまることはないと見る。これだけを豫め述べて置いて、私の河上博士に對する質問はも少し立入らなければならぬ。私見が現代經濟組織の辯護論であるのは、此組織が行きつまらぬと云ふが故であるか（それより外に解しやうはない）さうであるならば、重ねて教を乞ひたい。一人の病人を診察して其病氣は必ず恢復すると見るのは、その人を是認し辯護することであるか。これを反對の場合について述べよう。醫師が知人の病氣を診察して餘命幾何もなしと云つた時に、餘命なしと見るのは此知人を是認せず、彼の恢復をきらふのであるとなして、彼を家から追出すべきであらうか。それは理窟の通らぬ事だと答へらるるに相違なからうと思ふが、それならば敢て云ふ。河上博士が私見を現代經濟組織の辯護論と見られるのは、まさに此醫師を追ひ出す人の態度である。どこに理論の嚴密さがあるか、その主義的立場の爲にする論理の飛躍以外、そこに何物があるか。況んや、また、私は此資本家的組織が行きつまらぬとは考へてゐない。そのことは私の數多き著書の中から、いくらでも引用して例證することが出來る。それらに恐らく目を通さずして、僅に二頁の隨筆からのみ曲解（私は敢て曲解と云ふ）すると云ふことは、果して學究の議論に對する批判として許し得べきものであるか。河上博士の全體の批評は私見を此辯護論として見ると云ふ立場の上に築かれたるものであり、而して批評の內容と云ふのは、私見のかかる辯護論として解釋することであつて、私見に對して議論の組立を吟味し、之を論駁すると云ふことではない。批評がただ解釋である以上、解釋者の立場の誤れることを明にすれば、進みて論ずる必要もないやうであるが、双方の見解の差異を明ならしめ、これによりて私見を曲解より防がむが爲に、その批評の內容に立入ることとする。

私は次の如くに述べた。『食へないと云ふのは一定の體面が保てないと云ふことに過ぎない、その生活標準を少しく下げてゆけば天下到るところに食ふべき途はある。』これに對して河上博士は曰く『私はこれに對して、餘りに多くを言ふの必要を感じない。私はただ、資本論第一卷第二十三章の一節から次の記事を引用するに止めるであらう』と。その次に、此引用として、一八六三年英國に於ける勞働者の窮乏狀態を見るに、其營養極めて不良にして、諸種の飢餓病をさくるための最低限度を上下してゐたことが述べられてゐる。而して進みて曰く『これはひとり半世紀前に於けるイギリスの狀態のみではあるまい。かかる事實の渦中に住して、生活難の事實を否定するは、沛然たる豪雨にうたれながら、空を仰いで、天氣晴朗、一點の雲なしと觀測するに等しい』

私は河上博士に伺ひたい。六十年前の英國にかかる窮乏狀態にあるものがあつた、故に現時の日本にもそれがあると云ふ議論はどう云ふ論理によりて成立するのであるか。上に引用したる議論の仕方を詮じつむればかうなると思ふ。『六十年前の英國には大雨が降つてゐたではないか、それに今日の日本にゐて天氣が良いと云つてすましてゐる汝はどうかしてゐる。』と私はかかる議論に對して多くを云ふ必要を認め

ないと思ふが、たゞ自分の考を明にする爲に次の事をつけ加へる、英國に於ても、六十年前から少くも此大戰亂の爆發前までは（その後の材料については未だしらべた事がない）勞銀がたえず騰貴して、勞働者の生活標準も著しく高められた。シュモラアがケエアド、及びレェボア、デパアトメントの調査によりて述ぶるところによれば、農業勞働者の一週勞銀が一八五〇年に一〇志（シリング）、一八五五年に一一志、一八八〇年及び一八九九年に一四志、之を麥價と對照すれば一八五五年には一一志を以て三五乃至三六キログラムを一八九九年には一四志もて一一七キログラムを得たことになる。大體勞銀を穀物に換算して比較する一般の方法によれば、それが此期間に約三倍となれる譯である。而して、一九〇〇年から大戰まで漸次騰貴の勢にあつた事も事實である。（もし必要とせらるるならば、その材料をしらべ出すのも難事でない）ドクトル・スミスの調査したる一八六三年の勞銀は一八五五年のそれと大差はなかつたであらう。今日の勞銀がその幾倍かに、少くとも著しく、騰貴してゐることは爭ひ難きことである。（シュモラアはまたウッドの調査を引用して工業勞働者の勞銀の騰貴率をのべてゐる）ひとり半世紀前に於ける狀態であるまいと云ひ、今日また然りと云ふことは英吉利についてすらあてはまらない。それがどうしてすぐ現時の日本にあてはまりうるか。ドクトル・スミスがかの飢餓病をさくべき最低標準にだに達しなかつたと云ふ農民の所得を見るに毎週麥に換算して、約貳斗四升、一日に平均して三升五合餘である。今日の日本に於ける都會の勞働者は之を麥に見積りて、平均約一斗六升（約二圓四十錢麥一升十五錢として）の收入を有し、農村の農業勞働者さへ此北九州に於て麥約九升（約一圓三四十錢）の收入を有する。知らず、河上博士は三升五合が九升乃至一斗五六升と相等しと云ふ數理を發明せられたのであるか（シュモラア、一般國民經濟學原理一―七版第二卷二九五頁參照）。

次にすゝみて私が述べたる文句についての河上博士の解釋に入る。『そこで高田氏はいふ、「たゞ產めよ殖ゑよ。姑息なる救濟策などは顧らなくても事は濟む。窮すれば即ち通ぜん。殖ゑさへすれば、而して之に應じて總べての文化的活動、特に經濟的活動が盛になれば、國內にはなほ〳〵多數の人口を養ひうる餘地がある。商工業立國の基礎の確立し得ないのは、生活費の不相應に（何に對して不相應なのか？――河上）高きが故である。國民の努力乏しきが故である、而してこれは人口增加の足らざるが故である、云々」私の文句の引用はこれを以て終り、次に與へられたる解釋がつゞく。『私（河上氏をさす・筆者）はしばらく飜譯の勞を取らう。商工業立國の基礎が確立し得ない、といふのは、資本家的生產の基礎が確立し得ないといふ意味である。（第一の點――筆者）生活費の不相應に高いといふのは、資本家的生產――利潤獲得の立場から見て、勞働者階級の生活標準が高いと云ふ意味であり、從つて勞賃が高か過ぎるといふ意味である（第二の點――筆者）國民の努力乏しとは、勞働者の勞働時間が短く、勞働能率が低いといふ意味である。そこで人口增加の足らざることが、むしろ問題となる』（第三の點――筆者）私の述べたる命題の一々の解釋はこれを以て終る。而して、それは一つゞけに分り易く書き改めると次の如くになるさうである『もつと人口が殖ゑなければならぬ、勞働者の生活

一層低下せしめなければならぬ、さうして一方においては勞貨を引き下げ、他方においては勞働時間を引き延べ、且つ勞働能率を高むることにより、一定の時間内に發揮さるる勞働の分量を増加せねばならぬ。さうしたならば商工業立國の基礎が確立する、すなはち資本家的生産萬歳である』。

私は原文の筆者自身として、此飜譯乃至解釋を検べるのに十分の資格を有するものであると思ふ。まづ第一の點から。河上博士の飜譯によれば商工業立國の基礎が確立しないと云ふのは資本家的生産の基礎が確立せずと云ふことである。私は筆者として云ふ、此解釋は誤謬である。飜譯には「商工業立國」の名詞が「資本家的生産」の名詞と置きかへられてゐる。今日の場合商工業はなるほど廣義に於ける資本家的生産である。しかし商工業立國が資本家的生産そのものではない。商工業立國の文句はたゞ政治家の用語を其儘借用したるまでであるが商工業の振興によりて國民の富を増加し、それを以て増加しゆく人口を養ふと云ふことを、中心の内容とすると思ふ、その他の内容は今說く限りではない。資本家的生産の基礎の確立と云ふことは少くも私には、一方に資本家、他方に資本所有から切離されたる無産者の存在と云ふ、資本家的生産の基礎となる條件の確立と解せられる、この解釋のどこに無理があるであらうか。さうであれば現代の日本に資本家的生産の基礎の確立などは問題ではないはずである。それを資本家的生産を發達存續せしめると云ふ意味にとるならば、それは決して商工業立國ではない、いくら大資本による生産力の増加が實現せられても、例へば、外國の資本、企業者のみにより國民が無産勞働者として絞取せらるるならば、決してそれは商工業立國ではないと思ふ。かくて第一の點の河上博士の飜譯は全然誤謬である。次に第二の點。私が勞銀の不相應に高いと云つたのは利潤獲得の立場から見て勞働者階級の生活標準が高いと飜譯せられてゐる。然れども此の如く利潤の獲得欲求には制限がない、その欲求を根本に置いて見るならば生物としての生存を維持せしむるに足る以上の勞銀はすべて不相應に高からう、私の意味するところ何ぞ此の如きものならむや。それはたゞ現在の資本家的組織にして前提せらるる限り、現在の所得を以て充されがたきほどに高き生活標準をさして不相應であると云ふ、大戰亂當時より遥に下れる所得を以て當時に近き生活内容を享受することを不相應と云ふ。それは何等規範的意味を有するのではない。勿論此生活費の不相應に高いと云ふことはかゝる立場から云ふとき勞働者について云へるのみならず、他のすべての階級についても云はれ得る。而して私は此意味に於て不相應なる生活が我國民を浪費者、即ち生産するよりも多く消費し、從ひて不斷の入超國民となしてゐると思ふ。以上の立場は私の意圖が主に政治家の人口問題對策の内在的批判にある限り、必然にとるべき立場である。余嘗に、すべての經濟組織、從ひて現代の經濟組織の歷史性を知らざるものならむや、現代の經濟を唯一最高の價値となし、之に照して今の勞銀を規範的意義に於ける不相應と云ふものならむや。之を反證するには、私の從來の著書の中のたゞ一回たりとも餘りに多きに過ぎる。たゞそれからの引用をこゝにならべることは餘りに煩雜でもあり、その必要もないと信ずる。かくて、第二の點に關する河上博士の飜譯は全然誤謬であるのみならず、私を資本家的組織

の辯護者と見なさむとするための曲解である。次に第三の點に移る國民の努力乏しとは勞働者の勞働時間が短く、勞働能率が低いと云ふ意味であると飜譯せられてゐる。私は敢て云ふ國民の努力乏しとは國民の生産力増加の努力乏しと云ふことである。これは商工業立國、生活費の過大と云ふ文句の連續から見て當然にかく解せらることと思ふ。然るに河上博士によれば、それは勞働時間を引き延べ勞働能率を高むることであるさうである。然らば敢て問ふ。時代から時代への生産力の發達は何によりて行はれたるか。それは勞働時間の延長によりてか、勞働能率の増加によりてか。國民と云ふのは勞働者と云ふのと同じであるか、而して資本家や月給取、從ひて河上博士も私も國民ではないのであるか。此二問共に然りと答へられなければ、かの解釋は成立しない。河上博士のマルキシズム的立場からも時代より時代への生産力の増加は生産の方法の變化によりて行はれるはずである。而して勞働時間の延長によりては行はれざるはずである。從ひて國民の生産力増加の仕方は生産の組織（技術をふくむ意味に於て）の變化にあるはずである。此初歩的知識は知られすぎてゐる筈であるのに、それを知らざるかの如く、生産力増加の努力を勞働時間の延長、能率の増率の増進にありとする飜譯は全然誤譯であるばかりでなく、極度の曲解である。知らず、河上博士は虚心坦懷、なほ、これを以て、私見を資本家的生産の辯護論なりと云ひなす僞の曲解に非ずと斷言せらるる勇氣ありや。

以上三の命題の飜譯はすべて誤譯である、即ち私見の誤れる解釋である。これを書き改められたる文句については、それが如上の誤解のくりかへしである限り、別に述べる必要もないかと思ふ。要するに、私の隨筆のうち、最後に近き部分、命題にして三個、行數にして三行餘の文字から、堂々たる資本家辯護論をこね上げたる手際に對してはたゞ感服の外なき次第である、而もそれは曲解が如何に巧妙に、誤解が如何に尤もらしく素人だましに出來てゐるかと云ふことに對する感服に外ならぬ。

河上博士はかくて私見の批評の結果、及び題目に於て私見をば「生活難の事實を言葉の上で否認することにより之を解決せんとする」意見なりとせられてゐる（氣賀博士の意見をも一しよに）。敢て河上氏に問ふ。私は如何なる場合に於て生活難の事實を否認したりや。私は生活難の事實に一定の説明をこそ與へたれ、その事實を否定したのではない。肺病の發熱は病菌に對する身體の戰鬪抵抗の作用なりと説明することは果して發熱そのことを否認することであるか。月蝕は地球が太陽の光をさへぎる現象なりと説明することは月蝕そのものを否認することであるか。これを然りと答へらるるならば議論の餘地はない。不幸にして、私の有する論理は河上博士の有せらるる論理と異なりと云ふに止める。

以上は河上博士の私見に對する批評、實は之を資本家的組織辯護論と見る解釋に對する反批評である、而してその解釋のすべてが中らざる所以の説明である。博士の所説は更に進みて氣賀博士の意見の分析批評に入る、それは私の直接に關係しないことである限り、論及を差しひかへるけれども、中に私の意見が引き合に出され、一しよに批評されてゐる部分がある。私はそれに又た答へることを自分の義務たり

と信ずる。

この部分に於ける批評は私見を以て、人間の欲望を充足の對象物からのみ測るが故に、人間社會の眞の病苦を知らぬと云ふにある。而してこれが恐らく河上博士の批評の骨子であらう。前に述べたる部分はたゞ私見が何を意味するかの解釋であつて、私の立論の構造の吟味ではない。こゝに於てはじめて博士の主張にふれる。

其批評によれば無數の悲慘なる事例を背景にしながら、『血色極めて良好なる一人の乞食を發見することにより、食へないと云ふのは一定度の虚榮が食へないことに過ぎないと云ふ意見を有ち得たる高田氏は羨むべく餘りに幸福なる學者である。』進みてマルクスの『賃勞働と資本』の一節が引用せられる。『家族は大きくとも小くとも之を圍繞する他の家々が一樣に小さければ、それは住居としての總べての社會的要求を充たす。けれども、小さな家の傍に一個の宮殿が建てられ、その小さな家が小屋のやうになつたとする。さうなると、その小さな家はこれに居住してゐる者が、何等の權利をも主張し得ない者か、または極めて僅かな權利しか主張し得ない者だといふことを、證明するわけだ。』『吾々の欲望と享樂は社會的に發生する、だから吾々はそれをば社會で測る、吾々はそれをばこれが充足の對象物で測らない。それは社會的の性質を有するから、相對的の性質を有する。』これを基礎として議論は次の如くに進む。『今の勞働者の生活は、電燈をつけ、電車に乘り、夏は氷水を飲む、等、等の點において、平清盛よりも野蠻人の酋長よりもより贅澤だと言つたところで、それは何にもならぬ。彼等は清盛と同じ時代に住むのでもなく、野蠻人の酋長と同じ社會に住むのでもない。人間は社會的にのみ生活する。吾々は吾々の欲望を社會で測り、これが充足のための對象物で測るのではない。吾々の欲望は社會から生まれ、それは社會的性質を有ち、それゆゑにまた相對的性質を有つ馬鈴薯でも甘藷でも生きて行くに差支ないといふやうな、人間の欲望をたゞ之が充足の對象物からのみ測る見方では、人間社會の眞の病苦は理解され得ない。』

私はこれに答へて云ふ、もとより然り。併しながら、それが私の議論に對してどうであると云ふのであるか。私を以て、『人間の欲望をたゞ之が充足の對象物からのみ測る』と云はれるのであるならば答へて云ふ、私は既に十六年以前からさうではない、『貧乏物語』に於ける河上博士こそさうではなかつたか。

舊著『社會學的研究』から一二節を引く。『社會の現勢は即ちこれ巨富の堆積を益容易ならしめ、階級の懸隔をして益々顯著ならしめつゝある現勢なり。上級の昂揚は其の愈々甚しきに伴ひ、下級のたゞ羨望するのみにして享樂することを許されざる多數の新欲望を形成す。滿足せられざる欲望の增加はこれ不幸の增加なり、かるが故に上級の昂揚その事はこれ不幸の眞の源泉たらずんば非ず。これをもたらせる社會の現勢は世人の思惟するが如く人類の祝福者に非ずして、悲慘と苦痛との釀成者に外ならざるなり』同書三七六頁、明治四十四年四月下旬稿

マルクスの困窮（フエアエレンドングステヲリイ）說に於ける『困窮は決して生活狀態の低下を意味するものに非ず。社會に於ける無產者の生活狀態は幾分改善せられ行くに相違なけれども、之よりも資本家の富を集積する速度は遙に大なり。かくて貧富の懸隔は愈增加し來る。こゝに於て下級者

は上級者のなす所にして之を望めども遂げ得ざること益多きに至る。換言すれば其欲望と欲望滿足の可能との比例が益減少するに至る。物理的困窮には非ずして社會的困窮なり。』『カウツキイはことにベルンシユタインとの論爭に於て此點を力說せり。事實の說明としては吾人は彼の說に對し完全なる贊同の意を表す』（同書三四六頁、大正元年十二月執筆）。之は河上博士の所謂社會的病苦、即ち貧困が所謂欲望を社會を以て測ることによりてのみ理解し得ることを述べたるものである。

『貧乏物語』に於ける河上博士の見解によれば貧乏は社會の大病であるが（九九頁、一五三頁）、その大病としての貧乏は所謂その第三意義としての貧乏と見られてゐる。『肉體と智能と靈魂、』是等三のものの自然的發達をば維持して行くが爲め、言ひ換ふれば人人の天分に應じて是等三のものをば展びる所まで展びさして行くが爲め、必要なだけの物資を得て居らぬ者があれば其等の者は凡て之を貧乏人と稱すべきである。併し智能とか靈魂とか云ふものは、凡て無形のもので、からだのやうに物差で長さを計つたり、衡で目方を量つたりすることの出來ぬものであるから、實際に當つて貧民の調査などする場合には、便宜の爲め貧乏の標準を大に下げて、只肉體のことのみを眼中に置き、此肉體の自然的發達を維持するに足るだけの物を假に吾々の生存に必要な物と看做し、それだけの物を持たぬ者を貧乏人として行くのである』（七—八頁）。而して此の肉體の必要に應ずるものを知らむとして、先づ消費熱量によりて必要なる食費を計算し、同樣にして被服費住居費等を算出する、かくて貧乏線が決定せられる（一七頁）かゝる見解こそ正しく、人間の欲望と享樂とを社會を以て測らずして、充足の對象物を以て測るものではないか。私は此貧乏概念を非なりとする。私が『除貧の二途』に於て、貧乏の概念に絕對的標準をもちこむことを強く否定したるのも實は河上博士の名をこそあげなかつたが、その實此『貧乏物語』の立場を批評したのであつた。ところが意想外にも、その河上博士が私の博士に加へむと志したる非難を私に向けられてゐる。答へて云ふ、それは的が外れてゐる。

河上博士は現代病生活難に對する氣賀博士の診斷も處方箋も私のも同じであると、見られてゐる。私は詳細に語る餘裕を有しないが、私見の骨子のみを云ふ。然り診斷は大體に於て近い、けれども處方箋は全く異なつてゐる。河上博士の論は進む。『氣賀氏はその論文の最後に云ふ、「悲觀の原因は主として心理的方面にあるのであつて見れば、これが救濟は人心の啓發に待たねばならぬ。」と此の如く說教するは人に神たれと勸むるかの如くに響く。だが事實に於ては、それは逆に、人に動物たれと勸むるのである。』而して私もまた當然に此非難を甘受すべきであると云ふことである。氣賀博士の見解は常に私の尊敬する所、此點については別に其意見を有せらるるであらうから、私の答へる限りではない。私だけに關して云へば、此非難は全く的を外れてゐる。私は今日の生活難に對して心理的療法を唱へ、自ら欲望を制限せよとは說いたことがない。河上博士は問題とせられたる私の隨筆のいづこ、如何なる文字の中に之を見出されたのであるか。加之、私は河上博士が非難されると正反對の意見を有することの證左をあげよう。前述の『除貧の二途』に於て、私は貧乏の意義を論じ、進みて、此生計の爲の苦悶から免れさせる途は出生の制限に存せず、分配組織（これが生產の

組織と共に改まるか否かは別の問題である）の改造以外に存せずと述べてゐる。固より吾人がすべての虚榮を進みてすてうるならば問題はない、併しながら、これは「人間」にとりて不可能なる事柄であると信じてゐるから。

然らば、食へないと云ふのは一定の虚榮が食へないと云ふことであると云ふ立論から私は何を主張したか。人口が増加しても生活程度が少しく下りその虚榮の充足が少しく減じさへすれば、十分に國内に收容せられると云ふに止まる。私はこれによりて、生活難が緩和せられるとも除去せられるとも考へてはゐない。たゞ生活難が食へないと云ふ意味ではないと說くまでである。從ひてもとより、人心の啓發を說き虚榮心を取除けと云ふのではない。「金さへあれば、らく／＼と寢臺に寢てゐて旅の出來る今の世に、金なきがために數百里を徒歩で旅せねばならぬといふ時、難儀を感ずるのが果して間違であらう？』と云ふ河上博士の見方は、言葉こそちがへ、十五六年から私の發表したところではなかつたか。『貧乏物語』の貧乏觀に之を認められざりし博士が今日之を說かるること、それは遲しと雖もなきにまさる。然れども河上博士の此點に關する見解は果して徹底的であるか如何。此點は後日機會あらば之を吟味しようと思ふ。

河上博士は私が血色良好なる乞食を見出すことによりて、食へないと云ふのは一定の程度の虚榮が食へないと云ふことであると云ふ發見をなし、これを以て立論の根據としたと述べられてゐる。而して、汝がそんな例によりて主張の根據を發見したと云ふならば、それとは正反對なることを示すかくかくの事實をあげるぞと云ふ例を示されてゐる。その論法は全然徒勞であり、理論の核心にふれてゐない。

私が血色良好なる乞食によりて生活難の意義を發見したと云ふ論據いづこにありや、河上博士の立論は此場合にもまたあまりに非論理的である。私が所謂「食へないと云ふのは一定の虚榮がくへぬことである」と云ふ見解は社會進化の根本理論であり、而して私の未熟ではあるが多年の心血を注いだ社會學組織の中心觀念である。私は力の欲望を以て一切の文化の進展の機構の根本動力なりとする、此主張が許さるる限り、必然に、食へぬと云ふことは一定の虚榮が食へぬと云ふことになる。このことを茲に今論證することは餘りに煩雜の仕事である。たゞ河上博士にして私の社會學組織に少しでも目を通してゐられたならば、乞食によりてかゝる發見をしたと云ふが如き向ふ見ずの主張をせられなかつたであらう、そして一二の病人の例をあげて私の立場を破壞しようとする徒勞を企てられなかつたであらう。私の生活難乃至貧乏の理論は私の全社會學組織の一の系論（コロラリイ）に過ぎぬ、之を徹底的に破壞せむとせらるるならばかの組織ことに文化の進展に關する全理論を覆へすことを要する。此意味に於て、私は河上博士の示されたる一二の例に論及することを無用なりとするのである。

河上博士の『唯物史觀研究』には社會の生産力増加の必要が人口の増加と文明の進歩であるところの「より高く文化したもの」になる要求との二方面から來ると述べてある。云はゞ「より高く生きる要求」が人口増加と相ならびて社會進化の根本動力と見られてゐる譯である。而も此「より高く生きる要求」はそのまゝに與へられたる事實として想定せらるゝ外なきものであるか、その存立について何故と云ふ疑問

をなげかけ得ざるものであるか、そこに博士と私との立論の分岐點がある。河上博士は少しも此何故を問題にせられぬらしい、何となれば其所論のいづこにもこれを問題として取扱はれぬが故に。福本氏が『かくして河上博士の唯物史觀は『高田博士の所謂第三史觀』に似て而も更に一歩プリミテイブな史觀であるといはなければなりません』（『社會の構成並に變革の過程』六五頁）と云へる理由もそこにあるかと思ふ。現にあるものを物のあるがまゝの性質と想定して立論すれば學問の必要すらも認められなくなる。希臘の天文學者のやうに、九段の星層を假定し、種々なる天文的事實を各層の性質と假定してゆくならば、今日の星學の緻密なる研究、煩瑣なる數理もすべて不必要である。法則科學の第一關心事は常識が與へられたるものと假定してゐることについてその「何故」であるかを明にするにある。河上博士にとりては、幾千年間殆ど其生活狀態を改めざる、云はゞ不變の欲望內容をつゞけて來れる蠻民の存在も問題ではない、何故に「より高き欲望」を滿足せむと要求するかと反問しその理由を考察することは痴人の希望に過ぎぬのであらう。果して然りとするならば、グムプロヴイッチもヴエブレンも而して私も此痴人の部類に屬することとなる。河上博士が法則科學上に於ける此中途半端の態度——何故の追求を中途にてくひとめる態度——をとらるる限り、食へないと云ふことは一定の虛榮がくへないと云ふことであると云ふ、私の主張の意味を理解せらるる筈がない。さればこそボルハアトの次の見方に對して何の疑問をも感じられない。『この增加する所の欲望は必ず滿足されなければならぬ。玆に大事な點は、それが必ずさうされねばならぬ（Müssen—不可不）と云ふ事だ。それは全然人間の自由意志に依存しない。何故と云ふに、もし增加せる人間に向つて衣食住が生產されず、又彼等の增加せる欲望の滿足が行はれなければ、飢餓や疾病や貧困や衰亡が必然に生ずべき結果だからである』（『唯物史觀研究』二三二——二三三頁）。此議論の如何に粗雜なるかを見よ。より高き文化を享受せむとする欲望の充されざるところ、そこに飢餓や疾病が起る。今日の勞働者は百年前の百姓の知らざりし夏の氷をのまず、夜の電燈にてらされなければ飢餓に瀕し疾病にかゝると云ふのであるか。かゝる見方が河上博士によりて許さるるのを見ると、博士が私の立場を理解せられざるのも當然であると思ふ。

九、一二の批判

以上述べたる所を以て私は河上博士の批評に對し、その論點の一々を盡く吟味し、承服し得ざる所以を明にしたる積りである。私は序を以て、河上博士の人口問題に關する見解に對し一二の批判を下したいと思ふ。

人口問題に關する河上博士の根本的立場は全然マルクスの資本家的社會の人口法則である。從ひて博士特有の人口法則はなく、マルクス人口法則が現代の日本の人口問題にあてはめられてゐるのを見るだけである。從ひて、その見解の吟味は、前にマルクス人口法則について述べたるところを、更に立入りてすると云ふことにならう。但し、こゝにはすべて河上博士自身の言葉に從ひ、その述べられたる內容を問題とする考である。

河上博士にありてはマルクスに於けるが如く、マルサスの抽象的人口法則が自ら生産力を發展しゆく社會にはあてはまらない。『事實においては、各々の特殊なる歴史的生産方法は、その特殊なる、歴史的に妥當な人口法則を有する。一個の抽象的な人口法則は、たゞ、人間が歴史的に交渉せざる限りにおいて、動植物にのみ存在する。』かくて資本家的社會に特有なる人口法則があり、それによれば、『吾々の眼に人口の絶對的過剰と見ゆるものは、實は資本の需要に對するその相對的過剰に外ならぬ。資本家的生産の支配する社會においては、資本の有らゆる要求が、みな絶對的な形を以て現はれる。それゆゑ、資本の要求せざる人口は、絶對的に不用なる過剰人口として現はれる。』

さて、此資本家的社會の相對的人口法則は次の如くに説かれてゐる。資本蓄積の進行と同時に、資本の構成に遞增的な或る變化が起る。不變資本部分即ちあらゆる形態における生産手段から成り立つてゐる部分は、資本の他の部分、すなはち勞働の購買のため勞銀として支出される可變資本部分に比較して次第に遞增して來る。資本のこれら二の要素の比例が、元と一對一であつたとすれば産業の進歩に伴ひ、それは五對一、乃至その他のものとなるであらう（社會問題研究第七十三冊一一一―一二頁の中より）。もし資本六百の中、三百が勞銀に支出されてゐるのなら、三百人の勞働者の代りに六百人の勞働者に對する需要を作り出すためには、總體の資本が倍加さるればいゝ、しかし六百の中に百だけが勞銀に支出されるやうの仕組になるならば、三百人の勞働者の代りに六百人の勞働者に對する需要を作り出すためには、同じ資本が六百から三千六百に增加しなければならぬ。だから産業の進歩において勞働に對する需要に資本の蓄積と並行するものではない（同上、一一二―一三頁より）。かゝるマルクスの所説から次の如き叙述が引き出されてゐる。

『これによつて見れば、資本家的生産の進行に伴うて、益々多くの過剰人口が生じなければならぬといふことが、明かであらう。假に之を前例について言へば、一定の期間に勞働者數が三百から六百に增加したならば、――資本の構成が、期間の始めには不變資本一に對する可變資本一の割合であつたのに、期間の終りには不變資本五に對する可變資本一の割合に變化したとする限り、――それら增加したる勞働者がすべて雇傭され得るためには、その同じ期間内に資本は六百から三千六百に增加しなければならぬ。すなはち人口が二倍に增加すれば、資本は六倍に增加しなければならぬ。言ひ換ふれば、資本の增加率は人口の增加率に比し、遙に大でなければならぬ。しかも資本の構成は資本家的生産の發展に伴ひ益々高級となるがゆゑに、それはたゞに遙に大でなければならぬばかりでなく、加速度的に益々より遙に大でなければならぬのである。しかるにかやうなことは、如何に資本の自己膨脹力が旺盛であればとて、到底實現され得ざることであり、且つその實現し得ざる程度は、資本家的生産の進行に伴うて益々甚しくなる。さうして其の必然の結果は、資本の不用とする――資本家の雇傭し得ざる――過剰人口の出現であり、その遞次的增大である』（同上、一四頁。圏點は著者の加へたるもの）。私は引用が稍長きにすぎたことの許を乞ひたいと思ふ。これはたゞ、博士の理路をこまかく跡づけようとする必要に出てたのである。私は順次に此見解に對する疑問を述べる、第

一。『これらによつて見れば、資本家的生産の進行に伴うて、益〻多くの過剩人口が生じなければならぬといふことが、明かであらう』と云はれるが、其實、私には少しも明かでない。過剩人口の必然性がどこに論證せられてゐるか。例へばある富豪の放蕩者をさして、彼の浪費はだんだん甚しくなる、其收入はその割にふゑないであらう。彼は加速度的に借金をするにきまつてゐると云ふ議論をたてゝも、彼の財產額と浪費額との比較が明ならぬ限り、そのいづこに論理の必然性があるか。新聞の記事、又は小說の一節であるならば、此必然性がなくとも、事を想像にまかせて足るであらう、科學に之を許さない。可變資本の割合は減少するにせよ、總資本額も增加し、可變資本の絕對額も增加する人口も增加する。此增加の比較如何。人口の增加の方が大であると云ふ論證は、前述の如く、マルクスに見えざると同樣に、河上博士にもなく、博士は此點を全然念頭に置かれざるが如くにすら見える。第二。人口の相對的過剩が益加速度的であると云ふ主張には何の論據も與へられてゐない。資本の構成は、資本家的生產の發展に伴ひ益〻高級となるが故に、資本の增加率は人口の增加率よりも加速度に益大でなければならず、而もかやうなことは、如何に資本の自己膨脹力が旺盛であればとて到底實現され得ざることであると述べられてゐるが、如何なる資料、如何なる論據によりて之を斷定し得らるるか。それを斷定せしむるものはたゞ實行的熱情にして、事實の考察ではなからう。しばらく停りて此點の分析に入らしめよ。

資本の構成が高級となるにつれて、人口の過剩が益〻加速度的に進むと考ふべき必然の理由がある筈はない。勿論可變資本の總資本に對する割合は減少して行く。併しながらそれが加速度的に減少するとは『資本論』にいはゆる inbeschleunigter Progression に於て減少するとは）どうして考へ得られるか。可變資本の割合が$\frac{1}{2}$から$\frac{1}{3}$への減少は$\frac{1}{6}$の減少である。しかし此後の進行は$\frac{1}{3}$から極限零への進行である以上、無數の段階に於ける此割合の減少を合して、$\frac{1}{3}$に及ばぬ筈ではないか。例へば、$\frac{1}{100}$から$\frac{1}{101}$へ減少するとせよ、此場合に於けるかの割合の減少は$\frac{1}{100\times101}$に過ぎない。河上博士のいはゆる資本の增加率が人口の增加率よりも（a）遙に大であるを要するのみならず、（b）「益〻より遙に大であるを要」し、（c）「加速度的に益〻より遙に大」であるを要すとする見方はマルクスの敍述をそのまゝに採り入れられた結果であらう。それはかの敍述と共に否定せらるべきものである。私の此主張の結果として、『資本家的生產の進行に伴うて、益〻多くの過剩人口が生じなければならぬと云ふことが明であらう』と云ひ、又は、人口の增加に應ずる資本の增加は『到底實現し得ざることであり、且つその實現し得ざる程度は、資本家的生產の進行に伴うて益甚しくなる』と云ふ河上博士の主張が何等の根據を有せざることとなる。

例へば今資本の構成がさまで高級ならず、不變資本二〇〇、可變資本一〇〇、從ひて可變資本の總資本に於ける割合が$\frac{1}{3}$であるとせよ。餘剩價値率m/v（可變資本に對する餘剩價値の割合）を一・〇とし、資本家の消費量（r）を二〇とする。次の期に於ける可變資本の總資本に於ける割合を$\frac{1}{4}$とする。その時に於ける可變資本の變化は次の如

くになる。

	第一年の資本構成	第二年の資本構成
c	200	285
v	100	95
$c+v$	300	380
$\frac{v}{c+v}$	$\frac{100}{300}=\frac{1}{3}$	$\frac{95}{380}=\frac{1}{4}$

$m=100$；$r=20$；$m-r=80$……資本の蓄積量

第二年の可變資本……$=\frac{1}{4}(c+v+80)=\frac{1}{4}380=95$

然るに資本の構成が更に高級となり、可變資本の總資本に對する割合が$1/50$より$1/51$に進むものとする。可變資本二四〇、不變資本一二〇〇〇、餘剩價値率を一・一資本家の消費を二〇としよう。

	第n年の資本構成	第n+1年の資本構成
c	11760	12019
v	240	240
$c+v$	12000	12244
$\frac{v}{c+v}$	$\frac{240}{12000}=\frac{1}{50}$	$\frac{240}{12244}=\frac{1}{51}$

$m=264$；$m-r=244$……資本の蓄積量

第$n+1$年の可變資本……$\frac{1}{51}(12000+244)=240$強

此表によりて知らるる如く、資本の構成は$1/3$より$1/50$へと高級化したれども、これによりて過剩人口が增加すると云ふことはない。可變資本は此場合に減少しない。尤も餘剩價値率を一・一としたれども此增加は十分に許されうることと、可能のことと思はれる。依然一・〇に据え置くとも可變資本の減少は前例より遥に小である。マルクスの想定には常に可變資本額の絶對的增加がある、可變資本が不斷に增加するほどの餘剩價値率にありては、なるほど資本の構成の高級なるほど、既存資本の新なる高級化の爲に引き去らるる(この大は低級なるほど大である)後の殘餘のうち、可變資本に割當てらるる割合が小である。併しながら、これありとするも、餘剩價値率の增加可能、資本家の消費量の變動、ことに、資本の高級化に伴ふ價値構成の變動の小ささ(例へば$1/50$より$1/51$へと動く代りに$1/50$より$2/101$への變動と云ふ如き)などを併せ考ふればどうしても、過剩人口が加速度的に大となると云ふ主張は理論的に支持しがたい。

くり返して云ふ。資本の構成が高級となるにつれて、なるほど餘剩價値の中から可變資本に轉換せらるる割合は例へば$1/3$から$1/101$に減じて行く、蓄積量の遥に小なる部分が可變資本の增加部分となる。しかしながら、既存の可變資本の中から資本の構成の變化に應じて不變資本に組入れられるものの割合は益〻減少しつゝ零に近づく傾向を有する。その上に蓄積率もいくらかづゝ增加するであらう、即ち資本家の消費量をほゞ固定的のものとするならば、蓄積量も蓄積率も可變資本の絶對量の增加につれて加はるであらう。又餘剩價値率そのものも資本構成の高級化と共に增加しうべき理由がある。これらの諸事情を併せ考ふれば、前掲の例示の如く、資本の高級化につれて可變資本の割合の減少の鈍ると共に過剩人口が益〻增加せず、むしろ減少し又は消滅

しゆくことの可能が十分に考へ得らるるのを見る。マルクス自身としては、その人口法則を直觀し其內容を出來るだけ印象深く叙述せむとしたるが故に、その妥當範圍を誤認し、論證の道行に非論理的のところを生じたるのは、或は自然の勢であつたらう。たゞ河上博士が徒らに、其內容をそのまゝに承認せらるるかに思はるゝのは如何のものであるか、若しそれ余の理解と計算とに誤謬ありとせらるるならば其教示を惜まらざらむことを乞ふ（マルクス人口法則の吟味を十分に仕遂げるのには、其景氣論恐慌論に立入らなければならぬ。然れども河上博士の立論もそれから離れてみたるものであるが故に私もまた姑くそれを抽象して考へた。資本蓄積の理論については近き將來に於て河上博士の批判に答へたいと思ふが故に其際恐慌理論に論及したいと思つて居る）。

　これだけを內在的批判として述べる。更に私自身の立場から一二の疑問を提示する。第三。マルクスにありては資本構成の變化なき中間休止期がだんだんと短くなると說かれてゐる。然れども資本家的生產の進行につれて、獨占的勢力が漸大支配するに至り、これに伴ひて、かの高級化そのものが行きつまる傾向はないか、中間休止期はむしろ益々長くなる傾はないかと思ふ。第四。資本の價値構成と技術的構成とは常に一致し平行するものとして取扱はれてゐる。然れども、私の立場から云へば、此間に必ずしも平行の關係はない。而して、技術的構成の變化に拘はらず、價値構成の變化せず又は僅にのみ變化することの可能は十分に認められる。此點は私が勞銀理論に於て說かむとするところであるが故に今深く立入らぬ。たゞ、權力關係の變化と共に、勞銀は高まり得る。一定の不變資本と結ひつけらるる勞働の數量は減少するにしても勞銀は減少せず、又は增加する可能すらある。資本家的組織の破壞をすら營みうる勢力を勞働者に認むる立場は何故に、此勞銀を引き上げ、又勞働時間の短縮によりて資本と結合する勞働者の數量を增加せしめ得ずと云ふのか。二の資本構成の平行一致を動かすべからずとする立場は勞働者を以て資本家の取扱ふ事物として見るものである、彫刻家の刄物を加へて細工する木材と見るのである、勞働者は果して此の如き生命なきものであるか。

十、餘論の二

　私は既に述べんと欲するところを略ぼ述べ盡した積りである。終りにたゞ餘論として、日本現時の人口問題に關する感想を附記したいと思ふ。

　人口問題に關する朝野の議論は中々にやかましい。併しながら結局さまで有効なる對策は講ぜられないであらう。いくら商工立國策などの看板をかゝげて新なる施設をやつてみたところで、之によりて每年十萬の人口を養ふだけの餘地が新に作られるならば、それが關の山である。あとの八九十萬の吸收は依然として自然の成行にまつ外はない、これ私が放任の外に道なしと云ふ所以である。然れどもこれは前述の理由によりも少しも憂慮するに足らざることである。勿論貧乏、生活難を完全に取除かうとするならば――私は之を今主張しようとするのではない――、、、の改造以外に其道はない、出生制限といへども無効果である。併しながら、此位の組織を以てしても、人口が增

加するから食へないと云ふ道理はなからうと思ふ。此放任の下になほかの人口方程式は如何なる道行によりて成立するであらうか。第一、恐らく遠からずして來るべき出生率減少によりて。第二、已むを得ざる生活標準の低下、ならびにその結果として生じうべき生產額の增加によりて。これが今日の事情の下に於て最も生起の可能性の多き道行である。勿論勞働者の團結的勢力の進展如何によりては生活標準がさまでに低下せず、かへりて不勞所得の減少によりて云はゞ分配係數の變化によりて人口と生活資料との均衡の確立せらるべき可能性もある。事實的の事情を離れ、單に考へ得べき對策を見るならば、例へば穀物關稅の重課により農民の收益を大ならしめ一方耕地の擴張內地販路の擴大を計ると共に、他方之に伴ふ商工業の生產費騰貴の負擔を不勞所得の上に轉嫁せしむると云ふことも思ひつき得られよう、之に類似したる性質の方策はなほ多數に考へられる。併し、實際の勢力關係がその實現を許さなければ、これらを考察するともそれは架空の論である。私は前の二の道行をのみ見よう。

資本家的生產の進展は必然的に出生率の減少を伴ふ。日本現時の高率なる出生率は一方から見て、家族主義の結果である（經濟往來第二卷第五號所載、高木友三郎氏「家族主義の浪費」は卓見である、東洋の高率の出生を說明して此の如く明瞭なるはない）。資本家的生產の進行は必然的に之を弱むるであらう、それと共に力の欲望を刺戟する、かくして早晚出生率減少は生起しなければならぬ。進みて考ふるに、生死の平行法則は西歐の人口に就てつとに認められたる事柄である、最近に於ける日本の死亡率の減少傾向が微ながらに認められはじめたることは、此出生率減少の必ずや近き將來よりはじまることを豫想せしめる。なほ生活標準の低下と云ふことについては次のことだけを述べるに止めよう。如何に日本が慢性的入超國なりと云つたところで、貿易外勘定のこれを補ふものなしとすれば、國民全般を通じて今日の生活標準のいつまでも維持せられよう筈がない。分配係數の略ぼ不變である限り、勞働者の生活標準も自ら幾分の低下を免れないであらう。勿論これは前述の如く勞働者の勢力增加、不勞所得の減少によりて妨げ得られる、而してそれも恐らく未だ資本の逃亡を來すことはない、たゞ勢力關係がそこまでに進展するやを疑問とするのみ。此低下は一方、未耕地の耕作を引合ふものとなし、他方、資本の利用を集約化せしめ、今まで不引合の事業を經營するに至らしむるであらう。前者の低下一割ならば恐らく幾百萬の人口收容力を生ずるであらう、たゞ此邊の事容易に計算を許さざるのを遺憾とする。附言すべきことは、次の通りである。私はたゞ事實の一考察者として事實の成行がどこにゆくかを見るに止まる。從ひてたとへば、生活標準の低下の如きも、それは私の推測であるに止まり、如何なる意味に於ても之を主張し、之を辯護せむとするのではない。

筆を執りて幾日、漸く雨季に入つたらしい。村の人たちは喜んで田植に取りかゝつた。私をして日夜此の如き空疎なる議論をなしながらなほ安じて衣食せしむるこの人たちのために合掌しながら、靜に此筆を擱く。一九二七年七月二日午前九時、三日月村の村居に於て。

享受と批評

谷川徹三

一

一般に、享受は批評を豫想し、批評は享受を豫想するであらう。享受や批評の「かくあるべき」立場から見てさうである許りでなく、事實「かくある」立場から見てもさういふことは間違つてはゐないであらう。

第一に、享受とは單に容器に水を盛るやうに外物をそのままに心に受入れることではない。――心は生きたもので固定した容器ではない。器に盛られる水さへもその器の形にしたがふのをしばらく看過しても――。嚴密に言へば外物は決してそのままにわれわれの心に受入れられるものではない。何らかの程度に於て何らかの仕方に於て、外物はわれわれの心のあるやうに、われわれの心の狀態に制約せられて、われわれの心の獨自な受入れ方にしたがつて、受入れられる。その意味で、たとへ享受を全く對象のあるがままを受入れることと解しても、そのあるがままがすでに主觀の色と調子とを、いはば廣義の批評ともいふべきものを、含んでゐるといはねばならぬ。おそらくそこまで言ふ必要はない。眞の享受が必然に對象の中へ深まることであるとすれば、その深まりは一種の內面的ディアレクティークを必要とし――多數の對象を享受することによつて或對象を眞にその獨自の點から享受することができる點からも――したがつてそこには必ず批評と稱ねばならぬ心の態度が存してゐることを指摘するだけでもよい。

他方、批評は一般に二次的現象と見ることができる。批評するためには批評されるものがすでに或程度まで見られ、聞かれて、ゐなければならぬ。批評に於てそれを受入れると拒斥するとを問はず、それはわれわれに一旦は感受せられてゐなければならぬ。批評は一旦感受したものを改めて或は受入れ或は斥けるものである。その對象を斥ける場合も、あたかも、判斷に於ける否定判斷がそれ自身獨立の表象をもちえず、常に或肯定判斷に對する判斷となるのに類比できるでもあらう。その意味に於て批評は常にいはば廣義に於ける享受を含んでゐるといはねばならぬ。或はこの場合にもそこまで言ふ必要はない。眞の批評が或對象の批評として、(その他の對象の批評ではなくて)、その對象の本質、內面を問はねばならぬ限り、それはその對象の享受を離

れてはありえないことを指摘するだけでもよい。

しかしそれにもかかはらず享受はともすれば批評を離れ、批評はともすれば享受を離れんとする傾きをもつてゐる。批評が享受の深まりを豫想して始めて眞の批評をなすのに、多くの批評は實際に於て享受の深まりを豫想せず、享受は批評を缺くとき盲目となるのに多くの享受は實際に於て批評を缺き易いのである。

わたしは少しばかりの反省で、自分が或對象を眞に享受しないで、その對象の批評を口にした經驗を思ひ起すことができる。さういふ時わたしは自分の心に或虚しさを感ずると共に、自分の言葉もまた虚しく響くのを感じたのを覺えてゐる。恐らく敏感な人は、この、わたしの自分の言葉に對する反射の氣持だけからも、わたしの言葉の空虚を感じとつたであらうと今も思ふほどである。それで、わたしは他人の言葉に——批評に、空虚を感ずるとき、自分の場合にひきくらべて、或は實際はもつと直接に、その批評が深められた享受の裏づけを缺いてゐるからであるやうにしばしば思ふ。事實また、雄辯な批評がその實他人からそのまま借りられた言葉で語られてゐた場合を氣づくことさへ稀でないのである。われわれは或書物の批評を讀んでその書物を讀んだかの如く思ひ——讀んだかの如く思はないまでも知つたかの如く思ひ、或は書物の一部分を讀んで全體に通じたかの如くに思ひがちである。事實また賢い批評は或程度まで享受の代用となる。近代の或種の批評家達は、それ故、批評家の任務をその對象もしくはその作者に對するものと見ないで、讀者に對するものと見てゐる。批評家は作者と讀者との仲介人である。(これによつて事實批評はより廣い社會的意味をもつてくる。)しかしそれは一歩を進めると、或書物とその書物を讀まぬ讀者達との仲介人となり易い。現今の如くにおびただしく書物の出される時代に於てはかかる仲介人は重寶であり必要でもあるだらう。しかし、さうであるからと言つて、それは、その仲介人によつてその書物を知つた人が、實際その書物を享受したと考へることの正當を保證するものではない。

これと對立するものは盲目な享受者である。むかしをふりかへるとき、多少の程度こそあれ、かかる盲目の享受の事實を自分達のこととして思ひ浮べないものは少いであらう。おそらくこの場合盲目といふ言葉は程度的のものであるかも知れない。人は人の現在のあり方に於て享受する。それ以外の仕方では享受しえない。これを盲目といふは後から振かへつたか、外から眺めたかである。もし世に全能者があるとしたら、われわれすべての享受を盲目とするかも知れない。でなくとも、われわれはおそらく正當な理由をもつて、他人を、他人の作物を、眞に理解し得るかどうかについて懷疑的となることができるであらう。しかしわれわれはこの場合二つの事實を反省しなければならない。後になつて前の享受を盲目だつたとするところに進歩が見られ(かかる變化を進歩と呼ぶことに反對する人もあるであらうがその問題をしばらく問はないで單純に進歩と呼んで置くことにすれば)、その進歩によつて人間は始めて生きてゐること、——及び一定の歴史的社會的發展段階に於ては、たとひ漠然とにせよ、また多少の異同の存するにせよ、共通の評價の標準が存し、われわれは一般に多かれ少なかれ、それに動かされ、それに則らねばならぬこと、これである。この

二つの事實に基づいて、或種の享受を盲目とするのは無意味でない許りでなく、正當なことであるだらう。

　かかる態度の對立は單に文藝の享受の場合のみではない。享受なる言葉を廣義に解して複雜な構造をもてるもの、こと、にもあてはめて考へれば、――たとへばわれわれが或立場の思想に對する場合をとつて考へれば、その思想を盲目的に受入れる態度、とその思想の入口まで行つて、直ぐ後を振かへる態度とは異つてゐる。或はその思想の中へ一旦はいるや脇目もふらずにその奥へと赴く態度と、或程度までその中へ入りながら常に右顧左眄し、他の立場の思想に流し目を與へ、一旦受入れたものを捨てて去るといふ態度とは異つてゐる。前者は一般に享受的といひうべく、後者は一般に批評的といひうる。勿論この場合にも一方その思想を正しく批評するためには、その思想の奥深くはいらねばならず、眞に享受するためにはその内容の一一の批判考察、他の立場への反省、を缺きえないと共に、他方、一面的な享受的方向と批評的方向とは共にあやまれるものとしての共通點をもつてゐる――批判を缺く盲目の享受はそれが盲目であるが故に享受ともいはれず（それは享受の形をよそふのみである）、享受なき批判は享受なきが故に批判ともいはれない（それは批判の形をよそふのみである）――ともいへる。この事實は、無批判に何でも受入れる享受が手あたり次第に受入れると共に奥迄はいらないで次から次へ渡り歩くのを、享受なき批判が無内容なるままに次から次へと對象を渡り歩くのとを比べてみれば、それが或程度まで兩極の一致として見られる點に於ても興味がある。實際われわれは或思想の中へ少し許り入つて直ぐそこを立去ることを批判が足りないとしてよいか、享受が足りないとしてよいか、或はあまりに批判的としてよいかあまりに享受的としてよいか――享樂者は次から次へと渡り歩くもの、刺戟から刺戟をもとめてゆくものあらゆるものに對するドン・フアネリでもあるから――迷ふほどである。

　また實際、世の事實が示すやうに、享受の方向を徹底すればおのづから批判が生れ、批判の方向を徹底すればおのづから眞の享受が可能になることも事實である。享受なき批評とは、對象に對していふ言葉として、批評なき享受とは主觀に即していふ言葉として、前者は外にあらはれた形、後者は裏にふくまれてゐる事として、共に同一物の反面であるとも考へられるであらう。

× × × × ×

　かかるうつりゆきはなほ大、小、さまざまの範域に於て看取される。たとへば――

　『人生に於て常にできるだけのものを享受せんとする態度は、第一に、そして特に、所謂享樂主義としてあらはれる。そして所謂享樂主義は一般に先づ感性的享受の方向にあらはれる。あらゆる官能の窓をひらき、受入れられるだけの内容――刺戟、快感、愉樂を、そこから受入れようとする態度である。しかしこの態度はその純粋の方向を辿る限りおのづから第二の態度に移りゆくであらう。

　享樂の眞の意味は味ふことである。味ふことはその性質上量よりも質を重んずる。（たとひその原始の形態に於て量を求めても、それはやがて質を求める方向に轉化してゆくのが一般である。）それゆゑ外面的

にも内面的にも感受力を醇化してできるだけ微妙な味ひを求めることになる。——この立場に於ては不快と醜とに對して最も敏感な感受をもち、感受は分化して（分化は自然の勢であり傾向である）、かつて快感愉樂であつたものが今や不快となり醜惡となる。そしてそれが不快であり醜惡である限り、纖細な觸角をもつてそれを避け、あらゆる隅隅からそれを拒斥しようとする。第一の立場とこの立場とは或意味に於て對立する。

然るに更に一步を進めたものは、纖細な感受をもちながら選擇と拒斥とを乘越える。醜や不快のうちにも一層微妙な享受を見出す。世の「酸いと甘いとをかみ分け」すべてを各その所に於て受入れる。われわれは偉大な享樂主義者に——低卑なる側面を多分にもつ享樂、遊び、に於てさへそれに徹した人に於ては——この點について一種深い心境を見出すのが常である。彼等は極めて寛容な態度をもつてすべてを受入れる。事象の、心の、隅隅にまで滲透して見るべきところを見、取るべきところを取る。しかも冷かな批評的態度をもつてさうするのではなくて温かな受容的態度をもつてさうするのである。その心境はしばしば宗教的な或香氣をさへ含んでゐる。

かかる移りゆき、かかるいはばディアレクチイッシュな進行、はそれを眺める距離によつて大小の範域をもち、無數の段階を有する。また恐らくこの場合にもかかる高められた心境を單純に享受からのみ見ようとするのは正當でなく、われわれは生活全體の奧行から——或は實踐から、眼を離してはならないであらう。遊びに徹した人は多く「苦勞人」である。偉大な享受者ゲーテは晩年捨離を說いてゐる。しかしゲーテの捨離は世のあらゆるものを享受せんとの不斷のファウスト的衝動を前提として始めて生きた意味をもち、苦勞人の苦勞人たる所以はあらゆるものを自ら味つたことにあるのを忘れてはならない。われわれはここに生活の特色ある一方向——或は一基音を見るものである。

思ふに最も醇化された宗教的態度の特性が、一般に、すべてのものを受入れようとするところにあるといふのは間違ひではない。問題は受容れる仕方、受容れる氣持にある。* しかし事實はとにかく受容れるのである。善惡を峻別して善をとり惡を斥ける道德的態度に比するときその特性は最も明らかになるであらう。あらゆる存在を神に於て見るならば、何らかの仕方に於て、何らかの心の持ち方に於て、** あらゆる存在を素直に、或は感謝して、受けねばならぬ筈である。勿論この場合にも價値の原理が全く存しないのではない。あらゆる價値の原理は相對的なものとして最高の原理の中に止揚されてゐるのである。ここにも獨自なディアレクティークがはたらいてゐるのである。***

* それはとまれ、宗教的立場がその一側面に多分の享樂主義的要素をもつてゐるのは否定できない。それゆえにこの國の秀れた思想家一人はかつて言つてゐる。「自分は被造物の生活法として享樂主義には動かすべからざる深い根據があることを信ずるものである。造物が造物主に對して、生きてゐるものが生を與へたものに對して、一番從順な、素直な生き方は、自分に與へられた一個の生命を感謝して享け、その生をよろこんでゲニーセンすることである。これは動かすべからざる素直な、自然な、公な心持である。此處に享樂主義の深い根據がある。……普通われわれの生活法に於いては、

何事かを爲さんとするに當つては、先づその事の善惡を分別し、善に就き、惡を避けようとする形式に於て總てを行ふのである。殊に精神生活の問題に於て、善惡の辨別、正邪の判斷がその主要題目となり、われわれの思想上の論議はこれを離れることができなくなつてゐる。しかしこれは恐らく本來被造物の生活にとつて、第一義的のものではないであらう。第一義的のものは小兒の如く生命の享受、生活の享樂主義である筈である。この意味の享樂主義を離れて修養、修德、義務等の倫理的の意義に終始することは、被造物の生活として間違ひであると言はなければならない。」と。この「宗敎的享樂主義の立場」は、わたしの意味するものと必らずしも同一ではないが、しかしわたしの語つたところと相似た精神を美しく表現してゐるものである。

かかる立場に於ては、自己に與へられた一切を、ひとり快樂のみならずあらゆる不快と苦痛とをも、素直に受入れることによつて、すでに、所謂享樂主義を逸出してゐる。しかしその至境に於ては、苦痛さへ感謝をもつて受入れられるところに、(おそらく最高の境地に於ては不快や苦痛といふ名は存しないかも知れぬ)、享樂主義の名を正當としうべき理由がある。この境地が、あの、全く官能の享樂から出發しながらあらゆる不快と醜とにも特殊の味ひを見出してこれを受入れる立場——これは所謂惡魔主義と呼ばれるものではない——に、一味相通ずることによつて、一層この名を正當としうべき理由があるのである。

** 人はその場合淨土眞宗と禪宗とが出發點や精神やを異にしながら、その最高の境地に相通ずるのを思ひ起すべきである。

*** そのディアレクティークの、或は體得の、不確かなものが價値の原理に超越した態度をとるとき、われわれは「生さとり」や「野狐禪」を見出す。これは享受と遊びに徹しないで通人を氣どるものの臭味と同じ臭味をもつてゐる。

次に、批評は否定に於て最も鮮かに自分を示す。何ごとにつけてもそのまま素直に受入れない。信じない。當事者の心とならないのである。しかし一般に批評の否定は實行の否定の如く積極的な拒斥と反對とならないで、肯定を粧つた否定——傍觀となり易い。傍觀者は多く皮肉屋と諷刺家となる。相手の立場にならないでただ外から眺めてゐるからである。當事者の心とならない限りわれわれはあらゆる悲劇を喜劇と見ることもできるからである。われわれは如何なる悲慘にもその片隅に一つの笑ひを見出すことはできるからである。皮肉屋や諷刺家はその片隅をほじくり、えぐる。それ故に彼等は鋭い。その鋭さは時に事物の中核をつくやうにも見える。しかし決してさうでない。中核はただ深まりによつてのみ達せられ、そして深まりはただ内面へ掘り下げることによつてのみ達せられるであらう。

ところで、何ものをも受入れなければ何ものにも賴りえない。彼等は安住の地を見出しえない。そこに彼等の漂泊がある。傍觀者は漂泊者となり易い。漂泊は傍觀の持價に過ぎない。傍觀が一般に一つのものに對しての、或け一つの場所に於ての現象であるに比して、漂泊は幾つかのものに對しての、幾つかの場所に於ての現象であるに過ぎない。それは毫も事象の内面に參入することではない。

しかしこの傍觀と漂泊との道を通りながら、その淨化せられたものは一種高い心境をもつことができる。東洋の知慧の最も特異なるもの

に屬する一つの境地である。人は古來山中に庵を結び或は諸國に行脚する幾多の聖なる世捨人等を知つてゐるであらう。彼等と雖も世界との特殊なつながり、――宗教の一定の教義や自然への愛、をもつものではあるが、しかしその人生に對する態度は傍觀と漂泊とであり、傍觀と漂泊とを通した淨化である。しかも彼等の心境は人生全體に對する嶮い氣持である。この氣持は世を捨てながら、世を捨てたが故にかへつて、博大な心をもつて世のすべてを受入れる。これはあだかも、享受がその方向に徹底することによつて宗教的にすべてを受入れるやうになる――すべてを受入れると共に自分自身を捨離する（自分自身を捨離することなしにすべてを受入れることはできないから）――あの氣持と相似た過程である。

しかしそれらは生の上昇の一般的形態、ものが或方向に徹底することによつて竟に自分自身を超越する、あの形態の一つとしてあらはれたのであつて、そこまで押し進めない、進行の途中に於ては、もつと明かな對立の相を示してゐるのを見ることができる。

二

その對立は勿論大小さまざまの圏に於ける相對的の對立である。より小なる範圍の對立はより大なる範圍に於ける一致でもあり、より大なる範圍の一致はより小なる範圍に於ける對立でもある。そしてまたそれは獨立の、それだけの態度と態度との對立として取るより、一定の態度に於ける支配的側面、際立つた心の向け方、として取る方が一層妥當でもあるだらう。しかしとにかく何れにせよ、そこに或種の對立が成立ち見られるのは事實である。わたしは自分自身の個性型が或人達よりより批判的であることを感ずると共に、他の人達よりより享受的であることを感ずる。また或對象に對してより批判的に出易いと共に、他の對象に對してはより享受的に出易いことを感ずる。

實をいへばわたしはわたし自身の切實な問題として最初にこの問題をもつたのである。わたしは自分の近くに內面的豐富と深さとをもつた秀れた鑑賞家を一二ならずもつてゐる。わたしは彼等によつて常に導かれ眼を開かれてゐるのであるが、それでゐて彼等は所謂批評をしない。たまたま或作品について語つても、その作品のあたへる全體の感じの簡單な表白であつたり、或はその特に秀れた點についての嘆稱であるに過ぎない。それらは批評といはばいはれるものであり、且それらの簡單な言葉を裏づけるものとして內面に複雜な批評的過程の存することも考へられ、彼等の批評を口にしないのは彼等の性向と教養との特殊のあらはれであるとも見られるが、しかしそれにもかかはらず、一般に彼等の心の向きかたが享受に向けられて批評に向けられてゐないことはたしかである。そして、そのやうな彼等の內面的豐富と深さとを理解するにつれて、わたしは自分自身のともすれば批評的關心によつてものの純粹な享受を拒まれるわたし自身の心の向き方と、そのやうな彼等を前にして知らず知らずの間にする批評的饒舌とを、恥ぢる。

かかる思ひ――類似の思ひは、なほさまざまの場合にさまざまの領域に於て感ぜられる事實である。たとへば自分自身の美の世界を強く

まもつてゐる藝術家に對するときである。彼等の世界はしばしばあまりに狹いやうに見える。しかし狹くても奧行のある、ゆるぎのない、世界である。その世界にどつしりと腰を据ゑて享け樂んでゐる人を見るとき、われわれは外からの批評の如何に空しいかを痛切に感じなければならない。秀れた宗教家に對するときにもさうである。われわれは現代に於ける宗教の意義を疑ふことができる。或人達のやうにそれを阿片と見ることもできる。われわれは宗教を如何やうにも批評することができる。しかし實際、宗教的に淨められ、高められ、鍛へられた人の前に立つとき、われわれはその前に默つて頭を下げずにはゐられないであらう。そのときわれわれはもう一度宗教の意義を思ひかへさねばならないであらう。

われわれは生のあらゆる領域に於てかかる事實を痛切な問題としてもつであらう。それは一般に一層廣い見地から或は立場の相違とされ、或は自己と對象との距離の遠近、即くと離れるとによる相違ともされ、その他さまざまの言葉をもつて呼ばれうるものであるが、とにかく同一の對象が、その場合場合によつて異つて見え、異つた面目を呈露するのは事實であり、そこに明かな或對立が見られるのは事實である。

生活の實際に於ては、われわれはその何れか一にゐて、殊に生活を衝き動かす動機はそれ自身の必然性をもつてゐるから、われわれは或程度までそれらの對立の双方にひかれて迷ふやうなことは少いとも考へられるが、それであるからと言つてわれわれはそのやうな對立の事實に對する反省を缺いて宜いことにはならない。ある氣質の人にとつてはそれは決して數少い場合ではないが、たとひそれが一般に數少い場合であるにしても、われわれはその「數少い場合」に於て、人生に於ける最も重大な瞬間をもつであらう。それは單に理論的にのみならず、實際的にも重大な問題である。

『勿論この對立は、先にも言つた如く、一般的にはむしろ一定の方向若しくは支配的側面の對立であり、また全く性質的に峻別されたものではなくて、むしろ幾多の段階を容れうる程度的のものであり、從つて範圍の大小、視點の定め方、關心の中心の如何によつて幾多の對立と、對立の鋭化・解消をもつのも事實であるが、とにかくそのやうな對立が見出され、その見出されたものが、それぞれ何らかの意義を有するのも事實である。それ故しばらくこの對立の相背く方向を、多少の視點と角度との相違をもちながら、この對立に相應ずる、或は相類する、二三の對立を生のより廣い範圍に於て顧慮しつつ、辿つて見よう。

1　享受は一般に對象の內にあらうとし、批評は一般に外にあらうとし、ありがちである。

享受は中へ掘り下げる。掘り下げたところから時に汲めどもつきぬ清水が湧き出でる。生はその清水によつて始めて豐富にされる。その清水は生の最も尊ぶべき內容である。かかる內容は外面にとどまりがちな單なる批評からは出できたらぬ。それはただ內面に掘り下げる享受と鑑賞とからのみ出できたる。しかし掘り下げてのみゆくことはともするとわれわれの眼界を狹くする。深まることは特殊の場合を除いて

は擴まることではない。内にのみあるものは自分がどこにゐるかを覺には忘れる。樂しむことはやがて溺れることである。――外にあるものは溺れることはない。しかし外にあるものは樂しみえない。外にあるものは内容に與りえない。批評は常に興味を當のものから他の或ものへ移さうとしがちである。藝術作品の場合でも或批評家はわれわれに歴史と傳記を語り、他の批評家は風土と社會的環境と系圖とを、そしてまた或批評家は彼自身の形而上學を語る。そして彼等は結局その作品の美を捨てて省みないのである。しかし外にあるものは廣い展望をもつことによつて、他物に對するそのものの位置を明かにすることができる。そのものの成立ちによつてしばしばそのものの性質を明かにすることができる。そのものの權利をもつ範圍と限界とを決定することができる。これは單なる享受――單に内にのみ深まることからはできない。

内と外とは深まりと擴まりである。享受は深まり批評は廣まる。もし深い批評があるならばそれは必ず享受の深まりを豫想し、もし廣い享受があるならば、それは必然に批評を生むであらう。最も内面的なる世界に於ては深まりは擴まりでありうるが、しかしそれは一般的には通用しがたい。

2　内と外とはまた個人的と社會的とに類比することもできるであらう。個人的といひ社會的といふも相對の概念で、社會を離れて個人なく、個人を離れて社會のないのは自明の理であるが、われわれは、常識的な志向的方向として、この場合にもこの二者を區別することができる。

享受をのみ目指すものは個人の中へとぢこもり易く、社會一般に對する顧慮展望をもちがたい。あらゆる享樂は利己的、或は自己中心的である。それゆゑ享樂への非難は常に他人への顧慮、社會一般への反省に於てなされる。享樂そのものは罪惡とならなくてもその享樂の犧牲となるもの、或はその享樂を可能ならしめるための他人の非享樂を顧慮するときそれは罪惡とならねばならない。罪惡とはむしろ常に社會的の概念であるから。

所謂享樂や無活動や怠惰に於てのみ個人的なことを見なくてもよい。個人の中に閉ぢこもることは自分自身の專門の仕事にたづさはる勤勉としても見ることはできる。學者はその專門の仕事の性質上外界との接觸が少ないとき、兎もすれば自分を隔離し閉塞する。そしてそれが如何なる勤勉と努力とであらうとも、ある仕事はその仕事を一つの全體としてこれを享受することができるから、この場合その仕事のみに閉ぢこもる態度と、その仕事以外に、社會一般との關係、つながりに關心することとを、享受と批評との對立に類比することもできるわけである。

實驗室にこもつて一微生虫の組織の研究に熱中する學者は國際關係の問題に多くの關心をもたないであらう。古書の註解に沒頭する學者は今日の社會問題がどこにあるかを多く知らぬであらう。自分の藝術に專心する藝術家はしばしば藝術以外に何ものをも認めないやうにさへ見える。われわれは古來學者や藝術家の數數の「迂濶」な話を聞き及んでゐる。そして彼等がそれぞれその道に於て秀れた學者であり藝

術家であるとき、われわれはかかる話を常に一種の愉快と尊敬とをもつて聞く。彼等がその道に秀れた人人であつたがために特にかかる話が傳はつたのか、またかかる「迂濶」を一面に仕出かすほど彼等がその道に專心したためにその道に於て秀れた人となつたのか、それはともあれ、かかる沒入あつて始めてその道に於ける達成――內容の獲得、がありえたのである。一般に眞の藝術家は藝術に於て藝術のうちに生きた人であり、眞の科學者は科學に於て科學のうちに生きた人である。その意味に於て藝術家は藝術至上主義者となり易く（藝術至上主義が正しいか否かは別問題である）、科學者は科學至上主義者となり易い。これは明らかに或ものの內にのみあつて外にあらぬ態度であり、そしてその意味に於て個人的態度個人中心的態度である。（社會の機構はこのやうに個人の中に閉ぢこもつてゐるものをもその研究の成果によつて、その創造した作品によつて社會的となしうるし、また人は一般にそのやうに或人達が個人の中に閉ぢこもる態度を可能ならしめる特定の社會的條件を尋ね、見出すこともできるであらうが、――如何なる孤獨者も全く社會と隔離することは不可能であるから――それとかれとは別の問題に屬する。）

それに反して批評は社會的なる方向に於て最もよくその機能を發揮する。批評と批評されるものとの關係は享受と享受されるものとの關係と異り、本來から外に向ひ、より廣い關聯を豫想してゐる。むしろ批評はその本質に於て社會的關心を中心としてゐるとさへ考へられる。勿論その社會なるものが大小廣狹さまざまの圈として相交錯し、その一から離れることがかへつてしばしば他に於て一層緊密につながることでもあるやうに、その一につながることがかへつて他と離れることであり、廣く社會に關心をもつことが結局一つの「泥沼」となることともあるとはいへ、批評は常により廣く向ふ方向に於て、一般に個人に閉ぢこもることを拒ませる方向に於て總じて社會的といふべきである。

3　エロスとロゴス。愛するものに批評の眼を向けることは難しい。愛するものは先づその對象を受容れようとする。そのまま受容れようとしない場合にも、できるだけそのものの內面にはいつてそのものの心をわが心としようとする。それは結局批評を拒ませる。愛する對象が良く見えるのは、愛の內的機能によつて實際に良いものをそこから引出し見出すのである。惡いものをも良く見るのではなく、愛なきものには見出すに由のない良いところを、その隱された隅隅から見出してくるのである。かかる發見は批評であるよりもより多く享受である。

それに反して、批評は多くの場合エロスを缺き易い。われわれは愛なき對象に無遠慮な批評の眼を向ける。所謂批評はしばしば愛のない證據となりうるほどである。鋭い眼は冷い眼である。人はその憎むものに對してしばしば最も鋭い批評を下しうる。――しかし憎むことは、單に愛のない、愛に無關係なことではなくて、愛を豫想し、愛と反對な積極的な、感情であるから、その意味に於て、その限りに於て、「鋭い」批評は多くの場合公正な批評とはなり難い。

更に――。享受の最も本質的なものは言葉（ロゴス）にあらはされない。それ

は不思議な香氣として心の中に漂ひ入り、それに何らかの形を與へようとするときにはどこともなく消え去つてしまふ。しかもそれは消え去つてもなほ無に歸することのないものとして心のどこかに奥深く貯へられる。言葉（ロゴス）によつて捉へられ形づけられたものはいはばその影である。

享受の世界はそれだけにまた混沌と無意識との中に埋れ易い。或一人に授けられた人生と自然との秘密は、もしその人が言葉によつて傳へなかつたらその人の死と共に永遠に滅びるであらう。われわれは心から心への傳へによつてそれを承繼ぐこともできるし、また或人達のもつやうな、およそ一度人間の心に宿つたものは何らかの仕方に於て眼には見えぬが靈妙な一種の力として持續することの信念を必ずしも斥けないとはいへ、無意識と混沌とが意識と統一とを孕む胎として始めてその眞の意味をもつものであるならば、われわれはわれわれの享受をこの混沌と無意識とから引上げる言葉（ロゴス）をもとめねばならないであらう。

しかし理（ロゴス）のみをもつてわれわれは決して享受しえない。理（ロゴス）は自分を空しくして他の中へはいり込む謙遜をもたない。すべてを自分自身の支配のもとに置き、自分自身の標準をもつてはからうとする。批評が理（ロゴス）にのみ從ふときそれは多く獨斷となり裁斷となる。古來多くの藝術家が批評家の無理解と潜越とを憤り、また多くの「人間通」達が哲學者の思ひあがりと「迂愚」とを嗤つてゐる所以である。

4　人は女性的と男性的との對立によつてしばしば類似の對立を意味させてゐる。女性的は一般に受働的である男性的は一般に能動的である。女性は受け孕む胎として常に地につながつてゐる。男性は運動として、運動を與へる力として、常に素材である地を離れて飛びかけらうとする。たとひリカルダ・フッフの如くメフイストを最も男性的なものと見ないでも*、一般に男性が女性より、より多く批評の精神をもつのは爭はれない。

* cf. Ricarda Huch, Von Wesen des Menschen.

人は「無批判」にあらゆるものを受入れることをしばしば女性的として批難する。「自分自身をもたぬ」ことを、「背骨のない」ことを、原理に忠實でないことを非難する。あちらこちらのものの魅力にひかれて心定まらぬことを、「節操のない」ことを非難する。それらのことの正しいと正しくないとは別としても、それらは何れも男性的原理の缺乏である。それと共に人は、すべて一つの原理をふりかざして臨むものを、無理な裁斷を、自分自身の影によつて對象を覆ひ包むものを、かたくなにして受入れるべきものを受入れないのを、理解の不十分を滲透力の不足を、非難する。それらは何れも女性的感受的原理の缺乏である。

その他、人は多少の意味の相違と交錯とを細かく顧慮しなければ、或は個別的と概括的或は主觀的と客觀的、或は具體的と抽象的、或は綜合的と分析的等の對立をもそれに數へうるであらう。

5　これらは何れもそれぞれ文藝批評に於ける一側面を取出して一般化したものとも考へられ、したがつて古來の批評論と多かれ少なか

れ交渉をもちうるであらう。

人は古代の一定の原理法則をもつて作品を裁拉し、栽断する批評、たとへば有名なアデイソンの「失樂園」批評——この作品が如何に、どの程度まで、ボッシュエの詩の原理に忠實であつたか、忠實でなかつたかをもつて批評の中心としたものを、批評を一般に享受の外に置いた古風な例と見うるであらう。また作品から、その作品の生れた環境、事情、の檢査に赴き、その作者の家系、性格、遺傳、交友等を明かにすることによつて、その作品の性質を決定せんとする近代の有力な批評的傾向に、またその作品の社會的道德的意義を先づ第一に問はうとする批評に、ともすれば享受を缺かんとする批評の方向を看取するであらう。と共に、他方、批評をもつて作品から受けた印象を記述することとし、或は作者が何を表現せんとしたか、その意圖を如何にどの程度に實現したか、を見んとする近代の批評の一つの主要な傾向を主として享受に向ふ方向として見ることもできるであらう。近代批評論に於ける批評のこの二つの方向、人が或は客觀的批評と主觀的批評とに、或は原理批評と印象批評とに、或は外在批評と內在批評とに對立せしめてゐるこの二つの方向は、或程度までより廣く批評と享受との對立として理解することができるであらう。

しかしわたしはここでは批評の一般的意味、或は如何なる批評が正しいかといふやうな問題を問題としないで、（如何なる批評が正しいかは結局藝術の本質如何の問題となり、藝術の本質如何の問題は結局各自の世界觀人生觀によつて決定せられるものであるから、）ただ先に語つたやうなわたし自身の直接の問題に關聯して、一般的に享受と批評とをその對立の方向に於て如何なる性質をもち、如何なる意味をもつかを、それも問題を殊更に藝術に限ることなく、生の構造一般の反省の上に辿つてみたまでである。

三

しかし、以上のやうな見方からするとき、最近の（主としてこの國に於ける）階級藝術の問題に對しても一つの特異な側面觀をもつことができるやうに思ふ。

知らるる如く、無產階級藝術の主張者達は、彼等の信奉する世界觀による獨自な藝術觀を抱き、その藝術觀の上に、藝術の創作をも批評をももとづけようとしてゐる。

彼等はその世界觀構成の主要な契機を階級對立と階級意識との上に置き、あらゆる文化を——したがつて勿論文化の一形態たる藝術を、全く階級的のものと見てゐる。彼等が批評に於て所謂內在批評に對する外在批評を主張し、それらの批評が一方に於て鋭利で力强いと共に、他方に於て一面性と偏局とをもつのを感ぜしめるのはこれによるやうに思はれる。外に立つものの批評は常に鋭いが、しかしそれは多くの場合公正な享受を缺き易いからである。

思ふに、彼等の立場に立たずとも、藝術が、あらゆる文化と共に、生活のたしかな地盤をもつ限りに於て生き榮え、その地盤を失ふ限りに於て衰へ死ぬのは自明の理であり、その意味に於てわれわれは絕えず生活の諸斷現を省みねばならず、そして生活の諸斷現を最も具體的に省みるためにはその社會的歷史的發展段階に、時代の生きた問題

に、即せねばならぬであらう。—

しかしそれであるからと言つて、われわれはわれわれの生活が常に奥行をもち、上昇をもつものであること、そこに生の多様が、概念的に割り切れないものがあること、むしろ生の最も生であるものはかかる方向に見られること、それは所謂社會的關聯の考察のみからは看取されぬこと、と共に、人間と社會の歷史的轉變に於ても、そのより多く變化する側面とより少く變化する側面とが見られ、そのより少く變化する側面に於ては、たとひ相對的にもせよ、普遍人間性と呼ぶべき一面の存すること、そして藝術はそれらの方面に——いはば「かはらぬ人情」のうちに——常に豐富な所產を約束すべき領域をもつてゐること、を忘れてはならないであらう。*

＊ソヴイエツト・ロシアに於てもロシアの古典的作家達が重んぜられてゐること、われわれ日本人もシエークスピーアの偉大を享受しうること、二千五百年前のギリシヤの藝術が今なほわれわれを魅することを思ひ起すだけでもよい。

しかるに彼等は全くその獨自の世界觀の上のみに立ち、その見地を絕對なものとする。彼等の見方によれば、人が無產階級藝術家と正當に呼ばれるのは、彼が無產階級の見地——その世界觀の上に立つてゐるからで、したがつて、事實上無產階級出身の藝術家であり、またその題材を勞働者の生活に直接取つてゐても、現に勞働と藝術とに半ばづつ仕へてゐても、そのやうな見地、世界觀、の上に立たない限り、眞正の無產階級藝術家と呼ばれがたく、それに反してその出身はどこであつても、その見かたや考へかたがマルクス的世界觀の見地に立つてゐれば無產階級藝術家と呼ばれうるのである。即ち、階級對立と階級意識とを絕對とし、あだかも世界をそれによつて二つに分つたかの如くである。その排擊する階級とそのイデオロギーとその藝術とに對しては全く外に立つてゐるので、彼等はこれを享受することができない、享受することを欲しない。それゆゑ彼等のこれに對する態度は必然に享受を缺いた批評の態度となり、銳利辛辣ではあるが、一面性と偏局とを免れなくなる。

それに反して、傳統の上に成立した藝術社會の中にあるものは、ともすればその中に閉ぢこもり易い、——あらゆるものが生活から生れながらそれ自身の世界をもつや漸次に生活から遊離してゆくあの生の一般性にしたがつて、藝術は藝術のための藝術となり、技巧が最も重んぜられ、その方向に醇化され、微妙化される。したがつて藝術と生の他の諸領域との交渉、關係はともすれば等閑に附せられ、批評も鑑賞享受の方向へのみ向ふ。ここでは外に向ふ廣い社會的關心をもつた批評は生れがたい。これもまた一面的で偏局してゐる。そこまでゆかないでも、一旦でき上つた文藝社會——或はもつと小さく或主張或原理によつて統一された一流派の藝術の世界が、ともすれば享受の方向にのみ赴いて批評の方向を缺くことは明らかである。

しかし思ふに、この場合もまた批評を缺く享受と享受を缺く批評とは、共に正當となしえないのである。

藝術のための藝術の主張者達の藝術がその特異な美にもかかはらず、眞に偉大な藝術でなかつたやうに、一般に生から遊離した、生のより廣い領域への反省——その反省による自己批判、を缺いた藝術は

ともすれば頽廢し、より廣い社會的顧慮のない批評は、藝術の眞の意義を見失ひ易い。それは事實である。がそれと共に、理論的原理によつて世界をその立場からのみ眺めた藝術、個個の内容への參入の足りない、成心なき受容のない藝術は、ともすれば概念化されて藝術の味ひを失ひ、藝術の傳統の遺產を無視する批評は結局藝術の破壞にまで導き易い。

　藝術は生から離れえない。生は常に藝術に養分を與へる。しかし藝術は藝術としての獨自の世界を有する。藝術の藝術としての獨自の世界を認めることは必ずしもその世界の閉塞性を、その世界のみを、認める藝術至上主義を意味しない。その世界を眞に認めることは、その世界と他の世界とのつながり關係を知り、その世界の眞の地位、意味を明かにすることである。しかしとにかく、その世界の獨自の存在を認めることではある。したがつて、その世界の獨自の約束、法則、傳統――それも勿論生へのつながり、歴史的社會的制約をもつたものではあるが――を認め、それに或程度まで從ふことでもある。

　すでにマルクスは言つてゐる。「しかし困難は、ギリシヤの藝術及び英雄詩が一定の社會的發展形態に結合してゐることを理解する點に存するのではない。困難はむしろ、それらがわれわれに對してもなほ藝術的享樂を與へ、一定の點に於ては、規範として、および到達しえざる模範として通用することを、理解する點に存する。」と。これはとりもなほさず、或程度まで時代を超え、社會を超え、したがつて階級を超えた、藝術の世界の存在することを承認したものではないであらうか。――たとひそれに對する彼自身の解答が必ずしも明瞭なものでなかつたとしても。

＊われわれは上述の引用文に續いだ次のやうな言葉だけでは滿足しないであらう。「人は再び小供になることはできない、もしなつたら馬鹿になるだらう。だが小供の純朴は彼を喜ばせないだらうか？彼は再びより高い階段において、その純眞を再生產するために、努力してはならないだらうか。小供のやうな性質の人には如何なる年齡期に於ても、小供の心の特質が、その純眞をもつて蘇へるものではなからうか。人類が最も美しく展びたその社會的幼年期は再び復歸せざる一の階段として永久の魅力を與へない筈はない。躾の惡い小供もあれば早熟な小供もある。古代民族の多くはかかる種類に屬してゐた。がギリシヤ人は小供らしい小供であつた。彼等の藝術がわれわれに對して魅力を有するといふ事實は、それがその上に成長せる社會階段の未發展なことと矛盾するものではない。魅力はむしろその結果である、そしてそれはむしろ、藝術がそのもとに成立し、而もそのもとにのみ成立するを得たところの未熟なる社會的條件が、決して復歸し得ないといふ事實と、不可分的に結合してゐるのである。

人間は歴史的存在として、何らかの仕方に於て、何らかの形に於て、傳來の遺產を相續してゐる限り、文化のさまざまの方面に前代からの持續をもつ筈であり、それから離れられない筈である。文化の一形態たる藝術に於てもそれ故絕對の創造といふことはありえない。模倣ならぬ眞の藝術は、常にいはば非藝術から始められねばならぬとしても、その非藝術は絕對の意味ではないであらう。

もしさうであるならば、無產階級文藝と有產階級文藝とは事實上、い

〈殊に現在の如く、無産階級の生活の地盤が獨自な藝術を生むまでに成熟してゐない時期に於ても〉つながりがあり、この二つの峻別はむしろ藝術内に於いてはさまで重大な區別をもつてゐないとさへ思はれるほどである。

しかも彼等はそのやうな藝術の獨自の領域を認めないで、藝術を全く一の手段とし、無産階級をさまざまの無産階級のための行動に驅り動かすところのものを見ようとする。彼等にとつては藝術は單なる批評であり、宣傳である。――いふまでもなく、あらゆる藝術――殊に觀念の自由な表出をもつ文學は殊に、人生の批評でもある。偉大な藝術家は世界に對して何らか一定の見解をもち、その見解を表現の上に反映してゐる。とはいへ、それは決して生な概念としてではない。いはんやそれは決して宣傳を目指されてはゐない。たとひそれらのあるものが――或は彼等のいふ如くすべてが――一種の宣傳の役目をしたにせよ、それは結果としてさうなつたので、意圖としてさうされたものではない。結果を意圖に還元するのは、意識と無意識との混同であり、藝術に於ける、不合理的、衝動的、狂氣的、な要素を無視するものである。――ここに彼等の世界觀全體を特色づける合理主義の、藝術觀への反映が見られる。

そして合理主義の方向は享受を缺く批評への方向である。

泥沼に陷沒した「プチ・帝國主義」者

——高橋龜吉氏の駁論(?)を笑ふ——

猪俣津南雄

一　何が「駁論の駁論」か

(1)　鎖夏の讀物

『左翼帝國主義理論の自殺』と題して本誌前月號にあらはれた高橋龜吉氏の文章は、先づ、『坊間傳ふるところに依ると、今度左翼側から私(高橋氏)の小論に對して駁論せられるについては、左翼陣營の理論家諸君が會合して研究せられ、而して、誰れがその駁論の擔任者になるかと云ふことも色々詮議せられて、猪俣氏が其の任に當られたと云ふ』『噂さ』を報導して(五〇頁)それを、『錚々たる左翼理論家の諸君が、轡を揃へてその駁論を發表せられた』(四九頁)といふ、氏にとつては貴重な事實と衝突せしめ、此の憐れむべき理論家共に敎ふるに、「帝國主義といふ概念は……例へば、學校と云つたやうな種類に屬するものである』(五四頁)ことをもつてし、就中、『帝國主義に對する造詣の最も深い學者として著名である』(五〇頁)とかいふ猪俣が理解する帝國主義には、『世界規模のもの、東洋規模のもの、一國規模のもの』があることを指摘、嘲笑し(五五頁)、『一國の帝國主義國』はあるが『一國の帝國主義』はあり得ないと切言し(同上)、また、或は讀者をして『第三インタナショナルの大會』で帝國主義を論ずる高橋氏その人を想見せしめ(五六頁)、或は讀者の爲めに『論理學上謂ふ所の ignoratio elenchi』とは『即ち論點不知』なりと講じ(六六頁)、『ペダン的である』と頻りに猪俣を叱り、果ては『、、、、、、、の快味』を說き(同上下段)、『現に世の中に實在する社會に於ては、マルクスなどの、資本主義理論や、帝國主義理論(??)に現はれてゐるが如き、單純な資本主義國もなければ、帝國主義國(!)も無論ない。斯の如きことは、この種の實際問題に初歩的な關心を持つ誰れでもが常に心得てゐることである』と絕叫し(六九頁)、かくして遂に『左翼帝國主義理論』を『自殺』(!)せしめたものである。およそ高橋氏の此の長論文を通讀したほどの根氣ある者は、あの八月號に滿載された「鎖夏の讀み物」の一つとして誠に絕好であることを疑はなかつたであらう。すくなくとも、畢竟、鎖夏の讀み物以外の何物であるといふのか?

も私は、氏の「駁論の駁論」によつては何一つ教へられなかつたことを茲に卒直に告白する。

(2) 蘆原將軍の一味?

氏の論文のサブタイトルには『猪俣其他左翼理論家諸君の駁論の駁論』とあり、論篇の第一節の小みだしは『猪俣氏一派の駁論の構へ方』とある。即ち、本誌六月號の拙稿『資本主義日本の帝國主義』は、私が高橋氏に對してなせる駁論と見做されてゐる。駁論したといふからには、それに先立つて私は高橋氏によつて批判されてゐなければならない。だが、高橋氏は、氏の自殺論以前の如何なる論文の如何なる箇所において私を批判したことがあるといふのか? 批判されたことのない私が、駁論し得る筈もない。此の論爭における批判は私に始まるのである。

高橋氏は、『日本資本主義の帝國主義的地位』(太陽四月號)その他の論文において、しば〳〵「左翼理論」なるものを「批判」したつもりでゐた。そして此のつもりは、「左翼理論」なるものに對する完全なる無理解に基づく獨よがりに過ぎない。氏が「批判」の對象としたつもりでゐる「左翼理論」なるものは、世界無產階級運動のいづこの左翼もあづかり知らぬ「理論」であり、まして私の知る所ではない。だから私は、本誌六月號の拙稿において言つた――

即ち、氏は、「左翼理論」なるものを評し、それは、『現に日本の資本主義が「資本主義最後の段階としての帝國主義」にまで發展したるが故に日本の資本主義が崩壞に直面する』となすが故に「直譯」であると難ぜられたのであつた。さうした珍奇な左翼理論なるものを、一氏が氏の混亂せる頭以外の何處から引出して來られたかを知るの自由は吾々はあひにく氏によつて毫も與へられて をらない……(六五頁)。(更に私は、八月號「社會科學」の拙文「我國資本主義の現段階の問題」においても右の點を力說して置いた。)(四〇四―四一二頁)

更にまた、如何に高橋氏が、氏の謂はゆる「左翼理論」に無理解であらねばならぬかは、「資本主義の崩壞」といふ容易ならぬ概念が、氏の頭腦の一角において演じつゝある亂舞のさまを瞥見しても知れやう。氏は、『私(高橋氏)は日本の資本主義が已に行詰り、崩壞しつゝある(!)ことは、いち早くこれ迄幾度か實證(!)して來た』と述べた言葉の直ぐ次ぎの行で、『日本の資本主義がそれ自身の崩壞に直面するに至つた』と言ひ(太陽四月號三頁)、同じ論文の終りにおいては『私のいち早く主張し來れる如く、それはいま徐々ながらその崩壞に直面してゐる』(三四頁)と說く。現に崩壞しつゝある、にも驚くが、同一の事實が、こんなに幾つにも見えるのだとすると、高橋氏の頭腦こそが『いま徐々ながらその崩壞に直面してゐる』のではないのか?――實際、氏の頭の何處かに「左翼理論」の案山子をつくりあげ、或はそれを批判し得たとなし、或は「駁論の駁論」においてそれの自殺を口走つて意氣揚々たるやうな氏が、人をして、「蘆原將軍」の一味なるやの感を抱かしめなければ不思議であらう。

二 高橋氏は何故泥を投げたか

(1)　レニニズムの一發展しての主戰論（！）

筆者知らず、出所知らず、えたい知れずの「左翼理論」を「批判」せんとした高橋氏の論文はしかしながら、十分な理由から、徹底的に批判さるゝに價した。その理由を私は、私の批判（本誌六月號拙稿）の序論において兩面より述べて置いた。その一面は、帝國主義ブルジョアジーと鬪爭する無產階級運動は如何に指導さるべきかの問題にかゝはるものである。私の批判の重點は、高橋氏によつて提起された此の問題、わけても氏がそれに與へた解答の上に置かれた。

高橋氏は、如何なる指導方針を主張したか？　氏は、我國の無產階級及び被壓迫大衆の運動を、支那におけるが如き反帝國主義運動に導けと主張する（太陽四月號三三頁、七—九行。社會科學四月號一四四頁十四行—一四五頁四行）。しからば、反帝國主義運動に導けとは？　それは、我國の無產階級及び被壓迫大衆をして、自國のブルジョアジーの搾取より自己を解放するに先立つてまづ、外國の帝國主義ブルジョアジーの搾取より自己及び自國のブルジョアジーを解放する爲めに戰はしめよといふにある（太陽四月號四頁七行—一〇行）。此の場合の外國とは何か？　それは、米國であり、英國であり、佛國である（同上三三頁三行—四行。社會科學一四五頁四行）。言ひ換れば、我が無產階級及び被壓迫大衆の當面の任務は、自國のブルジョアジーその他の支配者群と協力し、英米佛に對する戰爭を敢行することにある——これが高橋氏の見解である。

では、此の見解は、高橋氏一個の獨立の見解であるか？　氏によればそうではない、それは實にレーニンの理論の一發展である。レーニンは『被帝國主義國（即ち植民地や半植民地諸國）における國民運動乃至民族運動が、帝國主義の打破と如何に密接な關係にあるかを洞察』し、『斯樣な被帝國主義國の民族運動、國民運動に、極力支持與ふべきことを力說』した。しかるに、日本は伊太利の如き「プチ・帝國主義國」であり、かゝるプチ・帝國主義國たる日本の利害は、『英米等の帝國主義國と一致する所よりも、却つて、支那、印度其他の被帝國主義國と一致する所の方が遙かに大である。』（四月號太陽三四頁）。即ち日本の無產階級運動は、植民地國半植民地國の民族運動の性質を有し從つて反帝國主義運動にまで展開せしめねばならぬ。——かやうに高橋氏はレーニンの理論を發展（！）せしめた。また、我が日本は、たかゞプチ・帝國主義國に過ぎず、『被搾取國であつて斷じて搾取國でない』（四月號太陽三三頁）といふ認識に到達するに當つても、高橋氏は、帝國主義に關する「レーニンの尺度」（同上九頁）をもつて日本をはかるといふ手續をとつた。が、それだけでもない。日本を見るに當つて『更に重大なことは、レーニン其他の言及から漏れた所の人口問題である。この點は、歐洲人には從來問題ではなかつた所であり、從つて恐らくレーニンなどの見逃した所であらうと思ふが』（四月號太陽三一頁）、此の『人口問題に對する解放的要求こそは、……日本としては（伊太利其他人口過剩に苦しむ國皆然り）之れの解決は決死的に圖らなくてはならない事情に迫りつゝある要求』である（四月號社會科學一四五頁）。『人口問題の解決策は……專ら英、米、佛等の領土の獨占を解放せしむる「解

放戰」に行く外策はない。」『人口戰爭は一の無産階級の解放戰としての色彩の深いものである。』(四月號太陽三三頁)

かくして、わが高橋氏はレーニン以上に出づることを忘れなかつたと同時に、また、常にレーニンの權威において語ることを怠らなかつた。氏は專らレーニンの權威において左翼を「批判」し、『左翼運動の理論的崩壞』を宣言したのであつた。(因に、これは今私が問題にしてゐる高橋氏の諸論文を收めた氏の近著の標題であることを紹介して置く)。

之れを要するに、氏の論文の重點は、帝國主義の現段階に於ける我國無産階級運動の戰略及び戰術の根本方針を示すことにあつた。人口論や、プチ・帝國主義論は、『反帝國主義運動へ!』、『英米佛と戰へ!』といふ氏の主張の論據として役立つたものに過ぎない。そのことは、高橋氏自らの反覆强調してゐるところである。

(2) 私は如何に批判したか

私の批判の焦點もまた、かくて、當然に氏の根本主張の上に置かれねばならなかつた。で、私もまた私の小論の序論をばこの問題の重要性の强調に捧げ(本誌六月號六〇—六二頁)、結論に當る部分(「無産階級の任務」及び「結語」八〇—八三頁)の數頁をば、高橋氏の根本主張に對する直接の批判にあてたものである。

で、高橋氏にしてもし、眞に私を駁論せんと欲し、また眞に私を駁論し得るのであつたら、他の如何なる論點を措いても、先づ、此の部分の批判——氏の根本主張に對する直接の批判——をこそ駁すべきであつた。之れの駁擊に力點をおいてこそ、「駁論」は駁論たり得たであらう。しかるに、——しかるに、氏の書いた「左翼帝國主義理論の自殺」(改造)と、「左翼一派の駁論は何を暴露したか」(太陽)と、併せて五十七頁にのぼる長大なる「駁論の駁論」において、氏は、たゞの一行をもそれに費してをらない。——氏は、いつたい、何の爲めに、何を長々と書き散らしたのであるか?!

では、私は如何に批判して置いたか? 氏が飽くまでもレーニンの權威において語らんとしてゐたが故に、私もまたレーニンに行くの當然なるを思つた。そして、レーニンが氏とは全く正反對の見解と主張との持主であることを、氏の論點の一々について示した。

一、高橋氏の直覺の鋭どさにも拘らず、レーニンは、事實、「伊太利の帝國主義と社會主義」なる論文において、多くの數字まであげて伊太利の「人口問題」——歐洲人の「人口問題」——を論じてゐる。

二、彼れはまた、伊太利を、形容句抜きで、帝國主義國なりとする。そして日本は、帝國主義强國であるとした。

三、周知の如く、伊太利の「人口問題」は、日本の「人口問題」よりも遙かに「惡化」してゐた。そして伊太利の國民主義者、排外主義者、「愛國的」社會主義者——コラディニ、ラブリオラ、等、等——は、恰もわが高橋龜吉氏の創意を横奪し先取せんとしたかのやうに、我が伊太利の無産階級は、伊太利の解放の爲めに、英、米、獨、佛と戰ふべきであるとなし、「反帝國主義運動」を高唱してゐた。もし日本の高橋氏今日の主議論か、レーニンの理論の正しき論理的歸結であるのならば、氏の伊太利の同志ラブリオラ等の主張に對しては、レーニンは滿腔の贊

意を表してゐた筈である。然るに彼れは、さうしたことを憶面もなく主張する彼等こそは、「勞働者の陣營内におけるブルジョアジーの、、、」であると罵倒した。

四、またもし、高橋氏の言ふが如くプチ・帝國主義國の日本の「人口戰爭」が、『無產階級の解放戰』であり得るものならば、プチ・プチ・帝國主義の伊太利の「人口戰爭」は、尙更らさうであつたであらう。然るにレーニンは言つた、「人口問題の爲めに戰爭せよ、それが諸君の解放への道だ!」とは、、、、、、、、、、、、、言ふことであり、彼等がさう言ふのは、「我々の、、、、、、の爲め、我々の、、の特權と優先權との爲めに戰爭せよ」とは言へないからである、、、、、、、、、、の支配下にある無產階級の運動を指導する者が、「故意であれ過失であれ、」何かの理屈をつけて無產階級を戰爭に導かうとする時、彼等は事實において、、、、、、、、、、、、、、、、、を防衞してその食客となり、從僕となるのである、と。——で、高橋氏がその權威の下に語るところのレーニンに依れば、帝國主義國の「人口戰爭」は、たとひその國がプチ・プチでも帝國主義國である限り、絕對に『無產階級の解放戰』とはなり得ない

五、更にまた、高橋氏の强調するが如く、今日の日本は『被搾取國であつて斷じて搾取國でない』としたら、伊太利は尙更らそうであつたであらう。そして、一の帝國主義國が他の帝國主義國に搾取されてゐるといふことが、それほど强調に價するとしたら、レーニンは伊太利については何倍にか强調し得た筈である。だが、彼れは、高橋氏とは正反對のイデオロギーをもつてゐた。彼によれば、他國よりも多く搾取せんとする帝國主義ブルジョアジーの立場からすれば、自國よりも多くの植民地、多くの資本、多くの軍隊を有する國は、みな、自國を搾取してゐることになる——自分の搾取し得べき分を奪つてゐると言ふ意味において。が、自分が現實に搾取してゐることの方は全く問題としない。しかるに、現實に搾取される一方の無產階級——帝國ブルジョアジーの支配下にある——の立場からすれば、自國が如何なる國によつて如何に搾取されてゐるかは全く問題でない。問題は、反對に、自國のブルジョアジーによつて、、、、、、、、が如何に搾取されてゐるかにある。自分達と同樣に搾取されてゐる彼等こそが、同一の搾取者に對する共々の鬪ひにおいて、眞に自分達の戰友であり、自身の解放戰における信頼すべき援軍であるから。

六、即ち、高橋氏が極力强調する通り、「民族運動、國民運動を支持すべきことを」、レーニンが極力强調したのは、あひにく、「プチ・帝國主義國」におけるさうした運動のことではなく、如何なる意味においても帝國主義國でない國における運動を指してのことである。帝國主義國においては、プチであれ其のまたプチであれ、言葉の正しき意味における民族運動、國民運動は斷じてあり得ない。あるやうに言ふのはまがひ物、喰はせ物である。——そして以上の見解は、階級を階級として、資本主義を資本主義、帝國主義を帝國主義として、しつかりと把握した者——レーニンの如き——が、當然にもたねばならぬ見解である。さやうに把握し得ない者だけが反對の見解に立つ。

(3) 泥沼に陷沒す

讀者諸君、私は、高橋氏に敬意を表し、特にレーニンの言葉を引用しつゝ、右の諸點を昂揚して置いたのである。そして恐らく、氏の根本主張の救ひ難き誤謬の指摘として、從つて氏のプチ・帝國主義の議論全體の顚覆の證明として、これくらゐ端的な、適切な、また徹底的なものはあり得なかつた。氏にしてもしさきに揚言せるが如く、『若しも、私（高橋氏）の考が間違つてゐると云ふことが分れば、私は、少しの躊躇もなく左翼の軍門に降る』といふ勇氣さへを持合してゐたならば、八月號改造及び太陽に發表された氏の文章は、折柄の銷夏號に「錦上花を添へる」底のものである代りに、自己の誤謬の率直な認識――どんな人間にもあり得る過誤の男らしき承認に出發し、新しき基礎の上に新しき議論を展開したものであつたであらう。

だが、プチ・帝國主義者そのものゝように仰々しい法螺鐵太鼓を打鳴らし吹立てゝ『左翼の軍門』を逆襲するかに見せかけたあの「駁論の駁論」において、何故に氏が論爭の焦點に觸れるを恐るゝこと處女の如くであつたかの理由もまた、今や全く明かではないか。明かに――吾々の批判を讀了したプチ・帝國主義者は、餘りにも意外な自分を見出したのである。それは泥沼に落ち込んだ自分であつた。彼れの兩脚は早や餘りにも泥深くはまつてゐた。だがしかし、降伏の自認は、將軍一代の恥辱でなければならぬ。さりとて、答へざるもまた、屈服を裏書きする。悶ゆる者に惠みあれ、窮餘の一策が胸に浮ぶ――、批判者共に泥を投げろ！

かくして、駁論の爲めの駁論は書かれた。しかも泥まみれに！　なぜであつたか？　狼狽者の泥は天に向つて投げられた。しかも彼れは、動ぜぬ者のように大きくそり反つてゐた。

(4)　虛勢の破綻

虛勢の破綻は、隨所に見られる。

（例一）氏の論文の小みだしの一つ『所謂帝國主義「世界範疇論」のコケ嚇し』は、嚇しもせぬに嚇かされたことの自己告白である。

（例二）『氏（猪俣）は先づ「藪蛇の恐れでもあるかのやうに」（此の言も、氏（猪俣）が、私（高橋氏）に見當違ひにも下さつたものであるから、いま氏の必要に際して返上致す）』（改造八月號六二頁）とは、いつたい、何のことか？　あわてなさるな、「藪蛇の恐れ」などいふ文字が、私の論文の何頁何行にあるといふのか――。これこそは絶好の懸賞字探しもの。そしてそれこそが「藪蛇」といふものではなかつたか？

（例三）讀者諸君は、高橋氏の八月號改造の論文の五五頁上段を一讀あれ。――高橋氏は、茲で六月號の私の論文の七十五頁にある言葉二行ほどを引用し、『こゝに讀者の先づお目に止められんことは』と手品師の口上を使ひ、さて、猪俣はそう言つた『その舌の乾はかない裡に』、もうこんなことを言ふのだといつて、私の論文の六十四頁から四行ほどの言葉を引いてゐる。「想ふても見よ」、七十五頁で言つた『その舌の乾はかない裡に』、その十一頁も前に言つたことが言へるものか、言へないものか。が、高橋氏の言ふことが愉快である。――『それで猪俣氏の頭には矛盾も何もなくして分つてゐるらしいが、私には一寸も分らない。皆さん、猪俣氏の仰言る意味が御分りになりますか』と。

分らない筈ではないか、——氏が手品のしくじりをしたといふことのほかは。

（例四）前の論文で高橋氏は、レーニンが明治時代の日本について言つた言葉を引用し、『日本が今日（一）資本の輸出國でなく逆に輸入國であることは、レーニン自ら之を明言してゐる』と唱へてゐた。私は六月號の拙稿で、さういふ貴重な『高橋氏の發見を見落すことは公正を缺く』（七二頁）と言ひ、それをうけて大ぎの頁で、『だが、讀者よ、不機嫌な顔をし給ふこと勿れ、それらの（日本の「國際的地位」に關する高橋氏の澤山の）數字たるや、これほど公正を重んずる私にさへ、最早や眞面目に取り上げて見る勇氣を起さしめないほどに、云々』と言つた。此の「公正を重んずる」がアイロニーである位のことは、ラテン語などを自由に引用するほどの博學者高橋氏に解らない筈はない。しかるに氏はそれを、『しかも氏（猪俣）は「これほど公正を重んずる私」と自稱せられてゐる、云々』ともぢり、如何にも私が眞面目腐つて公正を自負してゐるかの如き印象を讀者に與へやうとしてゐる。こんなアイロニーの逆用も、時には愛嬌で惡くない。だが、その「公正」を五六遍も重用するのでは、氏は、ちと公正を重んじ過ぎはしなかつたか。

狼狽がさせたのか、狡猾がさせたのか、それは見やうであり、取りやうであらう。が俚言の一つに、「蛙は口から呑まれる」といふのがある。高橋氏は、氏の長論文の始めの方で、『斯樣なわけで、いま猪俣氏の駁論（一）は、單なる氏一個の研究論文ではなくして、我が無産階級左翼運動の理論として、多分に實踐的意義を持つてゐる。こゝに、猪俣氏の駁論に對し、我が無産階級運動は、假借なき批判を要求せざるを得ないのである。以下私の猪俣氏に對する駁論が、行文の綾に紛れて（?!）甚しく禮を失する場合があらうとも、右の如き意味に於て、何卒寛容せられんことを、豫め執筆者諸氏に御願ひする』と述べてゐる。此の切口上は、二つの點で興味をそゝる。無産階級運動にとつての多分の實踐的意義の故に、無産階級に代はつて、假借なき批判を、私に向けやうといふほどの氏なればこそ、實踐的意義の最も深く直接的な、無産階級指導方針の爭點、反帝國主義運動の爭點に對しては、口をあけるさへ恐わいといふのか。また、『行文の綾に紛れて』とは何か。「文書僞造」みたいになることか。とにかく、餘りに紛れ過ぎてゐる。

だが、「何卒寛容せられんことを」氏が乞はねばならないのは、私に對してではあるまい。氏の自我と、氏が代辯せる無産階級とに對してゞなければならぬ。そのことは、問題の重點を回避した氏が、如何なる點を如何に捉えて「駁論」を書いたかを學び知るにつれ、ますます明白となつて行く。

三　「プチ・帝國主義」者の諸幻想

(1)　溺るゝ者の摑んだ藁

わが親愛なる高橋氏は、氏が駁論し得ると感じたでもあらう六つの論點を拾ひあげた。その一つは、私の論文の中の大ぎの一句である——『高橋氏の思考における根本缺陷の一つは、資本主義が資本主義として、階級が階級として把握されてゐないこと、從つて諸多の矛盾と

對立とがぼやかされ、まやかされてゐることにある』(拙稿八一頁)。此の一句、——それが、溺るゝ者の摑んだ藁であつた。

氏は、右の言葉だけを拔き出し、その前後の文章から全く孤立せしめ、氏の反駁の用に供さねばならぬ。そこで氏は、それを引用した直後に何と言つたか。曰く、『斯くて、氏(猪俣)に由ると、いま、われ〳〵が日本といふ具體的な客觀的條件の下に於て、無產階級運動の實踐的政策論を硏究する場合に於て尙ほ、抽象的に、槪念的に單純化された資本主義論や、帝國主義論を、何ものにも制約せられずに、之をその理論のまゝに發展さすべきである、然らざるものは、誤謬だといふことになるらしい』と。何で、そういふことになるらしいのか、それは無論、氏の明言する限りではなく、また明言し得る所ではない。私はそれに對し、たゞ事實をして答へしむれば足る。(一)私はその一句を書き下すに先立ち、十四頁以上に亘つて極めて具體的に「我國資本主義の現段階」を分析し、我國帝國主義の歷史的發展を述べてその新しき段階の特質を明かにし、「無產階級の任務」にまで及んでゐた。(二)私は更に、右の一句に始まるパラグラフにおいて高橋氏の安價で甘やかな資本主義崩壞の理論に論及し、つゞいて氏の全議論の核心であるところのプチ・帝國主義者的主戰論に對する批判に進んでゐた。そして此の批判こそは、私が本稿の前段において改めて展開しつゝ指摘した通り、高橋氏の遂に答へ得ざりし所のものであつたのである。

(2) 階級對立の解消

では、私は、高橋氏の如何なる思考において、資本主義が、階級が、矛盾對立か、明確に把握されてゐないと評したのであるか。それは、實踐的、具體的な問題の解決、政策の樹立に關する氏の思考においてのことである。ではまた、何故そう言つたか?

第一、氏のスローガンたる「日本の無產階級は英米佛と戰爭せよ」は、プロレタリアートとブルジョアジーとの對立を解消して兩者の協調を實現せしむるものだからである。かゝる協調の結果は、必然的に、プロレタリアートをしてブルジョアジーを支持せしめ、ブルジョアジーの指導下に立たしめずにはおかない。尤も、「私は敢てブルジョアジーと協調せよ、ブルジョアジーを支持せよ」とは言はぬと高橋氏は辯解するかも知れない。だが、その辯解こそが、階級關係のぼやかしと、まやかしを、暴露する。氏は、我が無產階級をば、、、、、、、、、、、、、、よりなる、、、、、、、、、、、せしめずして、しかも英米佛と戰はしめることが、如何に可能であるといふのか? かゝる戰爭と、その一切の準備とにおいて、前者が後者の指導下に立つことなしに、かゝる戰爭の遂行と、其の一切の準備とが如何に可能であるといふのか。今何づれの階級の手に國家權力があり、兵馬の統帥權があるといふのか。

(3) 日本ブルジョアジーの方向轉換

幻想に富める高橋氏は、頻りに、我國無產階級の「解放」の戰爭を口にしながらも、ひそかに(しかも十分に?)、かゝる戰爭が事實上帝國主義の戰爭となるべきことに氣づいてゐる。そこで氏は、日本といふ一社會からその內部的階級的對立並びに現實の支配服從關係を抹殺

し去り、たゞ單なる「日本」といふ言葉で語ることによつて、氏の解放戰爭論の辻褄を合せねばならぬ。で、氏は曰ふ、（猪俣註、下の引用文中、括弧に入れた言葉はみな私のもの）――我が無産階級は、（我が、、、、、、、、、、、支配下のある）「日本」をして、『その地位の寧ろ、被帝國主義國の利害と一致することを自覺せしめ（！）、彼れ（日本）が被帝國主義國として反帝國主義運動に努力することに由つてのみ、彼れ（日本）の解放は所期し得られることを理解せしめ（！）、以つて、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、に努力する方向を、帝國主義倒壞（即ち先づ英米の帝國主義倒壞、進んで全世界の帝國主義倒壞）のために轉換（！）せしむることに主力を注がねばならない』（太陽四月號二五頁、社會科學一四四頁一一行）。即ち、手短かに言へば、我が無産階級は、現に支配者階級たるブルジョアジーを、かやうに自覺せしめ、理解せしめてもつて、ブルジョアジーの帝國主義政策をば、彼等の滅亡を意味するところの、帝國主義倒壞の政策へと、「方向轉換」せしめ得る（！）と、高橋氏は信ずる。果して然らば、此の甘まやかな空想のうちに、階級がその本質において把握された形跡を爪垢ほども認め得る者があらうか?! 吾々はたかだか、讀者諸君と共に、今や『コケおどし』の鎧に身を固めた高橋將軍を先頭とするプチ・ブルジョア群を前衛に、無産階級本隊これに續き、後衛としては、、、、、、、、、、、、、、がヨチヨチとついて行くところの、破天荒な世界解放十字軍の雄々しき隊伍を想ひ浮べて微苦笑するの機會を與へられるに過ぎない。

（4）　資本主義の自然消滅

ブルジョアジーの「方向轉換」に關する高橋氏の空想に、竝する氏のいま一つの空想に基礎づけられてゐる。即ち、我國資本主義の「行詰り」、「徐々ながらその崩壞への直面」――言ひ換れば其の自動的崩壞、從つて生ずるブルジョアジーの自滅、（＝資本家的機能の喪失、總破産）、從つてまた社會主義的秩序の自生的な成立、これである。言ふ迄もなくそれは、プチ・ブルジョア・イデオロギーの一典型であり、これに對しては、私は最近の二三の拙稿（中央公論七月號、社會科學八月號、等）において既に批判を加へておいた。尙ほ機會ある毎に加へるであらう。

また、氏の二つの空想は、恐らく、次ぎのやうに結びつけられてゐる。――日本のブルジョアジーが既に自然往生への途上にある以上、我が無産階級は、彼等との鬪爭などに骨折らずとも、餘生みぢかき彼等にはその運命を說き聞かせ、佛心を起さしめ、帝國主義的獨占、領土併合の慾念を斷たせることが出來る。そして無産階級は、世界解放戰の手始めとして英米佛と戰ふに當り、我が帝國主義ブルジョアジーにかく敎ふれば足る、――吾々はいま戰爭する、しかし君達はその機會に利潤をあげるのではない、我々の勝利を君達の資本の海外膨脹に利用するのではない、我々は解放の爲めに戰ふのだから、と。そこで發心したブルジョアや文武の國家官僚は珠數つまぐつて法に歸依する――。噫！　たゞ、此の昭和の聖代の清盛が搔き合す黑染の袂からは、コケおどしならぬ緋おどしの鎧がのぞかないといふのだ!!

(5) 高橋十字軍の陣容

が、それにしても、吾々は、高橋十字軍の机上戰術の一發展を見落すならば『公正を缺く』。それは國際戰線への展開である。「駁論の駁論」においても氏は、『或る一國の特殊事情を研究する第二の視點は、一國内における敵陣の形勢と味方の狀勢とである。』といち早く主張し、『更に、インタナショナルの客觀的條件をも考慮に入れるべきや云ふ迄もない。』(一五七頁)と明記してゐる。(但したゞそれだけ)。前の論文においてはまた、『英米佛等の領土の「獨占」を解放せしむる「解放戰」に行く外に策はない。即ち、支那其他、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、世界の帝國主義の倒壞運動を熾にし、全世界を人類のために解放せしむる方向に行く外に策はないのだ』とある。では、此の『世界の帝國主義の倒壞運動を熾に』するに當り、當の英米佛に於ける被搾取階級とは手をとらないのか？　さあ…？　此の關聯において氏が如何に階級を把握してゐるかは、次ぎの言葉から察するより外はない。曰く、『現に、我が輸出の大宗たる生絲にしてからが、その輸出に於て、それの勞働者は外國に搾取されてこそゐるが、(云ふ心は、その勞働に値する人間なみの報酬を外國消費者は支拂つてゐない事實を指す)』(猪俣曰ふ、括弧の中も高橋氏の言葉)。

茲に外國の消費者とは、勞働者大衆を含まねばならぬ。從つて米國其他の無産階級は、日本勞働者階級にとつての搾取者でなければならぬ。(何と憐むべき搾取者よ！)。何人にも增して實踐を重んぜられる高橋氏は、「眞理」の教へる所に從ひ、必ずや聲を大にして我が無産階級に說かれるに違ひない、——「彼等もまた君達を搾取してゐるのだ！」。また、もちろん、その意氣でなくて、どうして英米佛と戰はしめることが出來やう。そして、それも決してむづかしいことではない。一の職業と他の職業の勞働者、一の産業部門と他の部門の勞働者、一國の勞働者と他國の勞働者とを、割りがいゝ、割がわるい、搾取してゐないと說いて互に敵視せしむやうな指導者こそは、あらゆる支持を、、、、、、、、期待し得るのである。だが、かくして「萬國の勞働者團結せよ」は、無雜作に屑籠へ投げ込まれる。

しかしまた、吾々は、高橋氏が『勞農露西亞とも手を握る』べく、それこそ「第三インタナショナルの大會」へのはるばるの旅にのぼられるであらうことを、忘れてはならない。そして、例へば飄輕なブハーリンなどが手をさし延べて言ふであらうことを、——「ウエルカム！　同志タカハシ。我々ボルシエヴイキは、日本ブルジョアジー方向轉換の指導者としての君に全幅の信頼を置く。」

さう單純に行かぬのは支那である。支那の解放運動は既にその發展の第一段階を終り、國内的階級對立はいよいよ尖鋭化し、民軍左翼に指導される支那大衆の鬪爭力の前に自身の地位を脅かされて來た支那ブルジョアジー(蔣介石に代表される)は、支那軍閥との妥協を通して帝國主義ブルジョアジーと握手した。從つて、今や、支那民族の打倒帝國主義の運動は、ひとり支那無産階級の力によつてのみ徹底的なものとなり得る。唯だ支那無産階級のみが、反帝國主義運動を徹底せしめ得る。ひろく解放運動の見地からしては、支那にはもはや單なる支那であり得ない。わが高橋氏が手をとるのは、支那のブルジョアジーか、プロレ

タリアートか？ プロレタリアートではあり得ない。何故なら、氏は、人口問題を『解決するために、資本主義の基礎においては、戰爭以外にいかなる方法があるであらうか、』（社會科學一四二頁）といふ意氣組で、英米佛を向ふに廻すのである。資本主義の基礎において「日本」が戰つて勝つ爲めには、その資本主義を強めるより外に道はない。如何にして強めねばならぬか？ 日本の資本主義がとり得る唯一の方法は、、、、、、、、、、、等々の維持であり、擴大である。戰爭には鐵が要る、石炭が要る。綿が要る。英米と戰ふ時、それを、、、、、何處から取つて來れるか。しかるに――プチにせよ何にせよ――帝國主義日本のそうした、、に對してこそ、、、、、、、、、、は闘ふのだ。能く英米と戰ひ得べく、我が資本主義、、、、喰ひ込まさうとすれば、高橋氏の手は自づから、、、、、、、、、手を握らねばならぬ。そして、手をとつて、、、、、、、、、を抑へねばならぬ。――で、いつたい、誰れが、何を、解放するのであるか?!（現下の支那における階級對立と帝國主義的對立との交錯を究明した小稿を、私は、九月號太陽に寄せて置いた。併せ讀まるれば仕合せ。）

(6) プチ・帝國主義者

高橋氏が日本プロレタリアートに強ひんとする「解放戰爭」の觀念は、日本と全く正反對の立場にある支那の解放運動の類推から生れ、しかも極めてルーズな類推から生れたものである。だから、今ま見た如く、少しでも具體的な分析にかけて見よ、一とたまりもなく崩壞する。支那では、資本主義がまだ幼弱で、從つてブルジョアジーも弱い。支那は如何なる點でも帝國主義國ではない。反對に、典型的な半植民地國であり、帝國主義諸國によつて、政治的經濟的に、直接に搾取されてゐる。だから、支那プロレタリアは、國際プロレタリアの支持の下に、自國内で、プロレタリア的方法により、資本主義の沒落期の特殊の帝國主義的對立を利用しつゝ、成功的にそれと闘ふことが出來、從つてその闘ひによつて自己を強め、直ちにそれを自國のブルジョアジーに對する闘ひに結びつけることが出來、またブルジョアジーの支配の確立に先立つてプロレタリア支那をも實現し得るのである。然るに日本は、發達した資本主義國として、押しも押されぬせぬ帝國主義國として、ブルジョアジーの支配下にあり、人口數千萬に上る植民地を有し、、、、、、、、、、、込んでゐる。「日本は搾取されてゐる」といふ高橋氏の主張が假りに正しいとしても、その搾取は氏自身の言ふ通り間接的な何物かに過ぎない。此の日本が英米佛と戰ふことが無産階級の「解放戰」であるなどゝは、「資本主義を資本主義として、階級を階級として把握してゐる者」の口から聞ける言葉かどうか。明確に摑んだ理論を、具體的な分析に適用し、正しく特殊を捉へてもつて行動への案内たらしめ得る者の口から聞ける言葉かどうか。氏の思考方法が如何に觀念的であり、公式的、機械的であるかは、此の粗大な類推、「解放戰爭」の白晝夢のみでも證して餘りあるではないか。

「解放」の美名を刻めるメタルは、高橋十字軍の將卒の胸から剝ぎ取られねばならぬ。彼等の戰ひは、英米佛のプロレタリアートを敵とし、支那プロレタリアートを敵とし、從つて勞農ロシアを敵とし、、

、、、、、、、、、、、しかも我がプロレタリアートを帝國主義ブルジョアジーの祭壇に捧げるものである。それが帝國主義戰爭でなくて何であらう、そして。プチ・ブルジョア的夢幻に躍動して帝國主義の泥濘に飛び込んだ我が高橋龜吉氏、——彼こそは、プチ帝國主義者でなければならぬ。

明記して置くが、吾々が高橋氏のプチ帝國主義的主戰論を批判し粉碎せねばならぬと感ずるのは、決して理論的遊戲の好題目としてではない。また、戰爭それ自體がいけないといふ「平和論」の立場からではない。また單に、帝國主義戰爭は有らゆる犧牲を勞働大衆に强ひるからといふ一般的理由からでもない。理由は、遙かに特殊具體的な、しかも當面の事柄に存する。（一）『わが無産階級がます〱明確なる意識の下に政治鬪爭の段階に進出せんとしてゐる時、恰もその、更に格段なる意識化を强要するものゝ如く、我國の帝國主義は今や、わが無産階級に、果敢なる「對支非干渉運動」を遂行すべき任務を、現實に課した』（拙稿六〇頁）からであり、（二）謂ふ所の政治鬪爭が今や、政治的自由の獲得に向けられねばならぬ時、高橋氏の說く如き主戰論こそは、必然的に、政治的自由の放棄を强要して止まないからである。

四　人口問題の陷穽

(1)　レーニンの漫畫化

泥沼にはまり込んだ高橋氏が、批判者の批判に答へ得ぬ悔やしまぎれに、批判者の言葉を彼れの論旨と無關係なものに歪變して引用し、手當り次第に泥を投げて凱歌をあげる狂態は、行人をさへそゞろ憫隱の情を起さしむる底のものがある。

高橋氏が熱愛する日本帝國の、ブルジョア政治家、學者等によつて近來さも新しげに擔ぎ廻されてゐるところの新しくもない「人口問題」こそは、氏の胸に殉教者の血を燃え立たせ、氏を驅つて帝國主義十字軍の先頭に立たしめたものである。私の批判は、當然に、此の「解放」戰爭論の一根據としての、氏の「人口問題」の把握に向けられた。私が批判の一點としたのは、氏が、人口問題なるものと、プロレタリア解放との間の或る必然的な關係についての創見を誇負し、プロレタリア解放の指導者、「帝國主義」の理論家たるマルキスト・レーニンも遂にそれに想到し得なかつたと述べてゐる所の、次の名文句にかゝはつてゐた。

『レーニンは、彼れが白人種なりしによるか、兎に角彼れは、人口問題を日本人の如く痛切に感じてゐなかつたと見えて、帝國主義的領土の獨占が人口問題を驅りて戰爭に導くべしとの可能性につき、全く論及してゐないやうだ。我國の直譯的左翼は、日本の（人口戰爭的）立場を全然理解し得ずして、之を非科學的にも漫然と「帝國主義戰爭」と混同してゐる。從つて彼等の之れに對するに挑戰は少なからず混線して却つて、レーニンの精神を失ふものが少くない。』（見よ、玆でも高橋氏はレーニンを眼下に見下しつゝ、しかもレーニンの權威において語つてゐる！）

これに對して私は言つた、『此の、皮膚の檢討に始まつて精神の昂揚に終る一文における、氏によつてのレーニンの漫畫化は、蓋し稀代の白痴であらう。氏は、レーニンに、マルサス（嗚呼、たつた一字の違

ひではある）のガウンを着せてゐるではないか。』と。そして行を改めて、

『氏において全く缺けてゐるところの、人口問題のマルキスト的把握の爲めには、私は幸にも河上博士の近著『人口問題批判』……を推薦する便宜をもつ。』と述べ、

此の一句に始まる十數行の一パラグラフを終つて更に行を改め、

『で、誰れが今ま「非科學的」にも人口問題のワナにかゝりつゝあるのか！』

と言つた。何故言つたか。私はその十數行において、資本主義社會における「人口問題」は今に始まつたことでなく、「人口問題」と「解放戰爭」と「帝國主義戰爭」との關係の問題も、マルキストにとつては新しいどころではない、しかもマルサシアンでなくマルキストたる當のレーニンは、高橋氏とは全く正反對の見解に立つこと本稿の前段に述べたるが如くなることを示したからである。此の批判に答へ得ざる高橋氏は、答へる代りに何をしたか？前掲の、『氏において全く缺けてゐるところの……』といふ私の一句と、『で、誰れが今……』といふ私の一句とを、恰も、後者が直ちに前者をうけてゐるかの如く一文に組合せ、『氏（猪俣）は傲然と云ふ』といふ前置きでそれを引用し、次ぎのやうな惡態をつく。

『斯くの如き素朴な書生論を氏が臆面もなく、堂々と發表せられるところを見ると、氏のナイヴの頭には、抽象され、單純化されて出來上つた「資本主義論」や「帝國主義論」や「階級鬪爭論」が、直ちに、そのまゝ、實在の社會と見えるものらしい』と。

見よ、氏が斯う言つて大きくそり反つたさまを！

(2)　高橋君の匕首

氏の「人口問題」の把握に對する私の批判の他の一點は、資本主義社會、資本主義國の人口問題が、氏にあつては資本主義的現象として把握されてゐないことであつた。私が問題にした氏の二論文において、氏が「人口戰爭論」の根據としてゐた日本の人口問題なるものゝ内容は、日本は人口の密度が高いといふとに過ぎなかつた（太陽三一――三三頁。社會科學一四〇――一四六）。此の資本主義社會において、人口の密度の高いことが人口問題になる、といつたナイーヴな――（失禮）――見解は、河上氏の『人口問題批判』において既に徹底的に批判されてゐた。その後、高橋氏も讀んだと見えて、氏の駁論（一）では、さすがに人口の密度は姿を消してゐる。その代り、氏は、教へて貰つた河上氏にも泥をひつかけ（七〇頁下段）、今度は、『資本主義枠外』の農村が耕地の狹少の故に人口過剩に陷り最も人口問題に苦んでゐるとか、『資本主義枠内』では『資源の衰弱乃至減滅の故に』人口過剩が起り、從つてマルクスの人口理論は『必ずしも正しくはない』とかいふ飛んでもないものを飛び出させ、そして私に向ひ、氏の著書「資本主義末期の研究」六八頁に氏が言つてゐることに對して何故『堂々と解答』しないのかと詰め寄つてゐる（七〇頁――七一頁）。しかも其の六八頁には人口といふ文字もないのだ。讀者は何と思はれるか知らんが、『書生論』のみを口にする吾々如き『素朴』な者には、高橋君が何處に呑んでゐるか知れない匕首にまで氣を配るほどの修業は積んで

ゐないのである。

(3) 僭正マルサスの使徒

だが、議論の進展は、低徊に勝る。わけても高橋氏の場合はそうである。何故といつて、進展し變轉すればするほど、如何に氏が資本主義を資本主義として把握してゐないかゞ明かになる。

氏は、飽くまでも僭正マルサスの使徒であらうとするのであらう、耕地の狹少だの資源の衰弱だのと、人口問題を自然に歸さうする。しかるにマルクスの人口理論の特質は、人口問題を社會に歸した所にある。吾々は、日本が資本主義國であるといふ。それは、一の國家權力を結び目とする日本といふ社會においては、資本主義が支配的な生産形態、生産關係となつてをり、それが社會の一切を本質的に規定してゐるといふ意味である。かゝる資本主義的關係は、日本の津々浦々に及び、朝鮮に及び、滿洲に及び、日本の政治、經濟、財政、軍事、教育、宗教、藝術に及んでゐる。高橋氏の欲すると否とに拘らず、此の資本主義日本における人口現象は、資本主義的現象である。その人口問題において農村だけが資本主義枠外にあるといふ譯には參らぬ。

資本構成の高度化と共に資本家企業に生ずる所の過剩人口は、謂はゞ全過剩人口軍の「本隊」である。だから、それを私は強調して置いた。氏は、農村に過剩人口があるといふ。では、何故それが今までのやうに都會へ出て行けないのか？ 都會の資本家企業それ自體が過剩人口を生み出し、新しい勞働力を吸收する能力を減じたからではないか。ではまた、何故生活に困る者が多く農村に生ずるのか？ それは農家特に小作人層が、取引において、金融において、賃勞働において資本主義的に搾取され、また資本主義的に利廻計算をする地主に高い小作料を拂ひ、更に資本主義的に割當てられた「公課」等々の負擔に堪へないからではないか。それほど困つても尙ほ農村に止まことを餘儀なくされるからこそ、一人當りの耕地も大きくならないのではないか。なぜ農業の生産力の發展が遲いのか？ それは、資本主義社會では農業が「不利」で、資本が農業へ流れ込まないからではないか。

高橋氏がマルクスの修正をでも要求しさうな氣勢を示してゐるところの「資源の衰弱」、例へば炭坑が廢棄される場合でも同じことである。坑夫が失業する、それだけで「過剩人口」は生じない。失業した勞働者を、自余の資本家企業が雇傭し得ない程に、「過剩人口の本隊」が增大してゐる時にのみ、彼等は過剩人口として追加される。

(4) 天下の愚論

要するに、工場關係にせよ、鑛山關係にせよ、また農村關係にせよ、過剩人口の增大は、資本主義生産關係が社會の生産力の發展に對する桎梏となつたことの顯著な現はれである。組織を變へて見よ、利潤の爲めの生産を、社會の爲めの生産に改めて見よ、そして自由に生産力を發展させて見よ、現在の過剩人口は消えて無くなる。かゝる事情の下にあつて歷史的使命をになふ無産階級の任務は明かである。然るに高橋氏は、『資本主義の基礎において』の人口問題の解決（！）を提唱し、戰爭を主張する。氏は、マルクスやレーニンの知らないことを發見したと思つて見たり、一の資本主義社會の人口問題を論ずるの

に農業と資本家的產業とを資本主義の枠外と枠内とに鑑別して人に喰つてかゝつたり、『現に農業に於ける資本の最要部は耕地である』（七〇頁）などゝ地主の算盤を彈いて三百萬戸の小作農業家の存在を無視して見たりしてゐる暇に、もつと具體的に物を見、實踐的に考へて、人口問題の分析らしい分析を積極的に展開し、無產階級はもとより吾々書生共にもはつきりと敎へねばなるまい。人口問題こそは、氏の解放戰爭の根據ではないか。氏が此の問題の所在を明白にせぬ限り、氏が折角ブルジョアジーの爲めに動員せんとする十字軍の募集事務所は「門前雀羅を張り」、將軍の椅子は遠からず、もつと老巧な何者かに取つて代はられるであらう。

本來、人口問題の爲めに戰爭のラッパなど吹き立てることなどは、それに對する反對者に左翼も右翼も書生も學者も糞もなからう程の、けつたいな間違ひである。『時論としての人口問題』（中央公論七月號）においても、矢内原教授は高橋氏を批評し、『……現代に於て帝國主義戰爭を否認しながら、人口問題に基因する戰爭をば國民戰爭として是認せんとするは全く意味をなさない』と言ひ、『支那動亂に際して我國出兵の擧ある今日、人口問題が國民の名によりて利用せられざらん樣、吾人は特に注意を怠つてはならない』と結んでゐる（四二――三頁）。實際、高橋氏のは、――私も前の論文の冒頭で指摘して置いたやうに「時節柄」でさへなかつたら、默殺してもよからうほどの愚論に過ぎない。

高橋氏の「人口問題」に對する私の批判の言葉の斷片を材料としてでつちあげた氏の「駁論」の部分には、「日本に於ける社會形態の複雜性を見逃せる書生論」といふ小みだしを氏は與へてゐる。溺るゝ者の摑んだ藁が、溺るゝ者には、何と大したものに見えたことぞ。

（一九二七・八・五）

――本稿は、これで終つてゐるのではない。が、かなりに長文である爲めに、後半は之れを、近刊の拙著「帝國主義」に收錄することにした。尙ほ、高橋氏が、「駁論」において大袈裟に論じ立ててゐる所の（一）「帝國主義世界統轄のコケ嚇し」、（二）「全體と部分との關係」、（三）「日本の帝國主義的地位の檢討における（猪俣）氏等の根本誤謬」、（四）「プチ・帝國主義理論における問題の所在」、等の部面に横溢する氏の誤謬に至つては、すでに氏の「駁論」と同時に出た八月號「社會科學」の拙稿の後半「日本帝國主義の新段階」において十分に指摘され、徹的に批判されたかたちになつてゐる。――氏の駁論の先を越したやうで甚だ禮を失した次第ではあるが――

ロシアに於ける社會主義經濟の發達

山川菊榮

一　ロシアは資本主義に降伏したか？

『ロシアは社會主義を捨てゝ資本主義に降伏した。』『ロシアは私有財産制度に退却した、革命は徒勞であつた。』かういつて世界のブルジョアジーと反動主義者とが喝采した新經濟政策採用の當時から、今年で七年目になる。一九二三年七月に締結されたサヴエート同盟は、その憲法の中に、『サヴエート共和國の成立以來、世界の國々は二つの陣營に分れた、即ち資本主義の陣營と社會主義の陣營とに分れた、』と述べてゐるが、この對立は、『資本主義に對するロシアの降伏によつて消滅したのであらうか。この七年間に列强をして武力干渉と經濟封鎖の政策から、正式承認と通商條約の政策に移らせ、對露貿易を國際市場に缺くべからざるものとした力は何であつたか。そしてそれらの變化ははたして地球の表面を徘徊する赤色の妖怪が消え失せた結果であつたらうか。

英國政府はロシアとの通商條約を破棄して國交斷絶を宣言した。しかし同時に、ロシアとの通商は存續する方針であることを附加した。この英國政府の態度こそは、資本主義諸國の僞はらぬ心情を告白したものである。通商條約は破棄しても通商そのものは破棄し切れぬところに、資本主義國の弱味があり、ロシアの强味がある。そしてこの故にこそ、列强のロシアに對する恐怖は募らざるを得ないのである。ロシアは市場として列强にとつて失ふべからざるものとなつた。列國は衰頽期にある自分自身の經濟を維持するために、暫らく隱忍してロシアと交通し、よつてその經濟的發達を間接に援助せねばならなくなつた。一九二〇年より一九二六年に至るまでの間の英國の對露輸出總額は八千二百四十四萬九千ポンドに達してゐるが、そのうち一九二三年以後の輸出品目の大部分は機械によつて占められてゐた。して見れば對露貿易は、英國にとつてはその最も重要な産業の一つである機械工業を維持する手段であつたと同時に、ロシアにとつては、社會主義經

濟の建設と發達とにとつて基礎的な條件である「工業化」の過程を促進する力をもつたのである。かくしてロシアの經濟が發達すればするほど、その國內的及び國際的地位の安定は加はり、市場としての重要も加はつた。そしてその安定とその重要の增加は、とりも直さず、世界における資本主義の陣營に對する脅威として受けとられてゐる。ロシアの復興が資本主義經濟への逆轉によつて行はれたと稱するブルジョアジーを反動主義の宣傳とロシアに對する彼等のこの現實な恐怖との間に横はる矛盾を、吾々はどう解したらよいのであらうか。

二　新經濟政策後の變化

一九一七年十一月の革命は、舊ロシア帝國內における土地、森林、河川、工場、運輸機關等、一切の重要な生産機關を國有とし、ついで一九一八年六月には、一切の商業及び工業的企業もまた國有となつた。一九二一年の新經濟政策は、この根本的な原則を動かしたものではなくて、たゞロシアの經濟的發達の程度に應じて、この原則を生産分配の上に適用する方法に或る變化を認めたものである。土地は依然として國有であるが、十二ケ年間を最長期限として團體なり個人なりに貸付けられる。一九二五年五月のサヴエート大會の決議によつて、土地貸與の條件は大に緩和せられ、これによつて耕地面積を擴大し、農業の進歩を促進する方法が講ぜられた。一九一八年の憲法は農業における雇傭勞働を禁止し、一家族の手で耕し得る範圍の農場の使用權だけを認めたのであるが、現在のロシアの幼稚な農業の方法では、これは生産力の發達を阻止する傾向があつたので、雇傭勞働をも認めることとなつたのである。これがために、一般に農業の生産力は著しく增大すると同時に、戰時共産主義の時代には壓伏せられてゐた資本家的農民の勢力も盛り返されて來た。最近ロシア共産黨內部における反對派の活動は、主としてこの成金的農民の問題を中心としたものである。

工業の方面においては、基礎的に重要なるものはすべて國有となり國營トラスト又はシンヂケートによつて經營せられてゐるが、一九二一年以來、一定の條件のもとに協同組合、他の團體、又は個人が、比較的重要でないもの又は小規模の職場等を政府から借り受けて經營することを許されるやうになつた。又同年以來、十八歳以上の男女市民は家內工業にも從事することができれば、小規模の職場を設立することもできるやうになつた。

戰時共産主義の時代には禁ぜられてゐた商業も、新經濟政策以來復活した。然し國家はこの方面でも個人的商業に無制限の自由を認めてゐるわけではなく、國營商業團體及び協同組合の經營による商業の競爭によつて私人的商業を統制し、物價を調節し、投機を防止して、消費者の利益を保護することに努めてゐる。外國貿易が政府の獨占事業であることは依然として居る。

ロシアが封建的小農經濟に支配せられてゐる限りは、その基礎の上に直ちに社會主義の社會を建設することは不可能であつた。然しロシアが、戰爭、內亂、經濟封鎖によつて極度の疲弊と壞亂とに陷つた中で、諸外國と戰はねばならなかつた間は食糧其他の生活必需品の分配を國家が直接嚴重に管理することは已むを得さる必要であつた。ツ

アーと大地主とに對して戰ふ間、更に國內の反動分子を援助する外國の武力干涉と戰つてゐる間は、小農も自己の利益を保護するために、都市無產者と協同した。けれども內亂時代が終結すると同時に、國內における經濟的復興の問題は、この封建的小農の利害と密接に關聯し、彼等の現在の經濟的地位に相應した讓步を認めたのでなければ生產力の增進と、從つてその上にのみ築かるべき社會主義社會の發達は到底望まれぬことが發見された。そこで封建的小農經濟より社會主義經濟への過渡的な一形態として新經濟政策が採用されたのである。

『プロレタリア國家は最も先見あり、用意周到にして老練な「所有者」となり、未來の卸商人とならねばならぬ。さもなくばプロレタリア國家は小農國の經濟上の地位を高めることはできぬ。そして現在の情勢の下に、資本主義的な、（差當り尚ほ資本主義的な）西歐諸國と併立しつゝ、共產主義に推移するこれ以外の道はないのである。卸商人といつたなら、それは共產主義とは、天と地ほども隔たつた、經濟上の一タイプであるかの如く思はれる。けれどもこれはまさしく、實際の上では、小農の經濟から、國家資本主義を經て社會主義に到達せしめるところの矛盾の一つである。個人的な利害は生產を增加する。吾々は何を措いても、如何なる代價を拂つても、生產を增加しなければならぬ。卸商は幾百萬の小農を經濟的に結合し、彼等を引き惹け、彼等を制約し、彼等を次の段階、即ち種々なる形態の生產上の結合や團結に導くものである。吾々はすでに、經濟政策の必要な變更に着手した。そして吾々はすでにこの方面において、勢ひ小さな部分的なものではあるか、しかも爭ふべからざる効果をあげてゐる。』とレーニンは一九二一年の十一月革命第四週年記念日の演說の中に述べてゐる。その當時から滿六年にならうとしてゐる今日、この經濟政策は、はたしてどの程度にロシアの社會主義化を實現したであらうか。

三　工業化の發展と生產の增加

最近におけるロシアの經濟的恢復を知るには先づ戰爭、內亂、武力干涉及び經濟封鎖の間に、どの程度の生產が攪亂せられたかを知らなければならぬ。世界大戰の間に、勞働者の最も熟練した、最も能率の高い分子は動員して戰場に送られた。ロシアが生存と獨立とのために戰つた內亂時代においても同じことであつた。その結果として工場生產は甚しい打擊を受け、戰前の一五乃至一八パーセントにしか達しないほどゝなつた。工業はすべて軍需品の生產のために振向けられ、一般民衆に工業生產物を供給することは殆んど不可能に陷つた。軍隊と都市住民とに食糧を供給する農村は、それに對して何等の工業品も供給されないので、極度の賣惜しみをするようになり、強制徵發の手段によらなければ何も出さぬようになつた。都市の住民は續々として食物の獲られる農村に移住したので、都市人口は戰前の三〇乃至四〇パーセントに激減した。飢餓と極度の窮乏とのために國內には傳染病が猖獗を極め多くの死者を出した。ジエノア會議の算出したところによると武力干涉と經濟封鎖とのためにロシアの產業の蒙つた損害は、戰前の貨幣價値に見積つて九十二億一千二百萬ルーブルに達した。そのうち最も損害の甚しかつたものは鑛業（二十五億一千八百萬ルーブル、）纖

維工業（二十億八千七百萬ルーブル）、農業に關する工業（十八億一百萬ルーブル）等であつた。その損害の性質を分類すると、企業設備及び原料の壞廢に基くもの九パーセント、生産の節減によるもの八二、パーセント、資源の破壞によるもの七パーセント、他の原因によるものが二パーセントであつた。

ロシアがその生産力を恢復するためには、まづ工業の復興が基礎的に重要であつた。ロシアの農業は今なほ極めて幼稚であつて、極く粗雜な原始的なもの丶外、農具及び農業機械を使用してゐない。文化の程度の後れた半未開民族の住む地方では金屬の農具を知らずに棒切れや木製の農具で耕作するものさへある。かような狀態の結果として一般に土地が肥沃にもかゝはらず、穀物の收穫率は西歐諸國の三分の一にしか達してゐない。そこでこの幼稚な農民に金屬製の犂鍬を與へてその生産力を增進するためにも、また封建的な小農制度を大規模な社會主義的農業に進化させるためにも、農具及び農業機械を供給する工場及び職場を設置することは極めて必要である。また農業生産物に加工するためには工業の發展が必要である。工業の進歩は、工業生産物の主要な消費者であると同時に、工業原料品と都市勞働者の食糧の供給者である農民の生産力を刺戟し、その購買力を增進させる。工業が發達すれば農業生産物を賣り捌く市場も獲得せられ、從つて農民の收入は增加し、農業の生産力も增進する。そこで工業の進歩と農業の發展とは、互に交互作用をもつて密接に影響し合つてゐるのである。現在ロシアの工場の四七パーセントまでは農業生産物の加工に從事してゐる。**戰時中及び內亂時代における工業の破壞は、農業の破壞より遙か**に甚しかつた。結果として、その生産力の恢復も一層困難であつた。しかし一旦戰前の水準に復歸した後は、全然新たに種々なる施設を行うて生産力を增進しなければならぬので、過去數年間の復舊時代のような、躍進的な生産の增加の代りに、今度は秩序立つた、堅固な、しかし漸進的な發展が期待されてゐる。

一九二四年五月より一九二五年十月に至るまでの間に、國有工業の一ヶ月生産高は二倍以上になつた。一九二四年五月の一ヶ月平均生産高は一億三千二百萬ルーブルであつたが、一九二五年十月には、二億八千六百萬ルーブルに達し、まさに一九一三年當時の生産總額の八八パーセントに及んだ。一九二一—二二年度においては八億五千萬ルーブルにすぎなかつた生産總額は一九二四—二五年度において三十七億六千一百萬ルーブルに達し、一九二五—二六年度においては五十三億三千三百萬ルーブルに達した。即ち一九二一年以來滿六ヶ年の間に、ロシアの國有工業は六倍の生産高を示し、最後の一年間において前年度より四二パーセントの飛躍的な增加を見、戰前の水準を突破するまでになつたのである。

工業生産力の增進も國民經濟におけるその重要な地位は著しい事實である。一九二三—二四年度においては工業の生産價格は、總生産價格の二七・八パーセントを占め、農業は七二・二パーセントを占めてゐたが、一九二六—二七年度においては工業は四一パーセント、農業は五九パーセント、を占める筈である。過去數年間の比率は左表の如くである。

年次	戰前の百萬ルーブルを單位とする國民經濟の生產總額	生產總額に對する工業生產の百分比	同上農業生產物の百分比	同上生產機關の生產の百分比
一九二三—二四年……	一二、二七二	二七、八	七二、二	五一、七
一九二四—二五年……	一四、六一九	三四、八	六五、二	五二、六
一九二五—二六年……	一八、三〇六	三八、二	六一、八	五四、四
一九二六—二七年……	二〇、一六六	四一、〇	五九、〇	五六、一

過去四年間における農工業の生產增加率は次の表によつて示される。

年次	農業	工業
一九二三—二四年……	六、五	三二、八
一九二四—二五年……	七、六	四八、九
一九二五—二六年……	一八、六	三七、七
一九二六—二七年……	五、三	一八、一

工業の發展は原料の供給に俟つことが多い。從つて工業原料品の生產を增加する必要があるので、過去三年間に、さういふ原料品を生產する耕地面積及び家畜の飼養に供する牧場の面積も大いに擴大された。けれども工業は農業よりも遙かに急激な率をもつて發展するので、原料品の供給が不足し、ためにこれを外國からの輸入に仰ぐことが必要である。そこで麻、綿花の輸入は重要な地位を占めてゐる。もし原料品を內地で生產することができれば、それだけの餘裕を機械の輸入に振向け、從つて工業の生產力を增進することができるので、政府は工業原料品の自足自給を急いでゐる。

一九二三年頃までは、一般的な消耗品がロシアの輸入のかなり重要な部分を占めてゐたが、其年以來、內地の生產力增加の結果として、製造工業に要する機械の輸入の最大重要な地位を占めるやうになつた。基礎工業に機械を供給することは、ロシアの產業政策の眼目となつてゐる。一九二六—二七年度においては、一般工業の生產總額は二〇・二パーセントの增加を見る筈であるが、重工業のそれは二三・二パーセントの增加を期待されて居り、農業機械及び農具の生產は四一・四パーセントの增加を見る筈である。本年度において農民に農具及び農業機械を供給した率は、既に戰前のそれより一一・七パーセントを越えた。一九二六年十月一日までに農民の間に分配されたトラクターは二萬二千機に達した。金屬工業の他の諸部門—殊に鐵以外の金屬の生產にも多大の注意が拂はれてゐる。

燃料產業においても著しい進步が見られた。一九二五—二六年度において石炭はその生產を六三パーセント增加し、一九二六—二七年度においては、更に三〇・三パーセントの增加が期待されて居る。石油は一九二五—二六年度において一七・パーセント、本年度において更に二三・六パーセントの增加を見る豫定である。本年度において石炭の生產額は戰前の水準を一四パーセント、石油は一七パーセントだけ超

過する見込みである。石炭及び石油の生産增加と、電化政策の結果として、その工業上の使用量が減少するに從ひ、それらの輸出額は戰前のそれを大に凌駕する見込みである。

一九二〇年に全露サヴエート大會の席上でレーニンが始めて發表した第一期の電化計畫は、向ふ十年乃至十五年の間に、總キロ數百五十萬キロワットを有する三十ケ所の大發電所を全國の各地方に設立することであつた。一九二七年一月一日までには、全計畫の一一パーセントに當る十六萬六千キロワットの發電能力を有する七ケ所の發電所が設立せられた。一九二五—二六年度における全國發電所の發電量は三十二億五千萬キロワット時に達し、戰前の水準を六七パーセントだけ超過した。一九二六—二七年度においては、三十九億キロワット時内外と見積られて居る。本年度においては、その第一期工事が完成すれば十五萬キロワットの發電能力を有する水力電氣の大きな發電所がドニエプル河畔に落成する豫定である。この發電所は大工業地方にとつて、極めて重要な關係をもつてゐる。

農村地方の電化事業も著しく進歩した。一九一七年の初めには、總計千三百五十二キロワットの發電能力をもつ七十八ケ所の小發電所かあつたにすぎなかつたのが、今日では六千三百五十三キロワットの發電能力をもつ三百六十ケ所の發電所が農村に建設せられた。農民の從事する色々の小手工業の上に電力を應用することも熱心に教へられて居る。

戰前における電氣工業の生産總額は六千五百萬乃至六千八百萬ルーブルであつたが、一九二五—二六年度においては、四〇パーセントだけこれを超過してゐる。一九二五—二六年度において從業員數は前年度に比し二一パーセントの增加を見、賃銀は一ケ月平均七十ルーブルより七十五ルーブルに上つた。生産費は一割乃至一割二分方減少し、本年度の純益千五百萬乃至千六百萬ルーブルと見積られてゐる。一九二六—二七年度においては、前年度の二七パーセントに當る增收をも見越して、一億一千九百萬ルーブルの總生産價格が期待されてゐる。「一九二一年には一大發電所の開始に間に合はなかつたとしても、その代りに一九二二年には二つの發電所を開き得るだらう」とレーニンはいつたが、彼の最初の計畫通りに進行した電化政策の實際は、恐らく彼の想像以上のものであつたかも知れない。

大規模の國有工業は上述の如く、非常な勢で發展してゐるが、國有工業と相並んで、それを補助して全體としての國民經濟の生産力を增進する意味で許されてゐる小手工業や私人經營の小職場もまた、相當な成績をあげてゐる。中央統計局の調査によれば、一九二六年度においてこれらの小生産に從事する者は三百萬人に達し、その生産總額は二億ルーブルに達した。國家計畫委員會の調査によれば、製粉業をも含めてこれらの小生産者の生産額は、全國の工業生産總額の一六・四パーセントに當つて居る。そのうちの重要なものは製粉・皮鞣等である政府はこれらの小生産者を組織して消費組合に參加させ、その生産物の價格を維持すると同時に、原料を廉く仕入れさすことに努めて居る。

生産力の增進と物資の需給關係を圓滑にする上に極めて重要なのは運輸交通機關の發達である。戰時中及び内亂時代を通して鐵道、機關

耳等は破壞されたものが極めて多く、鐵道は西部國境地方の諸民族が資本主義諸國の保護のもとに聯邦から脫離し去つたゝめに、そのかなりの長さを失つた。勞農政府は破壞し、失はれたる交通機關の整理・復舊を急ぐと同時に、新たに平原地方に運河を貫通し、鐵道を敷設して、全版圖に交通網を敷く計畫を立てゝゐる。それらの全ての計畫の中で最も急を要し、最も重要なものとして認められてゐるのは、中央アジアを橫斷してトルキスタンとシベリアとを聯絡する鐵道の計畫である

ロシアの纖維工業は目下のところ、外國から原料を供給されてゐる。一九二五―二六年度に纖維工業に費された原綿の量は二十六萬トンであつたが、このうち內國產の綿は十五萬七千トンにすぎなかつた。そこで殘る十萬トンは外國から輸入しなければならない。然るにトルキスタンは綿の栽培に最も適した氣候風土を有してゐるので、此地方の原綿の生產地域を大いに擴して、工業原料品の輸入を阻止しなければならぬ。しかし綿の耕地面積を擴大すれば、それだけ食糧品の耕地面積が減ることになるので、中央アジアの民族に缺く食糧品を供給するために、他地方からこれを補充しなければならぬ。ところがシベリア地方は纖維工業の原料には絕無である代り、穀物、肉類、木材其他の生產物は豐富で、その市場を求めてゐる有樣である。故に中央アジアを縱貫する鐵道は、シベリア地方の生產物を中央アジアに移出すると同時に、中央アジアの原綿をシベリアに送つて、シベリアが獨立の纖維工業を有し、布や糸のやうな生產物については或程度までロシアの他の地方に頼らずにゆけるようになる。かようにこの鐵道は物資の融通を圓滑ならしめるのみならず、在來交通不便のために人口稀薄な、未開狀態に留まつた中央アジアに文化の程度の高い民族の移住を促し、經濟的にも社會的にも、急激な進步を促すに相異ない。かういふ變化はひいて政治上にも重大な意味をもつようになる。中央アジアの近代化は、やがてその地方と接觸してゐるペルシヤ、インド、支那の民族にも、直接間接影響を及ぼし、彼等の民族運動に一層の刺戟を與へるに違ひない。この新鐵道は向ふ五年間に完成される筈で、セミパラチンスクでシベリア鐵道と聯絡する豫定であるが、完成の曉には單にロシア一國のみならず、全アジアに重大な經濟的、政治的影響を及ぼすであらう。

四　國有工業とその投資額

國有工業に對する投資額は年々著しい增加を示し、一九二四―二五年度においては三億二千五百萬ルーブルであつたのが、一九二五―二六年度には一躍七億八千萬ルーブルに達し、更に一九二六―二七年度においては、實に十一億四千萬ルーブルに達してゐる。このうち電化事業のためには一億五千三百六十萬ルーブルが割當てられてゐる。

他の諸部門においても巨額の資本が投下せられる豫定であるが、特に重工業の方面に最大額が投ぜられる筈で、その率は前年度より二六パーセント高く、國有工業に對する總投資額の七三・六パーセントを占めることになつてゐる。現在着手せられて居るもの、又は本年度において新たに着手せらるべきもの〻中には石油精製所、製材所、硝子工場、製紙工場、及び纖維工場等がある。幾つかの大金屬工場の中の一つ

はシベリアに、一つはウラル地方に、一つはプリドニエプロフスク地方に設けられる豫定で、又スウエルヅロフスクにもトラクター工場、大機械場の開設を見る筈である。他に鑛山の新たに發掘せられるものもある。

「重工業は國家の補助を必要とする。重工業なくしては、吾々は唯だ一文明國としても（敢て一社會主義國と云はず）滅亡する外はない。この問題については、吾々は今や斷乎たる手段を取つてゐる。吾々は重工業を起すに必要な資金を得た。今日までに得た額は、二千萬金ルーブルやそこらであるが、とにかく吾々はこれをもつてゐる。これは明確に、重工業の水準を高めるために用ゐられるであらう。」

これは一九二二年十一月のレーニンの言葉である。五年度の今日、ロシアは約六十倍の資本を國有工業に投じ、他の一切の國有産業に對する投資額は、本年度において實に二十五億ルーブルに達せんとしてゐるのである。

五　勞働階級の數的增加

工業が發達した結果として一九二〇年以來都市人口は頓に膨脹した。この增加は一八九七年當時、十萬以上の人口を有する都市が十四しかなかつたのに比して、今日では三十以上を算へるといふ有様を示してゐる。また總人口に對する工業從事員數も著しい增加を示してゐることは、次の表に見て明らかである。

全人口に對する工業、運輸業及び商業從事員の百分比

一九二三—二四年……	九・三
一九二四—二五年……	九・七
一九二五—二六年……	一一・〇
一九二六—二七年……	一一・五

一九二四—二五年、一九二五—二六年度の二ヶ年を通じて工業勞働者數は六十四萬人增加し、更に本年度において、新たに十三萬人を增加する見込みである。前二ヶ年の間に實際の賃銀は三七パーセント增加し、本年度において別に一〇パーセントの增加を見る筈である。この工業勞働者の增加が、ロシアの社會組織の上にどういふ意味をもつかは、昨年七月、ブハーリンがロシヤ共産黨のレーニングラード支部においてした報告の中に明らかである。

『さて吾々の工業の生きた基礎、即ち勞働階級の勢力について語らう。なぜなら階級鬪爭の問題は——そして吾國の社會主義的發達は、事實上、無産者の階級鬪爭の特殊の形態である——種々なる結合において、社會主義的建築の主たる基礎を代表するところの生きた人々によつて決定せられるからである。勞働階級は、この社會主義的建築の基本的な、生きた材料を形成してゐる、それは現在の過渡的社會狀態の支配階級であり、指導階級であり、且つ前衛階級である。

『もし吾々が勞働階級それ自身がいかに發達しつゝあるか、特に、同一條件のもとにおいて、その社會的階級の力の決定的な要素を代表するところの、數的勢力の上に、どういふ變化が起つたかを問ふならば、吾々は次の如き發展の情勢を見出すのである。

『一九二一—二二年の經濟年度においては、工業勞働の平均數は百二十四萬人であつた。一九二五年六月までにこの數は百五十五萬五千人

に増加した。一九二一年は百八十九萬八千人といふ數を示してゐる。卽ち一九二五年六月より一九二六年六月までに至る一年間にプロレタリアの最も進歩した層、工業勞働階級が三十萬人以上増加したのである。吾々はこの問題を今一つの方面からも見ることができる。卽ち勞働階級に屬する人員の數的増加の見地からのみでなく、吾國民の總收入のうち、勞働階級の收入、卽ち彼等の賃銀がどの位の割合を代表してゐるか、といふ見地からも見ることができるのである。私は諸君がわが國は先づ第一に農業國であるといふ事實を十分承知して居られると極めてかゝることにする。この國では勞働階級はまだ取るに足らぬ少數を占めてゐるにすぎない。故に吾々は絶對額の僅少なることに驚いてはならない。重要なのは、吾國民の總收入の中に含まれた賃銀の割合に變化の起つたことである。一九二二―二三年の經濟年度において、賃銀の總計、卽ちプロレタリアの總收入は、國民の總收入の二〇パーセントに達した。一九二四―二五年度には、全國を通じてこの率は二八・一パーセントに達した。卽ち比較的短時日の間に、殆んど五〇パーセントの増加を見たのである。」

六　工業の合理化と勞働組合

サヴエート同盟の工業化は、工業の合理化及び技術の進歩と密接に關聯してゐる。現在、大抵の工業部門及び企業においては合理化が行はれてゐる。多くの工場では傳達裝置が行はれ、筋肉勞働及び半筋肉勞働の過程を機械に代へ、新式な設備をもつて能率を増進することが實行されてゐる。

サヴエート同盟の工業の合理化は、資本主義諸國のそれとは全く原則を異にしてゐる。そのために勞働狀態を劣惡にする恐れのないことは勿論で、規則的な勞働時間、一般的勞働狀態、一般に勞働者の得た權利等には、何等の變化もない。勞働者の利益を犠牲にして工業の合理化を行ふことが可能だとすら考へられたことはない。

工業の合理化を行ふ根本的な目的は、生產の増加である。これは雇傭勞働者の減員を不必要とするのみならず、却つて勞働勢力の増加をさへ可能にする。實際上にも述べた通り、工業の發達に伴つて勞働者數は激増してゐるのである。更に合理化の結果として、勞働條件を改善し工場衞生勞働保護等を一層十分にする力をもつてゐる。

合理化の結果として、個々の企業では從業員を減少することもないには限らないので、政府は、勞働組合の請求に從ひ、勞働勢力を利用するために種々なる方策を執つてゐる。同一企業の中で、或部門で不用になつた勞働者はなるべく他の部門で使用するように奬められ、萬一どうしてもその方法が立たぬ時は、その勞働者を他の地方に送つて就職させるようにしてゐる。合理化の結果として解雇された勞働者は、六週間乃至三ヶ月間の賃銀に相當する解雇手當を受け取ることができる。

勞働組合は勿論合理化に對して積極的な態度を取り、合理化の適用に關聯した問題の協議に參加し、また組合の會合でその問題を討議する。けれども組合は同時に、勞働勢力の利用について熱心な注意を拂ひ、個人的にも、合理化のために勞働者が不利益を蒙らぬようにして居る。

昨年度において勞働者の賃銀は一般的經濟計畫に基づいて增加した。政府はこのため特別の委員會を設け、それは勞働組合側の種々なる提案に從つてすべての產業に通ずる賃銀增加の總額を決定し、賃銀を增加すべき產業部門及びどの程度に增加すべきかといふことを決定した。

一九二六年十二月に開かれた全國勞働組合大會は、勞働問題は一般的な經濟上の計畫と分離せらるべきでなく、且つサヴエート同盟の經濟は包括的な計畫に從つて遂行せらるべきであるといふ見地から、賃銀增加の規定もその經濟計畫の一部をなさなければならぬことを認めた。現在ではこの一定の計畫のもとに經濟を立てる方針が非常に廣く適用されてゐる。それらの計畫は單に一ケ年のみならず、五ケ年乃至それ以上の先まで見越して立てられてゐる。そしてそれは單に大體の方針ではなくて、實際にその計畫を遂行する基礎となつてゐる。それらの經濟的計畫の中には、單に賃銀問題のみならず、すべての勞働問題も、考慮に加へられなければならぬとされ、勞働勢力の利用、失業對策、勞働保護、住宅問題等も含まれてゐる。一般的計畫の中に勞働問題を遺漏なく取扱ふために、サヴエート同盟の國家計畫委員會の內部には特に勞働部が設けられ、また勞働委員會の中には、勞働計畫委員會が新たに設けられた。

勞働組合は國家の經濟計畫に積極的に參加してゐる。全露勞働組合中央委員會は、單に大規模の經濟計畫（一九二七―二八年度に對する國家計畫委員會の計畫、五ケ年間の工業發展策、五ケ年計畫の全國的經濟政策等）を調査研究して意見を提出するのみならず、主として勞働に關する一定の計畫を立てるために、特殊の委員會を任命した。この委員會は更に小委員會に分れ、その小委員會には勞働組合中央委員會の參加を求めて、全體としての勞働に關する方策を十分に練り、それを一般的な經濟計畫の上に反映させようとしてゐる。

けれども勞働問題の對策を一般的計畫の中にも含ませたところで、それは團體契約の領分である勞働條件調節の既に確立せられた方法まで變更するものではない。勞働計畫は團體契約の基礎を作製し決定するにすぎないもので、決してその地位を奪ふものではない。團體契約を行ふことは、依然として勞働組合の最も重要な任務であり、勞働計畫はその任務のために、用意周到な準備をするにすぎないのである。

次に掲げるのは全露勞働組合中央委員會の發表にかゝるものである。一九二六年十月に比して、一九二七年一月一日現在の組合員數は八萬六千五百人〇・九パーセントの增加を示した。勞働組合員數の增加率が緩漫なのは、季節的な影響による。一九二六年より一九二七年一月までの間に、建築勞働組合員數は七十四萬三千人より五十九萬九千三百人に、即ち十四萬三千七百人減少を來たしたことは、季節の關係をよく物語つてゐる。夏期には組合員數の激增するのが常である。

戰前の水準への經濟復興の過程が殆んど完成され、工業勞働者數も躍進的な增加を遂げた後を受けて、今後は組合員數も經濟復興が急速に行はれた過去數年間のような勢では增加すまいと見越されてゐる。けれども、そう急ではないまでも組合數が絕えず增加して行つてゐる事實には變りはないのである。

勞働組合員數　（一九二七年一月一日現在）

種別	組合	員數
農業	土地及び林業	一、一〇九、四〇〇
工業	製紙工	四三、二〇〇
	鑛夫	四二八、二〇〇
	木材勞働者	一七三、二〇〇
	皮革同	一二二、二〇〇
	金屬同	八四三、九〇〇
	印刷同	一一〇、四〇〇
	食糧同	四四二、五〇〇
	製糖同	一〇六、二〇〇
	紡織同	八一三、九〇〇
	化學工業同	二三六、六〇〇
	被服同	七三、二〇〇
	小計	三、三九三、五〇〇
建築勞働者		五九九、三〇〇
運輸交通	水上運輸	一五七、三〇〇
	鐵道	一、〇八七、二〇〇
	地方運輸	一七七、七〇〇
	郵便、電信、電話	一一四、四〇〇
	小計	一、五三六、六〇〇
官廳、公共及び私人團體從業員	藝術勞働者	八八、五〇〇
	醫務衛生	四八八、六〇〇
	教育勞働者	七四六、八〇〇
	官公吏及び商業從事員	一七三、七〇〇
	小計	二、四九七、六〇〇
他のもの	地方自治體勞働者	二四一、二〇〇
	家内及びホテル	二四八、二〇〇
總計		九、六二一、八〇〇

七　農業と農民

ロシアの人口の約八割は農民によつて占められてゐる。然も彼等の間における大農制度の發達は極めて幼稚で、地球の表面の六分の一を占める廣大な版圖は、二千四百萬戸の中小農場に分割され、原始的な方法で個人經營にかゝるものが大多數を占めてゐる。農業技術の進歩と協同的經營とを伴はない、單なる土地の國有が、農業を小ブルジア經濟から解放する力を持たないことはいふまでもない。そこで一般的な農業の發達と、それに必要な工業化の政策を講ずると同時に國有農場において大規模の協同耕作を行うてこれらすべての政策の遂行により農業を漸次に社會主義的に組織する方針が確立されて居る國有農場は賃銀勞働を基礎として經營されてゐるが、これは協同生産と科學的耕作の實例を示し、社會主義的農業への第一歩を踏み出したものである。

他のすべての産業部門と等しく、農業もまた、國家計畫委員會のもとに、一般的な國民經濟と關聯して一定の方針を確立せられてゐる。その方針によれば全國は幾くつかの農業地方に區劃せられ、各地方は在來の慣例になづまず、只だその風土氣候に適し、從つて最も生産率に高い種類の農産物を專ら栽培することが期待せられてゐる。例へ

ば或地方には棉や甜菜の如き工業原料品を主として栽培し、同時にその附近にそれらの原料を精製する工場を設立すると共に、他の、例へば穀物の栽培に適した地方では專ぱら穀物の栽培に當り、その生產物に對する加工製造の設備にも遺漏なからしめ、同時に交通網の發展によつて、各地方の生產物の交通融通を容易ならしめるのである。在來、家內工業又は小手工業の一部にすぎなかつた棉、甜菜、馬鈴薯、亞麻等の加工もすべて大規模の工場工業に組織される計畫である、國家計畫委員會の擧げた數字によれば、農業の總生產高は一九二六―二七年度において、戰前の九六一パーセントに達してゐる。更に詳しく云へば一九二四―二五年度においてはその生產總額(戰前の價格にて)九十億三千一百四十萬ルーブルであつたのが、一九二五―二六年度においては百十一億二千四百四十萬ルーブルに增加し、一躍二三パーセントの增加を示してゐるのである。

農民經濟の最も特徵的な、そして重大な意味をもつ現象として一般に認められてゐるのは、農業協同組合の發達である。農業協同組合の收支決算は一九二三年一月一日より一九二四年一月一日までの一年間に四倍半に增加し、更に一九二四年一月一日より翌年の十月一日までの間に約二倍(九〇パーセント)の增加を示してゐる。これは農民經濟がいかなる方向に向つて發達してゐるかを知る上に極めて重要な役割をもつてゐる。

農業が原始的な、苦痛な筋肉勞働にのみ賴つてゐる間は、農民の智的進步も、その收益の增加も望まれず、農民と農業は依然として社會主義への進化の障害たるに留まるの外はない。農民を社會主義化するには、まづ第一に農業の生產方法を工業化し、機械による大規模的な協同耕作によつて、農村の經濟を社會主義化せねばならぬ。そこで農業に機械を提供することは、現在ロシアの工業の最も緊急な任務となつてゐるのである。

八　社會主義經濟と資本主義經濟

ロシア最近の經濟的發達は、大略上に述べて來た通りであるが、この經濟的發達の中に國有經濟と私有經濟とがどういふ關係を持ち合つてゐるか、いづれがより多く國民經濟を支配する要素となつて居るかといふ點は、この發達の性質を決定する上に最も重要な問題である。

工業について見れば、絕對數においては國有工場も私有工場も共に著しく增加して居るが、全體に對する割合から見れば、私有工場は次第にその重要さを減じて來てゐることが、次の數字によつて窺はれる。

	全工場數	國有	消費組合	小手工業	私有
一九二三―二四年	一〇〇	六三・五	三・六	二九・四	三・五
一九二四―二五年	一〇〇	六七・八	四・九	二四・二	三・一
一九二五―二六年	一〇〇	七一・五	四・六	二一・三	二・一

私有資本の繁榮と小農經濟に對する過大の讓步といふ點こそは、共產黨內部の反對派の幹部攻擊の論點となり、社會主義の放棄、私有財產制度への退歸といふ批難の中心をなすものであるが、この點につい

て、昨年七月、レーニングラード共產黨役員會議の席上、ブハーリンは次のような說明を下して居る。

國有資本と私有資本との勢力比較に當つて、見逃すことのできない事實は、貧農及び中農—雇傭勞働を使用しない—の如き私有經濟ではあるが、(これらは上にも述べた通り、大農制度の發達と協同組合の普及とによつて漸次に社會主義的經濟に組織される進化の過程にある、)斷じて私有資本家經濟ではないものと、私有資本と雇傭勞働とに基礎をおく私有資本家經濟とを明白に區別する必要がある。國有資本と私有資本の對立を說く際には、私有ではあるが、資本家經濟ではないところの小農經濟は、國有資本の一變形としてその一つの勢力として算へらるべきである。けれども殘念なことにこの最も重要な點について、國有資本と私有資本との精密な勢力の比較を示すべき統計が未だ完成されてゐない。たゞ一つ、財政委員會の吏員クートラーの調査は、不完全なものではあり、私有資本にとつてむしろ有利なものではあるが、これによつて大體の趨勢を察知することだけはできるのである。その數字は、一九二六年度において私有資本家企業數三十二萬三千八百五十五、その收益額一年三億一千九百萬乃至五億八千五百萬ルーブルと報じてゐる。然るにこの數字は、是等の企業に要する生產費をも含んでゐるのであるから、假に企業總數三十二萬三千八百五十五につき同數の家族がそれによつて生活してゐるものと見、大略一家族一年の生活費八十ルーブルと見ても、年一千ルーブルを必要とする。そこで一年に三億二千三百萬ルーブルは收入總額から差引かねばならぬから、私有資本家の純益は幾何もないことになる。

一方國有經濟の方は一九二四—二五年度において純益十億二千五百萬ルーブルに達し、一九二五—二六年度においては十五億八千六百萬に達する見込である。同じクートラーの計算によれば、全經濟に對する私有資本の比率は急激に低下しつゝある。即ち彼の意見によれば、私有資本の總收益額は約四億ルーブルにも達してゐるにも拘はらず、社會主義經濟の範圍に屬する企業は一層大なる速度をもつて增加しつゝあり、それほど厖大な私有資本の比率が急激に低下するほどの勢を示してゐるのである。

ブハーリンはロシアにおける工業發達の速度が農業のそれを遙かに凌駕し、ロシアが急激に工業化しつゝあると同時に、プロレタリアの前衞たる工業勞働者の激增しつゝある事實をあげ、第二に國有資本が私有資本に比して遙かに大なる發達を遂げつゝある事實を明かにして、ロシアが私有財產制度へ退却する代りに、却つて社會主義經濟に向つて、健全な、鞏固な發達を遂げてゐることを明らかにした。更に彼は論爭の中心となつてゐる農民問題に言及し、反對派の想像するが如く、ロシアの農村からは中農が消滅して、資本的富農と貧農との相對立する明確なる二大階級のみが存在するのでなく、中農の勢力は依然たるものがあり、これを無視し、又はこれを壓迫してこれに誅求を加へ、彼等を反對勢力の味方とすることは重大な危險を意味することを說き彼等に對する政策は、農村における社會主義的生產方法の發達と協同組合の發展とによつて、私有的小農經濟より、社會主義的經濟に進化するように有形無形の補助と指導を與へるのほかはないことを主張した。

ロシアにおける私有經濟と社會主義經濟對立の狀態は、かように決定的に後者のために有利に發展してゐるのであるが、萬一この狀態が變化して、勞働者の國家のために何等かの危險を伴ふ恐れがあると見られた場合には、國家は直ちに私有資本にいかなる種類の壓迫をも加へ得る地位におかれてゐる。サヴエート政治組織の樞軸たる勞働者農民の獨裁に今日尙何等の變化もないことは、よくこの事實を證明してゐるのである。私有資本は、封建的小農經濟より社會主義經濟への進化の過渡期において、幼稚な生產を刺戟し、國有產業の發展を補助し補强する意味においてのみ、その存在を許容され、かつその活動を利用されてゐるにすぎないのであつて、それが一旦この限られた軌道を踏み外さうとするや否や、無產階級獨裁の鐵のような腕は、忽ち革命時代と同じ統制力を發揮するのである。新經濟政策後も屢々この統制力に發揮されて、私有資本の、必要以上の活動と發展とを防壓し、それをその本來許された活動範圍內に追ひ込んだのである。

ロシアは社會主義を放棄したか。ロシアにおける社會主義經濟發達の事實はこの問に對する何よりもよい回答者でなければならぬ。


柳原愛子


高倉壽子


小倉文子


西四子

日本國民の大聖典出づ！

八百餘頁の大著

—キング十一月號の大附錄—

明治大帝の御日常事を細大洩らさず
側近奉仕の貴顯名士女官方が御執筆！

皇として人として古今に冠絶し給ひし聖にして偉大なる御人格！御笑も御涙も眼前に躍如！讀者をして感動感激に堪へざらしむ！

尚明治美談には明治時代各方面に活躍せる代表的巨人偉人の興味深き感動物語百篇を集む正に明治大傑傳とも云ふべきである

明治

附 明治



●表紙多田北
＝茶紺地金泥光琳

明治大帝 執筆者 （順不同）

樞密顧問官 石黑忠悳
御歌所寄人 阪正臣
元掌侍 藪嘉根子
陸軍中將 大島健一
元侍從職出仕 石山基陽
元侍從武官 齋藤孝至
二位局 柳原愛子
宮中顧問官 井上通泰
伯爵 壬生基義
元典侍 高倉壽子
伯爵 田中光顯
子爵 岡崎泰光
陸軍大將 山梨半造
宮中顧問官 三室戸敬光
元命婦 平田三枝
元内掌典 慈光寺仲敏
御歌所寄人 千葉胤明
正三位 下田歌子
子爵 金子堅太郎
元典侍 園祥子
海軍中將 川島令次郎
子爵 小笠原長生
元侍從男爵 澤宣元
元掌侍取扱 樹下範子
陸軍中將 曾我祐準
元宮內省調査課長 栗原廣太

見よ!! 文學と藝術の正しき理解に入らんとする人の
渇望せる眞に權威ある我國唯一の新辭典!!

增補九版

創元社編輯部編纂

文藝辭典

內容

新新、豐富、正確!!
四六判上紙六百頁
ポプリン美裝函入
定價　參圓貳拾錢
特價　貳圓八拾錢
送料　拾八錢

此度新語百頁を增補し得てここに完全す

吾々が文藝に關する著書や雜誌を繙く時に、一番困るのは、それらに散見する術語の解釋である。たとへば、外面描寫、第八藝術、高踏派、高級象徵、感受性、中篇小說、世紀末的恐怖、靜劇、正反合、セリ上げ、ソナタイデオロギー、新感覺派、レパアトリーシステム、クロッキー、ツオイロスの劍、トラピスト、上部構造、ノーベール賞金、パアスト、ダダイズム、構成派、音畫、バレー、伴奏、悲壯美、オラトリオ、プレリュード、プロット、舞臺照明、未來派、モノドラマ、裸體美術、ラビリンス、リタッチ律格、ルネッサンス、煉獄、ホガースの美線、等の如く、特殊な內容や傳統的意義を存つ言葉が從來る辭書や最近流行して居る所謂新しい言葉の字引などでは到底充分滿足の出來る解說を望まれないからである。

本書はそれらの言葉を、文學、美術、演劇、音樂等より蒐集し、最新語まで悉く網羅して、最も周到、正確な解說を施し、各項には、それぞれ英、獨、佛、伊、羅の原語を附し、卷末添ふるに、世界的な藝術家略傳九十頁を以てして居る。故に文藝の最も正しき理解に入らんとするには本書は、我國唯一の權威書と云ふべく、讀賣新聞曰くこの精緻なる文藝辭典の現れたことは文學界の至大な慶びであると。

發兌　東京芝區二本榎西町二　振替東京一五六五
大阪西區靭上通一丁目　振替大阪五七〇九九　創元社

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふ煙草も一度「カロツト」を口にすれば

再び煙草は吸へぬ、と云ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本社代理部と榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロツト」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロツト」の御注文がありました店員が此事を主人に報告しますと主人は「明日私自身で代理部へ上つて「カロツト」を御説明申さう」と云つて主人は翌十五日午前十時「カロツト」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロツト」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好きな方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロツト」を取上てお試しになりました、暫くして其方は「カロツト」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが社員の方「やつ！之は驚いた、之は煙草が不味て吸へない、煙草がいやになりました、到底煙草等吸へないですね！」驚いたと仰有いました、此の近發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立になつて「カロツト」を取り上げてお試しになりました。

「やあこれでは煙草は吸へませんね！」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞讃下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロツト」を御用ひになれば何等の努力を要せずして再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロツト」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

特徴

外見恰も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に 溫雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は煙草に對する永き嗜好を離れて 再び顧みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を治すべし。

カロツト（凡百日分）

ベークライト製パイプ付 **金貳圓五十錢**（カロツト味一瓶 きらひ液一瓶）

象牙製パイプ付 **金參圓五十錢**（カロツト味一瓶 きらひ液一瓶）

送料（內地十八錢 臺、朝、樺四十五錢）

引替送料（內地三十錢 臺、朝、樺五十五錢）

發賣元 榮川堂 東京府大森不入斗八二八 振替東京五二九一一番

御注文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

○代金引替は御便利の郵便局を御申越願升

代理店 天下堂 東京市京橋區瀧山町十三番地 振替東京七〇六八番

現下の諸問題

財界の伏魔殿、預金部

杉山幹

「財界の伏魔殿」——

大藏省預金部が、世人の注意をひくに至つたのは、本年五六月、政府が川崎造船所の救濟の爲めに、預金部の資金三千萬圓を貸出さんとしたのに對し、輿論は一齊に反對の氣勢をあげ、遂に政府をして之を打切るの止むなきに至らしめたからである。尤も識者の間には夙に預金部制度の缺陷に注意し、國家の財政を紊亂し、財界に一大禍根をのこすものとして、その改造の急務を唱導せられ、遂に大正十四年濱口藏相の時代に、預金部制度に一大改革を施したのであるが、未だ改善の根本を逸してゐるが爲めに、此儘にして行けば、今後幾度も今夏の樣な事件を惹起せぬとも限らぬばかりでなく、制度は死物でこれを運用するは人にあるから、普選實施の今日にあつては、特に民衆一般に預金部制度の現況を徹底せしめ、政府當局の行動を、嚴重に監視するの必要があると思ふ。

大藏省預金部に、諸方から預けられた金額は、積りつもつて現在廿一億餘萬圓の巨額に上つて居る。この資金の内には、公私團體の積立金、政府の保管金、供託金並に日露戰時に戰費支辨の爲めに國民の愛國心に訴へて募集した貯蓄債券の買却代等あるが、これ等は極めて小額であつて、その大部分は郵便貯金並に振替貯金と政府の各特別會計からの預金である。殊に郵便貯金並に振替貯金は、預金部總資産の七割以上を占め、預金部は即ち國民が粒々辛苦して貯蓄した郵便貯金の總預り所といふ事が出來やう。されば政府當局は、これを運用するに當つては、最も確實有利な方法を選び、國家公共の利益の爲めにのみこれを放資し、決して一人一個の利益の爲めに、これを運用すべからざるは勿論、タトヒ國家公共の爲めなりとも、その運用方法を誤らば預金部の損失を招き、ひいては國民の國家に對する信用を失墜するに至るべきを以つて、飽く迄も確實有利の方法をとらねばならぬ筈であ

る。然るに大正十四年預金部制度改正前に於ては、かゝる巨額にして且つ國民の利害と密接重大の關係ある、預金部資金を、何處にどう運用するとも、大藏大臣の裁量に一任されて居つたが爲めに、時の政府の黨利黨益を計らむが爲め、政商等の請託に動かされて、一人一個の利益の爲めに不確なる投資を敢てし、元利回收の不能に陷ゐりてゐるもの驚くべき多額に上つてゐる。先年憲政會内閣時代に、この種回收不能に陷り、明かに預金部の損失に歸せねばならなかつた支那參戰借款三千萬圓、支那兵器借款二千三百萬圓並にいはゆる西原借款一億圓等は、これを一般會計で肩代りしたので、預金部の損失にならずに濟んだけれどもこの外に、今日回收不能にして結局預金部の損失に歸すべしと一般に見られてゐるのは、左の通り一億一千餘萬圓の多額に上つてゐる。

漢冶萍煤鐵礦有限公司三千四百十五萬餘圓、裕繁公司四百十四萬餘圓、南洋鑛業公司二百四十一萬餘圓、交通銀行借款二千萬圓、東亞興業會社一千七百十萬圓、中華民國償還内外八厘債券二百二十四萬餘圓、中華民國々庫證券八百七十五萬餘圓、四公利付支那債券元利補償證書二千六百七十六萬餘圓、合計一億一千五百五十萬餘圓

この外廻收全然不可能とはいはなくとも、頗る困難にして自然多額の損失を預金部に及ぼす恐れあるは、目下問題の國際汽船、日本紙業、日本鋼業、合同油脂グリセリン等の諸會社に對する融通金を初めとし、いはゆる事業投資の大部分は、甚だ不利不確實のものなる事は周知の事實である。

もつとも、これ等不確實なる貸付は、直接預金部が融通したものでなく、何れも政府が興銀、勸銀、鮮銀、東拓その他の特殊銀行會社に對し貸付け、これ等の銀行會社から更に貸付けたものであるから、形式上はこれ等の銀行會社の潰れぬ限りは、全然預金部の損失に歸する事はない筈である。けれども事實は全くこれに反し、これ等特殊銀行會社の融資したのは、時の政府の、、によつたものであつて、形式上は預金部から資金を借入れて、これを貸付けた事になつて居るけれども、事實は單に取付いだに過ぎないのであるから、特殊銀行會社は、萬一を慮つて豫め政府から、、をとり、若しその貸付けにして元利回收出來ぬ場合は、預金部に對し、その借入金の元利を返濟するの、、なき事を保證されてゐるのである。さればこれ等の投資にして回收不能に陷らば、事實上直ちに預金部の損失に歸すべきものが多いのである。われ等が今春、川崎造船に對する預金部融資に反對した一半の理由は玆にあるのである。

郵便貯金の支拂準備金を預る大藏省預金部の資金運用は、叙上の如く時の政府の放漫無謀の貸出の結果、かくも回收不能又は困難のもの多額に上つて居るのであるから、これが若し民間銀行であつたなら、直ちに預金者の取付けに逢ふて、大問題を惹起する筈であるけれども、幸に國家に對する國民の信用厚く、取付どころか郵便貯金は年を逐ふて增加し、殊に今春金融恐慌の結果、民間銀行に對する一般の信用失墜して以來、その增加率急激に加はり、僅々數ヶ月にして郵便貯金の增加實に三億二千萬圓の巨額に上つた。隨つて預金部の資金もそれだけ增加され、預金部の資產勘定借方の合計は將に廿二億圓にならむとするに至つた。

國家に對する國民の信用厚く、かくも郵便貯金の增加する事に、素より喜ぶべき事である。けれども預金部資金の運用を誤り、預金部の損失を增大する事は、やがては國民に意外の負擔を課せねばならぬ事となる。今日は特別會計たる預金部の損失であるから、何等一般會計に影響する處ない樣なものであるが、その損失が增大して預金部の積立金を以つて、容易にこれを償却する事が出來ぬ事となれば、結局は國民の負擔を以て一般會計よりこれを補塡して遣らねばならぬ事となるのは、預金部が郵便貯金の支拂準備運用機關である點より見て明かである。いなその例は前記の如く近く西原借款外二對支借款一億五千三百萬圓の一般會計肩代りにあつたのである。かくも預金部資金の運用を誤りたる結果、預金部に多大の損失を生ずれば、結局は一般會計よりこれを支辦せねばならぬ事となり、ひいて國民がこれを負擔せねばならぬ事となるに拘らず、預金部資金の運用に關しては、國民の代表機關たる帝國議會は、何等これに參劃する處ないとは、明かに近代立憲政治の根本に背反する制度といはねばならぬ。いふ迄もなく立憲政治の根本義は國民に財政參劃權を與ふる事であつて、一厘一毫と雖も國民の選出したる議會の協贊を經ずして、國民に負擔をかけ、又は國費を費消する事が出來ぬといふのである。わが憲法に於ても明かにこの理を規定し、國の歳入歳出は必ず政府は案を作つて帝國議會の協贊を經べき事を要求し、たゞ緊急止むを得ざる場合にのみ、議會の協贊を經ずして、財政上の緊急處分をなす事を除外例として許してあるのである。けれども、それすら必ず次期の會期に於て、これを帝國議會にかけ、その協贊を經ねばならぬのに、預金部の資金運用に關しては、大正十四年預金部制度を改正する迄は、全く大藏大臣の自由裁量に一任されて居つたから、遂に伏魔殿と化し叙上の如く、多大の不良固定貸出を生ずるに至つたのである。されば歐米の諸邦に於ては、預金部の資金運用に關しても、議會の協贊を經べき制度を有するもの少くない。わが國に於いては大正十四年の改正に於ても、依然として運用權は政府に一任し、たゞ運用に先立つて、一應政府の任命する預金部資金運用委員會に附議せねばならぬ事となつたに過ぎぬ。しかもその運用委員會の委員の多數は、政府の官吏にあらざれば、政府がその任免權を持つ特殊銀行の首腦者を以つて組織されてゐるから、政府にして無理に自己の計畫を押通さむとすれば、いつもこれをなし得る事になつてゐる。現に現政府が川崎造船救濟の爲めに、興銀を通じて預金部資金の融通をなさむとした時の如きも、無理にこれを通過せしめむとした處である。されば運用委員會を設けても、その委員にして政府と全く獨立不羈の立場にあつて、眞に嚴正公平の判斷より可否を決する事が出來なければ、十分の効果を擧くる事能はざるのみならず、或は却つて委員會を惡用して、國民を僞るものを生ずる事なきを保し難いのである。この點より余は議會の協贊を必要とするを原則とし、緊急止むを得ざるもののみを、政府の緊急處分に委する事、一般財政事項と同樣ならしむるを理想とするものなれども、わが國の議會が會期甚だ短く、他の常時議會を開きゐる國と同樣にする事能はずとすれば、すべからく運用委員は、政府の官吏、會計檢査院を除く、又は政府の任命にかゝる特殊銀行の總裁等を全く除外して、全然民間より嚴正公平に選任し、若し必要とあらば關係官吏や銀行の總裁等は委員會

に出て說明し得る程度に止むるのが至當と思ふのである。

しからば預金部の資金は如何なる方面に運用すべきかといふに、これを決するには、先づその資金の性質を調べるの必要がある。預金部に集まる資金中には、政府の特別會計の預金その他雜多であるけれども、郵便貯金がその總額の六七割、多い時には八割を占むる事あるは叙上の通りである。されば郵便貯金の性質を以つて預金部資金の大體の性質と見る事は、必ずしも無理ではなからう。しかして郵便貯金の現狀によつて見れば、二百圓未滿の貯金者は約半數を占め、又その職業別調によれば、農業最も多く、次は商業であつて、官吏軍人、職工、學生等の預金を合せその過半數を占めて居るから、郵便貯金は地方細民階級の零細なる資金の集積であると云ひ得るであらう。されば銀行營業の大原則ともいふべき貸借對應の點より見るも、又は歷代政府が勸奬せる資金の地方還元といふ點よりするも、はたまた近年各政黨の高唱する社會政策的の見地より見るも、預金部資金の運用は、地域的には地方を第一とし、階級的には細民階級の利益に重きを置くべきもので、要するに預金部資金の運用は、一般地方的社會政策的なる事を原則とすべきであつて、決して一地方や、一人一個の利益に偏倚すべからざるは勿論、富者階級の利益の爲めに、これを運用するが如きは斷じて許すべからざる處である。しかるに從來わが預金部の資金運用は、上記の如く政治家や政商の利益の爲めに、數多の不良固定貸付をなして、今日回收困難に陷つてゐるばかりでなく、全般的に見て資金運用の範圍は前記の運用方針と相去る事甚だ遠きものあるは遺憾とせざるを得ぬ。卽ち昭和元年末に預金部資金を如何なる目的に運用して居つたかを調べて見ると、地方資金に供用したのは、資金總額の僅かに三割一分餘に過ぎぬのに、地方的にも細民階級の利益の爲めにも甚だ緣の遠い、いな却つてそれと相背反する朝鮮銀の整理資金貸付を初めとし、數多の內地事業、並に支那、南洋等のいはゆる海外事業に投資し、しかも、これ等の多くは回收至難と目されてゐるものなるは誠に遺憾にたえぬ。

しかのみならず、今日預金部資金の約三割七分は、政府發行の公債を引受けたり、一般會計並に特別會計へ貸付けたりして、いはゆる財政上の遣り繰りに利用されてゐる事の頗る多いのは大いに注意を要する處である。これ等の內には鐵道、治水、その他、間接に地方の利益になる事業もある事は勿論なるも、それだけ直接に地方を潤ほす預金部資金の地方運用額を減じて、地方の利益を減殺するばかりでなく、財界の形勢が公債募集や經費の膨脹を許さざるに拘はらず、政府をして預金部の資金を利用し、無謀放漫の財政計畫を立つるに至らしめつゝある事は、最も恐るべき弊害といはねばならぬ。しかし大正八九年以來政友會內閣が預金部資金を惡用し、その弊の今日に及ぶ處頗る大なるを以つて、預金部整理の必要は識者の間に高調され、隨つて從來最も亂暴に行はれて弊害の大きかつた、內地事業資金や海外事業資金の貸出は漸次減少し、その代り地方資金の漸增するに至つたのは、誠に喜ぶべき事であつて、此意味よりすれば、現政府の近來實行に着手した、郵便貯金激增による預金部の增加資金を地方に還元するの計畫の如きは、何人がその局に當るとも、當然なさねばならぬ處であるとはいへ、機宜の處置たるを失はぬ。けれども現內閣は往年の失敗にもこりず、

用者登記救濟の爲めに、猛烈なる輿論の反對をも押切つて、預金部融資を敢行せんとした程であるから、なかなか油斷もすきもなるものでない。すべからく國民は監視の眼を嚴にして、腐敗政治の極に達した既成政黨の盲動を防がねばならぬ。

行動に理論に創造の水平運動

水平社同人　深川武

一、水平運動の現勢と一般社會人への警告

嘗て、その熱情的なる、その深刻なる闘爭振りに、、、、、は水平運動より、とさへ一般社會運動に期待され、吾等の先輩又「特殊部落の解放は全日本の、、化にある。」と說き「六千部落三百萬の兄弟よ團結せよ！」「闘爭に依りて解放へ！」等の合言葉の下に、一瞬にして甚大なる職線を獲得したる我水平運動は今や、漸やく世人に忘れられんとし、今や漸やく社會運動に落伍せんとさへしてゐる。而して或人はこれを、學生運動、婦人運動、青年運動等、派生的運動の凋落と共に數へ、支配階級又一安堵してゐるかの觀があり、反面に、九州福岡の聯隊當局は「ビラに勝つたとまいたから謝罪講演會を取消す」とまるで子供でも言ひさうなことを云つて拗ね、三重縣津の刑務所長某は「、、に、、と云ふが何の不思議があるか」と、寧ろ眞僞を疑はざるを得ない程の暴言を吐き、其他差別事件は各地に續々と惹起されてゐる。

私は、劈頭先づ、差別的一般社會人に警告を發せざるを得ない。人間が、他動物と異るの所以は正義を識る點であると聽く。然らば、差別觀念を脫却し、動物でない、畜生でない人間ならば、正義を識るの故を以つて大いに謝罪せよ！　と大聲叱呼したい。謝罪は正義を識るものゝ執る唯一の方法である。正義は即ち、これを最大限度に一般社會人に傳へねばならぬ。人類社會に缺く可からざる道德である。「過つて改むるに憚る勿れ」である。

二、運動行詰りの原因は何か？

水平運動今日の不振には、その原因があらねばならぬ。種々の原因の中。私は眞個の「水平運動の信念と理論の確立」がなかつたことがその最大であらうと思ふ。一個の觀念的運動であつたことである。

抑ゝ水平運動は、直ちに、勞働運動でもなければ、ボルセヴヰキ乃

至アナーキズムの運動でもなく、況んや民族運動、宗教運動でもなく、日本に起つた、世界に一つしかない（類似の運動はあらう）一個の社會群の民族的、階級的人類解放運動である。それを、此種の認識の相違に基き、直譯的イズムに迷ひ、夫々のイズムの觀念に捉はれて或は焦つて過程すべきを過程せず直イズム化を圖つたところに無理を生じ、却つて運動不振の因を作つたのである。

勿論、我々部落民は階級ではない。一の民族でもない。然しながら我々に對する賤視差別觀念が、因循にして固陋なる階級的偏見に依る賤視觀念であり、民族的偏見に依る差別觀念であることは何人にも異がないと思ふ。

我々の運動に興味と研究を有つ或人は、現社會人の我々に對する民族的、階級的差別賤視觀念は、朝鮮、支那の人々に對するより以上に濃厚であることを私に語つたことがある。

然らば、その戰略が自づと民族的、階級的人類解放運動の形態となるは當然ではあるまいか？

有産者イデオロギイに對する無産者イデオロギイの夫の如く差別者イデオロギイにも亦被差別者イデオロギイが對立し得る。

その永く、重かりし虐げは我々の運動をして急激に戰線を擴大せしめ、餘りに政治運動的であり過ぎ、充實を計るの遑もなき程、經濟的運動乃至經濟方面に無關心であつたのである のみならず、一種の宗教的運動の一面をさへ有つてゐると觀られる節があつたのである。

即ち、從來の水平運動は政治運動的、宗教運動的、思想團體的、無組織的であり過ぎ、經濟運動的、組合運動的、認識的、組織的運動で無かり過ぎた。從つて運動の經濟的基礎は確立しなかつたのである。政治運動の夫れの如く趣旨に賛成の同人は最初は私財を費し（最後には墮落である）、宗教運動の夫れの如く有志の寄附に依り、或ひは職業の餘暇に夫々。水平運動に身を投じ、大會に集會に東奔西走し、個々差別爭議を解決するや、勞働爭議の如く經濟的條件の獲得でなく、誠意（？）眞人間（？）等の架空的獲得であり、やればやる程經濟的に窮迫し、更に思想團體的運動は大衆運動として非現實的にして無責任であり、無組織的運動は維持費の徵收すら困難に在らしめた。よしんば維持員制の確立にもせよ、部落の經濟を共喰ひする運動であつたのである。

腹減つて戰爭は出來ぬ。然り、我々の水平運動は經濟的基礎の確立なく、空腹に抱てゝ加へて水平社内一部マルキシストの、所謂水平運動の政治鬪爭化！ の提唱は更に戰線を混亂に陷らしめて了つた。

三、これ位で甦つて堪るものか！

斯くして我々の運動はその情熱を冷まし、經濟的に疲勞し、精神的に混亂し運動の指針たる人類最高の完成や、部落民の解放どころか差別爭議は各地に散在し、少數有志の惡戰苦鬪に依つて纔に戰線は保たれてゐる。

然らば、水平運動はこれで甦るか？ 否！否！否!!! 斷じて否！これしきで甦つて堪るものか。一千數百年この方、、、新平民、特殊部落民等の烙印の傷痕は我々の魂に痛く、解放未だし矣！ である。

我々は過去六ケ年の運動を清算し、生命にも代えて運動の更生を圖

らればならぬ。更生への運動に、曝露政策も可、進出も可、然れども曝露戰術は時と場合に依りけりで、今日の水平運動には最早、一時的、姑息的、彌縫的更生策では眞の更生は難い。殊に縣議、代議士等の選擧目當に選擧民を釣るが如き野心の政策であつてはならない。それこそ笛吹けど部落大衆は踊らずである。

實に、根本的更生への水平運動でなければならぬ。

四、更生への水平運動

1過程としての民族的、階級的運動の意義

水平運動の使命に就いて或人は言ふ「部落民は民族でも階級でもない。が故にマルクスの二大階級の對立へ鎔け込んで了ひ、水平運動は自然消滅する。」と。

これは重大なる問題である。この指導理論を懷く水平運動が運動を迷はしてゐる。一面、これを指導原理とする水平社やマルキシストが指導的立場に立つて更に運動は行詰つたとも觀られる。

私は水平運動が消滅するとのかゝる追隨的公式的見解に反對である。かくの如きは眞個の水平運動と成り難く、謂ひ難い。

即ちこの見解は、勞働運動に於ける爭議に等しき水平運動の糾彈行爲を浪費的戰術と爲し延いては拋棄せんとして見事に失敗した。

失敗に澱りてか、右の見解を、縣議、代議士等の選擧に、一政黨の爲めに橋渡し的、過程的に辯證し展開を裝ふに至つては滑稽であり唾すべきである。

峻烈たる二大階級の對立は必らずしも部落民に對する賤視差別觀念の消滅を意味しない。

唯物的、、、に依つて部落民は解放される、と何人が保證し、又保證し得るか？

我々が惡戰苦鬪の六ヶ年も、血みどろな更生を叫ぶ所以も、實に、この保證無きが故ではないか!!

公式通りに行けば明治四年、或ひはそれ以前に既に我々は解放されてゐなければならぬ。

私は更生への水平運動は原則として、飽迄自律自治千數百年來の證據を基調としての創造的運動であり、過程的には民族的階級的解放運動であつても差支へないと思ふ。何故なら我々は日本に於て民族的階級的に差別、賤視せられてゐるが故に。更にこの民族的偏見と云ふ奴は國際的無產階級運動であるにせよ、民族の相違、氣候風土の相違其他、言語の相違等に依り無產階級解放の最後の段階まで殘る難問題であると思ふ。この國に於て我々は民族的偏見より解放さるゝとしても、、、、、の人々に對する偏見、或ひは歐米に於けるユダヤ人、黑人に對する差別迫害の事實は如何？朝鮮に於ては日本に於ける吾々の如き白丁を、、、、してゐるではないか！足下日本無產階級運動の鬪士にすら差別感がゐた——ゐる——ではないか！自由、平等、博愛は言ふに易く、行ふに難い。

以上の理由に依り我々の水平運動は、人類解放運動の一翼として、無產階級解放運動の陣野に在り、その民族的偏見に依る差別觀念の國際的打破を叫ぶに、宛かも戰爭に於ける特科隊の央の如く、最も缺まり役であると思ふ。即ち使命は無限である。私は水平運動の民族的階

級的運動が時代後れ、流行後れであるとは思はない。が、早まつては不可ない、私は民族的、階級的運動だと云ふので、民族運動ではないのだ。即ち懸つてこの一字の的（やうな）運動であると云ふのだ。

2 潜在的差別觀念の打破と勞働者、農民、水平社の聯合解放軍

水平運動の使命に就いて或人は又曰ふ「水平運動は差別撤廢運動であつて、無產階級的運動ではない」と。

私はこれにも反對である。人類最高の完成を期する（綱領）我々の運動は、一切の差別を撤廢すべきであり、差別の發生原因たる、、、、、、、に斧鉞を加へなければ我々の眞の解放は難い。支配や搾取のあるところには差別もある。即ち目に見え、耳に聽ゆる差別は或程度まで之を徹底的糾弾し得るも、目に見えざる、耳に聽えざる差別は如何にして糾弾するか？　そは一に無產階級の正義運動に應じ、共同戰線を張つてこそ成される。

私は日本の無產階級解放運動に於て勞働者、農民、水平社の三大自治聯合解放軍でなければ、我々の解放は難いと思ふ。

部落民の利害より人類共同の利害へ！　である。

3 人間禮讃、自治聯合主義運動の確立

水平運動はその創立の當初、人間禮讃の大旆を翳して出發した。人間を禮讃せよ！　このモットーはブルヂユアジイすら反對する何等の理由を有しなかつた。或地方の警察署長の如きは水平社創立大會に自ら祝辭を持參し、或地方の警察署長はその臨監せる水平社大會に、一少女の差別迫害談に不覺（？）の涙を落した。鬼の目に涙である。

斯くの如き情勢は一時的現象に過ぎなかつた。我々の運動の正義が尖銳化するや、ブルヂユアジイはその似而非人間禮讃の馬脚を露はして、融和運動の苦杯を盛り、或ひは彈壓とはなつた。

この一時的現象にも拘はらず水平社内のマルキシストは「人間禮讃はブルヂユアでも云へる、餘りに漠然としてゐて宗教的臭味がある」とてこれを厭ひ一般無產階級的マルキシズム的お手盛澤山の文字の羅列に變えんことを力說し來り、この人間禮讃の聲は水平運動より聞かなくなつた。

然しながら支配し搾取する彼等に、支配、搾取を支持する彼等に人間禮讃を唱ふる資格は全然無かつたのである。

漠然とは云へ人間を侮蔑せよ！　の旗印は掲げ得まい。人間を禮讃することが宗教的臭味ならその臭味又何の差支へありやだ。

我々は須らく、此の大旆の下に更生を圖るべきである。強權的でなく自治的生產者的人間禮讃の大旆である。我々の運動は滿身これ正義でなければならぬ。然り、正義は力である。正義の前に我々の陣容を整ふべきである。

即ち我々は部落民にして支配し搾取し、又は支配や搾取を支持する人々に告ぐ。諸君は速やかに汝等の罪惡を自覺し、止めよ！」と。

この自覺なき部落民は一般無產階級運動の正義の名の下に糾弾されても仕方がない。と同時に、無產階級の運動であれ、何であれ、部落民を差別するの徒輩は我々の人間禮讃主義の名の下に糾弾されねばならぬ。

かくして、「特殊部落民は部落民自身の行動に依り絶對の解放を期す」の綱領と共に人間禮讃自治聯合主義の確立を期し、無産階級解放運動の陣營に、人間禮讃の大旆高らかに人類解放運動の一翼として從軍すべきである。

4 水平運動の經濟的基礎確立と消費組合運動と水平社の自治的生産者的、、、、、

經濟的基礎のない運動の總てが行詰るのは云ふまでもない。我水平運動は淨財に依りて解放への名の下に經濟的に疲弊して行詰つたことは先きに述べた。

然らば、何に據つて經濟的基礎を確立すべきか？ 私は消費組合運動を措いて他にないと思ふ。この消費組合運動は、又一面、世界の歴史にその危險性を示してゐる政治運動に勝る運動たらしめることも可能と思ふ。

勞働組合運動其他に聞く消費組合運動は、、、意識が鈍る等の反對論は暫らく措いて、勞働組合、農民組合に非ざる我水平社に於てはこれ以外に經濟的基礎の確立は望めないと思ふ。

現に京都の如き其他にも湯屋を組合的に經營し、各戸交替に毎日或ひは毎夜、番臺に據はつて自治的訓練を經つゝある。この湯屋の如きは一般民が部落民との混浴を嫌ひ差別するの結果、必然的、自衞的に起したものであるけれども、それ以外にも、直接には部落の經濟を整へて水平運動の經濟的基礎とし、間接には資本主義經濟組織變革への一助とし、新社會への訓練を經べく部落々々に意識的に消費組合運動を旺んにすべきである。

五、結論

又、我々部落民中の多くは生産者たること、工場勞働者たることとすら阻まれて來た結果、生産者運動に從事するものも少なかつた。

我々は、その賤業の故を以て我々に與へられてゐた皮革、製靴、製履等の諸産業を中心に、これ等失業無職者を擁して強固なる無産階級的生産組合を組織し、無産階級の諸消費組合運動と相呼應し生産者としての威力を發揮すべきである。

斯くの如き、消費、生産組合等の運動に依りて水平運動の經濟的基礎を確立し、適材を適所に、大いに水平社の有給書記を設け、全國的に、、、、、、、、、、、、、、兩様の陣立てをすべきである。

勞働諸團體に伍する、水平社の生産者的、自治的、、、、！である。

これ以外、職業の傍らの運動も、水平運動業者の運動も碌な成果は擧げ得られまいと思ふ。このまゝにして推移せんか、纔かに地方農民運動にその團結的訓練を殘すのみにして、我々の水平運動は自滅あるのみである。

消費組合運動に依つて鈍るが如き、、、、、、、、、、、意識に過ぎぬのではあるまいか？ 、、、、、、、、、、、、、、、を唱へたところで空言である。熱情は一時的である。我々は寧ろ、この消費組合運動に依つて我々の感激の、情熱の水平運動を生かさなければならぬと思ふ。

然しながら、此の消費組合運動は日本の如き社會的、共同的訓練に乏しい國民性には至難の業である。資本主義經濟組織下には尙更至難であつて、觀念的、抽象的、、、、、、、、、、、寧ろ至難とさへ思はれる。

その至難の業を突破してこそ、その他、運動、、、、、、とを一致せしめてこそ水平運動の更生はあり、未組織數千部落を動員して特殊部落民は解放される。

ロ八丁、手八丁であれ！

全國に散在する我特殊部落民よ團結せよ！

中國國民革命と勞働組合運動

特殊的其の一部

山本懸藏

■

今私が此の處に記述せんとすることは、私が今回、中國に旅行して、中國無產階級運動の一半の智識を得た。全部ではないことを、おことはりしておきます。

■

今日中國全土に發展しつゝある處の、勞働運動を論ぜんとするならば、其の政治的發達の歷史を一應明にせねば、現段階の中國無產者運動今日の發達現情が明白にならぬ。

尙中國のあらゆる方面に對外的あるひは內國的に、いくたの特殊的其の運動が今尙存在する事である。今此の處ではそれを、あらゆる方面から、くはしくすることが紙數の關係上、ゆるされないから、問題を組合運動の一部に極限して、其のがいかつを述べることにする。

■

今日國際政局の主要なる、問題として、其の中心をなし、形成してゐるものは、中國國民革命である。この國民革命はフランス革命や、一九〇五年のロシア革命とは、本質的に異なつた、特殊情勢のもとに發展してゐる。

特殊とは、中國が永年帝國主義諸國より、政治的經濟的に、半植民地として隸屬的地位に、おかれた事である。

尙中國革命が、ブルジョア民主主義革命と區別することは、國際的

無産革命運動の一部として、其の本質的發展の一部をなしてゐること、これである。それは今日の世界資本主義の沒落期に生起したこと、だから中國革命運動の歷史及び、その過程に現はれてくる、社會的諸勢力の階級的結合に決定的影響を及ぼしてゐることである。

■

外國帝國主義と內國反動勢力との結合——一方國際プロレタリアートと中國勞農大衆との結合がある。今日中國革命が前記の如く、其の運動が國民革命の埒內で止まることなく、すなはちブルジョア的統一國家を建設するではなく、中國革命運動の發達——其の進行は上海の、反動勢力を倒すためには、直接の同盟たる帝國主義をも擊破せねばやまぬ、だから今日の中國革命運動は、不可避的國際プロレタリアの運動に合流して其の發展を示してゐる。尙此の發展は殆ど何ものの豫期することのできない程、すばらしい速度をもつて進展した、また將來もするであらう。

■

かくした情勢のもとにあつて生起した、勞働組合運動も、また、おのづから各先進國では見る事のできない程の急速な其の發達と特殊とをもつて、進展し、また、してゐるのである。只一つ其の生起と發達の同一的歷史を同じくするものは、ロシアの勞働組合の發達と同一に見ることができやう。それは革命其のものの發展とその成功とに、ともなつて生起した點に於てである、

だから中國勞働組合運動が中國革命「國民革命」と、其の政治的任務に於ての、むすびつきが諸外國で見る事のできない程密接である、勿論組合運動の任務は經濟方面に存するであらうが、中國革命と中國一般大衆の要求は打倒帝國主義……打倒軍閥……にあること、これである。

此の運動の成功のために、その一翼としての組合　中國國民革命黨『中國大衆共同戰線、國民黨』と、はなすことのできない、この兩者の存在である。しからばいかなる發達と發展とを勞働組合はつゞけつゝあらうか。

今此の一半をのぶるに、中國の組合運動の歷史と其の發達の、過程にあつた、組織の數字とか、明白でないことを、遺憾とするものであるが、其の概括を追ふならば、こゝ數年間に發達したことである。すなはち、中國國民革命と共に又組合も發達したことである。

中國の組合運動の歷史として國際的に我等の知ることのできたのは、おそらく一九二二年頃よりである。其の組織上に最も明白に又階級に活動をし、來つた勞働者は南方にあつて、鐵路工人會と、國際的に團結の特質をあらはしてゐたのは、海員工會工人であつた。

■

中國革命政府の樹立は、孫文の三民主義遂行のため、勿論大衆と革命政府の結合方法としての手段にすぎない。勞農大衆に其の結社の自由をあたへたのである。勿論これは國民革命政府の社會政策である。此の革命政府の政策と、あひまつて、勞農大衆の間に組合組織運動が生起發達した、南方に於て、廣東省勿論であるが、この影響を受けて各地に於て、大衆的に其の運動がまきおこされた。

其の特質的なものは、上海に於ける、組織工場勞働者によつて、其

の端を、はつした。一九二四年五月卅日「五卅事件」これである。

次に上海の組織労働者の一部を示さう。

一九二七年三月現在

一組織組合數　一〇八組合

一組織人員數　二八七、〇四二人

以上の組織労働者中紡績工場の工人によつて、一九二四——五月經濟的要求が資本家に提起されたのである。それは賃銀の値上、労働條件一般的な改善等々であつた。『賃銀の値上とは小洋の四拾仙を大洋四拾仙に加算せよとの要求である。小洋の四拾仙とは我が日本參拾何錢である中國紡績一人前労働賃銀左の如し。』

尚我等が特筆すべきことは一同要求の内に一中國労働者『工場に働く人』をウタざる事の一項目である。いかにこれが特殊であらう労働爭議の場合。其の要求は中國に、投資せる各資本家に提出したのである。

是等の要求が各國資本家『帝國主義者間』の虚説と、其の暴壓により、此の組織労働者の經濟的運動が導火線となつて、あらゆる階級との結合となり、中國特殊の運動、一大反帝國主義運動へと轉化し、一大大衆運動が、まき起されたのである。

中國工人に對する帝國主義者等の彈壓は、労働階級と中間層との結合となり——ひいては一般人民層との結合となり、労働者——學生——商人——中國工業家等々の結合として、あらはれたのである。

労働者の資本家に提出した要求かんてつされるため、成功援助のため商工學聯合會なるものすら組織され、かうした各組織の結合が一部分的労働者間の要求であるにもかゝはらず、帝國主義者等の彈壓はこの組織結合を一大政治的反帝國主義運動として激化せしめたのである。この經濟的運動が一大政治運動へとの轉化は其の主導者のよろしきを得たることは事實である。

此の中國の歴史的必然である處の大衆の運動を暴力と其の武器によつて暴壓したものはだれであつたか、それは、米英等々の帝國主義等であつた、やがてこれが、中國干渉出兵となつたのである。

一九二四年五月上海『五卅事件』も帝國主義者の中國干渉陰謀と其の出兵に起因したのである。中國の一般大衆要求の此の運動を暴壓せんとして、いくたの労働者——學生——其の他の無産階級の前衛分子を虐殺したであらうか。此の運動はそれでやまなかつた

此の處で一九二四年上海事件を記述したことは中國の無産大衆運動と上海事件とが多大なる關係をもつからである、また一方組合運動としても淺からぬ關係をもつからである。

■

何故淺からぬ關係があるか、それは次の樣な事實があるからである。上海五卅事件が中國大衆運動中に今尚一紀念日として存在することと、この上海事件全體を通じての行動及び其の精神が革命的であつた事である。

だから現在の中國無産階級運動上に一つの合言葉として此の事件が取あつかはれてゐる。のみならず一九二四年上海の労働者が其の組織の活用によつて一大運動を起すや、南方各地に其の影響をうけ、各地労農大衆間に組合組織それが導火線となり、してその組合組織運動が

擡頭したのである。

當時勞働者の組織された地方は──廣東省一圓時に廣東を中心とした鐵路工人、工場工人、海員工人及び農民間に『廣東省に於ける』一、一〇〇、〇〇〇人等と浙江省一圓上海を中心としての勞働者組織であつた。紡績工人──金屬工人──港内工人──其の他一般交通工人等各種産業の間に勞働組合が存在しただけであつた。『上海事件當時の情勢』

其の他一般關係團體を合すなら上海の組織人員數三五〇、〇〇〇餘である。

一度び上海の情勢が各地に傳へられるや──廣東──漢口──漢揚──武昌──長沙──南京北京等々に無産階級運動の鋒火が一齊にあげられたのである。けれ共組合運動は、尙上海事件當時にあつては、廣東、上海以外の地方では、まつたく、其の運動が秘密的行動によつて行はれてゐたのである。

一方上海工人の經濟的要求が、一度政治的方向に轉化されるや、中國國民革命の先鋒として、勞働者が一齊に立つたのである。

問題にはさらに發展し、廣東國民革命政府が、北伐を聲明し、南方が武漢の地に進出し、國民革命政府の政治機關を此の地に移すや勞農大衆の間に其の組織運動が、いちじるしき勢をもつて發達をなしたのである。

革命政府は此の地に進出するや勞農階級の生活の保證──勞働組合法制定──農民政策──勞働保險法制定──勞働者の賃銀に對する改善小作農民の耕作權の確立等々の問題に對して無産階級の生活を保證する、社會政策の實施と相まつて、政府當局の保護のもとに、勞農大衆の間に組織運動が急激に湖南省──湖北省地方に其の發達を示したものである。

此の間に中國國民黨の分裂によつて、出現した新軍閥反動主義者蔣介石──廣東反動化──と、眞の中國革命政府武漢政府の出現である。しかしこの問題は此の處では記述せぬとしやう。だが一應明白にしておく事は、武漢政府下にあつては勞働組合──農民組合──一般勞働者の組織が政府の保護のもとに存在すること──時に共産黨が公然と其の組織をもつて大衆の前衛として、階級爭鬪の主導者として、存在してゐる、との事實である。

他方反動主義者蔣介石の進出により、すなはち南京政府下にあつては反動政策による處の、組合運動に對しての彈壓と組合に解散を命じ、組合幹部を虐殺をした、との政策が一方に行はれた事實である。

この兩者の出現が、中國國民革命運動の進行と相まつて、無産階級解放運動、其の過程に於て左右兩翼の對立となつてあらはれた。

中國の勞働組合運動が以上の樣な社會情勢のもとに、其の運動と鬪爭とを行ひつゝあるが故に、おのづから部分的地方的に其の組織及び運動上に特殊が存在することとである。

紙の關係上それも時日をあらためて記述しやう。組合組織された勞働者の一部

一武昌　八〇組合──二〇〇、〇〇〇人員數

一上海一〇八組合──三五〇、〇〇〇人員數

これは其のおもなる一部を示したものである。最近一ヶ年間ストライキ

件數一六九——參加人員——二〇二、二九七

■。

次に組織農民に對して一寸を述べやう。

中國の農民大衆の間に組織運動が行なはれたのは最も新しい歴史である。これは農民協會として、廣東政府獨立後であり、南方政府により、北伐を顯明し北方に進出してより、其地域に組織をもつにいたつた様な最も近來に、其の組織が農民の間にできたのである。だがしかしこの運動が中國の國民革命と相俟て、いくたの特殊的特長と急足なる發達をとげてゐることである。

組織農民數『農民協會』一九二七年參月

一廣東——一、一〇〇、〇〇〇
一廣西——五〇、〇〇〇
一湖南——一、二〇〇、〇〇〇
一湖北——二七〇、〇〇〇
一陝西——一五〇、〇〇〇
一福建——二五、〇〇〇

以上の數字は最近一ヶ年もしくは數ヶ月間に組織された一部分を示したものである。

農民大衆の特筆すべき運動は、湖南省地方に於て見る事ができる。地主小作農民との間に經濟的闘爭が激化し、それがやがて政治的闘爭への轉化によつて、五拾餘にあまる地主より、土地の奪還、農民協會の土地監理等これである。この闘爭に、あくまで、がんばつた地主はかつて——反動主義者新軍閥蔣介石が、上海で勞働者に行つた彈壓の、その、反對が湖南省の農民大衆の間に行はれた事である。

尙今日の中國國民革命の進行と共に、中國無產階級解放運動が、いかに發展するであらうか。

廣東の反動化——上海現情——公然と共產黨の存在する武漢の地——何ものにもその觀測をゆるさないであらうか。

中國の一般的無產階級運動に對しては後日、あらためて記述しやう。

此の稿にあらはれた中國の諸情勢も今日すでに、かはつてゐるとのことをことはつておく。（一九二七年　九月六日）

樺太の旅

穂積重遠

一　樺太と臺灣とドッチが大きい

此夏は眞岡に於ける夏季大學に招かれた序に樺太を旅行した。樺太を旅行したと大威張りで云い得るには、北緯五十度の國境標石を撫し、海豹島にオットセイ・ロッペン鳥の活躍を見て居なければならぬのだが、時日の少ないのと交通の不便とが私にそれを許さなかつた。しかし普通に所用で樺太に行く人の大泊・豐原・眞岡限りで歸るよりは、少しは奧へはいつて見たのであつて、邦領樺太の南半即ち邦領中先相當に手のはいつて居る部分だけは一巡したこと故、紀行を書いて見る價値が全然ないのでもあるまい。

其上樺太の事が割合に內地に知られて居ない。「樺太と臺灣とドッチが大きい」と卒然問いかけたら、多くの人が「臺灣」と答えはせぬかと思う。事によるとサガレン島全部の事とさえ思つてそう答える人があるかも知れぬ。所が全島だと面積約五千方里で北海道本島に匹敵し、邦領樺太は面積二千三百三十九方里で、臺灣の二千三百三十二方里より少し大きい。そう聞いて意外に思う人があり得る位、樺太は注意されて居ない。

旅行をする前には出來るだけ其地方に關する文献を讀むことにして居るのであつて、一昨年の滿鮮旅行の際には讀み切れぬ程の參考書があつて困つたことは、其時の旅行記(中央公論十五年一月號二月號)にも書いたが、今度の旅行前にも書肆を漁つた處、普通の本屋で賣つて居る樣な樺太に關する本は一冊もなかつた。ただ樺太廳編纂の「樺太要覽」が一冊、又向うへ行つてから同じく樺太廳編纂の「樺太沿革史」を手に入れただけだつた。それ程樺太は紹介されて居ない。それ故此樣な平凡な紀行を書く氣にもなつた。

二　カバフトかカラフトか

そう云ふ私自身が抑も「カバフト」か「カラフト」かが確かでなかつた。此夏はどこに行くかと云う話が出ての返事に一寸突つかかる。そこで大學の食堂で問題にして見た。先輩諸先生の說はいづれも「カラフト」が本當だらうとのことだつたが、弟子は即座にハッキリしなかつた處、寺田某教授からエンサイクロペデイア・ブリタニカにアイ

ヌ語とあると教えられた。所で向うへ行つて見ると、樺太廳の御役人にも「カバフト」と云つて居る人が少なくないが、「カラフト」が本當に相違なく、以前は「唐太」と書いたと云ふ。所で前記のアイヌ語説も必ずしも定説でなく、固有の地名でなく邦人が附けた名だと云ふ説も相當に多い。唐人島の奥州訛りだと云い、「カラト」で唐の入口の意味だと云い、空太で大きいが物資のない所謂「うどの大木」の意だと云う説などもある。或は樺の樹が多いから名附けたと云う説もあるが、それは「カバフト」とよむのでなくては辻褄が合わぬ。土語だと云う説は、「カラフト」とは「えび」の義で、島の形がそれに似て居るからだと云うが、餘りあてにならぬ。要するに諸説紛々で、島名からがまだ研究が足らぬと云わざるを得ない。豈それ名稱のみならんやで、此見聞記の結論は「要するに樺太はまだ充分研究されて居らぬ」と云うことに歸着するのである。

三　大　泊

八月五日午後十時半の常磐線急行で上野を立ち、青森函館間は連絡船翔鳳丸、北海道は函館稚内（ワツカナイ）線を經由して直行し、連絡船壹岐丸で宗谷海峡を渡つて、八日午前七時に樺太の玄關口大泊港に着いた。丸二日半の長道中も、札幌に於ける改造社の講演會に行く久米正雄・吉江喬松兩氏、私と同じく眞岡の夏季大學に行く東京高師より北澤種一教授・大泊町長大野順末氏・第七師團の阪本順中佐などと乗り合はせたので、さして退屈しなかつたが、車窓外の景色は極めて單調、初めて通る札幌稚内間も一向北海道らしい情景が見られないで失望した。

其代り津輕宗谷の兩海峡はよかつた。いずれも海上極めて平穏、前者は夕から夜にかけて、後者は夜から朝にかけての航海に、それぞれの風情があつた。殊に八日の午前四時二十分、宗谷海峡に夏の名物ガスの氣もなく、澄み切つた水平線上の大空に、火の玉の躍るが如く見る眼眩しく昇つた朝日の美しさ、心なき法律家をして思わず

　船旅の幸を祝ふかくれなひの
　　面かがやかし朝日は昇る

と口ずさましめないでは置かなかつた。樺太方面は大氣が澄んで居て、朝日夕日空の色海の色が特に美しい。

所で兩海峡の連絡設備だが、津輕海峡の方は殆と理想的だ。連絡船は兩端の汽車に不似合な程立派な大きな船で、しかも汽車から船へ船から汽車へと乗り移るのに廊下傳いで雨降りにも傘指さずに行ける便利さ、其昔の奥州外ケ濱と蝦夷ケ島とは殆ど陸續きになつたも同然だ。貨車を船腹へ其儘積込み積出し得るために、陸上のレールと船中のレールとが船尾で接續する具合など、文字通りの陸續きだ。

これに反して宗谷海峡の連絡は頗る不完全だ。連絡船の壹岐丸田村丸等は千何百噸のかなり古い船だが、これでも結構我慢が出來るし、やがて三千噸級の新造船が出來ると云うことだから、船については文句がないが、兩端の港灣設備が心細い。即ち稚内でも大泊でも、船は横附けにならぬのみか、岸からかなり離れて碇泊せねばならず、陸との連絡はランチの牽いた傳馬船による。幸に靜穏だつたからこそよけれ、風波があつたらはしけとの乗り移りが危險だらうし、少ししけ

るとはしけが本船に寄り附けず、乘船下船の出來ぬことが珍らしからぬと云う。所で大泊の方は築港が出來かゝつて居て、其中には連絡船が岸壁に横附けになるとのことだが、稚内の方がまだ築港計畫が一向進んで居ないらしく、北を受けた丸で開け放しの港なのだからたまらない。其上稚内停車場と埠頭とが十五町も離れて居るのだから、停車が其儘船内へころがり込む青森とは雲泥の相違だ。樺太開發の第一歩は稚内に於ける海陸連絡設備を完備することだと先以て痛感される。

大泊上陸の氣持、即ち樺太の第一印象は頗るよかつた。天氣晴朗で氣候は暑からず寒からず、人口二萬五千樺太第一の都會たる大泊は、勿論まだ將來に期待すべき新開地だが、活氣があり明るい氣持のする町だ。尤も背後の丘陵がスッカリ丸坊主に伐られてしまつて居るのは、少々明る過ぎる。又道路の悪いには驚いた。「自動車を躍らせて市中を見物」と日記に書いた次第だ。見物は大泊支廳長高島久次郎氏及び小學校長土佐林勇雄氏が嚮導された。高島氏及び夫人とは親類續きなのだが、圖らぬ初對面で愉快であつた。

四 養狐場

大泊で觀たもの丶中珍らしかつたのは養狐場だ。東洋養狐會社の養狐場を社長扇田彦助氏の案内で見せて貰つたが、其後樂磨でも觀たし、又小沼の農事試驗場内の養狐場及び同村内の民間養狐の狀況も一見した。養狐は勿論毛皮が目的で、殊にブラックシルバーと稱して黒に銀白の差毛のあるのが珍重されるので、主として黒狐が飼われて居る。大正十四年の統計では邦領全部で五百九十四飼われて居たとある。現在それより殖えて居るかどうか聞き洩らしたが、樺太名産にしようと云うので、當局も民間も相當に力を入れて居るらしいが、何分遺傳學應用の興味はあるが困難な事業故、まだ研究と實驗とが足らず、充分の成績は擧がつて居ない樣だ。元來は農産の狐の品種改良をして行かなくては面白くないのであつて、初めは其目的で始められたのだろうが、中々根氣が續かぬと見えて、アメリカ産カナダ産等を輸入してそれを飼育繁殖する方が段々と主になるらしい。養狐場はかなり土地を要する。一夫一婦の狐夫婦がそれぐ相當に廣い一房を擁へ、子狐は又別室なのだから、中々贅澤だ。尤も小沼の民家では可なり狹いかこいの中で飼つて居るのであつて、この農家の副業としての養狐が具合よく行つたら相當面白かろうが、まだまだ試驗時代の樣だ。毛皮は高く賣れるのだが、相場が著しく高低するのでいくらか投機的になる。目下市價が低下して居るので、隨つて樺太の養狐業も振わぬらしい。市價が下つて居ると云つても、百圓や百五十圓の品は甚だ粗末で、少し立派なのになると三百圓はする。これが東京に出、ロンドンに行くと、五百圓の千圓のと云うことになるのだろう。所で頭と尻尾と四足の附いた狐其ものをかついであるくことは、我國では流行せず、又流行させたくもない次第で、販路は西洋に求める外ない。しかし何分遠路のこと故、其冬取つた毛皮を直ぐロンドンに送つても、シーズン遲れで賣行が思わしくないと云う樣な困難がある由、「捕らぬ狸の皮算用」と云うが、狐の皮も中々豫期通りには行かぬらしい。狐の飼方などについても色々の話を聞いたが、何分神經質な狐のこと故、豚や兎を飼うとは違つて細心の注意を要するらしいが、

さすがの狐も人間の悪賢こさには及びも附かず、やがて皮を取られるとも知らずに、馴れた子狐が飼主を見てクン〳〵と鳴きながら小犬の様にころげて甘える様なぞ、涙ぐましい感じがする。豚や兎と云つたが、歸途に北海道眞駒内の種畜場に行つて見ると、種牛や種馬は勿論、種兎までが父は誰母は誰と血統が明白になつて居り、何々第何世と王様見た様な名前が附いて居たが、養狐事業もあすこまで進歩して、ライネッケ第何世、何代目葛の葉と云う様なのが揃う様にならなくつては本物でないのだろう。

五　豊原

九日には大泊から汽車で豊原に行く。十一里弱で汽車が一時間二十分かゝる。豊原は樺太の首府で人口二萬二千、大泊が段々と山手に盛り上りつゝあるのに對し、こゝは周圍も廣々と打開け、道路も廣く區劃正しく取つてあり、將來發展の餘裕綽々たる上品な役所町學校町である。大泊を函館に比すると、豊原は札幌の感じがし、眞岡が差詰め小樽と云ふ所だ。位置も大體そんな見當になる。勿論現在に於て相匹敵すると云ふ譯ではなく、一寸形勢と氣分とが似て居ると云うだけの話だが、將來此三町がかの三市程になる位樺太が發展することを期待したい。

豊原では樺太廳在勤の少壯法學士森本節躬・西村高兄・北村得三・黒田敬之・中村暖祐・佐藤俊男の諸君に迎えられる。諸君も喜べば自分も愉快だつた。此諸君の中森本君は樺太育ちで、眞岡の小學校を經て大泊中學校の第一回卒業生の由、斯う云ふ人が樺太で働いて居ることは誠に結構だ。他の諸君も、樺太のウインタースポーツの快を語つて頗る元氣がよいのは頼もしい。諸君に導かれて樺太神社に詣でる。市街をかなり離れた東方の丘上に在つて、祭神は大國魂命・大已貴命・少彦名命の三柱、全島鎮護の官幣大社である。捧げた玉串が、此島には榊がないので、オンコ（イチイ）の小枝であつたのは珍らしかつた。社前から豊原市街を込めて鈴谷平原を見おろす景色が美しい。社殿の背景たるべき山が數年前の松毛蟲の害で枯木立になつて居るのは惜しいことだ。

六　博物館

神社からの歸途樺太廳所管の博物館を觀た。同伴が親しい學士諸君なので、私は無遠慮に批評した。「これは博物館ではない、物置だ。博物館をこんなにして置く様では樺太經營も駄目だ。」

博物館の建物も間に合せで、元の軍司令官々舍だと云うが、それはまだ我慢がなる。陳列品も必しも貧弱と計りは云えない。島產の獸類鳥類魚類等の標本には他で見られない珍らしい物もある。アイヌ・ギリヤーク・オロチヨン等の土俗品も——モット蒐まりそうなものだとは思うが——中々面白い。恐しく大きなアンモン貝の化石など、恐らく古生物學上貴重な物だろうと思う。即ち品物も一通りはあるのだが、陳列法が如何にもなつて居ない。殆ど陳列ではない、たゞ置いてあるのだ。説明も頗る不親切だ。地圖とか統計圖とか云ふ様な類は殆ど掲げられて居ない。場所が狹いと云う言譯もあろうが、さうかと思うと他府縣の產物などが雜居して居り、樺太でもこんな陶器が出來るの

かと思つて見ると、相馬燒だつたりする。即ち一向工夫研究されて居ない、系統的でない、學問的でない。この學問的系統的に充分研究されて居ないと云ふことが、現在の樺太の根本的缺陥で、此博物館は正に其缺陥の標本を陳列して居るものと云つてよい。博物館を完成すれば樺太開發が成功すると云ふのではないが、首府豐原の博物館をして樺太研究の中心機關たらしめると云ふ位の意氣込がなくては、樺太經營は成功しないと云いたい。これは實は樺太だけについて云ふのではないので、骨董的でない學問的な博物館が我國ではまだ重きを置かれて居ないことを常々遺憾に思つて居る所から、苦言も呈したくなる。全體東京にも相當の拓殖博物館があつて然るべきだ。事によつたら拓殖省よりも有益かも知れない。

七　豐眞山道

八月十日午前乘合自動車で豐原から眞岡へ所謂「豐眞山道」十九里餘の山越をする。樺太廳視學横山賢市氏が同乘して途中の案内をされる。豐原を出て少し行くと、當時ダリネーと稱し今日軍川と云ふ占領當時の古戰場を通る。明治三十八年七月十一、十二兩日に亘つて樺太に於ける最大激戰が行われ、西久保東京市長の令弟たる西久保少佐を初め七十名の死傷を出した所だ。西久保神社がある。「樺太も戰爭して取つたのですかい」と北海道から來たと云ふ乘合の老人が驚嘆する。當時の公報に「敵ノ主力ハダリネー西方密林ニ退キ」とあつて、密林戰なるが故に我軍も苦戰したのだそうだが、今日では此邊一向密林らしいものも見えない。それから段々山路にかゝるが、山林も伐られ燒かれ蟲ばまれて甚だ鬱蒼と參らず、樺太横斷と云う氣分が出ない。此山道に熊が出ると云う話も車中で聞かされたが、何のこんな淺い山にとひそかに否認して居た處、我々の通つた二三日後にほんとに熊が出て自動車のあとを追つ掛けたとやらで、眞岡で評判だつた。ヤツパリ樺太だけのことはある。

山道はかなり曲折高低があるが、自動車で通つてヒヤヒヤすると云ふ程ではない。たゞ道がよくないので隨分ゆすぶられる。これ又我々が通つた二三日後に自動車が一寸道の凹みで轉覆して負傷者があつた由。目下此山道に横斷鐵道を敷設すると云ふので、豐原眞岡双方からそれぞれ數驛開通し、峠の難所が殘つて居る。中々の難工事らしく大正十年からかゝつて居るがまだ最近開通とも行かぬらしい。

三分の二程來た所で、行合つた自動車からこちらへ乘り移つて來る人を誰かと思えば、舊知の水邊喜一郎氏、樺太工業會社の眞岡工場に勤めて居て、迎に來て呉れたのだ。同氏の樺太在勤をスッカリどう忘れして居たので、意外だつただけそれだけ愉快だつた。

八　眞岡

眞岡には八月十日の午後から十四日の朝まで滯在した。此地に催された樺太教育會の夏季大學に招かれたのが樺太行の用向なのであつた。夏季大學の講演十四時間の外一般聽衆に對する講演を一回した。樺太旅行中此外大泊・泊居・久春内で各一回、豐原で二回の講演をした。斯くして眞岡滯在中は講演に忙殺されたが、其間町の有力者、樺太教育界の人々及び樺太工業會社眞岡工場の諸氏と會談して、段々と

樺太の事情を學んだ。

眞岡は人口一萬八九千もあろうか、海沿の山際に細長く伸びた町だ。夏季大學の會場たる眞岡中學校は町の南端の岡の上にあつて、海を見晴らした景色が頗る快よい。樺太は東海岸よりも西海岸の方が明るく陽氣な感じがする。多分暖流が西海岸を洗つて居るからだろう。

九　新天地の開祖は清教徒たれ

眞岡町の中央最も形勝の高みに遊廓がある。私は今ここで遊廓移轉問題を議するのでもなし、又樺太の風紀が善いとも惡いとも云うのではないが、ただ樺太在住の人々の中どうかすると「新開地のことだから仕方がない」と云う人があり、稀には風紀に寛大なることを以て土地繁昌の必要條件であるかの如く云う人のあるのを聞いて、私は到る處の私の講演に斯う云うことを附言した。「凡そ世界を通じて新開地の成功した第一の例は北米合衆國だろうと思う。而して其成功の根本要素は其建國の祖が本國の腐敗を憤慨しメーフラワー號に乘つて海に浮んだ清教徒だつたことであるまいか。米國の今日に批難すべきものがありとするならば、それは要するに建國精神たるピューリタニズムが薄くなつたことであろう。もし樺太をして理想の新天地たらしめんとならば、其開祖たる現在の諸君が潔癖過ぎる程のピューリタンでなくてはならぬ」と。

一〇　樺太時間

序にも一つ。私は決して几帳面な方ではないのだが、學校教師をして居るためか、時間の正確と云うことだけはひどく氣になる。そこで講演なども豫告の時間通りにキチンと始まらないと氣持がよくない。東京では近來大分そう云う風になつて來たが、地方ではまた中々具合よく行かない。樺太に於ける講演も毎回豫定の時間通りには始まらなかつた。尤も場合によつては、夕方そこに着いてから急に講演をして呉れと云うことになり、世話役が町中觸れ廻つて二三百の聽衆を集めたと云う樣なこともあつて、これは又東京などでは出來ないこと、主催者の苦心に對して感謝こそすれ、集合が遲かつた位に苦情を云うではないが、たゞ開會の遲れる言譯として「どうも樺太時間でして」と云うのが極り文句なのは、餘り感心しない。內地の諸地方ならば知らず、遲れ勝ち懸値澤山の「樺太時間」が此新天地に行われることは甚だ似合わしからぬ。新開地だからと云うので內地の美風は斷行せず、其癖內地の弊風は其儘持ち込むとあつては、新開地の新の字が泣くでもあろう。どうか「樺太時間」がパンクチュアルの意味になつて欲しい。

一一　水産試験場

八月十四日の朝の汽車で眞岡を立ち、樺太中部一巡の旅に上る。小沼在住の醫師木村英雄氏が特別の好意で同道案内される。其外視學野口要氏・眞岡第一小學校の八木樵校長・醫師岩崎源吉氏及び樺太工業の水越氏が汽車の終點なる野田まで送るとて同車、車中頗る賑かだ。途中樂磨に下車して樺太廳の水産試験場及び岩崎氏等經營の養狐場を觀る。水産試験場の標本室は、後に札幌で觀た北海道大學の水産標本室

とは到底較べ物にならないが、豊原の博物館よりはよく整理されて居て、一通り樺太の水産状況がわかる。目下漁業の時期でないので、實況を見ることは出來なかつたが、段々話を聞いて見ると、樺太の漁業勿論盛には相違なかろうが、しかし海岸で所謂「鰊を拾う」時代は既に過ぎ去らんとしつゝあるらしく、鰊にしても蟹にしても段々沖合へ乘り出さなくてはとれなくなる。そこで魚類の分布回游を海洋學的に研究することが特に必要となつて來たのである。試驗場で段々と其研究をして居る樣だが、漁業者が其研究の結果を充分に利用すると云うまでにはまだ中々至らぬらしい。

二　紙の樺太

野田に着いたのが午後一時過ぎ、眞岡からの諸君に別れ、泊居から出迎へられた樺太工業會社の保利啓吉氏の案内で、發動機船で泊居に向う。眞岡から野田まで十二里、野田から泊居まで十里。船は海岸傳いに北上する。風はないが海上は中々うねりがあつて船が盛にゆれる。海から見た樺太島は緑が鮮やかで美しい。夕五時半頃泊居に着く。泊居は人口約一萬、これが二十年前の領有當時には十數戸の一寒村だつたとのことだが、どうしてこんな發展をしたかと云うと、主として樺太工業會社のパルプ工場が出來たからである。こゝらで一寸紙の樺太を語ろう。

樺太の都會のシムボルは製紙工場パルプ工場の高い煙突と一種特徴ある高塔とである。少し大きな町となると必ず紙の工場がある。或は紙の工場があるから大きな町があると云つた方が當る場合もあろう。

現在大泊、豊原及び野田に王子製紙、眞岡、泊居及び本斗に樺太工業、落合及び知取に富士製紙と、それぞれの大工場が樺太全領に配置されて居り、現在の所樺太は紙で持つて居ると云つてもよい位だ。右の中恵須取及び知取は邦領北部の東西海岸に對立した最近の建設で、そこまでは行つて見ることが出來なかつたが、いずれも漁村から一躍して人口一萬二萬の大市街を出現しつゝあると云う。旅行中大泊の早房工場長、眞岡の下村工場長、泊居の金子工場長及び落合の玉置工場長からそれぞれ詳細の談話を聽き、豊原では樺太のペーパーキングと云つても然るべき大川平三郎氏に出會ひ、且眞岡の製紙工場及び泊居のパルプ工場を參觀したが、成程盛大なものだ。

所で紙とパルプとの原料はエゾマツ、トヾマツ等島産の木材だが、汽車と云う汽車は木材を山と積み出し、川と云う川は水面も見えぬまで木材を流送し、而して其木材が工場内で片端から刻まれ潰されドロ〱の液となつてパルプ又は紙と變形する有様を見ると、こうして行つたらやがて樺太が丸坊主になりはしまいかと云ふ素人考の疑問が起る。それを當業の人々に質して見ると、十年十五年で木が足りなくなると云う悲觀説もあれば、現在だけの工場の數ならば永久に大丈夫だと云う樂觀説もある。しかし樂觀説にした所で、ムヤミに切つてもよいと云うのではないので、所謂「擇伐」を適當に行えばと云う條件附なのだが、その擇伐と云うのはどの位の樹齢の木を伐るのがよいのか、老木のみを切ると其傍に生えて居る若木が枯れる關係がありはしないか、擇伐施行の方法如何、先年猛威を逞しくした松毛蟲の被害が再び起らぬと保證出來るか、年々十萬町の損害を生ずる樺太名物

の山火事をどうして防ぐか、と云ふ様な問題が必しもまだ充分研究し盡されて居るとは云へない様だ。ここにも亦根本的研究の不足を見る。

一三　惡道路

八月十五日は、朝泊居の工場を參觀して後自動車で八里弱北方の久春内に向ふ。同行の木村氏の外泊居の保利氏が久春内まで送られる。道は海に沿つて高原を走つて居るが、其泥濘のひどさ、自動車のゆれる位は我慢するが、やゝもすると旭將軍粟津の最期と云ふ始末になるには閉口する。殊に今日の自動車は工業會社が特別の好意で出して呉れた高級自動車で、乘心地は頗るよかつたが、車體の大きく重いために兎角泥にはまり易く、陷没したが最後中々上からない。適材適所と云ふことはあるもので、樺太の惡道路にはフォードの安自動車が適任の様だ。我々の自動車が數回の難關を突破した後とう〳〵踏段の所まででスッカリ泥に埋まつて二進も三進も行かなくなり、百計盡きて立往生して居ると、後ろから乘客を滿載し助手などは外側にぶら下がつて居るフォードの乘合が、ぬかるみを飛び越え跳ね越えやつて來たが、斯くと見るより乘客總動員で後押しをして呉れ、フォードは綱で先曳きをし、ヤットのことで引張り上げて貰つた。

斯様に道路が惡く交通の不便なことが樺太開發の一障碍の様だ。東西兩海岸のそれ〴〵五十八哩きりない鐵道を國境まで延長すると同時に、縱横の自動車道路を完成することが、樺太經營の一急務だろうと思ふ。尤も樺太の土質及び年々雪融けの關係上道路の改修維持は中々困難な仕事だろうが、洋行の途次わずかに見た英領植民地の道路の立派さが思い出されて、もう少し此方面にも力を入れて貰いたい様に考えられる。

一四　天空海濶千紫萬紅

惡道路の苦情ばかり云ふと、如何にも今日の旅行が難儀だつた様に聞えるが、實はこの泊居久春内間のドライヴは今度の樺太旅行中最も美しい旅路だつた。途上の遠景は正に文字通り天空海濶、近景は正に千紫萬紅と云つてよからう。天空海濶の方は説明を要すまい。空に雲なく海に帆影なく海岸線が限りなく北へ伸びて居る單調雄大の景、奇巖怪石の所謂絶景よりも私は斯う云ふ偉大なる平凡が好きだ。千紫萬紅は高原一面の草花だ。濃紫のりんどう・淡紅のやなぎらん、何とか菊と云ふ一寸女郎花を大きくした様に見える黄色の花、其他内地なら高山植物とでも云つて珍重されそうな草花が、見渡す限りべた一面に咲き亂れて正に自然の一大花園、其上花の色が内地では見られない鮮明さだ。夏の樺太は到る處草花が美しい様だが、今度あるいた内では此高原が特別よかつた。夏の樺太で畫になり詩になるのは先以て野の花だろう。丸山晩霞氏が先年來られたそうで、諸所で同氏筆の草花の畫を見た。よみつけぬ歌でもよもうとすると、皆草花の歌になつてしまう。しかし畫の様に草花其ものの美をあらわすことは到底企て得ない。

旅人の心たのしむからふとの
野に八千草のにほへる見れば

と遭つたが、これは實は豐原の若手法學士諸君に會つたのだ　自動車が立往生したとき

　夏と云ふに八千草さけるからふとの
　　野路は車もたもとほりつゝ

と負け惜みを云つた。又野田久春内間の案内をされた泊居の保利君の所で丁度お嬢さんが誕生とのことで命名を求められた時、久春内路上の美しかりし記念に「久美子」と名附け、

　天地の盡きせぬ如く久しかれ
　　咲きにほふ花の美しくあれ

と祝した。

一五　久春内

自動車立往生騷ぎで大分遲れ、午後一時頃久春内に着いた。豫定では此日の内にこゝから右に折れて眞縫山道を越え東海岸に出る筈だつたが、此處は同行の木村氏が久しく住んだ所とて、村長始め有志諸君が頻りに引止められるので、こゝに一泊のこととし、午後はユルリと附近を散歩した。

　この久春内と云ふ所は、以前から名を知られて居り、「樺太沿革史」によると、

「天明五年（西暦一七八五年）幕府ノ吏ヲ遣ハシ蝦夷地ヲ探險スルヤ、普請役庵原彌六下役大石逸平樺太ニ渡リ、翌六年逸平復タ渡リ、東ハ知床西ハ「クシユンナイ」ニ至リ、略ボ狀況ヲ調査ス。」

『幕府ハ安政三年ヲ以テ樺太ヲ松前藩ヨリ受取リ、…………「クシユンナイ」（原文「クンマンナイ」トアレド誤植ナラン）「マーヌイ」等ニ取締所ヲ建テ官吏及在住ノ士ヲ置キ…………』

『安政四年露人汽船ニ搭ジテ「ナヨロ」（名寄）ニ上陸シ、續テ久春内ニ移住シ、其處ニ家屋ヲ建築セリ。同地在勤ノ我官吏彼ノ不法ヲ詰リタルニ、彼ハ國主ノ命ナリトテ聽入レズ、而シテ同年一旦退却セシガ、翌五年再ビ來リテ家屋を造リ、又一隊ヲ分チ山ヲ越エテ東海岸「マヌイ」ニ至リ、家屋ヲ建テ是レニ據リ、文久年間ニハ兩所露人ノ數百餘名ニ達シタリ。…………慶應二年二月「タシユンナイ」ニ於テ上役水上飛太夫以下八人ヲ捕ヘテ幽囚シ、同年十一月又同地ニ於テ同心手塚修平外一名ヲ拘囚セリ。』

『露國ハ我幕末紛擾ノ油斷ニ乘ジテ徐々樺太ニ魔手ヲ伸シ來リ、慶應元年ニハ百人餘ノ男女ヲ久春内・白主・「ナヨロ」ニ移住セシメ、且ツ軍隊ヲ移シ各處ニ兵營ヲ築ク等、其ノ傍若無人ノ振舞ハ底止スル處ヲ知ラズ。此ノ形勢ヲ見テ、幕府モ慶應二年再ビ箱館奉行小出秀實（大和守）ヲ露都ニ派遣シテ境界問題ノ交渉ニ及ビ、五十度ヨリ稍南方ナル久春内定境ヲ提議セシガ、露國ハ我ガ國情ノ弱點ヲ察シテ前言ヲ取消シ、樺太全有ヲ主張スルニ至リ、我ガ提議ハ容レラレズ。』

などとあつて、明治八年の樺太千島交換までは、この北緯四十八度に當る久春内が日露の事實上の國境だつたらしい。尚文化五年に間宮林藏と松田傳十郎とが樺太探檢に派遣されたとき、傳十郎は西海岸を林藏は東海岸を小舟で上つたが、林藏は眞縫に上陸し山越えして西海岸の名寄（久春内附近）に出、傳十郎と一所になつて更に北上したとある。而して其翌年林藏は單身再び探檢して遂に沿海州にまで渡

り、樺太が島なることを確かめて間宮海峡の名を遺したのであつて、其艱難辛苦を想ふと、自動車が泥にはまつた位で辟易しては面目次第もない。歸途札幌の北海道大學圖書館で林藏自筆の見取圖記錄類を見、更に敬服を新たにする。

一六　築港と船入澗

陸上の交通不便と同時に、樺太の一缺點は海岸線に屈曲が乏しくて良港のないことである。そこで築港が必要になるのだが、それがまだ充分でない様だ。大泊築港は相當のものになるらしいこと前にも述べたが、眞岡の築港の如きは甚だ小規模で大船を繋ぎ得ず、又聞く所によると、同地は從來不凍港だつたのが築港をしてから氷結する樣になつたとのこと、もしそうとすればやはり研究が不充分だつたのではあるまいか。又小汽船や漁船の船溜りとして所謂「船入澗」又は「船澗」なるものが各地に設けられつゝあるのであつて、久春内でも築造中のそれを見たが、既に數年かかつて出來そうになつては風波にこわされこわされして、いまだに竣工せぬので、「賽の河原の石積み」と云う批評もある由、これらにもどうも研究と力の入れ方の足りない氣味がありはせぬかと危ぶまれる。

一七　久春内から豊原まで

八月十六日朝八時久春内を立ち、丁度昨日綱引きをして與れた乘合自動車に乘つて七里の山道を走らせ、東海岸の眞縫に出る。即ち樺太の一番幅の狹いくびれ目を橫斷した譯だ。この所謂「眞縫山道」は前の「豊眞山道」にくらべると餘程深山密林で、こゝまで來ると大分樺太らしい。草花が例によつて美しく、大きな蕗の葉が目立つ。道は昨日に劣らぬぬかるみだが、今日は所謂適材適所のフォード車故、泥しぶきを上げつゝ文字通り揉みに揉んで突進する。とうとう一度泥にはまつたが、總員下車で後押しをすれば忽ち脱出する。同乘は來知志湖へ白鳥の卵を採りに行つた大泊中學の先生の一行。樺太には白鳥が渡つて來るのだが、それが島内で産卵することが最近發見されたとのこと。

午前十時頃眞縫附近まで來ると、樺太鐵道會社で建設中で此十月から開通の筈の落合知取間の線路が道路と交叉して居る地點で、工夫が手を振つて自動車を止める。會社の好意で「ガソリンカー」がこゝに來て待受けて居たのだ。早速それに乘移つて南下する。何々新聞社の何とか連絡競走とでも云いそうだ。「ガソリンカー」と云うのは、疊一枚もない位の無蓋の臺車がガソリンエンジンで鐵道線路の上を走る樣になつて居る建設工事用の車で、子供のおもちや見た樣なものだが、それに座布團を敷いて腰かけると、現場主任の進藤氏が自らハンドルを執つて非常な速力で走らせる。一直線に密林を切開いた鐵路を折からの霧を突いて無二無三に飛ばせるのだから、樺太氣分乃至シベリア氣分で痛快至極だ。今までの自動車と違つて少しもゆれないので、頗る乘り心地がよく、まだ乘つたことはないがオートバイで飛ばせたら斯う云う氣持がしはしまいかと想像される。餘り早いので正直の所少々ヒヤ〱もしたが、モ少しユックリなどゝ云つたら見るから關東男兒らしい進藤氏に叱られそう故、シッカリつかまつて精々痛快がつて居る。途中で二三回も休息し、又向うから來る建設列車を待ち合わせる

ためと白濱のアイヌ人部落を訪問のためとでかなりの時をつぶしたに拘らず、午後三時二十里を突破して内淵河畔に着いた。其川の鐵橋がまだ落成せず線路が切れて居る故、こゝで「ガソリンカー」をおりて假橋を渡り、そこまで出迎へられた野口視學及び鐵道會社の菊池經濟學士と共に半里程の落合まであるき、富士製紙會社の倶樂部でユックリ休んだ上、午後五時四十三分落合發の汽車で七時四十分豐原に歸着する。久春内から豐原まで約五十里、それを一日で漕ぎ附けたのは樺太旅行のレコードだと豐原の諸君が褒める。レコードと云ふ程のこともあるまいけれど、全く豫期以上の好都合だつた。

一八　アイヌ人部落

白濱のアイヌ人部落は同所の教育所の先生の案内で一巡した。戸數約五六十、豐原支廳管轄内の土人を集合住居させて居る保護設備で、家屋もこちらで造つてあてがつたもの故、元來の生活狀態をあらわして居らず、たゞ古風な家では家の神を表する「イナヲ」(けずりかけ)を室の隅に、又火の神を表する「イナヲ」を圍爐裏に立ててある。口邊に入墨のあるお婆さんがトンコリとか云ふ琴を抱いて兩手で掻きならしながら子守唄を歌つて呉れる。長髯の老翁が所謂寶物を並べ立て、竹べらで口髯を持上げて酒盛をする作法をして見せて呉れる。丸太の檻に熊祭用の熊が飼つてある。先以て其位の所だつた。

私は自分の專門上大正九年勅令第百二十四號「樺太ニ施行スル法律ノ特例ニ關スル件」

第一條　樺太ニ於ケル土人ノ外ニ關係者ナキ民事ニ關スル事項及土人ノミニ對スル刑事ニ關スル事項ハ從來ノ慣例ニ依ル。

前項ニ規定スル事項ニ關スル訴訟手續ハ裁判所ノ便宜ニ從フ。

と云ふ規定のあることを知つて居る。そこで此規定がどう云ふ風に實施されて居るか、どう云ふ珍らしい裁判例があるか、そう云ふ方面を知りたいと思つて、最初豐原に着くと早速地方裁判所を訪問して佐々木所長及び香取檢事正から段々と教を承けたが、近來所謂「土人ノミ」の事件が裁判所に持出されることが殆どない由で、實際の適用例を聞き得なかつた。其際香取檢事正調査の「樺太土人習慣調書」を贈られたが、それに掲げた大正十四年末の統計によると、邦領樺太在住のオロッコ人は二百五十八人、ニクブン人は百四人、キーリン人は二十三人だから殆ど問題にならず、アイヌ人は千三百三十九人だが、白濱に於ける樣に自分達だけの部落生活をして居り、問題も大抵内部で片附いてしまつて裁判所の御厄介にならぬらしい。右の香取檢事正の有益な資料の外、富内の郵便局長栗栖氏がアイヌの習慣を調査して居られる由だが、それについては詳細を聞き得なかつた。

要するに今回の旅行ではアイヌ其他先住民族について多く學ぶことが出來なかつたが、私はこれ等の民族が一日も早く内地人と混和してしまうことを期待すると同時に、此際故老について其習慣等を充分に記錄し風俗品を蒐集保存して置くことを希望する。アイヌ人部落が段段アイヌ人部落らしくなくなつて行くことは寧ろ結構なことで、旅客的好奇心から土俗保存を主張する樣な氣持にはなれない。ただ土俗のまだ滅びない内に其記錄を取つて置くことは、世界の學界に對する義務だと思ふ。

一九　小沼

八月十七日は豊原の法學士諸君と共に木村氏の居村小沼を訪問した。豊原から自動車で三十分程、此邊は道もよい。小沼には樺太廳の農事試驗場がある。二三日原始的な林野を見て來た目には、模範的に手のはいつた田畑や牧場が又美しい。奈良部場長から樺太の農業に關する談話、菅原農學士から樺太の土壤の說明を聽く。何しろ土壤の根底からが大分特別な樣だから、樺太の農業は根本的の研究を要する次第で、現在の所ではそれがまだ充分徹底して居らず、農業の根本方針が確立して居るとは云えない樣だ。近頃樺太で米が出來るかどうかと云うことが問題になつて居る樣だが、出來るにしてもかなり骨が折れるらしい。我國民が米に愛着の深いのは傳統的に至極尤もなことだが、どこへ行つても米を作りたがり、米が出來ないと落附き得ないと云うのも又考へ物ではあるまいか。歸りに札幌郊外の農事試驗場で聞いた所でも、北海道ですらが全體は米を作るには無理な風土なのの由。それを今日に至らしめた努力は大したものだが、しかし又其努力をモット其土地に適した作物に向けたらと云う氣がしないでもない。況んや北海道より更に寒く地味も北海道程よくなさそうな樺太に於ては、先以て如何なる農作物如何なる農作法が樺太に適するかと云うことから充分研究してかゝらねばなるまい。而してモット交通が便利になり作物の捌け口がつかなくては、樺太の農業は發展しそうもない。大正十四年末の統計によると、樺太全領の戸數は三萬七千四百二戸の內農家が九千六百二十五戸と云う。餘り多い割合ではあるまい。邦領樺太現在の人口は二十萬餘、一方里平均八十何人と云うので、內地の平均三千人餘に比しては勿論、北海道の平均四百何十人にくらべても餘裕綽々たるものだが、住民のかなりの部分は伐木關係者の由で、現在の所農業よりも伐木の方が餘程割がよいため、農民としてはいつて來た者もいつの間にか伐木者に變つてしまうとか。樺太が丸坊主にならぬ內は農業は發達せぬと皮肉を云つた人もある。要するに樺太の農業は未知數であり、未研究である。倘農事試驗場には鑛物の標本も陳列してあつて、石炭が頗る有望らしい。卽ち差當り樺太の產業は漁業・林業及び鑛業だが、しかし結局農業が發達しないでは樺太は眞に落附くまいと思う。

落附くと云えば、樺太に寺院は澤山あるが墓地と云うものがない由、卽ち遺骨を寺へ預けて置いて本國へ持ち歸るのであつて、樺太はまだ「墳墓の地」とされて居ないのである。北海道も以前は其傾だつたそうだが、近來墳墓がふえたと云う。樺太でも近頃は段々本籍を內地から移すことが行はれるとのこと故、其中には墓も出來るだろうか。そうならなくては本當でない。

小沼でロシア人及びポーランド人の二三の家庭を訪問した。いづれも誠に小奇麗にキチンとした生活をして居る。村役場で聞いて見ると、租稅の滯納等のない一番の模範村民はこれらの外國人の由。家屋は丸木小屋式で、ガッシリして、暖かそうで、且中々風致がある。生活方法及び家屋の建方等についても日本人にはまだ研究の足りない所がある樣だ。久春內で村內の家屋を多少注意して觀察したが、地盤が凍つたり融けたりする關係であろう、去年建てたと云う樣な家がもう

ガタガタになつて居る。其土地氣候に應じた建築法の工夫がありさうなものだ。北海道の眞駒內で道廳が模範の意味で招いて居るデンマーク人ラーセン氏の農場を視たが、氏夫婦と助手と三人きりで十五町歩の耕作をして、牛馬豚鷄の相當な數を飼い、ハムやバタを作り、札幌の家庭にハムエッグス等の製法の宣傳をして卵やハムを賣込むなど、中々拔目がないらしく、農事の模範と云うよりも寧ろ能率增進生活改善の模範の由。新天地に乘込む以上生活上にも新工夫がなくてはならぬことだ。

二〇　無類の避暑旅行

かくて八月十八日、大泊から船で小樽に渡り、札幌附近で二三日美しい北海道の夏を樂しんだ上、八月二十五日の朝歸京したが、殘暑嚴しい東京に歸つて今更ながら思い出されるのは樺太の涼しさだ。實に無類の避暑旅行で、樺太滯在の十一日間汗かきの私が殆どハンケチをよごさなかつたと云つてよい。夏の旅行だからと思つてカラの掛替を相當持つて行つたのが大半不用だつた。土地の人はやはり贅澤になつて、どうも近年の暑さだなどとこぼして居たが、どう致しまして涼しいを通り越して少し寒い位だ。日中は夏服だが、白服を着てる人を見るとおかしい位、夜の外出は合服でないと寒い。宿屋では浴衣に丹前を重ねて出すし、火鉢に火を持つて來る。火までは必要ではないが、邪魔にもならない。用心のため位に持つて行つた冬外套が大に役に立つて、それがなかつたなら自動車や發動機船でかぜをひく所、ガソリンカーで飛ばせた時など、外套の上に借着のレーンコートを重ねて丁度よかつた。

此調子だから冬は定めしと思われるが、段々と聞いて見ると、勿論寒いには相違ないが、想像する程凌ぎにくくはないと云う。雪の降る前と雪どけの際が不愉快だそうだが、雪が降つてしまうと却つて氣持がよく、室內は暖められて居るし、戶外はスキーで飛ばせると云う次第で、中學生など多は外套を着ず、却つて夏の降雨の際に弱ると云う。子供達に取つては樺太の冬は頗る愉快らしく、落合の王子工場長の談話だつたが、子供達のための冬の遊び場と思つて室內運動場を造つた處、大當外れで一向利用されず、子供達は雪の降るのを待兼ねスキーをかついで戶外へ飛び出し、又社員が內地へ轉任になると親達はさすがに喜ぶが、子供達は雪のない國へ行くのはいやだと不平を云うとか。而して冬の寒さも段々緩和されるらしく、既に明治初年の岡本監輔の「北蝦夷新誌」にも

「昔時ハ寒氣凝結甚ダシク地震雷電ナド絕テ覺エザリシニ、近年ハ時々地震ニ雷電アリ、燕雀ノ類モ昔テ見ザリシニ、年々多ク來シ、氣候モ既ニ凌ギ難キヲ覺エズ。」

とある。東京で嘗て催された樺太博覽會などでは、納涼目的の催しとしてむやみと寒い宣傳をした樣だが、北極ではあるまいし、見渡す限りの氷原の樣に樺太を思われてはたまつたものではないと、樺太の諸君大憤慨であつた。要するに冬の寒さは大した問題でなく、ただ冬期に於ける內地との交通通信が斷絕せぬ樣にすること、及び長い冬期間の適當な仕事を考えることが問題だろうと思う。

二　內地延長主義

樺太で目下やかましく云はれて居る問題は、陪審と普選と自治制とである。元來樺太には內地の法律は當然には施行されないのであつて、「法律ノ全部又ハ一部ヲ樺太ニ施行スルヲ要スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム」と云うことになつてゐる（明治四十年法律第二十五號）。而して衆議院議員選擧法は樺太に施行されて居らず、又町村自治制も樺太には行われない。卽ち樺太の住民は衆議院議員の選擧權がなく又樺太の町村長は公選でなく任命で、同じく任命の評議員から成る町村評議會があるが諮問機關であつて議決機關でない。所が陪審法は樺太にも施行されることゝなり、愈々來年から內地と同時に行われると云ふので、豐原の地方裁判所では丁度陪審法廷の建築中であつた。廣い樺太に陪審法廷は一つなのだから、遠隔交通不便の地から陪審員を喚び出すのが隨分大變だろうなどゝ云う實際上の問題はあるが、理論上陪審法施行について內地と樺太とを區別すべき何ものもないと云うことになつたのである。そこで今度は、陪審だけ行つて普選を行わぬ理由があるか、と云う議論が刺激され、同時に少くも北海道並の自治制が要求されることは當然であつて、普選の方は既に前議會で衆議院を通つた位だから、次の議會にも恐らく問題となるであろう。私は今此問題に深入りしようとは思わぬが、此場合にも實際上の困難弊害は色々と考えられ得るにしても、朝鮮臺灣は暫らく別とし、前述の通り先住民族は殆ど問題にならず殆ど內地人のみで成立つて居る樺太に於て、普選を拒み自治を與えぬ理論上の根據はあり得まいと思う。私は前記滿鮮の旅行記では所謂「內地延長主義」を批難したが、樺太については內地延長主義を主張したい。植民地の樣でもあり又さうでもない樣な中途半端な位置にいつまでも置くことは、樺太を眞に發達させる所以でない。植民地だから一攫千金利權の漁り場所と云う樣な考方を止め、內地の延長否內地其ものとしての堅實な開發を切望する。願くは樺太の政治經濟をして夏の樺太の如く明快淸凉であらしめよ。

現ロシヤの巨柱スターリン

佐野學

一

今日のロシヤには優秀な政治家が多い。そのなかでも、レーニン歿後にレーニンの役割を果たしてゐると言ふことのできる政治家は、現にロシヤ共産黨の執行委員長たるスターリン其人であらうか。私はまる三年前の一九二四年の秋にモスカウを去つたので、色々のことを段段忘れてきたが、當時、強い印象を受けた事柄は却てハッキリ記憶に殘つてゐる。スターリンの重厚な相貌、冷靜な演説ぶり、親しみの深い談話、彼の強い握手ぶりさへ思出すのも其の一つだ。その後のロシヤやドイツの新聞雜誌を讀むと、彼の政治家、理論家としての地位は益々重くなり、ロシヤの勞働階級の信望が彼の一身に集中し、同國の現在の政治における文字通りの中心人物になつてゐることが明かである。共産黨は勞働階級の戰鬪的前衞の結團であり、勞働階級の頭部であるといふのがボリシエヴイキの本來の信條で、その黨の規律は全く鐵の如き規律である。同黨の黨員は昨年の統計によると約七十萬人、黨員候補者は約百萬人とのことであるが（「政治、經濟、勞働運動年鑑」一九二五年—二六年版による）、毎年嚴重な「掃除」が行はれ、少しでも資格にはづれた者は忌憚なく除名されてしまふ。かういふ嚴格な黨を引きしめ且つ發展させてゆくことが尋常の革命家のよくすることでないのは言ふまでもない。そしてロシヤ共産黨の決定する政策は事實上において直にロシヤ政府の國内及び國際政策の基準となるのだから、その執行委員長は國内における最も重要な人物の役割なのである。

私はモスカウでスターリンに二度ほど逢つた。一度は一九二四年四月のロシヤ共産黨第十二大會のときで、同大會ではトロツキイが黨の組織を民主化せよ、革命のエネルギーに溢るゝ青年に地位を與へよ、と幹部攻撃の火蓋を擧げたが、スターリンは幹部派を代表して、革命的黨はブルジヨア黨の如きルーズな民主々義原則に立つべきにあらずして鐵の如き中央集權を要す、また革命的經驗に豐かなる壯年者こそ黨にとりて重要である、と駁論し、ロシヤ共産黨特有の熱烈な論爭が行はれた。會場はその昔、ツアールが豪奢を極めたクレムリン宮殿の大廣間で、並び立つ太い大理石の柱には種々のスローガンを書きいれた赤紐



の旗が巻きつけられ、全露から集つた四百餘人の代議員が席に座し、壇上には中央執行委員が着席して居り、私等外國からきたものには特に壇上近くに傍聽席が設けられてあつた。大會は一週間ほど續いたが私は殆んど毎日行つて傍聽した。その一日に、私は休憩時間に、私が彼地にゐた時に色々親切にして貰つたオイゲン、ヴアルガから紹介されて、スターリンに面會した。(ヴアルガはハンガリー革命政府の文部大臣だつた人、もと大學教授、第三インターナショナルでの重要な經濟學者、二三の著書は既に邦譯されてゐる。彼は私が學校教師上りであることに同情してか色々と親切に教へてくれた。)スターリンは年齡四十五六と覺ぼしく、詰襟の洋服をきてゐて、體はロシヤ人としては大きい方でなく、風采もあまり上つた方でない。大會の昂奮と疲勞とは有々と見えてゐたが、それでも莞爾として手を強く握り、ドイツ語で話しをした。但しドイツ語はあまりに上手でなかつた。彼は日本の支配者階級の構成要素について短いが的確な質問をした。そして封建的勢力と闘爭してブルジョア、デモクラシーを獲得することの重要性を指摘してくれた。當時頗る公式主義者であつた私は、この言葉の意味を十分汲みとり得なかつたが、今日から考へると彼の言葉は妥當である。彼はまた日本の農民階級の昂揚した運動を視すると言ひ、また日本と支那との、、、、、、、、、が強烈な意義を持つてゐることを指摘した。私は數週前に見たモスカウ近郊の村落の一ソヴイエットについての感想を語り、二三の批評めいた事を言つたが、彼はそれを點頭して、中農獲得の重要性を短い言葉で話した。彼は有名な寡默の人であるが、それは餘計なことを喋舌らないといふだけであつて、この

時の私との短い談話に沢山の内容を含んでゐることを、あとで日記を繙くときに回想して少しく驚いたことであつた。

その後、私はコンミンテルンの一會合で彼に再會した。この時にも時間がなくて充分の話しができなかつたが、歸國間際であつた私のために健康を祈つてくれ、且つ色々の注意をしてくれた。

私はモスカウ滞在中に二三の人を除いては、有名な指導者を訪問して歩くことを特にしなかつた。私は大部分の時間を「共産主義アカデミー」や「マルクス、エンゲルス、インスチチユト」やコンミンテルンのビブリオテークで費すことに忙しかつたし、且つ之等の人々は非常に多忙なのであるから、何かの會合の場合に會談することだけで満足してゐた。だが私の逢ふた限りでは、ロシヤの指導者は東洋人に對して實に何等の偏見がない。實に心から親切である。私が歸國前の半年間に支那の各地を放浪した際に同國の同志から受けた親切は今から思ひ出しても涙が出るようであるが、ロシヤの人々からも確かに同じような印象を受けてゐる。スターリンにおいても全くそうである。

二

スターリンのことは吾國の無産階級の間にもまだ充分には知られてゐないと思はれる。此頃、彼の著書論文が大分邦譯されてゐるが（誤譯も少くない）、政治家及び理論家としてのスターリンの全體的方面は明かになつてゐない。（不勉強なブルジョア社會に至つては勿論だらう）。これは日本に限らないらしく、一昨年、彼の著書「レーニニズムの基礎」が獨譯されたとき、ハンガリーの勞農獨裁革命の大立物で今はモスカウに亡命生活を送つてゐるベラ・クンは之に詳細な序文を附し、そのなかで「ドイツの勞働者にはスターリンの名はまだ廣く知られてゐないが、彼はレーニンと共にロシヤ共産黨の最も重要な指導者である」といふ意味を言つた。スターリンが國外において餘り知られてゐない理由は、彼が文獻的仕事よりも實際的仕事に精力を集中してきたこと、帝政ロシヤの時代にも亡命生活をせずにロシヤ内に頑張つて居り、革命後にも國際的仕事よりも國内の仕事に力を注いできたこと、彼の性格が頗る寡默であること、などであらう。だが政治的必要は今や段々に彼を正面に押し出してきた。ケマル・パシヤをロシヤに結びつけたのも彼だ。イギリス保守黨の執拗な挑戦に敢然たる闘爭的態度を示してゐるのも彼だ。黨の統一、新經濟政策、一國における社會主義建設の問題、農民問題等についてトロツキイ、ジノヴイエフ、カメネフ等を猛烈に駁撃してレーニンの傳統を嚴格に發展しつゝあるのも彼だ。支那問題についてロシヤ及び第三インタナショナルの基本方針を決定しつゝあるのも彼の思想だ。

だが、いふまでもないことだが、一定の時代、一定の國における政治は、優秀な個人を中心として動いてゆくものでなく、各階級の客觀的關係、各階級の力の均衡が之を決定するのだ。指導者たる個人はこの關係の代表者にすぎぬ。例へばレーニンは「私はかく考へる」と言はずして、常に「黨がかく考へる」「勞働階級がかく欲する」といふ言ひ方をしてゐたそうだが、これこそ無産階級の眞の指導者のみが自己獨斷に陥ることなしに事物を客觀的に認識し且つ正しい政策を立て得ることを示すものである。（これに反して、、、、、蔣介石等の低級な

ブルジョア的指導者は悲慘な自己欺瞞の泥濘に陷り、拔きさしならぬ末路に落ちることができる。）今日のロシヤの政治家を觀察するについては、古い英雄主義型の觀察方法は役に立たない。吾々はロシヤのプロレタリアートの重要な代表者としてのみスターリンを觀察し得るのだ。

三

今日ロシヤではレーニンが民衆崇拜の的となつてゐるが、これは彼が革命から新經濟政策に至るまで、眞によくロシヤの勞働者と農民との利益のために戰ひ、新しいロシヤの進むべき基礎的方向を確定したからである。所謂レーニニズムは今日のロシヤの政治及び社會生活の基礎原則である。これを踏襲し且つ發展せしむるもののみが今日のロシヤの需要する政治家である。スターリンはこの意味の政治家である。そして兩者の間には種々の點で甚だ類似したところがある。

彼はレーニンの死んだ直後に、ロシヤ最高の大學スヴエドロフ大學で「レーニニズムの基礎」といふ講演をしたが、彼はその中で「レーニニズムとは帝國主義及びプロレタリヤ革命の時代におけるマルクス主義である、精確に言へばレーニニズムとは一般的にはプロレタリヤ革命の理論及び戰術であり、特殊的にはプロレタリヤ獨裁の理論及び戰術である」と定義したが、この定義は今日では一般に廣く承認されてゐる。スターリンは自らレーニンの忠實な使徒を以て任じ、近時の演說や論文にはレーニンからの數多くの引用をしてゐるが、彼は決してレーニンの思想を公式的機械的に繰返してゐない。これはレーニンがマルクスを嚴密に守りつつ、しかも常に客觀的現實に應じて獨創的にマルクス主義を發展させてゐたと酷似してゐる。スターリンの前述の講義は今日、最も廣く讀まれてゐるが、これを熟讀すれば、民族問題、農民問題、戰略及戰術の問題についてスターリン其人の獨自の見解の溢れてゐることに氣が付く。彼はレーニンと同じ獨創的頭腦に富んでゐる

冷靜な強い意思の人であることも兩者に共通してゐる。或るブルジヨア文士がレーニンを評して「まるで一個の機械だ、衣服につゝまれた力の集積だ」と言つたさうだが、或る程度において此評語はスターリンにもあてはまるだらう。クロンスタット軍港の水兵暴動に參加した、共產主義者の直話だが、そのときスターリンからたゞ一言「射て」といふ命令を電話で受けたさうで、餘計な文句の一つもない、その簡單な冷やかな「射て」と言はれた一言はまだ耳にこびりついてゐると、いふことであつた。スターリンは政治上の意見が違つてくると、實に猛烈な攻擊をして、相手を倒さねばやまない。レーニンは師匠分にあたるプレハノフを、その意見の扞格のために政敵として斃すことを止めなかつた。現にスターリンはトロツキーを猛烈にやりつけてゐる。近年、トロツキイは事々に共產黨中央委員會側と意見が違つてくる有樣であるが、後者を指導するスターリンとの間の論爭は火の出るようである。最近の例で言へば、支那問題について、スターリンは未だ支那において勞働者農民ソヴイエットを作る勿れ、先づ武漢政府を支持せよ、と言ふのであるが、トロツキイは其反對のことを述べてゐる。スターリンは「トロツキイ、ジノヴイエフ一派は張作霖、蔣介石を助け

ろものだ」といふような激語を放つてゐる。尤も之等のことは、諸國のブルジョアの喜ぶように、ロシヤの指導者の個人的な勢力爭ひとか、內訌だとかいふことを意味しない。徹底的に論爭した揚句に、一方が他方に服するといふことはボリシエヴイキの傳統なのであつて、對立物の鬪爭から統一的なものを生み出すといふことは彼等自身の特質なのだ。

スターリンの革命的經歷に比較的に政治的過失のないことも、レーニンと類似する一つの事柄であらう。過失は誰れにも免れない。殊に革命といふ異常な事實の前には、優秀な人間でも往々飛んでもない過失をやる。例へば、一九一七年の十一月革命に際して、ボリシエヴイキの中央委員會の席上でレーニンが同月七日を期して一揆を起すと提案したとき、ジノヴイエフとカメネフは之に反對した。(尤もその反對は同委員會から一蹴された。)ジノヴイエフは之を以て自分の一生の失敗だと幾度も繰り返してゐるが、なるほど革命家が革命に際して革命家らしくないことを言つたとすれば、致命傷である。又レーニンがドイツ帝國主義とブレト・リトヴスクの屈辱的媾和條約の調印を主張した時にトロツキイが憤然として之に反對し、ラデックの如きは、レーニンを監獄に叩き込めなどと大言したそうである。之等の場合においてスターリンは常にレーニン側に立つてゐたのであつて、それは單なる追隨者としてでなく、レーニンの政策の正しいことに確信を同じくしてゐたからに外ならないらしい。

要するにスターリンはレーニンとよく似た素質を有する人であるが、後者の薰陶によつて政治家として大きい人物になり得たことは明白だ。スターリン自身も次の言葉を書いてゐる。即ち、一九一七年の三月革命後に臨時政府と勞働者農民兵卒ソヴイエットの二個の權力が成立した際にロシヤ內のボリシエヴイキは明確な戰術を立て得なかつたが、四月にレーニンが歸國して「すべての權力をソヴイエットへ」といふスローガンを確立したので、自分もそれに依つて始めて救はれた、と彼は書いてゐる。現在のロシヤの最も重要な政治である新經濟政策、社會主義への一步々々の前進、農民とプロレタリアートとの關係、資本主義國家との對立關係、これらのことについてレーニンはその基本方針を殘して死んだのであつて、ロシヤとしてはこの基本方針以外に逸脫しては根抵から崩れることになるのだが、トロツキイやジノヴイエフは屢々この方針の外に逸脫しようとするのであり、これらに對してスターリンが精悍な執拗な鬪爭をしてゐるわけである。前二者もロシヤの勞働階級の間にそれ〴〵勢力を持つてはゐるが、レーニン主義を眞向にかざし且つ其基本方針を正しく執行してゆかうとするスターリンの方に大衆の信賴の集まりつつあるのは當然のことであらう。

四

彼の革命的經歷を一瞥しよう。

スターリンは寒いロシヤでの唯一の溫暖な地方たるカウカサス生れだ。彼の革命的活動は二十歲代の一九〇〇年頃から既に始まり、一九〇三年にはお定まりのシベリヤ流刑に遭ふてゐる。一九〇〇年にレーニンやプレハノフが雜誌「イスクラ」(「火花」)を發行して社會主義を鼓吹しロシヤ內に非常な影響を與へ、各地で「イスクラ團體」といふ

革命家團體が續々設立されたが、スターリンもこれに參加した一人だ。ロシヤ社會民主勞働者黨がボリシェヴイキとメンシェヴイキとに分裂した後では、彼は常に前者に屬し、レーニンの指導に服する闘將の一人であつた。今日のロシヤの指導的政治家は全部がボリシエヴイキ出身であるわけでなく、メンシエヴイキや、小ブルジョア黨であつた社會革命黨からの人も隨分居るのであるが、スターリンは生え抜きのボリシエヴイストなのである。彼は世界戰爭の最中に諸交戰國の左翼社會主義者の會合したチムメルワルド、キーエンタール兩會議には出席したが、大抵、國内の運動に從事して餘り國外には出ず、そのために幾度か入獄したり、流刑されたりした。

一九一七年三月革命のはじまつた後、ボリシエヴイキは「勞働者及び農民の民主的獨裁」といふ古いスローガンで固執してゐたが、レーニンが四月に歸國して、「あらゆる權力をソヴイエットへ」といふ明確な方向を示すや、スターリンはこのテーゼに率先して署名し、これより後はレーニンの指導の下に戰ひ、それより十一月革命までは火の出るように働き、同革命直前には、十一月七日を期して叛亂をおこすといふレーニンの提案に眞先に賛成し、叛亂統制委員會の委員に選まれた。また其後に召集された憲法議會についてはトロッキイと共に其解散説を主張し且つ斷行に當つた。其後の内亂時代にはウランゲル討伐の軍事委員となつた。また革命後には最初の民族委員長をつとめた。彼は民族問題について造詣が深く、一九二三年の無産黨大會で彼の報告したテーゼは今日、この問題の基礎的理論の一つと見られてゐる。私が傍聽した一九二四年の第三インタナショナル第五大會では、民族問題の報告者であつたマヌルウスキーは「民族問題についてのレーニン・スターリン派理論」といふ言葉を使つてゐたのを記憶する。

新經濟政策施行後では、彼は常に幹部派を指導し、黨内の反幹部派と戰ひ、特にトロッキイに對して猛烈の攻撃を加へ、昨年においてはトロッキイ派とジノヴイエフ派との聯合から成る反對派を克服した。ロシヤ共産黨では、黨内における意見の相違については火の出るような論爭が行はれる。世界のブルジョア新聞はかゝる論爭を見て、ソヴイエット權力の崩壞、首領の個人的勢力爭ひ、內訌といふ風に書き立てるが、それはまちがひである。ボリシエヴイキは猛烈な自己批判の過程に依つて、一層高い政策をかち取らうとするのであつて、スターリン自身も「自己批判はわが黨の弱點でなくて强所である。民衆の生活に根ざす黨、勝利へ進みゆく黨は、自己の過失について忌憚なき批判を許し得る。民衆の前に眞理を隱蔽する黨、日光と批判とを忌む黨は、黨ではなく、沒落へ運命づけられた敗亡者の集團に外ならない。ブルジョア諸君が自己の尺度を以て吾々を測るのは誤謬である」と言つてゐる。

五

だがロシヤ共産黨の自己批判は新經濟政策の施行後に次第に深酷となつてきた。新經濟政策を以て敢てロシヤに限らず社會主義建設のためには必然に通過せざるを得ない一段階だと見る幹部派と、これを以て資本主義への一種の逆戻りと解する一派との意見の相違は次第に深くなり、この基本的見解の異る結果、諸種の問題について事々に意見が

遡つてくる有機である。國際革命の潮流は世界戰爭後に比すればそのテンポを減じてゐる。どこにも急にプロレタリヤ革命がおこりさうにない。ロシヤは世界の資本主義國から機會だにあらば戰爭を挑まれようとしてゐる。かゝる形勢の下においてロシヤの社會主義的建設は果して可能であるか。可能であるとすれば如何なる方法を以て進まねばならぬか。復制復古の危險は果してないか。國際革命の波の再び揚がる日まで、ロシヤはいかにして帝國主義國家の挑戰を切り拔けてゆくべきか。——かういふ眞摯な問題に當面しつゝあるロシヤにおいては、政治上の意見の相違は非常に深酷味を帶びざるを得なくなるのだ。

私はこれらの諸問題について、今日のロシヤの政治の重要契機を指摘して、この間における政治家及び理論家としてのスターリンの面目を示し度いとおもふが、既に制限された紙數に近づいてきたから、現に論議されてゐる二つ三つの問題をとりあげて、それを極く簡單に述べてみよう。

一國における社會主義建設の問題

世界においてロシヤ一國のみが社會主義へ向つてゐる。他國ではプロレタリヤ革命が急におこりさうにない。ロシヤは果して社會主義を建設することができるか。かうした問題は、今日、「一國における社會主義建設の問題」といふ形で論ぜられてゐる。スターリンは、レーニンの思想に從つて、然り建設され得ると答へるのである。エンゲルスが一八四七年に書いた「共產主義原理」のなかには、、、、、、、、、一國では起らなくて、少くともイギリス、フランス、ドイツなどで同時におこるだらうと書いてゐる。獨占的資本主義の段階の現はれなかつた當時ではエンゲルスの公式は正しかつた。だが今日は帝國主義時代である。世界經濟は帝國主義國家の世界の分割、再分割の爭鬪の關係のもとに發展してゐる。だが各國家の經濟的政治的發展が不均衡であることは資本主義の不可避的法則なのであつて、之に依つて帝國主義のフロントは或個所では強まり、或る個所では弱まる。その弱まつた個所は容易に破壞され得る。從つて、、、、、、、、、、は最初は二三の、若くはたゞ一個の資本主義國でも可能である。——これがレーニンが一九一五年に「ヨーロッパ聯邦の標語について」といふ有名な論文で始めて發表した思想である。スターリンは此思想を踏襲する。トロツキイはレーニンに反對して、或る、、、、、、、、、、が勝利を得ても他國のプロレタリアートが之に續かなければ、前者は存續することができない、と論じたのであつたが、彼は今も此思想を捨てないのである。

スターリンは、、、、、終局的勝利が一國のみで不可能であることは、承認するのである。、、、、、、、、、、が其國のブルジョアジーに對して勝利を占めることは比較的に容易であるが、、、、、、、、、、、、も同じく勝利するのでなければ前者は完全な保障を有しない。それにも拘らず、いな、それであるからこそ、、、、、、、、、、、、、、、、、、は、自國において、、、、、、、を積みかさねて實力を養ひ、、、、、、、、、、、援助して其勝利を速かならしめるに努め、又、、、、、、、、、、、、、、、、、を避せざる態度を以て進まねばならない、といふのである。

スターリンはトロツキイやジノヴイエフの悲觀說に對し、諸君は革命に倦怠したのであるかと詰じつてゐる。

農民問題

ロシヤは農民の夥多な國であつて、從つてこの大衆を獲得するや否やは同國の社會主義的建設に根本的な關係がある。ロシヤの農民は同國の將來の經濟的機構や生活關係の結果として、例へば日本の農民ほどに勞働階級に近く立つてゐない。新經濟政策以後になつてから、農村における富農、中農、貧農の對立が顯著になつて來た。例へば一九二五年のソヴイエツト選擧では中農が貧農に反對して富農に味方するといふ危險な狀態が生じたのである。之に對して一派の論者は農村に、、、、、、、、、、、、、、、、、、せよと主張する。スターリン等の幹部派はこの說に反對し、今日の主要任務は中農をプロレタリアートの側に獲得することにあり、社會主義工業の發展に依つて農民大衆の物質的文化的水準を高め、勞働階級の指導の下に彼等を社會主義的建設へ導き入るべきであると主張してゐる。その具體的手段の第一として、農民經濟をソヴイエツト經濟の全體系のなかに導き入れたければならず、社會主義經濟の分配組織として多大の意義を有する協同組合網を全國に張つて勞働者と農民との提携を實現すべきである。第二には戰時共產主義時代の遺物を一掃し、農村の行政方法を改革し、ソヴイエツトに對する農民の積極的參加につとめねばならない。要するに中農を富農より切り離すことは、前者の經濟的、文化的、政治的水準を高め、之をプロレタリアートの側に獲得することに依つてのみ可能だといふのである。

支那問題。

ロシヤの政治家は同國の一九一七年の革命が世界におけるプロレタリアートの勝利の端緖であり且つ基礎だと考へてゐる。だが前述の如く、、、、、、、、、、、、、、しなければ、ロシヤのプロレタリアートの終局的勝利もないわけである。かうした理由から、彼等は支那の運動の發展に多大の關心を持つてゐる。

スターリンの支那問題觀は昨年十一月三十日及び今年五月二十日の彼の演說で窺ふことができる。彼は支那革命はブルジョア民主々義運動であると共に民族解放運動だと考へる。支那の社會組織の最も根本的な特徵は、農村における封建制度の多量なる殘存であつて、封建領主の如き大地主は支那大多數の勞働民衆を抑壓してゐるものであり、反動的な官僚軍閥は彼等を基礎にしてゐるものに外ならない。故に農業革命から出發せざるを得ない、支那革命は當然にブルジョア民主々義革命である。同時に支那に對しては帝國主義國家の掠奪が加はつて居り、それは官僚軍閥の有勢力と結合してゐる。この點から見れば支那革命は民族解放運動であり、反帝國主義運動である。

支那革命の他の特徵は國民的ブルジョアジーの劣勢なことである。このことは當然に農民に對する指導力を當然に勞働階級の手中に置くものである。もう一つの特徵として數へていゝことは、支那が國際上の援助者、補助者としてソヴイエツト聯邦をその隣人に持つてゐることである。スターリンは、支那革命の特質を以上の如く數へる。

こゝに問題が生ずる。それは支那の勞働者及び農民はロシヤ革命にならふてソヴイエツトを即時形成すべきか否かの問題である。スター

リンは今日、これを作つてはならないと主張する。或る政府が存在してゐる場合、ソヴイエットを作れば、そこに二重權力が生じてくるわけである。かゝる二重權力が必要となるのは、既存の政府が反動化した場合である。一九一七年のロシヤ革命でソヴイエットを作つたのは三月革命で作られた臨時政府が反動的なブルジヨア的なもので、勞働者農民の利益に反くからこそである。今日、支那には革命的な武漢政府が存在してゐる。その革命的役割を充分に果たしめることが重要である。吾々はこの政府を支持せねばならない。今日、即時にソヴイエットを支那に建設するとすれば、それは自ら革命的な國民黨から出てゆくことであり、武漢政府を倒壞することであり、その結果において張作霖、蔣介石を援助することになる。と、彼は論じてゐる。

スターリンは農民を獲得することが支那革命において最も重要なことだと考へてゐる。その方法として、第一に農民委員會を作らしめて農民に働きかけること、第二に國民革命政府をして、その機關を通じて農民を引き付けさせること、第三に革命軍をして農民の間に宣傳及び煽動を行はしめることを擧げてゐる。

スターリンは支那問題についてもトロツキイとジノヴイエフとを猛烈に攻擊してゐる。彼はトロツキイは支那革命の本體が農業革命で在ることを認識できなくて單なる反關稅戰だと見てゐると非難し、これは蔣介石の見解と選むところがないと言つてゐる。またトロツキイが武漢政府を以て一の擬制だとなし、ジノヴイエフが國政府を以てケマル・パシヤ的政府だとなし、共にソヴイエットを即時に作らねばならぬと言つてゐる思想を非難し、彼等は今やかくて張作霖や蔣介石を支持するものに外ならないではないか、と主張してゐるのである。

——以上のようなスターリンの支那觀は今日、ロシヤ共產黨及び第三インタナショナルの支那問題についての指導思想となつてゐる。

スターリンについてはなほ論ずべきことが多いが、既に紙數を超過してしまつたから、他日を期する。

漱石の思ひ出

夏目鏡子述
松岡譲筆錄

一　傳へらるゝ松山行の原因

話の順序として結婚前のことからお話いたしませう。申すまでもなく結婚前のことが私にわからう筈はないのですが、結婚後本人の口から聞いたことや、外の方々から伺つたことなど照らし合はせて、記憶に殘つてゐることをかいつまんでお話し致しませう。

當時夏目の家は牛込の喜久井町にありましたが、家がうるさいとかで、小石川の傳通院附近の法藏院といふ寺に間借りをしてゐたさうです。多分大學を出た年だつたでせう。其寺から、トラホームを病んでゐて、毎日のやうに駿河臺の井上眼科に通つてゐたさうです。すると始終そこの待合で落ち合ふ美しい若い女の方がありました。背のすらつとした細面の美しい女で――さういふ風の女が好きだとはいつも口癖に申して居りました――その女が見るからに氣立が優しくて、さうしてしんから親切でして、見ず知らずの不案内なお婆さんなんかが入つて來ますと、手を引いて診察室へ連れて行つたり、いろんな面倒を見て上げるといふ風で、傍で見てゐてもほんとに氣持がよかつたと後でも申してゐる位でした。いづれ大學を出て、當時は珍らしい學士のことですから、緣談なんぞもちらほらあつたことでせう。そんなことからあの女なら貰らつてもいゝと、かう思ひつめて獨り極めをしてゐたものと見えます。

ところがその女の母といふのが藝者上がりの性惡の見榮坊で、――――どうしてそれがわかつたのか、そこのところは私にはわかりませんが――始終寺の尼などを廻者に使つて一擧一動をさぐらせた上で、娘をやるのはいゝが、そんなに欲しいんなら、頭を下げて貰ひに來るがいいといふ風に言はせます。そこで夏目も、俺も男だ、さうのしかかつて來るのなら、此方も意地づくで頭を下げて迄呉れとは言はぬといつた案配で、それで一ト思ひに東京がいやになつて松山へ行く氣になつたのだとも言はれて居ります。當時にして見ればパリ／＼の學士で、大學でも評判のよかつたといふ人が、何も苦しんで松山くんだり迄中學教師として都落ちをしなければならないわけはなかつたらしいのです。いづれ何か理由があつたか、深い考があつたとと想像され

たいやうにありますまい。ともかく鎌倉へ行つてゐましたその時分も熱心深く坐禪をやつて、あとを追つかけさしたと自分では信じてゐたやうです。

丁度其事件の最中で頭の變になつてゐた時でありませう。突然或る日喜久井町の實家へかへつて來て、兄さんに

「私のところへ縁談の申込みがあつたでせう。」

と尋ねます。そんなものゝ申込みに心當りはなし、第一目の色がただならぬので、

「そんなものはなかつたやうだつたよ。」

と簡單に片付けますと、

「私にだまつて斷るなんて、親でもない、兄でもない」

つてえらい見幕です。兄さんも躍起して、

「一體どこから申込んで來たのだい。」

となだめながら訊ねましても、それには一言も答へないで、たゞ無闇に血相かへて怒つたまゝ、ぷいと出て行つて仕舞つた。兄さんも心配でなりません。何であゝぷり〳〵怒つてゐるのか、何であゝいふたゞならぬ様子をしてゐるのか。ともかく法藏へ行つてゆつくり尋ねて見たら仔細もわかることだらうから。思つてお寺へ行かれた。が、てんで寄りつけもしないやうな見幕で、そんな不人情者は親でもない、兄でもないを繰りかへして、親爺は沒義道のことをしても、それは親だから子として何ともいふことは出來ないが、兄は怪しからんと喰つてかゝる始末に、その申込みの當の相手のことを尋ねても、それは不相變一言も洩らさないので、手がつけられないのでそれなりに歸へつたさうです。法藏院の尼さんに變はつた様子でもないかと歸へりぎはに尋ねると、夏目さんの部屋の方でも見てゐるのが見付からうものなら、近頃はひどく怖い目附で睨まれたりしますといふ話だつたとか申します。

其後洋行からかへつて來て千駄木にゐた頃、——この事はいづれ後で詳しくお話しますが——全くお話にならない亂暴を家のもの、殊に私にしますので、私もほと〳〵困つて、或る日兄さんに話しますと、兄さんもいろ〳〵私の話を聞いて、法藏院時代のことを思ひ出して、

「それでやツとわかつた。何故あの時金ちやんがあんなにぷり〳〵してゐたんか、わたしには長いことまるで合點が行かなかつたんだが、するとさういふ精神病があの人の家に隱くれてゐて、それが幾年おきかにあばれ出すんだね。」

と言はれたので、私も前にもそんなことのあつたのを聞いて、初めてそれが病氣だなといふことをさとりました。其後精神病學の呉さんから診て貰ひましたところ、それは追跡狂といふ精神病の一種で、多分遺傳性の××から來てゐるんだらうと申して居られました。

尼さんについて面白い話があります。これは後で常人の口から聞いたのですが、其處には尼さんが幾人も居たものと見えまして、其中の一人に眼科で會ふその婦人に誠によく似た尼さんがありました。背丈の工合と言ひ、顏かたちと言ひ、瓜二つとは行かない迄も、何となく俤を彷彿とさせる尼さんでした。尼さんの名を祐本(多分から書くのだらうと思ひまして字を宛てました)さんと申しました。

或る日祐本さんが風邪を引いて熱を出しました。尼さん同士のことで手當も行屆かなかつたのでせう、それを見て氣の毒に思つたと見えて、一服解熱劑を盛つてやつたさうです。すると外の尼さんたちがより〳〵に夏目の方を指して、

「まだあの人のことを思つてるんだよ。」

と口さがなく、祐本さんがその婦人に似てゐるから親切にするのだとばかりにほのめかしました。それを小耳に挾んで、一層尼さんたちが女の母親に頼まれて、探偵の役をしてゐるのだと思ひ込んだものださうです。さうして家はいや、法藏院もいやになり、結局東京全體がいやになつたのではないかと思はれるのです。

たしか亡くなる四五年前のこと、高濱さん（虚子）に誘はれて九段にお能を觀にまゐりますと、その昔の女が來てゐたさうです。二十年振りに偶然顏を見たわけですが、歸へつてまゐりましてから、

「今日會つて來たよ。」

と其事を私に話しますので、

「どんなでした。」

と尋ねますと、

「餘り變はつてゐなかつた。」

と申しまして、それから、

「こんなことを俺が言つてるのを亭主が聞いたら、いやな氣がするだらうな。」

と穩かに笑つて居りました。私にはこの話は、實在のやうでもあり架空のやうでもあつて、誠に妙な話に響くのですが、兄さんはその女の方の名前を御存知の筈です。私は伺つたのですが忘れて了ひました。

そんなわけで急に東京を捨てゝ松山へ行くことにしたものらしいのですが、さうした出しぬけの話を持ち出されて、嘉納治五郎さんあたりが引き止め役で、東京に口がないぢやなし、現に其時は高等師範で月給四十圓とか貰らつて教師をしながら大學院で勉強してゐたことではあり、何も物好きに松山くんだり迄落ちのびなくともと骨折つて下すつたさうですが、全く滅茶苦茶な駄々つ兒振りで、手がつけられなかつたとか申すことです。

松山へ行つても、先程申しましたとほり、宿の神さんや何かゞ廻者に見えて、餘り愉快ではなかつたやうです。

この發作は其後數年たつてからひどく起こつてまゐりましたが、一體に隨分と病氣の昂じてゐる時でも、遠い人には案外よくつて、近い人程いけないのですから、始末に了へません。がこれは追々お話致しませう。

又一說に、

「あの女なら大變な美人で、君なんかとは月と鼈ほどの違ひで、不似つりあひも甚しいぢやないか。」

とか何とか誰かゞ申しましたので、

「そんなことをいふんなら絶對に貰はない。」

とそれ切り緣談をお流れにしたとも傳へられて居ります。尤も子

規さんに宛てた手紙（註全集第十二卷六六頁參照）には、一体そんなことは否定して、自分が失戀したとか、その爲めにやけをおこしてゐるなど〻家族のものが信じてゐるが、そんなことはすべてお取り上げなきやうといふやうなことが書いてあるさうです。けれども私も傍についてゐて見たわけではないのですから、はつきりかうとは申上げ兼ねますが、後からいろ〳〵とあつたことなどから推して見ますと、以上の話が全部でない迄も、ある點迄は充分事實だつたゞらうといふ氣がしてなりません。想像の上に想像を重ねて行つて、終ひには一つの立派な事實――それは自分だけにわかつて、人にはわからない――を作り上げて了ふかうした病的な頭を、私はそれからもしば〳〵實地に見て來て居ります。

二　松山

松山でも色々緣談が持ち込まれたさうです。中にも縣の參事官の某氏などは、其土地に夏目をとめておきたいとでも思はれたものか、大層乘り氣で候補者をさがしては、あれかれと肝煎りをされたものださうです。中で一人見合ひをして見ないかといふ口があつて、その參事官のお宅へ行つて待つてゐると、カラ〳〵カラと玄關のあたりで足駄の音がして、ごめんなさいつて入つて來た若い女があります。やがて女が茶を汲んで狎れ狎れしく入つて來て、しやあ〳〵として御相手をする。さうして他愛もないことに手離しでげら〳〵笑ふ。それが見合ひの相手だつたので、愼しみのないのに閉口したといふ話をしてゐたことがあります。

松山の下宿に居る間に、子規さんが訪ねて來て、しばらくの間宿り込んでゐられたことがあるさうです。子規さんは一人で鰻飯を食つて、寄つて來る俳人たちと大聲で俳論をしたり、やたらに運座をやつたり、當の主人夏目の勉強の妨げにならうと一向平氣なもので、それに宿の神さんが肺病と聞いて、いやな顏をしてゐても、これまた平氣なものだつたさうです。散々食ひ散らして、いざ東京へかへるといふ時になつて、旅費がないからくれろといふので渡しますと、東京へかへる前に奈良見物をしてお費ひになつたといふことです。熊本へ行きましてからも、お金を貸してくれといふ手紙が時たま來たやうです。

久保より枝さんが少女時代で、その頃下宿と親類とかでちよい〳〵遊びに見えたものださうですが、その下宿が子規のとまり込んだ宿かどうか、その頃のことを詳しい方々に伺つたらわかりませう。

三　見合の前後

さて次には私たちの結婚のことに移るのですが、その前に一寸私の里のことをかいつまんでお話して置きませう。

私の里の中根家といふのは、代々福山藩の侍分だつたさうで、祖父は同藩の篠田家（中外商業新報社長篠田鐵次郎さんの家）から入婿したのです。元貧乏士であつたところへ御維新で益々微祿したものでありませう、私が五つ六つの頃、祖父が内職沓下をあみ、洋傘の骨などを磨いてゐたことを朧におぼえて居ります。さういつた苦しい中

で、父が自力で大學教育をうけるとの出來やう筈はなかつたのですが、運よく藩中の秀才として選拔されて、大學へ入つたのださうです。其頃の大學のことは私には一向わかりませんが、何でも父は經濟學を修めたいといふので、その爲めに獨逸語をやらなければならない。ところが獨逸語をやる爲めには醫科でなければ修められないといふので、醫科に入つたさうです。私も子供の頃は父が新潟の病院長になつて赴任したので、一緒に連れられて參つたことがあります。其の後東京へかへつて官吏になりまして、この縁談の持ち上がつた頃は貴族院の書記官長をして居りました。父の名を中根重一と申します。私はその長女として生まれました。

其頃の中根の家は牛込矢來の、丁度今の新潮社のところで、あすこは私たちの思ひ出の深い土地なのです。もう其頃には父が相當にやつてゝくれるので、祖父も内職をよして（祖母は私の十五才の時亡くなりました。）謂はゞ樂隱居の身分になつて、朝のうちは大きな目金をかけて丁寧に新聞をよみ、午後になると近所の碁會所へ出かけて碁を打つて、さうして夕食にはきまつて二本づゝの晩酌を平らげて機嫌よく床に入るといつた、至極おとなしい隱居さん然とした隱居さんでした。私たちが時々話相手になつたり、お酌でもして上げたりすると大層喜んで居ました。

祖父の碁敵に小宮山といふ方があつて、その方が時々石を圍みに祖父のところに見えるのでした。小宮山さんは郵便局に務めてゐられて、その同僚に夏目の兄さんが居られた。ところが小宮山さんの奧さんといふのが、御近所で窪田の伯母さんとお友達だといふ工合で、妙なところからつながりが出來てゐるところへ、小宮山さんが祖父の部屋へいらつしやると、丁度それと小庭を隔てゝ向ひ合つてる私たちの子供部屋に、手頃の娘が見える、夏目の弟さんの話も聞いてゐるので、どんなものだらうといつた工合で、先づ小宮山の奧さんから窪田の伯母に話がある、伯母さんから父や母に橋渡をするといつた筋道で、先方のことも此方のことも案外お互に手取早くわかりました。そこで父が各方面へ夏目のことを問ひ合はせると、大層評判がよろしい。

或る日父に連れられて鎌倉かへ行かうといふので汽車にのりますと、以前その人にやらうかなどゝ縁談さへあつて、好酒家だからといふので沙汰やみになつた高田源二郎といふ方にひよつこりお逢ひしました。まだお若い法學士で、其頃鐵道の方へ出てゐられて、前々から父と識つた仲です。私はだまつて聞いてゐますと、父が吉田さんに尋ねて居ります。

「君、文科出の夏目金之助といふ男を識つてるかね。どんな男だらう。」

「よくは知りませんが、何でも學校でも大層評判のいゝ男でしたよ。」

「實は縁談が持ち上がつてゐるんだがね。」

「えゝ、それぢやよくしらべて上げませう。お安い御用ですから。」

いろ〳〵調べて貰らつたところが、大層評判がいゝ。父も乘り氣になつて、先づ寫眞の交換をしやうといふことになりました。そこで此方は新らしい橋のところの丸木利陽で寫眞を撮つて送り、先方からも日ならずして寫眞が屆きました。

其頃私も十九才になつて居りました、もう年頃だといふので方々か

ら縁談の口がかゝつて來てゐました。別に降る程あつたわけではありませんが、それでも寫眞を見た數も少くありませんでした。何滿其頃の、殊に窮式に育てられた方の娘のことですから、親が是が非でも嫁けと言へば、少し位虫が好かなくともどこへでも片付いたではありませうが、これまで來た寫眞では、この人になら自分の一生を托しやうといふ氣を起させる程の人物らしいのもなかつたし、父の方でもそれ程進んでゐたものもなかつたやうでした。ところがこん度の寫眞を見ると、上品でゆつたりしてゐて、如何にもおだやかなしつかりした顏立で、外のゝをどつさり見て來た目には、殊の外好もしく思はれました。

そこで此分ならといふことで、お互が別に御異存もなかつたのでせう、何はともあれ暮れの休みにでも出て來て、一度親しく顏を見たり見せたりして其方でいやなら遠慮なくお斷りなさい、此方もいやなら遠慮なく斷はらう、しかしさういふことになつても此方でも出來るだけの御世話はしやうし、其方でも又骨折つて貰ひたい、こんなことを父から申してやつたやうです。すると先方でも上京するといふことになつたので、今日明日訪ねて來るといふあたりに、父が母に向つて、

「きまつた積りで話をするな。」

と言つてるのを聞きました。するうちにその日が來たと見えて、ひよつこり一人で訪ねて參りました。フロックを着込んでゐたやうに覺えてゐます。明治二十八年十二月二十八日のことです。

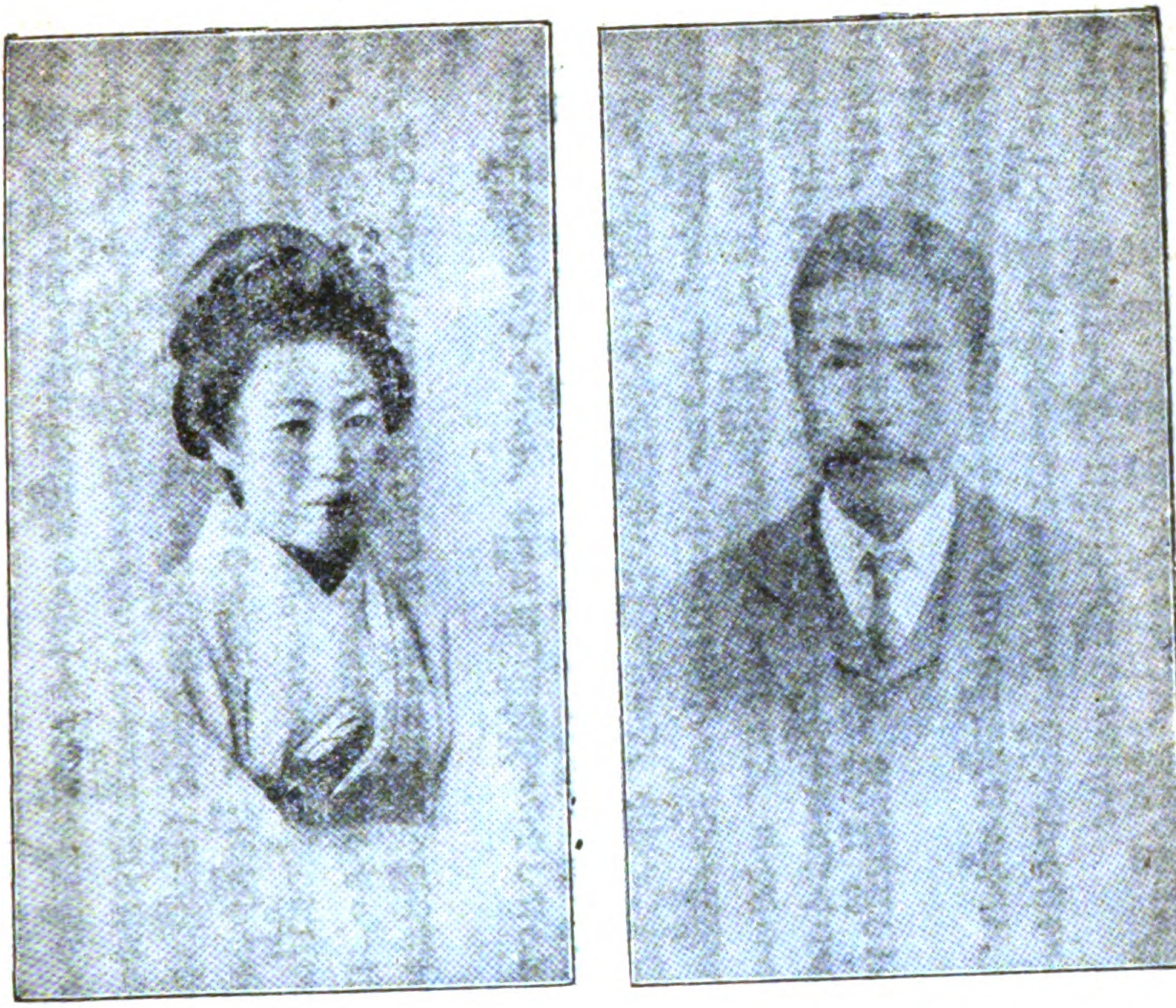
其頃私たちは虎ノ門の官舍に移つて居りまして、矢來の方には祖父さんが住んで居りました。家族は父母、私、時子、倫、梅子、豐子、祖母の六人兄弟姉妹、男は書生三人、女中三人、抱車夫一人の相當の大人數で、官舍は西洋館日本館兩方あつて、それでも電燈がついたり、當時には珍らしい電話があつたりしてゐました。電話などでも耳で受話器をあてゝ、眞中にベルの鈕があるといふ、今から思へば骨董品でした。見合ひの家は父が書齋に使つてゐる洋館二階の二十疊の疊の敷いてある部屋に通されました。ともかくそこにはストオヴも取りつけてありました。

私の父は書生流ですから、むづかしいしかつめらしいとは一切ぬきのやうでしたが、私はたゞだまつてきちんと坐はつて聞いてゐた筈なのが、今から考へると何をお話してゐたものか、とんと記憶にありませんが、ともかくいゝ印象をうけたゞだけはたしかのやうでした。今記憶に殘つてゐる見合ひの插話は二つきりありません。

一つは夏目の鼻の頭のあばたです。といふのには曰くがあるのです。見合ひの寫眞を仲人のところへもつて來た夏目の兄さんが言はれるには、

「これは大變きれいに寫つてゐるが、あばたはありませんよ。」

とわざ〳〵斷はつて行かれたといふ其言葉がそのまゝ仲人の口から傳はつて來たので、私も妹の時子も、その妙な言葉つきから其事が頭にこびりついてゐたものと見えます。いづれ少しあばたがある位にいつたのを、仲人が聞き違へたのか、仲人口でわざともぢつたのかいづれかなのでせう。ともかく何の氣なしにひよいと本人の顏を見ると、鼻の頭にあばたがあるではありませんか。おや〳〵、さう思ひま



（夏目さん夫妻の見合ひ寫眞）

したが、初めこの羞しい見合に、鼻の頭ばかり見てゐるわけにも行かず、あゝ仲人が斷はつてゐた位だから、今のゝは自分の目の違ひかしら、こんな風に思つてゐますと、當時華族女學校に通つてゐたおきやんな時子も、其時お給仕をしてゐたのですが、それに氣がついたと見えて、玄關に送つて出て歸つて了ふと申します。

「ねえ、ちよいと、お姉さん、夏目さんの鼻のあたま、横から見ても縱から見てもでこぼこしてるのね。あれたしかにあばたぢやない。」

「えゝ、わたしもさう思つたわ。」

さういつて母と三人でやつと解放された氣で陽氣に笑ひますと、

「そんなこといふもんぢやない。」

と父に苦もなく叱られて了ひました。私などより活潑な妹は、お給仕をしながら、本當に横からも縱からも、ためつすがめつ眺めたらしいのです。

それからもう一つ、引物に大きな鯛の鹽燒が出ると、夏目はいきなり鯛の横腹にぼくりと一箸立てゝ穴をあけました。一箸食べた丈でどう思つたか、それ切り箸をつけません。それがどういふものか鮮に目に殘つてゐましたので、結婚後そのことを申しますと、

「あれを折詰めにして貰らつてかひつたところが、蓋をあけて見た兄貴が、これはどうしたんだといふから、一口たべたんだがあんまり大きいんでやめにしたんだといふと、引物に箸をつける奴があるもんか、お嫁さんに嫌はれるぞと叱られたつけ。」

と、自分でもよく覺えてゐて、餘程可笑しかつたと見えて笑つて居

ました。

明けて元日のことでした。私は妹二人と三藤の伸を連れて、矢來のお祖父樣のところへ年始に參ります途中、神樂坂の寄席の前迄來ると、反對の方から俥にのつて髭を吹かし來る紳士があります。すれ違ひに見るとたしかに二三日前に見合ひをした夏目です。御時宜をしたものかしないものか、たつた一度會つてまだ碌々顏も覺えないのに、たしかにさうとは思ふけれども若し間違つてゐたらどうしやう、そんなこんなで娘心に思ひ迷つてゐるうちに、俥と俥とは平氣ですれ違つて、向ふの俥の人は微動だもしません。はてやはり他人の空似かしらと思ひなほして居りますと、妹の時子が明るい聲をかけます。

「ちよいと〳〵、お姉さん、さつきの人たしかに夏目さんね、見たこ」

「えゝ、たしかにさうよ、ずいぶんすましてゐたわね。」

「さうよ、ずいぶんのおすましね。」

これも後で聞いたのですが、勿論先方でも氣がついてゐたのださうですが、此方から先きに女に禮をするのは不見識だ、いづれ女の方からするだらうから、そうしたらしてやらうと待ち構へてゐたのだと申して居りました。

三日に家つこばかりの新年會をやるといふので、遊びに來ました。私たちの顏を見たつて、一昨日神樂阪で逢ひましたねとも何とも言はず、それでも機嫌よくみんなと一緒に歌留多を取つたり、福引を引いたりして興じて居りました。歌留多も下手なのでみんなに喜ばれて居ましたが、父に[illegible]て、今年の[illegible]者に[illegible]ことばかり上手で何にも役に立たないが、あゝいふ[illegible]に不[illegible]として[illegible]ましいと、しきりと賞つた後でほめてゐました。

其時みんなで福引を引くと、夏目には綿のみすぼらしい帶〆が當りました。私は男持のハンケチを一打引き當てました。尤もその手巾といふのが、何かの廣告でゝもあるのか、藍で大きく『國の光』と染め出してあるのです。母がそれを見て、

「夏目さんの綿の細紐を上げても惡いから、その手巾を取りかへて上げたら。」

と申しますので、別室で一人でくつろいでゐるところへ參りまして、

「母がそんな紐ではお氣の毒だと申しますから、これとお取りかへ致しませう。」

と手巾を差し出しますと、

「さうですか。」

とすまして交換して行きました。後で申すのには、あの時は紐の方がよつぽどよかつた。あの手巾ぢや仕方がない。大方兄貴の子供のおいしめにでもしたらうつて惡口を言つてゐましたが、あの人の文運がひらけて、今では一つの國の光になつたとの運命を、朧ろげながら何だか其時に私の手で暗示したやうに感じられもするのであります。

七日に松山にかへるといふので、母と一緒に新橋へ送りに行きました。兄さんと高田の姉さんの旦那さん、お友達が三人。珍らしいいい

お天氣でした。朝八時頃の汽車なので、朝寢坊の子規さんは來られず、後から言ひ譯のはがきにこんな句を書いたのが屆いたのを見ました。

　寒けれど富士見る旅はうらやまし、　子規

　出立前に父はなるべく東京で職を得て、かへつて來てから結婚するやうに望んでゐました。夏目もお誂へ通り行くかどうかわからないが、現在よりは少しどうにかなつた上で結婚するやうにしやうといふので、婚約は出來上つたまゝ、結婚の時はきまりませんでした。

　とにかく父は直接會つてなほ更人物が好もしくなつたのでせう、將來必ずえらくなるといつて囑望して居りました。さうして酒呑みではなし、暮らしも役人よりは危氣はなし、第一人間も固く、派出でないので、若い娘にはよからうといふやうなことも言つて居りました。さうして其後も結婚のことについて兄さん宛に手紙が來たりすると、それを兄さんから父にまはしてよこすことがありました。そんなのを見乍ら、一層父はほめて感心してゐたやうです。官吏全盛の世の中に、出入りするものと言へばこれ又官吏ばかりなうちに、とにかく餘りぱつとしない中學教師風情に娘をやらうといふからには、父にも餘程見るところがあつたのでありませう。

　それから父の方でも東京に適當な口をと心掛けてゐたけれども、中々ありません。さうかうしてゐるうちに菅虎雄さんあたりの口入れで、熊本の高等學校へ行くことにきまりました。行けば少くも一年はゐなければならない。さういつた知らない遠い土地に來るのが氣が進まないやうだつたら、やむを得ないから破談にしてくれないかといふ手紙が來ましたが、そんなことも出來ることでなし、こゝ一年二年歸京の見込みがないとすれば、何も東京でなければならぬといふのではなし、又一生熊本で暮らすわけでもあるまいから、口はゆつくり結婚してからでもさがすとして、ともかく熊本へやらうといふことになりました。

　四月熊本に轉任しました。

四　結婚

　父の友人で其頃内閣の恩給局長をしてゐられた井上廉といふ風流人がありまして、其方をともかく名義上の媒酌人に賴むことになりました。ところが此の方が故實に通じてゐられて、古式に則つて目錄儀式などをずつと書いて、それに又岩田帶は足利將軍がどうしたとかゝうしたとか、出典其他の故事來歷が認めてあるのを屆けて下すつたのでそれを夏目へ其儘送つてやると、驚いたの何のつて早速返事が參りました。女中と二人暮らしの世帶へ、かういふ大がゝりな儀式を持ち込んで來られちやどうにもなりやうがない。どうか勘辨して一番手數のかゝらない略式に願ひたいと言つて參りました。元々目錄とほりやる氣はないのですから、父は笑つて居りました。

　それから又父があんまりきたない家では、若い女がいやがるかも知れないなどゝ言つてやつたので、光琳寺町へ八圓の家賃の家を借りて移りまして言つて來ることには、

「亭主の私でさへそれで辛棒するのだから、細君でもそれで我慢して

くれなければ困る。」
とあるので、母が心配して、
「あんまり我儘を言つて餓子が怒られるやうでは困る。」
と申しますと、父はすましたもので、
「ナーニ、これ位に話をしておけばいゝ。」
と心得たものです。

愈々熊本へたつといふ前に、喜久井町の夏目の實家に挨拶に參りました。馬場下の今の交番の向ひの角地面で、丁度今質屋のあるあたりに、中々廣い家がありました。夏目の家といふのは昔からそこに住んでゐた名主で、喜久井町は菊井町で、夏目の家紋が井桁の中の菊菱であるところから出たものだといふ事です。その頃は大分左前になつてゐた時でせうが、それでも中々立派な庭があつて、家はその庭から抑しつけられさうな感じがして、大分低いところに建つてありました。聞けば火事に見舞はれた時に、燒けた土を三尺取りのけてそこへ建てたからだといふ事です。

お父さんや、兄さん夫婦や、高田の姉さん夫婦に、其時正式に引き合はされました。

六月の四日であつたと思ひます。母や妹たちや夏目の方の人々に送られて、父と一緒に一人の年取つた女中を連れて東京をたちました。途中福岡に叔父が居りまして、それが門司迄迎へに來てくれました。ところが聯絡船の中へ私どもが忘れものをしてゐたのに氣がついて、叔父が艀にのつて取りに行つてくれたのです。丁度潮の流れてゐる日で、小舟は轉覆しさうに揺れます。それをまあどうやら下ノ關の岸迄乗りつけて、忘れ物を取つて來てくれましたが、其時の叔父の言ひ草が振るつてゐたので、今でも覺えてゐます。
「艀が揺れて今にも引つくりかへりさうだつたが、私は生命保險にかかつてるんで安心してゐた。」

こんな事を言つたんで、父が自分で死ねば保險は誰のものになるんだつて、みんなで大笑ひ致しました。

かうして八日の晩に無事に熊本に着きました。ところが停車場のフラツトフオムには宿屋のとぎやの番頭だけが迎へに來てゐるばかりで、夏目の姿は改札口にも見えません。來てゐる筈に違ひないんだがと、あちこち見廻はして居りますと、二等待合室から新聞を片手にもつてのこ〳〵出て來ます。見ればそれでもフロックを着込んでゐました。私たちの姿を見ると帽子を取つて挨拶をしながら、
「今汽車がついたやうですから。」
と頗る超然たるものです。それから又申しますには、
「これから家へいらつしやいませんか。」
と、こんな風な調子です。
「いやあ、いろ〳〵仕事もあるし、今日は又疲れてもゐるから、いづれ改めて……」
父はそんな風に言つて、一ト先づとぎやに落ちつきました。翌る日は旅疲れを休め旁々買ひ物に出ました。東京からこの遠路を運んでくるのは大變なので、初めから手廻りのものや何かは一切熊本に來て買

ひ調へることにして來たのです。其上結婚は寒い時の積りで、晴着なども一切冬物で整へてあつたのが、急に夏場にきまつたので、持つて來たものは夏の振袖一枚位で、これといつた夏仕度もない始末、いくら簡單で質素にといつても、それでも女一人を片付けるのですから、相當買ひ物にも手がかゝります。それでもどうやら間に合せものを整へて、翌る十日となりました。この結婚が誠に裏長屋式の珍な結婚なのです。

この光琳寺町の家といふのは、何でも藩の家老か誰れかのお妾さんの居た家とかで、一寸風變りな家でした。玄關のとつつきが十疊、次が六疊、茶の間が長四疊、湯殿、板藏があつて、それから離れが六疊と二疊と、かういふ間取りです。式は離れの六疊で行はれました。

新郎はフロックコート、私は東京からもつて行つた一張羅の夏の振袖、これだけはまあどうやらいゝのですが、父はと見ればこれは普段の脊廣服、雄蝶も雌蝶もあつたものではなく、一切合財仲人やらお酌やらを一人でするのが年とつた女中、此の外に婆やと車夫とが臺所元で働いたり客になりつたりといふわけですから、どうも嫁に行くといふ風な御大層な氣持にもならなければ、晴れの結婚式だといふ情も移りません。

さうかうしてゐるうちに女中が新郎新婦の間に盃を廻はします。三三九度の盃なのですが、どうしたものか三ッ組の盃の上か下かが一つ足りません。しかし新郎は一向平氣なもので眞面目くさつて盃を受けてゐます。

盃事が終つても、不粹な父には謠一つうなることも出來ず、甚だ飽氣ない結びの式の幕は閉ぢたわけですが、それを待ち兼ねて、父は起ち上つて、

「おゝ暑い、おゝ暑くて堪らない。」

と、自分でありたけの障子を外づしました。それから上着をぬいでもまだ暑いとあつて、今度は夏目の飛白の浴衣を借りて着て、とうとうどつかりくつろいで了ひました。新郎も冬のフロックコオトを着て坐はつてゐるのですから、これ又一倍暑いに違ひありません。父が丸裸になつて着かへをするので、此方も天下晴れての無禮講とあつて、私服に着かへて、それでも新調と見える絽の羽織を引つかけて出てまゐりました。とにかく其時の熊本の暑さには全く父も私も驚いて了ひました。

酒といつては男二人とも不調法なので、何かと四方山の雜談をして、父はいゝ加減に宿に引き取りました。後で仕出し屋の勘定書きの來たのを見ますと、車夫や女中に祝儀を振舞つて總締しめて七圓五十錢。これが私どもの結婚式の費用でありました。

ずつと後の話ですが、或る時私たち夫婦の媒酌で知人の妹を片付けたことがあります。其時私は自分たちの結婚の時を思ひ出していろいろ話をして居りますと、傍に聞いて居た夏目が、

「その三ッ組の盃が二つしかなかつたつて話は一體誰の話だい。」

と申します。あんまり呆けてゐるので少しきつく、

「私たちの話ですよ。」

と答へますと、

「さうかい、怪しからん話だと思つて聞いてゐたら、俺達のことかい、道理で喧嘩ばかりしてゐて、とかく夫婦仲が圓滿に行かないわけがわかつた。」

つて面白がつてゐました。

結婚のお祝ひの手紙が狩野亨吉、松本文三郎、米山天然居士、山川信次郎、たしかこの四人さんの連名で參りました。見ると大將堂々たる御手紙で、祝辭を滔々と述べてあつて、お祝の品別紙目錄どほりとあつて、其目錄が鰹昆布から始まつて、目出度い品の限りを盡くして居ります。こんなに澤山の品を送つて下すつたのか、お友達といふものはえらく有難いものだと讀んで行きますと、一番終ひに小さい字で、お祝の品々は遠路のところ後より送り申さず候と、とう〳〵新婚早々一本かつがれて了ゐました。

子規さんが短册を書いて送つて下さいました。熊本から東京へ引き移る時、大方そんなものはみんな破いて捨てたものでせう、今思ふと惜しいと思ひますが、どうも見當りません。たしかこんな句であつたと覺えて居ります。

蓁々たる桃の若葉や君娶る

赤と白との團扇參らせんとぞ思ふ

後の方の句は少し間違つてるかも知れません。

新婚早々一つの宣告を下されました。

「俺は學者で勉強しなければならないのだから、お前なんかにかまつては居られない。それは承知してゐて貰ひたい。」

といふのです。私の父も役人ではありましたけれども、相當に本は讀む方でしたから、學者の勉強するの位にはびくともしやしませんでしたが、何しろ里に居た時とは樣子のがらりと違ふのには驚いて了つてゐました。先づ官舍に居りますれば、出入りの人も自然多くて、何となく生活も華かでしたが、急に田舍の小人數のところへ來たのだから、勝手の違ふことつたらありません。それに里に居た時にいくらか家事のこともやるにはやつたのですが、さて主婦となつて見ると、どこからどう手をつけていゝかまるで見當がつきません。殊に里では父が氣のつく方で、買ひ物なんぞは大方父の手でされて、母は始終家に引き籠もつてゐて、三度三度の食事の指圖や子供のこと位しかしない方なので、さて買ひ物はどうしていゝものやら、違つた土地に來てはなほ更のことわかりません。と言つて家のことは一向お構ひなしの主人に援けを求めて、彼れ此れ言はれるのも癪に障るので、ともかく婆やを連れては一生懸命で見樣見眞似で買ひ物をして歩るきました。しかし何を見ても何を見ても不案内のことですから、たゞもうぼんやりとして、全く馬鹿見たいになつて居りました。隨分へまばかりをやつたことでありませう。

二三日とまつて父が歸へるといふので、東京への土産物を買つて來いと言はれた時なぞ全くどうしていゝものやら、家を出はしたものゝ途方にくれたものでした。

ところがこゝにもう一つ困つた事がありました。といふのは私は昔から朝寢坊で、夜はいくら遲くてもいゝのですが、朝早く起こされる

と、どうも頭が痛くて一日中ぼおつとしてゐるといふ困つた質でした。新婚早々ではあるし、夫は早く起きてきまつた時刻に學校へ行くのですから、何とか努力して早起きをしやうとつとめるのですが、何しろ小い時からの習慣か體質かで、それが並外れてつらいのです。それでも老よりの女中がゐたうちは、目ざとく起きてくれるので間違ゐもありませんでしたが、さてそれをかえしてからといふものは、時時朝の御飯もたべさせないで學校へ出したやうな例も少くありませんでした。

そこでこれではならないといふので、枕元の柱に八角時計をもつて來てねてゐますと、チンと半時間打つ度に驚いて起き上がつたりする滑稽を演じなどして、結局睡眠不足と氣疲れとで、ほんとにしばらくの間ぼんやりしてゐました。自然やることなすことにへまが多いのでせう。

「お前はオタンチンノパレオラガスだ。」

そんな風に揶揄ふやうに申します。オタンチンノパレオラガス。どうもむつかしい英語だ。どうせお前はとんまだよといつた意味なんだらうとは察しましたが、はつきりしたわけがわからない。向ふでは面白がつて、何かといふとしきりにオタンチンノパレオラガスを浴せかけます。いづれむつかしい横文字に違ひないと思つて、訪ねておいでになるお友達でいくらか心安くなつた方を捉まへては尋ねます。しかし誰もあつて笑つてばかり居てわけを教へて下さる方がありませんでした。オタンチンノパレオラガスといふ言葉は、そんなことを言はれなくなつた後々までも、妙に思ひ出の深い言葉となつて印象づけられて居りました。

其頃から一緒に連れ立つて出ると、生徒に見られていやだと申しまして、一緒に散歩や買ひ物に出たことはまづありませんでした。かうして私たちの生活が始まりました。夏目が三十才、私が二十才でありました。

遠島と渡海

姉崎正治

『うらみの海、おほ島波のいかなれば、流るる人のまたもかへらぬ。』よそから見ても、遠流の人のあはれは此通りであるが、離れ島に流され、徒に故鄕を水を彼方にしのぶ本人の心持は、昔から俊寛を標本にして、萬人の同情を惹くに足る。日本だけでも古からの流人を列擧して、その後を弔へば、一篇の史詩又抒情詩をなし得やう。然し又「棲めば都」で、遠流の島に落ちついて家庭生活を營むだ人もあれば、一旦の赦免で故鄕に歸つても、故舊に顧られず、生計にも窮し、却て遠島の昔を慕ひ、志願配流の人として島に復歸して一生を過ごしたものもある。今でも樺太には、ロシヤ時代の流人或はその子孫が、平和に日本人の間に生活してゐる者もあり、八丈島に流された宇喜多の家族は、明治以後、東京に歸つて却て困却したといふ話しもある。遠流、それは確に人生の悲劇であるが、その全部が悲劇のみでなく、悲喜劇も喜劇もその間に介在したのである。

遠島といふのは、流罪の中でも遠い離島に流されるもの、罪の最も重いもの、多くは死一等を減ずるといふ意味になつてゐる。奈良朝から鎌倉に至る間は、遠流といふ名で行はれ、德川時代には遠島といふ名が通稱になつた。奈良朝時代には遠流は多く伊豆の大島で、流人には役小角、即ち行者様が最も顯れ、鹽燒王の如き皇族もあつた。下つて鎭西八郎爲朝の場合は、最も有名で、弓張月の空想談をも伴つた。その後鎌倉時代には、隱岐や佐渡が多く、「新島守」の上皇、法華經の爲めの流人日蓮、日野資朝とその子阿新丸の話し等は、能く世に知られてゐる。德川時代には、初は伊豆大島、それから三宅島や八丈島が多くなり、「八丈島遠島御用船」の組が三つもあつた位である。德川の中紀、寶曆頃の記錄(伊豆七島記)には、諸島の人口と流人の數とが出てゐる。下段に寛政の南方海島志にある流人の數を掲げて參照とする。

			流人	寛政流人
大島	男	八九二	七	
	女	九二七		
新島	男	七五二	四九(内女一)	
	女	九三八		
利島	男	一四二	二	四
	女	二三一		
神津島	男	二五九		
	女	一九一		
三宅島	男	四一九	六八(内女三)	一五〇
	女	五〇九		

御藏島	男五四 女六〇	五	五
八丈島	約四、二〇〇	約一三〇	一九〇（外に宇喜多一族一〇五）
青ケ島	男一三四 女一二七	三	
合計	約一〇、〇〇〇	約二六〇	約三五〇

明治二年の諸島の流人を釋放した時、八丈島には百六十人あつたといふ。此の如く德川時代を通じて、伊豆諸島には始終二三百人の遠島者が居たのであるから、前後數千人に上つたであらう。八丈島だけでも、慶長十一年來の遠島者記錄が三十五冊殘つてゐて、罪名は分からぬが、人名身分と數とを知るに足る。

遠島者の中には、今日から見れば比較的微罪のものもあつたのであるが、當時は重罪者と見ての處分、又は政治や信仰上の罪人であつた。その筆頭は、關ケ原役敗軍の將たる宇喜多秀家とその子及臣下十三人の八丈島遠島である。三州の大守、備前中納言、豐臣家五大老の一人たる秀家が南海の離島に流人となつて有爲轉變の身のはては、誠にあはれの極みである。彼は關原の敗戰後、暫く身を美濃邊に隱して、後漸く薩摩に身を寄せたが、德川の權威が固まると共に、西南の強たる島津氏も永くお咎め者をかくまふ譯にも行かず、身を德川の處分に任せ、戰後三年即ち慶長八年八丈島に流され、在島五十餘年、八十三歲の高齡を保つて島に死んだ。子孫もいつまでも島に在つて流人として扱はれ、明治の初に釋放の恩命に接した。今ある墓碑は天保年間、秀家の二百年忌に子孫一族が立てたものであるが、「備前中納言」の字が刻してあるを見れば、幕府も年のたつと共に寛大の扱をしたものと見える。且つ秀家の夫人は前田利家の女で秀吉の養女として嫁したので、前田家は遠島の秀家一家を保護して給養を送り、それが明治年間までもつゞいた。それでも子孫は全く島の住民となり、德川時代に島に行つた人が、「名家の末も、かうなつては田夫野人に異なる事はない」と云つてゐる。附記する一事、宇喜多の臣下にはキリシタンが可なりあり、秀家も之に厚意を表してゐたらしいが、自らは信者ではなかつた。但しその夫人は夫と別れて後、京都で北政所の許に仕してゐる間に信者になつた。

次には駿府の奥女中おたあの流罪で、此はキリシタン信仰の爲。おたあは家康奥方の御物仕であつたといふが、元は朝鮮貴族の女、小西攝津守がつれて來た捕虜の一女で、キリシタンになりジユリヤといふ名を受けた。關ケ原後、どうしてか駿府の奥に事へてゐたが、慶長十七年原主水一件から、家康が先づ家中のキリシタンを成敗し初めたので、壓迫はジユリヤにも及び、その同信同役たるルシヤとクララといふ二人の婦人と共に、種々改教を迫られたが應じない。終に追放と決し、ジユリヤは乘物を謝絕してキリシトの最後をしのぶ徒步跣足であるきだしたが、足から出血して步行にたへず、又乘物で伊豆の網代まで送られた。網代からパデレパセすに出したといふ手紙（陽曆三月廿六日陰曆二月廿四日附）もある。それから大島に流されたが、暫くして新島に移され、それから又神津島に移され、四十年後そこで死んだ。島で又一人の婦人を感化して、その人をマダレナと名けたが、此は又八丈島に移され、そこで耳と鼻とをそがれて終に斬られたといふ。

大島では、ジュリヤの船出した灘をおたい灘と名け、そこに小祠を作りオタイネー大明神として祭つてゐる。今は既に病氣を祈る神様となつてゐるが、その始めはやはり幾分はその信仰の感化が人を感動した結果、里人が祀り始めたのではなからうか。

右バセオに手紙を出したといふのが本當ならば、當時バセオは天川にゐたので、兎に角、他の同信徒が長崎へ送りそれから天川へ届いたものと見える。

キリシタンの外に、信教上の壓迫を受けたのは、日蓮宗中の一異派たる不受不施派であつた。迫害の始は、秀吉の大佛供養に萬僧を招待したが、不受不施を信條とする日蓮宗の一部分は、不信者の布施を受けないといふ主義を貫徹して、その招待を謝絶した。上を恐れぬ不屆者として秀吉の迫害を招いたが、徳川時代になつては、その政教政策の上から一層の壓迫を加へ、殆どキリシタン邪宗門と同一に取扱はれた。但し迫害は多く僧侶の上に加はり、且つ類似の異派も共に處分を受けた。而してその中には伊豆諸島へ遠島せられた者が少なからずある。

此種の遠島で、比較的初期には、常樂新派の日儀といふ僧が、萬治三年（1660）三宅島へ、他の二人は大島へ、その他は諸大名にお預けになつた。元祿四年（1691）には不受不施の變形だといはれる悲田派の僧二十三人を八丈島へ、八人を三宅島へ、五人を新島へ、七人を神津島へ、合計六十九人を一時に遠島に處した。それから七年、元祿十一年には悲田派の八人が遠島。日蓮宗の遠島は徳川中期以後にはない様である。此等日蓮宗の遠島者が島民を感化したこともあらうと思へるが、事蹟は總て埋沒し、今七島にある多くの日蓮宗寺院は、その以前の布教に始まつたものであると傳へる。但し傳說はそのまゝ事實でないかも知れぬ。

幕末には民間の宗教が段々と頭をあげ、幕府公認の宗派以外の布教が行はれ、幕府は續々之を壓迫した。その一人は禊教の開祖井上正鐵で、神道吉田家の免許を受けて居たにもかゝはらず、私の布教、治安を亂るものとして天保十四年（1843）之を三宅島へ遠島にした。正鐵は在島六年、嘉永二年（1849）六十一才で島に歿したが、その間種々利用厚生の途を拓き島民を感化し、その墓は今も信徒が參詣の目標になつてゐるといふ。

此等は罪名の堂々たるもの、公事に關する流罪であるが、その他盗賊、拐帶などの流罪も可なりあつたので、島に於ける此等罪人の生活は隨分亂暴なものであつたといふ。然し又その他、今日から見れば殆ど滑稽ともいふべき遠島者もあつたので、貞享元年（1684）江戸商家の番頭等を檢査した時、なまけものといふ廉で、一家七人が八丈島と三宅島とに流された。なまけといふ中には主家の金を消費したものもあつたと想像される。

そこで此以上の微罪でやられた者のレコードは、湯加減を誤つたといふ廉での遠島であつた。三代將軍は幼時から若君樣として育つた性急者であつたが、寛永十一年（1634）狩から歸城して湯に入つた時、背からあびせた湯が熱すぎた。但しやけどをする程でもなかつたらしいが、御湯殿を預つてゐた奧坊主休庵と子二人は大眼玉を食ひ、切腹せよとの一言にふるひ上つてしまつた。他の者も大に同情して何とかと

りなさうと相談して見たが、誰も進んでその任に當る者がない、うつかり執り成しをすれば共々切腹を命ぜられる虞がある。後に老中になつた阿部豐後守忠秋は、此をきいて、その夜はそのまゝにさせ、翌朝御機嫌を伺ふ時に、昨夜御坊主の不始終を御詫びし、さて「御處分については伺ひ漏らしましたが、如何致しませう」と平靜に出た。將軍樣も湯の熱さと共に癇癪もさめてゐたと見え、「八丈々々」といつた。此の鶴の二聲で休庵父子三人は八丈島に流された。此も上樣の寛仁大度にあらせらる爲だと、皆の者共が感涙にむせむだといふ。

次は五代將軍、人間よりも畜類を愛護した所謂「犬公方」樣。御臺所の井戸へ猫が一疋落ち込んで死んだ。將軍家の飲料水ともなるべき井戸が猫で汚されるのは勿論御殿の大事ではあらうが、その廉よりも生類憐愍の御趣意に背くといふ罪で御臺所賄大野五郎太夫は八丈島へ流された。事は先のなまけ者遠島の後三年貞享四年（1687）であつた。その年犬一疋を殺したとて八丈島に流された者があるが、それはまた仕合せで、同罪で切腹仰付けられたものがあつた。

その外、いき筋で島流しになつたもの、奧女中繪島との關係の廉に、正德四年（1714）三宅島へ流された役者生島新五郎は、よく〳〵島に因緣の深い姓名判斷的の運命をもつてゐたものと見える。彼は享保十八年（1733）謫死したが、男盛りの二十年を流人として送つたのである。此に先つ約百年慶長十四年（1609）京都の女官五人が淫蕩といふ罪で八丈島に流された。今日で云はゞ不良少女の一團である。それでも各二人の下婢をつけられたといふから、可なり身分が高かつたのであらう。流罪になる時毛髮を斷られたといふが、モダンガールならば之を詠むだかも知れない。

次に名作でやれた者には、越後騷動の內情を書いて、天和元年（1681）八丈島に流された僧一音。大名家庭の有樣を如何に書いたので罪の越後から、半熱帶の島に流されたのである。繪師英一蝶の三宅島遠島は、その罪名について異說が多いが、朝妻舟といふ唄の爲だといふが一說である。元祿十一年（1698）流され、十一年間在島の後、將軍の御代替りと共に赦されて江戸に歸り、それから一蝶と名のつたといふ。

遠島に處せられる者は、傳馬町の牢屋から靈岸島へ送られ、萬年橋邊から幕府の御用船に乘せられ、舟中では舟牢に閉ぢ込められる。鐵砲洲で三日間停船の間が故郷と訣別する機會で、面會や給與品の携帶については、役人への袖の下が中々きゝ目があつたといふ。それから浦賀の役所で改めを受け、舟路幾日か、それ〳〵の島に着き、島の役人に渡される。それから在島中の生活は、牢屋ではなく、云はゞ自活の生活であつたが、それでも牢屋と同じく、先輩の顏役がはゞをきかせて新米を虐待したといふ。多少餘裕のある者は、女性過多の島の女を水汲女と稱して同棲し、家庭を作り子孫を殘した者もある。それでも一旦遠島に處せられた者は、先づ赦免還歸の望はなく、一生を島に送つたので、その點は古の遠流と同じであつた。從つて懷郷思家の情は切なるものがあつたに違ひない。

遠島になつた者が暮色蒼然の海に面し、水の彼方に故郷を思ふ心は、俊寛の悲劇を最として、人間の最も憐れな物思ひであらう。他郷

にあつては水を隔てゝ故郷を思ふ心は又反對に働き、何れの國人でも海岸に立つて、渺茫たる水の彼方に思ひを馳せて、それに空想を描き理想を寄せないものはなからう。ギリシヤ人のアトランチス、支那人の蓬萊仙洲、日本人の常世國、それに事實の根據があつたやなしやの問題は別にして、皆水の彼方の理想郷であつた。理想を描き出す材料は現實に基くにしても、どれだけか空想と希望と憧れとを加へた理想郷であつた。又海でなくとも水を隔てるといふ事は、いつでも多少とも現實を理想化する力を有し、水を渡つてきこえる琵琶の音、水を隔てた吹笛漁歌、何れも此の世らしからぬ感を與へる。盆燈籠を海に流して冥途送りする心も、此の憧れを延ばしたものに外ならぬ。されば他生界の樂土は川を隔てた彼岸にあり、ダンテが淨めの山を出てベヤトリセに會ふ時には、先づレテの流を隔てゝその姿を見る。

日本の佛教徒が、海の彼岸に高僧輩出の唐土を思ひ、釋迦出世の印度をしのぶ時、唐土天竺は半ばは現實の相で半ばは理想の國であつた。入唐渡天といふ事は、現に船の通路の知れてゐる事、地上の旅路に外ならぬが、多くの佛徒にとつては、支那の天臺山は法華の靈山で、印度の靈鷲山はそれ以上の現世淨土、淸涼の石橋は文殊菩薩の現はれる靈場、南天の鐵塔（恐らく今のアマラーバチー）は全く神話的の靈塔であつた。平重盛が身後の冥福を祈る爲に唐土の育王山へ砂金を贈つたのは、此世にして而かも此世以上の極樂淨土をあこがれた心持から出た事である。されば平安朝二百餘年鎖國の時代には、入唐した者は誠に僅少であつたが、入唐渡天を一種理想界の夢想としてあこがれてゐた者は多く、本朝の靈場をその代用としてその參拜でせめてもの渴を癒してゐた。謠曲「石橋」で寂昭法師が石橋の飛梯の際に十の菩薩の文殊の示現に接したといふ話（後代の獅子舞は此を擬倣したもの）は、夢想を彼土に馳せた一例。同じく謠曲の「春日龍神」にある、栂尾の明惠が春日明神の力で、三笠の山に五天竺を寫し、佛の誕生や成道、涅槃の說法などを見せて貰ひ、それで入唐渡天を思ひ止まつたといふ話は、渡海の理想を空想の中に充たした一例。

儒教者も、聖人出現の國として支那を尊びはしたが、その情は佛教ほどに熱烈でない。それでも菅原道眞が唐裝して海を渡つたといふ渡唐天神の畫は、渡海憧憬の心持を現はしたもので、明治初年の青年が洋服を着て洋行する夢を見た感じを、もつと藝術的にしたものといひ得やう。而して面白い事には、その道眞は、自ら遣唐使に擬せられた時、遣唐廢止の建言をして、延喜以後二百五十年鎖國の源を開いた人である。つまり鎖國の中にも（特に鎖國が破れて、大陸との交通が復興する機運の時に）、渡海のあこがれが消滅しなかつたしるしである。鎌倉時代以後は、元寇の恐怖で、唐土を理想的に見る夢は破れ、それからは八幡船の亂暴時代で入唐といふ事に理想的の意味はなくなつた。但し足利時代には、禪宗の影響で稍復活してゐるが、通商の現實の爲に理想のあこがれは段々に消失した。

天正慶長の間に於けるキリシタン宗徒のロマに對する憧れもやはり理想のあこがれであつた。千里の海を渡つて來たパテル達はその理想の國から來た人であり、日本人であちらへ行つて歸つて來た者の物語は、天國から歸つた人の話しの様に感ぜられた。されば慶長以後迫害が益す加はつて、いのちの瀬戸ぎはに立つ時、キリシタン宗徒がロマ

を慕ひ、そのパッパ様をたよりにした思ひは、天國や天上の神靈に對する思慕に密着したものであつた。慶長十九年(1614)高山右近始め多くのキリシタンが追放に處せられて、ルソンへ渡つた時の心持は、一面流罪の人、追放の咎であるが、又同時に一種の理想郷へ旅立する思ひがあつたであらう。ロマほどに天國とは思はないにしても、キリシタン堂塔の聳える處、朝夕祈の鐘をきゝ、御ミサの公に行はれる都たるマニラは、少くとも渡海の間は、憧れの國、地上の天國に向ふ心を以て待ち設けられたであらう。そのマニラ到着の時、高僧高官に迎へられ、同信人民の歡迎を受けた時、彼等は流竄の人でなく、虎口を遁れて天國に入つた心持をしたであらう。それにしても流離幾年海の彼岸に故郷を思ふ時、彼等はやはり遠流の人としての悲みをも味つたに違ひない。内藤飛騨の子米女は、後に歸國して能登に住むだといふが、事實だとすれば、理想の幻滅、故國の戀しさが然らしめたのであらう。高山右近にとつては、高槻城の面影、攝津の山河、さては湯島から見た溫泉の峻峯、加賀能登の海の面、何れも復再び海を隔てての夢想の國となつたに違ひない。或人がルソンに行つて右近に會ひ、茶會を催した時、彼がキリシタンとなつたのを悔いると話したと傳へるのは、信仰そのものを悔いたのでなく、故國に對する思慕の想を述べたのを誤り傳へたものと思はれる。

キリシタン信徒が海の彼方ロマに對する思慕の最も適切に發露したのは、元和五年(1619)法王廳の祝典に伴ふ罪障赦免状の着いた時であらう。その時は慶長十九年以來禁教令が益す峻嚴に行はれて、西は長崎や五島のはてから、北は陸奧出羽まで、教師は微行潛匿、信徒は命朝夕をはかれぬ窮迫の中に生活してゐた時、「河の水も森の木も迫害の風に襲はれ、山の岩までも抑壓の威嚇に慄へる」と記された時、それまで關係的の接觸を絶たれてゐたロマから法王の祝書が來着し、その寫し(恐らく)が忍びの中に全國の信徒に配付せられた。信徒が耳にパッパさまの聲をきゝ、目にその筆蹟を拜する心地して、忍びかくれの中に集まつて赦免状を拜戴した有樣は想像するに餘りある。そこで彼等は地方毎にその感謝状を草し(ラテン文と日本文とで)、主立つた信徒が署名して之をロマへ送つた、それはその翌年と翌々年の事であるが、長崎、有馬、京阪、中國、奧州の五通が今ロマに殘つてゐる。彼等は各々困難を冒して之を長崎に送り、そこから教師ピエイラに托して天川(マカオ)を經て、終にロマへ屆いたのである。此の書状を差出す時、信徒の心持としては、書状と共に渡海してロマへ行きたかつたであらう。此の場合、あちらから來た書状も數千里の海を渡つてこちらへ着き、こちらのも亦同じく波濤を凌いでエケレシヤ(教會)の本元、法皇の御膝元に到着してほしいといふ渡海の聯想が強く深かつたに違ひない。波濤千里を隔てても相通ずるといふ感じの外に、世の救主たるキリシトさまの御名代が下し賜はるベンサン(祝福)や罪障赦免の惠みは、迫害窮縮の中にも海東孤島の信徒の上に加はるといふ信仰は、彼等の心にどれだけの慰藉を與へたか。五通とも述べる情は皆似通つてゐるが、こゝには長崎から出した書状の一節を代表として、この心持を汲取る料にする。

七ケ年以來、我等片時も安堵の思ひに住する事なく、不斷常住災難に逢ひ、ヘルセキサン(迫害)の逆浪に漂ひ惑る折節、…

……渡海の便に尊書所到致し、我等、偏に心の奥底を以て拝拝三拝仕たるなり。是れ、その地ラウマより到來すといへども、偏に天より降り下りたる心地致し、……其故は、世界のはて又遠き此東の島に居住仕り、かほどの悪事災難の浪に沈溺し、悪守護等のヘルセキサンに責められ奉る中に、我等がハストルの御皆づれに預り奉り、それのみならず、世界に於て我等がテウス御主キリシトの御名代、諸のハストウレスの司に在ます御身の尊顔を、直に拝し奉る事何事か加之哉。……

又此我等が船は、難風を凌ぎ、かほどの御大將の御導を以て、終には天の湊へつゝがなく至り奉らんと、頼もしく存じ奉る也。

交通の開發、航海の便宜、現代の世の中には、遠島も渡海も、昔の様な意味はなくなり、みじめさもない代りに趣もなくなつた。世界歴史で遠島の大立物はナポレオンを最後とし、八丈島にも電氣燈がつく様になつた。入唐渡天は船賃とカバン一つの問題になり、今の日本天主教徒でも、その祖先の味つた様なロマ思慕の情は味へなくなつた。「罪なうして配所の月を眺める」のは、單純な避暑旅行でなし得られる今日の我々は、昔の遠島渡海の人と別種の世界に住むでゐるわけである。それにしても有形の遠島のかはりに、無形精神上の遠島、孤獨の悲みは今も存する如く、否恐らく昔よりも多くなつてゐる如く、形而上の大洋、水の彼方に理想郷を望む想ひは、今も尚ほ人の心を離れない。現實の世界に彼岸に思を馳せる渡海がそれほどの憧れとならないやうになつた今後の人類は、恐らく今迄よりも痛切に、何物か理想憧憬の心を深めるであらう。

わが戀は百島めぐる濱千鳥ゆくへもしらぬかたになくなり

鎌倉右大臣の此歌は、單なる戀歌ではなかつた。人間の理想は必しも行衞をつきとめずとも、百島めぐり、千鳥の翼に任せて飛びあるき、鳴き直る。此の思ひは人間の生存する限り盡きることはなからう。

ブルジョア政黨に對抗して

總選擧戰に遊說して

麻生久

驚くべき戰線の擴大

私共の様に、長く無產階級運動に從事してゐる者が、最近痛切に感ずる事は、我國の無產階級運動が一度其純經濟的運動から方向を轉じて政治的分野に足を踏み入れて以來、其運動の戰線が驚く程擴大せられて、眞に大衆的性質を帶び來つたと云ふ事である。

而も普通選擧が實現せられて、新たに獲得した大衆の一票が、今當面しつゝある府縣會議員の總選擧に對して、又來るべき衆議院の總選擧に對して、直ちに國政の上に重大なる影響を有するに至つた今日に於ては、從來無產階級運動の圏外に殘されたあらゆる層の無產大衆は、一齊に起ち上つて、此運動に加はらんとしつゝあるのである。

從來の農民組合運動、勞働組合運動、夫れ等の經濟的運動に取り殘された、勞働階級農民階級も、新たに獲得した普選の一票を手にして無產政黨に馳せ參じつゝある。從來、經濟的に政治的に、鬱勃たる不滿を腹に藏しながらも、其方法を有しなかつた下級俸給生活者の大衆も今や新たに一票を獲得して、政治の上に進出せんとしつゝある。重稅に惱みながら、大資本家に壓倒せられながら、沒落の運命を脊に負つて而もなすべき術を知らなかつた小賣商人の階級も、新たに手にした一票を携げて、自己の行き詰れる境遇を政治の上に打開せんとして起ちつゝある。

既成政黨の腐敗墮落は既に萬人の熟知する處である。而も、彼等が最近なし來つた露骨なる資本家的代辯政策は、彼等の所謂民衆政治の假面を曝露して彼等が如何に民衆の利益を蹂躙して、資本閥に忠實なる資本家的政黨であるかを、民衆に知らしむるに至つた。

茲に於て、既成政黨が、僅かに自己の地位を支へつゝある力は、金力と權力と、習慣的惰性と、而して、無產政黨が生れて未だ日を有しないと云ふ點にあるのみである。

一度、無產政黨の侵入して行く處、そこには必ず、既成の政治的分

野に一大波瀾を惹起して無産政黨の旗は高く中空に靆へるのである。
入場料を支拂ひながら、我々の演說會に集まる大衆の雪崩を見よ！至る處滿員の盛況である。その中には、勞働者がゐる。百姓がゐる。月給取がゐる。小賣商人がゐる、そして其中には又不安な顏付をして既成政黨の地方有志諸君が、階上の片隅から演壇を見詰めさへしてゐる。

演說會場の光景

滿場の聽衆は、好奇の眼を光らせながら演壇を注視してゐる。辯者は概ね白面の青年であつて、粗服を身にまとへる無産者の見本そのものである。たゞ彼の舌端からは火華が散る。

彼の口から既成政黨の罪惡が曝露せらるゝ度每に聽衆は熱狂して拍手する。憲政會の罪惡が曝露さるゝ時、左階上の片隅から拍手が湧く、そこには政友會員が控へてゐるのである。政友會の罪惡が俎上にのぼさるゝ度每に右階上の片隅から拍手が湧いて左階上が沈默する。そこには憲政會員が頑張つてゐるのである。

滿場が愈々熱狂して、既成政黨の打破、無産民衆政治の確立が絕叫さるゝに至つては、左右兩二階の面々も滿場の拍手に和して喝采する。蓋し、別に有産階級にも非ざる彼等は、演說を聞いてゐる間に、何時か本心に立ち歸つて、自己が憲政會員、政友會員たる事を忘れ果つるのである。

見よ、白面の一青年の口から、次の如き演說がなさるゝ時、彼等の顏の苦笑でいつぱいに埋まるを見るであらう。

「言を寄す、當地方の政友會員諸君、憲政會員諸君、諸君は、兩派の黨員として多年奮鬪したる結果は何物を贏ち得たるか。卿等の僅かばかりの財産は今日も尚ほ安全なりや。卿等の經濟的境遇は改善されたりや。卿等が田舍政治家として、陣笠として政友會員となり憲政會員となつて幹部のために犬馬の勞を捧げつゝある時、彼の、、、、、の如き大資本閥の手中に卿等の僅かばかりの財産が、晝夜の別なく吸收されつゝあるを知らざるか。古來田舍の既成政黨員にして、財産を傾けざるもの幾人ありや。、、や、、に自己の僅かの財産を寄附しつゝある地方の既成政黨員諸君！　諸君は何と云ふ博愛漢なるよ」

更に又壇上の一青年の口から次の如き言葉が迸る時、取締りの警官の面は、これ又微苦笑に埋められるであらう。

「脊廣の服を身にまとふと、角帶を締むると、將又官服に身をかたむると、そんな事は問ふところではない。月給百圓以下の俸給生活者の家庭を覗き見る。その臺所は如何なる狀態を呈しつゝあるか。我々の演說會の度每にご苦勞を願ふ警察の、當地の署長さんの月給は果して幾何なりや、又は社會運動を取り締る役目にあるも、其三番目の息子は、何處か異鄕の工場に於て、生活難のために、ストライキをなしつゝ非ずと誰れか保障する事が出來るであらう。今日の經濟生活は非職業の如何を問はず、無産者をして無産者たる事の自覺を與へずには置かない。私は、今日列席さるゝ警官諸君の一票が、無産階級政治の確立のために投ぜらるゝ事を信じて疑はないものである。何故ならたゞ官服を着てゐるが故に腹がへらないと云ふ譯にはならないからである」

演說會の後

私は先日東北の或る町の、日本勞農黨の支部發會式に臨んだ。演說會の終了後、一警官は、私かに私の耳に囁いた。

「今日貴方がたが來ると云ふので某政黨員が警察に電話をかけて、貴方がたの演說會を手きびしくやれと云つて來ましたが、こつちから手きびしく刎ねつけてやりましたよ。痛快ですねえ」

彼は私の耳元にさう囁いて莞爾とした。

私は或夜東北の農村の演說會を終へて、一里半の暗道を、當夜警戒の任にやつて來た一警官と連れ立つて歸つた。彼曰く、

「私等だつて貧乏人ですよ。今頃我黨内閣で警察部長を集めて、あれこれしたところで、警察部長が、一々選擧の實際にあたるわけではなし、そんな事は時代遲れですよ。一方に忠義を盡せば、内閣が代れば首になる。首になつたからつて養つて異れるわけではなし、生活がよくなるわけではなし、今時の警察官が昔のやうに云ひなり放題になるものですか。まあしつかりやつて下さい」

私のよく行く町の停車場の顔なじみの一警官は、私の顏を見るたびに、

「ご苦勞樣。世の中も面白くなつて來ましたねえ。しつかりやつて下さい」

と云ふ。

日本勞農黨の支部が東北の或る保守的な町に青年の手に依つて組織された時の事である。

私共は發會式の當日その町に乘り込んで行つた。その町にとつては日本勞農黨の出現や私共の乘込みは、黑船の襲來以上のセンセーションを捲き起した。

新しき時代に生れた息子達が親にそむいて無產政黨をつくると云ふので、一家親族は上へ下への大騷動である。憲政會の親父も旅行先から飛んで歸つて來た。政友會の親父も旅行さきから馳けもどつて來た。そして一家親族は、寄つてたかつて息子の征伐に總がゝりとなつた。うちの息子が社會主義者になつたと云ふので肝をつぶしたのである。

それでも、皆は一家親族の親父さん達をあゝだからうだと口說いて、兎に角、無產政黨がどんなものか知らないで、反對するのでは問題にならないから、今夜演說會を一度聞いた後、若し惡かつたらその時に止めると云ふ條件付でやつと納得させた。

その夜は、劇場の左右の兩席には、町の有志がずらりと物々しく居並んだ。かたや憲政會の親父さん連中、かたや政友會の親父さん連中、息子は演壇で既成政黨の攻擊と云ふ奇觀である。

始めのうちは、親父さん連中、昔取つた杵づかで時々野次を飛ばしてゐたが、おしまひには、遂々釣り込まれて拍手喝采となり、遂々、その町に支部が生れて仕舞つた。

先頃、茨城縣下に於ける衆議院の補缺選擧の時、加藤君は百圓の運動費を持つて五日間の運動を行つた。

政見發表演說會に十錢の入場料をとつて演說會を開いて至る處大入滿員の盛況、私共が憲政會の地盤に乘り込んだ翌日は、あちこちから

憲政會の運動員の自動車が驀進して來る。政友會の地盤に乘り込んだ翌日には、政友會の運動員の自動車が、あつちからもこつちからも乘んで來る。彼等こぼして曰く、

『君等が演說會をやる度に、五百位づゝふつ飛んで行く』

新選擧法の珍談

私は、群馬縣下に於ける縣會議員の總選擧に立候補した、須永君、菊地君の應援のために、昨四日、午後太田に於て、夜伊勢崎に於て、晝夜二回の演說會に出席した。

太田は、中學校の講堂で、伊勢崎は小學校の講堂で。集まる者、兩者、夫れ〲二千人の大盛況、既成政黨の諸君は未だ誰一人名乘りをあげてゐない。今までの縣會議員の選擧などには、政見發表演說會等は一度もやつた事がないとの事である。だから、今度新選擧法になつてから勝手がちがつて、見當がつかずまご〲してゐるとの事。學校を借りる事の珍談を一二紹介して見やう。

先づ第一に、講堂を午後一時から借り受ける約束が出來た。ところが暫時して、控室を借り受ける手續をしろと云ふ命令が來た。それから又暫時すると、便所を一ヶ所借り受ける手續をしろと云ふ命令が來た。此手續が出來なければ、小便をする事がまかりならぬわけである。

それから今度は最後に、井戸をどうするかと云ふ問題が起つた。井戸を借り受ける手續をしなければ、水を飲む事はまかりなるかならぬかと云ふ事で、頭を惱ました揚句、若しこちらが正式に借り受けた以上、たとへ火事があつても、こちらに無斷で水を酌む事がまかりなるかならぬかと云ふ、むつかしい逆ねぢ的問題が起つて、結局、井戸は借受けるに及ばず、水を飲む事は勝手と云ふ事でけりがついた。

或る警官曰く、『今度の選擧法を文字通りにやつてゐたら、私等の生命は、三日と續きませんよ』

又曰く、規則通りに適用したら一人も當選者が出なくて、選擧しなかつたと同じ事になるでしやう』

（群馬縣太田、伊勢崎の應援演說會に臨んだ四日夜、伊勢崎にて）

金力大名の特權を打破するために

安部磯雄

無産階級と有産階級との對立は個人的關係ではなく制度的關係と見るべきである。私共は個人としての有産者に對して何等反感を懷い

ゐないけれど、制度としての有產階級に對しては飽くまでも反對せざるを得ない。有產階級の存在する限り無產階級は不當なる壓迫と搾取を忍ばなければならぬ。有產階級の富が增加すればする程無產階級は益々貧困狀態に陷ることになる。無產階級が自己の存在と權利とを擁護する限り飽く迄も有產階級と鬪はねばならぬことは當然のことである。これがため無產政黨運動は起つたのであつて、これは決して一階級が他の階級に對する反逆と見るべきものではない。無產階級が現在の如き奴隷的服從に甘んずる限り、彼等は何時迄も貧困なる狀態を繼續し、終には滅亡の狀態に陷るかも知れないのである。

或る意味に於て現在の社會組織は封建制度の再來であるといふことができる。私共の祖先は幸にして德川時代の封建制度を倒壞したけれども、私共の知らない間に封建制度は其の形を變じて再現したのである。德川時代には二百六十の大名と約四十萬の武士階級が支配者であつて、農工商の三階級を殆んど奴隷の如く壓迫した。何故に小數の特權階級が容易に大多數の民衆を壓迫することが出來たかと言へば、其れは彼等のみが二本の刀を帶びる權利を有し、他の階級に對して刀劍の使用を禁止したからである。今日の特權階級は刀劍の代りに金力を有してゐる。我國民の大多數が金力大名のために種々なる壓迫を受けてゐることは何人も容易にこれを認めることができると思ふ。

德川時代に於ても大名の中には名君と稱せらるゝものがあつた。彼等は人民を愛撫し、出來得る限り善政を布くことに努力した。彼等の中には封建制度の不合理なることを感じた者さへあつたかも知れぬ。然し封建制度は人類の歷史が一度は經過すべき制度であつて、個人の力を以てこれを改めるといふことは容易でなかつた。これと同じく現代の金力大名の中にも現制度の不合理なることに考へ及んでゐるところの人があるかも知れぬ。併し彼等の力を以て現在の制度を變更することは極めて困難であるから、彼等も亦これに對して如何ともすることができない。斯の如く考へ來れば私共無產者は必ずしも個々別々の金力大名を攻擊するには當らない。私共は單に制度そのものに對して攻擊を試みるのであつて、個々の金力大名に對しては寧ろ同情の念を起さざるを得ないのである。

私共が制度としての金力大名に對して飽く迄も反對しなければならぬといふのには次の如き確乎たる理由がある。昔の大名は主として土地を占領することにより特權を得たのであるが、現在の金力大名は獨占事業を獲得することにより大なる勢力を得ることになつた。純理から見れば個人が土地を獨占するといふことは甚だ不合理なことである。何となれば土地は自然物であつて、人類が造つたものでないからである。言ふ迄もなく土地は天が人類全體に與へたところの共有財產であつて、何人と雖これを獨占すべき理由がないのである。然るに今日の金力大名の多數は單に土地のみでなく、凡ゆる獨占事業を自らの所有物としてゐる。今一二の例を擧ぐれば、水力電氣の如きは最も著しき實例の一である。我國が他の諸國に比して水力に富んで居ることは何人も知れるところの事實であるが、私共は水力の利益を認めると共に、一方に於て其の損害のあることをも考へねばならぬ。我國は本土の中央に山脈があつて、日本海及び太平洋に向つて流注してゐるところの多くの河川を有してゐる。土地の傾斜が甚だしきため水力電氣

を起すのには極めて便利であるけれ共、同時に又大雨の際これがため堤防を破壞される憂ひのあることをも記憶せねばならぬ。我國民は堤防修繕のため毎年二千萬圓乃至六千萬圓の土木費を負擔してゐる。而してこれは國民全體が負擔するのであるが、水力から生ずる利益は小數の水力電氣事業者によりて獨占されて居る。損失は國民全體が負擔し、利益はこれを小數の企業者に與へるといふことは決して公平なることではない。これは今日の金力大名が如何にして其の富を得たかを例示するものであるが、私共は更にこれに類する多くの實例を擧げることができる。

天は私共に水力を與へたのみでなく、地下に多くの重要なるものを埋藏してゐる。金銀鐵銅鐵・石炭石油の如きは即ち其れである。此等は人類が造つたものであるかといふに決してさうでない。實は此等物質の存在に對して人類は何等の貢獻をもしなかつたのである。學者の言ふところによれば、此等の重要物は人類の發生前幾十萬年乃至幾百萬年の昔に創造されたものである。然らば此等のものは天が人類の共有物として準備したといふことは何人にも容易に了解されるところのことである。然るに現在の金力大名は人類の共有財產たるべき此等の地下埋藏物を殆んど自らの財產であるが如くに取り扱つてゐる。前に述べたるが如く金力大名の多數が此等埋藏物を私することに依り現在の富を得たことは明かなる事實である。私共は此意味に於て彼等の特權を取り上げることが極めて正當のことであると信ずる。無產政黨運動がこの特權打破を目的としてゐることは言ふ迄もない

德川時代の大名が土地を獨占することにより多數の農民を彼等の雇人若くは奴僕の如き位置に置いたといふことは爭はれぬ事實であるが、今日の金力大名も獨占事業を獲得することにより多數の人民を雇人の位置に陷れるやうになつた。水力電氣事業にせよ、地下埋藏物の採掘にせよ、幾十萬乃至幾百萬の雇人がなければこれを經營することは出來ない。故に自然物の獨占といふことの一面には必ず多數の雇人を生ずることになる。而して雇主と雇人との關係が生ずるやうになれば、そこに壓迫とか搾取とかいふ忌むべきことの行はれることも自然の勢である。封建制度の代表者である德川家康は其の政策として次の如きことを公言してゐる。百姓を治めるには出來得る丈け彼等を貧困の狀態に置くことが必要である。故に彼等を餓死せしめない範圍に於て搾れる丈け彼等を搾るといふことが最も賢き方法である。これは實によく雇主の心理を代表したものであつて、民衆に奴隷的服從を求むるにはこの方法が最も有効であると思はれたに相違ない。併しこれは德川時代に於て行はれたのみでなく、今日も依然として雇主と雇人との間に行はれてゐる。金力大名が如何に地下埋藏物の採掘權を獲たからとて、其れのみでは今日の如き富を積むことはできない。彼等は是非とも多數の事務員や勞働者の援助を借らなければならぬ。併し雇主と雇人との關係が始まるや否や其處には忽ち搾取が行はれることになる。これが現代の金力大名が數千萬圓乃至數億圓といふ資產を蓄積することの出來た大なる原因である。

私共は繰返して言ふて置きたい。私共は決して個々の金力大名を攻擊するのではなくて、現在の財政的封建制度なるものに對して其の不合理なることを絕叫するのである。財政的封建制度が如何なる害毒を

流しつゝあるかに就ては一々これを述べる遑がないけれども、一二の實例として少しく述べて見たいと思ふ。　言ふ迄もなく現社會に於て最も悲む可き最も不合理なる現象は確かに失業問題であると信ずる。　私共は失業問題に關して種々なる解決策を聞くのであるけれ共、これを根本的に解決せんとするならば、先づ現在の金力大名の特權を奪ふといふ外はないと信ずる。　何となれば財政的封建制度が多く失業者を出すことは當然の結果であると考へられるからである。　現在の如く經濟界の動搖が甚だしければ、其の度毎に多くの失業者を出すといふことは決して怪むべきことでない。　而して經濟界の動搖が主として經濟界に於ける自由競爭の結果であるといふことは何人も容易に認めることのできる事實である。　若し經濟組織が軍隊組織の如く秩序的であり、其の結果需要と供給との調和が完全に行はれさへすれば、其處に經濟界の動搖が起るべき筈はない。　畢竟するに金力大名が相競ふて生產をなすといふところに經濟界の缺陷が伏在してゐる。　需要を計らずして生產すれば供給過多といふ結果を生ずることは當然である。　供給過多の結果は事業の縮少となり、失業者の續出となる。　故に失業問題を惹き起すに至つた原因は當然金力大名が其責を負ふべきである。

更に私は金力大名の側から見て失業問題が必ずしも重要なる問題でないことを述べなければならぬ。　私共無產階級の側から見れば失業問題は實に死活問題であるけれども、金力大名にとりては失業者の存在するといふことは寧ろ便利ではないかと思はれる理由がある。　歐米諸國に於て屢ゝ言はれてゐる如く、失業者は或る意味に於て遊軍の如きものである。　此遊軍が多人數であればある程金力大名は便宜を感ずる。　經濟界の景氣が良くなれば、彼等は容易に遊軍の中から必要なる勞働者を得ることが出來るのみでなく、遊軍のために勞働者の間に激烈なる競爭が起り、その結果低廉なる賃金を以て何時でも勞働者を雇ふことができるといふ便利がある。　これがため金力大名は常に勞働者の人數の多からんことを望むやうになる。　この理由からして金力大名は人口問題に關しても、何時も自分勝手なる意見を有つてゐるのである。　無產階級から見れば、我國の如く驚くべき人口の增加率を有することは決して望ましきことでないから、海外殖民により、若くは產兒制限によりて、人口の增加率を出來得る丈け低下せしむべしといふ意見に一致してゐる。　然るに金力大名の代辯者たる政治家は多く人口增加の禮讃者である。　これも彼等が寧ろ失業者の續出を歡迎してゐる證據であると見ることができる。

金力大名の激烈なる競爭や、彼等の極りなき貪慾のために、無產階級が少なからぬ損害を蒙むるといふことに就ても一言しておかねばならぬ。　現在の金力大名は德川時代の大名に比して大いに異る點がある。　德川時代に於ては政治的統一が完全に行はれてゐたゝめ、大名と大名との間には何等の鬪爭がなかつた。　然るに現在の經濟界には何等の統一がなく、恰も足利時代に於ける群雄割據の狀態を呈してゐる。　故に彼等の間には絕えず競爭が行はれてゐるのみでなく、往々人民の財產を掠奪するやうなこともある。　戰國時代に於ける人々の間には殆んど生命の安定といふことがなかつた如くに、現在の社會に於ても金力大名の競爭や不始末のために、無產階級は財政上安定さへも失つてゐるのである。　最近に於ける銀行破綻のために多數の無產階級が損害を

叢つてゐるといふことは痛切に財政的封建制度の末路を語つてゐるものではないかと思ふ。

更に進んで私は金力大名の罪惡を擧げて見たい。何人も現在の政黨が堕落の極度に達してゐることを痛嘆してゐるのであるが、私共に單に既成政黨を罵倒するよりも、寧ろ政黨を操縱して居る、金力大名の不都合を責めるのが當然である。金力大名は政黨のために莫大の費用を負擔してゐる代りに、政黨は政權を握るや否や、此等の金力大名に對して種々なる利權を提供しなければならぬ。前に述べた如く金力大名が何の苦もなく地下埋藏物の採掘權を得たといふことは、畢竟するに彼等と其の代辯者たる政治家との間に秘密契約のあつたことは疑ひなきことである。金力大名が陰に隱れて政治家を操縱してゐる丈け、其の罪も一層深いのであるといふことは無産階級が等しく考へてゐるところである。

德川時代に於てすら特權階級の壓迫に對しては屢々百姓一揆が起つた。其の當時に於ては斯の如き行爲が恰も反逆罪であるが如くに考へられたのであるけれ共、私共から見れば、これは當然起るべき事であつたのだ。唯竹槍や鋤、鍬の如き貧弱なる武器を以て兩刀を帶びた武士に對抗したといふことは全く無謀なる行爲の如く思はれるけれ共、斯の如き不利益なる狀態にありながら、尙ほ特權階級に對して反抗を試みたといふことは確に其の時代に於ける壓迫の如何に甚だしかつたかといふことを證明するのである。百姓一揆を以て不法としたのは其の時代の考へ方であつて、今日から見れば當然の成行きであると考へなければならぬ。今日の無産階級が敢然として有産階級に對抗するのも自然の成行きであつて、これを反逆視するのは決して適當でない。其處如何なる時代の人でも不合理なる壓迫に對しては必ず反抗する。併し德川時代の百姓一揆は殆んど全部失敗に終つた。何となれば百姓の有する武器は到底武士が所有する利器に對決することができなかつたからである。

私共も昔の農民と同じく特權階級に對する反抗運動を起して居るのであるが、私共の運動は決して百姓一揆の如き失敗を來すことはないのである。若し無産階級と有産階級との勝敗を決する條件が金力であるならば私共の成功は極めて悲觀的であるかも知れぬ。併し物質的手段によりて勝敗を決する時代は漸くにして去らんとして居る。普通選擧が行はれるやうになれば、私共の武器は各自が有してゐる投票權である。有産階級の投票權も無産階級の投票權も其の間に何等異なる所はない。運動競技にはフエーヤプレーといふことを原則とするのであるが、普通選擧の行はれる政治界に於ては、如何なる者も平等の武器を有するのであるから、私共は今後の競爭に於て公平なる條件を具備することができる。勿論私共は普通選擧の實施後に於ても、有産階級が尙ほ種々なる手段に依りて、其の特權を維持することに努力するであらうと信ずる。併し無産階級が自分の位置を自覺することになりさへすれば、彼等は確に數に於て有産階級を壓倒することができる。生活の安定といふことを標準として計算すれば、我國の無産階級は人口の九割五分を占め有産階級は單に五分に過ぎないのであるから、將來に於ける無産階級が如何なる位置を占むるであらうかは、容易に推測することができる。

明治維新の目的は大名及び武士階級から二本の刀を取り上げるといふ事であつた。而して今や其の刀は國家の共有物となつて軍隊及び警察に所有せしむることになつてゐる。私共が現出せんとする第二の維新も亦金力大名に對して其武器である金力を制限するといふことにあらねばならぬ。私共は必ずしも人々が數千萬圓の資産を所有することに反對するものでないけれども、數百萬乃至數億圓の資産を有するといふことは決して社會全體の利益ではないと信ずる。これが特權打破に對する私共の意見である。

「勞働農民黨の旗の下に!」

大山郁夫

一

八月三十一日の晩、東京を立ち、東北、東海道の要所々々を遊說して、今は京都に來てゐる。汽車の中での時間は、すべて原稿書きに充てられてゐる。かくして、食事と睡眠との時間を引くと、あとは殆んど現實鬪爭の渦中の人となつてゐる。秋田――東京――靜岡――名古屋――京都と、經て來たあとを顧みると、茫として夢の如しだ。これほどの充實した生活は、既往に於て私は知らなかつた。眞に勞働農民黨氣分だ!

至るところ、黨員の活動は猛烈、意氣は旺盛だ。運動は進展してゐる。しかも民衆は、極度の信賴と關心とをわが黨に向けてゐる。それは、わが黨が民衆に向けた信賴と關心との報ひであらねばならぬ。民衆と黨との、黨と民衆との間の、完全に呼吸の合つたところの、水も漏らぬばかりの相互的信賴および相互關心、――それは全く、沈痛なる逞ましさを誘ふ。しかも、さうした逞ましさは、我々の鬪志をして、層一層と、鬱勃たらしめ、堅固たらしめる。

私が勞働農民黨の立場から書いたパンフレット『大衆に呼びかける』の後半は、全部、かうした感激の下に書かれた。それは、その意味に於て、一の『陣中作』であり、從つてそれはまた、一の『戰ひの叫び』でもある。

今私は、勞働農民黨が府縣選擧戰に臨むに際して掲げてゐる主張、政見、政策を、茲で一つ一つと項を追うて述べてゐる餘暇を持たない。それらはしかし、勞働農民黨が周到なる用意の下に調製し、七月十五日に東京で開かれた黨の府縣會議員選擧對策全國協議會に於て、

黨議を以て採決したところの、可なり大部の『勞働農民黨府縣會對策』に、委曲をつくして記載されてある。そしてその『對策』は、私のパンフレット『大衆に呼びかける』のうちに、附錄として收められることにもなつてゐる。また私は、そのパンフレットの本文の中に於て、その對策の基礎的原理を解說しておいた。それ故に、私はわが勞働農民黨が、府縣會選擧戰に臨むに際し、大衆の批判の前に提げて立つてゐる主張、政見、政策はもとより、黨の鬪爭態度、鬪爭目標、等々について知りたい人々に向つて、無遠慮の罪は許していただくことにして、そのパンフレットの閱讀を薦める。それに、それの刊行から黨に歸屬する收入は、すべて黨の事業に使用されるのであるから、黨の日常政治鬪爭の進展に關心を持たれる人々にも、その頒布區域を出來るだけ擴げていただくやうにも希望する。

そこで私は委細に亘ることは一切その方に讓ることとして、玆ではむしろ、わが勞働農民黨の鬪爭態度と既成諸政黨およびわが黨以外に無產政黨を標榜して立つてゐる諸政黨のそれとの間の根本的相異點を明白にし、且つそれに附け加へて、府縣會選擧戰に於けるわが黨の活動の現實的意義を強調しておかうと思ふ。

二

わが勞働農民黨の攻擊の鉾先は、二つの目標に向つて鼓れてゐる。その一つは既成諸政黨であり、他の一つはわが黨以外に無產政黨と自稱してゐる三つの政黨——わが黨ではそれらの三つを總稱して『エセ無產政黨』と呼んでゐる——である。だが、それらの目標に向つてなされる鬪爭は、すべて皆、現前の金融寡頭政治に對するわが黨の現實的積極的抗爭といふ一點に集中統一されてゐるのだ。

で、わが勞働農民黨の鬪爭態度を、既成諸政黨やエセ無產政黨やのそれと區別してゐるところの最も主要なる眼じるしは、前者が日常政治鬪爭を主位においてゐるのに反して、後者がいづれも、意識的か無意識的かに、議會中心主義、選擧第一主義に墮してゐるといふ一點である。

既成諸政黨が擧つて議會中心主義に終始してゐるのは、彼等が議會の多數に據つて政權にありつかうとするところから來てゐるのである。彼等はそれ故に、その議會の多數を獲得するためには、選擧に際しての活動を最も主要視し、『淸き一票』の乞食をすることに浮き身をやつすまで、選擧區民の前に低頭平身する。だが、一旦選擧がすむと彼等は最早選擧區民の實生活上の要求などは眼中におかず、たとへば金融資本の支配の確立のために民衆の利益を犧牲にした十七億三千萬圓の豫算や、二億圓の震手法案や、七億圓の金融機關補償法案などを鵜呑みにするやうな醜態を演ずることを恥としない。

エセ無產政黨の諸分派もまた、或るものは意識的に、或るものは無意識的に、既成政黨の議會中心主義の蹤を追うてゐる。最も熱心にわが黨に追隨してゐるやうに見せかけ、しかも選擧季節を大衆の階級的結成の機會とするといふやうな口眞似さへしてゐる日本勞農黨までが屢ゝ不用意の間に、その得票第一主義を固執してゐる態度の一端をもらすのを常としてゐる。で、さういふ方面の暴露は、わが黨の機關紙『勞働農民新聞』によつて、從來既に屢ゝなされて來た。

想が、さういふ點にかけて、最もひどく尻尾を出して來たものは、社會民衆黨である。——日本農民黨の主張の如きは、大衆の前には殆んど影を潛めてしまつてゐるやうだ。——我々は屢〻遊說の途上に於て、社會民衆黨の幹部が、『我々が內閣を取つたら斯くする』と演說しまはつてゐることを聞かされる。『社會民衆黨が內閣を取つたら、國民の各自の生活が保證されるやうな國家保險制度をしく。』『社會民衆黨が內閣を取つたら、靑森から馬關までの何間道路を設ける。』等、等、等。

かくの如きは、既成諸政黨の議會中心主義と、何處が異ふ？また、社會民衆黨の手に『熟柿』が轉がり込むのは何時のことか分かつたものでないから、かくの如き餌で選擧民を釣らうとするのは、既成諸政黨の空手形發行癖の眞似をするものといはれても、どうして辯解が出來るか？ のみならず、無產政黨として立つものが、政權にありつき內閣を取らなければ民衆の切實なる要求を具體化した運動が出來ないといふのならば、無產政黨は永久に眞に意義ある政治的活動に入ることが出來ないことにならうといふものだ。

三

わが勞働農民黨は、さうしたさもしい眞似を斷じてしない。わが勞働農民黨の生命は、日常政治鬪爭の現實的展開の上にある。わが黨は、現下の金融寡頭政治の下に於ける勞働者、農民、及び小市民層の生活の窮迫化から生ずるあらゆる社會的經濟的不平不滿を、活ける政治的諸要求に結晶せしめて支配階級に投げつけ、またそれらの諸要求の貫徹のためには、血の出るやうな鬪爭を物ともせずに、日常政治鬪爭を敢果に、執拗に、敢行してゐる。議會解散請願運動、對支非干涉運動、家賃三割減運動、檢閱制度改正期成運動、預金者大會運動、立入禁止反對運動、工場代表者會議運動——最近に於て、失業手當法、八時間勞働法、最低賃銀法、婦人靑少年勞働保護法の制定、および健康保險法の徹底的改正等々の政治的諸要求にまで發展轉化したところの——の如きは、最近數個月間に於て、わが黨の指導もしくは支持應援の下に行はれ、且つ現に益々すばらしく展開せしめられつつあるところの現實的日常政治鬪爭のうちの主要なるものの數例である。尙ほ別に、全國各地方に亘つて、地方問題を主とした實際運動——たとへば、信州に於ける霜害救濟運動、岩手岡山等の諸縣に於ける漁業權擁護等々——が、わが黨の指導下に力強く行はれ、更らにまた、金融資本の肉薄の下に各地方の勞働者農民および、小市民層によつて共通に感ぜられてゐる。切實なる生活上の苦痛、及びそれによつて益々高められつつある不平不滿を、具體的な政治的諸要求に結成するための町村民大會が、それもまた全國各地方に亘つて、わが黨の指導の下に開催され續けて來たのである。

かうした現實鬪爭の熱火の試煉の間に、わが黨の指導下に於て、現在金融資本の支配の確立のために共同に犧牲とされつつある勞働者、農民、および小市民層の同盟提携が益々鞏固に結成され、そこから更らに、彼等の共通の政治的諸要求を具體化した實際運動が、一層有効に進展せしめられようとする形勢にあるのだ。

一般に注意されなければならないことは、わが黨の指導もしくは支

持應援の下に行はれてゐるところの、それらの實際運動のすべては、わが黨が議會――衆議院はいふに及ばず、府縣會、市町村會の如き地方議會をも含めて――にわが黨の議員を出して居ると居らないとに拘らず不休不斷に力強く展開せしめられてゐるといふ一事である。それはしかし、勞働者、農民、小市民層の鞏固なる同盟の上に立つ大衆的共同戰線黨としての任務を痛切に意識し、かつその任務の遂行のためにはあらゆる彈壓とあらゆる危險とを物ともしないわが勞働農民黨の鬪爭態度を反映してゐるものとしては、當然至極のことであらねばならぬ。

四

もとより、わが勞働農民黨といへども、議會及び選擧を重要視してはゐる。だが、それはわが黨の獨自の意義に於てである。一トロにいへば、わが勞働農民黨は、議會および選擧を、その日常政治鬪爭を離れてでなく、それと緊密に關聯せしめて、重要視してゐるのだ。

先づ第一に、選擧に關しては、わが黨はそれを大衆の階級的結成の好機會として、そこに、實質的意義の充實した宣傳戰を、すばらしく展開せしめる。更にまた、わが黨は選擧に於ける我々の成績を、我々の日常鬪爭を通じて得られた大衆と黨との間の相互的信賴および相互的支持の尺度の一つとしても見る。もとより缺陷の多い現在の名のみの普選の下に於ては、それはその尺度としては不完全極まるものであり、また既成諸政黨の過去から持ち傳へた惰力、及び官憲の猛烈なる選擧干渉は、わが黨の主張に共鳴する民衆をも、わが黨に近づかしめないやうな事情も甚だ多く實在してはゐる。だが、それにしても、わが黨はさうした諸點を考慮に入れた上で、大衆と黨との間の相互的信賴及び相互的支持の增進の程度を測知するために、それを少くとも一の參考資料とするものである。

次に議會――衆議院、府縣會、市町村會――に關していへば、わが勞働農民黨は、その演壇を、わが黨の演壇――しかも政治的暴露の演壇として見てゐるのである。それ故に我々は、そこに必ずしも多數の議員を送ることを必要としない。我々は寧ろ、多數少數を論ぜず、そこに精鋭なる鬪士たちを送ることを主眼としてゐる。從つて、議會に於て我々の鬪士たちによつて有效に行はれる政治的暴露は、議會外の大衆の支持應援と内外相呼應して、それによつて大衆の實生活上の切實なる諸要求を反映する我々の日常政治鬪爭は、益々力強く進展せしめられる基礎を得るのである。

この點に於て、わが勞働農民黨は、既成諸政黨の多數決萬能主義から絶縁されてゐるものである。既成諸政黨は、議會内の多數決によつて、遮二無二議會外の無數の大衆を壓倒する。かくして彼等は、民衆の利益を犧牲として財閥を救濟した七億圓の金融補償法案をさへも、油斷してゐた民衆の上に押し附けたのだ。これに反して我々は、議會外の無數の大衆の實生活上の切實なる要求を提げて、議會内の多數決を抑制し正導しようとしてゐるのである。議會に於ける我々の議員の言動は、この目的のために、最も多くその威力を發揮することが期待され得るのである。

五

勞働農民黨の府縣會選擧對策中に掲げられある政策は、(一)選擧權(二)行政、(三)財政、(四)公益事業、(五)住宅、(六)教育、(七)勞働者並に小農の大綱に亘つて示され、その下に多數の項目を網羅してゐるが、何れの項目として、現前の金融資本の壓倒的肉薄の下に共通の苦痛に喘ぎ呻めいてゐる勞働者、農民、小市民層の切實なる生活上の諸要求に觸れてゐないものはない。

實際、現在の民衆の不平不滿を論ずるに當つて、それを現政局の全面の動きを把握するための鍵ともいふべき金融資本の支配と引き離して見ることの無意義なことは、いふまでもないことである。それ故に、わが勞働農民黨は、如何なる種類の地方問題——たとへば、現在地方民の生活を至當に壓迫してゐる戸數割、自轉車税、荷馬車税、家屋税、特別地税、營業税等、等、等の如き——を取り上げる場合に於てさへも、さうした問題が如何に中央の金融寡頭政治に聯關せしめられることによつて民衆生活を脅威してゐるかの關係を見究めて、的確なる對策を講ずることを怠つてゐないのである。さういふことは玆で細説してゐられないから、私は讀者諸君が、わが黨の府縣會對策の現物について直接に調らべあげ、尙ほそれを、日勞黨や、社民黨や日農黨やの對策と比較して、その間に存してゐる根本的差異を發見されるであらうことを切望してやまない。

六

勞働農民黨の府縣會選擧對策には、前掲の七大綱の下に無數の諸項目が掲げられてあるが、それは單なる機械的羅列ではなくて、有機的に統一されて潑溂たる生命を持つてゐるものであることは、前に略説したところによつて、その大體が明瞭されたものと思ふ。だが、私は、念のため、それに附け加へて、それらの七大綱下の無數の諸項目が、『一般的政策』の綱下に示されてゐる次の三項によつて統括されてゐることの上に、諸君の注意を向けておく。

(一)地方自治體を中央政府の、、、支配より解放し、民衆の自治權を伸張すること。

(二)地方自治體に於ける民衆の政治的自由の獲得。

(三)地方自治體に於ける勞働者及び小農の利益の伸張。

尙ほ、この關係を、他の言葉を以て解説すると、かういふことになる。——即ち、わが勞働農民黨は、黨がこれまでに行つて來、また現に行つてゐるところの、民衆の實生活上の切實なる諸要求——社會的經濟的等々の——を反映する一切の鬪爭を、政治的自由獲得鬪爭に合流集中せしめてゐるのだ。そこにこそ、わが黨の當面の鬪爭目標が明かに認められ得る。

『金融資本と絕對、、權力との抱合』を代表する現前の金融寡頭政治の下に、如何に民衆の實生活のあらゆる方面の自由が一つ一つと蹂躙しつくされてゐるかは、誰れもの日常經驗に於て切實に感じられてゐることだ。しかもこの傾向は、田中反動内閣の下に於て、一層顯著になつて來た。即ち、現在では、單に勞働者、農民、及び小市民層の日常生活上の諸要求に根ざす諸運動だけが酷烈なる彈壓の下におかれて

ゐるのではなく、學術、思想、言論、藝術、演藝、等々の上にまで、益々猛烈に抑壓の鐵鎚が下されるやうになつて來てゐるのだ。かかる事態の下に於て、自由の要求は、最早一片の政治的理想の表明ではなくなつて來てゐる。否、現在では、自由を要求するとは、生活を要求することである。しかも、このことは、現政局の上に於て、勞働者、農民、小市民層によつて、共通に痛感されてゐるのだ。この際、わが勞働農民黨が、それが手にしてゐる一切の鬪爭を、政治的自由獲得鬪爭に合流集中せしめてゐるのは、決して偶然ではない。それこそ金融資本の支配に向つて敢然として、抗爭する眞の大衆的共同戰線黨が、當然その眼前に見据ゑなければならない鬪爭目標なのだ。

かくの如く、現政局の上に於て大衆的共同戰線黨の任務をつくしてゐるわが勞働農民黨は、その無産階級黨としての本質を、寸毫も隱蔽するものでない。今日一般大衆を窮迫のどん底にまで追ひつめてゐる金融資本の支配に對して、熱火の如き鬪爭を最後の勝利にまで執拗に戰ひぬく意志と力とを持つものは、無産階級をおいて外にないのである。大衆の本能は、聰明にもそれを知り拔いてゐる。それにも拘らず、社會民衆黨の如きは『勤勞階級本位の政治』といふが如き不得要領のカームフラージュをやつてゐる。大衆がその虚僞もしくは卑怯を唾棄してゐるのは、當然のことである。これに反して、わが勞働農民黨が無産階級黨としての本質を赤裸々に示して恐れない生一本の態度は、却て大衆の信頼を博する媒介となり、今や、都市に農村に、『勞働農民黨の旗の下に！』のスローガンの叫ばれるところ、大衆の反響は嵐の如く捲き起されてゐる。そして私たちは、その反響の聲に歡迎されつつ、歡喜にみちた行進を、東のはてから西のはてにまで續けてゐるのである。



デルフィン

ポオル・モオラン作

堀口大學譯

私は自家へかへつて來ました、急行列車が通過したあとの停車場に起るやうな複雜きはまる風に頭をとりまかれて。クヰインス・カレッヂのあたりで、敷石とすれずれに街角を曲りながら、風は私のポケツトの底へ、指先の痺を入れて行くのでした。黑い帆のやうに風を孕んだ私の制服は兩肩をひつつかんで、私をうしろの方へひつぱるのでした。私も他の學生たちと同じやうに一年中外套を着ずに、帽子を被らずに、舞踏靴をはいたままで外出することを伊達にして居つたので、今日のこの三月の嵐に逢つてすつかり凍えてしまうのでした。思へば當年十四歳の一佛蘭西少年が、アングロ・サクソン風なパヂヤマに對して枕を楯にお國風の露西亞紬のある錦紗の寢卷を防禦せねばならなかつたここの寄宿舍生活の第一夜以來、樣々なそれまでの自分の習慣を私は見棄て來たのでした。

ダアダネルスとパッセとの戰場で戰死した學生たちの屍を竝べたら、テイムス河の閘門の長さの三倍にはなるだらうと思はれるのです。然るに戰死から歸つて來た學生の數はそれよりももつと多いのでした。カレッヂはために別館までも開いたほどでした。今ではオクスフオドは、以前のやうな、時たまに授業のない教師と、スピリチズムに熱中した印度人の學生と、見物に來るカナダ兵とが姿を見せるだけの、人影まばらな深閑とした中庭ではないのでした。それはまた昔のやうに、高尚な修道院ではなく、人々が畑から、工場から歸つて來るやうにして、ラテン語から、ギリシヤ語から歸つて來る一つの部落でした。オックスフオドは今では無爲と伊達とに中毒されては居りませんでした。英國に於ける課税の中でも一番に高率な子弟の教育も、今では可成な制限を受けるに到つたのでした。學生たちが毎晩、三鞭酒を飲んだり、クラレンドンに舞踏會があつたり、ラテン語の論文をそのまま買つて來て提出したりしてゐた時代も、それからまた、商人に立派なカレッヂの名を告げただけで、三學年の暑中休暇の終りが來るまでは、いくらものを買つても、決して請求書の顏を見ずにすんだやうな信用生活の時代も、昔、學生たちが美事な車馬とお妾とに身代限をしたと云ふヂヨオヂ王朝の初代のころの話のやうに、今では昔

がたりになつてしまつて居るのでした。こんな事情で私までが、同窓の他の學生たちと同じやうに、質素な習慣をとりかへして、校則を重んじて、殆んど毎晩のやうに學校の食堂で食事をしてゐたのでした。尤も私は寄宿舍には入らずに市内に下宿してゐたのですけれど。私たちは鵜呑にするのでした、ベエコンのやうに見えて、ペプシンの味のする、黃いろと桃いろとのだんだら縞のモカのデザアトと、コップに一ぱいの淸水とを。學監が感謝のお祈をささげてゐる間に麵麭の心が老食堂番のハリスの頭の上に飛ぶのでした。この老人はもん日になると秘藏の金襴簿を持ちだすのですが、それには印度の副王や、ゲイトルをはいた大公殿下や、または黑天鵞絨にへりをとつた背廣を着たオスカア・ワイルドの肖像などがはりつけてあるのです。ワイルド、この支那青磁の蒐集家は、一生の間モオドレン・マンとして殘つたことと、罰金を拂ふかはりに懲役に行つたこと以外には當時世間を驚かすことを知らなかつた先生です。

私はパンバリイに住んでゐました、ここは經濟的な安普請の貸家で色さまざまに染め拔いた土地です。其所にはベンチの上に腰かけてゐる女中さんの數と同じほどに多數の WORDWORTH HOUSE や KEAT'S LODGE があるのです。女中さんたちはセルロイドのカラが修繕ひやうもなく折れて、眼鏡がよれまがるのもかまはずに、唇のない口の上で接吻を馴すおけいこをしてゐるのです。私はそこを通るのでした、學士候補の二年生として、聖壇の前でバイブルに手をついて、燕尾服を着て、ラテン語で宣誓したことを自慢にして、河に墜ちたことを得意げに、わざとなる可く都合をしてまでもロンドンからの終列車、普通放蕩者の列車と呼ばれてゐる汽車でかへつて來て、然も消燈後に巡羅してゐる學校の見廻りに見つからぬと云ふのがお自慢で、そしてこの土地では封建時代からのしきたりで、學生には歩道では家並の近くの側を、河では中央を與へてくれる規則になつてゐるので、意氣揚々と歩いて。

寄り附きの室の剝製にした大鴉と銅羅のぶら下つてゐる廊の角の下の所に、私に宛てた手紙が一通私のかへりを待つてゐました。私は三階へ上つて、書物と、馬具と、サイフォン壜とが蒔いてあつた、壁にはトオスト用のフオクと、ダンテ・ガブリエル・ロゼツテイと、頰ひげを生してスウピエ・ズボンをはいた二人の紳士がてんでに紙の喇叭を口にあてて雛に聲援してゐる鬪雞の圖とがかけてある室に灯をつけました。

そして私は讀むのでした、

三月十三日

ロンドン市キング・ストリイト、ライスタア・スクエア、W・C

サンタ・マリア修道院にて。

ジヤン。

妾がロンドンへ來てから、やがてもう一週間になります。今は夜の十時です、妾はねむくもないのに寢床に入つて居ります。妾は修道院の一室に宿つてゐるのです。妾はリユツクス・デルフインと云ふ名の妾のオオ・ド・コロオニユをかくして置くのです。妾のトランクを廊下に置くことは許されませんでした。妾の身のまはりには母の肖像が二つ三つあるばかりです。妾の一生のうちで一番になつかしい人の一人はやはり母だと見えます。妾の夫が死んでからあとは、妾はどこに居つてもいいのです。何故妾が今もトオレエンに居らぬのかは私にも分りません。修道院が目についたので妾はここへ來る船に乘つたのでした。妾は一人身の若い女です。男女のつきあひが妾には欲しいやうでもあり、また欲しくないやうでもあるのです。妾は以前、ロワアル河の岸邊にゐた頃と同じ妾です、ただ少し神經がつかれてゐるだけです。どうやらこれでねむたくなつて來たやうです。

*
***
*

デルフイン

それは私の家の窓かけの映寫幕の上に動くのです。場面場面がお互に入り亂れて、お互にちぐはぐにめりこむのです。その間に一つの顔がとある道路の上に現れて來るのです、おや、これは何かの間違だなと思ふ間もなく、その顔の四圍に、忽ちにして、板塀や、戸口や、窓やが結晶して、その一瞬時前にそこに生れた幾何學風な風景に四方を取りかこまれてそこにアウルヂヨワ風な一つの容貌を形成するのです。然るにやがてまたこの容貌が今度は、例のどんな小さな壁の上にでも吹きすさぶシネマ式の突風の激さの下に消えてなくなつてしまふのです。かうして、私の家の無煙炭の煙で煤けた四壁のチムニイが、ばらばらに離れて、落ちて、薄つぺらになつて、ばら色の小山に變つて、そこに私がヴウヴレイの景色を認めるのです、次にまたチムニイの鋼板が、神經質にわななき出して、ひろがつて、力強く流動する液體となるかと見てゐると、そこからロアアル河の流れが生れて來るのです。私はそこに再び見るのです、戸口の踏段によつて結びつけられた二棟から成つてゐる一軒の家を、そしてその家にある更紗の窓掛とピアノラを。デルフインは幾度かこのピアノラの喘息のスキツチをひねつて、私に「セヴイヤの理髪師」の諧謔曲を無闇にきかせて呉れたものなのでした。透のある卷物の長さに沿ふて、穴が迂餘曲折して、すきとほつた音を立てながら下へ下へと流れるのでした。かの女がかうしてピアノラを鳴らしてゐる間、私は私の大好きなかの女の堅くよれまがつた頭髮を眺めてゐるのでした。これ等の樂しかつた時間に、

その後の私の實生活は、何にも附加しては呉れなかつたのでした。やがて私はかの女の手を握つて、そして思ふのでした、「これのみが重要である」と。ピアノラの送風器が歔り泣くのを休め、音譜が身投げして自殺することをやめました。私は何時までも二人がこうしてゐる事を欲したのでした。然しそれにしても、私たち二人は沈み勝ちな性質の子供たちだつたのでした。そして、一度も私たちの笑ふ聲が聞えて來ないので、デルフインの叔母さんが心配するのでした、そして眼鏡の水の中に溺れた馬鹿らしく氣のぬけた二つの眼玉があらはれて、私たちの差し向ひの邪魔をするのでした。

着物を汚さず、そしてまた水タンクの梯子に私と一緒に登ることを決して欲しなかつたデルフインと、私が一緒に遊ぶことは、どうやら自家の人たちも許しては置くのでした。然しまた、かの女の冷靜さと怜悧さと「年にも似合はぬその云ふこと」とは私の祖父母たちの氣に入らぬらしいのでした。

私はよく小耳にはさんだものです、

――デルフインはかの女の母の肖像のやうによく似た子だと。かの女の母と云ふのは、何でもある海軍士官と一緒にツウロンに住んでゐると云ふことでした。青ざめた顔いろの、そのくせ桃いろの指を持つた、何時でも安南風のきものをだらしなく着て、そして食べもせずに、外國風な料理をお皿の上でさめさせて、顔に皺のよつた、世界の港から港へ渡り歩いて、さまざまの悪い評判のある特種な男たちと一緒に食事をしたりすることを何よりの誇りとしてゐる女であると。

デルフインはかの女の母とはやゝにことなつて、夢の中でだけ詩的な生活をしてゐるのでした。かの女はそれ等の夢を、毎日私に細々と語つてきかせるのでした。かの女の夢の中には、何時も必ず水があるのでした、かの女の氣分が爽かな時には水が澄んで、かの女が疲労れてゐる時には水が濁つて。かの女の夢の中には、またよく猛獸が出て來るのでした、山猫だの、豹だの、然しどのけだものも、必ずやさしくつて、そしてすべすべした毛皮を着てゐるのでした。かの女はこれ等の猛獸と一緒に一番に高い木の枝に登つて、其處から虚空へ身を落すのでした。かの女は精密な夢解の知識を持つてゐて、それぞれの夢の意味を私に云つてきかせるのでした。私が吃驚して訊ねると、かの女はかくさずに、夢判斷の大家マダム・ド・テエベと文通してゐることを告白するのでした。それ許りか、かの女はマダム・ド・テエベからの手紙を私に見せて呉れたものです。それ等の手紙の中では、あの有名な夢解の大家がこの田舍に住む少女に向つて親しげな口調でものを云つてゐるのでした。

私にとつては、デルフインは別に一個の宇宙でした。それは、私が感じてゐる宇宙よりは、もつと個性的な感興と自分勝手な法則とで出來てゐる宇宙でした。

かの女が云ふのでした、

――妾は決して、世間の多くの女たちがさうであるやうに、不信と云

ひながら、承知するやうな種類の女にはならぬつもりです。」と。かの女は、樂しさうにして、さまざまな言葉を試みたり、思想を實行したりして一直線に進んで行くのでした。それ等の實驗の一つ一つが實にかの女にとつては歡喜だつたのでした。どんな言葉もかの女にとつては不合理ではなく、また、どんな形式もかの女にとつては出鱈目だとは思はれぬのでした。固く自分を守りながらも、然もかの女はよく、トウルの市の入市税の爲めに造られた城門に境されたこの小さな世界の缺點を十分に知つてゐるのでした。そして私を十分に愛しながらも然もよくかの女は私の缺點を十分に認めてゐるのでした。かの女は私が眼鏡をかけることを欲したかも知れぬのです。

私は機智によつて、かの女に對する優越な地位を占めてやらうと試みたこともありました。そして私はかの女に小説「ドミニツタ」を貸してやつたものです。するとかの女はそれを私にかへしてよこしました。「いいわね」と云ひながら。そしてかの女は結論を下して云ふのでした、「あなたは感覺的な方ね。」と。かの女の云ふ所は事實でした。食事の後で私の大きな頬が火のやうにほてつてゐることがよくありました、そしてまた私の鼻はいやしげな怪しげなものの匂ひに幾度かうごくのでした。それに反して、デルフインは私にとつては、中庸を得て居ると同時にまた個性的だと思はれるのでした。かの女は如何にも、かの女位の年頃の娘らしいのですが、そのくせ、かの女には、はかり知れぬ智識と、正確な判斷力とがあるのでした。男の兒であつたら、年長者の寛容か、さもなくば自分たちの僞善によつてやうやく曲りなりにもお茶を濁して生きて行く年頃にあつて、かの女はすでに器用にそして自分のもつこの優秀な地位に誇を感じてゐるのでした。人類が持つありとあらゆる無氣力な、反抗的な、そのくせ繁殖力のある、そして醜惡なものが悉く私に當かはれてゐるやうに私には思はれるのでした。然るにそれと知りながらも、私にはただそのままに生捉して行くより他に手段とてもないのでした。この時、かの女は單に、その閉された館とその空虚な心臓とを一寸見せただけで、ただそれだけで、四方八方に注意を喚び起し感動を與へ、かの女の存在を運命に告げ知されるに十分だつたのでした。爲めにかの女がただ一歩自家からそとへ踏み出しただけでさまざまな不幸がいきなりかの女をとりこにして仕舞つたのでした。そしてかの女の結婚は、それ等の不幸の中の最も大きなものの一つであつたことも事實なのです。

勿論、戰爭がかの女の不幸の原因をなしたのでした。千九百十七年のトウルの市には、プウルヂョワ階級に屬する一人の佛蘭西娘が、二た月以來かの女に寄ひ倚る、やはらかい長靴をはいた一人の露西亞士官と結婚するのをさまたげる何ものも存在してゐませんでした。何故かと云ふに、その當時にあつては、病院と云ふ病院は悉く、世界各國の言葉でなされる戀の口説で滿ちあふれ、傷病兵を乘せた列車が聖氣な奧さんたちによつて待ちうけられ、そして貴婦人たちが服喪のにほひを嗅ぐと忽ちにひよんな氣になり、大敎司の家で社交的な茶會

が催され、道ばたには到る所に大きな日傘の花が咲いて、そのかげには安南人たちが黄色い表情をかくしてゐたのですから。

然しこのやうな世態は、デルフィンと私が二人して、晩餐前の自轉車に乗つて、ロワアル河の岸をリユウヱンヌまで行つた頃から漸く後に現はれたことなのです。

田舎道のふちに生えたポプラの木の間に洪水がはり渡してあつて、石灰の断崖の上には、花ざかりの芥子菜の模造の太陽の光もどうやらとどめることの出來ぬらしい夕暮が下りて來てゐました。大河は鈍いろの空をおしながし山腹の牧場には、汚斑のある家畜が舌のあとを追ひかけて歩いて居るのでした。

デルフィンは風に向つてペダルを踏んでゐました。かの女は水兵帽をかむつて、高い毛糸のスウヱタアを着て居ました。時々、かの女は風が燥かす唇を濕します。休んで居る時や、自家にゐる時には、多少の鬱陶しさを示すかの女の顔も、かうしてゐると足の努力によつて張がゆるんで、どうやら近づき易くなるのでした。ハンドルのニッケルに映つた所では、かの女は緩んで、下品になつて、強壮さうにさへ見えるのでした。こんな折には、私はほつと一息つくのでした。かの女はペダルを踏むのをやめて、心よく私に押させてくれるのでした、私がかの女の平べつたい背中に手をあてて。

聖サンフォリオンが見える頃から後は、無益に使はれてゐる土地とてはありませんでした。土地と云ふ土地はすべて悉く、野菜に、居酒屋に、または戀に利用されてゐるのでした。私たちも自轉車を堤の斜面によせかけて、歩いて水ぎわへ下りて行きました。雲の動亂の間に太陽が沈んで行きました

このあたりの、たつぷりした然も使ひ途のない水の白布と、寂々しい色彩の空と、洞穴が所々にあいてゐる石灰の山と、それ等の景物が一緒になつて、トオレエヌも又時々昔とちがつた猛々しい風情に眺められるのでした。そしてまた暫時の間、デルフィンが私のものになるのです。私はかの女の膝に枕します、かの女のスカアトの羅紗の毛にくすぐられて頬のくすぐつたいのを耐えながら。私の首はふくれ上るのでした。かの女は、母のやうにして、然も用心深くそしてまた五月蠅さうにして、私のカラの間へ手をさしこんで、そして云ふのでした、「あなたは汗びつしよりよ。」と。私はかの女の熱い手に、接吻をしてかへしました、無邪氣にしかも深い思ひの限りをこめて。すると早くもデルフィンが機嫌をわるくして、「私はね、淫な人は大嫌よ、お分りになつて！」と云ふのでした。私はそれ以上に續けようとはしませんでした。こんな時、かの女が私の下劣な快樂を理由にして私を恥かしめることが、そしてまたそれを私が悲しむことが如何なにかの女を立腹させるかを知つてゐるので、それがおそろしかつたので。かの女はこんな場合に、最初に先づ起きて座から立ち上る為めに、途方もないエネルギイを持つてゐる女らしいのでした。私も仕方なしにかの女に従いて身を起すのでした。

て止めてくれました。最後に十二時の鐘の音を合圖に、ロンドンは白熱した一塊となるのでした、歡樂にかきまはされて。乘合自働車が廣告を着て、抽出の音を立てて走つてゐました。家並は私たちが着るワイシヤツの胸のやうに中折れがしてゐました。持ち運びの出來るやうに作られたオルガンが聖詩の水で人たちの魂の洗濯をしてゐました。サヴオヤ・ホテルの大ホオルの電氣の太陽はテイムス河に入つて消えて、闇のかげには怪しげな倶樂部の陰鬱な花が咲いて。ブンブン倶樂部だの蓮花倶樂部だの、ハワイ倶樂部だの、其所の前に立つと、騎兵の玄關番が、ばら色のカアテンをひいて見せる。するとその後に、一人のガリシヤ生れの猶太人か、黄いろい白粉を顏一面に塗りたてて、紅瑪瑙の釦のついた燕尾服を着て立つてゐて、はぎ取り式の帳から一枚はがして、地下室への入場券を渡して呉れるのです。

私は起き上つて、按摩をとらせて、さてその上でデルフインに逢ひに出かけました。

埃と金鍍金と紫煙と叫び聲との星雲のやうなライスタア・スクエアのすぐ近くにあつて、佛蘭西尼僧院と云ふのは、青ざめた色の煉瓦の三軒つづきの家でした。禮拜堂のアアチ形の門の上に佛蘭西語で DAMES DU BON ACCUEIL と書いてあるので、すぐにそれと氣がつきました。その隣りにある尼院の門には、格子のついた小窓が穿たれてゐて、その奧から、よごれた三角頭巾を被むつた受附の尼僧の充血した片目かのぞいてゐました。私は導かれてとある面會室に入りました。

* * *

或る日曜日の午後の二時頃、私はジヤアミン街のとある土耳古風呂で、惡夢に切りこまざかれた短い眠りのあとで、すつかり聲をからして、はれぼつたい眼つきをして、腰の痛いのを感じながら、目醒るのでした。その日私は、夜あけ方になつてから初めて床についたのでした、パツトネイ・モオレイク間の對校競漕が終つたあとで。今年はケムブリツヂのクルウが彼等の碧い櫂の先で二艇身の差を作つた上で決勝線を過ぎたほど勢がよかつたのでした。そしてこの思ひ出は今後一年の間オツクスフオドにとつては我慢のならぬ不快なこととして殘ることになつたのでした。夕方から、双方のクルウが一緒になつて、トロカデロの大宴會に出席して其所で液體の仲のいいマツチをしたものです。次で、三臺のタクシイの屋根の上に、鳴り響く喇叭の房のやうに分乘して、ミユウジツク・ホオルの音階を次第次第に下つたものです。最初は先づエムパイアア座、其所では向ひ合つた西と東の舞臺脇の棧敷が、對校仕合の應援歌を對句のやうにして歌ひ合つたのでした。その次にはオツクスフオド座へ行きました、其所にかかつてゐた佛蘭西人の一座が亂行を可能にしてくれました。次にはチエルシイ・パアレス座へ行つて二組に分れて喧嘩をしたものです、すると警官が來

見るとこれに、中産階級に屬する神さまの應接間なのです、淡い水のやうに見えるタイル張の土間の上に、所々に置き並べたレプス張りの椅子の前に敷かれたスパルト織りの敷もの の模樣の斷片が殘つてゐました。

デルフインが入つて來ました、喪服を着て、瓜核顏に白クレエプの平べつたい帽子を横 線 のやうにかむつて。私は五年目でかの女と逢つたのでした。私たちは頰をすりよせて抱き合ました。親身な心持で私は云ひました、「あなたの顏は以前より、ほんの少しぼかり柔かい許りだ」と。陶器の小鉢のやうにすべすべしたかの女の顏は、右と左に同じやうな曲線を描いてそがれるやうに細ぼそと終つてゐて、その表面に黑い液體のやうな平べつたい二つの眼を誘ひ出して。そして私の記憶は、何所とはなしにしまりがゆるんで、角の所に疲勞が見えて、よく揃つた齒をうれしげもなく被ふてゐる今のかの女の口を見て、それをかの女の口であると認めるのにいささか躊躇するのでした。小鼻が開いてややのびて、かの女の顏の中でのたつた一つの突起である透明であるかと思はれるやうな細く尖つたかの女の鼻すぢとは似合はぬものになつてゐました。かの女の目つきも同じく變つてゐました、むつつりしてゐて、昔のやうに、その雄辯な自信のある表情の美しさを殆んど示さなくなつてゐて。私たち二人の再會のよろこびは皆無でした。かの女が笑ひながら云ふのでした、『妾は尼さんになる心算ではないのです、ただ妾には暫く休養する必要がありますの、この尼寺を紹介して吳れた人があつたので來て見たのですが、丁度妾にはよい所です。』そしてなほつけ足して、『神さまは不幸の後では、妾たちに澤山な罪をおかけになる、妾たちを罰する爲めに。』

私はかの女の室へ行つて見ました。それはこのあたりの安下宿の室と同じ程度の簡素な室でした。壁には子供室用の青地に金の星を浮べた古い紙が貼つてありました。罅裂の入つた水がめの中に鈴蘭の花が漬けてありました。デルフインは晩禱式に行く爲めにきものを着換えるのでした、私はかの女と同伴することを承諾しました。

落し窓が、閉された重い空の重みを直接に支へてゐる電話線で縞になつてゐる圓い廣場の片隅を切り落します。アルハムブラ座の東洋風な圓屋頂と、料亭カブウルの人氣のない深閑とした樣子と、卓布の上のキアンチ酒の黑い汚點とが、彼等の南國風な不平のつぶやきで日曜日の空氣をわづかに陽氣にしてゐます。

往來へ出るとかの女は私の腕をとりました、さうするとやがて、私たち二人の間の昔の仲のよかつた友情の跡が現はれて來るのでした。かの女が云ふのでした、『妾はここへ來てよかつたと思ひますの、巴利人と云ふ人種は、手に確執のある不思議な子供たちですね、栗鼠スヰトピイが彼等を泣かせるのです。彼等は際のない南國人のやうにぺちやぺちや喋り、皆が自分たちの持つてゐる神經に惱まされてゐるのです、そしてまた彼等は何ことか感動を受けると各々それに對する抵抗力を失つてしまふのです。皆が、妾かトウルにゐた時の戀の緣

家庭教師だつたミス・メエブルに似てゐるのです、丁寧であると同時にまた茫然してゐて。かの女は春畫入りの懷中時計を持つてゐたのです、それがかの女の威嚴の種だつたのです。初めの頃、かの女は、妾の夫がかの女に戀してゐるのだと信じきつてゐたのでした。あなたは妾の夫はごぞんじなかつたのね？ 彼はミッシエル・ストロゴフに似てゐました、第一幕目の、まだあの美しい軍服と睫とを持つてゐた時分の、ミッシエル・ストロゴフに似てゐました、エルナニの中で見たテナアに。それだから、妾は彼と初めて往來で出逢つた時に、あとをふりかへつて見たのでした。その後數個月の間、彼は妾たちのあとをつけてゐました。彼は妾に宛てて、一度は紅い紙に、一度は紫いろの紙に、かはるがはるに手紙を書いてよこすのでした。妾はそれがうれしかつたのです。彼は妾に結婚を申込みました。妾は自分で判斷と躊らうと決心したのです。それなのに、いよいよ彼の前に出て見ると、妾はすつかり狼狽てしまつたのです。そして二週間後には、私たち二人は結婚してゐたのです。その後暫くして、彼がオデッサでどんな最期をとげたかはあなたも御承知の通りです。妾はまだ彼を忘れては居りません。彼はいい人でした。どの露西亞人もみんなさうであるやうに騷ぎ好きで氣まぐれで。妾が何か惡いことをすると、その度毎に、彼は泣いてピストルを持ち出して來ては、妾に謝罪まるのでした。彼となら妾はきつと幸福に暮せたでしようと思はれます。」

デルフインが私に説明してきかせるのでした、かの女の寡婦ぐらしがどんなであつたかを。無益なそして長い夜番をする人のやうに、かの女は最初に先づ、丹念に、かの女自身のうちに希望のきざしを見出さうと試みたのでした。その頃かの女は口ぐせのやうに、「妾を一人で置くことも、妾の相手になつて下さることも、二つとも妾の爲めには惡いことなのです。」と云つてゐたのでした。次いでかの女は巴里へ出て來て、そこでこの同じ不安な氣持ちで、色々な種類の人々と交際て、數週間の間、かの女の所謂生きる爲めの或は死なぬ爲めの方式をたづねて暮したのでした。然し其所にもかの女は單に短い期限付きの執行猶豫以外には何物をも見出すことは出來なかつたのでした。巴里に居る間、かの女の時間は、内に光を持たぬ、理智に推され、いとふ可き快樂に捕はれた人々の間に分たれるのでした。かの女は自分を幸福にする爲めに彼等の仲介を受けることを拒むのでした。

かうして話をしてゐるうちに、私はふたたび昔のかの女の勇氣を其所に見出すのでした、然しどうやらこの時、私にはかの女の抵抗力が弱つてゐることと、そしてまた、かの女の言葉の一つ一つの影には激しい心の中の動搖がかくされてゐることを察するのでした。この二三年の間、私は單に試驗の爲めに短期間の變化に佛蘭西へ歸るに過ぎぬので、私はあんまりよくは、私と同じ位な年ごろの女たちの心持のことは知らぬのです。かの女たちは皆かデルフインと同じやうなのでせうか？ 私より一代前の女たちは、私の目には熱誠の權化のやうに思はれるのでしたが。かの女たちのうちのある者は義務にその身を獻げ、

また義務よりも快樂を愛する種類の女たちにしても、それぞれに義務と同じ程に重い責務をわれとわが身に引受けたものなのです。さうしてかの女たちは生を愛したのでした、生がかの女たちにする抵抗力に對して反逆心を出すことなしに。それなのに、デルフインはそれとはあべこべに、自分の利己主義を一種不面目なことだと思つては居らぬのです、そしてかの女はそれを恰悧な教訓であり、貴重な尊敬すべき思想ではあるが、同時にまた、それはかの女を傷つけそこなうものであるとして扱つてゐるのでした。かの女はまた自分の心がひからびきつてゐることを私に告げるのでした、それはあの六年前のかの女の心の燥からび方とは同じものではないのです。然しまたあの當時からかの女の今日の心はすでにかの女のうちに用意されてゐたものなのでせう、かの女に對して今からして自由な位置にありながら、然も私が今のかの女を惡しざまに批判し得ぬところから察すれば。私は察知するのでした、生存の理由がつひに見つからぬので、かの女は今ではかへつて、われとわが身を亡すことに同意して、それを急いで居るのではないかと、そしてこのことが、かの女に一種はかないたよりないその身についた偉大さを與へるのではあるまいかと。

私たちはウエストミンスタア寺院の前へ來てゐました。ここは、植民地貿易會社の煉瓦の果物を並べた事務所の立ちならんだ街路を通りぬけて、ヴイクトリヤ停車場とテエムス河との間を連絡する烈しい行通運輸の中心からはやや遠いあたりにあるのです。私は其所に見るのでした、前世紀の終りの頃に、英國々敎の迷生の上にひろがつた舊敎に對する新らしい信仰の聖殿を。有名な宗門の二人の大僧正マンニングとヴォガンがこの趣味と信心との證を立てることを欲したのでした、そのおかげで人たちはこの近代風な建物の中でお祈をすることが出來ることになつたのでした。よし其所に、やや高いあたりに、貴重な大理石の腰張りの下の所と近代風なモザイックの腰張りとの間の所に、來る可き洪水の高さを示す黑ずんだ一線を見つけて、デルフインがそれを不安げに私の爲めに指示して見せたとは云ふものの、この莊嚴な飾りけのないすべて煉瓦で出來てゐる伽藍の中の暗さが人の心をよろこばせることは確でした。青さめてちらばり勝な太陽の光線の束に横ざまに照された聖殿の前に、一つの巨大なビイザンチン様式の十字架が聖殿へ入る人たちを阻んでゐました。香の煙と戸外の霧とが化合して出來たやうな薄闇が、穹窿がちな小さな窓のついた圓屋頂をぼんやりとぼかしてゐました。鐵の輪を澤山に重ねて、そこから下つてゐる鎖に無數のランプがつけてある東洋風の頭髮かざりのやうな大きな吊燈明が澤山に吊してあるにも不拘、この大寺院は、例へば羅馬の高架水道だとか、または停車場だとか云ふ大きなそして一般公衆の便益の爲めに造られたものだとしか思はれぬのでした。聖餐拜所では晩禱式の經文が上げられてゐました、パイプ・オルガンが音響の大建築をいとなんでゐました。銅の格子戸ごしに、沈思にうち沈れた信者たちが居並んでゐました。子守が二人、シテイの商人が一人自分のシル

クハットの前に跪いて、赤い服を着たチエルシイの廢兵が一人、タアバンを頭に卷きつけた印度の士官が一人、聖壇の前では三人の僧が動搖に餘念もありませんでした。デルフィンは顏を兩手に埋めて言葉もなく默してゐました。次でかの女は私をかへり見て、ぼんやりした目つきをして、私の腕をとつて云ふのでした。――『何故妾はこんなに惡い人なのでせう？　何故妾はかうもすべての惡いものを愛するのでせう？』と。

かう云つて、自分の思ひを私にうちあけて仕舞ふと、かの女はやがてまた微笑するのでした。――『あなたはまだほんの小さな子供なので妾は何にも説明して上げるわけには行かぬのです。』と。

かの女は私を誘つて、低い方にある禮拜所の前へ導くのでした、そこにも同じくまた、この寺院を造つた人たちの大袈裟と古風とをわざとさけようとする細心な藝術上の好みがうかがはれるのでした。私たち二人は聖パトリックの禮拜所の前を通りました、ここは愛蘭土風に大理石の腰張りがしてあつて、祭壇の後部には螺鈿のクロオバアがちりばめてありました。ニユミデイや、テッサリイや、諾威や、世界中の石が商人風な選擇さでこの寺院の敷瓦をなしてゐました。また或る海外銀行の寄納にかかる黑と白との二色で造られた一つの祭壇は、どことなく女優の浴室のやうな氣がして、特に南米人の信者のためにのみ其所にあるやうに思はれました。その下の石段のところに跪まづいて、肩合羽ともつかず修道服ともつかぬ形の、大きな襞のある粗布のマントオを着た女が居りました。私はのぞいて見ました、すると、頭巾の下に、厚化粧した小娘の顏が、ちぢれて灰白の頭髮に包まれてゐるのでした。大きな髑髏形のエメラルドをはめた人さし指が、珠數を爪ぐつてゐました。私はインカ時代の西班牙女のやうなこの不思議な參拜者のことをデルフィンに告げに行かうとしてゐると、丁度その時この女がふりかへつて、私の連れの女を見知つて、コントルアルトの聲で發音されて、あはただしい風で一ぱいな言葉で、かの女に挨拶をするのでした。

かうして私は、キユバ生れの英國人であり、デルフィンがいま世話になつてゐる尼院の施主であるペピタ・ウオオ・フオオドを初めて知つたのでした。かの女は私たちの方へ歩みよつて來て、デルフィンに接吻して、私たちに、聖母のことだの、小猿の飼育と夜あそびの御利益だのを説くのでした。デルフィンは、親しげにそして神經質に笑つてゐました。

私は別に注意してゐたわけでもなかつたのですが、然し私は、次のやうな不思議なエピソオドに心附かぬわけには行きませんでした。と云ふのは私が最初にウオオ・フオオド夫人を見た時から、かの女に對して深い敵意を感じた事です、それは、私たちの友人の生活の上に、何等かの影響を與へるやうに運命づけられてゐる人々に對して、私たちが感じる反感なぞとは似もつかぬ、もつと激しい感情でした。かの女は私に、氣がつくと忽ちにして私たちの身のまはりを取りかこんで

うつとうしい程に流行つてゐる偽善的な補物かなにかのやうな感じを與へるのでした。かの女の信心は私には一種別の事業であり、かの女が何所の國の言葉でなりと、人の惡る口でもまた人を詰める言葉でもを口にしてゐる時、私は何時かしらすれつからしの時鳥を思ひ出してゐるのでした。

私はデルフインにこんな交際によつて自分を損ふことの愚なことを說いてきかせようと思ふのでした。私は、この種の交際が初めは眞面目らしい信仰の道からかの女を導いて、やがてはおそろしい自暴自棄の世界へ連れて行きはせぬかとあやぶむのでした。然るに、次の瞬間に、ウオオ・フオオド夫人が再び祈禱を始めた時になつて、私は思ひかへすのでした、誰れにも決して不幸なことなぞが起り得るものではないのだと、そしてまた、ある事から超脱する爲めには、先づそれに心ゆくまで溺れひたるのが一番によい方法であると。それにまた、どんな危險でもその價格だけのことはあるものだと。私は自分の不機嫌をおし鎭めて、やかましいお說敎めいたことは一口も云はぬことにしました、デルフインの立腹ちを買ふことが怖かつたからです、そしで私はその同じ立腹がやがてかの女自身の上に向けられることをかの女の爲めに切に祈つてやまぬのでした。

* * *

私はまた大學に於ける自分の修業に專念してゐました。私はどの倶樂部の會員にもならず、またどのスポオツもせずにゐました。混ものをした三鞭酒と、干からびた葉卷とそれからそれ等の爲めに必要な費用とが、墨西哥の宮樣だの、濠洲の富豪の息子だの、獨逸の工業家だのが幅をきかせてゐる集團から私を遠ざけるのでした。私はまた同じくバビオルの作文上手とも、聖ジヨオンスのヤンキイ達とも、ウウスタアやワツダムの行く行くは僧職に身を置かうと云ふ獎學資金被給生たちとも交際せずに居りました。

私は時々デルフインから手紙を受け取りました。それ等の手紙には何れにも、快樂に對するかの女の激しい慾望があらはれて居りました。時々はさびしく時には陽氣に、それ等の手紙はロンドンから私の爲めに、一種不思議な風情の快味とでも云ふ可きものを運んで來るのでした。それは佛蘭西人に特有なそして放蕩の作法とでも云ふやうなものをつくり出す、向ふ見ずに振舞ひながらも然も十分に締めくくりがついてゐて目先の見えてゐるその氣持なのです。私はそれ等の手紙をボツドレイアン圖書館で勉强するひまひまに取り出して讀みかへすことを樂しみにしてゐたものです。ここは田舍の納屋のやうな建物で、六世紀以前の用材がヴアイオリンの胴のやうに、どんな小さなもの音でも必ず木たまがへしに響かせるのです、そして果物屋の店の棚のやうな木棚の上では、いい匂ひのする古文書が干からびてゐるのです。

ある日曜日の夕方、晩餐の爲めに自家を出ると、私はフレエザアに

出逢ひました。彼はオオル・サウルスの教授なのですが、自分が詩人であることを見せびらかす爲めに、時々土曜日の晩にチエルシイへ出かけるのです。彼は私を自分のカレッヂの食堂へ食事に連れて行きました、そして、二皿目からすでに黄色の青すぢを額に立ててゐる僕長が自分の前に切子硝子の壜に入れた葡萄酒を並べさせて、皆にポオト・ワインを注いで廻らせてゐるひまに、私はフレェザアから、昨夜ロンドンで彼がデルフインと知り合ひになつたことを教へられるのでした。

彼が云ふのでした、わざと大袈裟に、今ではもう大學関係の研究以外では通用しないやうな千八百八十年頃の氣取つた言葉を選んで、

『――かの女が入つて來たものだ、ハンマアスミスの場末にある下等な踊り場の一つへ。其所には一寸他には類のないジヤスがあるのだ、其所ではまた客は六片攤つて男でも女でも相手を雇ふのだ。かの女はおどけた猿のやうに、黒い縮布に身體を包んで現はれたのであつた、それが、自分の容貌の變化でもあるかのやうにして。アナクトリアのやうにワルスの一つ一つの波紋を誇らしい翼のやう身に負ふて、私の友人のW……神父と（彼は、滑稽なお説教をするので有名な一人のジエジユエツト僧の名を云ひました。）それから不思議極まる一人の西班牙人らしい子供のお婆さんみたいな女で、豹の皮に裂への見えそめたあらはな肉體を包んだ女と一緒になつて。

「かの女は私に君を知つてゐるかと尋ねたのだ、それで私たちは君のうはさをしたのだ。踊が終つてから、私たちは皆してかの女の家へ朝めしを食べに行つた。私たちは大いに騒いだ、ただかの女だけが一種悲痛な陽氣さで私たちのすることを見てゐたのだ、眼は火のやうに燃えて、口は灰のやうに冷たく。かの女の傷を負ふた、老成せた心が私には大いに氣に入つた。

" HEART BRUISED WITH LOSS AND EATEN THROUGH WITH SHAME "

私はかう云ふ句で始まる詩を作つたのだが何時か君に讀んできかせよう。」

⁂

かうして、僅々數週間の間に、デルフインは、お寺の跪坐から、騒々しい飲めよ歌への馬鹿騒ぎへと變つてゐたのでした。然しそれについて、私は少しもいらいらした心持ちはおこしてはゐませんでした。それに、よし私がかの女の行動を何と思つた所で、自分の考へをあくまでも押しとほしてかの女と爭ふことも出來ぬ地位に私はあつたのでした。その頃私はまだロンドンにあつては或る種のことがらが如何に遂に成し遂げられるかを知らなかつたのでした、何時になつても巴里にはそんなことはないだらうと思はれるのですが、この市にはあまりに多くの人々がごつちやに集つて生活してゐるので、お互に[illegible]

態と好奇心をおそれる心とによつて仲間仲間に分離して生活する結果になるのです。ロンドンは人目を忍ぶ隠家です、そしてその居心地のよさを一度味つた人には仲々にあきらめがたい所なのです。往來はかりか群衆と、叫び聲と、廣告と、スノビズムと、商賣やスポオツの手柄話で滿ちて居るけれど、それ等は私たちの心の中にある情事の沙汰までは蠶食しては來ないのです、そしてこの市にゐる間は他のどの市にゐる時よりも、快樂が消え易くはかないものだと云ふ感じが薄らぐのです。かう云ふ風に、私はデルフインがさきの失戀から今ではいよいよ激しくなつて行くらしい歡樂に對する欲求へと移つて行つた心持を自分に説明してきかせるのでした。私は幾度か繰り返へして、『この私の幼な友だちの身の上に何事がおこるのでせう？』と自問自答したものです、とは云ふもののかの女の爲めに緣故と云ふやうな外部的な人爲的な關係は作ることも出來ずに。『――何故私はこんなに惡い人なのでせう！』私はまたしてもデルフインのあの言葉に就いて考へて見たものです。それは私にはどうしても、自分は責任のないそこに置かれた賭金にさへすぎないのだが、そして自分ではその訴訟の理由は果して何であるかをも知らずにゐる、だが、只その結果にだけ苦しんでゐる人の痛ましい告白だとしか思はれぬのでした。かの女の子供らしい横暴さ、かの女がその周圍に與へる教訓、かの女がすべての容易いもの及びやがて快樂になり得ることに對する嫌惡の情、それ等はすべて、かの女が持つてゐる自分自身を怖れる心に原因すると云つて說明さる可きでせうか？

或る時のかの女の手紙にはかう書いてあるのでした。

『――私はどうやら具合がわるいのです、と云ふのは、面白いことにまぎれて居らぬと、すぐに氣が狂ふかと思はれる程かなしくなつて來るのです。私は自分の精力を無闇に濫費してゐるのです、それで私は思ふのです、こんな調子では近いうちに私のお葬式への招待狀を書く事を考へなければならぬだらうと。然しそれにしても、誰れに「左樣なら」を云つたらよいのでせう？ 陰鬱な夏の霧、それからお爺の庭のやうに熟しきつた市、それから私の身の恥しさ、それから多分さうだらうと思はれる私の行動に對するあなたの不贊成、それ等は果してスプリインと呼ぶ可きでせうか、それともまだアベ・プレヴオの所謂、「厭世性の氣病」と云ふのでせうか？ 太陽が私には煤硝子をとほして眺める時のやうに見えて、食べるものにはみんな石炭酸の匂ひがして、私にはもう眠ることは出來ぬのです、そして私は夜の公園か、またはコンマアシアル・ロオドの小さな茶屋で賣つてゐる、うんと阿片の混つたコカインを飲むかして、暫時の快よいすがすがしさを感ずるだけなのです……』

＊
＊＊＊

六月が來てゐました。白いフランネルを着た大學生たちは、しきりに、誇つた太陽と、くずれた青葉と、多きに過ぐる水とから成る贋造の夏をむさぼつてゐました。角帽の博士達が河の岸を、樂隊を乘せた舟のあとに從いて過ぎました。附近から遠足に來た家族づれの遊山客は、四輪の大馬車に打ちのつて、お互にその屋根の上の座席からお菓子のやりとりをしてゐました。商店の小僧さんたちは、去年の賣れ殘りの服をきて、つとめて彼等の櫂で飛沫を立てぬやうにして、お互に短艇を打ち合せぬやうにして、お行儀のよい所を見せ、互に「ミスタア」と呼び合つてゐるのでした。

かうして彼等の子供たちが面白さうに樂しんでゐるのを見て、戰爭成金たちが、自ら過した彼等の少年時代に對する復讐をするために、兩方のヘッド・ライトにそれぞれ一つづつの下男の顏を入れた、總ニッケルの自動車の中にふんぞりかへつて北の方から下りて來るのでした。食べ飽きた田舍から吐き出されて、名優ベンソンが彼の沙翁劇の一座と、水のやうにくたくたに疲れた背景と、穴だらけで蟲喰のやうに顫へる城壁とをひきゐてやつて來ました、さうして私たちは豫約切符で僅一週間のうちに三十五幕も見せられたものです。街道の兩側は、ピクニックと、燕子花と、パンクした自働車自轉車とを着かざりました。田園は寂しく一面の紫いろになり、その中を山高帽を被つてモオニングを着た百姓たちが行き來しました。年經て空洞になつて、石灰を蟲除けに塗つたので白くなつてゐる林檎の木が、どれもこれも同じやうに、雲と舟の重さとアルコホル・ランプの匂ひとを敷布に敷きつめた水の上にうなだれてゐるのでした。岸邊の樹の間には蓄音機が嚔をして、彼等が自分たちが喝采をはくする爲めに、自然から拜借した詞を、またもとへ返してゐるのでした。かうして夏の終りまで、盛んな水の上のお祭騷ぎがつづくのでした、丁度競馬場の決勝點のやうにして、來る可き學年の終りの近づいた學生たちに、叫びや、からからの響や、爆竹や、ラッグ・タイムやラムネと賣出しのお茶の甘つたるい匂ひやで元氣をつけてやるのでした。

メソポタミアに、ある晩、夜のお祭がありました。各カレッヂから出た屋方船か、水の上に半分は搖れ動く光のかたまりを成して浮んでゐました。三鞭酒のコルクが河にとびこみ、炸火が高架水道のやうに空に結ぼれ、花火がクリイム色のナプキンをひろげると、水がゆれてそれに縞模樣を織るのでした。たつた一人で、私は自分の乘つた小舟と、夜露にぬれたクッションとを關門の方へ押して居りました。探照燈のあるものは、なまぬるい闇に向つて或る角度に光を投げて、黑い鳥がよだれを流してゐるイズリングトン寺院と紋章の舟の舳とを一緒に照し出すのでした。舟の一つが、忽ちにして開かれた戸口から滑りこんだやうにして、探照燈の光の道に入つて來ました。私はその明るい道すぢのすぐそばの闇の中に居りました、そして私はそこに、白衣をまとふて、光の流を眞面に受けて、煙草をのんでゐるデルフィンを認めたのでした。かの女は酩酊してゐて、正氣ない樣子でした。

ッ

オオ・フオオド夫人もこの同じ舟の底の方に居りました。其所からかの女の半白のちぢれ毛がのぞいてゐたので、私にそれと知ることが出來たのでした。舳の所には、兩足を水の上に投げ出して、バンジヨオを彈きながら、氣取つた怪しげな樣子の男が一人居りました。どうやら私にはこの男が伊太利種のヤンキイであるやうに思はれるのでした。彼はそのゴリラのやうな顋の間に灯の入つた提灯を啣へてゐました。そしてその明りが、下から、チヤプリン式の口ひげと黒い二つの眼の腔とを照し出してゐるのでした。またしても忽にして、夜か彼等を呑んで仕舞ひました。私はデルフインが舷を越えて、吸ひさしの煙草を投げ捨てるのを見ました。煙草は水に落ちて音を立てて消えました。

私は今自分がまのあたり見た事が自分の恥にでもなるかのやうに、狼狽と苦痛とを感じるのでした。それは墮落して、あの變態的な人たちのとりこになつて、すでに私が多分さうであらうと察してゐたそのままの新しい人物をデルフインの内に見たが爲めではなく、かへつて私が自分の家のやうに思つてゐるこのあたりへかの女がその姿を隱見させたことに起因してゐるのでした。その後まもなく受け取つた手紙には、かの女がロンドンから不在であつたことは一言も書いてはありませんでした。私の友情はこの事實の中に最初に先づかの女の僞りを見るのでしたが、やがてまた、ともすれば今ではかの女は一人で暮してゐるのではないのでそれでありのままを私に告げることも自由ではないのかも知れぬと思つて、あはて出すのでした。昔あのやうに完全であつた一人の女が、今ではかうしてなげやりな生活をして、アヴアンテユウルからアヴアンテユウルへと移つて行くあの一人暮しの女たちの痛ましい群に、それとはつきりとは分らぬながらも然もまた避け難い天命によつて、美しい女たちにとつては助であるかの女たちが自分を愛するの心と、他の美しくない女たちの爲めにはその滿足となる自然的な愛著から同時に遠ざかりつつある女たちの群に、その身を投じやうとしてゐるのを見て私はさびしい思ひをせずには居られませんでした。

＊＊＊

それからひと月ほどたつて、學年の終りになつて、フレエザアから番地を教へられたエプリイ・ストリイトの部屋へ私を行かせたのは、この事件が私に與へた不快さそのものであるか、または私の不機嫌にも不拘、急に私がデルフインに對して興味を感じ出したが爲めであるか、その何れかであつたのでした。この部屋へ行く道は、今では仕事もなささうな露地を通りぬけてゐました。其所では立派な芝生の下に死もその形を變化させることが出來ないアングロ・サクソンの大きな感情が、身じろきもせずに、その生活をつづけてゐるのでした。

東側に

の外で洗ひ清められた自働車が、たださへも、そこらにある窓掛や、眞鍮や、赤い戸口や、パノラマ館や、鏡屋や、色紙製造所やの爲めに陽氣に見える街に、一種のすがすがしい氣分を滿してゐました。貸家紹介所の見世窓には、太陽にやけて色の褪せた寫眞がバンガロオだの毛深い樹木だの、白い芝生だの、田舍風な見世物を見せてゐました。

戸口の後にはしきりにもの音がしてゐながらも、私は長いことノツクしなければなりませんでした。やがて暫くしてデルフインの聲がきこえて來ました。次でまたしても多數の鍵と鎖とがかちやかちや音を立てた上で、戸口が一つの青ざめてはれ上つたやうな顏の大に開きました。見るとその顏にあつては鼻が鋭く目立つて、眼瞼は目の爲めにはあまりに短かすぎるやうな樣子なのです。私はあんまり吃驚したので、かの女が八十歳の老媼のやうに嚴重に鍵をかけた家の中で暮してゐることに對して笑談を云はうとしたのでしたが、それはどうしても唇からそとへは出ませんでした。

かの女は驚いた樣子もなく私を見つめながら云ふのでした、

『——おや、あなたでしたの。』と。受身な樣子でかの女は私を導き入れるのでした。

何よりも先づ、かの女の目つきが變つてゐました。じつとものに見入つたまま、怯えたやうな遲鈍な表情で、かの女の目なざしは、私の目なざしと合ふことを避けて、どうやらそれも果物のやうに腐敗つてゐるだらうと察せられるかの女の心臟の中心へそれを導かうとして、その時だけ私の目なざしに應せられて、またたいて、動きあるものとなるのでした。デルフインの後からついて、私は出窓の中へ入りました。其所へ行つて見ると蒼白な日光か、脂ぎつた、色を拔いてトマトのやうな桃色にした頭髮を持つた、猫背の、ショオルにくるまつて、だらしなく靴下をずりさげて、スリツパアをつつかけた一人の女を素裸にして見せるのでした。まくり上げたかの女の袖は桃色と青と黒との斑點の出來た腕を見せてゐました。かの女が私のなじりの言葉の機先を制して云ふのでした。——『妾はひどく病氣だつたのでした。腫物を出來したり、また先週は二十四時間も盲目になつたりしてゐたのでした。昔が妾を苦しめやうとしてゐるのです……』

デルフインはかう云つて、鏡の中の自分を眺めて、頰を引張つたり、額をこすつたりいたしました。

『——妾は四日目の血色のやうな顏をしてゐます。』

『——昔、あなたは何時も犧牲になることを承知なさらなかつたものでしたのに。』

『——昔のことは妾は何にも思ひ出せぬのです、不思議なことには、暫く前から妾は全然記憶を失つてしまつたのです。』

かの女の言葉はふらふらした。かの女は私の目の中に私がかの女の氣が變なことに氣のついてゐることを見破つた。じつと考へて、かの女は言葉を選ぶために努力した。そして云ひ出すのでした、

『——ある階級の中にあると云ふことは、實際不思議なことですね

何うしてそれが始るかは誰れにも氣がつかぬのです、然しまた、後になつて見ると、あらかじめ用意されてゐた神秘な力によつてそれがなされたやうな氣がするのです。一度どこかへ連れて行かれて、その翌日もまた其所へ行つたとします、するとただそれだけですでに魔法の輪が閉ざされてしまつたのです。かうして私たちは昨日までは見も知らなかつた、そうしてまた自分からは必ず選ばなかつたであらうと思はれるやうな人々と親密にして暮すのです。これが面白い盛りの時代です。この時代にあつては、友情と、皆の機嫌のよさと、生命の火花の交換とがその集團を一個有益な人格に作り上げるのです、そしてその爲めに、何の彼のと云ふ口實の下に各自はだんだんに集團以外のものを疎んずることになるのです。次いで罅隙が生じてくるのです。不良な分子が牛耳をとるやうになつて來るのです。人たちはお互にやさしさ以外にも嫉忌や怨恨によつてまでも縛られて來るのです。遂に人は、全く身を退いて仕舞はぬまでも、少なくも、他の人たちと自分との間に多少のけじめを置かうと欲するのです。然しその時はすでにもう遲いのです。絕對でありまた暗默である一つの交際がそこにはすでに生れてゐるのです。人は一人で鬪つたり、旅行したりして見ようと思ふのですが、然しどうしても出發することは出來ぬのです。働いたり、遊んだりしやうと思ふのですが、然しそこには例の集團がゐて見張番をしてゐるのです。命令や偶然の形で集團はあなたを見つけたり、あなたをあなたの家で待ちうけたりして、またあなたを捕へてしまふのです。かうして、最後には集團以外のものはすべて受け入る可からざるもののやうに、また及びもつかぬもののやうに思はれる事になるのです。そして仲間同志の間では、お互に不思議な用語から出來てゐる言葉で話すやうになるのです。すべてこれ等のことも、若しも私たちが何時までも良心の苛責を受けずに、決して自らをかへり見ることなしに、死の斷崖の前に立つ時まで、續けることさへ出來るのであつたら何でもないのですけれど。』

『――だれがあなたをそこまで連れて行つたのですか?』

『――何所に於いても何時も、それがさうであるやうに、妾も正直な人たちとそれから非常に惡るい人たちとに交際つたのでした、前者が後者に勝手にされて。それに、この市にあつては實際不思議なのです……これが巴里ですと、何事にも際限があるのですけれど。ロンドンでは、人は全く目標を持たぬのです。』

私がかの女に近よりながら云ふのでした、

『――でも、あなたを助ける爲めに私がここにゐるではありませんか?』と。

喋る爲めと考へる爲めにした努力によつて、すつかり疲れてしまつて、今ではかの女はもう私の云ふことは聞かずに居るのでした。

『――私と一緒においでなさい、デルフイン、私にはあなたをこんなにして置くことはどうしても出來ぬのです。明日、私は巴里へかへる心算です。あなたの爲めの切符もついでに買つて置きませうか?』

『―多分妾にはそれは出來かねるだらうと思ひますの。』
『―自分で必ずさうなさらうとお思ひになつたらいゝではありませんか？』
『―ところが妾にはもう、ものを希望することが出來なくなつてしまつたのです。』
かの女は嚔をしました、粘膜がはれて、眼瞼が赤くなつて。
『―ほうつて置いて下さい。妾にはあなたの悲哀も叱責も全く不用なのですから。妾はそれ許りは誰れにも許さぬ心算なのです。それにまたあなたが妾におつしやることは、皆利己主義と意地惡るさとで汚れてゐるのです。それよりは、妾を靜かに休ませて置いて頂く方がずつと妾の爲めになるのです。毎日、同じ時刻に、妾には熱が出るのです。そこにある藥罎をそんなにじろじろと御覽になることはお止し下さい、それが何であらうと、あなたには係りのないことです。あなたは探偵をなさる爲めにここへおいでになつたのですか？　かへりがけに召使に訊ねて見るお心算でしたらそれはお相憎さまです、と云ふのは召使は一人として妾の所には居附かなかつたのですから……』
かの女がきき耳を立てながら云ふのでした。
『―あのものを觸る音があなたにも聞えますか？　二十日鼠なのです、家中に一ぱいゐるのです。』
かの女は私がそれを信じない樣子を見てとつて、云ふのでした、
『―あなたも、妾を病人だとおつしやるのでせう？　きつとさうですわ。分つてゐますわ。あなたは今では、妾が自分を欺して居り、頭髮を染めて居り、爪をきたなくして居り、人のわるげな樣子をしてゐる等、等、等と妾をけなすことに快感を見出しになるのですか？　妾が今してゐることが、墮落であることは自分でもよく知つて居ります。あなたは何もそれに就いては口出しはなさらなかつたけれども、然しよくその過程を見て知つておいででした。ですから今後も一切やはり干渉はなさらぬやうにお願ひいたしますわ。昔、あなたは態度で妾を貪婪の方へと誘惑なさつたでせう？　處で今日、妾は一つの不品行の方式に從つて生活してゐるのです。そしてそれが妾には至極心地よいのです。あなたのお上品ぶつた樣子が妾には癪にさはるのです。どうぞもうおかへり下さい。』
『―デルフイン、氣を落つけて下さい。私はそんなわからずやではありません。二人して一緒に適當な解決法を見つけやうではありませんか。』
かの女はこの時、氣力が全く衰へて來て、私の手に額をおしあてて、激しく苦しみ出すのでした。かの女の身體の節々はぽきぽきと音を立てて、兩手の爪は苦しげに握りしめられて。
倒れさうにしてゐるかの女から離れて、私は立ち上りました、そしてかの女の力になり云ひ譯の理由になりさうなものをあれかこれかとたづねるのでした。するとその時かの女が云ふのでした、
『―妾の身の上に起ることは、どれも皆妾の矜持の爲めなのです

わ。』と。

實は私はこの痛ましい言葉をきくのを今か今かと待ちかまへて居つたのでした。どの女も常にその唇の上にこの言葉を用意して居つて、それによつてかの女たちは、自分たちの卑下の心もちを云ひあらはすものなのですから。

＊＊＊

デルフインは、私とリイチヤンツ・パアクで落ち合ふ約束でした。一時間後には佛蘭西行きの汽車が出るので、私はあらかじめ荷物はチツキに出して來たのでした。私の周圍には、五年の間の新兵さんたちの教練にすつかり踏みにじられた公園の芝生が、またふたたび以前のやうに茂りかけて居るのでした。平時の制服を着た一人の兵隊さんが通りぬける、花らつきようの壜の中のとうからしのやうに目立つて、目には見えない栗鼠が木から落した胡桃が、枝から枝をつたはつて落ちて來て、地べたの上へ來てわれる。

昨日の私のエブリイ・ストリイスの訪問か、私を感動させたとは申上げかねるのです。それはむしろ私を侮辱したと云ふ可きだらうと思つてゐるのですから。デルフインは惱んで居るのでした、かの女は不滿であり、自分の不幸に縛りつけられて、張合のない下品さの犧牲となつて。それからかの女は新聞の續きもの小說のやうな安つぽいことを云つたのでした、そして最後にかの女が氣絶したので、すべていぢがさけてしまつたのでした。然るに、私がそこを出て、一人になつて見ると、かの女の、昔の、その力強い落ちつきのある姿がまたしても私の心の中に浮び出して來るのでした、そしてその上に、透寫をしたやうに、なほ時とすると今の不秩序なかの女の姿があらはれて動くのでした。それが私には心に痛いのでした。別にデルフインの幸福がさほどまでに私にとつて大切だと云ふ爲めではなく、ただ、今まで快樂も不幸もどうしても不純にすることの出來なかつたかの女の氣質がかうして今ちりぢりにくだかれて行くのを見ることが、私にはつらかつたのでした。私はかの女が改悛の出來るやうな女ではないことは知つてゐました。然しまた私はかの女は他からの感染をも恐くはねつける女だと信じてゐたのでした。かの女の身に滿ちた氣質がしばしば私には厄介なものに思はれることのあつたのも確です、然しまた、現在のやうにかの女の全人格が粗々しく無益な運命のかきみだすがままになつたのを見ることもそれ以上に苦しいことでした。

から思ふと私はやさしさに滿ちた深い感動を受けるのでした、そしてただもう一圖にかの女の爲めに最善をつくしてやる氣になるのでした。一晩ちゆう、私は不安に燃えながら、激しくかの女を救つてやる手段を考へつづけるのでした。心がやさしさに滿ちあふれて、私は夜中にはね起きて行つて、かの女を呼び起さうかと幾度か思つた程でし

た。……。

時間が立ちます、それなのにデルフインはやつて來ないのです。ロンドンは彼に身を捧げた者を再びかへしては與れぬのです。曖昧のゆるんだ綱のやうに彼はすべてを受け、すべてを保存するのです。其所に立ち並ぶ無數の家屋の中には、かの女のやうに、別にこれと云ふ悪みや悦びがあつて引きとめると云ふではなしに、なほ且つここを去りかねてゐる多くの人たちが住んでゐるのです。規則正しい潮のやうな波止場でそれを憫むことはしないけれども、然もロンドンは世界のありとあらゆる荷物を積んで來た船から受取つて皆一緒にして、彼の海につらなる鋪道の中へ嚥みこんでしまふのです。

かの女は多分來ないでせう。近くにある動物園では、獅子の咆哮が鐵筋コンクリイトの洞窟をわななかせてゐます。鸚鵡が鋭い叫び聲で夕霧を縫つてます。私は一人で殘るのです、落捨で一ぱいな心を抱いて。

ヰンネケ彗星の話

山本一清

A　友人
B　觀測者

A　ヤア暫らく、

B　ヤア、どうだね此の頃は？

A　君は此の間ちう滿洲へ行つて來たといふことぢや無いか？

B　ウム、例の彗星を見にサ。珍らしい奴がやつて來て、「今が一番肝腎な時節だ」といふ時が、日本內地の梅雨の季節に當るんだから、やり切れないぢや無いか！　それで少しく工面して滿洲まで行つたのだ。

A　滿洲は梅雨が無いのかい？

B　いや、「梅雨」とは言はないけれど、矢張り一種の雨期が滿洲にはあるのだ。昨年も僕があちらへ出掛けた時、そんな事を聞いたことはあるが、滿洲の雨期はいつも七月に入つてからなので、此れは吾々の彗星のためには差支へが無いのだ。彗星の一番の見頃は六月の末だし、七月には彗星がもはや南へ行つて了つて、たとひ空は晴れてゐても日本あたりからは見えないのだから。

「とにかく滿洲へ出掛けなくては」と言つて、とう〳〵行つたわけサ。

しかし、今年は、滿洲もやはり內地以來不順の天候續きでね、およそ半月ほど滯在した間にも、豫想外の降りにずいぶん惱まされたヨ。

A　全體としての成績は如何だつたい？

B　全體としては、しかしマア惡くは無かつたと言つて好からう。今も言ふ通り、可なり降られはしたけれど、一體、滿洲の降り方は內地の降り方と違つてね、一日二十四時間ちう降り續け降り續けといふのは殆んど無く、どんなに空模樣が惡くても、時々は其れが晴れて、心棒強く待ちさへすれば、一日に必ず一回くらゐは星の見えることがあるのだ。だから、天文のためには誠に性質の好い天氣なのだ。——こんどだつて、六月二十八日の午前一時半から二時半までの間だけ晴れたきり、其の前も後もずつかり降りといつたやうな夜もあつたけれど、此の僅か一時間の晴れ間がうまく觀測に利用出來たから、プログラムの上からは何も不滿足は無かつた。こんなわけで、滯在中、全然雲のために仕事が妨げられたのは二た晩だけだつたよ。

A　おもに何んな觀測をしたんだい。

B　いろんな事をやつたが、最も主なのは彗星の寫眞を撮ることだつた。尤も一番初めあちらへ行つた當時は餘り大した器械も持つてゐなかつたんだ。何故と言ふと、第一、天氣は好いにしても、觀測の器械が甚だしく不滿足なんだ。君にあへて愚痴を言ふのぢや無いが、そも〳〵此度の旅行といふのが、大學からはホンの一人の旅費だけを補助されたに過ぎず、京都には可なりな器械類を有つてゐながら、其れを滿洲に持ち込むだけの費用と人員とが與へられないのだ。だから、賴む所は只あちらの西岡君の保管してゐる百十ミリの赤道儀と、も一つ、西岡君私有の百六十ミリの反射鏡だけだつたのだ。それで僕の手荷物の中にはセキスタントと、クロノメーターと、それから極く小さなカメラを一つ持つて行つたに過ぎない。實際、新聞などが書き立てた割合に僕の荷物が貧弱なので、安東驛の税關吏なども少々驚ろいてゐたよ。

A　セキスタントを持ちあるくとは、舊式ぢやないか！

B　全くだ。しかし君、考へて見給へ、こんどの觀測は經緯度の觀測などと違つて、タイムは秒の桁まで知れゝば澤山なのだから、セキスタンドで充分なのだ。二十世紀の今日だから、タイム觀測には無線受信機でも持つて行く方が氣がきいてゐるのだが、しかし君、今日のラヂオの器械は未だ〳〵セキスタントほど輕便で無いのだから、皮肉ぢや無いか！！

A　なるほど

B　君も、こんどの彗星は見ただらう？

A　ウム、見た。と言ふのも、實は、たしか二十七日の晩だつたか、其の晩が彗星が地球に一番近いといふ評判だつたし、うちの子供が、何處からか彗星の位置を教はつて來たものだから、子供に教へられて、とにかく見たよ。可なり夜が更けて、もう夜中ごろだつたろう、南東の方角にボンヤリした光りで、尾の無い、言はゞ星雲みたいな形に見えたが、しかし形はずゐぶん大きかつたね。

B　さう、其の通りだ。世間には、彗星と言へば皆ハレー彗星みたいに尾のあるものだと思つてゐる連中が多いものだから、「ナンだ、あんなものか！」なんて、失望したものもあつたものだが、しかし、實際の彗星は大多數が此度のヰンネケのやうに尾の無いものなのだから、つまりあれで一般民衆に實物教育をしたやうなものサ。

A　しかし、東京大朝報に據ると、君は尾を見付けたといふぢやないか？

B　いや、尾も見たし、尙ほ其の外にも、こんどは豫想外れの事が多かつたヨ！

A　豫想外れといふと？

B　先づ第一、こんどの彗星の光りが大きかつたことだ。こんどのヰンネケは既に百年も前から、幾度も〳〵見られてはゐるのであるし、軌道關係も可なりよく分つてゐるのだから、六月の末頃、彗星と地球との距離がどれ位まで達するかといつたやうな事はよほど好く知れてゐたんだが、さて、光りが如何ほど大きいものになるかといふことについては、學者の間に說がまち〳〵で、一定しなかつた。「肉眼にも確かに見えるやうになる」たどと威勢の好い事を言つ

て、世間の大衆を喜ばせたい心は有つても、今まで度々景氣の好い豫想を發表して可なり手ひどくそれが外れた例が、昨年の初めのエンツア彗星の場合などにもあつたのだから、こんどは學者が一般にひかへ目の氣味もあつて、せい〲「キンネケは今年漸く肉眼光度に達するかも知れない」なんて言つたものだ。ちようど二三日前に到着した Observatory の六月號にもデニングが「肉眼に見えるやうには成るまい」などと書いてゐる。僕等は初め多少の不安があつた。――ところが、僕が奉天に着いて三日目の十七日に、月の無い空を見上げると、双眼鏡だけで無しに、立派に肉眼にも見えてゐるぢやないか！　これには驚いたよ、僕も。それに、尙ほ驚いたことは、此の十七日の三十分間曝寫の寫眞には五等級ぐらゐ、又其の翌日十八日の一時間曝寫のものには確かに四等級の光りとなつて現はれて居るぢや無いか！

A　一日のうちに一等級も大きくなつたのか？

B　さうぢや無い。イヤ一體之れが彗星の不思議な點の一つなのだ。肉眼で觀測すると、彗星といふやつは、大きな望遠鏡よりむしろ小さな望遠鏡で見た方が大きい光りに見えるし、肉眼でぢかに見ると一層大きな光に見えるのだ。寫眞でも亦、同じ彗星を同じ日に撮影したものでも、長時間をかけて撮つた寫眞は短時間の寫眞よりも彗星の光りが強く現はれるものなのだ。

A　どうしてさうなる？

B　之れは少し話が込み入るが、とにかく、彗星は中心核を包んで非常に厚いガス層が取り卷いてゐるため、彗星の光りとして中心核の光りのみを見るか、又はガス層の光りをも一所に見るかによつて、各々の感じる印象はよほど違つて來る。

A　わからないナア

B　いや、實際、彗星ほど厄介な星は無いのだ。彗星について、理窟の一般に好くわかつてゐるのは其の軌道運動だけ位なもので、例へば彗星のあの光り――なぜ彗星があゝした光りを放つかといふ事、それから彗星の成分や構造なども、可なりわからない點が多いのだ。

A　彗星は太陽の光を反射してゐるのぢや無いのかい？

B　昔しは左樣考へたものサ。――昔しと言つてもつい最近十數年前までは。ところが、多くの遊星などと違つて、彗星の光りが太陽からの距離の二乘に逆比例しないことが近頃判明して來たんだから厄介だ。多分、彗星といふ奴は太陽の光りや熱にエキサイトされて自發の光を多量に放つてゐるのらしい。

A　皆の彗星が其うかい？

B　マア、さうだ。

A　何新聞かの奉天電報に「ホンネケが爆發してゐる」など言ふのがあつたぜ?!

B　つまりエキサイトメントの譯語なんだ。

A　なるほど。………キンネケの尾は如何だい？

B　キンネケの彗星は今迄に十何回も現はれた歷史付きのものなのだが、いつも、尾の無い、頭だけのものと認められてゐたのだ。ところが此度は明らかに尾が見えたのだ。僕は之れを六月十八日の寫眞を見て其れらしいものを認めたのが最初であつたが、其の後は益々

其れが明瞭になつて來た。勿論、尾を認めたのは僕ばかりでは無い。京都のＵ氏が撮つた六月二十八日の寫眞などには實に見事な尾の形が現はれてゐる。

A　しかし肉眼には、やつぱり見えなかつたやうだね。

B　さうだ。二十六七日の夜などには彗星が多少楕圓の形に肉眼でも見えたが、しかし「尾」といふ風にははつきり見えなかつたね。

A　君の見た尾はどれ位の長さがあつたかい？

B　ほゞ二度くらゐだと思ふがね。しかし、尾は毎日少しづゝ變化があつた。たしか七月一日朝に撮つた寫眞には一度くらゐの尾が三本あつて、扇のやうに擴がつて見えたよ！

A　フム、面白いナア……尾といふのは一體何だね？

B　やつぱりガスなのだ。

A　どんなガスだい？

B　可なり複雜なものらしいが、大部分はアセチレン・ガスだ。

A　なに、アセチレンとは、あの白い光りで燃えるやつか？

B　さうだ。

A　こいつは又奇拔だナア！　彗星の尾はアセチレンか！

B　尾だけぢや無い。彗星を包む大きなガス球。――コーマと言ふんだが、あれもやはりアセチレンが主な成分らしい。

A　ぢや、彗星の光はアセチレンの燃える光りかね？

B　いや、さうぢやない。

A　ぢや何だね？　今、アセチレンと言つたぢや無いかい。

B　マア早まるなヨ。アセチレン・ガスが燃えるのなら、燃える相手の酸素ガスが必要ぢやないか。

A　ぢや、彗星には酸素が無いのかい？

B　無いのぢや無いが、とにかくアセチレンは酸化して輝やいて居るのでは無いらしい。

A　それぢや、あの光は何なのだらう？

B　其れがわからないんだテ

A　ハヽヽ、アセチレンだの、何だのと、可なり立ち入つた事を言ふかと思ふと、かんじんの所で「わからない」などと突つ放すんだね。

B　だつて、止むを得ない。知れてゐる所までは言ふが、知らない事は「知らない」と御答へするより仕方が無い。

A　君は大きな流星を見たといふぢやないか？

B　いや流星については、いろ／＼話すことがあるよ。一體今度の彗星については、僕は彗星其のものよりも流星の方がはるかに大問題なのだ。すべて、彗星には流星の團體がくつゝいて同じ軌道を動いてゐるものなのだが、しかし流星は皆我が地球に非常に近づいて來ないと光りを放たないのだから、いつでも見えるといふわけのものでは無い。ところが、キンネケ彗星の軌道は近年地球と大變に近いのだから、其の後ろを追かけてゐる流星群が見えて好い筈なのだ。此のキンネケ彗星の流星群を始めて見付けたのは英國の流星王といはれるデニング氏で、それは一九一六年であつた。其の年の六月の末に同氏等が今まで見馴れない不思議な特徵の流星を可なり多く發見して、之れが其の前年（一九一五年）地球に近づいたキンネケ彗星

の附屬物だと思つた。それから、次ぎに再びキンネケが地球に近づいて來た一九二一年の六月にも此の種の流星が飛ぶ筈だと豫想した所から、デニング氏は其の年の始めに或る雜誌へ簡單な文を寄せて世界中の流星觀測家の注意を促がしたことがあつた。其の年、日本でも京都や東京の人々がやはり此の流星を見る準備をしたことがあるんだ。ところが、六月の末は日本内地で每年梅雨の時なので、之れに妨げられては大變と思つて東京の人々は北海道へ出かけて行つたし、京都の方では、別に遠方へは行かなかつたけれど、每日の天氣模樣を見て、京都附近のあちらこちらと、汽車に乘りまはして晴天を追つかけたものだ。英國のデニング老人や、其の他の外國學者たちも無論此の流星を見やうと力めたものだ。ところが、東京の人人も、外國の多くの人々も、一九二一年には殆んど著しい流星を見なかつて、大變失望したのに反し、幸ひ、京都の中村君は雲の晴れ間から可なり多數の流星を見、しかも同君は六月から八月始めまで連續的に流星現象の變化して行く有樣を見事に見屆けて、其の年の末には京都大學の紀要の中に發表したことがある。すると、東京天文臺のある人は之れを大變不思議に思ひ、英國のデニング氏も此の報告を讀んで見て『實は少々合點が參りません』などゝ言つてよこしたものだ。こうなつて來ると、只一人此の流星群を見たといふ中村君の信用問題にもなり、又、ひいて中村君の關係する京都大學の信用にも拘はるようにもなつて來た。――そこでいよ〳〵今年度のキンネケ流星の出現が非常な問題とならざるを得ないぢやないか！

A　なるほど、

B　外國でも日本でも、キンネケの彗星に現はれて來るといふので、位置の推算表を發表したり、其の他いろ〳〵觀測の計畫や準備を今年の初めから多くの人々がしたのは、前に何度も話した通りだらう。彗星については、こんなにして皆々大に待ちうけてはゐたが、一方、流星についても例のデニング老人が『大した見込みは無さそうだが、とにかく六月の末の頃は、注意して見るが好からう』といふ程度の意見を一二の雜誌に發表してゐるに止まり、ほかには誰も餘り氣乘りがしない有樣なのだ。さきには北海道まで出掛けた東京の一二の人々も、今年は何の計畫もせず、いかにも無關心らしく見えたものだ。しかし京都の吾々としては、今年は是非此の問題の謎を解きたいので、かなり早くから、僕は中村君に、『今年はしつかり觀測して、確かな證據の有無を明らかにしなければならないぞ』と話し合つた。そして、たとひ彗星の方はさし置いても、流星のために、是非、雨の無い所へ出かけなければならない』と決心した。――ところが、いよ〳〵六月に入つて二日目の朝、中村君は、大學の僕の室へ入つて來て、『昨夜よく晴れたので暫く天を見ましたが、龍星座の一部からキンネケの流星らしいものが可なり多く見えました。月が無かつたので見易くありました』と言つたのには、僕も少々驚いた。しかし其の後（每日では無いが）、晴れた夜には確かに流星群が現はれ始めたことを、中村君は益々明らかに認め、遂には六月の十日頃、可なり月の光のある空にも此の流星を多く記錄した。――勿論、此等の流星は皆、光りが非常に淡くて、普通の眼力では殆んど見えない程度のものばかりなのだ。さて、いよ〳〵僕は六月十三日

に滿洲へ出發することゝなり、中村君は公務の都合で少し出發が遲れて、二十日の日に札幌へ立つて行つた。滿洲では、僕は十七日から觀測を始めたが、おもに仕事は彗星の寫眞撮影だつた。無論、僕は夜、暇があれば流星にも注意したが、一體に光りが弱いためか、肉眼にも、毎夜、其れらしいものは目に入らないものだから、月末の頃は少々いやになるし、それに、彗星の方が觀測が面白いものだから、つい、其の方ばかりに僕は精を出す傾向があつた。ところが、思ひがけなくも六月二十九日の夜、大變な拾ひものをすることになつたんだ。いつたい此の二十九日といふ日は、ひるのうちに例の日食があつて、其の日の午後は可なり活動したが、なにぶん其の頃は彗星のためにも大切な時期なので、僕は晝も夜も非常に緊張してゐた。空は晝の間から多少の雲が時々現はれたけれど、大したことは無かつた。しかし、とにかく此の日は彗星がもはやよほど南に移つて、黄道を南へ越えて、水瓶座を走つてゐる時なので、日が西の地平に沒してからも、なか〳〵、適當な天空へ彗星は登つて來ない。それで、いつもの通り、僕は、いくらか余興のつもりで小遊星の寫眞觀測などをやり始めた。そして、十一時三十三分からは、南の子午線を少しく越えたばかりの蠍星座と蛇使ひ星座との境界あたりにある第一號小遊星(セレス)と、其の御隣りの第十一號小遊星(パルテノーペ)とを中心にするやうな寫眞を撮り始めた。此の二つの星の、少し西にはちようど土星が見えてゐたし、南の方には蠍座のアンターレスや、其の他の美しい星が見えてゐたが、皆此等は同じ寫眞にうつつて居る筈だつた。ちようど此の寫眞を撮り始める少し前から、隣り近所の若い人々が三人ばかりやつて來て、時々涼みがてら、僕の觀測を見物して居た。僕は寫眞を撮りつゝ、時時、其の人々と世間話しをしたりしたが、そのうちに、もはや寫眞撮影の豫定時刻もよほど過ぎたと思はれる頃、僕は例によつて、眼だけは絶えず案内望遠鏡の視野の中を覗き込んで、自働運轉を調節してたが、其の時、突然——全く突然、僕の眼のさきが急に何かの火の光にでも照らされたらしく、そこらあたりが大變明るくなつたので、僕は非常に驚いた!! 實に驚いた! そして、すぐ、此れはしまつた! 如何しやう!? と狼狽し始めた。何故と言ふと、

A　狼狽つて、どうしたんだい?

B　君、僕は其の時、寫眞を撮つて居たのだらう! カメラの蓋を開けばなして、天に向けて、大事な仕事をしてゐる最中なんだ。こんな時、急に附近に火がついて、明るくなつては、寫眞はもはや台無しぢやないか? 星の光にも感じるやうな鋭敏な寫眞乾板だ。それに此んな光が當つたのぢや、此の寫眞はまつ黑にかぶつて了つて、なんにもならない事になる。實に惡い惡戯者もあるものだ! こんな仕事をしてゐる時に、何と思つて懷中電燈などつけやがるんだ!」僕は突差に此う思つた。そして、誰だか知らないが、とにかく叱り飛ばしてやらう。——『しかし、まづ、取り敢へず、カメラの蓋を閉ぢなくつちや……』と考へたよ。これが皆突差の間だぜ、君。

A　なるほど、

B　まつたく一瞬間に此んな事をいろ〳〵と考へたものさ! ところが、其の次ぎの一瞬間に、何かの行動をとらうとして眼を望遠鏡か

ら離れて、あたりを見ると、かの彗星は、僕の身のまはりに居るのでは無くて、それは一大流星なんだ！ 天上も地面も一際を明るくした此の大流星は、その時、はるか南の空に黄赤色の灰をまいたやうな景色を見せつゝ、可なり徐々と下方へ降つて行く——其の途中で、光芒の中心部は二三度も、パッパッと、消えやうとして又明るく、又消えやうとして又明るく、明滅を繰り返しながら、眞つすぐに降つて行く！ いや、もう、あれを見た時の感じは實に何とも形容の出來ない物凄い心持ちだつた。僕は平生京都の宅の二階から夏の夕涼みの頃、岡崎公園の空に美しい煙火を見るが、まあ、あんなやうなものの、しかも人間業を超越したすばらしい現象なんだ——此の流星は。しかし「流星だ！」と氣が付いた瞬間、僕はもう直ぐにヒーフーミーと時計の秒を數へ始めた。そしてミーと言ひ終つた頃に、流星の中心部の光が消え去つた。こうして流星の輝やく時間を何秒間かと數へることは殆んど本能的になつてゐる僕等の習慣なのだ。さて流星の光りが消えた時、今まだ眼底に殘るまざ〳〵とした印象をたどつて、其の色が黄赤色であつたこと、光りの中心部の通過した跡には天空に暫らく同じ色の線條が殘つて見えたこと、又其の線條をたどつて、流星の飛んだ道は、ほゞ蛇遣ひ座のX星から斜めに蝎座のY星までであつたこと、それから、光りが非常に大きくて、一番はげしい時には市街路の總ての燈火を打ち負かし、吾吾の身體や家屋や立木などの影を明らかに地面に投げたことなど考へ合はせて、多分、滿月の十倍くらゐの光りであつたことなどを知つた。それから又、流星の飛んだ道を更にずつと上空へ逆に延ばして見ると、それが牧夫星座を貫いて北斗七星の尾の附近に達してゐることを知つた。だから此の流星は正しくヰンネケ流星の輻射點から出て來た奴なんだ。して見ると、君、あの「問題」の、世界の多くの學者たちが可なりの疑問としてゐる流星の類で、多くは普通の眼で殆んど見えないものばかり現はれて、多くの人々が「果して其んなものが在るのか無いのか」と怪んでゐる流星群に屬してゐながら、こゝには實に珍らしいとも珍らしい、飛び抜けてでかい流星が現はれたのだ！ して見ると、いかにも、あの黄赤の色合ひと言ひ、あの灰まきのやうな光芒といひ、其の速度の緩さといひ、比較的短かかつたあの條痕といひ——何から何までがヰンネケ流星の絶好模範と言はなければならない。……

A　えらいものが見つかつたものだナア！

B　全くえらいものだつた。——ところが、ね君、未だ話があるんだ。續きが。僕は此の流星の、いろ〳〵觀察した事柄を觀測帳に書きつけて、そしてよく考へて見ると、此の流星が現はれた天空のあたりは十七八分も以前から僕が寫眞を撮つてゐる其のあたりなのだよ！ オット言ひ忘れたが、流星が見えたのは十一時五十一分たつた。寫眞はまだ撮影中なのだ。それだから、つまり、今の大流星は、蓋も開け放したまゝ小遊星を撮影中の寫眞にちやんと撮れてゐる筈なのだ！ 偶然と言へば偶然、實に不思議な事もあるものだ。

A　フム、之れは實に不思議だ。わざ〳〵作つた話みたいだね！

B　それから、僕はもう直ぐに「寫眞撮影を中止しやう」と思つたよ！ とにかく此の乾板が早く現像して見たいんだ！

A さうだ！

B しかし、君、僕は想像した。最早や、此うなつた以上、現像は何時したつて同じ事だ。三分や五分はおろか、確かに流星が撮れてゐるのなら、一時間たつてからでも、一日たつてからでも、現像して、出るべきものなら出るのだ。そこで、僕は騒ぎはするのを抑ししづめて、わざ〱自分の氣を落ち付けるために、今五分間位の寫眞撮影を續行することにした。——それから、尚ほ一つ言ひ忘れたが、こんな事件が起つてゐる時、望遠鏡の側に、三人の係員がゐるのだ。さき言つただらう？

A さう〱、

B 此の三人の先生たちも、あの流星には全く驚いたらしいんだ。

A さうだらう。

B 流星で、あたりが明るくなつた瞬間に、三人のうちの誰か一人は小さな聲を立てゝ「アヽ！」と叫んだのを僕は今も覺えてゐる。しかし他の二人は全く沈默したまゝだつた。多分、流星が餘りに大きかつたから、聲を立てる餘裕も無く驚いて了つたのだらう。そこで、僕が自分の氣を落付けるやうに今五分間撮影するやうになつてから、僕は『どえらい流星だつたナア』と言つて、あたりの永い沈默を破つた時、あの三人も始めて蘇つたやうに聲を上げて、口をそろへて、『實に大きいものでしたね！』、『ほんとに驚いたよ！』『あんな大きい光りは始めてだ！』などと言つた。皆これはありのまゝの正直な飾りけの無い聲なのだ。

A そうだね。

B それから、暫くして僕は乾板を持つて暗室の中へ駈込んだよ。暗室には助手の西川氏の寫眞技師が居た。そして先づ現像液を調合した。いつもなら、別に何も試驗しないのだが、今の場合には全く前にも後にもかけ換への無い一枚の乾板を現像するのだから、絶對に安全の方針を選ばなければならないんだ。そして、いよ〱此の大切な乾板を現像液の中に入れ、なるべく動かず、少しはかぶる位ゐにと思ひ〱、現像皿を揺つた。すると、薄暗い光を通して乾板に黒々とした太い一線が早くも現はれた！ その時の愉快さは、何とも他に譬へ様が無かつたよ。時間は確に三十日の午前一時過ぎの真夜中であつて、あたりは静かに皆な寝靜まつてゐた時だつたが、構ふものか！」と思つて僕は暗室の中で「萬歳」を叫んだよ！

A 愉快な所だな！

B 君、流星は乾板のまん中に現はれてゐるんだよ！ 乾板の現像が終つて、それから定着が終つて、いよ〱水洗ひにかゝるやうになつて、僕は又待ち切れず、ポケットから虫目がねを取り出して、水でづく〱の乾板を眺めて見た。さうすると、流星が、其の中心線と、左右の光芒とを明らかに現はしてゐるばかりか、眼で見た時のパツパツとした明滅の節なども三つばかり明らかに現はれてゐる。それからセレスやパルテノーペや、アンターレスや、土星など皆此の寫眞に見事に撮れて居る。——何から何まで總てが注文通りなのだ。——此の事があつた夜の翌日、僕は直ぐ電話で奉天市中に居る二三の新聞記者を呼んだ。そして、一通り此の流星の話しをした後、「此の流星は、流石のほかの地方でも多くの人が見ただらうと思

ふから、各地で見た人が、其の見た模樣をはがきででも知らしてくれるやうに勸めて貰ひたい―と依頼した。

A 其の時の新聞電報が日本內地へも來たのだナ

B さうなのだ。そうしたら、こうして新聞記事に依頼した効果が幸ひにも直ぐ現はれて、あちこちから僕は多くの手紙を貰つたが、中にも大連の澤田氏から貰つた手紙に據ると、時刻は勿論同じ十一時五十一分で、大流星が北極星の少し東しの方を斜めに下降するやうに大連市街からは見えたと云ふ。此の報告は大變貴重なものなのだ。僕の觀測と比べは見ると、つまり此の大流星は蒼天から見たのと大連から見たのとが、ちようど正反對の方向に見えたらしいのだから、簡單に計算して見ると、此の流星は龍岳城あたりの空で、地上約一百キロの所で輝やいたものらしい。

A なんと面白い事が知れたものだナ―

B それから流星の話しが未だ少し續くんだ。大流星の翌晩、即ち三十日の夜少しく曇つたけれど、雲の間から見てゐると、此の晩は珍らしく明るい流星が可なり飛んでれ。僅か四十分ほどの間に僕は七つも大きなものを見た。皆四等級或は其れ以上で、中にはマイナス一等もあり、プラス一等半もある。そして大部分がキンネケ流星なのだ。此の晩はこんなわけで、大變好成績だつたが、次ぎの七月一日の晩は既に流星は衰へて、大きなキンネケ流星は殆んど見えなかつた。ところが、中村君が札幌から歸つて來てからの話によると、札幌では、やはり、普通、光りの弱いキンネケ流星ばかり澤山見たけれど、六月二十九日の夜は可なり大きな光のものが多くて、平均每時間十五個ぐらゐであつたといふ。だから、大體僕の推測と符合するぢやないか、日附も、數も。

A なるほど。

B もう之れで話しをお了ひにしておかう。之れを要するにだ、ね、キンネケの流星が豫期の如く多く出たことは些の疑ひも無いので、特に六月二十九日と三十日とには三等又は四等級以上の大きな流星が可なり多く見えたし、又、二十九日の夜は偶然にも此の種の珍らしく大きい流星を寫眞に撮つたので、記錄としても立派なものが殘つたわけだ。キンネケの流星が出るとか出ないとかに付いて、もはや、之れ以上の確かめやうは無いぢや無いか!?

A 御尤も! いや、面白かつた。有難う、さようなら、

B や、失敬

（終）

偏奇館去來

――禮節の文人荷風氏を語る――

邦枝完二

偏奇館の秋

それは沁々と秋風の腸に沁み透る十月末の或る日であつた。この年頃心にもない久濶を續けてゐた私は、拙著「雨中双景」の上梓されたのを幸、まづ一本を恩師の許に献ずべく、山の手町の片ほとり市兵衞町の偏奇館に荷風先生を訪れた。折から雨上りの空は、西方に[illegible]と一刷毛一文字の雲を殘した儘晴れて、靈南坂上の櫻の並木に黄金なす落葉は、頻りに頭上を掠めては、街路の砂利を覆ふてゐた。

大正壬戌五月の某日、築地二丁目なる清元梅吉と背中合せの住居を捨てゝ、獨りこの新廬に移られてから、先生の上には既に滿七年の歲月が流れた。訪ふ人も極めて稀に、時折市川左團次氏が南北本を携へて門を叩くことはあるにしても、それすら門前の草を[illegible]するほどではなかつた。谷町の坂路をまつすぐに、源空寺の地內續きを崖際に沿うて行けば、鍵形の小路は忽ち盡きて、はや散步の近くに偏奇館を仰ぎ得る事を知りながらも、私はこの日殊更榎坂に車を停めて、櫻もみぢの散りしきる靈南坂を、午後の日に照らされながら登つて行つた。それは過ぐる大正三年の頃、私は三田からの歸途を先生と共に、屢々この道を通つて、同じ市兵衞町なる[illegible]藤木を訪ふたことを、そゞろに思ひ出したからであつた。おそらくその時分の先生は、かゝる不便の山の手町に洋式の住居を建てゝ、老婢一人を相手に日を送らうとは、夢にも考へて居られなかつたであらう。大正三年十二月の三田文學に發表された小說「[illegible]花笠森」は、藤木から得た春信の一枚繪に因つて、構想を立てられたのだと覺えてゐる。――私はその當時の思ひ出をそれからそれへと辿りながら、右折して偏奇館への坂路を、寒竹の枝も轉々と降りて行つた。

なかばは今年竹であらう。去年までは半數にも足りなかつた業平の、光澤も美しく伸びた呉竹が門內の左右に數十本、すくすくと心地よく叢を爲して、異色の偏奇館を圍んでゐる。私は以前來た時分と同じやうに、正面の書齋の下に佇んで、「先生、先生」と二三度ばかり呼んで見た。いつもながら玄關側の呼鈴は、電池の切れた儘用を爲さぬの

を知つてゐたからであつた。稍あつて、梯子段を踏む音が聞えたと思ふ間もなく、扉の鍵は中から外された。

「やアこれは」

「どうも御無沙汰いたしました。お差支へありませんか」

「えゝどうぞ」

黒の上着に縞の洋袴、そして鶴の如き體軀を聊か屈みがちにしながら、先生は愛想よく私を二階の書齋に導かれた。――書齋の有樣は數年前と少しの變りもなかつた。籐の机に籐の椅子、而して書棚筆硯置物の類は、悉く先儒禾原翁の遺された支那製のそれであつた。

東風簾幙影飄揺　鈴索無聲鳥語嬌
夢裏春寒猶至枕　一欄梨雪晝蕭蕭

配するに鸚鵡の繪を以てした一軸には、丙寅暮春荷風小史とある。私は近頃先生の繪を能くすることを人傳に聞いてはゐたが、壁間に懸げたこの軸を見て、思はずその素人放れのした繪畫の腕前に、驚嘆の意を洩さずにはゐられなかつた。

「これはどうも急速な御上達ですね」

「いや駄目ですよ。何しろここの家には壁といふものがないので、日本畫を描くにはまつたく不向なんですからね。どうしても描かなければならない時には、仕方なしにリノリユームの上へ更に茣蓙を敷いて、その上へ更に毛氈を布いて描くことにしてゐるんです」

成る程、これはまた限りなく不便なことであらうと私は思つた。この居に移られるまでの先生は、常に結城紬織の類を身に纏ふて、シヤツ股引を着けたことなく、江戸時代の風俗を殆どその儘に遵して來られたのであつたが、大正九年この[illegible]に悉く洋式に改めて、今は寢衣にさへ一枚の浴衣を用ゐることもない有樣。洋式生活に適ふ根氣なく更に妓女との情事なき今日に於いて、何ぞ歩行に困難たる和服を用ゆるの要あらんや、と先生自らは云はれずとも、理由は斯く然あるべきに相違ない。

玄關を上る時、そこに女物のスリツパの二足置かれてあるのを思ひ出して、私は先生に訊ねた。

「近頃婦人の來客があるんですか」

「さア、何うしてです」

「新らしい女物のスリツパがあつたやうでしたから……」

「あれですか。これでも時々は、雜誌社の婦人記者が來たりしますからね。私は大抵合はないやうにしてゐますが、女だと思つて遂やがうつかり通してしまうことなんかがあるんですよ。死んだ波多野秋子なんて人も、四五度來たことがありましたつけ」

さう云ひながら、先生はその當時の日記を手近の文庫から取出して、拾ひ讀みに讀まれた。先生得意の文章體は、常に能く讀者の胸を刺さずには措かないが、殊に年頃書き綴けられる日記の文體は、讀者をして恍惚たらしむものがある。私は波多野秋子の來つて、其所に電話を掛けるあたりの情景を聽きつゝ、その面影の髣髴として目前に迫り來るを覺えた。

「どうも婦人記者の來られるのが一番困りますね。書かないと云つても、何んとかかんとか、色つぽい調子で持掛けて來るんだから、いけませんよ。でもまア田舍者の婦人記者たら、男並に取扱つても、可

想だとは思やアしませんかね……」

四百字詰の原稿幾枚を書いて、その一枚が幾何何程。締切が何時までで、凡そ何枚位に書かれたしなどといふ註文。先生に取つて、おそらくこのくらゐ厭なことはないであらう。文人の文を爲す、藝術的感興の渾然として湧き起る時に於て、始めて成るに外ならない。一氣にして成るも可、百日にして成るも亦可なりである。然るに豫め字數を定め、記者をして度々督促せしむる如きは、如何にジャーナリズム萬能の世の中とは云へ、餘りに文人の價値を低きに置くものだ。原稿は宜しく白紙に認め、締切日を超越し、興來つて筆を執るに如かずと。乃ち先生が日頃用ゆるところの原稿用紙は、半紙と呼ぶ無罫の半紙であつて、ペンを用ゐず、墨朱二様の筆を以て認めたものだけに、ペン字の走り書に比べて、如何程趣味深く見られるかは言を俟たない。この先生を攻めるに荒武者の記者を以てする、多數の雜誌社と相入れぬのは當然であらう。但し婦人記者を派出して、度々訪問せしむるのは、聊か賢明な方法である。時に婦人用のスリッパ一二足を用意して、婆やが心得顔に應接間へ通す、その間違ひを、心竊かに待つてゐる先生であるかも知れないから。……この婆やその昔吉原に何紫の源氏名を持つてゐた花魁だといふだけあつて、粋おのづから通ずるところを持つてゐる。耳聊か遠き嫌ひはあるが、偏奇館の老婢として亦適せりと云はざるを得ない。

私はふと先生の机上に、カフエー・タイガーのマークの附いた燐火(マッチ)のあるのを發見した。

「おや、先生はあんな所へお出掛けになることがあるんですか」

「ええ時々出かけますよ」

「あすこの女には、大部ひどい噂があるやうぢやありませんか」

「あれア噂だけですよ。私もまだその道には初步ですが、どうもそれ程のことはないでせう」

私はその頃、銀座の茶館タイガーに就て少しの智識を持つてゐたかつたが、今にして思へば何んぞ計らん。この時既に先生は、數ヶ月以前から連夜タイガーの櫈上に在つて、赤青紫と三隊三十名の婢に、大持の全盛であつたとは。

「どうも先生があゝいふ所へいらつしやるのは、不思議な氣がしますね。洋服を着ても、やつぱりかうして大田南畝や成島柳北を研究しておいでなんですから」

「しかしあすこの婢は、皆こそ新らしがつてゐますが、今時のモダーンガールなどに較べたら、ずッと古いもんですよ。何しろ三十人の中に、藝者やお酌をしてゐたのが五人もゐるくらゐだし。……それにカフエーなどへ行く氣持も、また私の心の半面にあるのだから、不思議なことはありませんよ。第一待合へ行くやうに、冬だつて先へ電話を掛けて、部屋を温めといて貰ふにも當らず、默つて行けば、ストーブで家の中はいゝ按配に温まつてゐますからね。藝者らしい藝者もゐなくなつた今日この頃、結句不自由な思ひをして、小さな遊びをしてることはないでせうよ。」

亦一説であると私は思つた。

それから文壇の話に移り、劇壇の話に移つた。が、新聞雜誌といふ物に一際目を通さない先生に、文壇にせよ劇壇にせよ、新しい話のあ

る譯はなかつた。大御所と云はれる菊池寛も、佛蘭西張だと評判される岸田國士も、てんで讀んでゐない先生の前には、三文の價値もないものだつた。

私は拙著を先生に呈して、二時間ばかりの後に偏奇館を辭した。そして氷川の森の彼方から斜に照す秋の西陽を全身に浴びながら、前とは反對の源空寺の急坂を、谷町へと下つて行つた。三十年ばかり前までは時を報らせたといふこの寺の鐘も、今は鐘樓の內に老ひさらばえた姿を、重く晒してゐるばかり。直ぐ近くの安洋食屋ののれんの內から、カツ二丁と呼ぶ女給の黃い聲が、手に取るやうに聞えて來た。江戸の切圖には、こゝらあたり一帶、お簞笥組役人の住居と記してある。先生ほどに諦め切れない私の心は、また祖先が育つた江戸の夢を追はずにはゐられなかつた。

文壇ぎらひ

文人にして文壇を嫌うことの甚しき、先生の右に出づる者はあるまい。それは現時の文壇人に氣魄なく、禮節なく、謙讓なく、しかも徒らに賣名にあせり、宣傳を事とする輩の餘りに多きがためであらう。眞に藝術的良心を以て一作を成さんとする者の如何に僅少なることよ。明治時代に於て商家が一軒の店を開き、或は新製の物品を多く賣らんとする時、彼等は早速「廣目屋」なる廣告店に依賴し旗、樂隊を先頭に立てて、街辻々を練り廻つた。その品の良否もとより選ぶところではない。各地方人の寄つて一團を爲せる所謂東京市民は、宣傳の華かさに眩惑され、一度は爭つて求めるに急だつた。——現今の文壇人中、その九分通りまでを指して、これと指摘すること遠からずと雖すも、敢て過言ではあるまい。或る者はタイピストの如く、或る者は代書業の如く、また或る者は緣日に於ける露店屋と異るところがないではないか。

およそ文を以て立ち、書を以て立つ者の第一に持たねばならぬのは氣魄である。しかも昭和文壇に人多しと雖も、この氣魄を持する者の果して幾人を數へ得るであらうか。おそらく片手を以て盡すも猶多きに過ぐるであらう。彼は得意先に於ける骨董屋の如く、彼は高座に於ける落語家の如く、彼はチップを貰つた運轉手の如く、聊かでも己に利益ある者と見れば、只管その機嫌を損ぜざることにのみ努め、而して己が文名の聲價高きを希ふ者に外ならないのだ。

一枚の新聞を見ることなく、寄贈雜誌は封の儘に屑屋の籠へ移される荷風先生を指して、變人と云ひ得べくんば當に變人であらう。が、道具屋が文を草し、運轉手が物を綴つて、追從之れ事としてゐる如き現文壇に、不快を感じ、愛想をつかすことは、必ずしも先生を待たずもがなではなからうか。己が文名を賣るためには、如何なる手段も選ばずといふならば、それも亦一種の聰明なる行爲だと云へぬこともない。が、名のありて實なき者の如何に多きかを考へる時、心ある者の暗然たるは當然ではないか。

向不見の一作家は云つた、

「荷風なんかもう古過ぎるよ。今更蜀山人や柳北でもなからうぢやないか」と。

私はこの言を聞いて苦笑せずにはゐられなかつた。唯新らしく說く

までもなく、襯衣はその質の如何を論ずべきものであつて、下駄の如くシヤツの如く、新古を論ずべきでないことは、明か過ぎるほど明かなことだ。徒らに新を競ふた作品に、果して何があつたであらうか。活動寫眞のビラの如く、或は新聞の三面記事の如く、所々に大形の文字を點出して、讀者に奇異の感を抱かせるなどは、一種の奇術ではあり得やうが、斷じて藝術ではない。試みに新感覺派を名乘る二三作家の作品を見ても知れる通り、彼等が如何に新感覺派らしき文字の羅列に腐心し、薄ツぺらな讀者が、その文字の奇警に引付けられつつあるかは、一目瞭然、思ひ半に過ぎるものがあらう。法隆寺の建物には、何等珍奇なる物のあるなく、春信、清長の浮世繪には此の術策あるを見ない。しかもその藝術的價値は千古に誇るに足るではないか。荷風先生の蜀山人を讀み柳北を語る、何ぞその古きをのみ咎めんや。

一度偏奇館を訪れた者ならば、その書齋の壁間に、數千部の和漢書籍と共に、常に新刊の佛蘭西書が置かれてあるのを見るであらう。秋ならば先づ起き出でて庭の落葉を掃き、春ならば愛する草木に水を與へて、然る後先生は端然として机に對ふのを習しとしてゐる。書を讀まんと欲さば必ず机に對つて爲すべし。先生は如何なる書物を讀む時も、この敎へを曲げたことがなかつたのである。自墮落なる者多き文壇人の、以て學ぶべきであらうと思ふ。

大正初頭のころほひ、先生がまだ大久保の來靑閣に棲まれてゐた時分は、先考不樂翁の在して、先生は二階西向六疊の間を書齋にして居られた。この當時の生活は全く江戸趣味そのもので、身に附ける物はもとより、折釘一本にまでも、決して西洋の臭は感じられなかつた。加之、令妹八重女のよく仕へるありて、琴瑟頗りに相和し、我れ等書生の輩は三田文學の編輯などに寄る度每に、世に羨ましき事の一つとして友達と語り合つたものだつた。

その頃から既に、先生は文人にして禮なき者を嫌つて居られた。三田文科の學生が每月一回づつ來靑閣に集る火曜會の席上に於て、某學生が酒氣を帶び來つて無禮を舞つたがために、先生はその學生の原稿に、決して朱筆を加へられなかつた事を覺えてゐる。禮なき者は犬の如し。

「禮儀を知らない人に、いゝ物の書けるわけがありませんよ」

そして先生は左樣な人達を頗りに蔑まれた。實際禮節は日に月に墮つて、今は早や人間界も野獸の群なす國と、聊かの異るところもないまでに低下した。國民を代表すると稱する代議士は、議場に於て當然の如く鐵拳を振ひ、市會議員は花柳界と結んで利權のへちまのと騷ぎ廻り、學生は敎師に食つて掛つて得意然たる有樣。何すれぞ文壇人のみ默するに忍びんやとの理由からであらう。橫車も無理に押せとばかり、少しそこらに名が出れば、先生なんぞお茶の子さい〳〵、おのれ一人が文壇を切つて廻すやうな顏をして、どんなもんだと反身になつて銀座あたりをぶらつくに至つては、沙汰の限り、ペラ棒の極りは、黨はこれではなかつたのかと疑ひたくなる。ゴシップがあつて、始めて名分を保つてゐられる文士。分のいゝ方の味方をすることのみに汲汲たる文士。活動寫眞の提灯持で暮してゐる文士。あゝ文士稼業！やがては天氣續きの大道に、自動車が捲き上げる砂塵と、何等の差別もないことになりはしないかと、私は危ぶむ。道中、まゝよ三度笠

滑稽ちよにかぶり、見ずに通れば、それもまた他所の世界であらうか。

眞の文明人

明治大正を通じて、日本の文壇はかなり多くの巨匠を生んでゐる。それは恰も團、菊、左の三人を生んだ明治の梨園が、それ以外にも幾多の名優を簇出させて、演劇史上に不朽の師表たる人を得たのと同様であつた。しかも劇界に於ける團十郎が、一番目狂言に於て第一人者であつた如く、また菊五郎が二番目狂言に於て他者なかりし如く、名家大家の多い文壇中に在つて、名實共に燦然たる存在を全うしてゐるのは、我が荷風先生を措て他に誰かあらう。旗本屋敷の跡を借りて、そこに金看板を揚げれば、指南者が田舍侍であらうがなからうが、左様なことには一向お構ひなく、我も我もと群を爲して、入門せずば出世の程もおぼつかなしとばかり、竹刀の持方さへも知らぬ面々までが先を爭ふて押寄せる當節。この無節操極りなき現日本の文壇に、先生の在ることは、まつたく勿體な過ぎるほど勿體ないくらゐではないか。

ラッパズボンに縞のハンケチ、オールバックにロイド眼鏡。そこで間がよければ薄化粧でもして、しやなり／＼と歩かうといふ、これがもし文明人だと云ふならば、我が日本帝國は、今後十年を出でずして亡びるであらう。そこらあたり萩も、桔梗もおしなべて、圓タクの走る街々に、何んとこの種の人物の多いことよ。藝術も蜂の頭もあるものか、金さへ儲かれば一切合切文句なし。接吻だ、抱擁だ。こいつが三度の飯より好きな日本人なんざ甘いもんだぜ。——と、無闇矢鱈にラブシーンとやら申す無作法な場面を盛込んだ亞米利加物の寫眞に、見事征服されてしまつたのか、ラッパズボンの文明人である。道德も、貞操も、議論は野暮だ。顏の奇麗な男と女が出て、「惠まれたる我等のために！」とでも云つて相抱けば、觀客は間髮を入れずして熱狂する。——何も彼も、金にさへなれば、これも亦身過世過の業とでも思つてか。いつぱし紳士らしい顏をした文壇人の誰彼までが、イヤな顏もせずに、それどころか、喜んでこいつの提灯持をしてゐるのだから物凄い。

この文壇を、荷風先生は端然として、常に一段高い所から眺めてゐるのだ。

浮草やけふは向ふの岸に咲く——これを單に落語家が噺のまくらだとばかり思つてはいけない。氣概なく意地なき現文壇の諸々が、如何に臆面もなく、この醜行を敢てしつゝあることか。己が賣名のためには、師を賣つて慚づるなき輩もある時勢だと思へば、今更これを怪しむにも足らぬであらうが、それにしても十年前までは、まだ今日程に文壇は墮落してはゐなかつた。そこには信義があつた。そこには節操があつた。名を擧めるためならば、勞働爭議の尻押しもしよう。編輯者の靴も揃へよう。負ると知つた喧嘩もしよう。振られた女との情事を新聞へ投書もしよう。それどころか、志士を氣取つて、人のイヤがる監獄へも行かう、と。これが淺間しくも現文壇に渦を卷いてる大きな流れだと云つたら、人は呆然たらずにはゐられまい。が、今は一國の政治に參加してゐる人の中にさへ、己を賣つて平然たる者の少なくない世の中である。賣文に因つて身過を爲す文壇人が、假令分のいい方

へ附いたとて、之れも詮なき仕打であらう、と人はいふ。あゝ就する者の果して幾か。――勝てば官軍負ければ賊。勝つた負けたはいざ知らず、江戸城が明け渡しになれば、もう百年も江戸に住んだ縁で、野人體に構はぬを當然に心得て無闇氣儘に振舞つた輩何、さてなくり書に背いたのが、日向に轉がつた牛の糞同様。世の中は盲千人目明千人。これがいつぱし藝術家で通るのだから、淺ましき次第である。

この文壇の一隅を、荷風先生はマスクをも掛けることなしに、往來してゐるのだ。

「何しろ今の若い人達は勉強が足りませんよ。それでゐて、何か一つか二つ雜誌へでも出やうものなら、もう立派に一人前になつた氣でゐるんですからね。つまり文壇へ出るといふことが、昔にくらべて易しくなり過ぎたのがいけないのでせう。作品そのものが良くなくても、何か問題を起した人とか、名門の背景があるとかいふと、雜誌社でも歡んで載せるやうですから、あんたことも、餘程作家の實力を低下させましたね。批評だつてさうですよ。もとは批評家と云へば、いづれも作家より一段上に立つてゐたものですが、今では作家よりも二三段下にゐるやうな人が、喧嘩腰で食つて掛るのが批評といふことになつたのですから墮つたものです。あれぢやア批評家の權威なんてものは、有らう筈がありませんよ」

いつぞや何かの話のついでに、先生がこんな風なことを云はれたのを、私は覺えてゐる。實際これを聞いたら、大方の若い作家や批評家は、省みて、慚愧たるものがあらう。己が蝸廬を擲づるとき、徒らに囂しき池中の蛙共と雖も哉。

それが若し眞の文明人たらば、第一に禮節を識るべきである。況んや一國の文化を左右し得る文人に於てをや。私は現文壇に於ける眞の文明人を荷風氏一人だとは云はない。が、かりに左様な人が五指を屈するに足るだけゐるとしたなら、まづ第一に先生を擧げるに躊躇せぬものだ。云ふまでもなく、ハンカチーフの白きを誇る者のみが文明人ではない。ズボンの折目の正しきを誇る者のみが文明人ではない。活動寫眞のタイトルを一瞥に讀み得る者のみが文明人ではない。東洋の君子國として千古の昔から、如何なる文明國にも譲らなかつた禮儀の國日本は、今、何處に去つたのであらう。輕佻浮薄なる亞米利加の物質文明の前に、何等の批判をも持つことなくして、只管迎合にのみ努めた結果、生れ出でたる我が東京を見よ。何處に日本らしき日本があらう。何處に禮儀の國を標榜し得る、日本人らしき日本人が歩いてゐやう。そこには何等の「精神」もなく、徒らに浮薄たる足取の男女が、先を爭ふてゐるばかりではないか。成る程すべては便利になつたかも知れない。すべては手輕になつたかも知れない。が、便利であり手輕であることに、何の權威があらう。便利であることが最上だといふならば、夜店のアセチリン瓦斯を以て照明は足りるではないか。

あらゆる物が淺薄になつた。あらゆる物に根柢がなくなつた。しかもこれあるが故に、文壇人までが彼等と同一の步調を取らねばならぬ理由が何處にあらう。私は心からこれを歎き悲しむ。そして或る人達を除いた現文壇人に對つて、「荷風氏の前に跪けよ」と云ひたいのだ。文壇を舞臺にして踊るに先立ち、まづ己が脚の曲れるなきかを省みる必要はないか。恥を知らぬ者に何の文章があらう。おこがましくも沙

趣の張りだと云はねばならない。

お流行りのアメリカン・ガールが、とてつもなく柄の短いパラソルを持ち始めた。すると一年後の夏には、もう日本の女が猫も杓子もいい氣になつて、こいつをさして歩いてゐる。自分に似合ふ似合はないなぞは問題でない。唯流行に遲れまいとの淺墓な量見からだ。文藝人がその道の流行を趁ふに汲々たること、婦女子のパラソルに於けると、聊かの選ぶところなきに至る。敢てモダンボーイの行爲のみを嗤へやうか。

「文學者の事業は強ひて文壇一般の風潮と一致する事を要せず。元是れ營利の商業に非ざればなり」と、荷風先生は暗箭矢立のちび筆の中で喝破して居られる。耳の穴をかッぽじつて、聽いておくべきことであらう。

秋八月の末日、私は偏奇館に輕井澤の避暑から戻られた先生を訪れた。書齋の正面に先考の詩幅を懸け、その前には靜かに香煙が立昇つてゐた。

閑梅初放雪猶殘　樹下開樽欲醉難
吹徹江頭風幾日　可憐花與酒人寒

「今日は散歩にお出かけぢやないんですか」

「出かけますが、まだおもては暑いやうですから、ひとつ山形ホテルへでも行つて、ゆつくり晩飯を食べながら話しませう」

殘暑の日光が頭甲から照り付けるなかを、私は先生と連立つて、近くの山形ホテルへと歩みを運んだ。(昭和丁卯秋日)

日本演劇の將來

メイエルフォリド劇場演出者
ゲ、ガウズネル

一 おことわり

私は日本の劇壇人がこの論文の標題を見た時の驚愕を十分に想像することが出來る。日本に未だ三ヶ月しか滯在しない、隨つて日本現代の演劇をまだ十分に研究してゐない一外人が、而も日本國に於いて、日本演劇の將來に關する論文を發表するといふことは、餘りに大膽なやうである。

然し私としては自分の大膽さに於いて相當の準備が整つてゐるつもりである。何れにしても私が日本に於いてこの論文を發表する決意に出たのは、一つには日本劇壇の嚴正なる批判を乞はんがためである。

私は日本の善良な裁判官達が私に切腹を命ずるやうなことはなからうと期待してゐる。つまり本篇に於いて表明された思想を頭から拒否するやうなことはなからうと信じてゐる。若し不幸にしてさうでなかつた場合には、私は自から腹掻切つて五臟六腑を掴み出すやうに、私の誤つた思想を頭から拔り出して、二度と再びロシヤに於いてもこの論文を發表することは止めるであらう。ところで玆に一つ辯解の理由がある。といふのは、ロシヤの劇評家には、他國の演劇の將來に就いて書くべき特殊の權利があるやうに、思はれる點である。

ロシヤの演劇は四十年間の短時期に於いて多くの變化を齎らし、將來の演劇に向つて非常な進步を遂げた。それがためロシヤの演劇學は、いつの間にか演劇豫論學の一大體系となつたほどである。そしてロシヤの劇評家等は演劇の進步に後れないために、常に演劇形式の變化を豫言しなければならぬ必要から、自然何時の間にか演劇氣象學者若くは演劇天候觀測者のやうな地位に立つた。勿論氣象學は地震を豫言することは出來ない（このことは日本人にはよく分つてゐる筈だ）。それと同じく演劇氣象學者は不意の演劇上の變動を豫知することは出來ないが、それでもロシヤの劇評家達は漸次的變化を豫言することを立派に習得した。それがためにはロシヤ演劇の四十年間の經驗が大に役立つた。

我々は西歐の演劇が是れと同じ道を進んでゐるのを知つてゐる。日本の演劇も矢張りこの同じ道を進むであらうことは疑ひない。

私が豫め述べなければならないおことわりと辯解とは以上の通りである。これから本論にはいる。

二 歌舞伎の今日

私は歌舞伎研究の目的をもつて日本に來た。歌舞伎に就いて私は多

くの熱狂的讃辞を聞いてゐたので、或は失望しないかを恐れたほどである。ところが観たところのものは、私を失望させなかつたばかりでなく、寧ろ期待以上であつた。歌舞伎は實際その技術に於いて世界のあらゆる演劇に卓越してゐる演劇である。私は全く歌舞伎に有頂天になつた。

けれどもそれだけでは足りない。私が歌舞伎に陶酔したのは演劇専門家としてゞある。歌舞伎は、フランスに於いても、ドイツに於いても、アメリカに於いても、演劇専門家を熱狂せしめてゐる。が、普通のロシヤ人、普通のフランス人、普通のアメリカ人は、歌舞伎に就いて知るところは極めて少ない。若し彼等が歌舞伎を観たら、興味よりは退屈を感ずるであらう。

それは何故であるか。といふに、歌舞伎は西欧の演劇より三百年間後れてゐるからである。そこがまた演劇専門家を歌舞伎に惹きつけてゐる點である。歌舞伎は、最近二百年間ヨーロッパの演劇が失つてゐた技術を保存した。けれどもそれだけではない。歌舞伎は結局演劇博物館に感じはしないかとさへ危まれてゐる。勿論日本には偉大たる過去があつた。その過去の姿を演劇の上に示すことは必要である。然し今日の日本は、もつと偉大なる時代を體験しつゝあるではないか。そしてこの時代もやはり、歌舞伎を壓倒すべき自分自身の演劇體系を得すべき權利を持つてゐる。それには歌舞伎は餘りに古く、そしてこの古いといふ事が、ヨーロッパ人にとつて興味のない所以である。一人のフランス人は私に向つて、「歌舞伎は死んだ演劇である」と言つた。私は彼を反駁して、日本人は恐らくヨーロッパ人の意見に同じないであらう、のみならず各時代は自己の民衆劇を有すべき權利を持つてゐると言つた。然し斯く言ひつゝも、私は相手の言つた言葉が本質的には正當であると思つた。彼はたゞ自己の思想を言ひ現はすのに粗雑であつたゞけである。若し彼がもつと言葉を叮嚀にして、他國の演劇と思想上の連絡を持たない演劇、そして現代の問題を取扱はない演劇は死んだ演劇である、といふ風に言ひ現はしたら、私は當然彼に同意したであらう。

然しこれはヨーロッパ的見解であつて、日本人にとつては必ずしもさうでなければならぬといふわけではない。たとへ或ヨーロッパ人が歌舞伎に對して批評的態度をとつたにしても、それは單に不幸の一半に過ぎないであらう。然し何にしても今日日本の劇壇に於て、在來演劇體系の滅亡といふ危機が見えてゐる事は明らかな事實である。歌舞伎劇に於いては女優が擡頭してゐる。(帝國劇場)歌舞伎俳優澤田正二郎は現代劇を新らしい様式で演じてゐる。多くの小さな劇團が起つて、ヨーロッパ劇を模倣してゐる。歌舞伎劇を見物してゐる青年の數は極めて少ない。然るに青年は日本の將來を背負つて立つべき分子ではないか。

日本の歌舞伎關係者は、總て此等の事情に重きを置いてゐないやうであるが、然しこれ等は一面に於て歌舞伎の滅亡を豫告する曉の鐘ではないか。これと同じやうな事が、スタニスラーフスキイとメイエルフオリドの現はれる前のロシヤ劇團にも起つた。當時ロシヤの古い俳優等は、彼等を征服せんとする餓鬼大將の出現を見て嘲笑したものである。所が今では彼等は嘲笑しなくなつたばかりか、全く征服され

てしまつたのである。この事を私が市村座の文藝主任長田さんに話した時、彼は私に反駁して斯う言はれた「歌舞伎は周期的に危機と革新とを體驗してゐる、丁度今歌舞伎は一切の新らしいものを吸收してゐる處である、やがてはそれが偉大なる姿に於て復活するであらう」と。

私は長田さんの意見には不同意である。

從來の危機と革新とは些々たる内部の危機であり革新であつた（例へば花道や廻り舞臺の如きがそれである。是等の新施設に就いて昔の日本の嚴正な劇評家達は非難して、これ等は必要に迫られた藝術であつて、これがために俳優の技術は却つて惡くなつたと言いてゐる）。而も是等は成長し發達しつゝある演劇にとつての特色的な危機であり革新であつた。が、今日の危機は亡び行く演劇にとつての特色的な現象である。

斯くて歌舞伎劇は亡びて、新らしい演劇體系がこれに代るであらう、恰も曾て歌舞伎が能に代つたやうに。

三　左翼劇壇の今日

日本劇壇の革新家となる事は、ロシヤに於て演劇の革新家となるよりも遙かに困難である。スタニスラーフスキイとメイエルフオリドとがその新らしい活動を始めた時に、舊ロシヤ劇は極めて悲しむべき状態にあつた。而もそれは拙劣な演劇であつたから、從つてそれを征服するのも容易であつた。然るに歌舞伎劇は極めて優秀な力強い演劇である。技術の點に於いて歌舞伎劇は世界の一切の演劇に卓越してゐる。從つて歌舞伎劇を征服せんがためには、技術の點に於いてそれ以上に立つてゐなければならない。所がこれは極めて困難な事である。日本劇壇の新人達は、歌舞伎の技術を征服すべく何にもしてゐない。

この點に於いては築地小劇場も努力しなかつたやうに思はれる。本來小劇場の一切の活動は歌舞伎との戰ひの線を辿つてゐるのではない。小山内さんはそれとは全く別た使命を目指してゐる。小山内さんは今日までヨーロッパ演劇の達成を日本の地盤に移植することに努力して來たし、今でも努力してゐる。築地小劇場は大陸と日本劇壇とを結合する橋である。その事業は藝術的と言ふよりも寧ろ文化的である。この點に於いて築地小劇場は大きな文化的仕事を成遂げたと言つてよい。同劇場は新らしい日本劇の成長すべき種子を蒔いたのである。けれども築地小劇場それ自身が新日本劇であると言ふならば、それは誤りであらう。築地は過渡期にとつての特色的な劇場である。舊劇が衰ろへかゝつて、而かも新劇が未だ起らないといふ時代には、いつでも衰微せる民族的演劇に若々しい力強い外國劇の手法を接種する過渡期的演劇が現はれるものである。斯くして舊國民劇の手法と外國劇の手法との結合から、常に新らしい國民劇が生れ出るのである。

築地小劇場の歴史的使命は、日本の新しい國民劇を生み出すべき親達の一人となつたといふ點に存する。後世の人は、將來の演劇に道を開いた先驅者として、小山内さんの名を記憶するであらう。けれども將來の演劇が現れた時、築地小劇場は最早存在の必要がなくなるであらう。その歴史的使命はこゝに終りを告ぐるであらう。

築地小劇場の事業に對するこの私の評價は、或は餘りに冷酷に見えるかも知れない。けれども私はこの論文を批評を行ふために書いて

ゐるのではなく、將來の日本劇の名に於いてこの評價をしてゐるのである。小山内さんとその助手達との偉大なる有益な仕事に對して滿心の尊敬を拂ひつつも私はこの評價をしない譯には行かない。

四　將來の演劇

然らば日本の新らしい演劇體系は如何なるものでなければならないか。私は試みにその形式を豫言して見やう。私のこの豫言は、世界各國の演劇に於けるあらゆる新劇事業の研究に基くものである。總てこれ等の革新は何處でも一樣に生じてゐる。その外に、私は日本演劇のあらゆる專門的な特殊性にも注意を拂つた。

一、新日本劇の創立者たるべき天才は、疑ひもなく歌舞伎の中心から生れるであらう。たゞ歌舞伎のみが歌舞伎を征服するために必要な技術的蘊蓄を與へることが出來る。

二、新日本劇の創立者は其の劇の形式を、ヨーロッパ劇（特にロシヤ劇）の形式要素と能の形式要素とから建設するであらう。そして彼は歌舞伎がその本來の傳統を失つた事を肯定し、又能の復興が、日本劇をその本來の道程に歸すものであることを證明するであらう。同時に彼はメイエルフオリドとスタニスラーフスキイの崇拜者となるであらう。これは免れ難いことである。現代の革新的事業は古代と今日との結合から生れ出るものであつて、昨日は全然否定される。處が歌舞伎は日本にとつては昨日である。從つて新日本劇の創立者は當然歌舞伎の敵でなければならない。

三、新日本劇の創立者は、同時にまた歌舞伎の創立者名古屋山三郎の如く、戲曲家でもあらう。勿論偉大なる新戲曲家は獨立的に現はれる事も出來る。彼は恰もロシヤのチエーホフのやうに日本現代の戲曲家となるであらう。彼はチエーホフのやうに、日本の普通の住民を嘲笑し、日本の暗い灰色の日常生活を嘲笑し、光明なる將來の日本を祝福するであらう。彼は今日人類の胸に波打つてゐるすべての偉大なる思想に共鳴するであらう。彼は諷刺家であると同時に幻想家でもあらう。將來の日本劇は斯うした二つの偉大なる性格によつて創立されねばならぬ。

全世界にとつて新日本劇の價値は、日本人自身が考へてゐるよりも遙かに偉大であらう。メイエルフオリドとスタニスラーフスキイとは最早年とつてゐる。今後彼等の活動期はさう長くはない。と言つて、彼等に代るべき天才も今日殆どゐない。彼等の弟子達は皆キネマの方面に去つてゐる。この點から言つて、將來ロシヤに於てはキネマが演劇を征服するであらうと觀測されてゐる。ヨーロッパでは既に久しい以前から演劇はキネマとワリエテによつて征服されてゐる。今日のヨーロッパの演劇なるものは全くくだらないものである。

日本は然し偉大なる演劇文化を有する國として、將來全世界の上に演劇上の覇權を掌握するであらう。それは勿論歌舞伎ではなく、私が以上書いた處の將來の日本劇でなければならない。其處に將來の新らしい日本劇の偉大なる價値が存在する。（完）

西郷隆盛の評傳

三宅雪嶺

小西郷なる従道侯の持馬にメブリンと云ふのがあつた。當時評判の馬ながら、九段の競馬場で後れをとるのは、場所が狭くて力を伸すことが出來ぬのであつて、横濱根岸の競馬場で美事に勝を得た。性格及び境遇の甚に複雜なる人間に猶更そう云ふことがある筈で、力が多い程適當の場所を得るに難く、一度これを得れば、大に力を伸すものの、一度得たのが何時までも適當と限らず、適當として最も適當と限らず、力が餘つて失敗に終つたりする。

大西郷は弟三人、妹三人、中の弟が従道として知られる。兄弟四人そろつて逸れつゝ、隆盛と従道とは性格を異にし、他の弟は隆盛に多く似るところがあり、従道に多く似るところがある。いづれも豪膽で、賢明で、才幹に富んでゐながら、隆盛は一本調子で押さうとし、従道は臨機應變で受流してゆく。隆盛の書に「猶豫狐疑深き信吾に暫時の日間を借し候はゞ、又々遷變の策を廻し候」（明治六年九月二十六日黒田清隆への書）とあつて、従道を餘り信用しなかつた。従道も隆盛に似て豪爽ながら、頑固らしいところがなく、難かしいことを言つたとて仕方がないとしておく。後に陸軍長官から海軍の長官に移り、海軍を擴張をしたのみならず、首相にこそならね、内閣の大黒柱たるを失はないのは流石とせねばならぬ。數年間生きのびて日露戰役に臨まば確に公爵となつてゐる。隆盛は度量が大きくて上下の隔てなく、よく人の言ふことを受け容れるけれど、好き嫌ひがあり、時として感情に走り、何としても折合ひがつかぬ。そこは従道の如く融通が利かぬ。それでゐて何とか悟れば、サラリと感情を一掃し、少しの蟠りないやうになり、單純のやうで頗る複雜の性格と言はねばならぬ。均しく豪傑であつて、隆盛は豪傑的分子多く、従道は才子的分子多いとし、隆盛は小事に糊塗し、大事に糊塗せず、最大事に臨んで従道より糊塗しないとも考へられる。

西郷隆盛の人となりは、乃木希典の器局を擴充し、氣魄を雄大にしたやうなところがある。前に遡れば蒲生氏郷に似て居らう。氏郷は四十才で病死したが、長命せば必ず大いに活躍したらう。毒殺説は信ずべきで無けれど、毒殺説が出る程、當時に重を置かれた。更に遡れば楠木正成の心をもつて足利尊氏の位置に立つことを余儀なくされたものとする。正成と尊氏とを一にするは矛盾の極のやうで、西郷隆盛

は之を體驗しなければならなかつた。之を敢てするは寔に容易のことでない。從道ならばぬらりくらり何とか矛盾をまぬかれたらうが、隆盛は自ら爲すべきこと、信ずるや、如何なる妨害の起るをも構はず、風吹かば吹け、波立たば立てとして進む。ずゐぶん思慮分別しながら、場合によつて挺子でも動かず、周圍の事情が有利ならば、驚くべき大事を成し遂げる代り、周圍の事情が不利ならば、悲慘なる失敗に終るかも知れぬ。成功しても、失敗しても、自身の精神に變りがない。

西郷兄弟は富貴に對する執着心が少い。從道は常に政府に居り、立身出世したにせよ、それでも富貴に比較的淡白であつた。首相にならうと思へば爲れるのに、敢て爲らない。他人が三日でもと思ふ所をば、彼は笑つて避ける。金を取るには取つたけれど、出すことをも惜しまない。隆盛は一層甚しく、大事に盡力すべきことを考へ富貴利達は措いて問はない。東奔西走しても、それで位を得ようとか、金を得やうとか思はぬ。俸給を袋に入つたまゝにして置き、從道がそれを使つたりした。加ふるに何時でも生命を投うたうと心懸け、何等かよき死に場所を見出さうとしてゐる。凱旋して論功行賞に與かるべきを望まず、死んで利益を君國に殘さうと思ふ。さう思ふのみならば不思議がなく、巡査でも、消防夫でもさう思ふ。西郷隆盛は多數を翕合し、之を動すべき特殊の能力を備へて居る。西郷が現れるだけで、人が勢づき、弱い者が強くなり、強い者が愈々強くなる。特に薩摩の血氣盛の連中は西郷を信じ、之を重んじ、之を慕ひ、水火に飛込むをも厭はない。此の邊は他の有力者とちがひ、單獨でも周圍に兵力を備へ、事ある場合に兵力を以つて成敗を決することになる。他に軍隊を率ゐるのがあるけれど、委託された軍隊であつて、委託を解かれゝば少しの關係がない。西郷は戰略戰術の才能を別とし、人をして兵卒たらしめ、兵卒をして手足の如く動かせしめる魅力を備へ、一人起臥しても多くの番兵が取卷くと異ならない。さう力を具へてゐながら、死に場所を求めやうとするので、事が難かしく、之に適す機運が迎へ來らば驚天動地の偉業を遂げるを得、之に適す機運なければ、身の處置振りに苦しむ。

若し西郷隆盛が薩幕後の泰平時代に生れ、或は後の憲政時代に生れたならば何を爲し得たらうか。何事かを爲すべきも、今日大西郷を認めるが如き事がなからう。大西郷は幕末より明治にかけての動搖時機に活躍したのであつて、それが比較的適しながら、常に適して居らず、適したかと思へば適せず、適せぬかと思へば適し、有爲轉變の限りをつくして居る。近世日本で西郷隆盛の生涯ほど有爲轉變の大掛りで烈しいのはない。彼の如き人物に適當なる時機が容易に來るものでなく、來たやうで去つて仕舞ひ、去つたやうで又來り、そこで波瀾重疊するに至る。明治維新に絕好の時機を得たとするものゝ、それが眞に絕好でなくて、眞に絕好なる時機に何程の力を伸したるべきか、永く知ることが出來ない。西郷は幸なる人であり、不幸なる人であつて、幸が不幸となつたり、不幸が幸となつたりした。幸不幸が幾回繰返へされたか、誠に有爲轉變の劇烈を極めるを見る。

文政十年十二月生れで、生れた時から幸不幸が相伴つてゐる。自身が異常の能力を以て生れ、弟妹が發明揃ひとなるなど、何よりの

なれど、家格は卑しく、家計は窮し父母の歿後に弟妹の世話せねばならず、斯かる小世話に長じた方でなく、可なりの惱みであつたらう。然し弟妹がよくわきまへて割合に世話をかけなかつたとも思はれる。社會の下積みで、親からの貧乏で、折角持つて生れた能力を啓發すに難かしいやうで、幸に明君島津齊彬公があつて引き立てた。公が人を見るの明があり、しきりに人を求める際でもあり、卑しくて貧しい西郷を多くの家臣の中から見拔いた。藩主其人が凡物ならば、西郷はその儘に埋もれたかも知れぬ。

西郷が意見書を藩の政廳に差出したからであらう、御庭方を申付けられ、庭の手入れをして居る中に殿樣の御聲掛りがあり、それで藩主へ接近の機會を得たのが飛躍のもととなつてゐる。齊彬公の眼には彼の男ならばと映じ、西郷と話する時、煙草盆を叩く音もちがふとまで云はれた。隆盛ごとき武骨者は普通の藩主が好まず、捨てゝ置くのに、齊彬は天下の明君と言はれた丈けあり、早く西郷に着眼し、これを引立て、安政元年正月中小姓として江戸詰に伴つた。西郷は江戸で各藩の有力者と交つて知見を磨き、中にも水戸の藤田東湖の教を受け得る所が多かつた。東湖は豪傑型の才物で、應接に熟練し、荒削りの田舍者は聞惚れずに居れずに居れなかつた。慷慨の談は筋道が通つて聞えた。親藩に奉仕しつゝ大義名分のために幕府の威武に屈しないとの意氣が見える。齊彬公を戴いて、内に皇室を奉じ、外に國威を輝かすべきを說く所、ひし〳〵と頭腦に響く。西郷が天下に志を立てたのもその頃よりのことであつて、翌年十月の震災で東湖が歿したのに驚き、「去る二日の大地震には、誠に天下の大變にて水戸の兩田もゆひ打に被逢、何とも無申譯次第に御座候、頓と此限にて何とも申口は無御座候」とあるが、師を失つて失望し、却て自發的に意見を立て、政界に乘出したと認めて宜い。その後は齊彬公の命令及び指導を受ける外、同輩と語つて知識を得、特に越前の橋本景岳に得る所があつた。

齊彬公の異母弟に久光と云ふのがあり、其の母（先代の妾）が一味と謀つて御家騷動がもち上り、表面に鎭まつたやうで、常に黨派別れを免かれず、齊彬に實子が生れたに拘らず、久光の子忠義を養子にするなど、種々の事情が伏在した。西郷は久光派の陰謀に快からず、何とか防がうとするや、齊彬は固く戒めて言つた、「心得違ひをするでないぞ、今は一藩内で爭ふ時でない、相續はあれでよい、これから隱退して、及ばずながら皇國のために盡さうと思ふのぢや、わかつたか」と。西郷はそこで目の覺めたやうに感じた。江戸に出て天下を念とすることになつたものゝ、藩が氣掛りになり、藩で爭はうとしたのが、愈々天下の大事を目掛けるに至つた。朝廷と幕府との關係が容易でなく、之について骨折り始めた時、たまたま將軍職の相續人が問題となつてゐる。現將軍家定公の夫人は島津家の出であつて、子が生れぬけれど、生れぬだけ心配になる。關係者が候補と指目するは、一橋慶喜と紀州の慶福とであつて、前からの二派が互に別れて運動して居る。双方に有力者があり、西郷は一橋側で奔走したが、紀州側が運動を巧みにして成功した。紀州の家老水野忠央が城中城外と氣脈を通じ、譜代隨一の井伊直弼等を後援にし、「水戸老侯御謀叛」といふを觸り立て、井伊を大老とすると共に勢が決した。安政五年四月井伊

が大老となり、同六月慶福を將軍繼嗣と定め、苟も反對する者を罰した。陰謀の競爭で西郷が勝利を得ないのは、後と謂りがない。西郷も隨分計畫するけれど、陰謀に長ぜず、陰謀となり、特に陰險なる陰謀となつては負けて仕舞ふ。

西郷は陰謀に負けても屈せず、其儀ならば力を以てする外ないと、固有の特長を發揮しかゝつたが、あやにく七月五日齊彬公が藩地で急に病んで歿した。將軍薨去の前日である。長上とし、恩人とし、賴みに賴んだ所の人に死なれ、落膽言はぬばかりなのに、井伊が大老となり、左右に隔てられ、勇斷果決、反抗者を一網打盡すべしとし、西郷の同志は或は追ひ立てられ或は處分され、中に僧月照も居る。西郷も處分される筈で、薩藩に憚りあつて手を下されない。月照は西郷の勸めで薩摩に逃れ、そこでも幕府の追手に追はれて身の置きどころなく、首を刎ねてくれと言ひ、西郷は斯くなる以上相共に死すべしとし、十月十五日滿月の下、二人が薩摩潟に身を投じ、同乘者が救ひ上げた時は、二人が絶息し、陸で火を焚いて暖め西郷が蘇り月照が歿した。西郷が蘇らなんだならば其の生涯は玆に終るのであつて其の蘇つたのを幸ひと思はねばならぬ。不本意ではあつても後の活動は蘇つた賜に過ぎない。齊彬公にも殉死を考へたとあれば、それまで生き永へた生命を月照と共に捨てることになつたのであらう。邪推する者は云ふ。西郷は月照と生死を約し、之を救ひ得ないので、共に身を投じて之を死なせ、自ら蘇へつた形にしたと。西郷にそれ程の底意があれば絶體絶命の困難に陷らなんだらう。西郷は月照と共に死ぬるのを良い死場としたらう。人間は斯くて果つべきものとしたらう。命の縮するを歎じても、惜しい生命とせず甘んじて死んだらう。然し思ひがけもなく再生し、聊か途方に暮れた。藩吏が捕へようとしたが、藩廳で名を菊池源吾と改めさせ、大島に隱れさせた。劉佐民といふ人に預けられ、そこで讀書したり、習字したり、普通に教育と稱する所を自習した。前にも幾らか學問したけれど、他の用件に取紛れることが多く、島に居つて徒然のまゝに讀書するので、相應に深く修むるを得た。詩文を作つて漢學の素養あると見えるのは、島で得たところが多い。重野安繹といふ漢學者が金の遣込みで流罪になつて居り、それから書物を借りて讀みもした。重野が西郷に投海の事を尋ねた時、「和尚ばかり死なしたのは殘念ぢや、和尚は法體のこと故、劍もいかぬと思ひ、投身したものゝ、今から思へば劍を以てした方がよかつた」と答へたとか。西郷には劍が附きものながら、大島に居つて助かつた。大島に居らねば、江戸又は京都で事を起し、死刑になるか、或は殺されたらう。大島で家庭を造つて悠々讀書して居る間に、井伊大老が殺されて形勢が變つて來た。

前に多少の經驗を得た西郷が數年間島に居り、あたら人物をと言ふことになり、月照と共に身投したことさへ或る人々に輕蔑の種となつた。誓つた友人の爲に生命を抛つとは賴母しい人と思はれる。この大事の際に何としても西郷を喚び返さねばならぬとなり、それには前からの友人大久保利通も與つて居る。そこで文久二年二月愈々喚び返し、相應の用向を命ずることになつたが、西郷は何處となく久光と合はない。互に虫の好かぬ所がある。久光は大久保と善けれど、西郷と善くない。これは齊彬公が初めから知つて居り、「我が家來でいざと云

ふ場合に爭となるは西郷一人であつても、普通と違つて、普通に取扱ふことが出來ないと言つた。久光は才智に於て齊彬に劣らぬやうで、性根に下卑た所があり、母の素姓が爭はれぬものといふは、どういふものか。餘計な所で威張りたい癖があり、大事を人に任かせ切らない。小さい事も申付通りにせねば承知せぬ方で、西郷はさうゆかぬ、必要に臨んで勝手なことをする。勝手なつもりでなく、已むを得ぬとする。久光が下關で待つやうにと言ひ聞かせたのに、西郷は下關から直ちに大阪に出で、浪人連と往來し、輕擧妄動すると聞える。實は「輕擧を戒め、叱り付け置候次第」(木場への書)であつても、久光は浪人を好まず、側近者に焚き付けられ、兵庫に着くと共に、大久保に西郷を連れ歸るべきを命じた。餘程立腹の體で、大久保も當惑し、西郷と共に死する覺悟したといふが、西郷は處分せらるる儘にし、德ノ島に流され、尚ほ輕きに過ぎるとて、舟牢で沖ノ永良部島に送られ、獄舍に入れられた。西郷が「久光公は齊彬公の足元にも及ばぬ」と言つたのが祟つた。殺されぬが仕合せといふもの、實に久光は齊彬の足元にも及ばぬ。

然し時代は變ずべきに變じて已まぬ。京都に寺田屋の同士打があつたり、七卿落があつたり、英艦の鹿兒島灣砲擊があつたり、何としても西郷を喚び返さずに置けぬ。國危くして英俊を思ふ。薩藩に人物ないでなけれど、機運の轉換に鐵腕を下だすは西郷を待たねばならぬ。西郷は天才であり、大久保は能才である。西郷は靈感がありインスピレーシヨンがある。平時に役立たなくても、危急の場合に知るも知らぬも依賴するに至る。事務を執ることは遠く大久保に及ばず、大久保が世話して呉れるので助かつたけれど、内憂外患並び至つた時、西郷嫌ひの久光も西郷の力を藉りたくなる。そこは久光も如才なく、用ゐるとなれば重く用ゐるを厭はぬ。頗るニコポンを心得て居りほろりとさせる所がある。西郷は散々窘められた身でも、元治元年二月喚び返され、折れて出た君公の思召を恐れ多くも、有難くも思ふ。西郷の流罪中、薩長の關係が面白くなく、薩が會津と聯合して長を追捲つたりした。西郷は勤王のために何とかせねばならぬと考へたが、薩で長の尊王攘夷を一手販賣するが如きを好まぬ。薩は九十萬石、長は四十五萬石、薩が長に倍する力あつて、おめ〳〵長の尻馬に乘るを欲しない。種々の曲折あり、勅命も出た後、長の獨斷で兵を動かすを非とし、禁闕守護の限りに於て之に一大打擊を與へるに決し、七月十九日の戰爭に西郷が流丸で負傷した。引續いて長州勢を擊破し、二十二日征長の勅命が下り、幕府より大軍を出し、薩も之に加つたが、西郷は事實上に兵權を握りながら、幕府の意の如くするを欲せず、長州の罪を問ひ、之をして謝罪せしめ、然る後に長と國事を謀らうとし、略々順序よく運んだ。

これには第三者なる土佐の阪本龍馬等が盡力したが、薩に西郷が居るといふ事が頗る重きをなした。長州で薩が會津と共に攻擊し來つたのを怒り、之と同盟するを好まなくても、獨力で大事をなすに堪へず、痛し痒しとなつて居る。西郷が月照と入水したことは、人に依つて輕率と考へるけれど、一般に正直で信義に篤いものとし、西郷が居れば間違ひないとする。西郷がゐなくても薩長の同盟の成るにせよ、最初の長州征伐の終るか終らぬに同盟が成り、第二の征伐で幕府が進退に窮す

し、瓦解の避くべからざるに至つたこと、西郷の押しの利いたものとせねばならぬ。阪本の斡旋で西郷木戸等が會合し、同盟を議する時、西郷は何事も發言せず、木戸が頻りに述べ立て、「どうで御座るか」と言へば、「宜しう御座る」と云ふに止まり、心許ないので後に木戸がこれを書附にし坂本に裏書させたが、西郷の承諾を得さへすればよいと云ふのが通りものになり、事が甚だ簡單に運ぶ。細い計畫は、薩の大久保、長の木戸の手に於てし、或は其部下の手に於てするも、薩長同盟で幕府の死命を制するに足ると信ぜしむるは西郷の力であつて、幕府は棄てゝ置いても瓦解すべしとし、西郷といふ特殊の人物が陰に控へたことが瓦解の運命を早めて居る。幕府に不利益な出來事が次から次に起り、孝明天皇の崩御があり、岩倉具視が佐幕より討幕に早代りしたことがあり、弱り目に祟り目どころの話でなけれど、西郷が無言の間に兵力を動すと云ふことが奇蹟の如く傳へられた。

然し薩長同盟したとて、京都附近に駐屯する兵數は知れたものの、たかゞ五千の兵なれば、三倍の兵を以て進めば何程のことがないと考へるのが相應にある。薩長側でも兵數の少いのを心配するが、そこは西郷が磐石の如く坐り、大丈夫と構へて居るので薩兵も長兵も勇み立ち、彌々明治元年正月三日前將軍徳川慶喜が幕軍を率ゐて上京し、先鋒が鳥羽伏見に差しかゝるや、賊軍を打拂へと云ふので銃砲をあびせかけた。幕軍は兵數が多くても、地形が狹くて大軍で進むことが出來ず、急に陣形を變へることも出來ず、散々に打ち悩まされ、翌日、翌々日盛り返へしても、負け風がたつて、勢が衰へ、頼みにした慶喜が頼みにならず、そこで慶喜が大阪に歸り、即夜軍艦で江戸に歸つた。大阪で踏み止るやうにと忠告した者がある時、慶喜が問ふ「幕府に西郷吉之助が居るか。」答ふ「居りませぬ。」「大久保一藏が居るか。」答ふ「居りませぬ。」「木戸準一郎が居るか。」答ふ「居りませぬ」と。居ると答へる者がなく、其の儘に退軍に決した。薩長側では錦旗を飜へし、物の見事に幕軍を撃退し、いよ〳〵徳川征伐と決定し、東海、東山、北陸の三道より兵を進め、東海道に有栖川宮が大總督、西郷が參謀として進んだ。西郷は幾人かの參謀の一人に過ぎないけれど、其の威名は赫々一世に響いた。坊主と身投げした西郷といふ男は天下の豪傑であつたかと驚かぬ者がない。西郷自ら時局の變化の重大なるを思ひ、大戰爭を豫期し、江戸を燒まくらうと言つた。誠に關ヶ原以後の大決戰をする覺悟であつたが、静岡まで進み、幕僚が箱根の通過を語り合つて居る時、幕府側から使が來たり、他から報告が來たり、大戰爭について考へ直さずに置けぬ。

若し幕府側で抵抗したならば、西郷は諸軍を統率し、屍の丘を築き、血の河を作ることになつたらう。彼は抵抗が強いほど撃破の力を増してくる。必ずしも戰略戰術に長ぜぬけれど、軍隊が西郷を信じ、西郷の現はれる所、進むことあつて、退くことがない。箱根の嶮を突破し、江戸城に攻め寄せ、恐るべき惨劇を演じ兼ねまじき勢であつて、實に大抵抗に對し大壓力を加へる覺悟がある。然し之は西郷の思ひ誤りであり、西郷のみでなく、朝廷側で思ひ誤つた。徳川慶喜が抵抗するつもりならば決して大阪から逃げない。慶喜は一時薩長の横暴に憤慨したものゝ、既に大政を奉還したことであり、兵力を以て朝廷と爭ふが如きことは萬々あるべきでない。但その江戸まで逃げたの

は、京阪の兵亂を免れるの外、幕府の終を完うするの意もある。大阪に居れば朝廷に攻勢をとることになり、江戸に居れば其の嫌ないのみならず、已むを得ざれば守つて防ぐことも出來る。ひたすら恭順の意を表し、それででも兵を加へられるとならば、義の旗の下に爲すべきを爲さねばならぬとは、恭順に參同した人々が考へ及んだ所であつて、恭順して兵を加へらるれば、如何に惰弱なる幕兵も奮起し、各國公使も承知しない。薩長に味方する英國公使も其邊の事を忠告し、横濱の病院を貸す譯にゆかぬと言つた。

西郷は茫漠なやうで、形勢を見てとることが早い。前以つて勝安房から話を聞いたこともあり、山岡が使節となつて來た時、心待ちに待ち、山岡が何を言ふかとあらかた知つてゐる。山岡が江戸辯で陳べ立てるのを聽き、鷹揚に挨拶し、大總督に伺ふと退いて出で來り、五箇の條件を持ち出し、山岡が其の一箇條を聽くことが出來ぬと言ひ、幾らか押問答の末、承知して酒を持ち出し、笑ひながら語つた。山岡はその悠々迫らぬ態度に感心し、勝も聞いて豫想に違はぬとした。西郷は大義名分を以て進み、之に抵抗しない者に對して氣の毒になる。國家の上から考へても、無益な戰爭をせぬに若くはない。長藩こそ幕兵に攻められて恨あれ、薩藩はそれ程の恨なく、只だ慶喜が薩を惡しざまに言つたのを憤るのであつて、それも行掛りを考へれば無理もなく、さう言ふことに、拘泥するのは大人氣ない。外國に當るには早く國內の亂を平げねばならぬ。かれこれ難題を持ち出せば治るべきことも治らない。幕府側では議論沸騰しても成るべく恭順の意を表し、餘は其上のこと丶し、勝は江戸城を差出し、それで慶喜を死罪にするといふならば、別に爲すべきことがあるとする。榎本は艦隊を率ゐて品川に居り、陸兵も相應にあり、あはてるものでないと思ふ。西郷が兵を率ゐて江戸に近づき、勝と應接すれば、戰爭なんか餘計のこと、何の爲に江戸を燒きまくるか、それほど無益な殺生がないと悟り、勝が幕府の後を引受けるならば其の爲すに任かせばよく、「總べて貴方にお任せする」と言つて引取り、江戸城は四月十一日に引渡された。

何分にも幕兵の中に不平を抱くのがあり、江戸兒の向意氣で官兵を斬つたり、江戸の市中が騷々しく、出張官吏が注進して已まない。朝廷では、さう手ぬるくては、後の治まりがつかぬとし、長藩は前に幕兵に攻め立てられた術懷氣分もたり、うんと叩きつけねばならぬとて、大村益次郎が命をうけて江戸に出で、上野の彰義隊を一掃するに取掛つた。西郷は勝に瞞されて居ると言はれた。勝は西郷の依賴で市中を取鎭めようとするけれど、如何に勝の手でもさう急に治まりのつくものでなく、段々部隊に說ききかさうと考へて居る。あてが無いではなく、斯く／＼せば鎭まらうと思ふ。そこへ大村が來て何でも彰義隊を打拂ふと言ふので、勝は厄介な者が來た、よせばよいにと思ふけれど、彰義隊が騷いで居るに違ひなく、大村が鎭壓すると言へば差止めることも出來ぬ。西郷は大村が鎭壓すると言ふのを妨げず、「宜しいやうに」と薩藩の兵をも任かせた。五月十五日大村が一擧にして彰義隊を打拂ひ、市中が鎭まつたけれど、さうせねばならなかつたか、どうか。勝は荒療治でなくて治療しようと考へ、西郷は大村のするやうなことを好まず、それ位のことは勝や山岡らがどうにかすると思つて居る。何萬の兵で大戰爭するならば、西郷は必死に努力し、それを愉快

ともするけれど、三千位の集りに大砲を差向けたくない。然し實は西郷も勝に約束した手前、彰義隊に手を出さなんだもの丶、聊か困つて居り、大村が來たので是れ幸ひとしたとの說がある。大村の來たのは西郷の取計ひとの說もある。

大村が彰義隊を鎭壓したのは、奥羽及び越後で之と相應じて兵を起すのを憂ひたのであつて、會津に戰爭が續いて起り、隨分激しい戰爭もあるが、根本は既に定まつて居り、單に意地で戰ふに過ぎない。西郷は戰況の視察かたがた、將卒を督勵するもの丶、自ら力を揮ふべき程のことがない。八月榎本が艦隊を率ゐて北海に脫走したが、それとても大勢に影響がない。若し榎本が早く艦隊を率ゐて東海道より兵庫邊に出沒せば、由々敷い大事となつたらう。慶喜が恭順し、榎本が之に背けぬとあつては、意地を張つて蝦夷の開拓に從事すると稱し、大局と掛離れて居る。板垣が會津征伐中に脫艦の處分せねばならぬと建言して容れられなかつたのは、官軍に準備の整はぬにも依り、大勢に關係ないと知られたにも依る。

西郷が大總督參謀として東海道を下る時に豫期した處は何程も實現せずして終り、少い犧牲で、成功したのを幸であるとし、天下分目の合戰に臨まうとの志望の狂つたのを不幸とせずに置けぬ。打ち上げた拳の下し處が無くなつた。鐵拳を加へやうとすれば相手は平伏して謝つて居る。幾代か續いた幕府が倒れて其儘に治まるべくもなく、二百六十餘藩が何とかならねばならず、遠からず大亂が起るべく、其時こそ思切つて働くべき時と考へられる。西郷は次に起るべき大亂の用意に取掛らうとし、論功行賞を見向きもせず、十一月鹿兒島に退き、暫く獵犬を友にして靜養した。翌年北海の脫艦が急に平定せぬので出發したが、亂平いで歸り、大參事として藩政の改革に從事した。若し再び戰亂が起つたならば、西郷は薩兵を率ゐて鎭定したらう。薩兵のみを以つてせず、他藩の兵と共にするにせよ、西郷と薩兵とが天下を左右するの原動力と見えたらう。

ところが何程の騷も起らず、明治二年正月木戸大久保等の計ひで薩長土肥四藩が版籍奉還の表を上れば、他藩も競つて之に倣ひ、六月朝廷に於て奉還の請を聽許し、知藩事を置き、それで何事もない。奉還しない者も奉還者と同樣に取扱はれ、少しも異議を唱へない。實は其の筈であつて、封建制度は既に生命を失ひ、枯木の辛うじて立ち、僅かの風で倒れるに似て居り、大いに兵力を用ゐるほどのものでない。世間で殿樣を馬鹿殿と言ひ、田舍源氏の繪を標本としたのは偶然でない。幕府が無雜作に倒れたと同じく、各藩も無雜作に廢せらるべき順序になつて居る。それでも枯木が倒れぬ間、亭々天を衝く。多年嚴格なる階級が續き來つたのを見、之を破壞するに大亂の起るのを豫想せずに居れぬ。中央に兵力を集め、政府の基礎を固めねばならぬとて、西郷を薩藩から招くことになつた。岩倉が勅使として島津久光を上京せしめやうとしたのは、西郷を上京せしめうとの意の方が多かつた。勅使たるべき岩倉が「成らずんば再び歸來せざる決心なり」(岩倉の大久保への書)と斷言した程であつて、何としても西郷をくどきおとさうとした。西郷身命を賭すべき時機と心得て上京した。薩長土の兵が親兵となり、即ち近衞兵となり、いざと言へば西郷が之を率ゐて討伐の中堅となると知られる。

ところが、明治四年七月廢藩置縣を斷行しても何の抵抗なく、各藩主が言ふ儘になり、刄に血ぬらずして大事を決行し得たのは、何よりの幸ながら、西郷として聊か手持無沙汰の感を免れぬ。西郷は政府に參議一人を置いて政務を統一すべきを主張し、決定後に木戸を參議に推し、木戸は西郷を推し、互に讓り合ひ、他から西郷木戸の二人に立つべきを勸め、さう決定して間もなく、木戸の主張にて薩長土肥四藩から參議を出すことにし、西郷、木戸、板垣、大隈の四人を參議とした。そこで內政外交を整へ、國運の發展を期する事になつたが、政治の雜務にあづかるは、西郷の得手でなく、好むところでなく、木戸とか、大隈とかゞ取扱ひ、事實上に後者が多く取扱ふ。西郷は廟堂に出入して同僚の雜務を語るを聞いて面白くない。考へて見れば王政一新で人材が政府に集つたやうで成上り者の不行狀不仕鱈何とも言ひやうがたく、薩藩の橫山安武が之に關する建議を上り、腹を切つて死んだ。西郷は成程と思つた。國民の模範となるべき朝廷百官が遊蕩驕奢、事を誤る者多く、時論囂々、王家衰頽の機此に兆す。(橫山碑文の語)これと云ふのも、世界に對する眼が覺めぬからであつて、國外に事を起し、一は國威を發揚し、一は民心の緊張を促がすを急務とした。

初め長の木戸が征韓論を主張し、自ら使節となつて談判し、場合によつて出兵しようとし、大村をして兵を統率せしめる計畫であつた。薩は之を好まず、橫山が征韓論に反對したのも薩の空氣よりして居る。然し大村が負傷して沒し、木戸の計畫に齟齬を來し、征韓を考へなくなつた。それでも韓國に對する行掛りは繼續し、何とかせねばならず、關係者も運動を廢しない。木戸が征韓論を放棄した頃から西郷が之を是認し、遂に力を極めて主張するに至つた。若し西郷が早く茲に考へ着き、自ら使節となつて韓國に往かうと主張したならば、何となつたらうか。之に先つて歐米に大使を派遣する議が決定し、岩倉が大使、木戸、伊藤、山口が副使となり、多くの隨行員と共に明治四年十月出發した。西郷を其の一行に加へたならば、何とならうか。それも疑問となる。

大使一行は途中で幾回となく豫想が狂ひ、米國から大久保伊藤が歸つて協議したことがあり、それが纏まらず、後にも面白からぬ事があり、明治六年使節が前後して歸つても、外交上に特別の結果を齎らさない。最初より使命が漠然たりとは言へ、且つ事情已むを得ぬとは言へ、使命を耻しめたと言へば言へぬでない。見聞して知識を擴めたは確かながら、其れにしては大掛りに過ぎる所がある。內地では政府に居る者が割合に多く仕事した。大使一行の出發する際、大事は大使歸朝後と約束し、それにも拘らず、遠慮なく事を運んだ。さういふ約束をするのが無理であり、無理な約束に背くのも無理であり無理の咎め立てすれば際限ないが、何しても內地に度々政變があり、參議も數多く增した。內に岩倉公以上の三條公が居り、大久保以上の西郷が居り板垣や、後藤や、副島や、江藤や、何の遠慮がいるものかと言ふ調子であり、大隈も其の中で隨分活躍した。

仕事としては西郷は何程の事をせず、たまに人の評議を聞く位でも、常に最も重をなしてゐる。何もせぬけれど、言ひ出したのは征韓論、自ら使節となつて談判し、殺された時に出兵すると言ふのである。前は木戸が期待した所をば、西郷が其任に當らうとするに止ま

り、反對があると思はない。西郷は鳴かず、飛ばず、飛べば天に沖すと考へられ、同僚は様々に思案した。思案に色々ある。土肥の參議を取捲く連中は薩長を操つるべき好時機とした。いづれ薩摩の兵を繰出して功を立てるに相違なく、それで長を壓へつけて仕舞ふ。薩は力があつても知慧がなく、何とでも取扱ひ易いとした。西郷はその消息を知つても一向頓着せず、進んで國運を發展せうと考へて居る。長州では西郷に飛出されて如何なる椿事が起らぬと限らず、大久保を以つて之に對抗せしむるに全力を注ぐ。

薩州では西郷と大久保とが頭領となり、同心協力し來つたが、おのづと二派に分れる傾向がある。一般に西郷が人望多いけれど、其の周圍に集る者は比較的單純で、直情徑行、人を罵つたりする。洋行して新知識を得た連中は之等と調子が合はず、西郷從道、大山巖等は善く思はれぬ。黒田清隆も洋行から歸つて幾らか違つて居る。大西郷に背くべくもなく、面と向つて從順にして居るも、大久保が歸つては何となるか知れぬ。官吏肌の連中は大久保に信服し、何でも大久保が歸つてからと待ち設けた。大使副使等は途中にて屢々議合はず、特に大久保と木戸と仲違いとなつたが、大久保は益々岩倉と親密になり、且つ伊藤を腹心とした。伊藤が木戸を離れ、大久保に從つたのは、實は木戸を離れたのでなく、反間苦肉の策とも言ふが、まさかさうでもなからう。伊藤は夫程に腹黒くなからう。然し長州派が大久保を推して西鄕と爭はせしむるに成功したことは、事實に現れた。

大使一行が前後して歸朝し、九月十三日岩倉が横濱着、翌日參內、續いて征韓論を議することになつた。西郷が遣韓大使となるは既に決定したのに、こゝで異議が起り、非征韓派は極力之を覆へすに奔走した。西郷は正式に廟議を經、それで事が進行するものと思ひ、特に疑ふところがない。大使一行歸朝後に反對運動の起つたのを知るか知らぬか、之に對して何事をもしない。西郷を擁護する連中は、意氣軒昂韓國を蹂躙し、清國とも、露國とも戰ふの意氣込みであつても、反對運動の裏を掻かうとは考へない。西郷と同志の同僚さへ、何もしない。反對運動が頻りに行はれ、首班三條に代ふるに岩倉を以てし、大久保と廟議に列せしめ、正面より反對することになつた。三條は明かに承諾したけれど、岩倉は之に代つて言ふ。「三條公が何とあらうが、我が權內で反對する」と、大久保は初め必ずしも反對せず、後に絶對反對を表明するに至り、遂に反對の御裁可となり、十月二十日、西郷を始め、征韓派一同に辭職した。

征韓派で對抗運動したならば、勝を得るに難くなかつたらう。既に非征韓と決定しても、猶ほ同志が聯合して運動すれば、目的を貫徹するを得たらう。斯ることに淡白でもあり、力を頼みすぎて油斷大敵となつた。西郷が辭職し、近衞兵中の薩兵が之に從つて歸鄕し、容易ならぬ騷ぎとなつたけれど、騷ぎが大きい割に上つ面であり、非征韓派が巧みに動搖を喰ひ止めた。西郷に從ふ面々は、生命知らずの強兵でも、如何にも政治的謀略に乏しい。桐野利秋は性質豪快、兵を用ふるにも長ずるが、毛嫌するところと妥協せず、打ち棄てゝ置くので、打ち棄てられた者は承知しない。人は西郷の人物に信服しても、其の周圍を好まない。西郷も時として罵るを憚からず罵られた者は不快を感ぜずに居れぬ。大久保は容易に人を批判せず、適才を適所に置から

と努めると見え、又當にさう努めて居る。西郷と共にして居れば、いつどうなるかも知れず、大久保と共にすれば危げがないと思はれる一般世間で西郷の人望が遙かに大久保を越えても、政府に居る限り、大久保に從ふのが多い。大久保が親裁を仰ぎ、勅命で事を運び、權力に根底があり、浮浪人の親分と違がつて居る。西郷は大々的親分でも、詮議すれば浮浪人の親分を免れぬ。

西郷は自身の主張が通らなかつたので郷里に歸つた。大使出發前より西郷と大久保と漸く隔たり、茲に到つて全く分離した。然し若し大久保が西郷を訪問し、待遇の道を計つたならば、二人の交情が元に復したらう。長州派は二人が分離したので之幸ひとし、いよ〳〵分離させるに努めた。前ならば大久保が西郷を訪問して慰藉する所でも、今は最早さういふことをしない。大久保は權力を重んじ、反對者を威壓するを能事とし、江藤が佐賀で亂を起した時、之を梟首にした。明治八年大阪會議で木戸板垣が再び政府に入り、西郷をも入れる筈で、其の運びにならなかつた。西郷が承諾しなかつたのにも依り、大久保が適當の道を取らなかつたのにも依る。政府では最早西郷に頭を下げるを要しないとなつた。

然し薩州に私學校と稱し、西郷を戴いて相應の兵力が殘り、桐野篠原等が訓練に骨を折つて居り、兵器彈藥も少くない。政府で何とかして處分せねばならぬとし、處分の方法を考へ、明治十年一月彈藥を積み出さうとしたので、私學校徒が承知せず、之を奪つたが上、官吏の歸郷してゐるのを捕へ、西郷等を暗殺するとの口供を得た。口供が何程まで事實か、全く作りものか、疑問に屬するが、西郷は之を信じた。政府で人を暗殺するとならば、之を尋問せねばならぬとなつた。然し暗殺さるべき人が、單獨で上京するのは危險千萬といふので、私學校徒は我も我もと從つて行かうとする。桐野等は正々堂々軍隊を繰り出さうとし、何とも止めやうがなく、斯くなつては致し方なく、成行のまゝにし、そのうちに何とか仕樣もあらうとして、西郷が乘り出した。

桐野は熊本鎭台を陷れば進行を續け得るとしたが、熊本で喰ひ止められた。桐野は戊辰の戰爭を考へて居る。その後の兵器の進步に注意せぬでなけれど、注意がとゞかない。血氣な連中の間には、百姓兵などを刀で斬り倒せばよいと云ふ說が盛んに行はれ、前年暴徒が起つて熊本城に侵入したので、容易に侵入し得ると思つたのが間違つて居る。守備を整へては、幾門かの攻城砲を要する。それを考へねばならぬ。何しても私學校徒が兵力を頼み過ぎた。佐賀で江藤が亂を起しても、與かり關せず、薩摩は他の尻馬に乘らず、單獨で天下の大事を決するとしたのは、意氣は壯んでも、計畫が餘りに粗漏であつた。初め起る時に種々手違があり、現に熊本師團に保存されて居る西郷の書面も、西郷の筆でなく、その本意でもない。西郷は其の不都合を詰つたのである。總じて私學校徒の勃發は計畫を誤つた。桐野は將帥の器であつても、政治的運動を起すべき柄でない。二大隊を以てシベリアを横行する勇氣があつても、緻密なる計畫に堪へない。村田新八以下、思慮に富んだ人もあるとし、勢に制せられ、到る處で思はしく行かぬ。

政府は兵數が少く、それを薩兵の方で見縊つて居つたが、近衛兵を始め、鎭台兵を繰出し、巡査を繰出し、召募巡査を繰出し、大約臨軍

に二倍して居り、兵器彈藥及び其他必需品は金にまかせて調達した。後に何とかならうとして無限に不換紙幣を發行し、兎も角も金の融通がつき、軍費が四千萬圓を越えた。薩軍は明白を欠くが、決して四百萬圓を越えず、三百萬圓の下に居らう。小銃は薩軍一發官軍十發の割になり、後には薩軍が更に少い、それで八ケ月費し、九月二十四日、漸く平定に歸した。西郷は不可抗の勢に臨んで兵と共に死ぬる外なく、往くべきところまで往つて首を刎ねさせた。其の前にも「もうよからう」と言つたのが延び〳〵になつた。

官軍で費した所が四千萬圓、後の價格に換算せば幾倍の額に上る。それだけ損するなら、之を征韓に費して、何となつたか。西郷は强がち出兵すると言はず、使節として往かうとするのであつて、其儘平穩に局を結んだかも知れぬ。明治九年黑田が大使となつて條約を結んだのに徵しても、其れ位で終つたとも考へられ、それならば西郷と共に薩摩出身の近衞兵が歸らず、後に徐ろに兵制を改革し、薩摩の私兵を解散すればよい。西郷が韓國へ使しても、後に何かの機會に私兵の弊毒を免れぬと言ふか、それは分らぬ。さうかも知れぬけれど、征韓論の際、强ひて西郷の言分を遮つたのは賞むべき事でない。三條公が病氣で人事不省に陷つて仕方ないと言ふも、御裁可まであつたのを變へすは、明治年間に一の汚點を留めて居る。

西郷が首尾よく大使となつて成功したと假定し、其後に何となるか、そこは想像に過ぎないが、黑田が大使となつたよりも國力を大陸に擴張したらう。薩摩人が臺灣で開墾するよりも朝鮮で開墾するやうな事になり、多少對外關係を早め、日淸戰爭を早め、日露戰爭を早めたらう。其の利害得失は姑らく措き、普通に非征韓派が政府に留つたのを順當とするも、果して然るやに疑がある。十年の西南戰役は遺憾至極の事、亂が起らうとした時、何故に大久保や、黑田や、西郷從道や、馳せつけて西郷と直談判しなかつたか。イタリアでガリバルデイを虜にし、直に之を特赦した。日本で西郷の遺族を侯爵にする位なら、戰亂中に何か處置の手段があつたと思はれる。

後の如き悲慘なる戰亂は內地で再び起らない。明治維新の第一の功臣が十年を經て第一の逆賊として取扱はれる奇異なる運命を後の記錄に留めることになつた。西郷は國家に大功あるとしても見、國家に大罪あるとしても見ることに居り、そこに大西郷の性格がありありと現はれ、人間が成敗利鈍で價値を輕ずる者でないことを明かにする。

然し西郷は遂に充分なる適所を得なかつた。如何なるが適所か、それは何とも言ひやうがないが、現在の支那の如きに居らば之を統一するに誂へ向きではなからうか。支那に相應の人物が居りつゝ、惜しいことに西郷が居らない。大西郷ならば中華民國を統一し、國體を制定し、大總統職を他人に讓つて野に下らう。孫文ほどの知識なく、袁世凱ほどの知略なけれど、性格の重量は二人の到底及ぶ所でない。差し當り西郷の適所は中華民國の統一にあるとする。それでも西郷の履歷は徹頭徹尾日本人としてゞあつて、日本の國運の發展すると共に長く光輝を放たう。

凡愚列傳

『のつぼ』

長谷川如是閑

『おい、のつぼ、源太の小屋が糞だらけぢやねへか、今頃ひる寢なんかしてゐやがると又親方にがなられるぞ。』

源太といふのは、猩々の夫婦の亭主のことで、のつぼとは、一人のアイルランド人のことだ。

床の上に寢轉んでゐたそのアイルランド人は不精無精に、身體を起して、その猩々の檻の方へふら〱と歩いた。鐵の格子に兩手をかけた雄の猩々は、まともに此方を向いて歩いて來るのつぼの右の手に竹箒を杖について、左の手にバケツをぶら下げた姿を見ると、異様の眼付をして齒をむいた。その後ろには雌の猩々が、日本の女が洗濯をしてゐるやうな恰好で蹲つて、これはまた違つた意味の妙な眼付で、のつぼの姿を憫むやうに見てゐる。

二歩三歩、あるき出したアイルランド人の足どりはふら〱してゐる。彼れは醉つてゐるのだ。それは珍らしい出來事だ。

『ハテナ、俺は醉つてゐるのか……』

彼はふとそんなことを考へた。

『こいつは面白ろい、俺は醉つたのか知ら……インポッシブルだ！』

彼れは、自分を醉はせるやうなものを口にする機會をもち得るなんてことは、此二三年全く考へなかつた。

『でも俺醉つてゐる。ザッツ、ファンニー！』

アイルンド人は大聲を立てゝ笑つた。猩々の夫婦は驚いて檻の奥の方へ退いて、ふたり列んで目を丸くして、のつぼの怪しい擧動を見守つた。

實際のつぼは醉つぱらつてゐるのだ。然し彼れは、自分がどうして醉つぱらつたかを忘れてしまつたのだ。

のつぼはアイルランド人とはいふが、南洋邊で産れた拳鬪家であつた。彼れにも西洋人並みのジョージとかジョンとかいふ名前があつたのだが、それも彼れの拳鬪と一緒に、遠い過去に置き去りにされてしまつたのだ。

十年前に、南米で、もう一人のフランス人と共に日本の興業師に買はれて横濱について、二三年あつちこつちを打つて廻つたが、向ふで想像してゐたのと違つて、日本へ來たつて、モルコポロの話のやう

に、往來に金貨が敷つめてある譯ではなかつた。古ぼけた小人島の住家のやうな宿屋で、無暗と頭をうつことの外には、二人とも日本から何の印象をうけることも出來なかつた。でも來た當座は、知らぬ異國の景色や風俗に氣もまぎれてゐたが、一二年經つうちには、二人とも、もう日本に退屈して了つた。うつかり背延びもすることの出來ないやうな、窮屈な船の上の生活は二人を陰鬱にした。

その上、年が年中、決して相手の變らない八百長の拳鬪には一番閉口した。時々は、あんまり馬鹿々々しくなつて、二人とも全く氣がぬけてしまつて、舞臺の上で、お互に顏ぺたをグラブで撫で合つたりした。どうかすると、ヤケになつて、二人とも叩き合つて死んでしまひたい氣がしてルールもへつたくれもなく、ヒステリーの女が亭主にむしやぶりついたやうに、二人でこんがらかつたまゝ舞臺中を刎ね廻つた。そんな時は、無論、二人とも醉つぱらつてゐるのだ。

安物のウイスキーともつと安物の女とが、二人の健康と經濟とをめちやくちやにした。のつぽの相手のモウ一人のフランス人は、とうとう外國船の水夫になつて逃げてしまつた。人が好くつて、勇氣のないのつぽの方は、しばらくは、見物の中から相手になつて彼れに勝つたものは反物一反の景品を出すといふ約束で、相變らずその曲藝の一座と一緒に打つて廻つてゐたが、益々健康が惡くなるに從つて、相撲力の大關に投げ飛ばされたり、見物の拳鬪で立ち向はれてへとへとにされたりして、反物をとられ通しなので、興行主は腹を立てゝ、借金を云ひ立てに、放逐同樣に追つ拂つてしまつた。

間もなく彼れは、ウイスキーの萬引をやり損ねて、警察に引張られたが、船長の世話で、この猛獸狩の動物狩りに雇はれたのは、もう五六年前のことであつた。

それ以來、極端の貧乏と極端の不健康とは彼れをウイスキーと女とから引離して、無氣味にひよろ長い、陰鬱な、夕日をうけた一本杉の影のやうな男にしてしまつた。

『それだのに、俺は醉つぱらつてゐる。』

全く、インポッシブルだ。

頽廢が腦を犯して、既に言語障礙も認められるが、幸ひ自國語をしやべる機會などは絶對になくなつて、片言の日本語でやつてゐればそれは差支ないが、記憶力や理解力は老衰した老人のやうに衰へてしまつてゐる。でたつた今、町の公設市場で、何年ぶりかでウイスキーの二度目の萬引をやつたことも、それを小屋の物置に隱れて奇麗に飲んでしまつたことも、すつかり忘れてしまつたのである。

でも何だかひどく愉快になつて、十年前の好景氣時代が蘇つたやうな氣がしてゐるので、その時分そんな時に、日本語で『サー醉つた醉つた』と唄つたやうに、唄ひたくなつたが、然し盜み酒なので、生來醉不性者はず『俺は醉つてゐるな』と私かに考へたのである。しかも原因を忘れてしまつて、口の内で頻りに、

『インポッシブル！』

誠に『ザッツ・ファンニー』であるが、その恰好は、本人の腹の内のやうにファンニーではなく、頗るミゼラブルである。雲をつくやうに脊は高いが裸の上半身を見ると、その筋肉は至る所で剝いで賣つたやうに落ち凹んで、脊骨に沿ふて皺だらけの皮膚がたぶたぶにたるんでゐる

る恰好は、まるで雨に逢つた國旗が旗棹に卷きついてゐるやうだ。その皮膚の色も赤黑く燒けて、西洋人らしい白い所は、白なまずを思つてゐる老人のそれのやうに、所斑に名殘りを止めてゐるだけだ。その皮膚の所々に黑い長いうぶ毛がもや〳〵と生へてゐる樣子は、まるで膨湖島あたりの海岸の荒蕪地である。

汚れ腐つた白ヅボンをはいた兩足を踏ん張つて、ぐつと向ふを睨むと、そこには猩々の檻があつて、けだもの丶夫婦が怪訝な顏をして、地震を喰つた電信柱のやうにぐらついてゐるアイルランド人の姿を見つめてゐる。

今しがた仲間に怒鳴られた記憶の半分ほど殘つてゐるのが、猩々の姿を見ると同時に彼れの頭の裡に蘇つたので、彼れは更めてふら〳〵と猩々の檻の方へ歩いた。

猩々の雄は、常にこのアイルランド人にとつて苦が手であつた。彼れの姿を見ると、猩々は何度自分の身體で雌の猩々を庇ばうやうに覆ひ隱して、今もしてゐるやうに、異樣の眼付でつのぼを踏みつけるのである。のつぼが掃除のために檻の裡に入つて行けば彼方此方を逃げ廻るが、時々今にもつかみかゝり相な構へをして、のつぼを威嚇する。時には、狹い檻の中で、二人が、奇妙な摑み合を演ずることも珍らしくない。そんな時は、アイルランド人は必ず、

『源太、助平、やきもち、馬鹿。』

さういつて罵りながら、その雄の猩々と鬪ふのだ。

アイルランド人は、バケツの水を振りこぼしながら、ふら〳〵と檻に近いて、鐵格子の扉を開けた。が、いつものやうにすぐと中に入らうとしても身體は自由を失つてゐて、自分の手にもつた竹箒に入口を支へられて、一つ所をふら〳〵してゐるのみで、何うしても中に入れない。その間に、入口の近くにゐた雌の猩々は、のつぽの手の下をくゞつて檻の外に出てしまつた。

源太が續いてのつぽの肩を飛び越して外に逃げた時に、漸くのつぽはけだもの夫婦に逃げられたのに氣がついたが、その時は、源太の姿はもう見えなくなつてゐて、雌の猩々だけが、傍に置いてあつた大きい笊の前に坐り込んで、兩手にジヤガ芋をもつてムシヤ〳〵やつてゐた。

のつぽはよろけながらも飛んで行つてうしろから雌の猩々を抱いたが、その途端、何處にゐたのか、源太がいきなりアイルランド人の首玉にしがみついた。

アイルランド人は忽ち拳鬪家の本性が蘇つたやうに、よろけた腰を立て直すと同時に、源太の身體を二三間先きに突き飛ばした。

大地にころがつた源太が突差に身體を起して飛びかゝつて來た。その鼻先きめがけて、アイルランド人は猛烈な突きをくれた。源太は、向ふの板目に身體を打ちつけられて、けたゝましい叫び聲をあげて、苦し相にころげ廻つた。

この聲をきゝつけて、大勢が驅けつけた。そのうちの猩々使ひの男は倒れてゐる源太を抱き起したが、

『や大變だ！、源太の眼がつぶれた大變だ〳〵。』

と業々しく怒鳴り立てた。アイルランド人は初めてわれに返つて、思はず自分の手を見ると兩の拳は眞赤に染まつてゐた。

「やい、のつぽ！、手前、源太を盲目にしやがつたな。今度こそ、もう俺達の所には片時も置かれねへ。さあ、たつた今出てうせろ！」
親方の雷のやうな聲がのつぽの耳元へ鳴り響いた。
アイルランド人はどつかと尻餅をついて、子供のやうにおい〳〵泣き出した。

『重役よ！』

『珍なものを手に入れたよ。』
會社のクラブの午後だ。ホールの片隅に陣取つて閑談に耽けつてゐる五六人の下級社員のうちの一人が、さういつて謄寫版刷の小さい刷物をポケットから出して見せた。
『秘密出版だね。例の風聲物だらう？』
『大違ひだ。』
『赤いのか？』
『寧ろ青いのだらうね。』
『青いの？内容は？』
『詩……と稱してゐるのだがね。』
『稱してゐる、は心細いね。一體何を書いたものかね？』
『「重役よ」といふ題で、重役のことを書いたのさ。』
『「重役よ」はよかつたね。作者は何者だい？』
『××の社員だがね、この詩……だか何だかゞ祟つて首になつたわけさ。それをまた、あすこの社員がご丁寧にも謄寫版にして皆に分けたものだ。中々心掛のいゝ連中だよ。』
『面白相だな。そこで朗讀しろよ。』
さういはれて、若い社員は四方を見廻した。ホールには、此の一團の外に、もう一組同じ程度の社員が陣取つてゐるのみであつたが、それも呼ばれて此の仲間に加つた。
『ぢや讀んでやらうか。』

＊＊＊＊＊＊

ある失職詩人の遺（？）稿

重役よ！

編者のことば

又首が飛んだ！
今度は誰れの首？
わが社唯一の詩人、秋風の首だ！
あんな青黄ろい、かぼちやの花のやうな首、
花でなしに、かぼちやそのもののやうな首、
腐つても、へばりついてゐさうな首、
それがどうしてモギとられた？
筆禍！　呪はれた『重役よ！』の。
課の日記は、詩人がつけてゐた。
『重役よ！』を一行づゝ、
詩人はその日〳〵の日記の尻にかいた。
そゝつかしきものよ、汝の名は詩人だ。

帳簿と一つしよに、その日記を、
詩人は課長に手渡した。
重役會議のテーブルの上で、
『これは何だ？』と一人の重役が叫んだ。

溫厚な、おまけに二三本足りない課長、
日記なんぞは、ついぞ讀んだことはない。
のぞいて見ると、『重役よ！』

『しまつた！』が、もう遅い
見よ、重役は齒をむいた、
鏡を見せられた猿のやうに。
『免職だ。』重役は腹の裡で叫んだ。
『面白ろい奴だ。』重役は口の先で呟いた。

『面白ろい奴』の首が飛んだ。
何故なら、彼れは『面白ろい奴』だからだ。
『面白い奴』の詩は、課長の命令で、
丁寧に塗り消された、濃くすつた墨で。
その年度の日記の頁の端には、
太い黒枠が、秋風詩人を弔つてゐる。
それにしては、黒枠が太と過ぎる
重役の死亡廣告のそれよりも太い

その筈だ。われ〳〵にとつては、
失職の黒枠は、死の黒枠よりも太い。
秋風の詩（？）の編者よ。
お前の首も、やがて飛ぶだらう。
詩を作つた罪でなしに、
詩を寫した罪によつてだ。
天才の受難！
天才をかつぐもの〻受難！

＊＊＊＊＊＊＊

『人事でないやうな氣がするぞ。』
年配の社員がしんみりとした口調でさういつたので、一同はその社員の顔を見て吹き出した。彼れも時々日記にいたづらを書くらしい。
『これから本文だ。三月二十五日から始まつてゐる』
若い社員は朗讀をつゞけた。

＊＊＊＊＊＊＊

三月二十五日　重役よ！　お前がそれだ。
二十六日　重役よ！　おれはそんなものではない。
二十七日　重役よ！　君が押す、ボタンの端の私かな。
二十八日　重役よ！　胃病の外に怖わいものを知らぬ人種。
二十九日　重役よ！　『これでも若い頃、小説を書いた。』
三十日　重役よ！　その一人が死んだ（本文參照）。彼れの名はこの日記に殘る。

（『以下日附を省略するよ。』）

重役よ！ 運轉手曰く『主人が死んで、自動車を賣られねえ奴はない、片身に運轉手に呉れた奴もない。』

重役よ！ 『俺が生れて始めてもらつた給料は八圓だつた。』を何度仰つしやる。

重役よ！『君の妻君はいくつかね？』といふあなたの質問の意味？

重役よ！ あなたの門番の警部の名前が『忠犬』とは……。がよく見たら『忠夫』だつた。

重役よ！ 新聞は『强盗』と稱し、本人は『親戚』と稱す。

重役よ！ いつか三越で、恐ろしく美しい若い後妻を、あなたに引合はせた社員があつた。一昨日のあなたの質問の意味！

重役よ！ 俺より歳下の奴がゐる。

重役よ！『銀ぶらとは何だい？』とは何だい？

重役よ！ 肺病の方が逃げ出します。

重役よ！ 無算當の辨當を喰つて惡るければ、算當のつくやうにして下さい。

重役よ！ あなたの演說の『カルテルの現在と將來』には滑稽な間違ひがあると、その起草者がぬかしてゐます。

重役よ！『俺は生れて給料といふものを貰つたことはない。』盜んででもおいでしたか。

重役よ！『僕がケンブリッヂに居つた頃』はまだ時効にかゝらない？

重役よ！ 十三人産んだにしろ、『人口問題』などに口を出す必要はない筈だ。

重役よ！『俺のフイロソフイーに反する』は聽いた。

重役よ！ 何處の菓子でも私達にはうまい。

重役よ！ ほんとうの職人がもうなくなつたのは、私達のせいぢやない。

重役よ！『旱には卽ち舟を資し、水には卽ち車を資す、物の理なり。』の「資」はキャピタルの意味で、「物の理と」とはエコノミックス卽ち經濟學のことだ。』は確と日記につけました。

重役よ！ 金曜日の次の日は土曜日である。

重役よ！ ボーナスは爲替で送れ。

重役よ！『國家百年の大計』も大計だが、私の子供が今年中學に入ります。

重役よ！ 私共も『社鼠の擬はざるをこれ恐れ』てはゐるが、その理由は違ひます。

重役よ！ 金さへあれば『痛嘆に堪へ』ます。

重役よ！ あなた方が『怪しからん』といふ支那人は、あなた方を『怪しからん』といひます。

重役よ！『死ぬにはあたらぬ。』『さうや、努力が足らんのや。』『智惠も足らん。』金が足らんのだよ。

重役よ！『怒つちやいかんよ。』だつて。ヘン怒れるかい、考へて見ろ！

重役よ！『よし。』は癪に障る。『ご苦勞でした』はくすぐつたい。

重役よ！ こつちを向いて物をいへ。

重役よ！ 仰つしやられるまでもなく、あなたの自動車を時々失敬

してゐます。

重役よ！『これは三十年前の銀時計ぢや』

重役よ！　そこらをぶら〳〵しなさるな。

重役よ！　然り而して、令嬢の寫眞を雜誌で見ると、斷髮だ。

重役よ！『やつぱり深い所がある。』と課長いふ。私を、課長にしてくれゝば、さういつてやる。

重役よ！『ボヤがお邸で仕合せ、俺の家だと、留置場行きだ。俺は動産保險に入つてゐる。』と隣の奴がいふ。

重役よ！　足下の一顰一笑に喜憂してゐるのに、變な面をするなよ。

重役よ！　一つそのこと首にしてくれ！

重役よ！　昨日の一行は、謹んで取消します。

重役よ！　又同志討ちが始まつたか、無暗と待合に通ふ。

重役よ！『俺の名が出れば、總理大臣の名も出るからなア。』などと安心してはゐられません。

重役よ！　あなたの帽子がこゝにあるのに、あなたの電話が××省からかかつて來た。

重役よ！『誰れが何といつても俺が一たんいひ出したからには、』ですつて。誰も何ともいやしません。

重役よ！　偶にはほんとのこともいふ。『本社の今日あるは、一つに諸君の努力の致す所。』

重役よ！『運轉手がガソリンを呑む』など、大きな聲で仰つしやるな。

重役よ！　あなた方のために、命を惜しまぬ最後の人間―小使の爺さん―が死んだ。

重役よ！　三代目時代は近づけり！

重役よ！　…………

重役よ！　…………

＊＊＊＊＊＊＊＊

朗讀をきゝながら、一同は頻りに賑かな笑ひ聲を立てた。がそのうちに一人だけ、碌々笑ひもしないで、たゞ時々傍をむいて苦笑してゐる男がゐた。

その男は、つい一週間ほど前に入社したばかりでまだ馴染みが薄いし、いゝ加減の年配で、妙に眞面目臭つた樣子をしてゐる男なので、誰れも、彼れが大聲を立てゝ笑はないのを怪しまなかつたが、實はその男は、七八年前の自分のいたずら書きが、今頃刷物になつて、こんな所で讀み上げられる不思議の成行きに驚いてゐたのであつた。

赤も白もない親爺

若い赤軍の士官は、夢うつゝのうちに人聲をきいた。閉ぢた瞼にうす明かりを感じたので、彼れは夜のあけてゐることを知つた。が、疲れ切つた身體は、釘づけにされたやうにベットに押しつけられて、身ゆるぎをするのも憶劫だつた。

人聲がだん〳〵はつきりして來た。突然、割れるやうな笑聲と共に佩劍の響らしい音がガチヤ〳〵と聞へた。

士官は思はず眼をあけた。

同時に、士官は、全體に水を浴びたやうな悪感を覺へた。

彼れの眼に映じたのは、室の眞中でサモワールを圍んで茶をのんでゐる五六人の白軍の士官の姿であつた。

昨日、赤軍はウランゲル軍を撃退して、此村を占領したので、若い士官は此のむさくるしい農家のペットを借りたのであつた。然るに今朝、白軍の士官がから大勢こゝに居る所を見ると、恐らく、未明に白軍の逆襲を喰つて、赤軍は此處を放棄してしまつたに相違ない。

自分一人取り殘されたのだ。さう思ふと士官は、頭がぐら／＼として、氣が遠くなりかゝつた。殘忍なウランゲル軍が捕へられた敵の士官を何んな風に取扱ふかを彼れは十分知つてゐたのだ。

それにしても、今まで彼等が自分に氣のつかなかつたのは訝かしい。若い士官は、數日間の不眠不休の進行と、敵軍を撃退した安心とのために、昨夜はもう精も根もつきて、ペットを見ると、赤子が母の乳房を見せられたやうに、そのまゝその上にぶつ倒れて、忽ち前後不覺になつてしまつたのだ。無論、軍服をぬいだ覺へなんぞはない。

と思つて、そつと自分の胸の邊を見ると、その軍服が、昨夜こゝの親爺が着てゐたのと同じやうな着物に代つてゐる。

何が何だか譯がわからなくなつたが、とにかく白軍の士官等にこつちを見られないやうに、息を殺して寢たふりをしてゐた。

『おゝアンドレー、眼が覺めたか。』

昨夜の親爺が、こつちを見て大きい百姓聲でさういつた。彼れは寢たふりをしてゐるつもりだつたが、いつのまにか大きい眼をあいて考へ込んでゐたのであつた。

彼は親爺にアンドレーなどゝいふ名で呼ばれたのでびつくりしたが、親爺の目つきですぐそれと悟つた。が何う返事をしていゝかわからないので外方をむいて默つてゐた。

『何者だ、そいつは？』

親爺の聲をきいてこつちを見た白軍の士官のうちの一人は、さう云つて怒鳴つた。

『伜でございます。』

親爺はぶつきら棒にさういつた。

『何うして白軍に加はらんのか？』

外の士官が怒鳴つた。

『これの兄が白軍で働いて居ります。これは少々身體をわるくして、ずつと床について居りますので……。』

白軍の士官達はやがて揃つて出て行つた。

親爺は、それを送り出すと、扉の閂を下ろして、大卓子の上を片付け出したが、寢てゐる若い士官の方をふりむかうともしなかつた。若い士官は親爺が、自分をまるで伜のやうに扱つてゐると思つた。

『おとつさん！』

彼れは百姓の伜のやうにさう叫んで、毛布をかなぐりすてゝ、ベットから飛んで降りて、いきなり後ろから親爺に抱きついた。

『おとつさん、ありがたう。此恩は死んでも忘れんぞ。』

士官は外を憚つた低い聲で、腹の底からしぼり出すやうにさう云つた。

『飛んだこと云はつしやる。おやぢが忰をかばうに、禮をいはれることはねえだよ。』

親爺はさういつて、士官に抱きつかれたまゝ、卓子を拭いてゐる。

『お前の忰は白軍で働いてゐるといつたのはほんとうか？』

士官は、無論、親爺のその場の繕ひに過ぎなかつたのであらうと思つたのだ。

『ほんとうでございますとも。忰は白軍の下士で居りますぢや。』

『俺は赤軍だぜ。おとつさん』

士官はさういつて親爺の肩に兩手をかけて搖すつた。

『わし共には、赤が何だか白が何だか皆目わかんねへでがすが、たゞもう忰が無事であつてくれゝばと、それぱつかり念じて居りますのぢや。あんたの親御さんも乾度さうに違へねへだよ。』

親爺はさういつて、サモワールを兩手にもつて勝手の方へ歩みながら呟くやうにいつた。

『ロシア中の親爺はみんなさう思つて居りまするぢや。』

二つの典型

波止場の屋臺店で一杯のんだ火夫の谷公と油差の島公とは、町の祭でむさくるしい見世物小屋の列んでゐる遊園地を好機嫌で押し廻つた。

『おい島公、一寸待ちなよ。「箱詰美人の鋸引き」だつてよ。面白いぢやねへか、入つて見ようよ。』

と谷公は相手を引張つた。

『よせよ、こんな田舎の見世物なんか見られるかい。』

『大きなことといふない。東京へ行つたつて、浪花節一つきゝに行く金もありもしねへ癖に、芝居は帝劇か歌舞伎でなきやあ聽いて呆れら。入つて見ろつていつたら入つて見ろよ。箱詰美人の鋸引きたうぢやねへか、話の種だ。』

『何が話の種だい。そんなものは五十年も前に、淺草の六區が奧山つていつた時分に流行つた見世物だてへことは、おら親父から耳にタの出來るほど聽いてゐら。』

といふが實は島公は、何年か前にそんな奇術師の小屋に雇はれてゐたので、それを知つてゐるのである。

『いゝから來ねへつてことよ。』

二人はとう／＼その「箱詰め美人の鋸引き」の小屋によろけ込んだ。

舞臺では、馬鹿に丈の長いフロックコート——といつても殆んど黒くで、尻の邊りには半巾でもハミ出したやうに白いものゝ見えてゐるのを引ずるやうに猫背の低い老人が何かしやべつてゐたが、やがて、「太夫お目通り」とか何とかいふと、腺病質らしい、横から見るとせんべいのやうに薄ぺらな小さい女が現はれた。

これが眞黒だつたら黒白も分かぬといひたい位、眞白に塗つてはゐるが、その顏がどうやらフロックの老人に似てゐるところを見ると、多分親子だらう。從つてその洋裝——には相違ない——も、老人のフロックと親たり難く子たり難いもので、たゞ雌雄を異にするだけであ

る。

　この女がやがて、舞臺の眞中に据ゑてある大きい箱に詰め込まれるのだが、老人は、見物の中から此女を縛り上げる人が二人だけ舞臺に上ることを要求した。

『おい、行つてやらうや。』

　島公はさういつて谷公を促した。

『何うするんだい？』

『何うしてもいゝやな、俺が心得てゐるから一緒に上がれよ。』

『でも、勝手がわからねへや、かまをたく調子にや行くめへだらうぢやねへか。』

『俺が一つあのアマ泣かして見せるから、一緒に上れつてことよ。手前がいひ出し屁でこゝへ入つたのぢやねへか。』

　舞臺の老人は、見物のうちから請求に應ずるものが出ないので、頻りに焦つて怒鳴り立てる。

『美人をふん縛るのですぜ。そんなことをあなた方がなさりたいからつて滅多になさることは出來ません。なさればあべこべに警官にふんじばられる。それをこゝで大威張りでさせてあげます。どなたでも御二人がゝりで、此細引で美人を縛り上げて、その先を箱の穴から外へ出して、お二人でグイと引張つて居ていたゞきます。さうして、大鋸で此箱を眞中から二つに引き割ります。中の美人も、頭の腦天から股ぐらにかけ て眞二つに引割れる……さあ、誰方か御上り下さいませんか。』

『おい上つてやるぜ。』

　島公はさう叫んで、谷公を引張つて舞臺に飛び上つた。

　島公は、ポカンと突立つた谷公に構はずに、女を細引で縛り出した。

『何うか肘と膝と足だけに願ひます』

　と老人はいつた。

『解つてらい。默つて見てやがれ。』

　島公は頻りにそれを繰り返しながら、女の身體をあつちこつちにこづき廻して、とう〳〵縛り上げてしまつた。

　女はやがて箱の中に入れられ、紐は左右の穴から外に出して、島公と谷公とが兩方からそれを引張つた。

　フロックの老人はブリキに刄をつけた長い鋸をかつぎ出して、それを箱の眞中の隙間に紙の張つてある所にあてがつて、下まで引き割る段取りとなるのだが、何うしたものか、老人は鋸をかついでまご〳〵してゐて、いつまで經つても引かうとしない。

『おい、早く引かねへかい。』

　島公はさういつて怒鳴つた。それをきつかけに見物も口々に罵り出した。

　老人はためらひながら、それでも鋸を箱の眞中に押しあてゝ、

『愈これより箱詰美人は鋸引き……』

『おとつさん待つておくれよ。』

　途端に箱の中から細い聲が聽へた。

　老人はびつくりして鋸を外づしてしまつた。

『アッハッハハ。おとつさん待つておくれよだつてよ。』

島公は、紐をぐい〳〵引張りながら、頻りに大聲を立てゝ笑つてゐる。

『何うした爺さん、早く引けよ。』

『中で女が腐つてしまうぞ。』

『何うした、何うした。』

見物は口々に罵り出した。

『だめだよ、おとつさん、出しておくれよ。』

箱の中から女の泣き相な聲がきこえた。

『アッハッハ。おとつさん、出しておくれよだとよ。アハッハハ。』

島公は一人で面白がつて笑つた。

『とつさん、幕を引きねへな、幕を。』

谷公はさういつて怒鳴つたが、生憎、此小屋にはそんな洒落れたものはなかつた。

『出しておくれつてば、おとつさん。』

苦し相な女の聲がきこえた。

『どうしたよ、腹でも痛み出したか？』

老人はあわてふためいて箱の蓋を倒すと、女は入れられた時のまゝで、身動きもならないやうに兩方から引張られてゐた。

『何うか紐をゆるめて下さい。』

老人も泣き相な聲を出して左右へ頭を下げた。

『あゝ面白ろい、〳〵。』

島公は紐を離してアッハアッハ笑つてゐる。

見物は『馬鹿にするな。』『木戸錢を返せ。』などゝ口々に怒鳴り出した。フロックの老人の妻君らしい木戸番の婆さんは、お客に取りまかれて、錢箱を抱へ込んで慄へてゐる。

箱から出た女は、白粉の剝げを汗と涙でめちゃ〳〵にして、ベソをかきながら老人に怒鳴り立てた。

『だからおとつさんは頓間だつていふんだよ、小刀を何處かへ落しちやつたぢやないか。何のために後見してゐるんだつていふんだよ。間拔にもほどがあるぢやないか。こんな恥をかいて何うするつもりなの。皆が笑つてゐるぢやないか。あしたから稼業も何も出來やしない。私、口惜しい。死んでしまひたい。』

『まあ靜かにしなよ。小刀がなかつた？ をかしいな、たしかに荷物に入れて置いたがな。何處へ落したのだらう。』

老人はうろ〳〵舞臺を見廻した。

谷公は氣の毒さうに、

『まあ仕方がねへ。仕損には幾重にも御容赦だ。皆かんにんしてやれつてことよ。木戸錢なんか何んでへ、けち〳〵したこといふない。』

と入口で騒ぎ立つて居る見物を怒鳴りつけた。

『おい、おとつさん、小刀はいくら探したつてそんなとこに落ちてやしねへよ。』

島公はさういつて、隱しから小さい小刀を出して自分の鼻の先きで見せびらかしながら、

『そーれ、種はこゝにあるんだ。』

老人も娘も呆れ返つて、たゞ眼をぱち〳〵させてゐる

『やい島公。』

谷公はいきなり、さう怒鳴つて島公の胸倉を掴んだ。
『何をしやがる。』
『何も糞もあるかい。うぬは此親子に何の恨みがあつてそんな眞似をしやがつた。こいつらだつて、道樂や醉興でこんな眞似をしてゐるんぢやねえや。これで命をつないでゐるんだぞ。弱いものいぢめとはうぬのことだ。仲間の面よごしだ。さあ、こゝへ兩手をついてこの親子にあやまれッ』
『へッ。ご大相なことぬかすない。誰れがこんなくさやの乾物にあやまる奴があるかい。餘計な御世話だ。放せッ。』
『あやまれッ。』
『ウッフ。手前、こんな化物見たいなあまつちよに氣があるんだな。よせやい、見つともねへ。』
『何をぬかしやがる。此の油虫！』
『何だこの隠亡！』
充分に醉の廻つた二人は、もみくちやにされた紙屑のやうになつて取つ組み合つた。
貧弱な舞臺は、大地震を喰つたやうにぐら〱揺れた。
見物は木戸錢の取戻しを忘れて大喜びで喝采した。

訂正

前々號『凡愚列傳』の『七たび生れてアイスクリームを賣る』の中の『ギユウセッペ』は『ヂウゼッペ』。右の外發音の御注意を賜つたOS氏に御禮を申します——筆者

病閑消息

古泉千樫

大正十五年十月六日　大熊長次郎へ

武藏野獨吟

衰殘の病躯遊ぶや秋の晴
庭いつぱいに筵芋干す
竹村のなかを流るる水のみて
刑務所街の靑物の畑
われ一人渡しわたりて土手の上
さぶうなりたる多摩の川風

十月十五日　長次郎へ

床の上に今宵は一人夜寒かな
御會式前の太鼓きこゆる
ほがらかに木犀匂ふ道をきて
見合の寫眞すでに百枚
山の端をはなれんとする月の色
稲の車を押してやりけり

十二月七日　水町京子へ

常病みの我と思へど風邪心地

起きてをれば人なつかしや冬の雨
煙草すはねば歌もあらなく冬の雨

十二月十三日　京子へ

この冬の寒さ徹ふる命かな
起きてをれど時雨袋のあぢきなさ
日に一度土さへふまず冬ごもり

昭和二年一月十六日　増田留吉へ

岡本文彌短歌朗詠放送に留吉木魚をたたくときゝて

留吉がたたく木魚も時雨けり（一茶）
南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛（良寛）
よひよひに火鉢に香を焚かしめて（千樫）

一月二十一日　長次郎へ

さまざまの家の閾をひく冬日哉
むらがり來なくひよどりの聲
山あひにいで湯のけむり見えそめて

一月二十六日　京子へ

松屋より配達物や冬籠
靜かに匂ふフリジヤの花
うつたかき子規全集をながめゐて

一月三十日　京子へ

障子あけて冬の白雲見たるかな
二ふさ三ふさぽんかんの味
歌よりもひとり連句ぞおもしろき

五月五日　長次郎へ

行春やくろくたまれるへその糞

北海行

佐佐木信綱

（改造社夏季大學講演の爲札幌に赴く、その前後の作）

大き海に月おし照れり船艫を離つ瀬なして流れ散る浪（津輕海峽）

金網もてくきれる欄に晝の日照り衣にまつはるけもののにほひ（大沼養狐場）

空は澄みてあかしや並木さらさらと朝風にゆるるすがしき大路（札　幌）

遠々し牧の上の空の眞白雲秋のこころはすでに動けり（眞駒内牧場）

放牧の牛むれ歸る黄昏をほのぼの赤きくろうばのかたまり

兒ははしやぎて乳牛のはづな引つぱれりそが赤き衣風にふくらみ（場内に丁抹人の家あり女兒遊べり。）

牧草のふみ心地よさ羊としここに生れなば物おもはざらむ（月寒種羊場）

大地の底に國ありますらをの生くべき國はなしといはずやも（夕張炭鑛）

白墨もて事務所の壁板に書きてあり「彼の女は恐らく私の事を思つてはゐまい」

川にそふ湯室の窓の色がらす赤く青くなびく川をちの木立(登別温泉)

輕便をおりたるは父かいたどりの花のひま分け走せこしむすめ(支笏湖途上)

一めんの大雪原にならむ日を思ひつつ手折る女郎花のはな

この深山に八尺の雪に籠るとふうつそみ人は生きざるべからず

初秋の夕づく光まさびしくこの山の湖の波の色の蒼さ(支笏湖)

湖岸の波のゆれおとやや強く夕べさむ〱と風出でにけり

枝まじふるひろ葉とがり葉朝日てりかげやはらかき湖岸をゆく

接骨木のくれなゐの實のさゆれゆれ鳥が啄みだれ山の雨きたる

二三軒屋根よせてをり蒼き湖の向うの岸のさびしき湯宿(湖の對岸にささやかなる温泉宿あり)

驛前の夜ふけつめたき雨風に客あふれたる古きほろ馬車(旭　川)

時事語彙解說

立入禁止

地主側が小作側に土地の耕作を禁遏する行爲。勞爭の場合に於けるロック・アウトに比すべきものにして、農爭に際して地主側がこれを行ふ。近時それが小作權を侵害するとの理由から、作人側から猛烈な反對運動あり。

立毛差押

毛は毛見などに謂はゆる穗の意義。稻作の收穫が濟まざる間に、即ち刈入れずして未だ田にある間に差押へること。小作米の納入を危險と見越したる場合等に地主側が行ふ。麥作等もこれに通ず。

地租移讓

政友會が在野時代から、地方分權を實現する手段として提唱せる政策。地租を國家より地方政體に移動し、從來の國税を地方税たらしめんとの主張。但しこれを府縣に移動するか、或ひは自治體に移動するかは、肝腎の政友會内部にも甲論乙駁ありて決せず、民政黨あたりでは、地租と同時に營業收益税を併動せざれば、地方によつて不公平を免れずと反對す。

關税自由

關税自主ともいふ。支那は元來、治外法權國として列國と對等の條約を締結し得ず、それがため關税の如きも、場所に依つては外國商團の管理に委任する狀態なり。體面と收入の兩面的必要から、その課税權を支那國家に掌握せんとする要求。

出廠税

關税自主權の確立に至る過渡的徴税法として、蔣介石を主盟とせし南京政府が考案せる新税。外人經營の工場から製品を搬出する際、これに一定率の税金を賦課して窮乏の財政を緩和せんとしたり。新聞のいはゆる不當課税とはこれを指す。南京政府の頽勢により、外人の鼻息を窺はねばならぬ必要が增大して、最近はそれも有耶無耶となつた如し。

釐金税

支那に行はれる內國關税の名稱。通過すべき河口、橋畔、埠頭等にて貨物に賦課する租税。各省督撫の直轄なれば、何れも省內に無數の分局を設けて徴集す。

便衣隊

正服隊に對する平服隊の意味。一定の軍事的教練を經ざる學生、勞働者等が、日常なる服裝のまま武器を着用して軍事行動をなす。多く共產系の分子にして、南方派の崛起當時は盛んにその猛威を逞しうせり。わが建國會がこれを摸し、モガ・モボ征伐に便衣隊の名前を僭稱せりと新聞に見ゆ。

第三史觀

高田保馬博士の造語。河上肇博士の一本槍的な唯物史觀說を批評せる際に用ふ。イブセンの戯曲は、靈肉合致の世界を名づけて第三帝國と呼びたれど、同じ意味に於いて、唯物史觀に非ず唯心史觀に非ず、物心兩者が社會の歷史的發展を規制すと觀る解釋ならん。詳しくは知らず、古き『改造』を探して高田博士の論作を讀まれたし。

芥川龍之介全集編纂につき謹告

今回芥川龍之介全集を編纂致しますについて俳句歌書翰其他を汎く蒐集致したいので、それ等の材料御所持の方は左記條項御承知の上どうか私達に一時御貸し願ひたいと存じます。尚此旨御心當りの向へも御傳達願へると幸甚です。

一 御郵送は至急に願ひます。
一 材料は凡て肉筆を希望します。
一 書翰は御差支の部分は公刊の際削除しても宜しうございます。
一 取捨選擇は私達に御一任願ひます。
一 御貸與の品は複寫の上順次書留郵便で御返送致します。
一 御送附は東京市神田區南神保町十六番地岩波書店內佐佐木茂索宛に願ひます。

昭和二年九月

芥川龍之介全集編纂同人（いろは順）

小穴隆一　久米正雄
谷崎潤一郎　小島政二郎
恒藤恭　佐藤春夫
室生犀星　佐佐木茂索
宇野浩二　菊池寛
久保田万太郎

饒舌録（感想）

谷崎潤一郎

芥川君の葬式の歸りに、泉、里見、水上、久保田の諸君と一緒に小石川の偕樂園へ落ち合つていろ／＼追懐談をした。その時里見君の話に、「近頃芥川君は小説を書くのが實につらい、實にむづかしいと云つて頻りにコボしてゐたさうだ。僕はそれを人傳に聞いたので、今更そんな氣の弱いことではいけない、むづかしいことは始めから分つてゐるのだから、どうか力を落さずに、是非奮發して押し通してくれ給へと、人を介して同君に忠告したことがあつた。さうしたら大いに有り難いと云つて感謝してゐたさうだがね」と云ふことであつた。これはいかにも里見君と芥川君との氣質の相違を對照的に見せてゐて面白い。水上君は又例のキビキビした調子で、「芥川君の作品には隨分前から疲れが見えてゐたね。僕は一ぺん同君の前で失禮ながら君は非常に疲れてゐると直言したことがあるんだよ。さうしたら、全く君の云ふ通りだ、自分でもそれはよく分つてゐるんだと云つてゐた。」――と、そんなことを云つて、「要するに芥川君は小説はまづかつたと思ふね。才人ではあるが小説家ではなかつたね。僕は此の説を三田の連中の前で公言したら、怪しからんことを云ふと云つて大いに攻撃されたがね」と云ふのであつた。攻撃した人はどう云ふ意味合ひだつたか知らぬが、私は水上君の意見に徹頭徹尾賛成であつた。そしてかう云ふことを云つた。――芥川君は實際小説家ではなかつた。小説を書くには不向きな人だつた。若しあの人が徳川時代に生れて琴棋書畫の趣味の中に生き、昔風の文人墨客として立つて行けたら、思ふ存分に才能を發揮することが出來たかも知れない。つまり時勢が悪かつたのだ。一と時代早く世に出たらもつと傑出したであらうと。すると水上君は、なあに、昔風の文人墨客でなくつても、今の時勢でももつと適當な境地があつたのだ。たとへばエッセイストになつたらどうだつたらう。僕はあの人がセチ辛い文壇などへ飛び込まないで、大學のプロフエッサーでもしてゐて、傍ら夏目漱石論でも書いてくれたらば、可なりわれわれを啓發しただらうと思つて甚だ惜しい氣がする。假りに小説家に

なるにしても、やはり夏目さんのやうに四十ぐらゐまで學者生活をして、それから書き始めたらもつと大きくもたれたらうし、長續きもしたか知れない、と、さうも云つた。私は此の說にも一應は同感した。人間と云ふものは處世術を誤まると飛んだ不幸を持ち來たすことがある。芥川君は聰明な人だつたが、第一歩の踏み出しを間違へて文壇へ足を入れたために、あんなことになつたのかも分らない、と、ちよつとそんな氣もした。けれども文藝へ直接して見ると、故人は恐らく神經質で四方八方へ氣がねをするたちであつたから、エッセイストになつたとしても、果たして自己の信ずるところを無遠慮にズバズバと云ひ切れたかどうか。森鷗外氏のことをほんのちよつと惡く云つてさへ、あんなに氣にしてゐた程だから、一層自分に關係の深い夏目漱石論なぞはトテも思ひ切つて書けなかつたであらう。書いても曖昧な、奥齒に物の挾まつたやうな、さぞ讀んで氣持ちの惡いものが出來たであらう。芥川君に缺けてゐるのはエッセイストたるの見識、學殖、批評眼にあらずして、それを發表する勇氣なのである。生前、私なぞに對しても、極く打ち解けた場合にはずゐぶんアケスケにいろいろの意見を述べたものだが、そんなときには私はいつも故人の批評眼の正確にして卓越してゐること、その趣味の廣汎なこと、眼界の幅の廣いこと、古今東西の藝術はもとより人物評などでも可なり細かく、皮肉なところを見てゐることにしみじみ感心したもので、ただの茶飲み話をしてさへ敎へられることが多いのだから、せめて此の人が何か纏まつた評論でも書いてくれたら、どんなにか文壇を益するか知れないと思つたくらゐだつた。見識や批評眼のない者に所信は要らない、が、人を傾聽せしむるに足る立派な意見を持ちながら、而も勇氣がないこと、——此れ實に惜しむべき芥川君の缺點であつた。

○

文壇と云ふところはセチ辛いかも知れないが、しかし世間は何處へ行つたつてさうさう樂な所はない。たとへば政治家、官吏、實業家等の社會はどうか。

私は實業家の方面はよく知らないが、政治家や官吏の社會に比べれば文壇の方がずつと住み心地がいいだらうと思つてゐる。嫉妬排擠、讒誣中傷は勿論何處の社會にもある。しかし文壇人は一般に正直で單純である。人を憎むことはあつても、陰險な詐略を以て人を陷れ、起つ能はざる打擊を與へて自ら快とするやうな殘忍な行爲を敢てする者は絕對にない。反感があれば露骨に表白するまでで、アトはあつさりと忘れてしまふ。多少根に持つことはあつても進んで相手を排擊するまでには至らず、遠くの方でぶつぶつ惡口を云ふくらゐなものである。中には卑怯な小細工をしたがる者もあるだらうが、政治家や役人などの惡辣な手段に比べれば、それも極く罪のない子供瞞しのいたづらのやうなもので、一人前の男子なら齒牙にかけるにも足らぬものである。藝術家は生活振りが放縱であるの、頽廢的であるのと、教育家や警視廳あたりは目の敵にして、危險思想や惰弱な習慣はみんな文

壇の罪のやうに云ふけれども、その實私は、文壇の方が一般の社會に比べて道德の標準が一段高いやうに思ふ。文壇人には、當今の大臣や代議士や役人の如く衆人の前で見え透くやうなうそをついて恬然として居る者は一人もない。われわれはそんな膽力もずうずうしさも持ち合はせない。われわれだつて惡いこともするし罪も犯すが、人からそれを指摘され、自分でも惡かつたと云ふことが分れば、男らしく告白して社會に謝し、その責めを負ふ。決して何處かの國の政治家の如くうそや非行がバレかかつても鷺を烏と云ひくるめて、自ら免れて恥づるところなく、傲然と社會の上層にのさばつてゐるやうなことはしない。假りに松島事件のやうな裁判沙汰が文壇の間に起つたら、あんなに被告と證人の陳述がひどく喰ひ違ふことはなく、事件の眞相は譯なく明白になり、誰が惡いかは直きに極まつてしまふであらう。いや、恐らくは關係者一同「自分にも幾分の罪はあります」と云ふだらう。そのくらゐの良心を皆われわれは持ち合はせてゐる筈である。一つには小說家や文人の私行に就いては世間が好奇心の眼を以て見るので、告白する必要のないことまでも隱して置けない立ち場にある。引き合ひに出すのは恐縮であるが武者小路君の家庭の事件など、批難する意味でか冷やかす意味でかたびたび新聞の材料になる。武者小路君はああ云ふ人だから、聞かれれば差し支へのない限りどんどん云ふ。政治家共だつたら下手ッ隱しに隱すやうなことを、サラサラと云つて除ける。かう云ふしきたりには弊害もあるけれども、勢ひ文壇には虛僞や猫ッ冠りが存在しないことになつて、如何ばかりそこの空氣を明るく晴れやかに、清潔にさせてゐるか知れない。

ところで私は、嘗て芥川君と此の話をしたことがあつた。芥川君も私と同意見で、「全くさうですよ。またしも文壇が一番無邪氣でいいですよ。僕はこの間大學のプロフエッサー連の軋轢の激しいことを聞きましたが、そのやり方が陰險で女性的で而も執拗を極めてゐるには、聞いて實にあきれましたよ。學者なんてひどいもんですな。あれぢやあ僕なんか一日もゐられやしない。夏目先生が逃げだしたのも尤もですよ。」と云つてゐた。さうして見ると芥川君は、たとへ大學の教授になつても夏目先生よりもつと早く逃げ出したことであらう。彼は自ら一番住み心地がいいとしてゐた文壇にさへ住むに堪へなかつたのである。

何と云ふ傷ましい人であることか。

○

芥川君の藝術は、その小說は、所謂「小說」として讀んだら或ひは飽き足らないかも知れない。それは此の世に生活するのに最も不向きな體質と氣質とを持ち、而も最も多方面な才能に惠まれ、最も明晰な頭腦を備へた一つの魂の、苦悶の歷史と見るときに私は多大の價値を感じる。その苦悶も決して大袈裟な、傷ついた猛獸の如き呻りではない。微かなあえぎ、喘息病みの息のやうなものが多く作品を通して

開かれる。君は新進作家時代にしば〳〵形式の完成と云ふことを主張されたが、そんなことは君の作品に於いては實はどうでもいゝことである。晩年の故人は恐らく私の此の說を首肯されたことであらう。兎にも角にも、もつと馬鹿であるか、もつと健康であるか、孰方かであればもつと幸福に暮らせたであらうに。

○

正宗白鳥氏の「中央公論」の劇評を讀んで、感じたことの二三を記し、併せて同氏の敎へを乞ひたい。

たしか去年の暮れだつたかに、帝國ホテルの一室に於いて、久し振りに――と云ふよりもむしろ初めて白鳥氏とたゞ二人きりで、一時間ばかり茶を飲みながら雜談をする機會があつたが、そのとき私は、文壇では讀むいゝ脚本、――レーゼドラマといふものを頭から輕蔑する風がある。「讀んでは面白いが、舞臺にはかけられない」と云ふ一言の下に片附けてしまつて、さう云ふものは眞の脚本ではないとする。しかしながら讀んで價値のあるものならば、それも一種の藝術であることはたしかである。舞臺に上演出來ないものは脚本とは云へないと云ふなら、それは名前の爭ひであつて、ほかに何とでも名を付けたらいい。けれども上演に不適當であると云ふ一事を以て、その作品の藝術的價値までが上演出來る脚本よりも劣つてゐるやうに看做されるのだつたら、不都合である。さうして事實はその反對の場合の方が多いやうに思はれる。と云つたら、白鳥氏も同感され、「それは私が疾うから云つてゐることなんだ」と云はれた。

われわれが創作をする場合に、その取り扱ふ內容の種類に依つて、普通の小說の形式よりも脚本の形式に於いて表現する方が、扱ひ易く、且效果を出し易い時がある。假りに私なら私がさう云ふ作品を書く場合には、頭の中に一箇の空想の舞臺を作る、さうしてそこにいろいろの人物を登場させ、いろいろのセリフやしぐさをさせ、實際の芝居を見るが如くに感じ、さてそのまゝを紙上へ寫し取る。この過程は幾分か自ら努めてもさうするのだが、時には自然と舞臺が腦裏に浮かんで來て、否でも應でも脚本の形式を取らなければならなくなる。さう云ふ作品に接する讀者は、やはりめいめいの腦裏に空想の舞臺を作り、作者の空想が見たのと同じ芝居を見せられる。作者はそこまでは豫想してゐる。けれども空想の舞臺と實演の舞臺とは違ふのだから、それが俳優の手に依つて劇場で演ぜられるのに適するかどうかは、問題にしてゐない場合も有り得る。

私がこんなことを云ひ出したのは外でもない。いつたい芝居と云ふものはそれが夢幻劇であれば勿論空想の美しさには及ばないし、されば寫實劇に於いても、――或ひは寫實劇であればあるほど、一層わざとらしい、うそらしい感じを伴ふものである。何しろそれぞれの個性や生活を持つた俳優と云ふ生きた人間が寄り集まつて、或る一個人の頭から出た一つの世界を組み立てるのであるから、その性質

ば、どうしてもちぐはぐになり易いものゝやうに思はれる。たとへば自然主義の戯曲など、日常生活の一方の壁を取り除いたやうに演ぜられなければならないと云ふが、それは觀客に「そのつもりで見るべきものである」と云ふ手心をさせるだけのことで、事實日常生活の通りに演ぜられる芝居なんてあるものぢやなからう。少くとも私は、そんな芝居を日本で一度も見たことがない。イプセンやストリンドベルクの劇を優秀な俳優が演ずれば面白いには違ひなからうが、その面白さはほんたうらしいことにあるのではないと思ふ。(此の事は先へ行つてから述べる)。

　ケーベル博士は、音樂の演奏を聽くよりも音譜を讀んでその音樂を空想した方が樂しいと云はれた。さうして此の事は脚本に就いても幾らか眞である。久保田萬太郎君の戯曲を讀めば、私は自分の腦裏の舞臺に殆んど完全にあの世界を再現することが出來るが、假りにあれの實演を見たらその美しい世界は却つて壞されてしまふであらう。私自身の乏しい經驗から云つても、曾て一度も自分の作品が自分の思ひ通りに舞臺の上に再現されたことはなかつた。私はいつも、それを舞臺監督や俳優の罪であると云ふよりも、大部分は芝居そのものの缺陷から來るのだと云ふ風に感じた。それは作品が讀む脚本であつて眞の脚本でない證據だと云はれさうだが、私のものは兎に角、久保田君のものなどが實演に適しないと云ふことになれば、芝居の領域がそれだけ狹いことを意味する。

　いつであつたか帝劇へ露西亞のオペラがかかつたとき、階下で芥川君に會つたら、「オペラと云ふものを初めて見たが、舞臺装置や扮装なんかをイヤに事々しく寫實的にして、それで出て來る俳優がみんな歌ばかり唄つてゐるのは、何だか變に不調和だな。オペラなんて馬鹿馬鹿しいもんだな。日本の能の方がよつぽど自然だ」と云つてゐた。能樂と比べて孰方が餘計自然であるかは今私の問ふところでないが、しかしたとへば「カルメン」の大詰め、ドン・ホセがカルメンを殺して慟哭するところなぞは、歎き、悲しみ、怨み、悶えて、天に訴へ地に轉び俯す心持ちを表はすのに、歌を唄つて表はすより外表はしやうがない。あれを寫實で演じたら必ず誇張的になつて、わざとらしい、騒騒しいものになるに極まつてゐる。

　だから芝居で眞に迫つた殺人の光景だの、眞に迫つた惡人だのを見たいと云ふのはそもそも無理な註文である。



美術新秋

二科及美術院展覽會瞥見

佐藤春夫

會場で梅原龍三郎氏に逢つた。氏は僕の年來敬愛してゐる少數の畫人の一人である。いや筆頭である。何にかお目に止つたものがありますかといふ僕の質問に對して氏は首を振つた。さうして皆一樣に巧くなつて、その代り飛び抜けたものが無いといふのは氏の意見であつた。氏は僕の樣子からでも察したのであらう、僕に何處かへ批評でも書く積りかと尋ねられた。然る旨を答へると、以上の理由で批評するのは難かしからうと言つて同情してくれた。全く氏の言葉の通りである。

* * *

目錄を繰つてみて、見て置くべき筈で目に止らなかつたもの、例へばジエレニエウスキーの諸作などの如きがあるのだから、その外にもきつと氣がつかないのがあるに違ひない。僕はたとひ優れてゐても所詮僕に判らぬものは止むを得ぬとして、僕が氣がつけば當然興味を持ち感心するであらうものを見落して居はしないかとそれを心配するのである。もう一度見ればいゝのだが生憎と時日がない。仕方がない。今は目錄に依つて思ひ出せるだけのことを言はう。その中、も一度見に行つて言ひ足りない所は、もう一ヶ所今日たのまれた所があるからそこへこの文章の增補する事が出來るだらうと思ふ。

秋好伊豆子女史の「花」といふのは色彩の澁い小品である。「靜物」の方もわるくない。閨秀の中ではこの人のが眼に殘つてゐる。

有島生馬氏の七點の中では「朝の音無橋」が可憐に出來てゐると思ふ。氏が稍〻古い時代に見せてくれたやうな柔かな情緒がある。「ペパの肽」などもそれだが。一體僕は氏のものとしては寫實的に突つ込んだものよりも、こういふ少々甘美な所のあるものゝ方が好きである。そして必ずしも自分の好みにのみ執してゐるとも思はない。それにしても氏のパレットの赤がもつと潤ひと深みとがあつたら、僕は定めしもつと氏の美術に蠱惑されるだらう。氏が好んで使はれるあの赤い色のことなんだが。

アスランは無論惡くはない、が格別のこともない。さうして彼はアマリにフランス人だ。

ピツシエールは昨年佛蘭西展覽會で見たものに較べるとこの方がいい。然し、落付いて來ただけに、奔放な筆致などは以前よりも失はれた所が多少あるやうな氣がする。彼はその中にきつともう少し變るだらうと思ふ。で今度の落付きはほんの當座のものではないかといふ氣がする。つまりやや底力足りない落付き方だといふ感じがするのだ。何しろ、年を經た漆器などと何處か共通な高貴なこの人の色彩は珍重すべきものである。

濱田葆光、埴原久和代の兩氏は定評のある人だけれども、僕にはどうも風馬牛であるらしい。

長谷川利行氏の三作品は、奔放な獨特のものである。注目して前途を見る値打のある人であらう。

石井柏亭氏――から危氣がなくなると醋く無愛想な氣がして來るものだ。けれども風格から言つてこの人は矢張り場中第一の大家には相違ない。「牡丹」にしても「總成病院」にしてもその構圖に、又「クローデル大使像」の背景などに、この人の意が窺はれるのは、自ら微笑されるのである――無論惡意のある微笑では無いんだが、つまり味をやつてゐるなと思ふのである。

伊藤廉氏の「蔓性薔薇など」少々堅いのだが、美しくないことはない。きさくに仕事が出來るとなほいゝだらう。勉强ではなく遊ぶやうに樂しくなつて、ねえ君、肩を怒らさないやうにさ。ともあれ、高雅で冷艶なまた眞面目な努力を見逃すことは出來ない。

古賀春江氏、もう少しで、その少しをどうかしてくれると、どうするんだか僕はもとより知らないのだが、すると僕はきつと君に可なりの好意を寄せるのです。

小出楢重氏、少しは自分の仕事に自分で倦きて來てゐるのではないか、去年の程、生々しない。しかし、「ソファの裸女」は矢張りなか/\いゝ。僕はこの人の厚ぼつたいそして何處かふと/\しい感じを好いてゐるんだが。品はあまりよくないといふのかね。一體が品を言ふ柄のものではない。この持ち味は全く生え拔きの近代である。

國枝金三氏など、比較して御覽、小出氏をだ。

九里四郎氏も、黑田重太郎氏も勉强してゐられる。が僕にはどうも直接に來ない。兩氏共それ/\に脫ぎ去るべき衣を持つてゐられるのではあるまいか。一口に言つて兩氏は氣を惡くされなければいゝが。

ロートは「休憩」など巧いとは思ふがだん/\好けなくなつて來る。今年のは去年のより一たいにいゝかと思はれながらも。

マルチーヌ位の繪は近頃和製でも出來ないことはない。たゞさすがにあの落ち付きは一寸得られまい。

正宗氏は去年は面白いと思つたのに、今年はあまり光彩を放つてゐるとは言へない。少しくたびれてゐるかも知れぬ。

鍋井克之氏はよく見ると同情の出來る仕事をしてゐるのに一向効果が上つてはゐない。凡ての感じに於いてちよむさい。そしてその面白さにまではちよつと到達してゐない。知り合ひだから思ひ切つて惡口を言ふけれども、この繪を見てゐると、鼻の詰つた人と會話をしてゐるやうな氣持ちになる。早くその鼻をかんで來てくれ給へ、君は面白い話をきかしてくれる人なんだから。小さな水車のある、その水車に水のこぼれてゐるあれなどはもう一步の所で感心してもいゝのだが。

中川紀元氏は一體僕の好みではない。のほゝんた所が肌が合はないのであらう。だが今度の「ヨネ野口氏肖像」は凡ての意味で生きた肖像である。成功である。

中村彝太郎氏の「花と少女」、無論大したことはないが、自然な感興で出來てゐる。隣りの西脇マヂヨリ氏と較べてさう思つたのかも知れないが。

野間仁根氏の諸作は特色がある。僕は同情が持てる。中では「娘と人形」「花園の虫、鳥」前者は腕の確な感じと、後者はロマンテックな構圖感情を認めるのだ。唯困るのはあの色彩である。少し頭が痛くなる。それに空想的な題目は部分的には洗いからどうかするとペンキ繪のやうな氣持がするところもある。みんなあの色彩のせいである。あんな絢爛な色ばかりをあれだけにでも統御するのは一大事に相違ないが、僕は作者に相談して見たいものだ。華美なものばかりを取集めると、結局そこには華美なものは何一つないことになる。ほんとうの華麗を知つてゐる人は、歡樂の底にある悲哀のやうな一味の淋しさを基調にして、そこに華美を組み立てはしないだらうか。

佐伯祐三氏の中からは「風景(三)」を選ぶ。

坂本繁二郎氏の「家政婦」はあゝ云ふ作品として成功してゐる。然し「熟稻」の方は成功とは感じない。この流俗にかかはらない仕事をする夢見心地になる人を僕にいつかもつと讃美出來る機會を得させて貰ひ度いものである。

關紫蘭女史は中國の美姫である。當日自分の作品の入選した會場で樂しさうに逍遙してゐたのは無邪氣で甚だよかつた。これは實評ではないが序でに記して置く。

相坂猪知雄氏。技倆のある人には違ひたからう。この趣味に僕が賛成出來ないのは遺憾である。

清水登之氏は、趣味としては必ずしも僕のストレンヂヤーではない。たゞ純粹な繪畫以外のものだけでこの人の繪が成立つてゐる。つまりやはり少々外道で、それから惡趣味ではないが品が惡い。必ずしも畫題のせいではなく、畫技の爲めではなからうか。猥雜な感じを伴ふのである。

鈴木保德氏の繪は温雅なものである。そしてあれで獨自のものであるのが何よりだ。のんきにゆとりを持つて眺められる。それで仔細に注意すると凡ての色彩的アクセントには餘程注意が拂はれてゐて、細心な調子があるのに氣付く。幸いに自愛して貰ひ度い。

東郷青兒氏は以前の甘つたるい色彩から一歩を出た。「黒衣の女」などは佳作である。進境を認めざるを得ない。けれども同時に氏に取つては世間がより多く進境を示したことを悟つて貰はねばならぬ。

津田青楓氏の仕事は僕を愉快から少し反對の方へ連れて行く。僕は大膽なのは好きだ。然し細心のある大膽以外のものはたつた一度きり度膽を拔かるゝだけだ。津田氏は以前素朴なまづさの美を持つてゐた。今日、もうそれを再び見得ないのは悲しいことである。

山下新太郎氏のものは凡そ津田氏と全く對蹠するものである。あの絹糸のやうな色艶を見るには「東山と萩」が最もいゝ。「習作」の中の紫衣はほんの少しばかり調子が強よ過ぎるのではないかといふ氣がかりで僕はあの愛すべき小品の前でちよつと躊躇した。

安井曾太郎氏の寄興は醇厚な小品をいくつか見せてくれた。「初夏」のやうな作品になると感心しながら、同感しない。あの立つてゐる少女などなかく美しいとは思ひながらも。

彫刻のことに就いては僕はこゝには書くまい。今度もう一ぺんよく見なければならないから。藤川勇造氏の「女（一）」といふのが目にのこつてゐる。

特別出品によつて湯淺一郎氏の製作を回顧させたのは、單に思ひ付きであつたばかりでなく、時代の推移を知る上にも、湯淺氏を知る上にも良き企であつた。然しこの老大家は時代のせいもあるだらうが、僕達の心は別の所に在る。その證據には力作程吾々の氣持には遠く、そして事もなげな作程樂しんで見られる。つまり消極的にだけ愛することを出來るとでもいはふか。そして人物のないスケッチ風の風景が此の意味では一番いゝ。

アルキペンコの繪畫と彫刻とを一室に集めたのは先づ僕の好奇心を滿足させ、それから次にこの才氣のある近代風な作家に親しみを感じさせた。この人の面白みは段々判つたやうな氣がした。理解する爲めには同一作家のものを一時に澤山見るに限る。扨て氏の繪畫であるがこれはその餘り無雜作な繪具の爲めに繪畫とは云ひ難い。その代りには流石にどれにも描かれた彫刻といふ感じは充分にある。その最も良き例は「アレアチウド」である。これなぞは彫刻そのものを見て描いたやうにさへ思へる。作者自身もさういふ積りに相違がない。なかで最も繪畫的なのは「閾にて」であらう。これはこの十三點の繪のなかで唯一の繪畫的なものだと云へる。色はやはりよくないが、それでも感じ方が充分に繪畫的である爲めに色彩の方はさう苦にもならない。お母さんの脚の部分におちてゐる小兒の影などは色としても、少し冷いけれども美しく出來てゐる。

彫刻では「少女」が大きくもありまた最も面白くもある。顏なども一種奇妙なすがくしい情味があつて題意にふさはしい。體つきにも素朴ないゝ省略がある。有島生馬氏の說明では腿の上にわざく置かれた手が他の部分の味ひに較べて寫實的で邪魔になるといふ意見であつたが、さう云はれて見るとさう思ふ。又これは幸ひに一緒に見物した里見弴君の發見であるが、一體にこの作者は手と足とかの細かい部分に興味を持つてゐる人である。里見君はまたいふ。この人には何處かグレコなどから影響受けたものがあると、僕もそのことを感じてゐた所であつた。例へば手などに特別の興味を持つこともそれだが體が妙に細長く出來た具合、また人物の顏など「歩む人」「立つ女」「二人の女」などを見ると分る。彫刻を、思ひ切つて或は一方或は二方或は三方などの特別の面だけにして了つて、見るものゝ注意をそこに集めるといふ一種の方法も彼は用ゐてゐる。即ち彼の繪畫が彫刻であるが如く、彼の彫刻が一種繪畫化された所があるとも言へる。三十數點の作品のなかから僕の注意を索いたものを數へ上げると、「少女」は既に言つたが、外に「ジアナ」「二婦人」「凭りかゝる女」「ボンペイ叫喚の最後の瞬間」「踊る女」「歩む人」「立つ女」「黑きトルソオ」などである。そのなかでも「ボンペー叫喚の最後の瞬間」や「歩む人」や「立つ女」「踊る女」などは何れも愛玩するに足るものであらう。製作年月に依ると一九二五年といふ年以後の作品が變化してゐるが、前に

のものに較べると後期のものが、趣味を加へてゐるせいか、必然性が多い。僕は彼の爲めに一九二五年を謳ふものである。この作家はもとよりさう偉大な作家とは思はない。思ひつきめいた、いくらかやすつぽいものもないではないが、その才氣は侮るべからざるものである。さういへば今朝讀賣新聞で武者小路實篤君がこの展覽會の評をしてゐるがなかなか肯けることを言つてゐる。また線くから樂しみにしてゐるのだが今日のアルキペンコの批評なども同感の節が多い。たゞ僕は彫刻「頭球」などは氣が利いてゐるだけでさういいとも思はないし、また「ベートーベン第九番シンフオニーに於けるメンゲルベルグ」も武者小路君は賛成らしいけれども僕はあれはよく分らない。同君との大同を述べるに序にちよつと掲げて見たまでなのだが……。

九月九日夜

* * *

序に日本美術院のことを手短かにノートして置く。

三石紅樹氏の「朝顔」は素直に出來てゐる。

淵上游鶴氏の「插花小女の圖」は美しい。

前田青邨氏の「西遊記」は感興豐に出來てゐる。「羅馬使節」の方は努力以外には感心出來ない。

田中女雄氏の「竹林秋粧」といふのはこの種の裝飾風なもののなかでは、型以上に出來てゐて生氣がある。才氣が溢れてゐて、そのくせ落着いたところもある。

木村武山氏の「四季花鳥」の苦心は認めなければならない。たとひ小品でもあれだけ多數のものを、それぞれに構想することは、それが一日に見られるものだけに、並大抵ではなからうと思ふ。

彫塑のなかでは石井鶴三氏の二點が特別に目につく。僕は素直氏像の方を好む。外には保田龍門氏の「裸男女群像」がある。藤井浩祐氏の「足を拭く女」だの「爪を切る女」など器用に出來てゐるとは思ふが、かういふ小品になくてはならぬ興趣に乏しいのを憾む。木村五郎氏の婦人胸部を見ると、この人は相當に力量のある人だと思へる。堅田南風氏の「可憐十種」は過不足のない仕事をしてゐるので、氣樂に眺められる。

小島一谿氏の「奥のうまやだ」といふのは堅實な作品である。地平線を低くしてゐるのなども智慧がある。趣味がない上に、人に氣づかれないやうな作品だから數へ上げて置きたい。

酒井白澄氏といふのは新人ださうであるが、「麥畑」でも「栗」でもこの種の作品としては多少、自然のなかに突き入らうとする意氣が見える。それを大成させたいものだ。美術院の共通の類型ともいふべきものによつて、氏のこの微かな特長が消磨せられざらんことを祈る。

横山大觀氏の作品はどちらかといふと、僕は嫌いであるが、しかし場中を見まはつてこの人の作の前にくると、さすがに大家だとは思ふ。さうして氏の努力に敬意を拂ふ。「瀟湘八景」のうちでは「遠浦歸帆」がいいやうに思ふ。

富田溪仙氏の繪卷のなかでは、長崎と厳島とを採る。稚氣のありすぎるのは少々困らないでもないが、諧謔で才氣横溢の人だから、この罪刑も完成したら面白いものが出來るだらう。

山村耕花氏の「隨分」には注目するが感心出來ず、そのモチフにもの

好きが先に立つてゐるやうな氣がする。物語的興味はあつても畫趣に乏しい。充分嚼きこなしてはゐるけれども。

中村岳陵氏の「貴妃賜浴」などは、全く大時代な惡趣味だと申すべきである。浴泉で果物を食ふかどうかは知らないが、春寒洗浴脂といふ季節に茘枝のないことは確實。こんな事は繪にはどうでもいゝのだが、ちよつと知つたかぶりをして見たくなる――といふのもこの繪のせゐかも知れない。

それからこましやくれた畫題といふものは案外不愉快なことやまた植物の同じやうなのを澤山畫いてその中に小禽が一羽か二羽ゐるやうな屏風なども、もう少し見あきてもいい構圖だなどゝも考へた。

勝手なことを並べたやうだが、素人の言ひ分として、妄言が諸家の自尊心を傷けない事を望む。

時評

政友會內閣と『肥料の分配』

山川均

不景氣不景氣で、どちらを向いても文字通りに苦が虫をかみ潰したような顔ばかり並らんでゐる日本國ぢうを、例の『肥料の分配』でどつと吹き出させた福の神、笑ひの神様の田中首相を首班にいたゞく內閣だけあつて、いよいよ府縣會總選擧の刈り入れ時が近づいたので（つゞいてその跡には衆議員總選擧のとり入れ時が來る）、大きな肥汲み柄杓で黃金色の積極政策を、選擧の畑にふり撒いてゐる。耕地改善、肥料政策の確立、自作農の維持創設、副業の助長奬勵、自治體の經濟化などのような、割合に利き目のおそい原肥から、米價吊上、資金還元、鐵道の總花的建設の如き速効肥料、さては繭價維持の補肥追肥にいたるまで、あらゆる成分とあらゆる効果の人造肥料を、一時にぶつかけてゐる。なかでも地租委讓の如きは、代りの財源の心當りが無いのはまだしもとして、一たい誰れに委讓してよいのか、誰れに委讓するつもりだつたのかさへも分らぬうちから、四年度からの實施といふ保證つきでふり撒いてゐるのであるが、いかに急場の間に合はせとはいふものゝ、この腐熟せぬ生々しい下肥を頭からぶつかけられたのでは、さすがに肥やしのきれてゐる作物でもたまるまい。

これが政黨や政府の謂ゆる農村振興策と名づける肥料であるが、この肥料がどのような作物によつて吸收せられるか、またどのような作物の根を肥やすために施こされるのであるかは、言はずして明らかであらう。耕地が改善されゝば耕地の所有者は得をする。下層農民と田舍の小商人が極度の金融難に困つてゐることは事實である。そこで中央で有り餘つてゐる資金を地方に還へしてやる。と云つて只で貰へる譯ではない。その大部分は、地方の公共團體の高利の負債の借り替へになり殘りの一部分が產業資金として融通されるのだが、この資金はお眼鏡にかなつた借金の資格のある者だけが拜借の光榮に浴するのであつて、困つてゐる者に融通される譯ではない。繭の値段を維持するた

めの五千萬圓の資金融通にしてもその通りであつて、差し迫つた必要のために繭を賣る焦眉の急におかれてゐる下層農民にはちつとも有難くない。米の値段が吊り上がれば、米倉に米を持つてゐる地主を振興することは間違ひない。なるほど貧農は、肥料を買ふ金がなくて困つてゐる。そこで政府はこれを見兼ねて、人造肥料會社に低利資金を融通したり『その他の』援助を與へてやらうといふ。これが産業立國にもとづく肥料の國策といふものである。肥やしは根元から少し離してやる方がよく利くから、思ひ切り遠くの方にやつたのである。

この『肥料の分配』によつて收穫しようとするものが、差し當つては六百萬の新投票、つゞいて一千餘萬の謂ゆる『新興勢力』であることはいふまでもない。そこで政友會とその政府とは、日本の支配的階級を代表して、『新興勢力』がその政治的指導の下に來り投ずる代償として、これだけの經濟上の讓歩を提議してゐるのである。この讓歩が主として農村に對する讓歩であるといふ事實——産業立國の具體的な現はれが主として農村振興の形を取つてゐること——は、第一にはわが國の社會的構成のうちには、農村人口が優勢であるといふこと、從つて大資本の政治的支配を鞏固にするためには、農村人口、なかんづく地主階級の支持を得ることが絶對の必要條件であるといふこと、獨占資本金融資本の政策である帝國主義的政策を實行するための、有力にして鞏固な反動的な政治勢力の結晶には、地主階級と地主階級によつて指導せられる農村人口が、缺くべからざる重要な要素であるといふことを示してゐる。

第二には、農村人口が數量的に優勢なといふことばかりでなく——即ち、新投票の大部分を握つてゐるといふことのためばかりでなく——その實は地主階級に與へる經濟上の讓歩にすぎない『農村振興政策』——で、地主階級と共に農村人口の大部分を手に入れる望みがあるからである。これに反して、農村に對する工業——工業資本——の利益といふ一つの綱で、勞働者の投票までも掬ひ取ることは六ケしい。これは差し當つての投票の寄せ集めのためばかりでなく、帝國主義的勢力は一方の脚を、どうしても農村に踏みしめなければならぬ。この必要は、自作農は國家の中堅であるといふ思想によつて現はされてゐる。この根本的な必要に對する考へ——したがつて根本的な政策——では、政友會もその他の在野ブルジョア政黨も同じであつて、これは憲政會内閣の着手した自作農の維持創定の計畫が、政友會の手でもつと擴大されようとしてゐることによつても知ることができる。地主の持つてゐる土地で小自作農をこしらへようといふ政策が、地主階級の怒りを買はないのは必要な時には土地を賣り放し、土地資本をもつと有利な商工資本に轉換する、地主に取つての便利重寶な政策であるといふことの爲めばかりではないのであつて、小自作農を殖やすことは、地主の階級を強めることであり、農村の保守的勢力を強めることであつて、それは地主階級の目前の經濟上の利害には、よし牴觸するような場合があると假定しても、なほ且つ地主階級の根本的な政治的利害に一致してゐるからである。

かように『農村振興政策』とは、地主と一緒に農村人口の大部分をつかまへるための政策ではあるが、肥料の成分は、地主の根によつて吸收せられるように調合せられてゐる。こうすることによつて、地主

と下層農民との間の、階級的勢力——ないしは農村社會層間の勢力——のバランスに現狀を維持せしめることが出來る。下層農民は地主の指導の下におかねばならぬ。下層農民の經濟上の位置をよくすることは、この勢力關係の天秤の一方に分銅を加へることであつて、それは現在の勢力のバランスを跳ね返へらせる危險がある

政友會内閣が目論んでゐるといふ自作農創設の謂ゆる『徹底』なるものは、現在の小作地三百四十萬町歩の三分の一に自作農を創定し、全耕地三百萬町歩を折半して、その半分に典型的な小ブルジョア的反動勢力を植ゑ附けることを目標とするものである。こうして農村における無産民の階級的勢力の增大に對して、新たなバランスを作らうとするのがこの政策の眞髓であつて、その爲に政府が巨額の資金を投じたとて、決して算盤を無視してゐる譯ではないのである。

政權の『地方還元』

さき頃の金融恐慌が、大正九年の恐慌の餘震の性質を持つてゐること、從つてそれは日本の資本主義が行き詰りを切り開いて活路を打開するための、自己淸算の殘額の決濟——その場のがれの言ひ譯で延ばされるだけ延ばしてゐた殘額の決濟——であると同時に——またそれ故に——それは、新たな前進への過程を意味したものだといふことは、當時も指摘したとほりであるが、これは金融勢力の集中を促がしたことにも、最も著しくその作用を現はしてゐる。政府が自分辨當でわざわざ役人を全國各地に走せ廻らせたり、地方長官の手を通じたりして、積極的に銀行の合同話を進めてゐるのは、この作用がいかに意識的に促進せられてゐるかを物語つてゐるものだが、さもなくても民間の零碎な資金までが、金融恐慌の直接の刺戟によつて、大きな中心に集まつてゐる。恐慌の結果、大銀行には五億の預金が流れ込み、郵便貯金はいよいよ十五億を突破した。地方からかき集めたこの預金部の金の中から、少しばかり地方に貸し附けるのが、謂ゆる資金の地方還元といふものである。これはたしかに地方に返へしてやるのであつて、地方から出たものを地方に還元するには相異ないが、この還元せられる資金は、もはや集つて來た時のような『零碎な』資金ではなくて、大きな金融資本であるばかりでなく、尙ほその上に、これは手放しで地方へ放還せられる譯ではなくて、この金融資本には、中央からの統制の糸目がついてゐる。そこで資金の地方還元は、決して金融資本の集中作用を差引くものではないのである。

この資金の地方還元を、政權の上に應用しようといふのが、政友會とその政府の『地方分權主義』である。もちろん無產政黨側ではこれを逆用して、『地方自治體を中央政府の、、、支配から解放する』鬪爭に展開させようと努めると同時に、かような意味での自治體獨立の要求を、ブルジョア政黨の與へようとしてゐる地方分權に對立せしめることにより、謂ゆる地方分權主義の眞性質を曝露しようとするのであるが、ブルジョア政黨の理解してゐる地方分權なるものは、全くこれとは性質の異つたものであることはいふまでもない。

尤も政友會とその政府の主張してゐる地方分權主義にしたところで、地方自治體の政治上の權限をいくらか擴大し、同時に謂ゆる『自

治體の經濟化によつて、その經濟上の活動範圍を増大しようとするものであるから、從つてその程度では、地方分權には違ひない。たゞこの地方分權とは獨占的資本とその固有の政策である帝國主義の必要によつて、いよ〳〵ます〳〵反動化し、また反動化しなければならぬ中央政治の體系から地方自治體を切り離して、勝手な方向へその政治を向けさせるといふ意味ではない。それは糸口をつけないで、手放しで政權を地方に還元する譯ではなくて、中央に集中されて反動的性質を賦與せられた政權の一部分——それも一小部分——を自治體に『委讓』しようといふのである。

この委讓は、地方民衆の政治的支配——反動主義的な中央政治の一部分を成すところの反動主義的な支配——を地方のブルジョアジーの手に委ねること、それ〴〵の地方における民衆の、、、な支配と搾取とを、許るされた一定の範圍内で、地方のブルジョアジーに勝手にやれといふことなのである。その結果はいふまでもなく、地方政治が今日よりも一そう政黨政治化すること、地方政治が今日よりも、一そう露骨な階級政治になるといふこと以外の何ものでもないのである。

資金の地方還元が、金融資本の大中心への集中の反對作用でないように、政權の地方還元は、いよ〳〵ます〳〵獨占的資本の手に政權が集中する過程の、反對の作用ではないのである。それ故に、地方分權の主張は、究極において獨占資本の政治勢力を代表するところの政黨が、地方のブルジョアと地主を釣るための政綱の一つとして用ひられることに、少しの差し支へもないのである。

北伐の再開始

北軍の渡江、南京放棄がほとんど確定的の事實として報導され、田中政友會内閣が出兵の目的は完全に達せられたと聲明して、派遣軍の撤退に着手して三日もたゝぬうちに、却つて南軍の渡江、北軍の敗退が報ぜられ、早くも孫傳芳の下野さへも豫期せられてゐる。支那の時局の目まぐるしい變轉は、文字通りに、應接に遑がない。しかしすべての社會現象が一定の軌道の上を走つてゐるこの地球の上で、支那の國民運動のみが無軌道で走つてゐる譯ではない。

今から一年前に、蔣介石によつて率ゐられた國民革命軍が廣東を出發した當時には、それは今日の大をなしてはゐなかつたが、今日の如く内容の雜駁なものではなかつた。その軍隊は、思想的にも智識的にも技術的にも、新たに訓練された精英が、事實においてその中堅をなしてゐた。國民黨の青天白日旗も、その下に左右兩翼の抗爭が全く存しなかつた譯ではないが、なほ且つ現實に、一つの反帝國主義的反軍閥的勢力を徴象して居つた。

國民革命軍は異常な成功をもつて、僅々一年に足らぬ間に武漢南京にまで進出した。もしこの勢ひをもつて、山東に入ることが出來得てゐたならば、形勢は全く今日とは違つてゐたに相違ない。この戰略的な瞬間に、田中對支積極内閣は、日本人の生命財産に危險の迫つてゐることを發見した。それと同時に支那の赤化が、全人類の災害であるといふ眞理をも序でに發見したのである。

田中内閣の出兵は、『南北兩軍何れの軍隊に對しても其の作戰に干渉し軍事行動を妨害するものに非ざるところの出兵ではあつたが、たゞ南軍の山東進出はそのために不可能となつた。そして蔣介石の下野につゞいて南軍の潰滅と南京の放棄とが、もはや確定的な事實として認められるに至つた時、この出兵の目的がいつの間にか成就せられてゐたことが發見されたのであつた。

南軍の進出が外的勢力のために不可能に陷つたばかりでなく、國民革命軍そのものゝ内部にも、すでにこの時は大なる變化が起つてゐた。國民革命軍は戰勝のたびごとに大きくなつて進んだが、それは在來の軍閥的勢力を、そのまゝ不消化に呑み下すことにより、乃至は在來の軍閥的勢力が外部に附加はることによつて無機物的に生長した。そこで國民革命軍は、もはや廣東出師の當時のような、内容の純一なものではなくなつてゐた。この變質をつゞけてゆく勢力の頂點に坐つてゐる蔣介石の態度に變化の起るのは、寧ろ當然と云はなければならぬ。のみならずこの前後から、蔣介石に對する帝國主義的强國の脅迫と誘引とは顯著になつて來た。

蔣介石の謂ゆる右傾は、先づ國民黨を武漢と南京とに分裂させた。南京と北方軍閥との妥協の可能は、武漢と共産黨との分裂を代價としても、武漢を南京と妥協せしめる必要に迫られた。のみならず武漢そのものも在來の軍閥的勢力の上に立つてゐたに過ぎなかつた。最近にいたつて北方軍閥に對する大同團結が成立し、新たに北伐が開始せられると傳へられてゐるが、この大同團結の一條件は、共産黨分子の排除であつて、要するに國民革命運動が純然たる反北方軍閥の共同運動となつたことを意味してゐる。國民黨がその内部から共産黨分子を排除した結果は、事實において、軍事的にも政治的にも、今日まで國民革命運動を推進してゐたところの活動分子を失つたことを意味するといふことは、すべての觀察者の報導の一致してゐるところであるが、これを共産黨の側から見れば、國民革命運動といふ廣大なインフルエンスの領域を失つたことになる。さきには蔣介石と別れたこと、後には武漢と別れることを餘儀なくせられたことが、どの程度まで運動の發展の必然であつたか、そしてどの程度まで、帝國主義的强國の政策の成功であつたか、そしてこの間には、共産黨側における戰術上の過誤があつたか無かつたか、私はこれを批判する資料がない。たゞ何人にも明らかな事實は、共産黨が國民革命運動のその他の諸要素と手を分つ瞬間には、この分裂によつて國民革命運動の指導がおのづから共産黨の手に歸るような、何らの條件と形勢とが成り立つてゐなかつたといふことである。これは一面には、國民革命運動が、直接に民衆の手で行はれてゐないで、在來の軍閥的勢力の軍隊の上に立つてゐる運動であつたことを物語つてゐるものである。支那の反軍閥運動、反帝國主義運動が軍閥的勢力の鬪爭に變質しないで、眞實に徹底的に鬪はれる條件は、民衆自らが×××にいたることである。

形勢がいかに急速に變轉しようとも、南京と張作霖とを握手せしめるといふ妓善の希望が、もはや決定的に破られたことだけは疑ひがない。そこで日本の帝國主義者に取つては、『支那本土と滿蒙とを劃然と區別する』新方針の確立が必要となつた。

歴史の改訂

さき頃米國で開かれた國際教育會議が開會第一日に、澤柳政太郎博士は『日本の教育のために大いに氣を吐き、左の如く直ぐ滿場の視聽をひいた』といふことである。

『世界平和のためには、四海同胞の觀念ほど必要なものはない、日本は學童に對し國際觀念を喚起しつゝあり……現在の如く歴史および地理の教授に當り、各國が他國をけなして自國のみを賞揚する方法は、決して賢明なる處置でない、故に國際的親善增進のためには、どうしても世界各國が歴史の教科書を改訂する必要がある』

いふまでもなく、澤柳博士は『日本の教育のために』氣を吐かれたのであるが、もし『日本の教育に對して』この氣を吐かれたのであつたなら、私は熱心に博士の演說に拍手を送るにちがひない。さらにアメリカのオンテリオ州のトロントではなくて、日本の東京で澤柳博士がこの氣を吐かれたのであつたなら、それはたゞに滿場の視聽ばかりでなく、まづ第一に文部省、司法省、警視廳、檢事局などの視聽をもひくことができたにちがひない。

日本はいま、帝國主義への積極的進出へのたゝずまひを整へてゐる。日本はいま、資本主義的發達のこの時期に相當する反動主義が、ひとり政治の領域ばかりでなく、社會生活の全領域を支配しつゝある。一つのブルジョア政黨が他の政黨に代つて內閣を組織すれば、地方長官と警察署長の頭首と共にあらゆる政策がすげかえられる蓋然性があるにも拘らず、ひとり前內閣の取つた反動政策だけは、さらに輪をかけて踏襲せられる必然性をもつてゐる。

これは憲法によつて保障せられてゐると稱する言論集會の自由に對する極度の蹂躙にその一端を現はしてゐる。これは公開の集會ばかりでなく、たとへば勞働組合の諸機關の純然たる事務的の會議や、無產政黨の諸機關の事務的會議の如きにいたるまで、常に警察力によつて蹂躙され、ほとんど事務の遂行をさへも不可能としてゐるのである。

出版物に對する干涉と禁止も、政友會內閣となつて、さらに一そう顯著に露骨になつて來た。これは檢閱制度改革の運動が起つてゐることによつても知ることができる。

かように反動的勢力は益々倍加され、憲法の保障するといふ權利と自由とが日々に狹ばめられてゐる一方に、これに對する反動勢力の所在が明白に移動をしたことも注意に値ひする。これは僅々十年前に、黎明運動を起した當年の進步的な學者の一群すら、今日はもはや檢閱制度改革運動の一要素とさへもなつて居らぬ事實によつて伺はれる。

反動主義の暗黑はいま日本を蔽ふてゐる。學校教育は、反動主義が民衆を支配する最も重要な機關でなければならぬ。若し教科書における日本の歴史が、かような政治的社會的雰圍氣のうちに書き直ほされるとしたならば、(それは書き直ほす必要のないほどに、完全にその使命を果してゐるが)どの方向に書き直ほされるであらうか。現に今日の歴史の教科書さへも認めてゐる若干の史實を、そのまゝに認めた文藝的作品が、當局者の忌憚に觸れた新しい實例さへもある。澤柳博士はこの日本においてこの日本の教育に對して果してどのような氣を吐かれるであらうか。

出版物の差押について

福田徳三

昭和の今日、未だ出版物の差押へが、一つの問題となるなどは、決して愛すべきことゝ云はれぬ。出版の自由は、元より絶對無限たり得ぬは、言ふまでもない。實際の問題として、絶對無限の出版自由は、世界中どの國にも存して居らぬ。其れと共に、今日の文明國で、出版物の差押が、斯くも、頻繁に問題となる國も、日本以外に澤山はあるまい。(勞農露國は、問題外として)。而して、其度毎に、誰人かゞ不當の迷惑、損害を被むることを免れないのは、甚だ困つたことである。

出版の自由については、私は度々公言した如く、法律からの完全なる自由は、少くとも、今日の時代には、望み得可きでない。出來る丈け、自由の範圍を大にせねばならぬは、言ふまでもないが、其範圍は無限なるものではあり得ないことは、致方ないことである。即ち、法律の上からは、其の範圍に、或る限界の存することは、已むを得ないことである。其の反對に、行政、殊に警察行政からの自由は、原則としては、此れに限界を設けることを全廢すべきである。殊に手心警察からは、完全に解放せられなければならぬと確信するものである。

今、我々の前に横る問題は、法律上の自由の問題たるよりも、むしろ行政殊に手心警察からの自由の問題であらう。

内閲制度の存否については、實際運用上いろ〱の說があらう。しかし、道理の上から云へば、内閲制度などと云ふものが、存在すべき筈はない。其の存在には、如何にも後見人警察の臭氣が甚しくつきまとふ。況んや其れは、出版物に對する一種の御情けであつて、現に某雜誌は、無事に内閲を通過し乍ら、法に問はれたと云ふ如きは、噴飯にも値せざる滑稽事である。出版者が、其見識を傷けて、當局に内閲を求むる所以は、小學校の生徒が先生に作文を見て貰ふのとは同じでない。又御上の折紙付を以て、世に廣告せん爲めでもない。況んや、御上からの御褒美に接せん爲めでもない。節を屈して、コンナ馬鹿らしいことを忍ぶのは、出版法や新聞紙法に問はれると云ふ危險を免れたい爲めである。其以外に何の功德も有りがたみもあるものではない。然るに、節を屈して内閲して貰つたものが、法に問はれて處分を受けた。其當事者が、これを馬鹿々々しいことゝ感ずるのは、元より當然である。イヤな思をして、チブスの注射を受けた人が、ムザ〱とチブスにかゝつたとしたら、其人は醫者を恨むに至るであらう。チブスよけの御まじないに、無駄骨折つた出版者を咎むる能はざる如く、内閲を受けて通過し乍ら、法に問はれた雜誌が、法によつて處分せら

れたとて、憤るのを深く咎むることは出來ない。然るに、憤つて訴訟を起したシッペ返しに內閣制度を廢したと云ふ巷說が、當つて居るものなら、馬鹿々々しい制度は、更らに、より馬鹿々々しい理由によつて暗へ葬られた否定の否定と云ふ面白い出來事が起つたものと云へよう。

內閣制度は、馬鹿々々しい制度であることに、疑はない。しかし、其れは、更らにより多く馬鹿らしい根源から起つたもので、今までは其より多く馬鹿々々しい根源を、此のより少く馬鹿らしい制度によつて、ふさいでゐたようなものである。然るに、右の如く此制度が廢された結果として、其のより多く馬鹿々々しい根源が、適面に、出版物全體を襲ふようになつた。此れが、今日の問題となつた。私は左樣に見てゐる。

然らば、より小なる馬鹿事を再興することによつて、此弊を防ぐ可きかと云ふに、私は如何考へても、左樣に思ひ能はざるものである。內閣制度なるものゝ廢止は、其事丈けで見れば、たしかに、一の進步である。其れを逆戻りすると云ふことは、一の滑稽事でなければならぬ。

內閣制度の存在してゐたときでさへ、例へば、井上哲次郎氏著書事件の如きがある。而して一年餘も經て後に、係りの官吏は、たしか、其爲めに處罰せられたと聞く。此れまた馬鹿々々しく滑稽なることであつて、私は其被處罰者に同情を禁ぜぬこと、內閣後法に問はれた某雜誌に對すると同樣である。眞に爲すまじきものは、宮仕へと云ふ感を、人に惹き起さしめた此事件は、其被害者が官吏たりし故を以てか別に問題とならなかつたようであるが、其は公平でない。懲戒委員會で、誰か反對論を主張した人があつたか、無かつたか知らぬが、心ある人ならば、極力處罰に反對すべきであつたと信ずる。

如何にも、所謂世論なるものは、餘り公平ではないようである。被害者が官吏なら、如何に馬鹿々々しいことでも、無問に附する。自分たちのことだと騷ぐといふのでは、其論に力はない。私は『改造』記者から、此文の起稿を依賴されたとき、『改造』が、今被害者だからとて貴い『改造』の紙面を、此問題で埋めるなどといふのは、一向感心しない。天下一般の問題としてなら取扱ふ價値はあらうが。と答へた。

井上哲次郎氏に對する世間の態度も公平を缺いてゐた。氏は、餘りに甚しい罰を受けた。唯、氏が昔からの國權論者、國粹論者であつた爲め、殆んど、誰人からも、同情せられなかつたようである。しかし、其れは、公平を缺くも甚しいことであつたことは、疑を容れぬ。唯一つ、氏が、其自說を守ることゝならず、蒼惶として、其問題の本を絕版にしたと云ふ一事は、如何にも、非學者的處置であつた。其の爲めに、折角同情する人までも、ついに默して終つたものと見える。彼の場合氏が、あくまで、其本に書いたことを、、、、、、、、學問上の反駁に接して後、十分に吟味の上、其說を改めたのなら、氏は、或は、法律上、行政上の極罰を被つたかも知れないが、、、、、、輿論的に、、去られることはなかつたであらう。此點は、氏の爲めには勿論のこと、言論の自由のために、甚だしき惡例を貽したと思ふ。しかし、氏に此の失はあつたとて、氏が被つた社會的處罰は、餘りに酷なものであつた。たしかに、公平を失すること著しいものであつたと、

私は信ずる。

私は、右の事件を見て、政府筋の爲すところの馬鹿々々しさは勿論であるが、所謂世論なるものゝ、如何にも頼りないものであることを痛感し、甚しく悲觀せざるを得なかつた。私は或る學問上の公けの團體に於いて、此事を可なり執拗に論じ其か將來に、甚だしき惡例を殘すものなることを、極言した。しかし、一人の賛成者をも見出さなかつたことを、今に猶、限りなき恨事としてゐるものである。

政府當局の爲すところの馬鹿々々しさを責める人は、顧みて、自分等も其一人である所謂輿論なるものゝ、存外たよりないものであることを知らなければならない。輿論が斯く公平を缺き、斯く不徹底であるからこそ、政府當局は、何時までも其の迷夢を覺まさないのである。輿論が、公平に、一貫的に、言論自由の擁護主張に精進する以上如何に頑迷であらうとも、當局者もついには、それに追隨し來らざるを得まいと、私は思ふものである。即ち、今日の問題の處理は、ひとり當局を責める丈けでは、何んにもならない。世論なるものゝ振興、覺醒を促すことの方が先であると思ふ。

世論の一貫を缺く事例に、最近數年間、私は、いろ〱の場合に於いて認めざるを得なかつた。例へば、或有名な思想家が、講演中多少不穩の言があつたとて、其人は、或る有力な新聞社との關係を絕つことを條件として、其筋から放免され、爾來其人は、浪人をしてゐるのだと、巷間に傳へられてゐるが如きこれである。私は、元より事實の眞僞を確むる便を有せぬ。しかし、其樣な巷說は、半聾なる私の耳にすら入るほど、一般に擴つてゐるにも拘らず、誰一人、其馬鹿らしさに於いて井上氏事件に劣らざる此事について、其馬鹿らしさを指摘したことないのである。

世論なるものが、斯くたよりないものである間は、出版法、新聞紙法の運用上、手心警察の滑稽事は、まだ〱頻繁に續出するものと覺悟して居らねばならぬ。當局に抗議したり、攻擊したりするは、抑も〱の末である。甚しきは內閲制度の復活をさへ必要と感ぜしめるくらゐの心細さである。

ソコデ、私の言はんとするところは、極めて簡單である。曰く、言論の自由、殊に手心警察からの完全なる解放を實現すべく、各新聞社雜誌社等が、主となつて、一の有力な運動を起し、殊に當面の問題たる差押分割還付などの技術的手心的事件について、誰人も誤解することない樣、ハツキリと據るところを示すことを要求すべきである。而して、他面には、被害者の誰人たるを問はず、言論擁護の上に於いて一貫徹底した世論の振興に勉むべきであると。

此運動が、有力なものであれば、當局は必ず、其主張の前に降り來る外ないものと、私は信じてゐる。唯徒らに、事件起る每に、多少騒いで見ると云ふ樣な、生温いことでは、むしろ、何にもせずに、運を天に任するに若かずと、私は思ふ。(二、八、三一)

改造社新刊書

吉田絃二郎著

最新刊 **旅人** 四六判上製 定價一圓八十錢 送料二十錢

▲運命の秋 定價二圓 送料二十錢

▲一人歩む 定價一圓八十錢 送料二十二錢

▲芭蕉 定價一圓六十錢 送料十八錢

▲父 定價一圓九十錢 送料二十錢

谷崎潤一郎著

縮刷 **愛すればこそ 愛なき人々** 四六判並製 定價一圓 送料十六錢

▲癡人の愛 定價二圓 送料二十二錢

▲赤い屋根 定價二圓 送料二十二錢

▲長篇小說 鮫人 定價二圓 送料二十錢

▲新選谷崎潤一郎集 定價五圓五十錢 送料內二十七錢

高畠素之著

改譯 **資本論解說** 四六判並製 定價一圓 送料十六錢

▲社會主義社會學 定價一圓 送料十六錢

▲社會主義と進化論 定價一圓 送料十六錢

▲マルキシズムと國家主義 定價一圓 送料十六錢

志賀直哉著 **山科の記憶** 四六判上製 定價一圓五十錢 送料二十錢

室生犀星著 **庭をつくる人** 四六判上製 定價二圓 送料二十二錢

中河與一著 **恐ろしき私** 四六判上製 定價一圓八十錢 送料二十錢

長尾正人譯 **遺傳學概論** 四六判上製 定價一圓八十錢 送料二十錢

高柳賢三著 **現代法律思想の研究** 菊判上製 定價四圓五十錢 送料二十七錢

東北大學教授 武內義雄著 **老子の研究** 菊判上製 定價三圓五十錢 送料二十七錢

前號の讀者へ

本誌九月號創作欄中里介山氏の「夢殿」が其の筋の忌諱に觸れ所載頁全部を削除いたしましたため、葉山嘉樹氏「天の怒聲」の最後の頁及び犬養健氏「人間の意志」の最初の頁も亦不得止切取られ、讀者諸氏に御迷惑をかけました。犬養、葉山兩氏の部分を左に掲げます。

（葉山氏「天の怒聲」つゞき）

私も、此話を此んな變化のない處で打ち切りたくはない。それは變化のある話も稀にはあるのだから。

だが又、こんな變化のない勞役に從ふ囚人もある。それは監獄中の監房や事務所などに使ふ、水道の水をタンクに押し上げるポンプ番である。

彼は朝から晩までポンプを押してゐる。眞冬でも彼の額からは汗が流れてゐる。彼の傍を通つて運動場に出て行く。私たちを見る彼の眼は、砂糖臼に縛りつけられた牛の眼に似てゐた。私は彼が二年も經つたら、きつと恐水病に罹るに相違ないと思つた。

——一九二七、七、二八——

（犬養氏「人間の意志」はじめ）

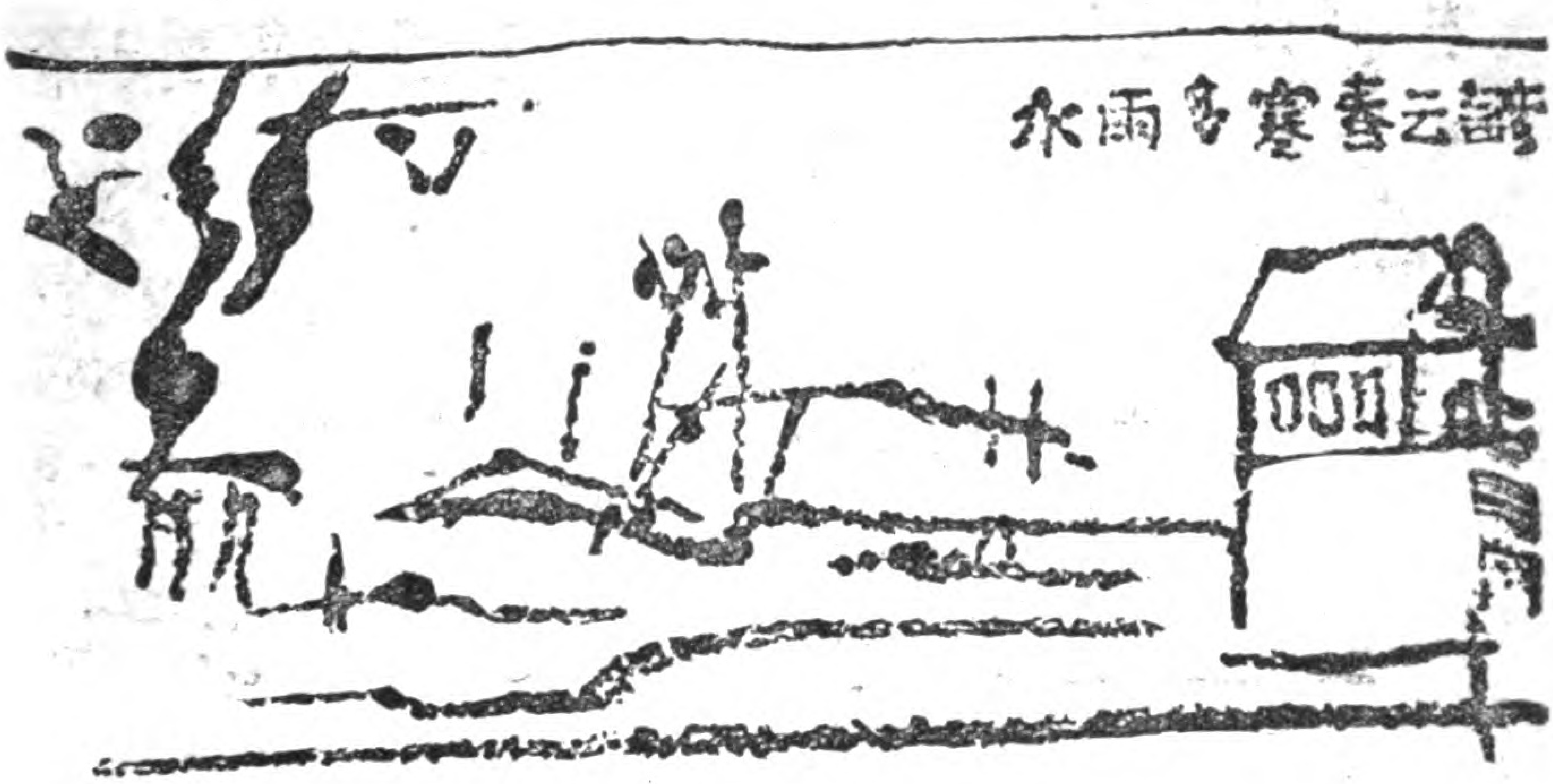
人間の意志

「明るい人」の續篇

一

二日經つて龍三は、大きい夕燒雲の下で灯の點つたあちこちの家の晩食の匂ひを親しいものに感じながら、丘の一番上にある梶田の家に招ばれて登つて行つた。そこはあまり急な坂道なので、借り手が少いといふ評判の家だつた。——毎金曜日の音樂館の練習なのだらう、すぐ足もとの避暑團公會堂の朽ちかけた屋根の下から大型ピアノの練習の節がしきりに響いて、食事前の落ち着かない空氣のなかに小せはしく擴がつてゐた。松子の縁談についてその晩、梶田にも一應賴光の事を話されやうと思つてゐるので、龍三はピアノの音を聞くとすぐに、松子が子供達にピアノを教へて小遣ひを得てゐるといふ事實を想ひ浮べた。足もとの公會堂の外人の令孃は、勿論樂しみのために、明るく喜ばしく彈いてゐるのであらう。——

龍三の招ばれて行く梶田の家といふのは、つまり梶田が同居させて貰つてゐるニコル——英國陸軍大尉のニコルの家だつた。そしてそれは、ニコルが先日の[illegible]の禮を龍三に云ひたいといふ意味のもてなしなのだ。



或阿呆の一生

芥川龍之介

僕はこの原稿を發表する可否は勿論、發表する時や機關も君に一任したいと思つてゐる。

君はこの原稿の中に出て來る大抵の人物を知つてゐるだらう。しかし僕は發表するとしても、インデキスをつけずに貰ひたいと思つてゐる。

僕は今最も不幸な幸福の中に暮らしてゐる。しかし不思議にも後悔してゐない。唯僕の如き惡夫、惡子、惡親をもつたものたちを如何にも氣の毒に感じてゐる。ではさやうなら。僕はこの原稿の中では少くとも意識的には自己辯護をしなかつたつもりだ。

最後に僕のこの原稿を特に君に托するのは君の恐らくは誰よりも僕を知つてゐると思ふからだ。（都會人と云ふ僕の皮を剝ぎさへすれば）どうかこの原稿の中に僕の阿呆さ加減を笑つてくれ給へ。

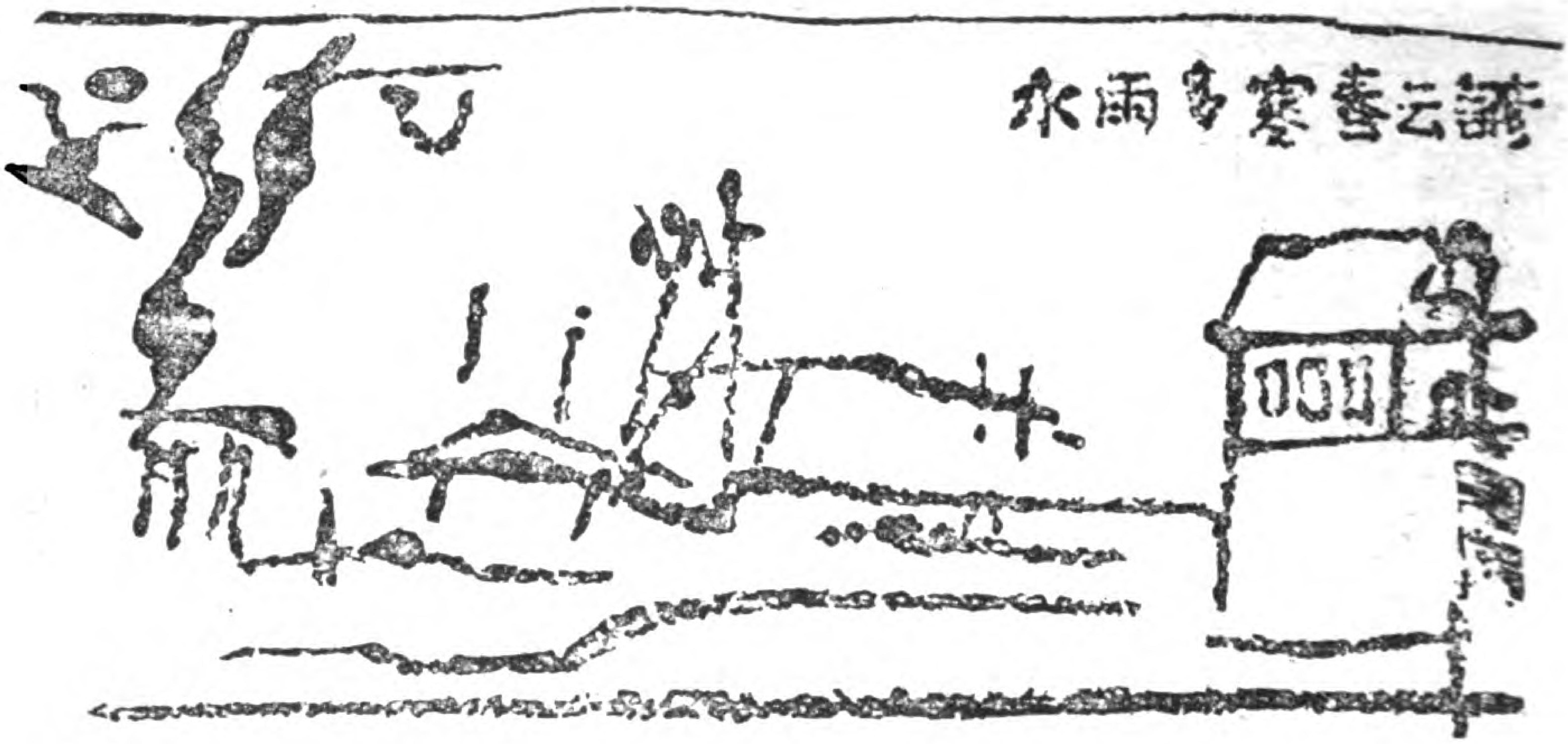
昭和二年六月二十日

芥川龍之介

久米正雄君

右の遺志に依り、私は此處に此の原稿を發表する。時期も場所も、最も自然な狀態だと信じて。――が、其點に就て、幾らかの粗漏があるとすれば、遺靈に對して詫びる外はない。

云ふ迄もなく、是は故人の「自傳的エスキス」である。（原稿にはさう割註がしてあつて、抹消されてある。消してある文句を、玆に發表するのも如何かとは思はれるが、幾らかでも、さう云ふ割註をしたい意志があつたやうに思ふので、玆に敢て補註して置く。）が、更に云ふ



迄もなく、是は一個の「作品」である。私は此の發表に際して、故人が私に囑した如く、私から讀者に、此の中に出て來る人物に對して、ヂャーナリスティックな、乃至はゴシップ的な、違ふ形式の「インデックス」は付けずに置いて貰ひたいと思ふ。

それから原稿には、左の脱字乃至は誤字と目さるべきものがある。もつとあるかも知れないが、氣付いたものだけを記して置く。明に誤脫だと分つては居ても、訂正する事が出來ないのは悲しい。

以上、遺文を汚す恐れを抱き乍ら、敢て數行のプレフエースを付ける。インデックスでないから故人も許して吳れるだらう。（久米正雄識）

一　時代

それは或本屋の二階だつた。二十歲の彼は書棚にかけた西洋風の梯子に登り、新らしい本を探してゐた。モオパスサン、ボオドレエル、ストリンベリイ、イブセン、ショオ、トルストイ、…………

そのうちに日の暮は迫り出した。しかし彼は熱心に本の背文字を讀みつづけた。そこに並んでゐるのは本と言ふよりも寧ろ世紀末それ自身だつた。ニイチエ、ヴエルレエン、ゴンクウル兄弟、ダスタエフスキイ、ハウプトマン、フロオベエル、………

彼は薄暗がりと戰ひながら、彼等の名前を數へて行つた。が、本はおのづからもの憂い影の中に沈みはじめた。彼はとうとう根氣も盡き、西洋風の梯子を下りようとした。すると傘のない電燈が一つ、丁度彼の額の上に突然ぽかりと火をともした。彼は梯子の上に佇んだまま、本の間に動いてゐる店員や客を見下した。彼等は妙に小さかつた。のみならず如何にも見すぼらしかつた。

「人生は一行のボオドレエルにも若かない。」

彼は暫く梯子の上からから云ふ彼等を見渡してゐた。……

二　母

狂人たちは皆同じやうに鼠色の着物を着せられてゐた。廣い部屋はその爲に一層憂鬱に見えるらしかつた。彼等の一人はオルガンに向ひ、熱心に讃美歌を彈きつづけてゐた。同時に又彼等の一人は丁度部屋のまん中に立ち、踊ると云ふよりも跳ねまはつてゐた。

彼は血色の善い醫者と一しよにかう云ふ光景を眺めてゐた。彼の母も十年前には少しも彼等と變らなかつた。少しも、――彼は實際彼等の臭氣に彼の母の臭氣を感じた。

「ぢや行かうか?」

醫者は彼の先に立ちながら、廊下傳ひに或部屋へ行つた。その部屋の隅にはアルコオルを滿した、大きい硝子の壺の中に腦髓が幾つも漬つてゐた。彼は或腦髓の上にかすかに白いものを發見した。それは丁度卵の白味をちよつと滴らしたのに近いものだつた。彼は醫者と立ち話をしながら、もう一度彼の母を思ひ出した。

「この腦髓を持つてゐた男は××電燈會社の技師だつたがね。いつも自分を黒光りのする、大きいダイナモだと思つてゐたよ。」

彼は醫者の目を避ける爲に硝子窓の外を眺めてゐた。そこには空き罎の破片を植ゑた煉瓦塀の外に何もなかつた。しかしそれは薄い苔をまだらにぼんやりと白らませてゐた。

三　家

彼は或郊外の二階の部屋に寢起きしてゐた。それは地盤の緩い爲に妙に傾いた二階だつた。

彼の伯母はこの二階に度たび彼と喧嘩をした。それは彼の養父母の仲裁を受けることもないことはなかつた。しかし彼は彼の伯母に誰よりも愛を感じてゐた。一生獨身だつた彼の伯母はもう彼の二十歳の時にも六十に近い年よりだつた。

彼は或郊外の二階に何度も互に愛し合ふものは苦しめ合ふのかを考へたりした。その間も何か氣味の惡い二階の傾きを感じたから。

四　東京

隅田川はどんより曇つてゐた。彼は走つてゐる小蒸汽の窓から向う島の櫻を眺めてゐた。花を盛つた櫻は彼の目には一列の襤褸のやうに憂鬱だつた。が、彼はその櫻に、――江戸以來の向う島の櫻にいつか彼自身を見出してゐた。

五　我

彼は彼の先輩と一しよに或カツフェの卓子に向ひ、絶えず卷煙草をふかしてゐた。彼は餘り口をきかなかつた。が、彼の先輩の言葉には

熱心に耳を傾けてゐた。

「けふは半日自動車に乗つてゐた。」

「何か用があつたのですか？」

彼の先輩は頬杖をしたまま、極めて無造作に返事をした。

「何、唯乗つてゐたかつたから。」

その言葉は彼の知らない世界へ、――神々に近い「我」の世界へ彼自身を解放した。彼は何か痛みを感じた。が、同時に又歓びも感じた。

そのカツフエは極小さかつた。しかしパンの神の額の下には赭い鉢に植ゑたゴムの樹が一本、肉の厚い葉をだらりと垂らしてゐた。

六　病

彼は絶え間ない潮風の中に大きい英吉利語の辞書をひろげ、指先に言葉を探してゐた。

Talaria　翼の生えた靴、或はサンダアル。

Tale　話。

Talipot　東印度に産する椰子。幹は五十呎より百呎の高さに至り、葉は傘、扇、帽等に用ひらる。七十年に一度花を開く。………

彼の想像ははつきりとこの椰子の花を描き出した。すると彼は喉もとに今までに知らない痒さを感じ、思はず辞書の上に唾を落した。唾を？――しかしそれは唾ではなかつた。

彼は短い命を思ひ、もう一度この椰子の花を想像した。この遠い海の向うに高だかと聳えてゐる椰子の花を。

七　画

彼は突然、――それは実際突然だつた。彼は或本屋の店先に立ち、ゴオグの画集を見てゐるうちに突然画と云ふものを了解した。勿論そのゴオグの画集は写真版だつたのに違ひなかつた。が、彼は写真版の中にも鮮かに浮かび上る自然を感じた。

この画に対する情熱は彼の視野を新たにした。彼はいつか木の枝のうねりや女の頬の膨らみに絶え間ない注意を配り出した。

或雨を持つた秋の日の暮、彼は或郊外のガアドの下を通りかかつた。ガアドの向うの土手の下には荷馬車が一台止まつてゐた。彼はそこを通りながら、誰か前にこの道を通つたもののあるのを感じ出した。誰か？――それは彼自身に今更問ひかける必要もなかつた。二十三歳の彼の心の中には耳を切つた和蘭人が一人、長いパイプを啣へたまま、この憂鬱な風景画の上へぢつと鋭い目を注いでゐた。

……………

八　火花

彼は雨に濡れたまま、アスフアルトの上を踏んで行つた。雨は可也烈しかつた。彼は水沫の満ちた中にゴム引の外套の匂を感じた。

すると目の前の架空線が一本、紫いろの火花を發してゐた。彼は妙に感動した。彼の上着のポケットは彼等の同人雜誌へ發表する彼の原稿を隱してゐた。彼は雨の中を歩きながら、もう一度後ろの架空線を見上げた。

架空線は不相變鋭い火花を放つてゐた。彼は人生を見渡しても、何も特に欲しいものはなかつた。が、この紫色の火花だけは、――凄まじい空中の火花だけは命と取り換へてもつかまへたかつた。

九　死體

死體は皆親指に針金のついた札をぶら下げてゐた。その又札は名前だの年齡だのを記してゐた。彼の友だちは腰をかゞめ、器用にメスを動かしながら、或死體の顏の皮を、、はじめた。皮の下に廣がつてゐるのは美しい黄色の脂肪だつた。

彼はその死體を眺めてゐた。それは彼には或短篇を、――王朝時代に背景を求めた或短篇を仕上げる爲に必要だつたのに違ひなかつた。が、腐敗した杏の匂に近い死體の臭氣は不快だつた。彼の友だちは眉間をひそめ、靜かにメスを動かして行つた。

「この頃は死體も不足してね。」

彼の友だちはかう言つてゐた。すると彼はいつの間にか彼の答を用意してゐた。――「己は死體に不足すれば、何の惡意もなしに、、しをするがね。」しかし勿論彼の答は心の中にあつただけだつた。

十　先生

彼は大きい檞の木の下に先生の本を讀んでゐた。檞の木は秋の日の光の中に一枚の葉さへ動さなかつた。どこか遠い空中に硝子の皿を垂れた秤が一つ、丁度平衡を保つてゐる。――彼は先生の本を讀みながら、かう云ふ光景を感じてゐた。……

十一　夜明け

夜は次第に明けて行つた。彼はいつか或町の角に廣い市場を見渡してゐた。市場に群つた人々や車はいづれも薔薇色に染まり出した。

彼は一本の卷煙草に火をつけ、靜かに市場の中へ進んで行つた。するとか細い黑犬が一匹、いきなり彼に吠へかゝつた。が、彼は驚かなかつた。のみならずその犬さへ愛してゐた。

市場のまん中には篠懸が一本、四方へ枝をひろげてゐた。彼はその根もとに立ち、枝越しに高い空を見上げた。空には丁度彼の眞上に星が一つ輝いてゐた。

それは彼の二十五の年、――先生に會つた三月目だつた。

十二　軍港

潛航艇の內部は薄暗かつた。彼は前後左右を蔽つた機械の中に腰をかがめ、小さい目金を覗いてゐた。その又目金に映つてゐるのは明る

い軍港の風景だつた。

「あすこに『金剛』も見えるでせう。」

或海軍將校はかう彼に話しかけたりした。彼は四角いレンズの上に小さい軍艦を眺めながら、なぜかふと阿蘭陀芹を思ひ出した。一人前三十錢のビイフ・ステエクの上にもかすかに匂つてゐる阿蘭陀芹を。

十三　先生の死

彼は雨上りの風の中に或新らしい停車場のプラットフォオムを歩いてゐた。空はまだ薄暗かつた。プラットフォオムの向うには鐵道工夫が三四人、一齊に鶴嘴を上下させながら、何か高い聲にうたつてゐた。

雨上りの風は工夫の唄や彼の感情を吹きちぎつた。彼は卷煙草に火もつけずに歡びに近い苦しみを感じてゐた。「センセイキトク」の電報を外套のポケットへ押しこんだまま。……

そこへ向うの松山のかげから午前六時の上り列車が一列、薄い煙を靡かせながら、うねるやうにこちらへ近づきはじめた。

十四　結婚

彼は結婚した翌日に「來匆々無駄費ひをしては困る」と彼の妻に小言を言つた。しかしそれは彼の小言よりも彼の伯母の「言へ」と云ふ小言だつた。彼の妻は彼自身には勿論、彼の伯母にも詫びを言つてゐた。彼の爲に買つて來た黄水仙の鉢を前にしたまま。……

十五　彼等

彼等は平和に生活した。大きい芭蕉の葉の廣がつたかげに。——彼等の家は東京から汽車でもたつぷり一時間かかる或海岸の町にあつたから。

十六　枕

彼は薔薇の葉の匂のする懷疑主義を枕にしながら、アナトオル・フランスの本を讀んでゐた。が、いつかその枕の中にも半身半馬神のゐることには氣づかなかつた。

十七　蝶

藻の匂の滿ちた風の中に蝶が一羽ひらめいてゐた。彼はほんの一瞬間、乾いた彼の脣の上へこの蝶の翅の觸れるのを感じた。が、彼の脣の上へいつか捺つて行つた翅の粉だけは數年後にもまだきらめいてゐた。

十八　月

彼は或ホテルの階段の途中に偶然彼女に遭遇した。彼女の顏はかういふ晝にも月の光りの中にゐるやうだつた。彼は彼女を見送りながら、

（彼等は一面識もない間がらだつた。）今まで知らなかつた寂しさを感じた。……

十九　人工の翼

彼はアナトオル・フランスから十八世紀の哲學者たちに移つて行つた。が、ルツソオには近づかなかつた。それは或は彼自身の一面、——情熱に驅られ易い一面のルツソオに近い爲かも知れなかつた。彼は彼自身の他の一面、——冷かな理智に富んだ一面に近い「カンディード」の哲學者に近づいて行つた。

人生は二十九歳の彼にはもう少しも明るくはなかつた。が、ヴォルテエルはかう云ふ彼に人工の翼を供給した。

彼はこの人工の翼をひろげ、易やすと空へ舞ひ上つた。同時に又理智の光を浴びた人生の歡びや悲しみは彼の目の下へ沈んで行つた。彼は見すぼらしい町々の上へ反語や微笑を落しながら、遮るもののない空中をまつ直に太陽へ登つて行つた。丁度かう云ふ人工の翼を太陽の光りに燒かれた爲にとうとう海へ落ちて死んだ昔の希臘人も忘れたやうに。……

二十　械

彼等夫妻は彼の養父母と一つ家に住むことになつた。それは彼が或新聞社に入社することになつた爲だつた。彼は黄いろい紙に書いた一枚の契約書を力にしてゐた。が、その契約書は後になつて見ると、新聞社は何の義務も負はずに彼ばかり義務を負ふものだつた。

二十一　狂人の娘

二台の人力車は人氣のない曇天の田舍道を走つて行つた。その道の海に向つてゐることは潮風の來るのでも明らかだつた。後の人力車に乘つてゐた彼は少しもこのラン・デ・ブウに興味のないことを怪みながら、彼自身をここへ導いたものの何であるかを考へてゐた。それは決して戀愛ではなかつた。若し戀愛でないとすれば、——彼はこの答を避ける爲に「兎に角我等は對等だ」と考へない譯には行かなかつた。

前の人力車に乘つてゐるのは或狂人の娘だつた。のみならず彼女の妹は嫉妬の爲に自殺してゐた。

「もうどうにも仕かたはない。」

彼はもうこの狂人の娘に、——動物的本能ばかり強い彼女に或憎惡を感じてゐた。

二台の人力車はその間に磯臭い墓地の外へ通りかかつた。蠣殻のついた粗朶垣の中には石塔が幾つも黒んでゐた。彼はそれ等の石塔の向うにかすかにかがやいた海を眺め、何か急に彼女の夫を——彼女の心を捉へてゐない彼女の夫を輕蔑し出した。……

二十二　或畫家

それは或雜誌の挿し畫だつた。が、一羽の雄鷄の墨畫は著しい個性を示してゐた。彼は或友だちにこの畫家のことを尋ねたりした。

一週間ばかりたつた後、この畫家は彼を訪問した。それは彼の一生のうちでも特に著しい事件だつた。彼はこの畫家の中に誰も知らない彼を發見した。のみならず彼自身も知らずにゐた彼の魂を發見した。

或薄ら寒い秋の日の暮、彼は一本の唐黍に忽ちこの畫家を思ひ出した。丈の高い唐黍は荒あらしい葉をよろつたまま、盛り土の上には神經のやうに細ぼそと根を露はしてゐた。それは又勿論傷き易い彼の自畫像にも違ひなかつた。しかしかう云ふ發見は彼を憂鬱にするだけだつた。

「もう遲い。しかしいざとなつた時には……」

二十三　彼女

或廣場の前は暮れかかつてゐた。彼はやや熱のある體にこの廣場を歩いて行つた。大きいビルディングは幾棟もかすかに銀色に澄んだ空に窓々の電燈をきらめかせてゐた。

彼は道ばたに足を止め、彼女の來るのを待つことにした。五分ばかりたつた後、彼女は何かやつれたやうに彼の方へ歩み寄つた。が、彼の顏を見ると、「疲れたわ」と言つて頬笑んだりした。彼等は肩を並べながら、薄明い廣場を歩いて行つた。それは彼等には始めてだつた。彼は彼女と一しよにゐる爲には何を捨てても善い氣もちだつた。

彼等の自動車に乘つた後、彼女はぢつと彼の顏を見つめ、「あなたは後悔なさらない？」と言つた。彼はきつぱり「後悔しない」と答へた。彼女は彼の手を抑へ、「あたしは後悔しないけれども」と言つた。彼女の顏はかう云ふ時にも月の光の中にゐるやうだつた。

二十四　出産

彼は襖側に佇んだまゝ、白い手術着を着た産婆が一人、赤兒を洗ふのを見下してゐた。赤兒は石鹸の目にしみる度にいぢらしい顰め顏を繰り返した。のみならず高い聲に啼きつゞけた。彼は何か鼠の仔に近い赤兒の匂を感じながら、しみ〴〵かう思はずにはゐられなかつた。——

「何の爲にこいつも生れて來たのだらう？　この娑婆苦の充ち滿ちた世界へ。——何の爲に又こいつも己のやうなものを父にする運命を荷つたのだらう？」

しかもそれは彼の妻が最初に出産した男の子だつた。

二十五　ストリンベリイ

彼は部屋の戸口に立ち、柘榴の花のさいた月明りの中に薄汚い支那人が何人か、麻雀戲をしてゐるのを眺めてゐた。それから部屋の中にひき返すと、背の低いランプの下に「痴人の告白」を讀みはじめた。

が、二頁も読まないうちにいつか苦笑を洩らしてゐた。――ストリントベリイも亦情人だつた伯爵夫人へ送る手紙の中に彼と大差のない譃を書いてゐる。………

二十六　古代

彩色の剥げた仏たちや天人や馬や蓮の華は殆ど彼を圧倒した。彼はそれ等を見上げたまゝ、あらゆることを忘れてゐた。狂人の娘の手を脱した彼自身の幸運さへ。………

二十七　スパルタ式訓練

彼は彼の友だちと或裏町を歩いてゐた。そこへ幌をかけた人力車が一台、まつ直に向うから近づいて来た。しかもその上に乗つてゐるのは意外にも昨夜の彼女だつた。彼女の顔はかう云ふ昼にも月の光の中にゐるやうだつた。彼等は彼の友だちの手前、勿論挨拶さへ交さなかつた。

「美人ですね。」

彼の友だちはこんなことを言つた。彼は往来の突き当りにある、春の山を眺めたまま、少しもためらはずに返事をした。

「ええ、中々美人ですね。」

二十八　殺人

田舎道は日の光りの中に牛の糞の臭気を漂はせてゐた。彼は汗を拭ひながら、爪先き上りの道を登つて行つた。道の両側に熟した麦は香ばしい匂を放つてゐた。

「殺せ、殺せ。………」

彼はいつか口の中にかう云ふ言葉を繰り返してゐた。誰を？――それは彼には明らかだつた。彼は如何にも卑屈らしい五分刈の男を思ひ出してゐた。

すると黄ばんだ麦の向うに羅馬カトリツク教の伽藍が一宇、いつの間にか円屋根を現し出した。………

二十九　形

それは鉄の銚子だつた。彼はこの糸目のついた銚子にいつか「形」の美を教へられてゐた。

三十　雨

彼は大きいベツドの上に彼女といろいろの話をしてゐた。寝室の窓の外は雨ふりだつた。浜木棉の花はこの雨の中にいつか腐つて行くらしかつた。彼女の顔は不相変月の光の中にゐるやうだつた。が、彼女と話してゐることは彼には退屈でないこともなかつた。彼は腹這ひになつたまま、静かに一本の巻煙草に火をつけ、彼女と一しよに日を暮らすのも七年になつてゐることを思ひ出した。

「おれはこの女を愛してゐるだらうか？」

彼は彼自身にかう質問した。この答は彼自身を見守りつけた彼自身にも意外だつた。

「おれは未だに愛してゐる。」

三十　大地震

それはどこか熟し切つた杏の匂に近いものだつた。彼は焼けあとを歩きながら、かすかにこの匂を感じ、炎天に腐つた死骸の匂も存外悪くないと思つたりした。が、死骸の重なり重つた池の前に立つて見ると、「酸鼻」と云ふ言葉も感覚的に決して誇張でないことを発見した。殊に彼を動かしたのは十二三歳の子供の死骸だつた。彼はこの死骸を眺め、何か羨ましさに近いものを感じた。「神々に愛せらるるものは夭折す」――かう云ふ言葉なども思ひ出した。彼の姉や異母弟はいづれも家を焼かれてゐた。しかし彼の姉の夫は偽証罪を犯した為に執行猶豫中の體だつた。……

「誰も彼も死んでしまへば善い。」

彼は焼け跡に佇んだまま、しみじみかう思はずにゐられなかつた。

三十一　喧嘩

彼は彼の異母弟と取り組み合ひの喧嘩をした。彼の弟は彼の為に壓迫を受け易いのに違ひなかつた。同時に又彼も彼の弟の為に自由を失つてゐるのに違ひなかつた。彼の親戚は彼の弟に「彼を見慣へ」と言ひつづけてゐた。しかしそれは彼自身には手足を縛られるのも同じことだつた。彼等は取り組み合つたまま、とうとう縁先へ轉げて行つた。縁先の庭には百日紅が一本、――彼は未だに覺えてゐる。――雨を持つた空の下に赤光りに花を盛り上げてゐた。

三十二　英雄

彼はヴォルテェルの家の窓からいつか高い山を見上げてゐた。氷河の懸つた山の上には禿鷹の影さへ見えなかつた。が、背の低い露西亜人が一人、執拗に山道を登りつづけてゐた。

ヴォルテェルの家も夜になつた後、彼は明るいランプの下にかう云ふ傾向詩を書いたりした。あの山道を登つて行つた露西亜人の姿を思ひ出しながら。……

――誰よりも十戒を守つた君は
誰よりも十戒を破つた君だ。

誰よりも民衆を愛した君は
誰よりも民衆を輕蔑した君だ。

誰よりも理想に燃え上つた君は

誰よりも現實を知つてゐた君だ。

君は僕等の東洋が生んだ
草花の匂のする電氣機關車だ。——

三十三　色彩

三十歳の彼はいつの間か或空き地を愛してゐた。そこには唯苔の生へた上に煉瓦や瓦の缺片などが幾つも散らかつてゐるだけだつた。が、それは彼の目にはセザンヌの風景畫と變りはなかつた。

彼はふと七八年前の彼の情熱を思ひ出した。同時に又彼の七八年前には色彩を知らなかつたのを發見した。

三十四　道化人形

彼はいつ死んでも悔いないやうに烈しい生活をするつもりだつた。が、不相變養父母や伯母に遠慮勝ちな生活をつづけてゐた。それは彼の生活に明暗の兩面を造り出した。彼は或洋服屋の店に道化人形の立つてゐるのを見、どの位彼も道化人形に近いかと云ふことを考へたりした。が、意識の外の彼自身は、——言はば第二の彼自身はとうにかう云ふ心もちを或短篇の中に盛りこんでゐた。

三十五　倦怠

彼は或大學生と芒原の中を歩いてゐた。

「君たちはまだ生活慾を盛に持つてゐるだらうね？」

「ええ、——だつてあなたでも……」

「ところが僕は持つてゐないんだよ。制作慾だけは持つてゐるけれども。」

それは彼の眞情だつた。彼は實際いつの間にか生活に興味を失つてゐた。

「制作慾もやつぱり生活慾でせう。」

彼は何とも答へなかつた。芒原はいつか赤い穗の上にはつきりと噴火山を露し出した。彼はこの噴火山に何か羨望に近いものを感じた。しかしそれは彼自身にもなぜと云ふことはわからなかつた。……

三十六　越し人

彼は彼と才力の上にも格鬪出來る女に遭遇した。が、「越し人」等の抒情詩を作り、僅かにこの危機を脫出した。それは何か木の幹に凍つた、かがやかしい雪を落すやうに切ない心もちのするものだつた。

風に舞ひたるすげ笠の
何かはみちに道に落ちざらん
わが名はいかで惜しむべき
惜しむは君が名のみとよ。

三十七 復讐

それは木の芽の中にある或ホテルの露台だつた。彼はそこに畫を描きながら、一人の少年を遊ばせてゐた。七年前に絶縁した狂人の娘の一人息子を。

狂人の娘は卷煙草に火をつけ、彼等の遊ぶのを眺めてゐた。彼は重苦しい心もちの中に汽車や飛行機を描きつゞけた。少年は幸ひにも彼の子ではなかつた。が、彼を「おぢさん」と呼ぶのは彼には何よりも苦しかつた。

少年のどこかへ行つた後、狂人の娘は卷煙草を吸ひながら、媚びるやうに彼に話しかけた。

「あの子はあなたに似てゐやしない？」

「似てゐません。第一……」

「だつて胎教と云ふこともあるでせう。」

彼は默つて目を反らした。が、彼の心の底にはかう云ふ彼女を絞め殺したい、殘虐な欲望さへない譯ではなかつた。

三十八 鏡

彼は或カツフエの隅に彼の友だちと話してゐた。彼の友だちは燒林檎を食ひ、この頃の寒さの話などをした。彼はかう云ふ話の中に急に矛盾を感じ出した。

「君はまだ獨身だつたね。」

「いや、もう來月結婚する。」

彼は思はず默つてしまつた。カツフエの壁に嵌めこんだ鏡は無數の彼自身を映してゐた。冷えびえと、何か脅すやうに。……

三十九 問答

なぜお前は現代の社會制度を攻撃するか？

資本主義の生んだ惡を見てゐるから。

惡を？ おれはお前は善惡の差を認めてゐないと思つてゐた。ではお前の生活は？

――彼はかう天使と問答した。尤も誰にも恥づる所のないシルクハツトをかぶつた天使と。……

四十 病

彼は不眠症に襲はれ出した。のみならず體力も衰へはじめた。何人かの醫者は彼の病にそれぞれ二三の診斷を下した。――胃酸過多、胃アトニイ、乾性肋膜炎、神經衰弱、慢性結膜炎、腦疲勞、……

しかし彼は彼自身彼の病源を承知してゐた。それは彼自身を恥ぢると共に彼等を恐れる心もちだつた。彼等を、――彼の輕蔑してゐた社會を！

或雪曇りに曇つた午後、彼は或カツフエの隅に火のついた葉卷を啣

へたまま、向うの蓄音機から流れて來る音樂に耳を傾けてゐた。それは彼の心もちに妙にしみ渡る音樂だつた。彼はその音樂の了るのを待ち、蓄音機の前へ歩み寄つてレコオドの貼り札を檢べることにした。

Magic Flute—Mozart

彼は咄嗟に了解した。十戒を破つたモッツアルトはやはり苦しんだのに違ひなかつた。しかしよもや彼のやうに、……彼は頭を垂れたまま、靜かに彼の卓子へ歸つて行つた。

四十一　神々の笑ひ聲

三十五歳の彼は春の日の當つた松林の中を歩いてゐた。二三年前に彼自身の書いた「神々は不幸にも我々のやうに自殺出來ない」と云ふ言葉を思ひ出しながら。……

四十二　夜

夜はもう一度迫り出した。荒れ模樣の海は薄明りの中に絶えず水沫を打ち上げてゐた。彼はかう云ふ空の下に彼の妻と二度目の結婚をした。それは彼等には歡びだつた。が、同時に又苦しみだつた。三人の子は彼等と一しよに沖の稻妻を眺めてゐた。彼の妻は一人の子を抱き、涙をこらへてゐるらしかつた。

「あすこに船か一つ見えるね？」

「ええ。」

「檣の二つに折れた船が。」

四十三　死

彼はひとり寢てゐるのを幸ひ、窓格子に帶をかけて縊死しようとした。が、帶に頸を入れて見ると、俄かに死を恐れ出した。それは何も死ぬ刹那の苦しみの爲に恐れたのではなかつた。彼は二度目には懷中時計を持ち、試みに縊死を計ることにした。するとちよつと苦しかつた後、何も彼もぼんやりなりはじめた。そこを一度通り越しさへすれば、死にはひつてしまふのに違ひなかつた。彼は時計の針を檢べ、彼の苦しみを感じたのは一分二十何秒かだつたのを發見した。窓格子の外はまつ暗だつた。しかしその暗の中に荒あらしい鷄の聲もしてゐた。

四十四　Divan

Divan はもう一度彼の心に新しい力を與へようとした。それは彼の知らずにゐた「東洋的なゲエテ」だつた。彼はあらゆる善惡の彼岸に悠々と立つてゐるゲエテを見、絕望に近い羨ましさを感じた。詩人ゲエテは彼の目には詩人クリストよりも偉大だつた。この詩人の心の中にはアクロポリスやゴルゴタの外にアラビアの薔薇さへ花をひらいてゐた。若しこの詩人の足あとを辿る多少の力を持つてゐたらば、──彼はディヴァンを讀み了り、恐しい感動の靜まつた後、しみじみ生活的宦官に生まれた彼自身を輕蔑せずにはゐられなかつた。

四十五　譃

彼の姉の夫の自殺は俄かに彼を打ちのめした。彼は今度は姉の一家の面倒も見なければならなかつた。彼の将来は少くとも彼には日の暮のやうに薄暗かつた。彼は彼の精神的破産に冷笑に近いものを感じながら、（彼の悪徳や弱点は一つ残らず彼にはわかつてゐた。）不相変いろいろの本を読みつゞけた。しかしルッソオの懺悔録さへ英雄的な譃に充ち満ちてゐた。殊に「新生」に至つては、──彼は「新生」の主人公ほど老獪な偽善者に出会つたことはなかつた。が、フランソア・ヴィヨンだけは彼の心にしみ透つた。彼は何篇かの詩の中に「美しい牡」を発見した。

絞罪を待つてゐるヴィヨンの姿は彼の夢の中にも現れたりした。彼は何度もヴィヨンのやうに人生のどん底に落ちようとした。が、彼の境遇や肉体的エネルギイはかういふことを許す訳はなかつた。彼はだんだん衰へて行つた。丁度昔スウイフトの見た、木末から枯れて来る立ち木のやうに。……

四十六　火あそび

彼女はかがやかしい顔をしてゐた。それは丁度朝日の光の薄氷にさしてゐるやうだつた。彼は彼女に好意を持つてゐた。しかし恋愛は感じてゐなかつた。のみならず彼女の体には指一つ触れずにゐたのだつた。

「死にたがつていらしやるのですつてね。」

「えゝ。──いいえ、死にたがつてゐるよりも生きることに飽きてゐるのです。」

彼等はかう云ふ問答から一しよに死ぬことを約束した。

「プラトニック・スウイサイドですね。」

「ダブル・プラトニック・スウイサイド。」

彼は彼自身の落ち着いてゐるのを不思議に思はずにはゐられなかつた。

四十七　死

彼は彼女とは死ななかつた。唯未だに彼女の体に指一つ触つてゐないことは彼には何か満足だつた。彼女は何事もなかつたやうに時々彼と話したりした。のみならず彼に彼女の持つてゐた青酸加里を一罎渡し、「これさへあればお互に力強いでせう、」とも言つたりした。

それは実際彼の心を丈夫にしたのに違ひなかつた。彼はひとり籐椅子に坐り、椎の若葉を眺めながら、度々死の彼に与へる平和を考へずにはゐられなかつた。

四十八　剥製の白鳥

彼は最後の力を尽し、彼の自叙伝を書いて見ようとした。が、それは彼自身には存外容易に出来なかつた。それは彼の自尊心や懐疑主

義や利害の打算の未だに残つてゐる為だつた。彼はかう云ふ彼自身を軽蔑せずにはゐられなかつた。しかし又一面には「誰でも一皮剝いて見れば同じことだ」とも思はずにはゐられなかつた。「詩と真実と」と云ふ本の名前は彼にはあらゆる自叙伝の名前のやうにも考へられ勝ちだつた。のみならず文芸上の作品に必しも誰も動かされないのは彼にははつきりわかつてゐた。彼の作品の訴へるものは彼に近い生涯を送つた彼に近い人々の外にある筈はない。――かう云ふ気も彼には働いてゐた。彼はそのために手短かに彼の「詩と真実と」を書いて見ることにした。

彼は「或阿呆の一生」を書き上げた後、偶然或古道具屋の店に剝製の白鳥のあるのを見つけた。それは頸を挙げて立つてゐたものの、黄ばんだ羽根さへ虫に食はれてゐた。彼は彼の一生を思ひ、涙や冷笑のこみ上げるのを感じた。彼の前にあるものは唯発狂か自殺かだけだつた。彼は日の暮の往来をたつた一人歩きながら、徐ろに彼を滅しに来る運命を待つことに決心した。

四十九　俘

彼の友だちの一人は発狂した。彼はこの友だちにいつも或親しみを感じてゐた。それは彼にはこの友だちの孤独の、――軽快な仮面の下にある孤独の人一倍身にしみてわかる為だつた。彼はこの友だちの発狂した後、二三度この友だちを訪問した。

「君や僕は悪鬼につかれてゐるんだね。世紀末の悪鬼と云ふやつにねえ。」

この友だちは声をひそめながら、こんなことを彼に話したりした。が、それから二三日後には或温泉宿へ出かける途中、薔薇の花さへ食つてゐたといふことだつた。彼はこの友だちの入院した後、いつか彼のこの友だちに贈つたテラコツタの半身像を思ひ出した。それはこの友だちの愛した「検察官」の作者の半身像だつた。彼はゴオゴリイも狂死したのを思ひ、何か彼等を支配してゐる力を感じずにはゐられなかつた。

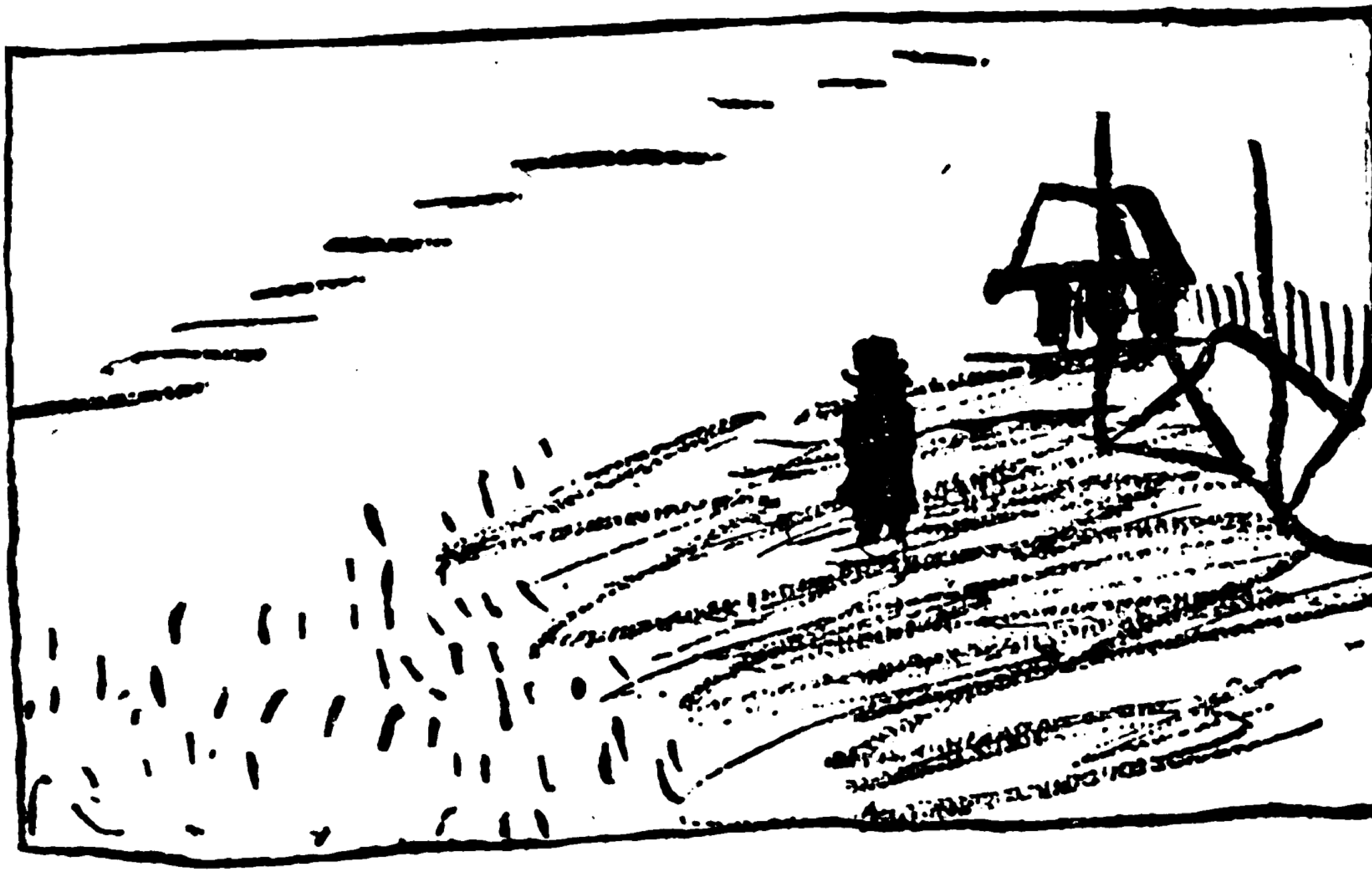
彼はすつかり疲れ切つた揚句、ふとラディゲの臨終の言葉を読み、もう一度神々の笑ひ声を感じた。それは「神の兵卒たちは己をつかまへに来る」といふ言葉だつた。彼は彼の迷信や彼の感傷主義と闘はうとした。しかしどう云ふ闘ひも肉体的に彼には不可能だつた。「世紀末の悪鬼」は実際彼を虐んでゐるのに違ひなかつた。彼は神を力にした中世紀の人々に羨しさを感じた。しかし神を信ずることは――神の愛を信ずることは到底彼には出来なかつた。あのコクトオさへ信じた神を！

五十　敗北

彼はペンを執る手も震へ出した。のみならず涎さへ流れ出した。彼の頭は〇・八のヴェロナアルを用ひて覚めた後の外は一度もはつきりしたことはなかつた。しかもはつきりしてゐるのはやつと半時間か一時間だつた。彼は唯薄暗い中にその日暮らしの生活をしてゐた。言はば刃のこぼれてしまつた、細い剣を杖にしながら。

「或阿呆の一生」中語句の誤りであらうと思はれるところを久米さんが左の如く指摘して下さいました（記者）

ストリンペリイ、	（三頁、十一行目、九頁、下段、十六行目）
ストリントペリイ、	十頁、上段、一—二行目、
ひらめてゐた。	七頁、下段、十一行目、
「疲れたやわ」	九頁、上段、十九行目、
やうに。だつた。（？）	九頁、下段、五行目、
爪上き上りの道	十頁、下段、二行目、
明らかつだ。	十頁、下段、六行目、
脈道	十一頁、上段、十九行目、
いつの間か	十二頁、上段、五行目、
みちに道に（？）	十二頁、下段、十七行目、
壁に嵌めこんだ壁（鏡）	十三頁、下段、三行目、
帶に頸に（を）	十四頁、下段、四行目、
容容易に	十五頁、下段、十九行目、
外にある外（砦）	十六頁、上段、七行目、
門の葬の近來	十六頁、上段、十四行目、
なかつた。	十六頁、下段、十四行目、



青空に描く

小川未明

將軍

將軍は、支那の女を愛してゐたが、不思議なことには、その愛してゐる女の顔を忘れることでした。

忘れるといつて、顔を見て、その女が分らないといふのでない。もしさうだつたら、全く精神に異狀のあることゝ知られたが、たゞ、將軍は思ひ出さうとしても、愛する女の顔が、ぼんやりとして、頭に浮んで來なかつたのでした。しかし、そのために、彼が、ほんたうに、彼女を愛してゐるのでないといふことはできなかつた。將軍は、心から愛してゐたことに、違ひはなかつたのでした。

「俺の頭が、どうかしてゐるのだ」と、將軍はつぶやきました。

しかし、他の女のことを頭の中で空想する時は、いつでも、その女の顔や、笑ひ聲までがはつきりと思ひ出されたので、こればかりでも、自分の頭が狂つてゐるからだといふことはできない。何うしたことだらう？　と、將軍は、惑はざるを得なかつた。

「私は、あの女を心から愛してゐるつもりではあるが、傍からは、さう見えないだらうか……」と、將軍は、ある日、長くから使へてゐる年老いた支那の男にたづねまし

た。

「將軍さま、なんで、あなたが、あの女を愛されないことがありませう。それは、もつたいない程です。私共の眼には、あなた樣のあふるゝばかりのご愛情をさとることができます」と、老人は、答へた。

將軍は、これを聞いて、うなづきながら、

「それ程までに、愛する女の顏が、折々、自分に思ひ出されないのは、どうしたことであらう。俺の頭が狂つてゐるのか、これには、仔細がなければならない」

老人は、兩方の瞼をしばたきながら、しばらく默つてゐたが、

「あなた樣、それには、誠に仔細のありますことです。冥加を知らぬ女めは、これ程までに親切にして下さるものを、あいつが、あなた樣を少しもお慕いしてゐないからです。魂の髓の中にはいつてゐない人間といふものは、幽靈に等しいもので、いくら、はつきりと思ひ出さうとしても、これを眼に描くことはできません……」と、言ひました。

將軍は、なんとなく胸の中をかき搔られるやうな氣がした。これ程までにして來た心づくしも、彼女には、何の手應へがなかつたかと思ふと、かぎりなく悲しかつた。

「そんなことがあるものか、お前は、それについて、何か知つてゐるのか？」

老人は、怖る〳〵將軍を見上げました。

「何よりも、あなた樣が、女の顏をはつきりと思ひ出されないのが、證據であります。それは、女の魂を捕へられないからです」

將軍は、いら〳〵して來ました。老人が、たとへ謹み深く、物を言つてはゐても、何んだか、侮辱されてゐるやうに感じられたのでした。

「あの女が、まんいち俺を愛されなくてもいゝ。俺のことを思つてくれなくてもいゝ。それは俺が、あの女を愛してゐることに關係のないことだ。彼女を愛するのは、俺の自由なのだ」と、將軍は、言つた。

老人は、たゞ默つてゐました。すると、將軍は、返答を促すやうに、頭の上から、

「さう、思はないか？」と、言つた。

老人は、さびしさうな笑ひを顏の上に浮べました。そして、口をもぐ〳〵してゐたが、

「あなた樣の權力は、なんでも、自由にさせます」と、答へた。

たちまち、將軍の眼は、光つて、顏の色は蒼白く變つた。

「權力によつて、服從を強ひると言ふのか？ それなら、長い間、お前が從つて來たのも、權力を怖れ、暴力を怖れたからであるか、しかし、曾て、俺は、誰に對しても、奴隷を、強ひたことがない！」

弱々しく見える老人は、將軍の權威に怖れて、手足がわな〳〵と顫へてゐました。

「どういたしまして、私などは、何の役にも立たない人間なんです。

からして、将軍様の靴を磨いてゐる他に、用のない人間なんです……
…」と、憫みを乞ふやうに、頭を下げました。
この有様を見ては、流石に、腹を立てても、将軍は、これ以上怒ることはできません。ぼんやりと眼を老人の禿頭から離して、何か考へてゐました。
この時、老人は、二たび顔を上げて、
「あなた様が、もし、あの女の顔を思ひ出さうとされるなら、あの女の指にはまつてゐる黒い石のはいつた指輪をお考へなさいませ。さうすると、あの女の顔が、自然に、浮んで見えて来ます」
「……成程、どういふ訳だ」
「あの黒い石の中に女の魂が、宿つてゐるからです」
将軍は、眼を閉ぢて、それを試すやうに、沈黙してゐましたが、不意に、非常な熱心さをもつて、
「そ、それは、何うしたことなのだ。仔細をどうか聞かしてくれ」
と、言ひました。
老人は、冷かな笑を白い頬に浮べて、遠くの雲を見るやうな眼付をしました。
「それは、言へません。どうぞ、今は、聞かないで下さい」と、答へた。
将軍は、老人の素性を示けることは、できなかつたのでした。白い女の指に、食ひ込むやうにはまつてゐる、黒い石の光る指輪を眼に描くと、女の顔が、自然にはつきりと浮んだのであります。……
…将軍は、もはや、愛する女の姿を思ひ出すために、焦燥を感ずるやうなことはなかつた。
「これには、深い仔細があるにちがひない。それを知りたいものだ」
彼は、これを女にたづねることの無益なのを知つてゐました。なぜなら、女は、誰に対しても、あまり口を開かなかつた。将軍はそれを知るためには、やはり、老人を責めなければならなかつたのです。
「私は、あの女の秘密を言ひたくありません。けれど、あなた様の権力は、それを言はせるのであります」と、老人は、言つた。
ある日のこと、将軍の前に坐つた老人は、次のやうなことを物語りました。それを、将軍は、黙つて聞いてゐました。
……彼女には、相思の青年があつた。青年は、志士であつたから、常に一緒にゐることが出来なかつた。そして、今日あつて、明日ない命であつたから、楽しくいつしよに暮らすことができなかつた。僅かな逢瀬をたのしみにしてゐた。青年は、南方支那の生れであつた。どこで何うして手にいれたものか、珍らしい石のはいつた指輪を彼女に贈つた。その石は、黒かつたが、ある時分には、それが夏の夜の空色に、青くなつて見えた。また、ある時は、曇つた西方のやうに灰色になつて見えた。また、ある時は、赤酒の盃を透かして見るやうに紅かつたのである。その上、青年は彼女に向つて、
「この石は、なんでも、あなたの心の影をうつします。若し心に、悲しめば、悲

しみの色に變り、喜べば、喜びの色となる。もし、私のことを思つて下されば、いつでも私は、この石の中に現はれて來ます」と、言つた。

女は、この指輪を大事にしてゐる。そして、さびしい時には、ぢつと、自分の指に見入るのであつた。

これが、老人の將軍に、話したことであります。

「その青年は、死んでしまひました。あの女は全くあなた樣のものであります」

から老人は、言つたけれど、將軍は、何となくさびしかつた。それからといふもの、女に遇ふたびに、黑い石のはいつた指輪が眼についた。

彼は、いつでも、女の姿を眼の前に呼び出さうとした時は、白い、痩せた指にはまつた――いくらか、その黑い石は、四角といふより、長方形をしてゐたが――指輪を思ひ出したのでした。すると、瞼の腫れぼつたい、平常ぢつと、うつむいてゐる時は、大きな黑眼にそれが被さつてゐる、どこか、憂へを帶びてゐる顏が浮んだ。

「成程、老人が言つたやうに、あの指輪の中に、女の魂がはいつてゐる」

將軍は、時に、その指輪を見て、妬ましく感ずることがあつた。しかし、その青年は、死んでしまつた。それを、いまさら口に出すのは、自分に恥じなければならないから思つて、將軍は、すべてを心に祕して、彼女の指輪について、何も語らなかつたのでした。

ちやうど、將軍は、南滿にゐました。秋にはいつて、頭の上の空には、雁行が、亂れ勝であつた。四方の山には、颱が吹いて、木々の葉枝は、夜となく、晝となく、鳴つたのである。

何となく、季節ばかりでない、世界が不安になつたと將軍は、思つてゐました。一日、彼の愛する女は、故鄕の遼東へ、ちよつと歸してくれいと言つて、將軍に賴んだ。

將軍は、永久に、彼女が、彼から去つて行くのでないかと疑つた。そして、返事を躊躇してゐた。

「妾は、ぢきに戾つてまゐります。冬にならない前に、必ず、こゝへ歸つて來ますから……」と、彼女は、言ひました。

遼東には、年老いた父母と、それに、青年との間に生れた、男の子が生活してゐる筈であつた。子供のことは、曾て、女の口から言はれなかつたが、將軍は、これも、老人から、聞いてゐたのである。

「お前が、指輪を私に渡して行くなら、許してやらう……」と、將軍は、言つて、女の眼の中を讀まふとしました。

女は、すなほに、指輪を抜いて、これを將軍に渡しながら、

「妾が、戾つて來ましたら、この指輪をもらひます」と、言つた。

南方の海の色を、北方の夕暮方の空の色を、炎の光りを、時に七色の鋭い閃きと、戀しい人の笑顏をその裡に寫し出した、黑い石も、そ

れは彼女に眼つてゐたことでした。彼女の去つた後、將軍は、指輪を出して、日の射す窓の下で透かし、または焚火の影に、翳してそれを眺めたが、彼の眼に映るものは、獨り彼女の姿ばかりであつた。彼は他のものを見ようとしなかつたから、それで、滿足してゐたのである。

山は、荒びて、雪を催ほす冬に近づいて來ました。將軍は、毎日、彼女の歸るのを待つやうになつた。彼女は、約束に違はずに、戻つたのであります。

「何か、故郷では、變つたことがなかつたか？」

將軍は、さらに、無口になつて、旅疲れの見える彼女にたづねた。

彼女は、眼の中に、硝子のやうに、冷たい光りをたゝへながら、

「妾には、前夫の間に子供があります。やつと十にしかなりませんが、頭の髪の縮れ具合から、眼付が、夫を生寫しにしたやうです。祖母は、どういふものか、この孫をあまり可愛がりません。その子は、至つて我慢強くて何か辛いことがあつても、それを人に悟られまいとして、大きな口を開けて笑つて見せる。そんなことまでが、全く、死んだ父親に似てゐます。あまりよく似てゐるので、妾は、氣味の惡い程びつくりしました。そして、いぢらしく思ひました。妾が、立つ時に、どんなに怨めしさうな眼付をして、妾を眺めたでせう……」と、言ひ終つて、彼女は、涙を拭きました。

將軍は、彼女の指に、指輪のないのを知つてゐたが、意識して、そのことを考へまいとした。

「私が、子供から、お前を奪つたやうなものだな」

「左樣でございます」

將軍は、しばらく、默つてゐました。

「それに、子供は、病氣であります。もう長い間、患つてゐるので、顔が痩せて、頭だけ大きく見えるのです」

「お前は、その子供のことは忘れられまい」

「どうして、思はずにゐられませう……」

「すぐに、歸つて、看病をしてやつたら何うだ……」

「途が、遠方でございます。もう、歸る時分には、氣候が寒うございますから、子供は、死んでゐるかも知れません。死んだら、鴉になると言つてゐました」

「鴉に？……」と、將軍は、頭を傾けた。

彼女は、將軍をきつと見つめました。

「雪が降る前に、妾は、歸るとお約束いたしました。それで、妾は、戻つてまゐりました。どうぞ、あの指輪をお返し下さいまし」と、言つた。

將軍は、ちよつと返答に、躊躇したが、忽ち、笑ひ崩れた。

「指輪は？……さうだ。そんなものを預かつたやうだつたが、どこへか失してしまつた。よし、代りに、俺が、お前の好きなゝ指輪を買つてやらう」

これを聞いた時に、彼女の顏は、花の氣の拔けたやうに蒼白く見えた。力の強い者は、常に、弱い者に對して、約束の義務を果さずに濟むものです。そして、權力によつて、自由に振舞ふものです。誰も、將軍の行爲を咎めるものはなかつたでせう。

有史以來、曾て見なかつた程の戰爭が起つたのは、それから、間のないことでした。

× × × × ×

そこは、荒涼とした、廣い野原であつて、激しい、戰ひの跡をとゞめてゐます。四方の木立は、砲火のために、裂かれたり、また赤く、焦げてゐました。草は、黒く血に濡れて、見渡すかぎり、人間の屍で埋まつてゐる。敵も味方も別がなく入り混つてゐた。うつぶした者、仰向いたもの、拳を高く上げたもの、重なり合つてゐる者、いづれも苦痛の名殘を見せて、齒を喰ひしばつてゐた。いまゝで、聲を限りに喚いたものゝ上へ、氣味惡い沈默が襲つてゐたのでした。

たま〳〵遠方にあたつて、大砲の響きが聞えるばかり。廣野の上の空は、平常と何の變りがなかつたやうに、白い雲が、結ばれて、又いつしか解けてゐた。その間に、すが〳〵しい青い色が、自然の悠久を思はせるのでありました。

誰が、そこに斃れてゐる者が、國にゐる時分には、善良な父親であり、よく働いた息子等であつたことを疑ふものがあらう。すべてが、斃れ、朽ちて行くのでした。この時、多くの死骸の中で、たゞ一つ動いてゐる、また、呼吸の通つてゐるらしいのがあつた。

それは、服裝から見ると、將校であつたが、腰のあたりを彈丸が貫通したらしく、起たれなかつた。とつくから、正氣づいてゐたが、ぢつとして、救ひの來るのを待つてゐたのでした。彼は、かくしの中を探つて、一個の黒い石のはいつてゐる、婦人持の指輪を取り出した。そして、それを、ぢつと眺めてゐたのである。彼は、即ち、將軍でありました。

黒い石の裡に、ある日の光景が、あり〳〵と浮んだ。――しかも、彼女と別れた、一月ばかり前のことであつた。

「さうです。妾を、子供から奪つたものは、あなたでした。わたしの男の子は、十になつたばかりです。長らく病んで、頭だけが大きくて、體は痩せてゐます。怨めしさうに、別れる時に、妾を見て、死んだら、鴉になるといひました」……と。彼女は、言つたのであつた。

この時、鴉の聲がどこかでしました。

たちまち、黒い影が、彈丸のやうに、前後に飛ぶのが見えた。黒い鳥は、屍の上に止つて、何かつゝいてゐる。將軍は、辛うじて伸び上つて、それを見ようとして、

「あ！　眼球をつゝいてゐる！」と、いつて叫んだ！

いまゝで、死んだ人間ばかりと思つたのを、たま〳〵生きてゐる人に

間の聲を聞きつけると黒い鳥達は、却つて、その方へと襲つて來ました。

將軍は、鴉だちに殺されるのだと思つた。しかし、この時、それが、運命のやうにも感じられた。彼は、劔を拔いたけれど、無數に身のまはりに集つて來た、鴉を追ひ拂ふことができなかつた。一羽の痩せた頭の大きい鴉は、先刻から、彼方の立木に止つて、虚を狙つてゐたが、前のやうに飛んで來て、將軍の片眼を突いて閉してしまつた。黒い血は、顏を流れた。戰ひに疲れた、負傷した將軍は、仰向になつて斃れた。その時、黒い鳥達は、その肉を飽かずに突いては喰ひはじめたのであります。

女の笑つた時

父親と娘の二人が、つゝましやかな生活を營んでゐた。

父親は、ある機械工場につとめてゐる、勤勉な職工だつたのです。

――昨日と今日に、變りのあらう筈がなかつた。やはり、街には、ぞろ〳〵と人間が歩いてゐた。電車は、軌道の上を走つてゐたし、カーヴの處に來ると、鐵と鐵の摺れ合ふ音を立てゝゐた。そして、やがて、みんなから、その日は忘れられて行くのでした……。

少なくも、その日は、彼女にだけは忘れられなかつた。午後のこと、父親は、工場で過つて齒車にかゝつた。無神經の機械は、引かゝつた人間をそのまゝ卷き込んでしまつた。齒車の間から、赤黒い血がたら〳〵と流れるのが、硝子のはまつた窓を透して、射し込む鈍色い光線に照らされて見えた。そして、齒車は、片腕と片脚をもぎ取ると、氣絶した人間を冷たいコンクリートの上へ投り出した。それも、慌て仲間が、機械の運轉を止めたからでした。

「ほんたうに、俺達は、ごまかした生活はしないんだ。眞面目に働いてゐるのになあ……。」

と、大騒ぎをした後で、仲間の者が溜息をついた。

他人には、不幸と變りないその日が、娘には、永久に消えない印象を殘したのでした。なぜなら……ちやうど、工場に、悲慘の起つた時分、街の貴金屬店では、自動車から降りた夫人が、ダイヤのついてゐる、襟にさすピンを物色してゐました。また、ある一團の美食家達の集まる、料理店では、一人の紳士がメニュをながめて、なんでも腹いつぱいうまいものを詰め込んで、そして、滋養分を貯蓄して置いて、徹夜する時にへこたれないことを考へてゐました。また、銀行の出納口では、札束が、こゝでは一二圓の貨幣を得るために、勞働者が命がけで働いてゐることなどは、全く問題になつてゐないやうな無造作な調子で、手から、手へ渡されてゐたのでした。………娘が、何うして、自分達の身の上を考へずにゐられませう。

彼女は、それから、以前のやうに笑はない女になつてしまつた。

小さな、手で押す車の中へ、不具者になつた父親をいれて、彼女は、町の方へ引いて行つた。賑やかな通りへ出て、そこで二人は、

處を別れて、前へ蓆を敷き、娘は、その上に子供の玩具を、父親は、その日の新聞なとを並べて、通る人に賣つたのであります。

父親は、あちらの赤い電柱の傍に、娘は、路次のはいり口に、ぢつと一處を見つめてゐた。

「お母さん、水鐵砲を買つておくれよ」と、前を通りかゝつた時に、子供は、母親に手を引かれながら、眼を顔の上へ落して言つた。

若い母親は、無理に、強く子供の手を引張つて、叱るやうに、

「さう、買いたがるものでありません。家に鐵砲があるぢやありませんか？」

「水鐵砲を買つておくれよ」

しかし、子供は、つひに引かれて行つてしまつた。獨り、娘は、いましがた、若い母が子供に言つた言葉を、すぐに忘れてしまふことができなかつた。……世間の人達が、こんな玩具に拂ふ金まで儉約をしたなら、いつたい自分達の生活は何うなるのだらう？　ふと、そんなことが考へられたからでした。

彼女は、しばらく、無心に、眼前を去來する、女や、男の、足先を眺めてゐました。白い足や、黒い足が、面白さうに動いてゐる。しまひに、それ等が　人間から離れて、勝手に生きてゐるやうにあたりを泳ぎ廻つた。たちまち、彼女は、その渦卷の裡へ、頭を突込むと、無數の足が、待つてゐたやうに、彼女の頭を踏み付けた。――こんなやうな幻想に耽つたのでした。

ある夜、賣れ殘つた品物をまとめて、父親の乘つてゐる車にいれて、それを押しながら、暗い路を家の方へ歸つて行きました。巷のどよめきが、だんだん後方に遠のいて、片町の商家は、大抵戸を閉めてしまつた。一方は、大きな邸宅の外側の塀になつてゐて、其處に繁つた林の枝葉は高く空を遮つてゐます。

ごう、ごうといつて、夜風が、林に當つてゐる。星の光りの稀れな、曇つた空に、黒く天蓋のやうな木の頭が、搖れつゝありました。父親の乘つてゐる車は、甲蟲が地面を這つてゐる程にしか、夜の底に見えなかつた。そして、かすかた車のきしり音は、しんとした周圍の靜寂に吸ひ取られてしまつてゐるとしか思はれなかつた。

この時、前方の曲り角を廻つて疾走して來た自動車があつた。眩しい照燈に、彼女の眼はくらんだ。父親の乘つてゐる車を無理に横へ押して、片方に避けようとした刹那、野獸のやうた自動車は、車の上へのしつゝかゝつて、それを粉碎して、なほ五六尺もあちらへ引摺つて行つた。父親の悲鳴につゞいて、運轉手の頓狂なわめき聲か、彼女の耳に聞かれたが、そのわめき聲が、轢いてしまつた後であるやうた氣がするので、たしかに、運轉手は、この時、居眠りをしてゐたと思はれたのでした。

×　×　×　×

彼女が、カフエーの女給となつたのは、それから後であつた。心の痛みは、長く、いつまでも癒えなかつた。そして、それは、いつしか

彼女の性質までも變へてしまつた。彼女の、過去に起つた、悲慘な事件について知らないものは、「あんなに、美しい顏付をしながら、なぜもつと愛嬌がないものだらう……」と、言つた。

いつも彼女は、腰をかけて、ぢつと一處を見つめてゐました。窓の上に、いろ／＼な色彩を映して、面白く、をかしく、人生の影は流れて行つた。また、拭き淸められた鏡の面に、仲間の女達が靑春の血に燃えた唇を、花のやうに寫すことがあつても、彼女ばかりは笑を忘れたごとく、何か考へても、考へても思ひ出せないものに、氣を取られてゐるやうに默つてゐました。

社會には、常識で理解されないことが多かつた。無口の女を自分だけにはしやべらせやうとして、また笑はせるために、自惚からやつて來る客もあつたからです。

彼女は、さうした目的でやつて來る男達には、少しの興味を惹かなかつたけれど、いま傍のテーブルで、馴染みの客が、友達に話してゐるのを聞いてゐるうちに、いつしか、その話題になつた男を變つた人であると思つたのでした。

「……なか／＼あの男の望むやうな口が見附かるものでないさ。氣儘に本を讀んだり、旅行をしたり、勤めの餘暇で、できるものでない。それをあの男は、毎日、下宿から飛び出すと、街の中をぶら／＼歩いて、そんな口がないかと探がしてゐたのだ。そんな口のありつこはないさ。とう／＼下宿屋を食ひつめてしまつたのだ。追ひ出されては、他を探がして移つて行く……。

ちやうど、そこへ、あの男の叔父から、相談をして來たのだ。あの男にとつて、こんな幸福はなかつたのさ。なんでも遠い親類筋に當る者だとかいふのだが、數年前、若夫婦で、南洋へ出稼に行つたのだ。そして、二人は、一生懸命に働き、やつと廣い土地を耕やし、いまでは、子供が一人生れて、何不足なく暮らせるやうになつて、急に、夫が死んだのだ。いまさら、年若い細君が、その土地を捨て歸ることもできない。そこで、彼に緣談の口がかゝつたのだ。困つてゐる最中ではあるし、勞さずに、富めるのだから、こんないゝことはないのだが、あの男は、斷つてしまつたのだ……」

「變り者だね。しかし、偉いな」

「いくら偉くても食つて行けなくては、仕方がないでないか。まあ、聞きたまへ、とう／＼困つた末に、何を考へたか、賣卜者になつたのだ。自分の運命が何うにもならない癖に、他人の運勢を見てやるといふのだから、圖々しいものだ。あのＦ公園前の三階建のボロ家屋の一番上の屋根裏に間借りをして、雲を見て笑つたり、風の聲を聞いて考へてゐるのさ……」

「そんな處で、生活が立つものだらうか。しかし、却つて、人間はなれをしてゐるので、そんな職業にはいゝのかも知れないな」

「あの男などは、この世界を、僕たちなどゝ、たしかに異つて、見てゐるのだね」

この時、この話を聞いてゐた彼女は、顔を上げて、客の方を見ました。

「誰が行つても、その方は見て下さるでせうか」

二人の客は、女の方を向いて、

「それは、商買だもの、……君に、見てもらふことがあるのかね」

「あゝ、それで、君は、いつも寂いでゐるのだな」

× × × × × ×

その男は、自から求めて、三階の家根裏に住んだのだけれど、畢竟、大地の外へ追ひやられた形だつたのでした。狭苦しい、埃だらけの室の眞中に、粗末な机のやうな、小さな台を据えて、その上に算木と筮竹と、人相を見る大きな眼鏡を乗せてゐました。

かうした、運命を占ふといふやうな職業は、たしかに、世界開闢以後めつきり殖へたので、世の中が、ふたゝび迷信時代にはいつたやうにさへ思はれたのです。しかし、こゝへは、あまり、客がやつて來なかつた。

その稀にしかない客を待ちつゝ、彼は、ぢつと机の前に坐つてゐるうちに脚氣にかゝつた。そして、両足がだん／＼重く、腫れて來た。さうなつてから、彼は、どんなに大地の上を戀しく思つたでせう。

「冷たい地面を素足で歩けば、この病氣は癒つてしまふのだが……」

と幾たびとなく思つたか知れない。

しかし、いまは、容易に、この三階から降りることができなかつた。職業と生活が、しつかりと家根裏に彼を囚へてゐたからです。彼は、細長い、ギチ／＼と鳴る、しかも暗い梯子段を下りて、町へ出るのは、日が暮れてから、公衆食堂へ行く時位のものでした。それも、そこ／＼に食事を濟ませると、この三階へ上つてしまつた。

室には、小さな窓がついてゐた。雀の鳴聲が、その廂でしたことがある。あらしの日には、凄まじい風の叫びが、そこから聞えた。けれど、天氣のいゝ晩方には、石竹の花のやうな、赤い雲が、小窓から覗いて話かけたのです。

「南洋の島へ行けば、波が白く光つてゐますよ。椰子の木は、青々としてゐるし、香のする花ばかりで埋つてゐる廣い廣い圃がある……なぜ、行つて見る氣にならなかつたのですか？」

その雲は、西日に、片方の翼を金色に縁取られて、大きな鳥が飛んでゐるやうに、いつしか何處へか見えなくなつてしまひました。

彼は、叔父から、縁談の話があつた時に、──絶海の彼方の島にある、さびしい森を夢想した。その森の中にある、たゞ一つの建てられた家を眼に描かずにゐられなかつた。そして、その下にゐる人は、そこへ渡つた日から、死ぬ月まで、眞黒く日に焼け、土に塗れて働いた。その土地を、汚さずに、どうして自分のものとすることができやう……と、思つたのでした。

「俺には、そんな慾がない。だから、馬鹿に見えるだらう。俺には、この世の中のことが、何一つ眞剣になつて、打つかつて行く氣になれ

ないのだ……」

公園近くで、いろ／＼な人間が通るけれど、看板が小さいので、眼につかないせいか、あまり身の上を見てもらひに來る者がなかつた。

彼は、つくねんとして、机に向つて、待つてゐました。

たま／＼、梯子段のあたりで、音がした。誰か上つて來たのではないかと、思つて振向くと、後方の破れた襖の間から、鼠が顔を出して、室の片隅にあつた、新聞紙に包んだ、食ひ殘しの麺麭の屑を引いて行かうとしてゐた。恐らく、こゝに棲む鼠は、うまい目をかいだことがなく、いつも飢えてゐるのでした。

彼は、それを知つたけれども、別に、鼠を追はうとする意志もなく、向き直ると、窓の方を見つめて、憂鬱な顔付をしてゐました。

「あゝ脚が痛い」

思ひ出したやうに、かう言つた。そして、足を伸ばして、痛むあたりを擦りはじめる。彼が、かうする時、ほんたうに、土を戀しく思つた。自分で、撰んでこゝに移つた生活であつたが、土を踏めないばかりに不幸を感じた。窓際へ行つて、見下すと、眩しい日の光りを浴びて、アスファルトの面へ小さな影を落して、無數の人間が、蟻の子を散らしたやうに、その人達は、幸福を意識してゐるとも思はれなく、動いてゐました。

彼は、しばらく、眺めてゐた。ちやうど、その時でした。派手なパラソルを射した若い女が、群集の中から離れて、一人、この建物の入口をはいつた。

「こゝへ來たのだらうか? それとも、二階にゐる、あの代書師のところへ……」

不思議に、なんだか、異常な經驗が起りつゝあるやうな氣がした。もし、この室へあの女がやつて來るなら……彼は、机の前へ戻つて、頭の中で、空想をつゞけた。

「……なぜ、俺は、こんなことを。感ずるのだらう? 六感か……あの女の素振りが……歩きつきが……」

彼は、當然、此處へやつて來るものを待つやうに、耳を傾けてゐました。それが、長い間の約束であつたやうな氣さへされた。

果して、小さな、一段、一段、拾ふやうな女の足音が、上つて、近づいた。そのたびに彼の胸は、いつになく、怪しくふるへたのでした。

× × × × ×

女は、よく此處へやつて來る男の友達といふのは、この人であるかと、しみ／″＼彼を眺めたのである。男は、筮竹を鳴らして、算を置きました。

「これから、貴女の運勢は、だん／＼いゝ方に向いて來ます」と、言つた。

「どうしたら、その、いゝ運勢になりますか知らん」

「やはり、働くのですな、眞面目に働いてゐるうちに、だん／＼幸福

が向いて來るのですね」

「それが分らないのです。みんな、眞面目に働いてゐるぢやありませんか。ごまかしたり、拾ひ物でもしなくて、どうして、辞職になれるか、それが分らないのです」

「あゝ、さういふことは、男では、分りませんな」

「妾は、さういふことが、男で分ると思つて來たのですの………」

男の眼は、光つて、青白い顔に血の氣が生じた。

「ほんたうです。貴女のおつしやることは、道理です。しかし、男には、それが分らない。あゝ、私は、もうこの職業がいやになりました……」

「かうして、氣儘にお暮らしなさればいゝぢやありませんか。あなたは、お金持になれるのを自分から斷つて、人間よりも、雲や、鳥や、風を相手にお話なさるといふ、變つたお方だと聞いた時、妾は、なんだか、嬉しかつたのです」

「さうぢやありません。やはり、私は、地の上が戀しいのだ！」と、男は、言つた。

女は、あされた顔付をして、

「あゝ………」と、ため息をついた。

男は、女の手をしつかりと握りました。

「私は、あなたのために、さう決心したのです。私は、自分のためには、何事もできない人間なんですが………」

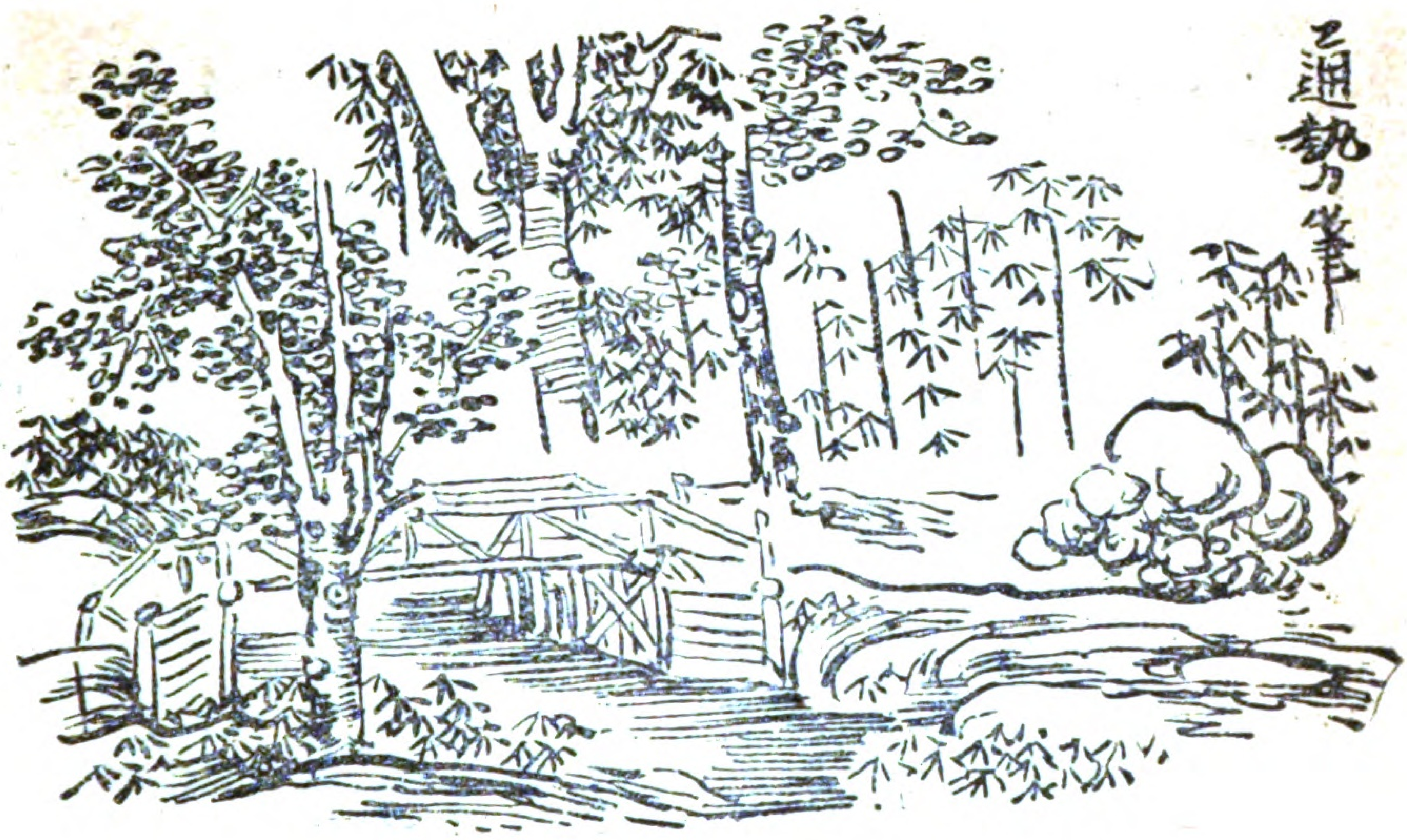
「いつ、あなたは、それを決心なさつたのですか？」

「先刻、二階から街を見下して、貴女のはいつて來られる姿を見た刹那からです………」

「まあ………」

彼女は、眼を見張つた。そして、無邪氣に、滿足したやうに、はじめて、につこりと笑ひました。

——一九二七・九作——



善魔

里見弴

六の二

瑛龍が出かけて行つたあと、假令一時間でも三十分でも寢て置かうとしたが、少しも氣が落ちつかなかつた。別れ話といふものが、どんなものかといふことは、度々の經驗で、およそ昌造には解つてゐた。兩方から嫌ひ合ふやうにでもなつた場合なら、別れるために改めて話をつける必要もないくらいのもので、これは問題ではないけれど、少しでも好意があるとすれば、逢つたり、しみ〴〵話し込んだりすることによつて、別れにくさの度は增すとも、遽にそれがへりさうな筈はなかつた。倦み勞れた仲も、そのために却つて一時の活氣を現したり、縺れ、ひねくれゝばまたそれで、愛情の代りに、憎惡でさへも互を結び合せる絆とはなるのだ。まして、瑛龍の場合では、——どういふ經過をとつて來た結ばりか、具體的にはなんにも知らなかつたけれど、二人の性分から推して、決してさう生優しいものとは思へなかつた。先刻も、負けなくも、と昌造が評したくらゐ、相手の氣持ばかり汲んで、自分で自分の不實を憎まうとするやうた瑛龍なのだから、なか〳〵これはむづかしい仕事だ、と思はれた。一方兩角は、といへば、これは藝の上からも、平生の行爲からも、今の世に珍しい熱血男子といふ印象を一般に與へてもゐたし、干支や星廻りで、人の性分に、相應はつきりした類似の現れることを、永い

間の實驗から教へられてゐた昌造として、自分と同與の彼を、今までさう交際つたといふほどの仲ではないが、然し可なり奥底まで、誤りなく解るやうな氣はしてゐた。早い話は、自分をそこに置き換へて考へてもいゝくらゐのもので、さうなると、今日の會見が、いよ〱もつて案じられた。想像される限りの、いくつかの場合の一つには、歸つて來るのは、瑛龍ではなくて、その死骸だけかも知れない、といふやうなのも浮んで來た。が、また、春江と別れた時の自分を考へて見ると、心中ならまだしも、反いて行く女を殺すといふやうなことは、かッととり逆上せるか、全く自恃の念を失つて了ふかすればどうとも云へないが、少くも智識階級では、容易に起らない事實と思へた。愛の誓言の、一つの云ひ現しとしては、萬一にも俺から背いて行つたら殺して了ふ、などいふ言葉も、立派に云つてのけられるだけの熱情はあつても、それは、しつかり自分の懐にゐる女なればこそで、反いて行くとなれば、もうその時には、殺してやるだけの價値もなくなりかゝつてゐるわけなのだから、この誓言は、形は未來を約束してゐるけれど、その實現在の幸福を高唱するだけの意味しかもたないものだ、といふことも、兼て自分の場合で知つてゐた。で、萬々あり得べからざることゝは思つたが、然し、決して安心しきれもしなかつた。死骸で歸るか、さもなければ立派に別れて來る——不思議なことには、普通一番起り易かるべき筈の、づる〱べつたりの元のまゝといふ場合たけが、いかにしてもあたまに浮んで來なかつた。それは、瑛龍の昌造に對する愛情を甚だ疎かにして感じられるよりも、むしろ彼女の性分に信頼されるところの方が遥に大きかつた。思慮が淺いだけに迷ひも多く、決しててきぱきしてゐるとは云へなかつたけれど、然しかうと思ひ込んだら、最後には必ずやり遂げる執念には、以前から昌造は私に感心してゐた。今度のことも、かれこれもう半年も、思慮の上に思慮を重ねて、痩せが目立つほど苦しんで來てゐるのだから、いざ今日といふ日になつても、ぐづ〱のお流れにならうとは思へなかつた。萬が一そんなことにでもなつたら、他人の手を借りるまでもなく、自分の誇のために、立派に死んでのけさうな、大根の意地は強い女と昌造も觀てゐた。さういふ意味では、だから、安心だつた。死んで歸るまでも、若いころ昌造が幾度も經驗して來たやうな、別れぞくなひの醜態だけはさらしつこない、さう信じられることは爽かに明るかつたが、同時にまた、どんなにへまでも、みつともなくつても構はないから、——一度でうまくいかなければ、二度三度やり直してもいゝから、たゞ無事に歸つて來てくれ、と念じられるやうな氣持もないではなかつた。それが、むさい未練と思へたり、また廣大な叡智とも感じられたりした。と云ふのは、昌造自身が、永い間自分のすぐへなく〱に曲りたがるだらしのなさに業を煮やし、自己嫌惡の墨汁に胸を眞ッ黑にしては、烏賊のやうに身の周りまで濁して來た揚句、やつと柳は樫を眞似られず、樫には柳が拵へないことが解つて、撓むとも雪に折れない柳の力を、一生の蟠とも有難がるまでになつ

た、その間の苦勞といふものが、塵も積つて今はいくらか出らしい形を備へてゐたから、そこから見おろして、瑛龍の硬さが、不丈夫には違ひないが、同時にまた、ポキンといつて、元も子もなくなされてはと、案じられもするわけだつた。書き損ひの出來ない臺帳ばかり引きうけてゐる人生は、昌造から見ると、窮屈で、あぶなつかしかつた。潔くはあるが、存外脆いところが、よそ目にもヒヤヒヤされた。この意味では、今日の瑛龍がひどく心もとなくもあつた。

たうとう昌造は、昨夜からの徹夜のまゝ、一睡もしないで床を出てしまつた。しぐれ模様に、もう一度冬が來たやうな寒い日だつた。ひと風呂あびて、――ほかに仕様もなかつた、帳簿の前に坐れば矢ッ張り酒だつた。新聞を片手に、錫のものでちびちびやつてゐるところへ三平がはいつて來た。以前には、黙つてゐても、お民の計らひで、瑛龍と仲よしの愛香などは、ちよつとでも、必ず顔を見せに來たものだが、この頃では、聘んでくれるのはもう三平ばかりだつた。それさへ、今日に限つては、昌造の方で、たつてほしい相手でもなかつた。新聞から目を上げて、二言三言交したばかりで、それを傍に置かうともしず、すぐまた讀み續けてゐた。仕事の最中にでもはいつて來ると、一時間も二時間も黙つてほつて置かれたりすることもあるので、三平もそんなことにはちつとも驚かなかつた。早速自分も新聞を膝に載せたが、

「暗ござんすわ。電氣つけませうか」

「さゝ」

立つてスヰッチを捻りながら、

「エイタツ、どうしたんです。來ないんですか」

「あゝ」

やゝ暫くしてから、やつと昌造も新聞を手放したら、三平が銚子を把りあげて、

「ちつとぬるくなりましたよ」

「結構」

注ぎながら、

「あゝ、もうないや。あと云ひませうか」

「あゝ」

呼鈴を押しに立つて、戻つて來ると、

「どうしたんです。ひどく威勢がないぢアござんせんか」

「昨夜つからまた寢ないんだよ」

「あゝさうですか。お仕事だつたんですか」

そこにお民が、氣を利かして、銚子のほかに、三平の分の箸や小皿まで持つて來た。

「いらつしやい」

「こんちは。どうしたんでせう、馬鹿に陽氣ぢアござんせんか」

「ほんとにねえ」

早速昌造の盃を充しながら、「貴方お寒かアないんですか。もう一

枕どてらを持つて來させうか」

「なに、平氣だよ」

「もつともあがつていらつしやればね」

「それに、寒中でもシャツを着ないのが自慢の方なんですからね」

だしぬけに昌造は、ドスの地聲を無理に甲高く、子役の調子を眞似て、

「だーてーのーうーすーぎー。こなさんの腹から出た、與之助はわしちやわいのー、てえの知つてるかい」

「アッハヽヽハ」

お民は、色氣なしに笑つて、「うまいわねえ」

お株をとられたといふ苦笑ひで、三平は、鍋のなかに箸を突ッ込みながら、「かういふ馬鹿ですからね」

「よかつたわね。だーてーのーうーすーぎー」

ひどく氣に入つたらしく、自分も云つてみて、改めてアハヽハ男のやうに笑つてから、

「あゝ、いゝわ〳〵、ほんとにいゝわ」

洒落や地口のやうな凹座の機智には、一向に自信のない昌造は、たまさかの上出來を褒めたてられて、てれながらも、嬉しさうにクスクス笑つてゐた。

鍋の世話をやいたり、あたりを片づけたりしながら、暫く喋り込んでゐたお民が、さがつて行つたあとは、まただん〳〵に、うすぼんやりした沈默が多くなつて了つた。

「お眠いんぢアないんですか」

「うん、さうでもないんだが……。いやな日だなア」

「なんだか陰氣ですねえ。……どうです、一遍御飯にして貰つて、ひと寢入りなすつたら。夜あかしのまんまぢア毒ですぜ」

「うん」

今頃はどこでどうしてゐるか、といふ風に考へつゞけてゐるわけではないのだけれど、然しなんとなく氣が逃れなかつた。胸のあたりに、塊でもつかへてゐるやうな氣持だつた。

「ぢア、御飯をさう云ひませうか」

「まアいゝよ。もうちつと飲んでよう」

「一體、どこイ行つてるんです？」

「どこだかね」

「どうも、いよ〳〵大したことになつて來ましたね。一日逢はねば千日の、どころの騷ぎぢアありませんね。よござんす、ひとつお民さんに訊いて來てあげませう」

と立ちかゝるのを、

「いゝよ。お民さんの知つたこつちアないよ。それより、酒を貰つてくれよ」

「やけ酒ですか」

「馬鹿いへ！　やけ酒なんてのは、こんな小さなもんで、ちび〳〵や

つてるもんぢアないんだ。餘計な心配したさんた」

「へー」

けれども、やがて銚子を持つて來たお民の耳もとで、目立たないやうに、三平は何やら囁いたが、

「さア……」

と、相手は首をかしげて、「知りませんよ」

「をかしな奴だなア」

昌造には、その勤氣がらるさかつた。「俺にやアわかつてるんだから、默つてほつといてくれよ」

「なんでも……」

お民もいやに眞面目くさつて、「十六日會には行かないから、早く歸つて來るつて云つてたんですから……」

「あゝ、成程、今日は十六日ですね。ぢやア、今夜見えるわけですね！」

「え？……あゝ、さうね、たぶんお見ンなるんでせう」

いつもなら、さういふ内緒話は、聞えても聞かないふりでゐる昌造だつたが、遠慮の要らない相手だけに、

「誰がさ」

「いゝえ、大内河さんたちの會ですからね……」

「ふーん、さうかい」

三平の云ひ方には、いくらか、どうだ、まゐつたらう、といふやうな、意地のわるさが感じられたが、昌造は氣にもとめなかつた。早い日暮り日二三時間で歸つて來られさうに云つてゐたのが、暮れるとは云へ、いつかもう障子を染める色が、うちの雪洞のオレンジだけになつて了つたのを、心もとなく見詰めてゐた。

「ちよつとそこをあけてごらん」

「あゝ、だいぶ短が詰りましたね」

お民が立つて行つて障子をあけた。見あげる空は、遠近のはつきりしない鳩羽色に、いくらか暮れ殘つてゐたけれど、軒近い植込みの藍などは、もうすつかり夜の色だつた。

「何時だらう」

三平が、帶のあたりに手をやつて、

「えゝ、まだ五時を十分ほど過ぎたばかりですよ」

「ふーん、それでも、だいぶ日が延びて來たな。……五時か」

急に、すぐ頭の上の座敷で、どやくはいつて來た二三人の客の、元氣のいゝ話聲が聞えた。

「しめてもいゝんでせう？」

云ふや否や、ピタリと障子をたてきつて、お民はそゝくさと出て行つた。

から永びくやうでは、いよく話はむづかしいな、と昌造は思つた。と同時に、七八年以前に、おしげを貰ふごたくさ最中、

（作者註。――おしげといふのは、昌造の妻で、大阪で藝者をしてゐ

たのを、兩親の反對にも拘らず、遂に我儘をはり通して迎へたのだ。急に呼びつけられて上京しようといふ時に、折から留守だつた彼女に殘して發つた置き手紙のなかで、念力は空を飛ぶものゆゑ、東京まで念力の飛行機を飛ばして、うしろからあたしの尻をしつかり押してゐてくれ、といふ意味を書いたことを思ひ出した。今もつてその信念に變りはないのだけれど、今度は自分がおしげの立場に立つて、念力の飛行機を、瑛龍の行つてゐる先へ飛ばしてやるほどの凝心はなくなつてゐた。思ふ程度で、そこまでは凝り固まれなかつた。

そのうちに、けれども、だん／＼昌造は醉つて來た。ふと、餉臺の下で合掌して、眼をつぶり、口のうちに唱えごとなどしてゐる自分に氣がついたりした。

「へんだなア。よつぽど今日はどうかしてますねえ」

「どうもしてゐるもんか。大眞面目だよ」

やがて、わきから座敷のかゝつて來たのを幸に、目が据るほど醉ひながら、ちつとも燥ぎださない客を一人殘して、三平は歸つて行つて了つた。

いつの間にか、二階は割れ返るやうな騷ぎになつてゐた。廊下にも、忙しさうな足音が頻に往き來した。餉臺の前にコロリと肘枕で丸くなり、このうちの特色とも云へる馬鹿明るい電燈の光を袖で遮つて、昌造は身動きもしず、考へもしずに、薄目をあいたきゝ死んだやうになつてゐた。

ガラッと襖があいて、嬉しさうなお民の顏が、

「お電話！」

「ン」

跳ね起きて、とも／＼電話室まで駈けつけたが、二つ並んだ右の方の硝子扉を、とん／＼と叩いてみせて、

「よくつて？　こつちですよ」

と、につこり笑ふと、お民は、すぐまた忙しさうな小走りに、どこかへとんで行つて了つた。

昌造は、受話機を耳にあてた。

「もし／＼」

「もし／＼あたし」

「歸つてるの？」

「えゝ」

それきり言葉が杜切れた。

「兎も角、すぐいらつしやいな」

「今ちよつとよそイよつてるの。もうぢき、――二十分ほどしたら行くわ」

「そイで、話は……？」

「行つてから話すわ」

「ぢア、成可く早くね」

「えゝ、ぢき行くわ」

それで電話が切れた。

六の三

八時過ぎた、廊下でお民の笑ひ聲がしたと思ふと、いつもの聲をするやうな早足で、瑛龍を先に二人どや〳〵はいつて來た。すぐ起き返つた昌造は、その眼さに似もやらない、憔悴しきつた感じを、瑛龍の眉宇の間に感じて、胸をひやりとさせた。

「お歸り」

「おそかつたでせう？」

蒼白く亢つた神經だけのものと思はれはしたが、然し兎に角元氣なのは嬉しかつた。——我意を撤して歸つたとは知れた。

「まだ御飯もあがらずに待つていらしつたのよ」

お民は、たゞ昌造が待ちに待ち、自分もそれにつれて待ちに待つてゐた人が歸つて來た、といふだけの意味で、十分喜んでゐた。「あんたもまだでせう？」

「えゝ、まだよ。なんでもいゝからさう云つて頂戴な」

さも、腹がへつてたまらない、といふ調子だつた。

「ぢア、早い方がいゝわね、なんにしませう」

瑛龍と相談して、食べものがきまると、お民は、ひとりでニコ〳〵しながら立ちあがつて、

「お酒、もうあがらないでせう？」

「うん、でもまア、一本持つて來いよ」

やつと二人差向ひになつた。

「どうだつたい？」

「……………」

頰に疲れが出た、といふやうな眼の色にも、寂しい、靜かな喜びは動いた。——もうそれで、何ひとこと聞かないでも、昌造にはよく解つた。

「くたびれたでせう？」

「なんだか、もう、……がつかりしちまつたわ」

「……………」

今度は昌造が、無言のうちに、劬撫と愛情を籠めて微笑した。

「三平さんが來てゐたんですつて？」

「あゝ」

「ぢアよかつたわね。寂しかアなかつたでせう？」

「酒を飲んでた」

やゝ暫く、二人の微笑を見詰め合つてゐた。

お民が、つまみ物と銚子を持つて來ると、昌造は、早速盃をとりあげて、

「馬鹿に今夜は忙しさうなんだね」

「意地のわるいもんでね、一緒ンなると、いちどきにどや〳〵ッと一緒ンなるし……」

「いゝわ。こゝはほつときなさいよ。あたしがお酌するから」
「嘘ばッかり。一度だつて、あんたがお酌したのを見たことないわよ」
「あら、あんなこと云つて! あたしだつて、たまにやアお酌ぐらゐするわ」
「お酌は、こつちで御免かふむりたい方なんだからいゝよ」
昌造は、袂ごと銚子を引きよせて、「さア、ほんとに構はないから行き給い」
「そんなに二人して邪魔にするんなら、行くわよウ」
「だつて、邪魔なんだもの」
「のめ〳〵學校の校長さんに會つちアかなはないわ」
肥つた體を起すと、伸をしかけて、肩あたりまであげた拳固を、慌てゝおろす途中で、ポン〳〵と帶を叩きながら、「あんた方はほんとにいゝわねえ。見てゝも好ましいわ」
「何が好ましいのよ。生意氣いつてるわねえ」
「いゝわ。ほんとに羨しいわ」
「たまんない人ね。さう云はれたんぢア、御挨拶の申しあげやうもないぢアないの」
「アッハゝゝ」
と、輕く笑つて、「それアさうね。……さア、もうひと息働いて來よう」
ヴヰクトリア女王の若い時分の肖像によく似た顏をくいと引きつけ、一文字に口を結んで出て行つた。
「いゝ人ね」
「うん」
手酌で注ぎながら、「あんた、くたびれてたら、羽織でもぬいで横になつたらどう?」
「うゝん、そんなでもないわ」
卓袱臺に凭りかゝり、横坐りに足袋の鞐をはづしながら、それでもいくらか寛ぎのとれた顏つきで、「お民さん、ずゐぶんあんたが好きなのね」
「あたしだつて大好きだもの」
「さうね」
「あんた、さつき、どこイよつてたの?」
「あのウ、あたしたちのことでね、大へん心配してくれてた女將さんがあるのよ。だから、ちよいとそこイよつてね……」
「その人、喜んでた?」
「えゝ、喜びも喜んだけれど、吃驚してたわ。だつて、その人は、もしそんなことにならうもんなら、きつと貴方は殺されちまうつて、よくさう云つてんですもの」
「うん、それアあたしも、考へないでもなかつたな」
「兎に角、あたし、わるいなア、と思つちやつたわ」

「わるいと云やア、彼ッからわるいんだからね。それア、いよ／＼といふ時になつて、しみ／＼またさう思ひ直した、といふ氣持だつて、解ることたアよく解るけど……」

「あたしね、停車場イ行つて、汽車ン乘つかつて、どつか遠いところへ行つちまはふかと思つたわ。よつぽど、自動車の運轉手にさう云ひかけたんだけれど……」

「彼方も、ずゐぶん弱つてたらうねえ」

「えゝ、……惱られもしたわ。……行つてね、すぐ、今日はちよつと話があつて來たんだつて云つたら、……ちやんと知つてたわ」

「うん、そイで……？」

「そイでね、……あたし、なんにもわけは云はなかつたの、——つて云ふより、どうしても云へなかつたのね

「それアちよいと云へないね。また、はつきり云はないたつて、彼方だつて、およその察しはついてたらうしね。——少くも、寢耳に水ぢやアなかつたんだから……」

「あたし、困つちやつたわ。……ぢア、あたしが嫌ひになつたのか、つて云はれて、あたし、今だにちつとも嫌ひぢアないんですものね」

「まア、こんなこたア、どつちみち理屈ぢやないんだけど、さういふ風に押されて來れア、あんたに一言もないこたア、もと／＼解りきつた話ですね。解つてゐながら出かけて行つた、——この、出かけて行つたつてことだけが、まアあんたの、強味と云はふか、力と云はふか、むちやくちやと云はふか、……兎に角、無理は彼ッから解つてるんだから、……つまり、無理が通れば道理引ッこむで、無理でもなんでも、通さうとしなきア……。然しまア、わたしが、こんな批評めいたことを云ふにアあたらないんだがね……」

「さうよ、あんたが云ふのはいけないわ」

「いけなくもないが、まア、この場合愼んでもいゝね」

「でもね、あたしね、——これは自分のためにぢアないのよ、今日あたしが行つて話したつてことは、それア聞いた時には、腹がたつたりいろ／＼したでせうけれど、あとになつてみたら、きつとさう惡く思はないだらうと思ふのよ。どう？」

「それア無論さうですとも！　だんまりで、すうつと消えるやうに逃はなくなつちまつたからつて、それまでの話なんだし、それを、ちやアんと、自分から出かけてつて……」

「あたしには、そんな、すうッと消えちまうなんてこと、しろつたつて出來アしないけれど、でも、それは、行つてよかつたとは思つてるのよ」

「偉いな」

「何が？」

「ちつとどうも應へますよ」

「あら、どうして？」

「お君さんの場合がどういふ風だつたか、いつかの話、もう忘れちま

ひましたかね」
「だつて、それアまた場合が違ふし、人の氣持だつていろ〳〵ですものね」
「嘘ですよ、冗談ですよ。それア冗談だが、はつきり出來るもんなら、どういふ場合でも、はつきりさしとくに越したことはないでせう。づる〳〵べつたりぢア、いつまでも、どつちも氣持がわるいからなア」
「さうね」
「然しまア、さういつまでも、彼方の立場でばかりものを考へてないで、ちつとは自分に返つたらどうです。まさか、もう、停車場へ行きたい氣はなくなつたんでせう？」
それには、瑛龍も笑顔で答へた。
「どうだかまだわからないことよ」
「何しろ永い間の爆裂彈が破裂したんだから、飛ばされりやア、ずゐぶん遠くまで飛んでつちまふわけですからね」
「あんたこそ、初て聞いたとき、よく飛んじまはなかつたことね」
「それア、泰然自若たるもんさ。久保君が呆れてたくらいだ」
「あ、久保さんね？」
「う、う、うーん」
笑ひ聲で唸つて、「しまつたなア」
「だらうとは思つてたんだけれど……」

「一番初に三谷君つて云つたのは、一體あれアどういふんです？」
「三谷さんはね、づうッと先に、ちよいとあたしになんか云つたことがあるのよ」
「つまり、兩角のこと知つてるつて……？」
「うん、まア、さうはつきり云つてたわけぢアないけど……」
「そイで、あんたに口留されちやつて、……あ、なアる程、だもんだから、この頃まるつきり寄りつかなくなつちまつたんだな」
「口留なんかしやアしないけどさ、三谷さんだつて、間に挾つて、それアずゐぶん困つてらしつてたんでせう。云つちア大變だし、默つてたことがあとンなつて知れたら、と思ふから、それアうつかりあんたにやア逢へないわよ。でも、あたしは、三谷さんならいくら困したつていゝと思つてたんだから、別にお氣の毒とも思はなかつたけどね」
「然し、久保君だつて、あたしに話すまでにやア、それアいろ〳〵大した心遣をしてくれてますよ。あながち、默つてるばかりが、親切たア云へないからね。さうかつてまた、三谷君みたいな性分で、それだけの秘密を背負ひ込まされたら、これアあげもさげもならなかつたに違ひない。それもよく解るが……。だから、つまりなんだね、誰より彼より、一番爆裂彈の感じの強く響いたのは、恐らく三谷君だつたらうね。あたしなんざア、——それア無論、多少は時期の問題もあつたけれど、結局なんでもなかつたんですからね。不氣——とも云へないが、さうドスーンとは來なかつたね」

「ですからさ、爆裂彈だつて、あんたが飛んじまうわけぢアないのよ。あたしが飛んじまうのよ」

「あんたが飛んじまやア、あたしンだつて應へますよ、それアだいぶ應へますがね、然し何も、あんたが飛ぶこたアないぢアありませんか」

「ところが飛ぶのよ。それがつてのがね、ずゐぶん兩角さん好きでせう、もうこれ以上好きな人ないと思つてたくらゐ好きなのよ。それだのに、またあんたが好ンなつたでせう。二人いちどきに好ンなるなんてことないのよ……」

「それア、そんなこたア……」

「いゝえ、ないのよ、あたしにやアそんなこと決してないのよ」

「ないつたつて、現に……」

「いゝえ、だからあたし、一生懸命あんたを好ンなるまいと思つて、——よさうと思つて、——自分にも内證にして好きでゐたのよ。だから、もしあんたが、誰かから聞いて來て、あんたは兩角が好きなんでせう？　とかなんとか、ひと言でもそんな風なことを言つたら最後、えゝ、あたしはあの人が大好きなんです、つて、それツきりピユーツと飛んでつちまうつもりだつたの。だから、始ツからあたしの飛んじまう爆裂彈でせう？」

「あゝさうですか。成程ね」

づけ〳〵やの昌造も、有體にそこにある認識の不足を衝いて行かうといふ氣にはなれなかつた。情操の無智が、その不足を補つて餘りあるやうに感じられたからだ。この美しさ！　この美しさ！　それでこそ女だ、とも思へた。女としては、わるく賢こになられるよりも、默つて均衡がとれるなら、更に何を云ふところがあらう。

やがて、おそい夜食が運ばれて來た。二人差向ひに箸を把りあげてみると、尖つ張り昌造の心持とは變つてゐた、——何かしら賑しくされてゐた。邪魔にもならないやうに思はれた爆裂彈も、とり除かれたあとの空地は、思ひのほかに廣かつた。——昌造は、ピタリとそばへ來た瑛龍を感じた。

「でもね、あの人も、そんなに寂しかアないと思ふわ」

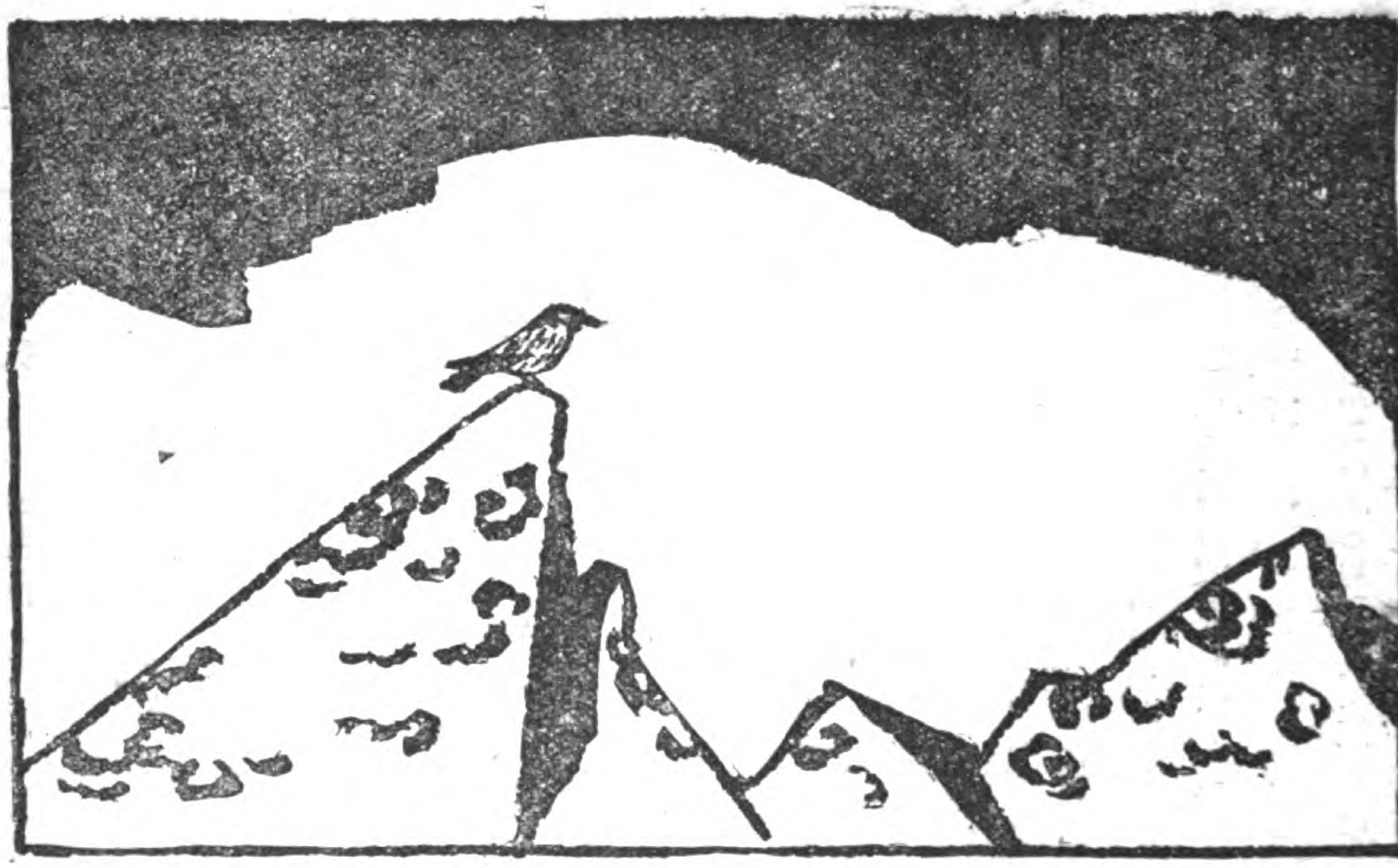
さう云ひ出した瑛龍こそは、もう一度また、歸つて來た時の寂しさうな目つきになつてゐた。

「なぜさ」

「でも、小そのさんがゐるんだし……」

「うん」

何かの臺詞の「それですむなら易いこと」といふのが、あたまに浮んで來た。けれども、瑛龍の、自らの慰めを覓めやうとするやうなその言葉をも、あながち利己の心からとのみは思へなかつた。もうどれが離れとも見分けられないほど遠くへ出て了つた船の上で、なほ振りつづける手巾のやうなものだつた。それゆゑに、却つて昌造は、咽び込まれさうになつた。



午後の客

正宗白鳥

人物

久松秋雄（四十歳、會社員）
妻やす子（三十餘歳）
阿部きし子（三十歳くらゐ）
久松辰雄（秋雄の弟、三十歳）
下女くみ（二十歳くらゐ）
隣の女　三十歳くらゐ

（一）

八月下旬の、殘暑酷烈なる或日の午後。
ある街上。
久松秋雄、會社歸りの途中、氣の進まないやうに道を歩いてゐると、向うから、阿部きし子と、秋雄の弟の辰雄とが歩いて來るのに行合ふ。「ヤア」と聲を掛けると、それに氣づいた二人は、驚いた顔して足を留める。

秋雄（きし子に向つて）あなたはもう輕井澤からお歸りになつたんですか（と云つて、訝しげに辰雄の方を見る）

きし子　えゝ。據ろない用事が御座いまして。

辰雄　僕も二三日前に、御一しよに輕井澤から歸つて來たんだよ。

秋雄　お前も輕井澤へ避暑に行つてたのか。しやれてるね。

辰雄　頭の加減が少し惡かつたものだから、二三週間行つてゐたのだ。

きし子　實はあたし、これからお宅へお伺ひしようと思つてゐました。奧さまにお賴みしたいことが御座いまして。

秋雄　さうですか（當惑したやうに）辰雄も僕の家へ行くつもりなのか。

辰雄　今奧さんに誘はれてるところなんだが、どうしようかな。

きし子　辰雄さんの御一身のことで、あなたにも奧さんにもお話したいことも御座いますのよ。

秋雄（相手の意味を察したやうに、うなづいて）おや、これから御同道していゝ譯なんですが、ちよつと困ることがあるんです。

きし子　お差支えが御座いますの。

秋雄　なに差支えはないんですが（と云つて、微笑を洩らして）家内がこの頃は、暑さの打擊でせうか、午後になると頭の加減が少しよろしくないやうです。わたしも困らせてゐる譯なんだから、お客さまに若しも失禮なことがあつちやいけないと思ひまして。

きし子　おや、近日改めてお伺ひすることにいたしますわ。

秋雄　なにかまひませんよ（ふと思ひついたやうに）却つて、あなたや辰雄に來て貰つた方がいゝかも知れない。だけど、皆んな一しよちやいけません。三人が別々に、家内に會ふ方がよろしい。辰雄も輕井澤歸りだと云ふ觸れ込みで大威張りで行つちやいけないよ。おれだつて、こんなに汗だく〳〵になつてるところへ、避暑地の噂を聞かされちや、少しは癪に障るからね。ハ、、、。

辰雄　僕は義姉さんにいゝ感じを持つてゐられないから、今日訪ねて行くのは困るんだが。……

きし子　辰雄さんがさういつて悲觀してゐらつしやるから、今日はあたくしが義姉さんによくお取做ししようと申上げるんで御座いますのよ。

秋雄　御好意は忝ない。……まあ、そこの喫茶店で冷たいものでも飲んで行きませう。

（二）

愛宕下の、ある中流階級の住宅らしい家の奧座敷。床の間には、名筆ではないが、夏向きの、瀑布の掛物が掛つてゐる。扇風器が紫檀の机の側に据ゑられてゐるが、これは動いてゐない。

この家の一方の隣りには、風の邪魔をするやうな高い洋館が建てられてゐるし、他方には、汚らしい物を干した物干臺が見えてゐる。

久松秋雄の妻やす子が、浴衣を着て、頭髮も稍々亂れたまゝ、机に向つて、帳簿と引合せて算盤を彈いてゐる。計算がうまく行か

ないらしく、次第にじれる。

下女が襖戸を少し開けて、「阿部さんの奥さまが入つしやいました」と告げる。

やす子　さう？。此方へお通し申してお呉れな。

下女が引込むと、やす子は、不愉快らしい顔して机の上を片附ける。

そこへ、きし子が暑さに惱みながら、身装をつくろつて入つて來る。

やす子　あんまりお暑いから、いらつしやるかどうかと思つてゐましたのよ。……此方へいらつしやいまし。

客に座蒲團をすゝめて煽風器を掛ける。

きし子　昨日今日の暑さと云つたら、どうしたんでせうね。生じつか、避暑なんかに行つてたもんだから、東京のこの頃の暑さが、大變身體にこたへますのよ。せめてもう一週間位彼方にゐればよかつたと後悔してゐますの。

やす子　でも、あなたは、今まで涼しいところへ行つてらしつたんだから結構よ。あたしなんぞ御覧なさい。夏にも春にも、東京から一歩も出たことないぢやありませんか（相手の所爲のやうに云ふ）

きし子　だから輕井澤へいらつしやいと、あれほどお勸めしたのに、なぜいらつしやらなかつたの？。

やす子　そりや、お手紙を頂いた時には、折角御親切に誘つて下さるのだから、二日でも三日でも避暑の眞似をして來ようか知らと、思切つて出掛ける氣になつたのですけど、……いつもの通り、あたしの珍らしい決心を鈍らすやうな邪魔が入つて來て、それつきり御中止になつたの。邪魔と云つても、旅費の工面がつかなかつた譯ぢやなかつたのよ。

きし子　旅費の御心配のないことは分つてるわ。……邪魔と云つてどんな邪魔がおありになつた？。まさか久松さんがお引留めになつた譯ぢやないでせう。

やす子　ところが、まあさう云つたやうな譯だつたの。

きし子　不思議ねえ。……知らない土地へ一人で旅立たせるのは危險だと仰有つてお引留めになつたの？。久松さんはお忙しくて、御一しよにお出掛けになる譯には行かないし……

やす子　人情のある御推察だけれど、大違ひよ。秋雄は、そんな世間並の人情のある人ぢやないんですよ。

きし子　そりや、此方の御主人は世間並よりももつと深刻な人情のおありになる方なんだから。

やす子　冷かしてらつしやるの？。

きし子　どういたしまして。……ぢや、何かあなたの旅立の邪魔をしたんです？

やす子　秋雄はむしろあたしが旅へ出ることを望んでゐるくらゐよ。それに、あたしは、自分で是非行きたいと思つたなら、人に留めら

れたくらゐで見合せたりなんかしないつもりよ。
きし子　（相手を嬲てるやうに）あなたはさうでせうね。
やす子　あたしの輕井澤行の決心を鈍らせた邪魔も、やはりあたしの心だつたの（重みをもつた口調で云つて）……お暑いのにそんな話は止しませうね。
きし子　何だか謎見たいで……
やす子　あたしの心を訊いて謎を解きたいと思つて？。……でも、あたし、自分の心の底までさらひ出して、あなたに馬鹿にされたかないんですもの（ふと自分の着物を氣にして）こんな見窄らしい服裝をして、避暑地歸りのお客樣にお目通りをするのは内幕の貧乏を露出しにしてるやうで、肩身が狹いんですけれど、今日は、お約束通りにあなたがいらつしやるかいらつしやらないか、迷つてたもんですから。
きし子　やす子さんは、今日はいやに他人行儀なことを仰有るのね。この頃のやうな暑い日には、身裝のことなんか構つてられないぢやないの。
やす子　（殊勝らしく）でも、暑い時にこそ、不斷よりも身裝に氣をつけなきやいけないわね（机の側に倒つてゐる電索を引寄せてボタンを押して）お手紙には、あたしに異つた御用でもおありになるやうなことを書いてあつたぢやないの。……どんな御用？。大した御用がありさうぢやないわね。
きし子　いゝえ。大變なことかも知れませんわ（戲談らしく云つて）兎に角、今日はどうしてもあなたにお目に掛る必要があつたの。若しもあなたがお家にゐらつしやらなかつたら、あたしの無駄足だけでは濟まされないことになつたかも知れないの。よくお家にゐて下すつたわね。（心から喜んでゐるやうに云ふ）
やす子　戲談でせう（さう云ひながら、ひどく氣にしたらしく）でも、今日のやうな暑い日にわざ／＼來て下すつたのは、たゞ事ぢやないかも知れない。……早く聞かせて頂戴。
　そこへ、下女が顏を出して、「お呼びで御座いますか」と訊く。
やす子、煩さうに下女の顏を見て、ふと思出したやうに、
やす子　西洋梨がまだ殘つてゐたね。それを水で洗つて、それからサイダを持つて來てお呉れ。
　下女、不機嫌な返事をして引込む。
やす子　あの女は氣が利かなくて仕樣がないのよ（下女の後を見て云つて）あたし、心配だから、大切な用事を早く聞かせて下さいね。
きし子　あなたが御心配になる必要はないの？。あたしの方からお願みすることなんですもの。
やす子　どんなことか知ら。……きし子さんがわざ／＼いらしつてお頼みになることなら、何でも聞いて上げたいわね（お調子に乘つて云ふ）
きし子　今村先生が今度學校をお止めになること、あなた御存じ？

やす子　何とかいふ新聞にそんなことが出てゐたと、秋雄が云つてゐてよ。今村先生もよつぽどお歳を召してゐらつしやるんですものね。……でも、先生の御隠退があなたに何か關係があつて？。

きし子　先生に何かいゝ紀念品をお贈りしたいと思つてゐるの。あなた發起人の一人になつて下さらない？。

やす子　大變な用事と云つて、そんな用事だつたの？。(拍子拔けがしたやうに)發起人のなかに名前を並べるくらゐなことは何でもないぢやないの。往復端書で訊合はせて下すつてもよかつたのよ。

きし子　でも、あなたには特別お願ひしなきやならないと思つてるの。

やす子　特別にあたしに？(咎めるやうに云つて)特別にと云つても、あたしの力ぢや、嵩張つた寄附は、したくつても出來ないわね。………退職紀念に何を差上げようと思つてらしつて？。

きし子　いろ／＼に考へてはゐるんですけど、まだハッキリしたことは思ひつかないの。あなたは何がいゝとお思ひになつて？。

やす子　(煩さうに)あたしの今の頭では、そんなことを考へてる餘裕はなさゝうよ。

きし子　(眞面目に考へてゐるらしく)あんまり安つぽい物をお贈りしちや、却つて失禮に當る譯だし……

やす子　一生のお疲れをお休めになれるやうに、柔かい寢臺でもお贈りになつちやどう？。

きし子　(笑つて)でも、寢臺は變ぢやないの。……もつと品のいゝ、趣味の深いものでなければいけないでせう。

やす子　(鼻の先であしらつて)さう云つて趣味の深いものは、あたしなんかの知惠では、とても考へ出せないわね。

きし子　久松さんにもよく御相談なすつて下さいね。久松さんはさういふことには明るくつていらつしやるんだから。

やす子　さういふことに明るいのは自慢になりやしませんわね。(さう云つて相手を見詰めて)あなたは、他にもつと大切な御用がおありになるんぢやない？。紀念品の發起人のお頼みだけぢやないんでせう。

きし子　(ビックリして)どうしてさうお思ひになつて？。

やす子　(得意になつて)やはりさうだつたのね。………あたしには豫感があつたのよ。あなたのお手紙を讀んでるうちに、變に胸騷ぎがしたんですもの。

きし子　だつて、あたしの手紙には、あなたの心に障るやうなことは書いてやしなかつた筈なんですけど……

やす子　上べにはね(皮肉に云つて)きし子さんだけは、あたしに好意を有つてゐて下さる人なんだから、明つ放しに、思つたこと云つちまふわ。……あなたは探偵見たいにあたしの家のなかを探りにいらしつたんぢやないわね。

きし子　飛んでもないことよ。あたしが何のために此家へ探偵に來る

必要があつて？（きつく云ふ）

そこへ、下女が果物とサイダとを持込む。それ等を机の上に置いて行くのを、二人は黙つて見てゐる。

やす子　もう三時前だらうね。旦那様に電話を掛けて御覧な。直ぐに家へお歸りになるかつて。（やがて、下女を呼留めて云ふ）

下女　まだ二時半になつたばかりで御座います。さつきから、三時になつたらお知らせしようと思つて、時計ばかり見て居りました。

やす子　忘れないやうに、三時の十分前に電話を掛けてお呉れ。

下女　よく承知して居ります。

下女、入つて行く。

きし子　久松さんは、三時に會社をお退けになるの？。暑中でもお休みはないの。

やす子　えゝ。あなたの旦那様のやうに避暑も避寒も出來るやうな御身分ぢやないのよ。それで、勤めはつらい〳〵と恩に着せるやうに云ひつゞけるものだから、あたしもはじめは、さう思つて、恩に着てゐたのですけど、でも、あたしのやうに家にばかりおつとしてるよりは、毎日外へ出てる方が却つてよかないかと思はれてよ。男の自慢のお勤めといふものは、そんなに苦しいものなんでせうか知ら。あなたはどうお思ひになつて？。

きし子　さうねえ。そりや仕事にも由るでせうけれど。

やす子　あたし達は今まで騙されてたのぢやないかと思はれてよ。會社のお勤めぐらゐ女にだつて誰にだつて出來ないことはないのよ。頭腦を使ふ仕事は女には出來ないと云ふのは、嘘ぢやないかと、この頃あたしには思はれるわ。

サイダを注ぐ。隣りの西洋館からピアノの音が聞えて來る。

やす子　（眉をしかめて）またはじまつた。この頃は、毎日この時刻にあのピアノの音が聞えて來るのよ。

きし子　いゝぢやありませんか。居ながら音樂が聞かれて。

やす子　そりや、あなたは珍らしくお思ひになるでせうけれど、毎日聞かされると、煩くつてたまらないの。それに、あの家が夏中風の邪魔をして、あたし達を苦しめてるんだから憎らしくつて。

きし子　（笑つて）暑さのせいで、あなたも神經過敏におなりになつたのね。……ピアノの音が憎らしく聞えたり、あたしの顔が探偵に見えたり……

やす子　さう人を見くびるものぢやないわよ。一時間以内には久松が歸つて來ますから、それまで、辛抱して待つてゐらつしやい。輕井澤のお話でも承はるわ。……久松が歸つて來たら、あなたが知りたいと思つてらつしやることが、自然に分るでせうよ。あたし達は、強いてあなたの目や耳をくらまさうと思つてやしないんだから。

きし子　（自分の心を相手に見られたらしいので、バツの悪さを繕ふやうにサイダのコップを手にして、二三口飲んでから）……あなたが

さういふ風に思つてゐらつしやるのなら、一口に云つちまふわ。あたしは輕井澤で辰雄さんに偶然お會ひしましたのよ。

やす子（尖つた物で皮膚を突かれて、疼みを感じたやうな顏して）輕井澤へ辰雄さんが行つてたんですつて、生意氣ねえ。ぢや、それで、きし子さんはあたしを輕井澤へお呼びになつたのね。

きし子　いゝえ、それは、あなたにお手紙を差上げた後でしたの。

やす子（昂奮して）後でも先でも、それは問題ぢやないのよ。辰雄さんは、あの跳ね返りの斷髪女を連れて、いゝ氣になつて贅澤な避暑なんかしてゐたのね。……あたし輕井澤へは行かなくつてよかつた。そんないやらしいものを見せられちや、氣の弱いあたしなんぞは卒倒したかも知れないわ。……それで、あなたは、辰雄さんに口說落されて、二人の結婚をあたし達に承認させて、生活の補助をもさせるやうに企んでゐらつしやるのね。でも、それだけは駄目よ。いくら御懇意なあなたのお取做しでも、そのことばかりはお斷りしてよ。

きし子　さう仰有るのなら、あたしは默つてお暇する外ないんですけど（さも當惑したらしく）でも、辰雄さんは、彼方で決して贅澤な生活なんかしてゐらつしやらなかつたの。百姓家の質素な部屋で、一心に御勉强なすつて、東京へ歸るまでには、一册の書物になるやうな論文を書上げると意氣込んでゐらつしやるのよ。論文のお話はあたしにはよく分らないんですけど、阿部は大變に感心してゐるの。

やす子　あの人が書物を著はしたつて、いゝ本屋で出版して呉れる筈てはないんでせう。何の足しにもならないぢやないの。

きし子　でも、あんなに熱心に勉强してゐらつしやるのは感心だわ。……博士論文にしたいんですつて。

やす子　博士論文と。（物におびえたやうな顏して相手を見る）

きし子　自信があるんですつて。

やす子　あなたはあたしを揶揄つてるのね。

きし子　飛んでもないことだわ。辰雄さんが博士論文をお書きになつたといふ噂をしたゞけでも、喜んで頂かなきや割に合はないと思はれるわ。

やす子（憤然として）あたし達が弟の才能を認めないのがいけないと云ふんですか。そりや、弟が將來立派な學者に望みがあるのなら、秋雄だつて出來るだけの助力はしたいと思つてるんですけど、勝手に女を拵えたりするやうぢや信用が出來ないぢやないの。自分の弟のことは、兄の秋雄が誰れよりもよく知つてゐますからね。

きし子（相手の剣幕に脅せられたやうに）それはさうですとも（と、空々しく云つて）ぢや、そのお話は今日は止しませうよ。

やす子　秋雄は傍で見てると、齒痒いほどに精神が弱くて、辰雄さんにも隨分虐められてるのよ。辰雄さんは口が上手だから、あなたにはどんな風に兄弟關係をお話したか知らないんですけれど。

きし子　そのお話は今日は止しませうよ。あたしが餘計なおせつかいをしていけなかつたんですもの。

やす子　いゝえ、辰雄さんが無理にあなたにお願ひしたのがいけなかつたのよ。兄弟間の信用を回復しようと思つて。（稍々心が落着いたらしく）……輕井澤では、辰雄さんの連れの女は、どんな服裝をしてゐました？

きし子　さうねえ。大抵は洋裝のやうだつたわ。でも、極く質素にしてゐらしつたのよ。

やす子　（嘲るやうに）質素な洋裝は見つともないものね。女が洋裝をするのなら、ドッサリお金を掛けなければ、見られたものぢやないわ。……その女、輕井澤でどんな暮しをしてゐました？

きし子　何でも佛蘭西語のお稽古をしてゐると云つてゐらしつたわ。將來博士夫人になるかも知れないんですからね。

やす子　佛蘭西語を敎へる所が輕井澤にもあるの？。

きし子　辰雄さんにお習ひになるんでせう。

やす子　氣樂だわねえ。

きし子　……一度はお二人で淺間登りをなすつたのよ。あたし達も誘はれたんですけれど、みんな勇氣がなくつてお仲間に入らなかつたの。

やす子　淺間といふ山は危險な山ぢやなくつて？

きし子　そりや、頂上まで隨分骨が折れるんですつてね。あたし、霧のかゝらない時は、毎日見てゐました。朝と晩と、山の色が變つて、そりや美しいのよ。

やす子　あたしも輕井澤へ行けばよかつた（獨言するやうに云ふ）

そこへ、下女が顏を出す。

下女　只今會社へ電話をお掛けしました。旦那樣はさつきお歸りになつたさうで御座います。

やす子　さつき？。何時頃會社をお出掛けになつたか聞かなかつたの？。

下女　その時間はよく承りませんでした。

やす子　氣が利かないのね。今度から時間をハッキリ聞かなきやいけないよ。

下女　ハイ。

不機嫌らしく顏を引込める。

きし子　あたし、銀座で買物をして、夕方までに家へ歸らなきやいけないの。今日はこれでお暇しますわ。

やす子　だつて、秋雄にお會ひになる筈ぢやなかつたの？。もう少し待つてゐらしやいね。

きし子　さうねえ（ふと思ひついたやうに）あたし、電話を拜借してよ。

やす子　どうぞ。

きし子、奥へ入る。

「やあ。よくいらしつた。もうお歸りなんですか」

「いゝえ、妹の家へ電話を？」
「どうぞ、ゆつくり掛けて下さい」
「……ちよつと失禮いたします」
蔭でかういふ聲が聞える。やす子、聞耳を立てゝゐる。
秋雄、暑氣と勤勞とで疲れた樣して入つて來る。

やす子　今日はお早かつたのね。

秋雄　今日は三時前に歸る筈だつたが、少しおくれた。大急ぎに急いだのだが。

やす子　なぜ、そんなにお急ぎになつたの？（さう云つて、電索を手繰つてボタンを押しながら）今日あたしのところへお客樣のあることを知つてゐらしつた？。

秋雄　そんなことは知らないよ。……しかし、お前と約束したぢやないか。今日は大事な用事があるから、三時までには必ず歸つて來いと、今朝お前が云つてゐたぢやないか（上着を脱ぎかける）

やす子　でも、きし子さんが入しつたから、今日は駄目ね。

秋雄（訝しげに）何が駄目なんだい。

やす子　帳簿の計算を、あなたに調べて頂かうと思つてゐたのだけど。

そこへ、下女が顏を出す。

やす子　旦那樣のお召替えを此處へ持つてゐらつしやい。それから、洗面器に水を入れてゐらつしやい。

秋雄　阿部の奧さんは早くから來てゐたのかい。

やす子（それには答へないで）あの。辰雄さんはあたし達に秘密で輕井澤へ避暑してるんですつてね。女と一しよに。

秋雄　ホウ。彼奴うまいことをしてやがる。

やす子　そんな呑氣なこと云つてる場合ぢやないんですよ。辰雄さんは輕井澤で大論文を書いてるんですつて。博士論文のつもりなんです。今にあなたの弟が博士になるんですよ。

秋雄（空呆けたやうに）さう易々と博士になれゝば結構だがね。

やす子　そんなに氣樂なこと云つてるうちに、あなたは弟に負けつちまひますよ。

秋雄　爲方がないさ（氣のない返事をして）おれは、今夜納涼會に誘はれたのだが、お前との約束があるから。歸つて來たのだよ。

やす子　大した用事もないのに早く歸つてゐらしつたことを後悔してるやうな顏してるのね。だけど、あなたは避暑から歸つてからのきし子さんには、今はじめてお會ひになつて？。

秋雄　さうだ。

やす子　本當に？。

秋雄（ドギマギして）なぜさう念を押すのだい。

やす子（あたりを憚るやうに、小聲で）あの人はあたしの生活を脅かしに來たんですよ。

秋雄（やうやう安心して）脅かされなきやいゝぢやないか。

やす子　あたし、そのつもりで話をしてるのだけど。……あなたが確りしてゐて下さらなきや駄目ですよ。

下女が着替への浴衣と、水を湛えた洗面器とを持つて來る。

秋雄は縁側で顏を洗つて身體を拭いて浴衣を着る。

やす子（夫の傍に立ちながら下女に向つて）お客樣はまだ電話口にゐらしつて？。

下女　え丶。いつまでも電話口に立つてゐらつしやいます。

やす子　ぢや、御用がお濟みになつたら、此方へいらつしやいと申上げてお與れな。

下女、引込む。

秋雄　これで氣持がよくなつた。さあ、一杯饗ばれようか（机の側にドカツと胡坐をかいて、サイダを一杯、ぐつと飲干して、ふと、算盤に目をつけて）今日も算盤を据ゑつけてるんだね。

やす子　いくらやり直しても、プラス、マイナスがうまく行かないのよ。焦つたくつて仕樣がない。

秋雄（苦笑して）いくら算盤が合つたつて無いものはないんだし、有るものは有るんだよ。いゝ加減で諦めたらどうだ。

やす子　きし子さんに算盤なんか見られちやいやね。あたし、隱して置きますわ（算盤と帳簿とを慌てゝ袋戸棚へかくして）あたし、大急ぎで衣服を着替えて來ますから、あなたはきし子さんのお相手をしてゐて頂戴ね。

秋雄　承知した。

やす子入つて行く。

入違つて、きし子、前よりも元氣のない顏して入つて來る。

秋雄（微笑して）さあ、此方へいらつしやい（居住ひを直して）あなたは、僕が喫茶店でお頼みしたやうに家内に話して與れましたね。御苦勞でした。

きし子　……でも、あたし、古馴染のやす子さんにそんなしら〴〵しいことはとても云へないんですもの。お互ひにあたり前のお話をしてゐました。ちつとも不斷とお變りになつたところはないぢや御座いませんか。

秋雄　あれがあたり前なんですか。おや、あなたも阿部君に對してあんなのですか。女房といふものは、亭主に對して皆んなあんなのですか。

きし子　久松さんも可笑なことを仰有るのね。

秋雄　あたり前ならそれでいゝ譯ですが。……おや、喫茶店で打合せをした辰雄の方は、トンチンカンになつて困ることになりやしないか知ら。

きし子　大丈夫、そんなことは御座いませんわ。

秋雄　辰雄もあの女に關係してからは、妙に家内と仲が惡くつていけないんですよ。

きし子　あの女の方は、活潑な無邪氣な方なんですから、あなたも與

さんも好意をもつてお上げになるといゝんですわ。

秋雄　僕には好意も惡意もない。あれの事はあれの勝手にさせとく方針なんです。……それについて、あなたにお頼みして置きたいんですが……

さう云つて、眞面目に何か話さうとしてゐるところへ、やす子が、着物を着替えもしないで、元のまゝで、慌だしく入つて來る。

やす子　電話の御用はお濟みになつて？。

きし子　これから小石川の妹の家へ寄る筈になつてたのですけれど、今電話で訊くと、弟の敏三さんが急病で入院して、妹もそつちの方へ行つてるんですつて。

やす子（驚きを現はして）それは大變ね。どういふ御病氣？。

きし子　盲腸炎ですつて。……あたし、これから病院へ行きますわ。

やす子　直ぐにいらつしやるの？

きし子　病氣と知つたら、一刻も早く見舞に行つて樣子を見なければ氣が濟みませんよ。

やす子（訝しげに）あなたは秋雄に御用がおありになつたんぢやない？。もうお話になつたの？。

きし子（ハツとして）いゝえ。……今日は急ぎますから、失禮して、近日改めてお伺ひしますわ。

秋雄　さうですか。折角いらしつたんだから、お持做しゝたいんですが、さういふ譯ならお引留めも出來ませんね。

やす子　直ぐにいらつしやるの。

きし子　えゝ、大急ぎで。……ぢやお暇いたしますわ。大變お邪魔をいたしました。

きし子が挨拶して出て行くのを、やす子は見送つて行く。秋雄は、扇風器の前に寢そべつて天井を見上げる。隣りの物干臺から、洗濯物を取込まうとしてゐる女が、此方を見下してゐるのに氣がつかない。

やす子、間もなく部屋へ入つて來る。

やす子　あたし、どうしたのだらう?。あの人がゐる間息の詰るやうな思ひをさせられた。

秋雄　だつて、お前はあの人とは、學校時代からの一番の仲よしだつたと云ふぢやないか。

やす子　昔の仲よしが久振りに訪ねて來たのに、いやな思ひを殘されてしまつた。（夫の顏を正視して）あなたは、さうして氣樂さうに寢てゐらしつても、内心誰れかを待つてゐらつしやるのね。……知つた人は來て呉れない方がいゝんですよ。

秋雄（起上つて）知らない人に來られて、暑い時にお相手なさゝれるのも困るしね。

やす子　知らない人に會ふ方が結句氣樂かも知れない。

秋雄　さうかな。おれはどちらでもいゝが、お前にさう云はれると、お

れのやうな人間も、無暗に物を考へなきやならなくなるんだね。寢ころんでボンヤリ天井の節穴を數へてばかりゐられなくなるよ。知つた人が來るのがいゝ、知らない人に會ふのがいゝ。こんなことまで、おれ達は考へなきやならないのかな。

やす子　ぢや、知つた人も知らない人も、誰れも來ないとして、あなたは今日の午後をどうして送らうとお思ひになつて？

秋雄　またお極りの質問か。この頃は社から歸る途中で、お前の質問にどう答へようかと、そればかり考へるやうになつたよ。どうして送らうと工夫しなくたつて、ひとりでに日は送れらあね。

やす子　いつもそんな氣樂なことを云つてゐらつしやるから、あなたは頼りにならない。今にひどい目に會ひますよ。……あなたが會はなくつても、あたしが會ふかも知れませんよ。

やす子はさう云ひながら、あたりを見廻して、ふと、隣りの物干場を見上げる。今まで此方を見下してゐた物干場の女は、それに氣がつくと、慌てて洗濯物を抱へて姿を隠す。

やす子（甚しく驚いて）御覽なさい。いやな奴がお隣りの物干場から此方を見てゐましたよ。さつきから見てゐたに違ひない。昨日もさうだつたの。……毎日あしこから見てゐられちや、障子でもピッシャリ締めとかなきやならない。

秋雄　馬鹿を云へ。この暑さに障子を締められてたまるものか。……他人に見られたつて構はないぢやないか。

やす子　今日のやうな暑い天日に曝されながら他人の家を覗込むのは、あたり前ぢやないつてことが、あなたには分らないのね。

秋雄　なあに、物好きな人間は、日に焦げるのも雨に打たれるのも構はないで、他所の家を覗いたりしたがるものだよ。……（さう云ひながら、自分でも物干場の方を氣にして見上げる。そして、口では戯談らしく）お前が算盤で金の勘定をしてるのを見て、おれの家を有福だと思つてるかも知れないね。物騒だな。

やす子　戯談云つてる場合ぢやないんですよ。……あたし、氣にかゝつてならないから、おくみを呼んで聞いて見ますわ。

秋雄　下らないことは止せよ。お前は午後になると精神が衰弱するからいけない。午睡でもしたらいゝだらう。

やす子　あたしの精神が衰弱してるものですか。身體こそ暑さに負けて衰弱してるでせうけれど。

さう云ひながら、例の電鈴を手繰つてボタンを押す。それと同時に、下女が入つて來る。

下女　辰雄さまが入つしやいました。此方へお通ししてもよろしいでせうか。

やす子は顔色を變へる。秋雄も意外らしい感じを裝ふ。

秋雄　一人で來てるのだね。

下女　ハイ。お一人で御座います。

秋雄　一人で來てるのに、お前に取次を頼んで玄關で待つてるのか

い。いやに憎み深くなつたものだね。……此方へ通したらいゝぢやないか。

やす子　だから云はないこつちやない。さつきから、誰れか來さうに思はれてならなかつた（獨言のやうに云ふ）

下女　ぢや、此方へお通しゝてもよろしいんで御座いますか。

秋雄　いやに念を押すぢやないか。

下女がムツヽリして行きかけるのを、やす子は呼留める。

やす子　くみは、お隣りの大村さんの物干場からあたしの家をたびたび覗いてる人を知つてるだらうね。

下女　（思はず笑ひを浮べて）奥さまのお妹さんぢやないでせうか。

やす子　大村さんのお家には、この頃奥さんのお妹さんが來てゐらつしやると、先日お前が話してゐたわね。でも何だつて、あたしの家を覗くんだらうね。

下女　こちらの奥さまのことは、以前からよく御存じださうで御座います。

やす子　いやだねえ。あたしそんな人知らないことよ（とげ／＼しく云ふ）

秋雄　兎に角辰雄を此方へ通したらいゝだらう。

下女入つて行く。

やす子　お隣りの奥さんの妹といふ人は、出戻りなんですつて。どうしてあたしを知つてるんでせう。いやになつちまふ。

秋雄　上から家の中を見下されるのはいやなことだ。

やす子　あなたゞつてさうなの？。

二人で、物干場の方を見上げてゐるところへ、辰雄がしほ／＼として入つて來る。夫婦は振向く。

秋雄　どうしたのだ？。

やす子　辰雄さんは輕井澤へ行つてらしつたの？。

辰雄　えゝ（縁側へ寄つて、夫婦の見てゐた方を見て）阿部さんの妻君は來ませんでしたか。

やす子　さつきいらしつて、今歸つたばかりですの（辰雄に對して、親しみのない目を向けて）それがどうしたんです？。

辰雄（意氣込んで）しまつた（と叫んで）あの人があなたに會ふ前に、僕は此方へ來ようと思つてゐたのに、旅費が手に入るのが遲れたゝめに、あの人に先を越されたんですね。あの人の云ふことは一切信用しちやいけませんよ。

やす子　變なこと仰有るのね。……だつて、きし子さんはあなたの悪口なんか云つてやしませんよ。あなたのために親切な口を利いてゐたんです。

辰雄　それは分つてますがね（言葉に力を入れて）その親切が餘計なおせつかいなんです。僕はどんな艱難をしても貧乏をしても、決して兄弟や親戚の助けを受けようとは思つてゐません。阿部の奥さん

なんかは、同情の押賣りを享樂してるんだからやり切れませんよ。

やす子（稍々打解けたらしく）さう云つちや可愛さうね。あの人は昔から世話好きで、惡氣のある人ぢやないんですよ。……さう云へば、あなたは博士論文を書いてゐらつしやるんですつてね。

辰雄　そんな氣の利いたものを書いてるものですか。僕は生活のためにある先生の論文の淸書をしてるんです。錢耕見たいなことをしてゐるのです。

やす子　なぜ、輕井澤まで行つてそんなことをなさるの？。

辰雄　その先生は夏には輕井澤へ行つて仕事をするのが例になつてるんです。だから、僕も仕方なしにお伴して行つたまでのことですよ。

やす子　それで、お一人で歸つてゐらしつたの？。

辰雄（曖昧に）えゝ。

やす子（微笑して）嘘でせう

辰雄　僕の連れは、實家の親爺が連れて歸りました。僕だけでは信用がないといふ譯なんでせう。

やす子　あなたはそれで何とも思つてゐらつしやらないの？。

辰雄　仕方がありません。

やす子　お互ひに愛し合つてゐるのに、田舍の老人にさへ盾付くことが出來ないんですかねえ（憐むやうに云ふ）

辰雄　僕といふ人間に價値がないんですから仕方がありません。

やす子　そんなに自分をケナすものぢやありませんよ。……あなたは輕井澤のやうな所で貧弱な避暑なんかして、よつぽど元氣づいてゐらつしやると聞いて、さつきも喜んでゐたんです。……若いくせに、そんなに悲觀に沈んでゐちやいけないぢやありませんか。しつかりなさいと、背中を一つどやしつけたくなるわね（快活に云ふ）

辰雄（わざと眞面目に）僕も誰れかに力一杯どやしつけて貰ひたいと思つてゐますよ。

秋雄　おれでよければ、今でもやつてやるよ。

毆りつける身構へをする。

そこへ、下女が入つて來て、秋雄の身構へを見て笑ふ。

下女　奧樣、阿部さんの奧さまからお電話で御座います。

やす子　阿部さんから？。どうしたんだらう（座を立つて行きかけてから振返つて）辰雄さんは今夜此方へお泊んなさいね。

辰雄　いや、僕は例の下宿へ泊ることにしてるんです。

やす子　ぢや、お夕飯でも召上つてゐらつしやいね。お馳走しますよ。（出て行く）

兄弟相見て微笑す。

辰雄　あゝ云つて置けばいゝのかい。

秋雄　あゝ。……お前はなか〳〵表情がうまいな。

辰雄　馬鹿らしいつたらないね。しかし、毎日誰れかとこんな眞似をしなきや、家庭の平和が續けられないやうぢや困るね。

秋雄　なに。毎日こんな眞似が出來るものか。今日これだけ注射しとけば當分持つのだ。お前に對する憐憫と同情を一人で空想して、自分の病氣を忘れてゐられるんだよ。

辰雄　阿部の妻君だつて同じことだよ。同情の押賣りを享樂してると僕が云つたのは本當なんだよ。

秋雄　しかし、博士論文の話は腑に落ちないね。どうしたのだ。阿部の妻君はなぜそんなことを云つたんだらう

辰雄　僕は旅費稼ぎに近代史の飜譯をしてゐたのだ。それだけは間違ひなしの事實なんだ。それをあの妻君が博士論文かと、冷かすやうに訊いたから、僕は大眞面目で、さうです、博士論文ですと、うつかり云つちまつたんだよ。あとで辯解はしなかつたから、あの妻君はそれを信じてるんだね。ハヽヽ。

秋雄　どうも、お前が博士論文を書いてゐるといふのは、突飛過ぎて腑に落ちなかつたよ。

辰雄　鈴耕の方は突飛過ぎないのかい。

　そこへ、やす子が入つて來る。

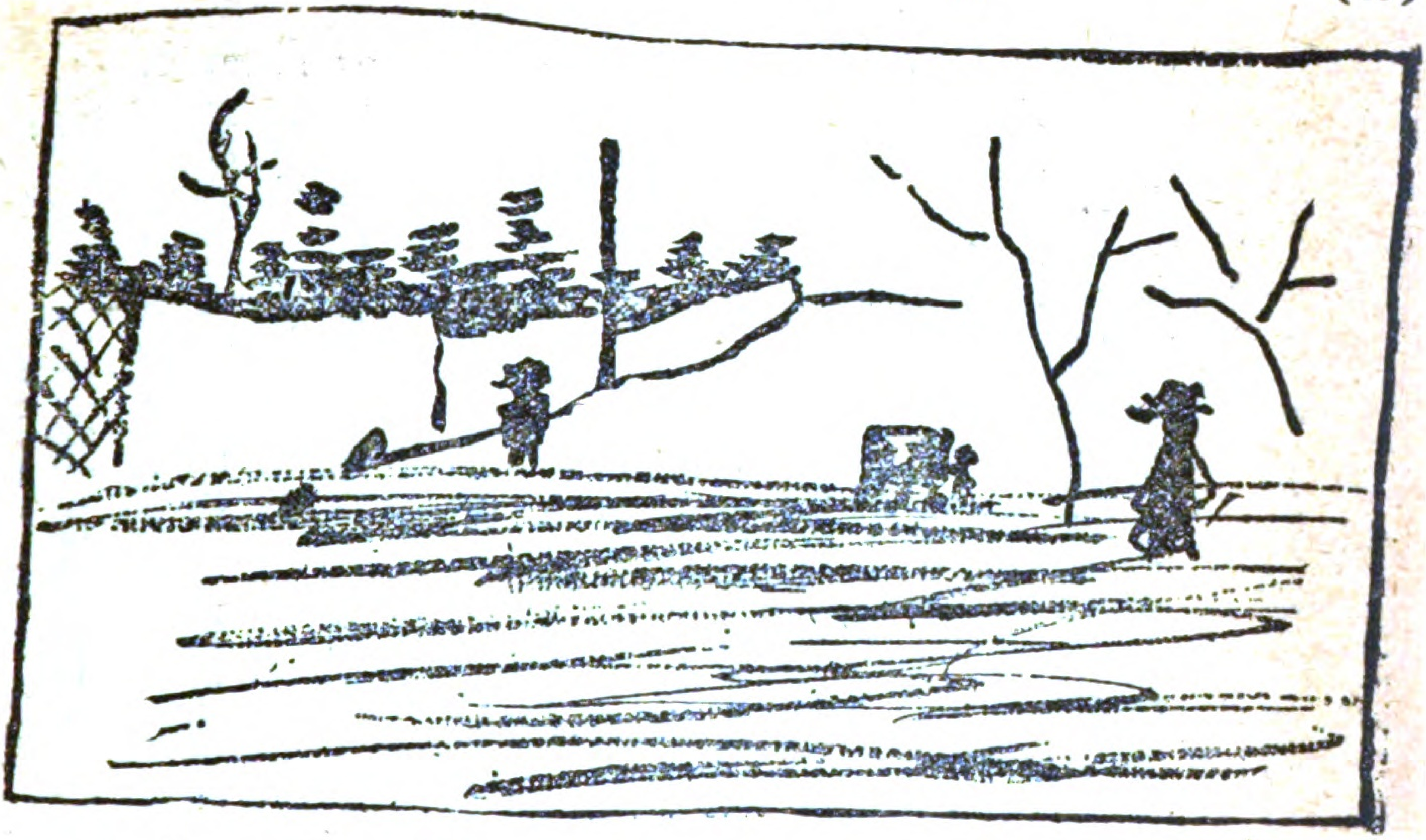
やす子　きし子さんは神經質ね。あたしの感情を害してやしないかと、非常な心配して、途中からわざ／＼電話をかけたんです。

秋雄　何と云つて。

やす子　今日のことは、暑氣拂ひの戯談見たいなことだから、氣に留めないやうに、くれ／＼おたのみするんですつて。今村先生の記念品のことだけが眞實で、あとのことは戯談にして下さいつて。……さうすると、辰雄さんの博士論文のことも戯談の一つになつちまふのね。

辰雄　輕井澤から歸つて來ると、東京は何處へ行つても暑いね。この暑さも戯談になつて呉れるといいんだが（獨言のやうに云ふ。

（をはり）



暗夜行路

志賀直哉

九

謙作は毎年春の終りから夏の初めにかけ屹度頭を惡くした。殊に梅雨期のじめ／＼した空氣には打克てず、肉體では半病人のやうに弱る一方、氣持だけは變に苛々して、自分で自分をどうにも持ちあつかう事が多かつた。

或日、前からの約束で、彼は末松、お榮、直子等と寶塚へ遊びに行く事にした。其朝は珍らしく、彼の氣分も靜かだつた。丁度向ふで晝飯になるやう、九時何分かの汽車に乘る事にした。

出がけ、直子の支度が遲れ、彼は門の前で待ちながら幾らか苛立つのを感じたが、此時はどうか我慢した。

末松とは七條驛で落ちあつた。暫く立話をしてゐる内に改札が始まつた。彼は不圖傍に直子とお榮の姿が見えない事に氣がつくと、

「便所かな」とつぶやいたが、「乘つてからやればいゝのに。馬鹿な奴だ」と直ぐ腹が立つて來た。

二人は便所の方へ行かうとした。其時彼方からお榮一人急足で來て

「二人の切符を頂戴」と云つた。

「どうしたんです。もう切符を切つてるんですよ」

「どうぞお先へいらして下さい。今赤ちゃんのおむつを更へてるの」

「何んだつて、今、そんな事をしてるのかな。そんなら、貴女は末松と先へいつて下さい」

謙作は苛立ちながら、二人の切符を末松へ渡し、その方へ急いだ。

「有料便所ですよ」背後からお榮が云つた。

直子は丁度赤兒を抱上げ、片手で帶の間から蟇口を出してゐる所だつた。

「おい。早くしないか。何だつて、今頃、そんな物を更へてるんだ」

「氣持悪がつて、泣くんですもの」

「泣いたつて關はしないぢやないか。それより、皆もう外へ出てるんだ。赤坊を此方へ出しなさい」

彼は引ツたくるやうに赤兒を受取ると、半分駈けるやうにして改札口へ向かつた。プラットフオームではもう發車の號鈴が消魂しく鳴つてゐた。

「一人後から來ます」切符を切らしながら、振返へると、直子は駈足とも急足ともつかぬすり足のやうな駈け方をして來る。直子は駈けながら、いま更へたむつきの風呂敷包を結んでゐる。

「もつと早く駈けろ！」謙作は外聞も何も關つてゐられない氣持で怒鳴つた。「どうでもなれ」さう思ひながら、彼は二段づゝ跨いでブリッヂを驅け上つたが、それを降りる時は流石に少し用心した。

汽車は靜かに動き始めた。彼は片手で赤兒をしつかり抱きしめながら乘つた。

「危い／＼！」驛夫に聲をかけられながら、直子が駈けて來た。汽車は丁度人の歩く位の早さで動いてゐた。

「馬鹿！　お前はもう歸れ！」

「乘れてよ。一寸掴まへて下されば大丈夫乘れてよ」段々早くなるのについて小走りに駈けながら、直子は拜み乞ふやうな眼つきをした。

「危いからよせ。もう歸れ！」

「赤ちゃんのお乳があるから、………」

「よせ！」

直子は無理に乘らうとした。そして半分引きづられるやうな格好をしながら漸く片足を踏台へかけ、それへ立つたと思ふ瞬間、殆ど發作的に、彼は片手でどんと強く直子の胸を突いて了つた。直子は歩廊へ仰向けに倒れ、惰性で一つ轉ろがり又仰向けになつた。

前の方の客車でそれを見てゐた末松が直ぐ飛び下りた。

謙作は此方へ駈けて來る末松に大聲で、

「次の驛で降りる」と云つた。末松は一寸躊躇き、急いで直子の方へ駈けて行つた。

遠く二三人の驛員に抱き起されてゐる直子の姿が見えた。

「まあ、どうしたの？」お榮が驚いて來た。

「私が突とばしたんだ」

「…………」
「危いからよせと云ふのに無理に乘つて來たんだ」謙作は亢奮を一生懸命抑へつけながら云つた。「此次の停車場で降りさせう」
「謙さん。まあ、どうして…………？」
「自分でも分らない」
直子が仰向けに倒れて行きながら此方を見た變な眼つきが、謙作には堪へられなかつた。それを想ふともう取りかへしがつかない氣がした。
　次の驛で二人は降りた。驛には丁度電話がかゝつてゐて、謙作は直ぐそれへかゝつた。出てゐるのは末松だつた。
「輕い腦震盪を起こしたらしい。然し怪我はない。直ぐ醫者が來る事になつてる。まあ大した事はなさゝうだ」
「十五分程で上りが來るから、それで還る。で、其方は何處へゐるんだ」
「驛長室だ」
「どうなの？」傍からお榮が心配して訊いた。
謙作は受話器をかけながら、
「怪我はなかつたらしい」
「まあ、よかつた。本統に吃驚して了つた」
間もなく京都行の列車が着いて、二人は直ぐ同じ路を還つて來た。
謙作はどうしてそんな事をしたか自分でも分らなかつた。發作といふより說明のしようがなかつた。怪我がなく濟んだのはせめてもの幸だつたが、直子と氣持の上が、どうなるか、それを想ふと重苦しい不快な氣持がした。
「謙さん、何か直子さんの事で氣に入らない事でもあるの？　貴方は前と大變人が變つたやうに思ふけど………」
　謙作は返事をしなかつた。
「それは元から苛立つ性ぢやあつたが、それが大變烈しくなつたから」
「それは私の生活が惡いからですよ。直子には何も關係のない事です。私がもつとしつかりしなければいけないんだ」
「私が一緒にゐるんで、何か氣不味い事でもあるんぢやないかと思つた事もあるけど……」
「そんな事はない。そんな事は決してありません」
「そりやあ私も實はさう思つてるの。直子さんとは大變いゝし、そんな事はないと思つてるんだけど、他人が入る爲めに家が揉めるといふのは世間によくある事ですからね」
「その點は大丈夫だ。直子も貴女を他人とは思つてゐないんだから」
「さう。私は本統にそれを難有いと思つてるのよ。だけど近頃のやうに謙さんが苛立つのを見ると、其所に何かわけがあるんぢやないかと思つて………」
「氣候のせいですよ。今頃は何時だつて私はかうなんだ」

「それはさうかも知れないが、もう少し直子さんに優しくして上げないと可哀想よ。直子さんの爲めばかりぢやあ、ありませんよ。今日みたいな事をして、若しお乳でも止まつたら、それこそ大變ですよ」

赤兒の事を云はれると謙作は一言もなかつた。

驛長室では末松と直子と二人ぼんやりしてゐた。直子は脚の高い椅子に腰かけ、まるで訊問前の女犯人とでもいふやうな樣子で凝つとしてゐた。

「まだ醫者が來ないんだ」末松は椅子を立つて來た。

直子は一寸顏をあげたが、直ぐ眼を伏せて了つた。お榮が傍へ行くと、直子は泣き出した赤兒を受取り、默つて乳を含ませた。

「本統に吃驚した。大した事でなく、何よりでした。——おつも、如何？　水か何かで冷したの？」

「……………」直子は返事をしなかつた。直子は自分の身體よりも心に受けた傷で口が利けないといふ風だつた。

「どうも、あれが實に困るんです。乘遲れると云つて、四十分で直ぐ出る列車があるんですから、少しも狼狽てる必要はないんですが、僅か四十分の爲めに命がけの事をなさるんで、……。然しお怪我がないやうで何よりでした」

「大變御面倒をかけました」謙作は頭を下げた。

「囑託の醫者が留守で、町醫者を頼めばよかつたのを、直ぐ歸るといふので、そのまゝにしたのですが、どうしませう。近所の醫者を呼びませうか？」

「どうなんだ」謙作は顧みて云つた。

「少しぼんやりしてられるやうだが、却つて、直ぐ此方から醫者へ行つた方がよくはないか」

「それぢあ、折角ですが、私の方で、連れて行きます。大變御厄介をかけ、申譯ありません」

末松は俥を云ひに行つた。

謙作は直子の傍へよつて行つた。彼は何と云はうか、云ふ言葉がなかつた。何を云ふにしても努力が要つた。直子の決して寄せつけないと云ふやうな態度が、謙作の氣持の自由を奪つた。

「歩けるか？」

直子は下を向いたまゝ點頭いた。

「頭の具合はどうなんだ」

今度は返事をしなかつた。

末松が歸つて來た。

「俥は直ぐ來る」

謙作は直子の手から赤兒を受取つた。赤兒は乳の吞みかけだつたので急に烈しく泣き出した。謙作はかまはず泣き叫ぶまゝ抱いて、驛長と助役にもう一度禮を云ひ、一人先へ出口の方へ歩いて行つた。

十

直子の怪我は大した事はなかつたが腰を強く打つてゐて、二三日は

起上る事が出來なかつた。

發作は一度直子とよく話し合ひたいと思ひながら、直子が變に意固地になり、心を開いて呉れない爲め、それが出來なかつた。

直子の方は彼が未だ要との事を含むでゐると思ひ込んでゐるらしいのだが、發作から云はせると、苛々した上の發作で、要との事など其場合浮ぶだけの余裕は全くなかつたのだ。

「お前は何時まで、そんな意固地な態度を續けてゐるつもりなんだ。お前が俺のした事に腹を立て、あんな事をする人間と一生一緒に居る事は危險だとでも思つてゐるんなら、正直に云つて呉れ」

「私、そんな事一寸も思つてゐないことよ。只腑に落ちないのは貴方が私の惡かつた事を赦してゐると仰有りながら、實は少しも赦してゐらつしやらないのが、つらいの。發作々々つて、私が氣が利かないだけで、あゝいふ事をなさるとはどうしても私、信じられない。お榮さんにも前の事、うかゞつて見たけれど、貴方が、あれ程病的な事を遊ばした事はないらしいんだもの。お榮さんも、近頃は余程變だと云つてゐらしたわ。前にはあんな人ではなかつたとも云つてゐらした。そんな事から考へて、貴方は私を赦してゐると仰有つて、實はどうしても赦せずにゐらつしやるだらうと私思ひますわ。貴方は貴方が御自分でよく仰有るやうに私を憎む事で、二重に不幸を生むのは馬鹿々々しいと考へて赦してゐらつしやるんだと思ふ。一ト言に云ふと功利的なお心持で赦さうとしてゐらつしやるんぢやないかと思はれる。然しそれぢやあ、本統に赦して頂いた事には何時までなつてもならないと思ふ。それ位なら、いつそ、憎んだ上で赦せないものなら赦して頂かなくて仕方がないが若し赦して頂けるなら、其時本統に心から赦して頂いた方が私、どの位嬉しいか分らない。それなら本統に赦して頂いたと思へるだらうけれど、今までのやうに決してお前を憎まうとは思はない。それに拘泥もしない。憎んだり拘泥したりするのは何の益もない話だと云ふ風に云はれると、うかゞつた時は大變ありがたい氣がしたんですけど、今度のやうな事があると、矢張り貴方は赦してはゐらつしやらない。憎んでゐらつしやるんだ。直ぐさう私には思へて來るの。そして若しさうとすればこれから先、何時本統に赦して頂ける事か、まるでその希望がないやうに思へるの」

「それだからどうしたいと云ふんだ」

「どうしたいと云ふ事はないのよ。私、どうしたら貴方に本統に赦して頂けるか、それを考へてるのよ」

「お前は實家に歸りたいとは思はないか」

「そんな事。又貴方はどうしてそんな事を仰有るの？　貴方の方で還へしたいと思つてゐらつしやるの？」

「いや。さうは思はない。只お前が先に希望がないやうな事を云ふから訊いて見たゞけだが……兎に角、お前が今日位はつきり物を云つて呉れるのは非常にいゝ。お前が變に意固地な態度を示してゐるので此方から話し出す事が今まで出來なかつた」

「それはいゝけれど、私の申上げる事はどう？　こんな事を申上げるのは生意氣かも知れませんが、貴方は非常に感情的でいらして、その

新お考への方は人道的とか理智的とか云ふんぢやないかと思ふんですもの」

「お前の云ふ意味はよく分つた。然し俺は自分がお前を憎んでゐるとはどうしても思へない。お前は憎んだ上に赦してくれと云つたが、憎んでゐないのだから今更憎むわけには行かない」

「……貴方は何時も乾度、さう仰有る」

「それに違ひないからだ」

「私、其所をもう一度よく考へて頂きたいの」

「……」

「……」

謙作はそれは直子の云ふやう實際もう一度考へて見る必要があるかも知れないと思つた。

「お前のいふ事は或る程度に認めてもいゝが、此間の事をさう云ふ風に解すのは少し俺は迷惑だ。兎に角、俺達の生活は此まゝではいけない。そして、いけなくなつた源因には前の事があるかも知れないが、生活がいけなくなつてから起る事がらを一々前の事まで持つて行つて考へるのは、それは矢張り本統とはいへないよ」

「私は直ぐ、さうなるの。僻み根性かも知れないんですけど」

「それはいけない。然し兎に角、生活をもう少しよくする必要はあると思ふ。半年程、俺だけ何所か山へいつて獨り靜かに考へるのもいゝな」

「……」

「俺から云ふと、總ては俺一人の問題で、俺の氣持と考へとが一つになつて呉れゝば、總ては何んでもない筈なんだ。それが生活が悪い爲めに一つにならない。——一トロにいへば神經衰弱かも知れないが、それから色々な事に破綻を生じて來る。さういふ自分を直す爲めに半年ばかり純粹な孤獨生活をするのは乾度いゝと思ふ」

「えゝ、それ、いゝかも知れませんわ。お互に氣持も身體も健康になつて又新しい生活を始めるのは」

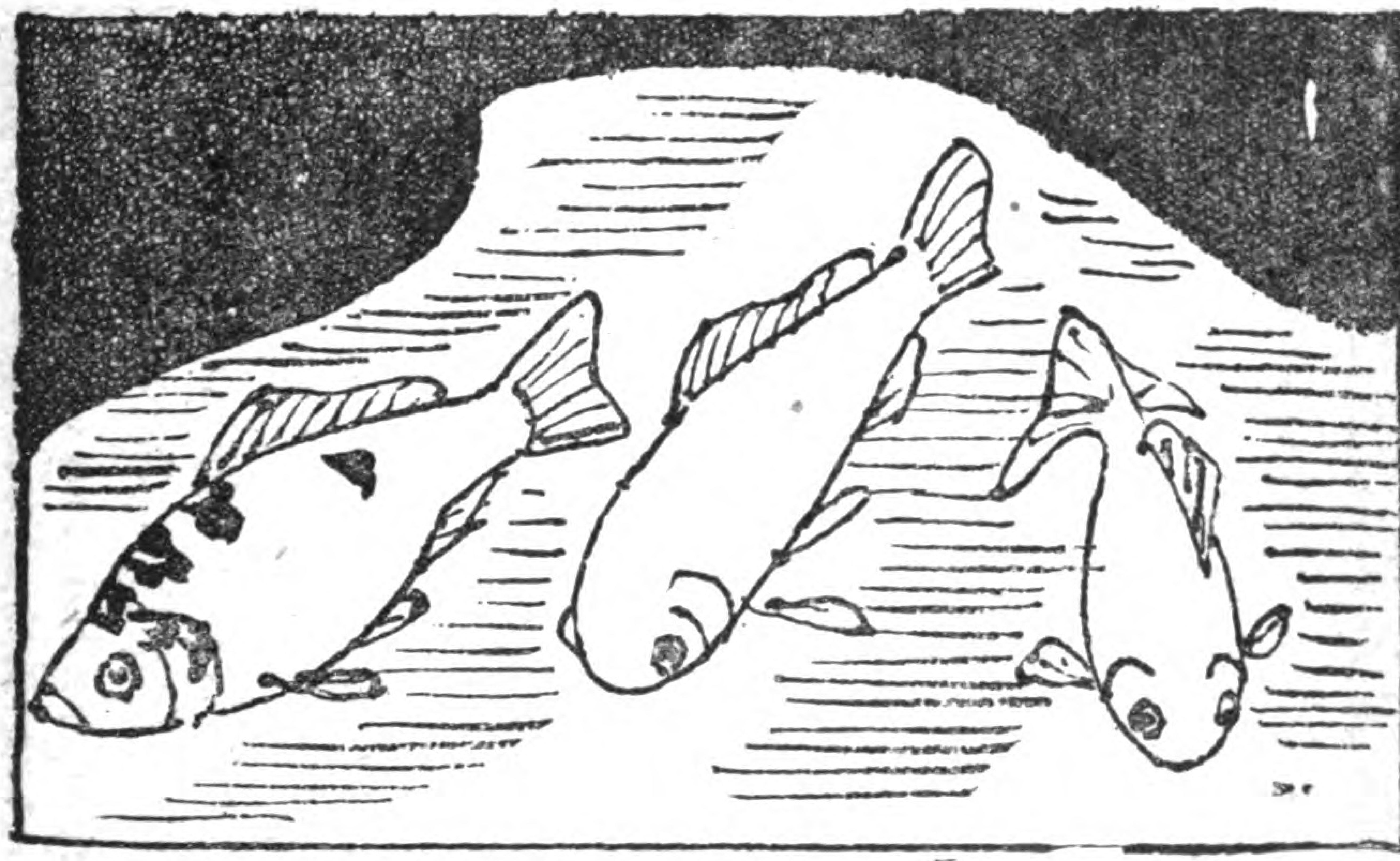
其晩謙作は同じ事をお榮に話した。お榮は大不賛成だつた。お榮は尾道行きの前例から云つても、そんな事は何んにもならないと云つた。そして幾ら今の生活が悪いからといつて、夫婦が別居して、更にいゝ生活に入れる筈がないではないかと云つた。謙作は說明に弱つた。

「第一、尾道行きとは動機が幾らか違ふんですがね。あれは出來ない仕事を無理にやらうとして失敗したが、今度は仕事は第二で自分の精神修養とか健康回服とかいふのが目的なんだから。別居といふと大袈裟に聞こへるけど、何も別に家を持つといふのではなく、保養に旅へ出た位に思つて貰へば丁度いゝんですよ」

「……それで今度は何所へ行くつもり？」

「伯耆の大山へ行かうと思ふんです。先年古市の油屋で一緒になつた鳥取の縣會議員がしきりに自慢してゐた山だ。天台の靈場とかで、寺で泊めて呉れるらしい。今の氣持からいふと、さういふ寺なんか却つていゝかも知れない」

（未完）



死の前二日

田山花袋

『あ、これは好い。小ぢんまりしてゐて好い。こゝなら落附ける……』

親友のAはかう言つてあたりを見廻すやうにした。實際そこは靜かだつた。患者などもさう詰つてゐないやうだし、病室もわるくけばけばしく大きくなかつた。窓の向うがひろいヹランダのやうになつてゐて、昔濱邊であつた名殘らしく松が二三本そこに緑葉を見せてゐるのもあたりの感じを爽かにした。波の音が何處からともなくきこえて來た。

『海はすぐ近いんだね』

そこに腰をかけて、心臟のわるくドキドキしてゐるのをやつと靜め得たといふやうにして、かう言つてMは眼をあげて窓の方を見た。Mはさつきこの一室に入つて來た時、そこに窓近く一つの白い寢臺の据ゑられてあるのがわるく眼に附いたことを思ひ起した。

『その向うが海だよ。そら、向うに大きな建物が出來てゐるだらう』Aは首を斜めに窓の向うをのぞくやうにして、『それが、さつき言つてゐた新しい病院だよ。そら、二三日すると、壁が乾くから、そちらへお引越になつても好うございますツて言つてゐたぢやないか』

『あ、それがその病院ですか。大きな病院ですね？』傍に少し離れて椅子に腰かけてゐたMの妻のお慶もやつぱり始めてそれと知つたといふやうに外を覗いた。

『もとはこゝからすぐ海だつたんだね…？』

『さうかね』

かうMは言つたが、いかにも勞れたといふやうに――東京のK病院から自動車で東京驛へ、それから汽車までの徒歩の難儀だつたことあれほどこの身は衰弱してゐるかといふこと、弟のSが自分も是非ついて行かなければならないのだが、生憎役所に手離されぬ用事があるからと言つてそこまで送つて來てチッキの世話などをして呉れたこと、ことにあの汽車のプラットホオムへのぼつて行く石の階段の途中で、何うにも彼うにものぼれなくなつて、Aに半ば腰を押して貰ふやうにしてやつたと客車の二等室に入つたこと、そこに身を倒したまゝ暫くは何うなることかと思つてゐたこと、もしひよつとしてこのまま何うかなつてしまふのではないかと思つたこと、それからはずつと長く身を横へたまゝで、あたりが込んで來やうが、變な目つきで乘客だちが此方を見やうが、そんなことに氣を兼ねたりする餘裕などはなしに、體を仰向けたまゝ二時間半もこの海岸の病院に向つてやつて來たこと、やつとそのO驛について車を下りたと思ふと、何うしたはづみかぴたりと意氣地なくそこに前のめりに倒れてあたりの人だちを驚かしたこと、それをAや妻のお慶に助けられてやつと起き上つたこと、それほど身は衰弱して了つたこと、それからやつと此處までやつて來て、案じたほどのこともなく兎に角この一室にこの身體が得られたといふこと――それは考へればもつといろいろなことが澤山に澤山に出て來て、二月以上もあけたまゝになつてゐる田舎の寺のことやら、片附けて來たには來たにしても、さう長くゐるつもりはなかつたので、好加減にして放つて來たあの二階の一間のことやら、さういふことも氣になるにはなつたが、しかも今はそれよりも――兎に角、身をそこに、その寢臺の上に休めるといふことの方が急務なのを感じた。

『さうとも――早くやすむ方が好い』

傍からAも言つた。

『それぢや、さうさせて貰はう……』かう言つてMは妻のお慶に手傳はせて、さつき看護婦が二人來て整理して行つた寢臺の上に、その骨と皮とばかりになつた痩せた體を横へた。

『これでまア安心だ……ゆつくり休める……』

Mは顏をAの方に向けながら言つた。

『本當だ……こゝなら大丈夫だ……。あのK院のやうに、何處かに行つて呉れなんて言はんからな！』

『あの病院はちとひどい……』

『本當だな、いくら結核の患者はあつかはないつて言つたつて、追立てるやうにしなくつたつていゝやな……』Aはかう言つたが笑つて、

『しかし、そんなことは何うでも好いや。かうして此處に來て了ひさ

へすれば何でもないや……。こゝなら、その方の設備も十分出來てるんだからな。糖尿の方ばかりでなしに、うまく調節して治療することが出來るからな……。よく言つて置いたよ…』
『何うもありがたう。いろ〳〵世話になつて……本當に、君がやつて來れるんで、何んなに助かるかしれやしない……』
『まア、好い。少し眠る方が好いんぢやないか？　起きてゐてあんまり饒舌つたりしてゐちやあとでいけないんぢやないか？』
『大丈夫……もう大分落附いた。……これで一月か二月か此處にゐれば、あとは何處かで、家でも借りてのんきに保養が出來るやうになるだらうからね……。さうすれば、段々よくなるだらうからな――』
『さうとも――』
　Aは單に調子を合はせるといふやうにして言つた。
　さつき苦しい中でも、汽車が鶴見あたりを通る時をはつきりと知つてゐたことをMはくり返した。その鶴見の本山の內部がはつきりとかれの眼に映つて見えた。つゞいて選擧のことが、宗會議員に選ばれるために烈しい競爭をしたことが、そのためかれと競爭したものが二人まで死んだことが、競爭とか鬪爭とかいふことがそれほど人間の生命を縮めるといふことが、この自分の病氣にもそれがつゞいてゐるといふことが、混雜と一緖になつてかれの頭の中を通つて行つた。それをかれはまたこゝで思ひ出した。さうした活躍した人生の舞臺から止むを得ずにかうして離れて來たことがたまらなく殘念なやうな氣がした。
　看護婦が來て、ちよつと來て下さいと言つてAをつれて行つた。
　Mは何となくさびしい氣がした。その身が今解剖臺に載せられてゐるやうな氣がした。K院にゐた時から、かれはそのことでひそかに煩悶した。何うにもならないことだが煩悶した。自分の病氣の眞相が自分よりも他に握られてゐることで煩悶した。妻の顏にはそれが一番餘計に現はれて見えるやうな氣がしたが、その妻さへいざとなると、それをはつきりとは言はないのだつた。まただれにしても本當のことはわからなかつた。ある時は眞相以上に悲觀した。またある時は眞相以上に樂觀した。時にはまた『何うもしようがないね。人の命のことは？　そんなことまで心配して見たつて何うにもならない……。その點は僕だつてよくわかつてゐるサ。だから、言へるなら、どんなことでも言つて見れる方が好いんだけども……』などと言つた。K院の主任醫はそれでもそのMの態度を賞めて、『やつぱり禪で磨かれただけのことはありますな……やはりちがひますよ』などとAに言つた。しかしその言葉のかげには、恐ろしい死がかくされてあるのAがにはよくわかつた。
　Aが徐かに入つて來た。
　Mはちらりとその顏を見た。さつきこの室に來る前に、向うの室でこゝの院長が診察した。一週に三日しか來ないかれは丁度その時歸らうとしてゐたので、それでちよつとでも好いからと言つて診察した。その結果をMはAの顏から捜さうとしたのであつた。

『院長は歸つた？』
Mは訊いた。
『あ、あゝ、とうに――』
Aの言葉の調子が穩かであつたので、Mはそれでやつといくらか心が靜まつたといふやうに、
『別に何とも言はなかつたかね？』
『別に――』
Aは言葉をわざとわきに外して、
『食物のことをよく頼んで來たよ。糖尿の方もあるが、やつぱりもう少し滋養も取るやうにつて？』
『ありがたう？』
『なアに、そんなに心配しない方が好いよ。心配すると、却つて心臓などにわるく影響するからね……』Aはさうした言葉の中にもわるい病狀が裏切られはしないかといふやうにして言つた。
ドアにノックする音がして、やがて院長の代理をする色の白い男前の好いK學士が入つて來た。診察がまた新たにくり返されるのだつた。表を抱えて一々言ふのをつけてゐる婦長。長いゴム管のついてゐる聽診器、ヤセて岩のやうに骨立つてゐる肋骨。二本竝べて立てた阜斯のやうな脚。それも長い間ではなかつた。熱の話をちよつとしたあとで、Aが新しい病院の方の話を持ち出すと、『お、』さうなさる方が宜しうございます。もう今日あたりからあけても好いつもりだつたんですけども、ちよつと二三日雨が降つたりなんかしましたものですから。あちらは好うございます。設備が皆な整つてゐますから、……』若いK學士は如才なくから言つて、婦長に食物の話などをしたりして、そのまゝそこから出て行つた。
それから暫くしたあとで、Aは時計を出して見てゐたが、『僕はね一晩ぐらゐとまつて行くと好いんだけどもね。明日是非やらなければならない仕事があるから、今度の五時半の汽車で失敬するからね。此處なら大丈夫だから、安心して落附いてゐたまへ。明日はブラザアが來るだらうし、また四五日すれば僕も來て見るからね……』といふ風に言ひ出した。

『波の音がよくきこえるな』
Mは顏を窓の方に向けながら、その靜かな、リズムを打つて寄せて來るやうな波の音に耳を傾けた。夜はもはや更けてゐた。廿燭の電燈がカバアがしてあるので、さう大して明るくもなく、ぼんやりとその一室を照してゐた。妻のお腰はその向う側のところに毛布をかけて横になつてゐた。
『すぐ近いんですね』
『そら、さ、さツと岸に寄せて來る音まで聞えてゐるぢやないか……』

「本當ね」

お慶はさう言つたが、「やすむに邪魔になりはしない？」

「いや、それほどでもない……。しかし、前の病院が出來ない中は、この家は随分喧しかつたらうな？」

「さうね」

かう言つたきりだつた。また長い長い沈默がつゞいた。波は寄せては引き、また引いては寄せた。風もかなりあるらしかつた。その癖、さつきMがちよつと首を擧げて外を見た時には、星がキラキラと他界からでもあるやうにきらめいてゐた。隣は明いてゐるが、向うの病室にはかなりに重い患者――それも九州あたりから來てゐて、つき添もなければ看護婦も頼まないといふやうな二十一二の青年がゐて、そのせいきをせく音が、かなりに苦しさうにこつちまできこえて來た。お慶はさつき看護婦から聞いて來て、「よくまアひとりでゐられますね……」などと言つて話した。それをまたMはその夜の靜かな空氣の中で思ひ出した。

（俺の病氣は結核だツていふが、さういふ筈はない……。書生の時分から、さういふ病氣は慢性的にあつたのだが、伊勢に行つた時だつて、寢汗がよく出て、にんにくなどを食つた。牛乳もそのためない金を割いて飲んだ……。結核なら、その時分何うにかなつて了ふ筈だ。それが何うにもならずに、今になつて結核だなんて……）さう思ふと、その時分の貧しい書生の時分のことがいろ／＼胸に浮んで來た。

その時分かれはAと一緒に鞋ばきか何かで、この海岸を辿つたことがあつた。國府津で一夜泊つた。さう言へばこの波だ。あの時枕の上に聞いたのはこの波だ。かう思ふと、その時ずつとこのOの海岸を熱海まで歩いて行つたことが、吉濱あたりで晝飯を食つたらわづか十錢だつたのにうまい刺身がついたことが、熱海のあの間歇泉のすぐ傍の宿屋の二階で哲學上の議論をしたりして、しまひには兩方で面白くなくなつて早く寢て了うと、丁度その日が大晦日で、夜おそくなつてから下からそばを女中が持つて上つて來たので、喧嘩したのなどは何處かへやつて、慌てゝ二人とも起きて來てそれを食つたことなどがはつきりとそこに思ひ出されて來た。（不思議なもんだなア、人生といふものは――。それだのに、俺は今こゝに寢てゐる。この病氣がよくなつたところで、さう長く生きてはゐられない。Aだつて、達者には達者だが、あんなに白頭になつてゐる……。不思議だ。本當に不思議だ……）

かれはじつとそのぼんやりとした光澤のない電燈を見詰めた。お慶はいつか寢入つたと見えて、小さな鼾が微かにきこえて、此方を向いた顔がそこに微かに見えた。

かれはいつもに似合はず頭が非常に冴えて來たやうな氣がした。この世界の外にもつともつと大きなひろい世界があつて、それが刻々にかれに迫つて來るやうな氣がした。波の音が頻りにした。

「昨夜は寢られなくつて困つた。お前はよく寢てたな……」

「さうでしたか」

Mは再びそこに今までの世界を發見したやうな氣がした。松の綠葉がそこにある。ヱランダには明るい日影があたつてゐる。何處かで大工が釘を打ちつけてゐる音がする。漁師の子供等の泣きわめいてゐる聲がする。かれはまだ二日にもならない中に妻のお蔭からいろ〳〵とそこらあたりのことを聞いた。病院の中のことを、病室にゐる患者たちのことを、向うの廊下は三等室で、一室に患者が三人もゐて、寢てゐる女のあたまが見えてゐることを。廊下のこつちの方には食堂があつて、そこが腰かけになつてゐて、味噌汁の鍋などが出てゐるといふことを。今朝は玉子に味噌汁にそれに煮豆もついてゐたといふことを。病院から出たところはさう大して賑かではないけれども、それから少し行くと、昔の東海道の面影がまだいくらか殘つてゐて、そば屋でも鰻屋でも大きなのがあるといふことを。旅籠屋なども二軒も三軒もあるといふことを。ことに羨しいのは、海岸だから魚が多く、あれは賣るのではあるまいけれど、大きな蒲鉾屋の前のところにいろいろな小さな魚が一杯樽に入れられて置いてあつたといふことを。それから裏の方は漁師の町になつてゐて、狹い通りまでは入つて行つては見なかつたけれども何でも裏店長屋のやうに混雜と小さな家がつゞいてゐるといふことを。かれは仰向けに寢ながらいろいろとそのあたりのさまを眼に浮べた。行つて見たいと思つた。行けないことはないと思つた。K院にゐた時にも、その中少しでも好くなつたら？と思ひながらも、たうとう外に出て見ることが出來なかつた。《行つて見やうと思へば行けるんだがなア！ わけはないのだがなア！》かう思つたかれは、昨日廊下に出てゐるところを醫者に見られて、餘り無理をなさらない方が好い、ひよつとかして心臟にでもさわるやうなことがあつてはいけないからと言はれたことを思ひ起してゐた。

「海にはまだ行つて見ないかね？」

Mは訊いた。

「まだ行つて見ません。何處から入つて行くんだか、通りにはそんなところはちよつと見當らないんですもの……」

「通りを左に入りさへすれば、すぐだらうがな？」

「それはさうでせうけども、ちよつとわからない……」

「それぢや、この裏から行けるだらう？」

「漁師の家が立込んでゐて？」

「やつぱり駄目か？」

海など見たいとはちつとも思つてゐないらしい妻の沒趣味にいくらか愛憎が盡きたといふやうにして、Mは默つて仰向いて眼を閉つて了つた。よくもこれで通して來たとは思はなかつたけれども、何となくかうして妻と今まで暮して來たことがさびしいやうな氣がした。自分だつて、もつと趣味の高い、學問のある、美しい相手を持てないことはなかつた。さういふ機會も二度や三度はあつた。それをも捨てゝ田舍

の寺に入つた時のことなどがまた暫しの間頭に浮んで見えた。その時分には妻に滿足が出來ずに、いつそのことその生活を打壞して了はふかと何遍も思つたりしたことなどをくり返した。しかし辛抱强いかれはたうとうそれをこらへてこゝまでやつて來た。否、かれは妻に限らず、あらゆることをこれで滿足しなければならないことを考へた時何となく佗しいくらい心持になつた。もうかうなつては、折角宗會議員まで出て行つた自分の世間の位置もあきらめて了はなければならなかつた。自分の一生もこれ以上もう何うにもなりさうにもなかつた。それもこれで滿足しなければならなかつた。かれはがつかりしたやうな氣持になつて、天井にしみ出してゐる雨漏りのあとをじつと見詰めた。

しかしかれはじきさうした暗い、穽に落ちたやうな考へから浮び上つて來ることが出來た。それはいくら考へて見たところで效のないことだつた。人間は皆なてんでにその運を持つて來てゐる。それを覗いて見たところで致方がない。上を見れば限りはないが、下を見てもやつぱりその通りだ。かれよりわるい運のものはいくらもある……。つまらないことを考へたものだ。宗教家にも似合はないことを考へたものだ……。それよりもこの病氣を治ほすことの方が何んなに急務だか知れない……。さうだ、この病氣を治すことが暗い穽のやうな心の境から浮び上つて來る唯一の途だ。と、子供の時分に師匠から教つた鼠がその蔓をさへ食ひ切らうとしてゐる譬喩品の一條がはつきりとそこに浮んで來た。

何うかすると、そこに向うむきになつて坐つてゐる妻のお臀が非常に可哀相に思はれることがあつた。單純な無表情な顏。夫が病んでゐてもそれほど深く苦勞にも思つてゐないやうな顏。それでも思ひ做しか何處かさびしさうな横顏。それは娘も力にはなつて呉れるだらう。婿も邪魔にはしないだらう。しかしいくら一人娘と言へ、あれはもう他所へやつたものである。あそこに行つて世話になるといふわけには行くまい。しかし孝海だつて力にならないことはない。まさか師匠の妻をおろそかにはすまい……。それも一文も金も持つてゐないといふのなら、しまひには持てあつかはれるかも知れないが、兎に角多少は持つてゐる。十年や十五年はなし崩しに居食しても食へるくらゐの金は持つてゐる……。MはK院にゐる時分、『本當に、誰にもだまされずに、しつかりそれを持つてゐなくつては駄目だぞ。常子にだつてその通帳なんか見せちや駄目だぞ。金のことは親子だつて爭ひのもとになるんだから……』かう言つて半ば戒めながらまた半ばそれを樂みにしながら、その銀行の通帳の金額のところを何遍も何遍も開けたり閉ぢたりして眺めたことをはつきりとそこに思ひ浮べた。兎に角妻のためにそれだけの金を苦勞して殘してやつたといふことは、自分の仕事の中でもかなりに大きなものとして滿足されるやうな

氣がした。かれはいろいろと骨折つて——些細なことにも注意して、やうやうのことで兎に角それだけの金にしたことをくり返した。そしでそれと同時に、兎に角自分も女のために働いたものであるといふことに滿足した。

『お前、何か甘いものでも買つて來たら何うだ？』

何うかすると、Mはこんなことを妻のお慶に言つた。

『私、澤山……』

『でも、俺が食ひたいんだ……』

『ダメですよ。甘いものなんか食べちや……』

『でも、此處の醫者は、少しは食つても好いつて言つたぜ！』

『だつて……』

こゝの醫者のさう言ふのは、いくらか匙を投げた形であるとも言へなかつた。Mは妻のお慶が何うかすると眼の縁を赤くしてゐるのをじつと見詰めた。

ある時はお慶は外から入つて來て、『何うしても、こつちの方がぐつと暖かですね。もう、停車場の向うの花なんか滿開だつて言つてゐましたよ』

『さうかな』

『こゝをちよつと向うに出たところにある大きな櫻なんか、もうすつかり咲いてゐますからね』

『さうかな……』Mはその日は具合がわるく、いつもなら午前に一度や二度起き返るのだが、それも出來ずに、ぐたりとだるさうに體を横にしてゐた。

『でも、こゝでも、花見になんか行くところがあるのかな？』

Mは昔の花見を思ひ出しでもするやうにして訊いた。

『何でも山の上の燒場へ行くところに、かなりに花があつて見に行くものがあるやうなことを、看護婦が言つてゐましたがねえ？』

『燒場つて？ 城あとのある方ぢやないかな？』

『何でも、さうかも知れません……。城あとのある方とは違ふのださうですけどもね……。かなりに大きな櫻があるなんて、看護婦が言つてゐましたよ……。休むやうな茶屋も一二軒あるんですつて……？』

『行つて見たいな』

『……』

お慶は何か言はうとしたが、言はずに、何か仕忘れた用事でも思ひ出したとでも言ふやうに、そのまゝドアを明けて廊下の方へと出て行つた。暫くの間、Mはその燒場に近い花のある場所——谷のやうにでもなつてゐるか、それとも山の半腹のやうにでもなつてゐるか、兎に角小さな旗などの風に翻つてゐる、ビイルなどを人の飲んでゐる、赤い前垂をした色白の女などのそこらに出てゐる一角の土地をそれとなく頭に浮べた。

やつぱり室のさびしさが感じられた。お慶は別に吩附けられたわけでもなかつたけれども、K病院に置いて來て了つたダリヤの鉢を思ひ出して、それよりは小さいけれども、丁度そこに、通りかゝつたところに、さうした鉢が二三並べてあつたので、その一つを買つて來て、それをヱランダの向うの窓の明いてるところへと置いた。

こつちに顏を向けてゐたMはにこにこしながらそれを眺めた。

『少し貧弱だな』

『でもね……』

お慶も笑つて、『あそこにありましたからね……』

『もつと大きいのがなかつたかね！』

『ありましたけども……何うかと思つて？』

『まア、それでも好い……ないよりは好い……』

Mは眺めた。

そこにドアが明いて、役所につとめてゐる弟のSが背廣姿で入つて來た。午前の日影で明るくなつてゐるその室の空氣に似合はず、そのSの顏はわるく憂欝に蒼白く見えた。それもその筈だ。かれはその長い廊下を歩いて此方へと來る前に、診察室の隣りの應接間で、こゝの主任醫のその若い好い男の醫學士と三十分ほど向ひ合つて、そのMの容體をきいて來たのだつた。醫學士は決して希望が持てるやうなことを言はなかつた。K病院のOさんからは、もつと輕いやうなお手紙でしたけれども、決して樂觀の出來る容體ではないといふ口吻さへもらした。『何うも衰弱が隨分ひどいですから、うまくそれが少しづつでも恢復するやうだと好いと思つてゐるのですが……』などとも言つた。しかし何うにもならなかつた。かれは深い憂慮に閉されながらその長い廊下を歩いて來てドアを明けた。

しかし患者はさうわるくは見えなかつた。にこにこしてゐた。

『あ、Sが來た……。今日は、日曜だね？』

この頃ではもうその日も知らないといふやうな調子で言つた。

『もつと早く來やうと思つたんですけどもね……。やつぱり日曜の他は、何うにもならなくつてね』

『それはさうでせうとも……』

お慶は傍から言つた。

『今日も少し役所に用があつて、日曜も潰れさうになつたのを、やつと賴んでやつて來たんです……』

『やつぱり忙しいからな』

『ひまになるやうではそれこそ困るし……』

『さうともな……』

こんな話が暫しの間續いた。そのダリヤの赤い花の鉢に目をとめては、『さうかえ？　やつぱりあゝいふものでも、寢てゐるものには慰めになるんだな』などと言つたりした。向うの新しい病院の話なども出た。

ふとMは急にあることを思ひ出したといふやうに、

『さう言へば、さつき新橋から手紙が來たよ』
『新橋ッて？』
『そら、お蔦のところサ』
『何うして知つてゐたらう？』
『Aが行つたらしいんだよ』
『あ、さう……』
兄の手からその新橋のさる待合のお上になつてゐるお蔦の手紙を受取つて、それを讀んで、『あ、さうか。二三日前に、Aさんが行つたんですね？』
『Aは遊ぶのかね？　此頃でも——』
『それはあそぶでせう……』
Sは笑つた。
『それからあの女は何うしたらう？　もう、丸で關係はなくなつたのかしら？』
『さア、何うですかな？』
『今まで話さなかつたけれど、K病院に見舞に來て呉れたよ』
『あの女の人が……？』
『もうすつかり昔のことは別にしてなんて言つてゐたがね。本當にもう關係がなくなつてゐるのかしら？』
『そいつは私にもわからない……』Sは笑ひながら言つた。
さつきそのお蔦の手紙を受取つた時にも、Aに就いていろいろに考へたことをMは思ひ起した。若い時から片時も離れずに放蕩もすれば喧嘩もしつゝ一緒にやつて來た身であつたことなどを悲しい心持でくり返した。
『新橋には行つたことはない？』
『僕？　暫く逢はない。震災後一度も逢はない……。』
『商賣は繁昌してゐるんだらう？』
『さうらしいね』
學生時分に、綺麗なお酌姿でそのお蔦がよく伯母と一緒に下谷の家にやつて來たことなどをMは思ひ出してゐた。
またあとにもどつて、
『Aはあそこにもちよいちよい行くのかしら？』
『さあ……』Sは考へて、『さう度々行くわけでもないんでせう？』
『Aは元氣だな！　この頃ことにさういふ氣がする！』自分はずつと離れて來て了つた、といふよりも、放蕩も何も出來ずに、かうした穽見たいなところに陷ちて了つたことをMは繰返して溜息をついた。
弟のSはつとめて病人を慰める氣で午後夕方の汽車の時間までそこにゐた。その間にかれは向うの新築の病院にも行つて見た。『大したもんだな。あれなら極樂見たいもんだ。その代り間代も高いだらうけども……』などとSは話した。

『海は見えるだらう？』

Mは眼をかゞやかすやうにした。

『見えるどころぢやない……。三階なんかに行くと、何とも言へないですよ……。箱根でも、天城でも一目ですから』

『ふむ、さうだらうな！　早速移らうなア、お慶！』

Mは顔を妻の方に向けた。しかもお慶は默つたまゝ別にうなづきもしないので、『何アに、少しくらゐ間代が高くたつて、構ひやしないよ。かういふ時に遣ふために貯めたんだから――』

『何のぐらゐするのかな？　こゝより三割や四割は高いに違ひないな』

Sは考へるやうにして言つて、

『けれど、好いには好いな。金さへ少し出せばあゝいふところに入れるんだからな。……え、洋室ばかりぢやないですとも……。日本間などの設備は何とも言へない！』

『そんなに好いですか』

お慶が言つた。

『嫂さん、まだ一度も行つたことはないんですか？　そいつは話せないな。私はもう行つて見たんだと思つてゐた！　それは本當に好いですよ。少しくらゐの病氣だつたら、あゝいふところに入つて、のんきに本でも讀んでゐたら好いだらうと思ひましたよ。何しろ新式だ！』

『だから、此間から言つてゐるんだけどもね……。醫者だつて、いつでもお引越になつても差支ないつて言つてゐるんだから……』Mにしては今からでもすぐにそこへ行きたいやうな氣がするのだつた。

Mはこゝに來てから毎夜のやうに波の音をきいて海にあこがれてゐる話などをそこに持出した。後にはあまり話したせいかせきが強く出て、痰壺をそこに持つて行かなければならなくなつた。

Sが歸る時には、Mは疲れて眠つてゐたが、それでもちよつと言つて、寢臺の傍に行つて、小聲で囁くと、はつとしたやうにして眼を明いて、『あ、もう歸るかえ？　それぢやまた來て呉れ！　今度は向うに引越してゐるから……』と言つて、そしてまたうと〳〵と眠つて行つた。夕暮の空氣がそれとなくあたりをこめて、波の音がはつきりとあたりにきこえた。Sがドアを閉めて、長い廊下を一歩々々歩いて行く音もいつか向うへ向うへと消えて行つた。

あくる日もまたそのあくる日も雨だつた。

『負うてどもいらつしやるなら、差支へはないでせう』午前の診察に來た時それとなく聞いて見ると、その若い醫學士がさう言ふので、それでいよいよ向うの新築へと行つて見ることになつた。『大丈夫だ……』などゝ言つて、寢臺を下りて、始めはいかにも元氣さうに、また嬉しさうに、その廊下を一歩々々歩いて行つたが、何かちよつとしたものがあつたのに忽ち躓いて、べたりと意氣地なく蹲んで了つたの

で、それからはお慶がそれを背に負うこととなつた。

かれ等は裏口から出て行つた。そこには小さな門があつた。かれ等はそこの踏石で草履を下駄にはきかへなければならなかつた。お慶は何方かと言へば丈の高い體格の大きい方なので、瘦せて小さくなつたMが背にぴたりとくつつくやうになつてゐるのが、それと午前の明るい空氣の中に浮び出すやうになつて見えてゐた。

向うの大きなドアを押して此方に出て來たひとりの看護婦は、おもしろいものを見たといふやうにしてじつと見てゐたが、『大丈夫ですか……お危くはありませんか？』と言つて、やがてその傍へと寄つて來た。

『ありがたう』

お慶は別に賴まうともしなかつた。

大きなドアを押して、玄關からひろい廊下へと行つた。

『ふむ、これは大きい。立派なものだな！』

負はれながらMはあたりを見廻すやうにして言つた。

丁度好い鹽梅に、そこに、よくかれ等の世話をして吳れる若い看護婦がやつて來た。そして『御案内いたしませう』と言つて先に立つた。

一つ一つ病室が見て行かれた。立派なクッションの椅子。白い寢臺。いろいろのものが置かれるやうになつてゐる棚。つきそひのゐるために出來てゐる三疊の疊。始めて海の遠目に光るのを眼にした時には、『あ、海が見える！』さう言つてMは私はゆつくりと見たいやうな態度を示したが、海ならば三階にあがれば、いくらでも見えると言つて、案內の看護婦はぐんぐんその病室をそれからそれへと案內して行つた。

『あ、これが食堂！　これは好い』

そこに來た時には、Mはさう言つてちよつとなりとそこで下りて見たいやうな樣子を見せた。

で、かれは椅子の上に下されて、その大きな卓につかまつて辛うじて立つた。かれは喜ばしさうに子供のやうに笑つた。『好いですね。理想的で好いですね……』お世辭ではなしに、本當にかれはさう思つて言つた。

『大丈夫だ……かういふ平らなところなら步ける！』

こんなことをも言つて、妻のお慶に手を引かれるやうにして、そろそろとその廊下を步いた。

一番小さな西のはづれの室に行つた時、Mは妻のお慶に囁いた。

『こゝいらなら、そんなに高いこともあるまい――』

『さうですね』

お慶にしては、此際金は成るたけ遣ひたくなかつた。いつまでも入院してゐなければならないかもわからないのに、いくらよくてもさう間代の高いところに入るのは何となく不贊成だつた。此頃Mがわるく氣が大きくなつてゐるのをお慶はいくらか不思議にさへした。

Mは案内の看護婦を振返るやうにして、その時代を訊いて見たりした。しかしたしかなことはその看護婦にもわからなかつた。

二階にのぼる時にも、三階にのぼる時にも、Mはその妻の背の上に、またもその小さな痩せこけた身を見出さなければならなかつた。二階の病室は下階の病室よりも更に一層かれの心を惹いた。眞中にあるヹランダに行つてそこであたりを見わたした時には、かれは苦しさうにして遠海の日にかゞやくのを見た。また岸を縁どつて磯馴松の並んでゐるのを見た。山が濃く青くあたりに聳えてゐるのを見た。そしてそれらのものが今までその身の親しんだり馴れたりして來たものとは丸で別なものであるやうな氣がした。波の音も今まできいてゐたものとは甚だしく違つてゐるやうな氣がした。

そのヹランダからは、その大きな病院の正面の庭が、今しも頻りに多勢の植木屋の手でつくられてゐるのがそれを指さゝれて下に見えた。石がそこに置かれてある。泉水が掘られてある。そのたゝきが一生懸命でつくられてある。と思ふと、一方では檜の木の三間くらゐのが並べて一本一本植えてゐる。大きな蘇鐵などは既にそこに栽られてゐる。砂利を運んで來てそこにそれを敷いてゐるものなども見える。

Mはもう一度妻のお[illegible]の背の上から下されて、暖かい午後の日影に照されながら、ぢつとめづらしさうにそれを見詰めた。やつぱり今まで見馴れてゐたものではないやうな氣がした。

「あゝ暖かで好いな……。もう花が咲くわけだな！」

看護婦が持つて來て呉れた椅子に腰を下しながら、Mはあたりを見廻すやうにして言つた

武田信玄

露伴學人

古の事でも今の事でも虚談には面白いのが多くて、おもしろいのには虚談が多い。眞實の事は虚妄の談よりおもしろかるべきであるが、少くとも虚談の製造者に瞞着され了して、そしてそれを面白いと思ふやうな人に取つては、虚談ほど興味が有つて、精彩があつて、氣韻生動して、且又權威を有するところの、有難いものは無いのである。虚談の生ずるのは、誤訛も有り、誇張も有り、修飾も有り、又故意の捏造も有り、無意の演繹も有り、他を排し我を立てんとするよりも計謀的宣傳も有り、其他種々の原因よりして生ずるので有るが、虚談でも何でも構はないから、自分に面白いと思はるゝものを面白いとして嬉しがつて信受する人が世間には甚だ多いからして、虚談は何時の世にも幅を利かして、終には實際の方が却つて虚談に壓せらるゝやうになるのである。ヘリオトロープの寶石、隱簑、隱笠などの實存を信ずるのは、多くの人に取つては面白いのである。有ることの有るといふ直接證據は容易に提出し得るが、無いことの無いといふ直接證據は無い。無いことを無いと證據立てようとすれば、有るといふ證據を一々粉碎し盡して否定しきるよりほかはない。そんな事が出來る譯のものでは無いから、一度虚談が何人かによつて成形されると、それを無いものにすることは中々容易で無い。そこへもつて來て、世人の多くは虚談でも面白ければ面白いものに執着を持つから、ヘリオトロープの黑石や隱簑や隱笠の神力を肯定する爲には、自分が背中に物を捲着されたり、頭顱を撲たれたりしても、それでも忍耐してゐるものである。をかしいにも何にも、斯程をかしいことは無いが、それでお互に噴飯もせずに居るところは、おもしろいと云へば、これもおもしろいには相違ない。

釋迦でも老子でも基督でも、蓋し今の人々が釋迦であり老子で有り基督であると思つてゐるものは、恐らくは虚談の集塊岩で有つて、ほんとの釋迦や老子や基督は今の人々が想つてゐるやうなものでは無いかも知れぬ。文獻上に精確に證據立てられるところでは、老子の如きは、後世になるだけ種々の虚談が塗附けられたり、鍍金されたり、彫刻されたりして、そして立派な太上老君となり、道教の祖師となり、

仙人の親分となり、終には其の使つてゐた小童や牛までが大魔力を有するものとなつて、下界で勝手な事をするやうに担上げられるに致つたのである。

武田信玄、上杉謙信、何といふ立派な面白い取組だらう。川中島の大戰、長光の陣太刀、鐵團扇、謙信公は「せがれめ、せがれめ」と云つて信玄を小伜扱ひにして斬つてかゝる。信玄公は天下を心に掛ける程の者が自ら佩刀を揮ふやうなことではならぬと、危急の場合にも刀を拔かずに、床几に腰を据ゑたまゝ軍配團扇で謙信をあしらつた。イヤ實におもしろい。すばらしい。素敵だ。どつちが勝つたのだ、謙信が勝つた、信玄が勝つた。どつちが偉いのだ、信玄が偉い、謙信が偉い。コイツ甲州猿め、降參しろ、と一方が言へば、何だ越後の角兵衛獅子め、其のでんぐり返るのが車懸りの陣法か、と一方が冷笑ふ。講釋師のたゝき立てた扇の響きが勇ましく今に傳はつて、四百年近くも過ぎて終つた龍闘虎爭の餘饒が今でもイキリ立たうといふのだから、信玄贔屓も謙信好きも、互に其の誰からとも無く聞いて覺えてゐる面白い談を大切に信受し愛惜して捨てないで、啀み合ふものさへある位である。最初が何年も勝負つかずで相爭つたのだから、末に至つても勝負の決まらうやうは無い。が、若しも眞の事實だけだつたら、これほどにもなるまいが、信玄謙信の兩雄が孰れも世を逝つてから、德川氏の太平の無事の代になつた時、信玄方の將士の末孫、謙信方の將士の末孫等が、互に自分等の祖先等、ひいては祖先等が仕へた英主に愛着を有つて、互に負けず劣らずに、父祖代に語り傳へ聞き傳へた事蹟を、訛誤も誇張も修飾も担造も演繹も論說も宣傳も其他の種々のものをも含有させ傍題にして、云ひ張つたが爲に、それからそれへと傳へ擴めて、終に天文弘治永祿のほんとの戰と、德川期の其の實際の影法師の戰と、二度の長い戰とが重なつて、いよ〳〵兩雄は偉いものになり、川中島は凄まじい戰になつたのでもあらう。影法師の戰の方は、兵粮も要らぬし、天候時候の束縛も被らないから、隨分勝手次第に戰はれたことゝ想像され、うその鼬ごつこ鼠ごつこも勝手次第に增長しあつたことゝ想像される。

といふものは、甲州武士は武田氏滅亡後に德川氏に屬したものが少くなかつた。これは何も家康公が勝賴の首級に對して禮を以て待つたから、それで甲州武士の心を得たなどゝいふ傳說に本づくまでも無く、家康公が據つた地方の關係上、自然と德川氏に招致されて德川氏に屬したのである。北條氏が亡びて、北條氏麾下の士が多く德川氏に屬したのも同じ事情である。德川氏麾下の働き手は、三遠駿の士が一分、甲州の士が一分、小田原の士が一分といふ譯で、これは皆自然の地理上の關係から出たことであり、家柄力量功績等、近處ならば自然と知られ、遠方ならば知られない譯だから、上方大名や中國西國の大名へは、たとへそれが英主であつても態々これに屬しに行くものはない道理で、召抱へる方でも素性も心術も知れたものなら喜んでも召抱へるべき譯であるのに、まして家康公は早くから海道の名將と謠はれ

た方であるから、甲州武士が主家沒落の後、自然に心を寄し身を寄せた譯である。それで此等の士を用ゐ、武田家で教育された其の好果を利して、家康公は愈ゝ其の英雄的本領を發揮されたのである。三河武士と甲州武士とは互に睨み合ひ競ひ合つて、德川氏の爲に勳功を立てたのである。明治の前でも德川氏の旗下と稱したものゝ中には、甲州武士の系は甚だ少くないのであつて、それは著明の事實である。武田信玄はもとより天稟の武將の才で、信玄が出てから武田氏の弓矢は甚だ強くなり、其の訓練や節制や精神教育は殆んど完全に近いものになつた。で、これと爭つた德川氏でも、北條氏でも、味方が原、三まぜ峠等、いづれも散々に黶を附けられてゐるのであるし、上杉氏のほかには當時に於て甲州勢を正面の敵とするのを憚らないものは無かつたのである。此の甲州武士を家康公が招致したのは至當の事であつて、此等の者が武邊沙汰に後れを取るまいの意氣から德川氏の爲に材を伸べ勇を奮つて力を致したのは決して少くない。剛強誠實の三河武士と練達勇猛の甲州武士があつたればこそ、後年家康公が天下を掌中にするに至つたのである。德川氏の軍法にも、隨つて甲州流の節度の幾分採用されたらうことは、如何に謙虚に觀察しても、必ず存すべきことである。いや然樣で無くとも、隣家に碁の強い者が有つてこれと戰ふと、度ゝ敗績しながらも、何時となく其の手口を覺えて、敗績を我が師として自然に強くなる。家康公の信玄に於ける場合は丁度それと同じである。で家康公の大功成つて、天下太平となつた後、其前から存した兵法沙汰軍學沙汰、城取繩張、斥候間諜、進退駈引、そんな樣々の事柄が論議され、實戰の所有者たる古老が凋落するに附けて、所謂軍學なるものが却つて尊ばるゝやうになつてくる折柄、信玄公を擔ぐ甲州風の軍陣の談が世間に取交されたらうことは明らかなことである。又他の一方には歷史の同異が起つて來て、色ゝの談が取交される。又有力な一因には、往事の記錄が整理され出す、即ち修史の事がはじまる。そこで德川氏の敵では有つたが、師でも有つたやうな信玄が、德川氏の敵の手足では有つたが、後には股肱にもなつた甲州武士等によつて樣々に語られ、それから又德川氏には屈せられたが、德川氏をも敵とするを敢てして、謙信以來の威武に誇つてゐる上杉家の者等の信玄に對する反抗的餘焰も燃えたことで有らう。それこれで永坂釣閑齋跡部大炊介さへ居なければ武田家は鐵の如く強かるべきやうに書かれた甲陽軍鑑も出れば、信玄の頭の鉢を伏鉦でも敲くやうに謙信が敲いたよしを記した虎狂進狀のやうなものも出るに至つたのであらう。又、甲州流軍學も出來上れば、謙信流軍學も出來上つたのであらう。

ことに軍學沙汰は信玄の旗下五人衆の一人に山本勘助入道道鬼齋といふ逸物があつて、これが左めつかち右びつこ、身の丈矮く色黑く、容貌醜陋にして、信玄でさへ其の男振の餘りなのに呆れたが、これはどの見苦しい男で而も名を得たるは器量想ひはかるべしと感心し、且は又信玄が賴み切つたる老臣板垣駿河守信方をして推擧せしめた男で

あつた。此の勘助は十二の時、三州牛窪の牧野新三郎成定の被官の大林勘左衛門といふものゝ養子となつたが、父は駿州富士郡の山本村の八幡宮の神主吉野浄雲入道貞倫の子で今川家に仕へて士となり山本氏を稱した彈正貞久といふものであつたといふ。勘助は貞久の四男だつたので、源助貞幸と云つた時分養子にやられて、勘左衛門の養子だから勘助となつたのだが、年二十の頃に故有つて養家を辭して、諸國遍歴と出かけたといふが、失敬では有るが察するところ上杉謙信に斬込まれても驚かぬ信玄でさへ驚いた男振だつたから、勘左衛門に娘が有つたとすれば、恐れ入つて引退つたからの事でも有らう。然し勘助は幸に失戀して神經衰弱になるやうな男では無く、心掛のたしかなもので有つたから、伯父山本帶刀左衛門成氏に兵法を學び、又同國寺部の鈴木日向守重辰にも從ひ學び、其上諸國編歴三十餘年といふから、隨分長い間の放浪生活をしたもので、放浪生活も此位續ければ寂びが付いておもしろからう。五體不具になつたのも、此の放浪中に兵法の仕合から得た不幸だつたともいふ。母は今川家の臣の庵原安房守忠胤の妹であつたから、其縁によつて庵原に食客となつてゐる中、信玄に仕へたのだが、其時に天文十二年、年五十二だとある。軍鑑には手も不自由な人とあるが、それでも信玄の謀將として、所謂甲州流の軍學には勘助が必ず引合に出されるほどで、永祿四年九月十日、河中島の大戰に、其の不自由な身の六十九歳の老軀を馳驅奔突させた擧句、大小八十六ケ處の創を負ふて、悪戰苦闘し、河中島八幡原の草の中に魂魄をたゝきつけて戰死したところは、實に痛快壯快の好男子である。勘助は蓋し初から兵法軍學を以て自ら立つたのであらう。勘助の弟山本帶刀成行といふものも兵學を得て居たのであらう、永祿十一年三月遠州濱松の城を徳川家康の爲に修築したと云はれてゐる。駿州久能山に恐ろしい深い井があるが、俗傳に勘助が掘つたのだと云つてゐる。兎に角此の勘助が甲州の兵事に何程の貢献をしたかは不明だが、かゝる男の信玄麾下に居たことは、後の甲州流軍學と言ふものに所以無きを思はしめぬ一楔子になつてゐる。勘助が放浪中に諸國諸家の軍事政事の得失を研究して居つたので、用ゐらるゝに及んで其の善しとするところを信玄に獻策して用ゐしめたことは、蓋し有るべき事柄で有る。

世の甲州流軍學と言ふものは、小幡勘兵衛景憲を祖とする。景憲は山本勘助を宗とする。然し景憲は勘助に直接師事したのでも何でも無い。勘兵衛景憲は甲州の宿將小幡虎盛の後で、昌盛の二男だが、其の生れたのは元龜三年だから、僅に十一歳の時に武田勝頼は亡びたのである。で、幼時から徳川氏に仕へて、關ケ原、大阪の前役にも出陣したが、大坂との和談が一旦成就した時に、大野治房の招に應じて、大阪方へ入り、板倉伊賀守勝重や松平隱岐守定行と謀し合せて、關東方の爲にスパイとなつたのである。かゝる男が大阪に居たのであるから、大阪の様子は手に取る如く關東に知れ、隨つて容易に亡ぼされた譯で、大阪亡びて後は御使番となつたのである。此の勘兵衛も一ト通

りの者では無い、自分の所領の三分の一を横上主水助といふ者、他の三分の一を杉山入道といふ者に與へて、自己は殘れる三分の一を得るに甘んじたといふ。斯様いふ男で、そして甲州の士早川三左衛門、廣瀬郷左衛門、辻彌兵衛、小宮山八右衛門、仁科肥前守、辻甚内等に就いて武田家の軍法を問ひ、又、岡本半助、赤澤太郎右衛門、岩田民部等にも學び、又甲州北郡に隱居してゐた岡本實貞入道をも招いで益を請うたりして、終に甲州流軍學を以て世に鳴り、列侯諸士の其門に入るもの二千餘人に及んだといふことである。勘兵衛の弟子北條安房守氏長は北條流の祖となり、氏家の弟子山鹿甚五左衛門義矩は山鹿流を編立てたのだから、名高い山鹿素行も景憲の孫弟子の譯である。信玄及び武田家の事を記したものゝ中で古いものは甲陽軍鑑である。軍鑑は虚實混淆して確實の史料として取ることは難しいものであり、且又高坂彈正の撰にかゝるといふことは斷じて信ぜられぬものであるが、決して生新らしい僞書ではない、古いことは古いものである、武田氏滅亡を距ること遠からぬ世に出來たものである。勘兵衛は甲陽軍鑑の闕を補ひ誤を正さんとしたやうに云はれてゐる。然し目夏繁高は、勘兵衛が甲陽軍鑑の闕文を補ひ、大に甲州武田の兵法を興起す、と記してゐる。勘兵衛は非常に長命で、寛文三年九月九十二才で死んでゐるが、勘兵衛存命中、蓋し勘兵衛の七十七の賀の頃門人等が打寄つて記したと見ゆる正保四年の誌文は、文章も朴拙で古さの思はるゝもので、其中に、景憲天性人の宇下に立つを欲せず、兼衛を睥睨するの知、韜略を懐ふの志有り、嘗て謂ふところは先君信玄公創業爭戰の要務、兵に軍旅の制法は之を詳かにせんと、故に甲信兩州の士、多く其門に入り、故實を討論し、委曲に之を記錄し、悉く其語を編輯し、總して五十帖と爲し、名づけて甲陽軍鑑と號す、而も景憲の心未だ滿たずとして、又益々天下に經歷し、其志を立てんことを願ふ、とあつて、其下には景憲が致仕して諸國修行を試み、兵法軍學禪宗に苦心したことを記してあり、其後關ケ原大阪等の役に參じたことを記してある。して見れば甲陽軍鑑は勘兵衛が若い時、關が原役の前（關が原役の時は勘兵衛年二十九）即ち青年時代に、自分と同じく徳川氏に屬した甲州諸將士等に信玄盛時の事を聞きて、追慕懷想の念、慷慨悲愴の情、研究心、批評心、何や彼やを取交ぜ、且又今は徳川氏に屬してゐる諸將士の感情や智識や意見をも取交ぜて記したるものと想はれる。史實の誤訛や不足やは、もとより史家でも記錄でも無い諸將士の記臆談を其儘傳へたのであるから、自然生じ勝の事で、しかも勘兵衛に語つた諸人も亦一々實際に遭遇又目擊した人のみでは無く、傳聞に之を得たことを語つたらうから、後世の考證家に其失を攻擊されるやうな誤謬を含んだとて、それは無理も無いことであらう。で、雜實文編の卷十四に採錄されて居る逸名氏の景憲門弟子の正保丁亥の記文を信ずれば、甲陽軍鑑が勘兵衛の手から出たもので、其の成立の事情も大概は分明する。

此の勘兵衛が無論甲州方に左袒して軍鑑を編み、しかも二千餘人も門人を有する兵學家として後に至つて世に威張つて立つたことは、信

玄と對抗した家で、しかも關ケ原以後は押へ付けられた上杉家及び其騎士等に取つて不快の事でないはけはない。輝虎注進狀は亦當其時のものとは受取難いし、又何人が作つたかも知らぬが、然し上杉方から出たもので有らうことは疑無い。林家修史の時に際して出て來たもので有らうと想像されるし、川中島五度合戰次第は寛文年間に林春齋が本朝通鑑を編する時に史料に供へんため上杉氏より當時の閣老酒井雅樂頭に呈されたものと奧書にあるが、およそ同じ頃に出されたものでゝもあらう。イヤ然樣いふ史料の方面でなく、軍學の方面を一寸考へて見ると、越後流即ち謙信流の軍學といふものが有る。何人が編み出したもので、何時頃から出來たものか知らぬが、これも其の軍學の系傳が後まで存して、三徳流などゝいふ支派まで有るところを見ると、いづれは越後武士の建立で有らう。甲州流で山本勘助を宗とするが如く、越後流では謙信の謀將であつた宇佐美駿河守定行を宗とする。いづれ宇佐美氏の後か、然らずも越後武士が上杉家の制度事蹟等を聽集めて編立てたものと考へられる。そして丁度武田家に於ける甲陽軍鑑と同じやうに、上杉家に於ける春日山日記三十卷が出來てゐる。これは半分史傳樣のもので、半分軍學樣のもので有ること、猶ほ甲陽軍鑑が史傳軍學雜糅混淆して居るが如くである。名は堂々としてゐるが、文章識見に古風の味が少くて、多分は軍鑑の後に出來たものであらうと思はれる。恐らく越後流軍學者の手に成つたものと鑑定して大差はあるまいし、且又軍鑑を向ふ側に取つて編成されたものと猜して見ても、餘り邪猜でもあるまい。

　甲越川中島の長い烈しい鬪爭の後に、太平になつてからも影法師の戰爭が復繰返されたと自分が言つたのは斯樣いふ意味である。然し双方の言分を割引無しに買取つて、そして兩方を取組合せて、信玄謙信を相爭はしめると、それは甚だ面白い華々しいものが眼前に展開して來る。虛談でも面白いものは人が好くから、面白くしようと思へば虛談を取入れるに限る。虛談は多くの人には多分面白いものであるのだから。但し然樣いふやうにして出來たものには、既に甲越軍談のやうなものもあれば、講談師等が讀み擴げて來た俗說も澤山ある。山陽も澹泊も皆流布の說を其儘取つて、火の如く花の如き文を爲したり、霜の如く日の如き論を下したりしてゐる。今更前人の後塵を拜して其の餘威を籍ることも要るまい。

　信玄は新羅三郎義光以來の名家たる武田の家に、大永元年に生れたといふのが通說である。父は左京太夫信虎、母は武田氏同族大井上野介信達の女で、生れた歲に駿州の福島兵庫といふもの と信虎と飯田河原で戰つて、信虎が大勝を得、兵庫を誅したので、因つて勝千代といふ幼名を賦へられたといふ。然し福島の戰死は大永元年の前年で永正十七年十一月二十三日であるから、大永では無からう、且又父信虎は寅歲生れ 故に虎の印を用ゐてゐるが、信玄は龍の印を用ゐてゐる、蓋し辰年生れであらう、といふ推斷から、永正十七年辰歲の誕生とする說もある。人の誕生歲年などゝいふものは、種々の都合づくか

ら、辰年生れでも巳年生れのことに粧ふたり、子年に死んでも丑年に喪を發したりするもので、すでに信玄の死んだ時も當時表向には長い間死なぬことにしてゐたといふ說さへある位であるから、(信ぜられぬが)兩說のいづれが眞實か知れぬ。然し兎に角表面に大永元年に生れたことになつて居たのだらう、それは天文五年に信玄十六歲で元服し、勅使下向あつて、從五位に叙し、大膳太夫兼信濃守に任じ、將軍足利義晴より晴の字を賜はつて、晴信と名づけられたことには諸說異論の無いところを見れば、逆算して大永元年生れとなる。或は永正十七年辰歲生れで、戰後ではあり、年末に際したのち、翌年の春三月に芽出度祝はれたのかも知れない。どちらにしても日は二十三日となつてゐるのが考へどころである。然し叙任の事さへも、家督の後で有つたらうと思はれるので、强ひて確說することなどは出來ないし、確說する必要も無いことである。信玄大永元年巳年生れの說の有力の證は、江洲多賀明神に天文十四年に於て信玄が奉つた願文に、晴信誕生辛巳歲也とあるのが考證家的には動かぬ證據だ。

信玄幼時の事は別に傳ふることも無い。勝千代でゐた後に、大炊頭と云つてゐた時があつた位の事しか知れぬ。確實の談が何樣かは知らぬが、十三歲の時の事として傳へられた蛤の話が有る。若しそれが事實ならば年齡には相違が有るらしいが、事實は一寸面白い。それは斯樣いふ談である。駿河の今川義元の妻は信玄の姉である。其の姉の方から甲州なる信玄の母のところへ貝おほひの遊びの爲に澤山の蛤貝を贈り越した。そこで母君から勝千代に此蛤貝の大小を扈從共に付けて撰り分けさせよとの事であつた。勝千代即ち後に信玄は母の命によりて、大なる好き貝を撰んで奥へまゐらせた。其餘りの貝が、疊二疊敷ばかりに大方充ち填まりて、高さも高いところは一尺ほどにも山積した。貝おほひの用の貝は餘り小さいものでは無いから、餘つた貝も相應の貝で有らうが、勝千代は扈從に算へさせ乍ら三千七百餘有つた。其時諸士の參候する者が有つた。勝千代は諸士に、こゝなる蛤は凡そ何程有るだらうか、推量して見よ、と云つた。諸士は心々に推量して、或は一萬五千、或は二萬などゝ答へた。その時勝千代が、人の數も實は是の如く多くはあらぬものであらう、五千の人數を持つたらば何をするにも心まゝである。と云つたといふことである。如何にも面白い談で、成程五千となると一寸見積れぬ數である。勝千代の言は勿論軍旅戰陣の事に就きてゞあるが、當時能く五千の兵を用ゐたならば他を壓し我を立つるに足りるでも有つたらう。勝千代の此言を聞いたもの、軍陣の經驗ある者等、舌をふるつて驚いたといふ事である。雄將勇士の幼立には、兎角此類の逸話があるもので、徳川家康公が幼時菖蒲きりの爭の見物に、小勢の方が勝つと云はれたことや、毛利元就が幼時嚴島社參に際して、家人が中國一國を此君に取らせたまへと祈つたといふのを、何故日本全國を取るやうにとは祈らぬぞと罵つた談や、北條氏康が十二の時に鐵砲の音を初めて聞いて吃驚したのを自ら慚ぢて腹を切らうとしたことや、士分でも里見の正木

大膳か十二三で馬を乗り習ふ最初から片手綱で乗らうとして、師が之を制したのに對して、侍の將たらんものが徒歩にて鎗を合すべきや、馬上に働かんならば、片手綱を達者に習ひ覺えてこそと云つたことなど、皆其の或は英明、或は雄偉、或は俊邁、或は豪爽の性質を語るもので、まことに面白い。が、逸話の數は割引して聞かぬと、虚談に乘せられる。面白い談には虚談が多いからである。信玄幼時の蛤の談も十三の時の事で無いだらうことは確實である。何故といへば信玄十三の時は天文二年に當り、天文二年には今川義元はまた義元にならずに、善德寺の喝食で承芳と稱して居たのであり、信玄が十五の年、天文四年の四月、兄の今川氏輝が死んでから其の遺言で寺を出て俗に還り、次兄の良眞と爭つて克つて後に、天文五年に今川家を襲いで辛くも從四位下治部太夫駿河守となつたのであるし、信玄の姉を娶つたのは信玄十七の年、天文六年の二月であるから、信玄十三歳頃に今川から蛤貝など來さうな譯は無いのである。で、此の話は假令實でも、信玄十七八歳位の時の事で無ければならぬ。人數積りの事などは、如何に信玄でも十三位では、餘りマセ過ぎてゐる。然し蛤の談が眞實ならば、十八九歳にしても實に偉い、悟りどころに甚だ味のある談で、流石は信玄だと云ひたいことである。

前に言つた天文五年に勝千代十六歳元服の事は甲陽軍鑑の載するところで、且つ又今川義元の取持を以て是の如くと記してあるが、これは何事もをかしい。今更甲陽軍鑑の記事を駁したとて興も無いことだが、松平豫州か、信玄の叙任並に婚娶の事、何の歳にか有りけむ、其趣は詳ならず、と云つてゐる方を信じたが可いである。元服は勿論年齢さへ適當なら其儀があるべきだが、叙位任官は大抵家督に立つてから有るのが常で、父信虎が甲州に居しかゝつてゐる中に、廢嫡しようと思つてゐたといふ勝千代に叙任を求めてさせやう理も薄いから、所傳の通說もよい程に聞流すべきである。又すべて理屈を云はずに舊說を信ずるにしても、今川義元の取做しといふ節だけは取去らねばならぬ、義元が武田家の縁者になつたのは天文六年で、其前は武田家と今川家と別に交情が好かつたのでも何でも無く、むしろ互に敵であつたからである。

扨信玄が父の信虎を逐出したといふことは通說になつてゐる。そして信玄の雄材大略を稱する者までが、信玄は偉いことは偉いが、ひどい人だといふことを敢てしてゐる。安積覺などになると、信玄父を逐ひて自ら立ち、天倫を毀滅す、大本既に虧く、威は隣境に振ひ、名は百世に垂るといへども、觀るに足らざる也、と云つてゐる。又、信玄が父を逐うた故をもつて、終身論語を讀まなかつたといふ傳說を其儘受入れて、終身敢て論語を讀まずと雖も果して何の益あらんやと云つてゐる。又、信玄隱退せられ、群臣の列に就き、僅に一隊の將となり、才略展ぶるところ無くして、而して膝下に老死し、後世復信玄といふ者を知らざるも、それで可いではないか、と極論してゐる。もとより倫常を扶植し、道義を維持するをもつて念としてゐる儒者の言と

しては、然樣いふやうな嚴正に論ずるのが過つては居ないけれども、しかも事情の考覈に疎にして、論議の苛酷に勇なるの失無きを免かれない。信玄が父信虎を逐うたといふのは、大分俗傳とは距離の有る事情があつたに疑無い。一概に俗傳を其儘受入れて、信玄を梟獍の雄とのみ看做すのは、何樣も正當では無いらしい。戰亂の世の事は、太平の世に机邊に坐して聖經賢傳を引張り出して論ずるやうにはならぬ。又戰亂の世の人は、太平の世の人のやうに、邪理押し道理押しばかりで、形式辭令の通りに何事をも處して行くものとも思へない。外に現はれたところは、信虎國外に去り、信玄國内に據つたことでは有るが、父子の間に何樣いふ默契秘旨が有つたかも知れない。表面ばかりで判斷するのは、無事の世に於てさへ正鵠を得ぬ勝である。まして戰亂の世の事は、内に於ても外に於ても、ひた押しの論議では悉せぬところの委曲が有るものと思はねばならぬし、それから又内部の云傳へも外間の云囃しも、一々言葉通りには信ぜられぬものである。例へば信玄が小田原へ攻入つた時に、鎌倉八幡へ參詣しようとすると云つたから、小田原方では信玄鎌倉へ行つたなら引包んで擊たうと思つたから鳴りを鎭めて信玄の思ふまゝに行動するのを待つてゐたのである。ところがそれは計略の云觸らしで、信玄は三増峠へかゝつて引取つたのである。これは内部からの言觸らしが虚であつたのである。又信玄が永祿十二年六月十七日に駿州三島に働いて陣した時、津浪にあつて八幡大菩薩の小旗を失つて退いた節は、北條家では信玄敗軍して旗を捨てゝ退いたと云つたのである。これは外部からの虚であつたのである。戰亂の世の際には、計策の秘を含んだ虚もあれば、勢威を張るための意を含んだ虚もある。若夫れ計謀深遠にして、敵の計に就いて我が計を成し、其計謀が永く外間の淺人の窺ひ知るところとならずして終るやうなことであつたら、後のものはたゞ群盲撫象の言を爲すにま止るであらう。此點は考へなくてはならないことである。

俗傳に從へば、信玄が論語を手にしなかつたといふのは、如何にも信玄心中の秘を語るやうなことで、然も〳〵父を逐つて自ら立つた事實があつたやうに思はるゝことであるが、これも甲鑑から出た事で、是は（信虎逐出の事）信玄公御道理千萬なれどもそれさへ信玄公恥敷思召し、論語を終に手に取り玉はず、論語には一入親孝行の事多し、とあるのから出た談である。論語よりも孝經の方が似合はしいところであり、孟子の方が、猶ほピタリと逐父自立の人には痛いところが有る譯では無いか。孝經孟子は手にしたのだつたか何樣だか問ひたい。しかも甲鑑第二品には、目錄に、信玄公令弟典廏子息へ異見九十九ケ條の事といふ文が載せてある。それは元祿元年の日附で、前には龍山子謹誌とあるが、後には信繁在判とあり、信玄が書いたのか、信繁が書いたのか、實は坊主などが書いたのか、小幡勘兵衛が書いたのか、甚だ不分明であるが、其中には幾ヶ處も論語を引いてあるのがおもしろい。そんなことは兎に角、信玄論語を手にせずといふが如き瑣談は、人々の頭に一寸響くところの有る談では有るが、餘り價値の有る

ことでも無く、評議にもならぬことである。

俗傳では信玄父を逐ふの始末は斯樣である。信玄また晴信にもならぬ勝千代の、十三歳の時であるが、父信虎に秘藏の名馬の鹿毛の悍強なのがあつて、鬼鹿毛と名づけて、甚だ愛して居た。それを勝千代が頂戴いたしたいと需めた。信虎は我意強く、荒氣の人であつたから、我が秘藏の馬を吾が兒になりとて素直に與へるやうな人では無かつた。然し惣領の所望ゆゑ無下に與へないとも云へぬので、まだ勝千代で彼の馬に似合はしくも無い、來年十四になつて元服したら、武田家重代の郷の義弘の太刀、左文字の脇指、新羅三郎公以來の楯無の鎧、八幡太郎公の御旗も共に與へよう、とのことであつた。そこで勝千代が復言ふには、家の御旗、楯無の鎧、太刀、脇指は御重代のものなれば、それは御家督下さるゝ時にこそ頂戴いたし申しませう、來年元服いたせばとて、部屋住の體では頂戴も勿體無い事でござりまする。馬は軍用大切のものでござりますれば、今より心がけ乘習ひて、一兩年の間に何方へなり御出陣の場合には、御後備をも勤め申すべき覺悟で所望申上げたのでござりまするから、何卒御許容を、とのことであつた。すると信虎は狂暴の人なので、默つて勝千代が引込まなかつたのが大に癪にさはつて、家督を讓る讓らぬは乃公の料簡で、誰が知つた事だ、家重代の物を讓つて呉れようといふのに、いやならばいやでよい、次郎（後に典廐信繁）を總領にして、父の下知につかぬ者は逐出して終ふまでだ、其時になつて諸肉を旋擬し、手をさげて物を云ふとも承知はすまいぞ、と罵つて、備前兼光の三尺三寸の太刀を引抜きて、勝千代の使を逐ひ走らせた。使は頭をかゝへて逃げ歸つて終つた。それでは濟まぬから、曹洞宗の僧の春巴和尚といふのが仲直りを取計らつたので、何事も無くて濟んだが、此事有つてより父子の間が心解けぬやうになつたとある。斯樣な事も有つたかは知らぬ。勝千代が父の愛馬を所望したのは、無遠慮といへば無遠慮だが、惡いといふほどの事でも無いし、信虎のこれを與へなかつたのも、與へたく思はなかつたのなら致方も無いことだ。それに對して勝千代の申分は些小聞しやくれて小憎らしい云分だつたから、信虎の不快に思つたも無理は無いが、それに對しての信虎の暴怒は、性質とは云へ年甲斐も無いことであつた。曹洞の智識春巴和尚といふのは、誰の事か一寸不明である。古府中の萬年山大泉寺は曹洞の寺であつて、大永中に信虎が天桂禪師を招いて開山とし、分國中の僧錄所とした大寺である。此寺の二世の吸江英心は、信虎には弟、勝千代には叔父である。春巴和尚とは吸江英心の事でゞもあらうか。英心ならば丁度斯樣いふ場合に出て然るべき僧籍も有り、勸解の地に立つべき身分でも有る。いづれにせよ、斯樣な事も有つたかも知れぬ、まんざら一概が作り事とも思へず、有りさうにも思はれることである。

人間界の事といふものは、前世因緣といふものか何樣か知らぬが、一寸した事が梃子になると、それに亢奮して、善いのも惡いのも猛烈に附加增長するものである。丁度雪丸を地上に轉ずると雪は雪に黏い

て終に大雪團になるやうなものである。又、金米糖といふものを製してゐるのを見ると、芥子粒に溶けた砂糖を焙爐上で濺いで、ミゴ帚のやうなもので滾轉させてゐると、段々に砂糖が着いて、終には面白く奇妙な角が生へたやうな毬子狀を成すものである。人間界の事もこれと同じやうに、一寸した事が核子になると、段々と好いものが附着し重疊したり、又其の反對の場合には段々と惡いものが附着重疊して、大層好くなつたり、大層惡くなつたりするものである。男女の間の事でも、事業の上の事でも、又深仇となるも莫友となるも、多くは些細の事が核子になつて、時の拍子で、それに種々の事が附着重疊するから起るものである。識海の一波、千波萬波これより生ずる、といふのは何樣も嘘で無い場合があるものである。然し大體に於ては人と人との間は双方の性質の親和分子と反撥分子との存在の割合に本づいて、和合を保つたり背反を致したりすることも、爭ひ難き事實である。

信虎といふ人は、大泉寺の畫像に據れば、がりゝとしたやうな人で、眉宇の間に鷙悍の氣の溢れ見ゆるといふ位であり、隔世遺傳で信玄の子の勝賴も剽勇に過ぎて、上野のぜんの城を素肌で一時攻めに攻めたり、遠州長篠で柵を三重に結つて鐵砲を有つて籠つて居る敵へ驅かゝつたり、すべて荒氣過ぎてゐるし、又信玄の子の太郎義信も永祿四年の川中島の戰の時、勝軍の後に甘粕近江守の小勢を見て信玄が筑摩川を越して三町程引込んで旗本を備へ立したのを、退くまじきところを退いたとて、信玄ほどの將、しかも父であるものを誹謗したり、父子不和になつて後も仲直しに盡力した兩僧を斥けたり、すべて荒氣過ぎてゐるところを考へると、信虎は餘程に我の強い暴い人で、晴信は母の氣を受けて、強いばかりでは無く、中和性も備へてゐる、弟の信繁信廉は母の方に多く肖て、和らかなる人であつたが、信虎は隨分偏倚した氣質であり、信玄筋の孫には又其の氣質が隔世遺傳で現はれたものと見える。然樣いふ人であつたから、信虎が甲州を出て駿河へ行つた時には、天文十年とすれば、年は僅に四十八で、男盛りであるのに、信玄の母大井氏は、女の事であるから、信虎を尋ねて駿河へ行くのも自由であるに關らず、甲州に留まつて終つたところを見ると、大井氏は思慮が深く、物に堪へることが出來る人で、亂暴な夫の信虎より沈毅の子の晴信の方に身を託して居たものと考へられる。信虎は駿河へ行つてから持つた女より、佐衞門佐（或は上野介に作る）お菊の二人を得て居り、お菊は菊亭大納言晴季卿の簾中になつたと傳へられてゐる、死んだのは天正二年三月五日で八十一歳であるから、隨分精力厚盛の人で、信玄が死んでも生きてゐたのであるし、且又其の長い漂浪生活の間、別に困苦した樣子も無い。夫人は天文二十二年五月七日逝去まで、十二年といふもの、多分甲府の躑躅が崎の北の方にあつた出丸、御隱居曲輪といふのに安居してゐたのだらうと想はれる。して見ると信虎の荒氣は信玄信繁信廉等の氣質と吸引親和の傾がなかつたのみならず、夫人とも餘り相懷くやうの處は無かつたものであらう。信虎の氣質は餘程强くて、そして剛愎で、孤獨的になつても平氣で

居り、孤獨的にされても平氣で居たし、妻子眷族から疎遠にされるべきやうな點を元來所有してゐたものと思はれる。信虎駿河行きの事の生ずるに至つた原因は幾ケ條もあらうが、大體は信虎の氣質の偏から生じたことで、それに鬼鹿毛の事では無いまでも、何かの事が最初の一梃子となつて、段々に種々の事情が附着重疊して、其上に今川家其他との外的因緣が過つて、終に父子夫妻相睽くやうになつたのであらう。

俗傳では勝千代が信虎の歡を失つてからは、勝千代みづから作り阿房になつて韜晦し、馬に騎つては落ちて背に土を着け汚れたまゝ父の前に出たり、字を書いても見苦しく書いたり、游泳をして深いところへ入つてあぷ〳〵して人に助け救はれたり、大石大材等を挽く差圖をしても手緩くて弟の二郎信繁に劣つたりした。で、信虎は何ぞにつけて勝千代を貶し屈するので、家臣等まで勝千代を侮つたとある。自ら韜晦するといふのは危を避くるには必要の事であるが、俗傳の通りでは、眞に勝千代が二郎に家督を讓る意が有るならば宜しいけれども、然樣で無ければ父信虎を欺くわけに當つて甚だけしからぬことになる。其の危懼の地に在りて、順從謙默する者は皆僞なり、凶悍信虎の如き者、誠を以て之に事ふるも、猶ほ未だ感動し易からず、況んや僞を以てするをや、と澹泊が論じたのは實に至當の議である。然しこれも作り阿房の事が事實で無ければ、論も糸瓜も無いことになる。俗傳では、天文五年の十一月に信虎が兵を率ゐて海野口の城を攻めた。海野口は甲州に近接してゐる信濃の地である。扨此の城は城中に人數も多くて善く拒ぎ戰つた上に、平賀入道源心と云つて聞えた勇士が加勢に來て籠つてゐたので、中々味方の思ふやうにはならない。それに海野口は高地では有り、時は十一月から十二月へかゝつて、大雪が來たから、見込の少い城攻になつた。甲州の將士は相談した。城内に三千ばかりの人數は有り、味方は七八千である、もはや今は年の暮ゆえ一先づ歸陣し、來年の事に此戰を延ばしたが宜からう、敵も大雪なり年末なり、後を慕つて城から追擊するといふことも萬々無からう、といふので衆議一決して信虎へ此行を云立てた。信虎も仕方がないので合點し、それなら明日早々引取らう、といふことになつた。すると從軍してゐた晴信が、それならば殿をわたくしへ仰付けられたうござる、と所望した。信虎はこれを聞いて大笑ひに笑つて、汝は武田の家の名折を申すものであるよな、敵が後をつけまじと、軍陣鍛練の者共が申したところであるから、しんがりを致せと我が申付けたにせよ、此のしんがりは次郎に仰付け下されと申してこそ惣領の器量ともいふべきである、次郎ならば斯樣な所望はすまい、と追込めた。込められても晴信は羞らひもせずして請求を引込めなかつたので、それならば望に任す、といふ事になつた。それは十二月二十六日の事で、明くれば二十七日の曉天に、信虎は馬頭を甲州へ向けて立つた。晴信は東道三十里(東道といふは當時の語で、上道といふのに對す。上道は三十六町一里、東道は六町一里である)ほど跡に殘つ

り、いかにも用心した體で、僅々三百ばかりの人數を下知し、其夜は食を一人に三人前ばかりこしらへ、今にも打立つやうな仕度をし、足袋、脛巾、物具をも着けた其儘にし、馬に秣を善く飼つて、鞍をも置きづめにし、夜の七ッ時分になつたら打立つ覺悟にせよ、と自身で命令を傳へた。

七つといへば日出前二時間餘位である。晴信の手に屬した者どもは之を聞いて、成程信虎公の笑はれたのも道理である、何で此の寒天に敵が出て來るものであらう、と內々つぶやいたが、扨七つ頃に打立つ段になると、甲州の方へは行かないで、後へ戻るのであつた。主命ゆゑ是非は無い、前の敵城へ二十八日の曉に朝寛に攻立てた。攻めるのは前日に引替へて、三百人計りであつたが、城中が狼狽して、はか〴〵しく防戰もせぬので、勢を出して攻入ると、易々と攻落し得た。これは二十七日に敵が皆引揚げたから、人の心は皆同じもので、城中の者もやれ〳〵今年は先づ戰も無くて年を越すことになつたと喜び、平賀入道も手のものを其日に大部分返し、自分も二十八日の朝立に歸るつもりでゆる〳〵と休息して居たのであり、城の武士達も年を迎へる用意に喜んで各々里へ下つたのであつた。そこで城には幾十も居無かつたから、甲州勢は番の者共を討殺し、根小屋を燒拂ひ、油斷しきつた敵を二十三十づゝ討つて棄て、剛勇をもつて鳴つた源心入道をも討取つて終つた。他所よりの加勢の者は、それなりに歸つて終ふよりほかは無く、城を取られて終つたから、相應の勇士でも張合が拔けてしまつた上に、まさか晴信一手の三百人やそこらの勢が城へ入替りになつたとは思はず、信虎の總軍に巧く油斷を計られたと思つたから、取返しにかゝつて來なかつた。晴信は城を落して主意を遂げ、源心を殺したのを手柄にして、凱旋した。晴信の機を看るの徹は言ふまでも無いことであつたが、それでも信虎は、それなら城を守つて其儘に居て使者をよこせば好いものを、然樣もしないで城を棄てゝ歸つたのは臆病だと貶した。これは信虎の無理で、一旦は城を奪つたものゝ、內懷中を見すかされた日には、三百やそこらの人數で、城を守つて居られるものでは無い、主意を立て武威を示した上に手際よく引揚げたのは晴信の將才の愈々凡ならぬところを示したものである。然し晴信を褒めて信虎の氣に觸れては益も無いことだらう、心中に晴信をたゞ者で無いと思つても褒めぬ者もあり、中には信虎の意を迎へる爲に、空城を落したのである、と云ふものも有つた。で、晴信は此事有つて後も、猶ほ以て少し足らぬところのある人のやうに身持をして、時々駿河の今川義元の方へ頼み入る由を申遣つて居た。これが晴信十六歲の初陣であるが、平賀源心は力も七十人力と云ひならはした者で、多分十人力も有つたであらう、四尺三寸の大太刀を常に用ゐて、勇名を馳せて居た者だつたから、後々源心を石地藏に祀つて大門峠に立置き、源心が大太刀といふのを弓の番所に飾つたといふことである。これが信玄初陣の手柄話で、野史などもそつくり俗傳通りに載せてゐるのである。然し此談を俗傳通りに受取ると、如何に信虎が剛愎の人でも、

晴信の器量に心づいて、內心には此奴猾利口なところの有る奴だ位には思ひさうなことであり、如何に晴信が父に忌まれぬ爲に、うつけた風を粧ふたところが、信虎をしてハテナと位は省み思はしむる理である。も一つ言を進めて云へば、晴信が作り阿房をするならば何も斯樣な事は爲さぬ方が可い譯だし、斯樣な事をする位ならば、うつけになつて居るなどは無益な芝居で有る譯である。源心を打取つた事は虚談ではなさゝうであるから、然樣いふ事も有つたのであらうが、若し時が違ふので、晴信十六歳の時の事では無からう。又作り阿房も、大げさな談で、實はたゞおとなしくして、父に逆らひ立をせずに居た位の事であつたので有らう。されば順從謙默する者は皆僞なり、などゝ手嚴しく僞の字を振りかざして、晴信の心術甚だ不良のやうに怒喝するは、むしろ酷議である。然樣いふ場合に、辛棒して不平を堪へ忍び、毀顏して逆らひ立をせぬ、それが悪い譯は少しも無いことである。

扨愈々信玄父信虎を逐ふことを語るべき段取となつたが、世間に傳ふるところでは、其事を信虎四十五歳、晴信十八歳、天文七年の三月十七日に晴信逆心といふことにして居るが、それが第一に間違つてゐる。松平定能の甲斐國志卷の九十四に、勝山記、飯田系圖、王代記、鉀山舊記等に據つて、信虎四十八歳、天文十年の六月の事として居るのは爭ふことが出來ない事實である。且又甲州の中の所々に藏する信虎の印書の、天文十年附のものが數通有ることは、信虎が十年に於て猶は甲州の主であつたことを證據立て、又天文十一年からは晴信の印書も有るが、其前には曾つて無いところを以て、十年以前に晴信が甲州に主とならなかつたことを證據立てゝ居る。野史などは軍鑑に材を取つて七年の事としたのであるが、何としても甲斐國志の論斷を覆し得るほどの根據をば見出すことは出來ないから、斷じて軍鑑作者の傳聞の誤であるとせねばならぬ。

軍鑑の記するところでは、天文七年戊戌正月元日の式に、信虎は嫡子晴信へ盃を與ふべきを與へないで、次郎へ盃を與へた。そして正月二十日に板垣信形をもつて信虎から晴信へ云ひつかはした其旨は、太郎は駿河今川義元の肝入をもつて大膳大夫兼信濃守晴信と名乘るに至つたから、此上ながら義元に付きて萬事異見を受け、心の至る者の機、作法をも知るやうに、との事であつた。晴信返事には、兎も角も父上御差圖次第、といふ事であつた。それから重ねて、板垣信形、飯富（オブと讀むので、イヒトミと讀むは宜しくない）兵部兩人使者で、當年三月より駿河へ晴信は行きて、一兩年も駿府に於てよろづ學問せよ、とのことであつた。これはゆく〳〵次郎を惣領にして、晴信を甲府へ歸らすまいとの模樣である。斯樣いふのが普通の說になつてゐる。これは堪らない談で、正月元日に嫡子が嫡子扱ひもされず、しかも次男が嫡子扱ひされて、それから今川家へ行けと云はれ、尙又兩使をもつて愈々三月から駿河へ參れとの事だ。兩使といふのは嚴確徹底を期する時の使者で、一人の使者では、後日になつて、一方では斯

く申述べたと云つても、一方で然樣いふことは聽かなかつたと云へば水掛論になる、そこで兩使を遣はせば、一人が言ふ時は一人が其座で聽いて居り、又其返辭挨拶も聽いて居り、云はぬ、聽かぬとは決してぬけさせぬのである。で、手詰の談の時は兩使である。しかも三月といふ期まで明らかになつたのである。晴信の身になつて見れば、愈々堪らぬことである。成程これでは晴信に於ては立つ瀨が無いから、逆心もしかね無い譯であるが、一寸待つた。いくらも此處に疑を容れる地がある。けれどもそれは後に言ふことにして、俗傳をも少し辛防して聽かう。

扨三月の九日になつた。信虎は駿河へ行つた。晴信を甘利備前守虎泰に預けて、二郎を留守にした上、駿河より通知次第に來いとの事である。甘利に預けるといふ、此の預けるといふ詞は、換言すれば其人の自由を奪つて、預かり人をして責任を以て保管せしむるのである。一層甚しく言へば抑留押收されてゐるも同じことである。晴信嫡子を以て然せる落度も無いのに、臣下に預けられて、やがて國外へ遣られるに決したとは何といふ情無いことだ。成程逆心も起しさうなことである。板垣駿河、飯富兵部は、甲府諸將の中でも家柄でもあり、人物でもあつて、板垣は後に信玄の詩作に耽つたのを强諫したので名高く、上田原で村上勢の爲に戰死したが、甘利と共に武田家の重臣であつた。飯富兵部は後に信玄の子の太郎義信の事に關して悲しい死をしてゐるが、勇猛でも有り、思慮も有つて、德川家の井伊直政の赤備は、直政が甲州浪人を多く得て飯富の形容を學んだので、赤備の本家で有り、慓悍な山縣三郎兵衞の兄である。甘利備前守も猛將で、板垣甘利は武田家の大臣格の家であり、後に備前守虎泰も戰死したが、將死して而も軍亂れざりしといふので美談を殘してゐる。手强い此等三人の間に居て、晴信に三人の同情が無かつたならば、晴信は抑々何と出來ようや。信虎の思ひ通りになるほかは無かつたのである。

ところが信虎の狂暴には人々も心を離してゐた。晴信が板垣飯富を頼むと、二人は晴信を主として信虎に代へた方が武田家の利であると考へた。預かり人の甘利備前も、晴信を拘束する筈だが晴信方になつて終つた。晴信は豫てより姉婿今川義元を深く頼んで居た。そこで信虎が駿河へ立つた後、晴信は內々支度して、信虎の思つたとは反對に、反つて今川家をして信虎を抑留せしめた。そして信虎に隨つて駿河へ行つた將士の家族共を人質にしたから、それ等の將士も信虎を棄てゝ甲州へ歸つた。晴信は遂に自立して、甲州に主となつた。義元は手强い信虎を甲州に虎踞せしむるよりも、恩を晴信に賣つて、そして年若い晴信を北方の藩屏たらしめた方が利と考へて、晴信を助けたから、當時はすらくと運んだ。國中は晴信を主と仰ぐことを悅んだ。といふのが普通に傳へられてゐる談の一切である。年月の相違は先づ暫らく措いて、前叙の通りがおよそ眞の事實であるならば、晴信は父の逐ふところとならんとして、却つて父を逐ふた、といふことになる。然し果して此樣の事が有り得ようか。

先づ俗傳では信虎が駿河へ行つたのは義元の許へ嫁した女を覗るのを表にして、義元に相談して晴信を駿河へ置かう謀たつたといふのであるが、これが第一に信ぜられぬ。廢嫡したくば其樣な細工をせずとも、戰亂の世の事であるから、親の目がねにかなはぬといふので、僧にしようとも詰腹を切らせようとも浪人させようとも、造作は無いことである。わざく婿に相談して其手を假りる必要が何處に有らう。若し又婿の義元が晴信へ同情して廢嫡に故障を云出しさうな慮が有るので預め義元の諒解を得て置く必要があるといふのならば、猶更義元のところへ其の嫌ひさうなことを頼みに行く譯は無いことである。義元の室、即ち晴信の姉なども何も必ずしも自分の意見に同ずるか何樣か知れたものでは無い。假りに自分の意の通りに晴信を駿河に置くことに出來たところで、義元が何ぞの時に晴信を故國に歸れようとすること、晉の文公が子圉を秦に納れんとした如くにしたならば、非常な面倒が起るのは知れた事で、五十に近い信虎自身の壽命の末を想像したならば、如何なる信虎でも其位の事には氣が附くべきである。又そんな事にも關心せぬほど、信虎が果して恐ろしい狂暴一點張りの人で、何でも構はず晴信を逐ひたいとであるならば、其人の性質からして、そんな曲線的の細工を爲しさうにも思はれないことで、甚だ怪しむべきである。で、狂亂の人だとならば、あゝいふ細工をしようとしたといふのが信ぜられず、あゝいふ細工を爲ようとしたならば、然樣いふ細工をしさうな人が彼樣な無思慮の事をしたといふのが信ぜられない。

子をみること父に如かずといふ諺がある。まして戰亂の世に當つて、前將軍が兒の暗愚を考へずに居よう譯は無い。如何に子が作り阿房をしたとて、猫をかぶつたとて、幼時から觀てゐるものを、馬鹿か利口か、氣のある者か腑ぬけか位の事が判斷出來ぬわけは無い。大泉寺傳說は作り事でも有らうけれども、信虎と天桂和尚と相談して勝千代誕生に靈異を飾つたのかも知れぬし、密宗で有つたものを禪宗にしたのも、たゞでない譯が有つたかも知れず、二世が信虎の弟であるところから考へても、勝千代が生れた時握つた掌を開かなかつたなどゝいふ勝千代を神奇にする說は何處からか出たらしい。よし其樣な事は後人の作爲としても、信虎が勝千代を愛して、家を起し家を揚ぐる者となつて貰ひたいと思つたらうことは、凡人が凡人の人情で、間違無い希望であつたらう。その勝千代が生長する間、馬鹿か利口か觀察しなかつたらうとは思へぬ。勝千代が鬼鹿毛を欲しがつたといふ談が虛談で無ければ、武將としては嬉しい氣象だと嬉しがるべきで、美しい侍女を貰ひたいと云つたのとは違ふ譯ではないか、又信虎が駿河へ行つてから設けた子の上野介の子、即ち孫の幼名を勝千代と名づけたといふ事が、信玄父子背反の俗傳の祖たる甲陽軍鑑に見えてゐるが、勝千代即ち晴信が氣に入らぬ子で有つたなら老後に設けた孫に何で其の同じ名を付けよう、むしろそれは勝千代を愛してゐたからの事でなくてはなるまいではないか。軍鑑は信玄父を逐つたといふこと

を首唱したものであるに關らず、鬼鹿毛の談でも、蛤の談でも、海野口の談でも、皆晴信の幼時から頼もしげであつて、信虎が晴信を愛しさうなことを記してゐるのが奇異である。武事ばかりでは無い、晴信が若い時詩作に耽つたことを傳へ、現に信玄の作つたところの詩は十七首ばかり傳はつてゐて、禪僧達が加朱したか何樣か知らないが、中々刀槍三昧のみの人の詩では無い。北條早雲は三略の講義を聽いたが、信玄は其疾如風、其靜如林等の語を記した旗を用ゐてゐた。和歌も百首から傳へられて居り、賤の女が除箭の古歌を引いて公事訴訟を扱ふ士に示した談も傳へられて居る。すべて皆是れ公時から心を文事にも寄せたので無ければ、然樣はゆかぬもので有ることを示してゐる。其の時代の教育を受くるに堪へ、文或は自ら修め自ら養つた好青年であつたことを想はせる。然樣いふ青年を信虎が愛寵せなかつたらうとは思へぬことである。よしや何事かの因緣から憎嫉の念が段々と募つて、二男信繁を愛するやうにたつたのかも知れぬが、信繁の性質は何樣も推つて信虎には氣に染みさうには思はれぬのである。信玄が天凜や禪を學んだのは後の事で有らうが、文武兩道、何やら彼やらに達した人は、幼時青年時に於ても定めし好童子好青年で有つたらう。人物を重んじて知行をも惜まず與へ、人物の鑑識を大事として將たる者の必要條件としてゐた彼のやうな戰亂の世に、まして吾兒の事であるもの、何で觀察せずに居らう。然し馬が手きらひするやうに、人は人と相善しとせぬこともあるもので、所謂前世の讐敵のやうな蟲の好かぬといふこともあるものであるから、或は其の良い子を嫌ふことも有る。けれどもそんならば勝千代がまだ生長せぬ間に、嫌ひたら嫌ひであるべきである。叙任もするほどの年、將軍義晴より晴の字を貰つて晴信となるほどの年、三條左大臣公頼の女を娶つて女房にするほどの年になつてから、別段の所以も無く廢嫡したがるほどに嫌ひさうな譯は考へられぬ。何事か特別の事が有つて怒り憎むといふのでなければ、一族のおもはく、臣下民百姓のおもはく、他國のおもはく、世間の評判もあつて、親だからとて然樣勝手は振舞へぬものである。暗愚であるとか、妖姫などに迷溺してゞもあるとかならば、然樣いふこともも有るもので、世に多い御家騷動の種子にもなるものであるが、信虎は特別に暗愚でも無く、女色に溺れたといふことも無く、家中騷動してごた〳〵したといふことも無くて濟んでゐるのが不思議である。二郎を愛したゝめ、家中も晴信を誹謗したなどといふが、然樣で無くても家督爭ひは起りたがるものであり、擁立の功を立てゝ威を振ひたがるものも出るものであらうから、眞に晴信を信虎が惡み、晴信廢せられ、二郎立てられんとするの形勢が見えたものならば、謙信死して景勝景虎の戰つたやうな理屈で、信虎去つて晴信自立に際して、二郎殿を擁くものも出て來さうなところであるが、更に其樣子が無かつたのも不思議である。で、信虎の國を出たのは、父子相容れずして、晴信自立するに從つたとは思はれない。何か他に事情の有つたものと想はれる。そして其の事情は、表面に出てゐる父子仲惡しき結果といふ談をもつ

て掩ひ匿されてゐるものであると想つても宜からうと考へられる。

松平定能は文化の頃甲府城勤番支配に任ぜられた士で、在勤中幕府の内命を受けて甲州の事を調べたものであるが、豆州田方郡畑毛村西原豫右衛門といふ者の許に傳はつてゐる今川義元から甲府へ宛てた書状によつて、信虎は晴信に逐出されたり、あげつばを食はせられて駿州へ遷つたのでは無く、合點づくで駿州へ遷つたのであると斷じてゐる。但し駿州へ遷つた所以の委細は解釋して居ない。たゞ諸錄の記する所晴信を誹謗する者とは大に異なり、と云つてゐるだけの事である。其の義元の書は

内々以二使者一可レ令レ申候之處、總印軒可レ参候由承り候條令レ啓候。信虎女中衆之事、入二十月之節一被レ勘二易從一可レ有二御越一候由尤レ候。於二此方一も可二申付一候。旁々以二天道之相定一可二御本望一候。就中信虎御隱居之事者、六月雪齋並岡部美濃守進候刻御合點之儀候。漸向寒氣候每事御不辨心痛候。一日も早被二仰付一員數等具承候者被御方へ可レ有二心得一候旨申可レ届候。猶總印軒口上申述候。恐々謹言。

九月廿三日　　義元花押

甲府江参

といふのである。句讀反點は讀者の便宜に今施したので、元來は勿論無い。

義元の此書は下村三四吉といふ人も引用して、卽ち信虎は納得の上駿河に退隱せしにて決して從來傳ふるが如く信玄が苛酷に逐ひ出せしにはあらざる也と云つてゐる。且又、而して信虎を說得して退隱せしめたる所以に就きては、妙法寺記（勝山記）に記する所其の消息を示るべきものあり、と云ひて、同年（天文十年）六月十四日に武田太夫殿、親の信虎を駿河へ押越し御申候。餘に惡行を被成候故、かやうにめされ候、地家出家男女共に喜び滿足致候事無限、とあるを引き、蓋し信虎性殘酷剛愎にして人の言を容れず、平素の所行亦暴虐の事多かりしかば、士民心を離し、之を怨望する者あるに至、若し其儘になし置かば遂に如何なる禍亂の起らんも測る可からざるものあり、是に於て臣下の重立ちたるもの信虎を隱居せしめ、信玄を立てんことを圖れり、と云ひ、又、且信玄が信虎を退隱せしむるにつき之に勸說して納得の上駿河に赴かしめ、敢て非常手段を取らざりし證憑明らかなる上は、一も二もなく信玄を非難して大逆無道の老賊なりとは許すべからず、と論じてゐる。それで同氏は、余は更めて再言す、天文十年六月信玄今川義元と謀り、父信虎を說きて駿河に退隱せしめ、自ら家督を繼き甲斐の主となると、と論結してゐる。

大體に於て下村氏の說いたやうな事情でも有つたらうと想はれる。軍鑑の記する所を一概に信じて信玄を苛議するのは擔板漢の論である。然し義元の書中に、信虎御隱居之事者六月雪齋並ニ岡部美濃守進候刻ミ御合點之儀ニ候、とあるのは、解釋が二樣に出來る。雪齋と岡部美濃守とが駿州で信虎に對面した際に信虎が駿州に押越されて隱居することを合點したとも見える。然樣に解すると、松平豫州が國志に、信虎合點の上退隱して駿州へ遷りし趣明白なりとばかりは云へなく

なつて、信虎が駿河へ押入れられてから、雪斎、岡部美濃守の二人と會話を交換して、そして隠居することを合點したとも取れる。合點の上で隠退勧挽したのと、遷つてから隠居即ち家督拋棄を合點したのとは、大分に差がある。松平氏や下村氏の説のやうに解さうとすれば、雪斎や岡部美濃守が甲州へでも行つて信虎に隠居を合點させたやうに讀み取らなければならぬ。文氣を以て言ふと、信虎が遷つてから其節雪斎等に會つて隠居を合點したやうである。さなければ御合點之儀候と、わざく書状に記したのは異なことになる。で、若し然様いふ風に讀み取ると、隠居合點の上で駿州へ遷つたのでは無くなる。折角松平下村二氏が引いた義元書状も、信虎の身のまはりの世話をする女供を提供するといふ待遇上の事に於て冷酷で無いといふ證になるのみで、何等かの様式或は便宜で先づ甲州から信虎を駿州に遷してから隠居を合點させたやうになる。信虎逐出しの在來の談とは、たゞ信虎が晴信を甲州から逐はうとしたといふことだけが無くなつたのみで、矢張り信玄逐父の舊説通りになる。そして此の義元状によつて、六月に駿州へ遷つた信虎に九月末はまだ女供も提供せず、十月になつてから婢妾を送らうとしてゐるといふことが窺知られ、義元は徐澤花營の今川家育ち故、漸く寒氣に向ひ候、毎事御不辨心痛候、と信虎の朝夕不自由なのに同情して心配して遣つてゐるやうに聞え、何だか信虎の將來には頭陀行ばかりが臨死の格でしかつめらしく控へて居るやうに想はれる。下村氏は、旁と以大道之相定可御本望候とあるのを中略にして除いてあるが、御本望の三字が何となく人眼を射る。無論晴信へ與へた手紙だが、旁と以て大道の相定は、信虎が無事であつたから是の如くなつたといふ様聲。可御本望候は、御本望たる可く候と讀ませるつもりか。旁以より候までの十二字には誤脱があるか。御の字の傍に、イ道とあつたりなどするから、原書で讀んで見たいものである。何にせよ此の義元書状は讀み様次第で、餘り晴信擁護の役には立兼ねるものである。

書中に出て來る雪斎は臨濟宗の僧大原で、これは今川義元の謀士である。岡部美濃守は其名を知らぬが、岡部正綱の父である。蓋し今川の宿將であつて、子の正綱は後に義元の子氏眞の爲に節を守つて甲州勢と戰つたが、信玄これを招き納れて、三千貫の地と騎士五十人を附し、駿州清水の城を守らせた。山本勘助でも初は二百貫だつた。思へば雪斎も美濃守も今川家では大したものである。此の二人が信虎の事には關與してゐるのであつて、今川家の方、及び軍鑑其他にも二人が信虎一件には何様いふ風に與つてゐるのか少しも記してないが、主人の奥方の父と舅とに關する大事であるから、軍師と家老とが揃つて顔を出してゐるのも當然である。美濃守は後に義元の不興を蒙つて一時浪人したとあるが、それは何に因つてだか知れてゐない、信玄が其子正綱に寵として高祿を與へてゐるのも、其の忠勇を賞してのみの事だが、何だか考へ得て見たい。が、自分の知る限りでは、今川家の方から信虎一件に就ては何も知るべき材を得てゐない。

拠こゝで一寸自分の頭の中に閃くものがある。それは今川と武田との關係である。今川は一時副將軍とまで云はれた家で、内訌で一時衰へたが、それでも海道での大大名である。武田家とは義元以前は敵同士で、武田の方が小さくもあれば受太刀側でも有つたのである。信玄の生れた頃甲州へ攻込んで來た福島兵庫も遠州の者であるなら、當し今川の氣息のかゝつてゐたものであらう。其後々年大永二年遠州の久島といふ者が駿河遠江の兵一萬五千を率ゐて甲府まで闖入した事がある。駿遠の兵を率ゐて來たのであるから、是も今川家の氣息のかゝつたものである。當時信虎は非常に窮して、武田の者ども、自分自分の身の上のみを思ふやうになつた。幸にして信虎の家老荻原常陸といふ者が計略を以て久島を討取つたから事無きを得たが、此時信虎はつくづく一身のほかに味方は無い、敵が強い時は頼みに思うた者も我を助くるものでは無い、と悟つて、それから心も苛酷になつたといふことである。是の如く今川と相敵とし合つて、武田の方が苦んでゐるのである。義元を聟に取るに附けても、信虎は北條氏綱から強ひ取つた富士川北の地をも娘の化粧田として今川家へ渡したのである。義元に至つて復今川は振つて、海道では覇を稱したものであり、北條家は元來が今川をたよつて來て伊豆に落着いたものであり、徳川家なども既に家康公さへ最初は義元の元の字を受けて元康と云つて居られ、今川の旗の下のやうな狀になつて幾年を鬱屈して居られたのである。信玄に至つてこそ武田は雄を稱したが、それでも信玄が代になつての最初は、甲州の瞎將だの、若輩子だのまで他國ものに侮られて、瀨澤合戰の如きは大分に苦しかつたのである。是の如き勢であつたら、今川と武田とは武田の方が何樣しても下に附く譯で、叙位にしたところで、義元は從四位下、晴信は從五位下、實際の力も世間の用ゐも、少し差が有り、特に今川家は海道繁富の地に據り、文明の度は自然甲州より高かつたのである。で、義元は桶峽間の一戰で首を織田氏に授けて終つたから詰らぬ者のやうに見えるが、決して凡常の人でも無く、早くも上洛して旗を天下に立てようといふ雄志を有つて居たのである。武田氏と今川氏と縁家になつたのは、何の家から求めたことか知れぬが、當時今川家には雪齋和尚のやうな謀臣も有り、朝比奈、庵原、岡部、由比、三浦等、聞えた勇士も有つて、堂々たるもので有つたから、武田が今川家内訌の有つた時分のやうに今川氏に對した日には、寧ろ武田は併呑されぬまでも蠶食されるおそれが無いといふ譯には行かなかつたのであるし、小笠原、諏訪、村上、信州の諸大名も、中々弱敵では無いし、隨分危險の多い勢に在つたから、後から云へば今川は氏眞に至つて衰へ、武田は信玄に至つて振つたものの、當時に於ては、鋒刃を用ゐないで威を張る策からして、今川家より婿を求めらるれば、武田はいやでも之に應じなければならず、今川家から同盟を強ひらるれば厭でも攻守を共にする約を結んだ方が利益で有つたらうし、南は今川に結んで置いて、北の方は信濃大名に當つて地を拓いた方が、甲州を安全にして、自家を發展させる所以で有つ

たらうから、今川家の謀士から求めたにせよ、武田方の策士から考へ出したにせよ、どちらから云出しても、姻緣を結ぶことは弊を滅くし利を生ずる所以で有つたから成立つたのであらう。して兩家が結ばり付けば、大きな露の球は小さな露の珠を引寄せる道理で、それは何樣しても武田方が致される譯になる。言はず語らず武田家から人質、と云つては緣つゞきの中で角立つが、晴信か、晴信が代がはりで家督になるなら他の誰かを、客あしらひして駿河へ引寄せて置くこと、其昔頼朝が義仲の子息の清水冠者を鎌府に留めたやうにしやうとしたのでは有るまいか。今川武田が一度も喧嘩したことが無い家ならばいざ知らず、相爭つたことの有る以上は、双方を結びつけるに引力の大きい者の方から其の要求を出したとて不思議は無い。誰が雪齋であり美濃守で有つても、緣組したゞけではまだ不足に思つて、人質とは云ずに客遊させて、といふ名で、其實は質を取りたくは無かつたらうか。晴信に駿河へ行くやうにと信虎の言つたのもまんざら形の無いことでは無くて、信虎の腹で惣領をやりたい事はないから、惣領は惜くも可愛くも無い甚六拔作のやうに扱つたり罵つたりしたのも其爲であつて、先方さへ承知なら次男を代りに遣らうの思案で有つたが、駿州にも目の稍のはづれた者は有るから、それでは滿足しないので、愈々惣領で無ければ滿足しないとならば晴信を一二年遣る分だ、何時でも呼寄せられるやうにして置いて、と甘利備前へ預けて置いて、そして自身駿府へ行つて、も一度突張つて見て、出來るならば愛子を粧ふてある次郎を遣らうと、いくら俗謂の人でも五十に近い戰國の老猾だ、自身出向いた、ところが晴信は今川へ行つて清水冠者になるのはもとより厭だし、内々は自分の代になつたらといふ功名心は燃やしぬいてゐる。老臣宿將達は、久島以來、信虎が愈々剛愎自ら用ゐて、隣の者七十五人を旗本にして我存一ぱいに振舞ふのに心を離してゐるし、國人も亦御屋形樣に畏れては居るが懷いては居ないのを見て取り、主人と一緒になつて晴信を腑ぬけのやうに云觸してもそれは虛言なのが駿河にも知れてゐるのを悟つて見ると、これは寧ろ若殿を今川に渡すよりも殿を隱居にして終つて彼方へ置いた方が、此方には大吉利市で、彼方にも十二分であらう、隱居とは云へまさかに親を見棄てゝ異心を立てはすまいと彼方でも思ふだらうと考へ、信虎に隨つて行つた臣下の中の誰かから今川方の所存を探らせると、小の蟲を獲るより大の蟲を獲れば今川でも十二分であり、晴信を立てゝやれば甲州は自然駿河の藩屏となる道理と、雪齋にせよ美濃守にせよ物分りは早い人達で、そこで信虎が何を云つても關はず、押へたパッタにして終つて、馬鹿を見たのは信虎ばかり、他は皆三方四方不足の無い外交成功になつて終つたのである。ト斯樣に運命の解釋をすると、ハヽヽ、當つたの當らぬかは別として、一寸面白い。たゞ其跡を論ずれば、矢張り信玄父を押越したことになる。飯富兵部と板垣駿河、雪齋和尚と岡部美濃いづれも佳い魚を手際よく料理するに手だれの者等で、何處かに無理が有つても人に旨く食はせて終へば身の

立つのである。貧乏籤を魚に背負はせるのに遠慮は無いのである。信虎が「だしぬけ」を食つた、だしぬかれた、とつぶやいたは眞に其通りである。晴信はまだ若い、如何に偉い奴でも、聰い人でも、自分が魚箸を使つたのでは有るまい、親父を勘當する藝當をしたのではあるまい。北では板垣信方で、南では雪齋岡部で有らう。後になつて見ると、成程晴信は義元存生中は義元の爲になつて居り、今川北條聯合の時は兵を出して今川の爲にもなつてゐるが、これが思ひのほかに容易ならぬ者であつたから、義元が岡部に對して、それほどの者に隱居させたのも腹の底は見透せる。信玄も功を積んで來ると世の中が分つて來る。板垣が戰に負けた時、負けた板垣を辯護して褒めた事さへあるが、其後碓氷峠の大戰で板垣一手で上杉勢を破つて大功を立てた後には、信方の倅の彌二郎の扇子に、滿れはやがて缺く月の古歌を書いて與へた。それを見てから板垣も心に虚が生じて、變になり、流石の弓矢功者も戯けて戰死して終ふ。飯富兵部も信玄の子太郎義信逆心に坐して劍を賜はり自殺、家柄斷絶である。恐ろしいことである。

義元存生中は別殿として信虎は大切にされた。自ら我卜齋と號したといふが、我卜とは異な雅號である。我と自ら然樣いふ身になつたといふので、我卜齋である故、信虎より後の人で、ヒヨット齋の號も思出されてをかしい。義元は信虎を敬して而して留めて去らしめなかつた。信虎は信玄の師であるから、何で義元が放たう。然し義元が死んで後に義眞の世になつた。義眞は凡人の代表である、決して愚人では無い、何も彼も大概は出來た人だらうが、大名としては仕方の無い人で、自分の父を殺した信長のために鞠を蹴たと云はれてゐる。晩年に及んで家康公は今川家と幼時の關係が有つたので、氏眞を憐んで御想になされたが、其後氏眞は公に謁することにべん〳〵だら〳〵とない長談をするので、根氣の強い家康公もげんなりなされて、段々疎んぜらるゝに及んだといふ。斯樣いふ人と信虎とであるから、双方定めし嫌な奴だと思つたことだらう。それでも氏眞の方は信虎を大切にして家に留めて置けば、信玄が今川家に不利なことをすることは出來無い。義元は實に立派な保險を附けて置いて與れたのである。それたのに氏眞のやうな人に會つては、何も彼も有つたものでは無い。信虎を邪魔者餘計者のやうに扱つた。永祿三年に義元が死んで、永祿六年の正月には既に信虎は遠州掛川圓福寺に移つてゐて、誰か我が方へ人を遣せといふ使僧を甲州へ遣つた。信玄は日向源藤齋といふ者を出發させた。正月十七日に源藤齋は圓福寺へ着いて我卜齋の信虎に謁した。信虎ははや七十になつてゐた。そして義元戰死の後、我を祖父にして扱はぬから此の圓福寺に移つた、國を出た翌年駿府で男子一人を擧げた。義元はこれを小駒御料にして、騎二十を預けた。上野守と名乘つて、當年二十五歳になる。上野守が十六歳の時に擧げた子を勝千代と名づけた。これが今年十歳になる。上野父子に迴されて、此寺に去年より居るが、氏眞が今は上野父子にさへ冷淡千萬である。自分はこれより三日の中に上洛して京に住む。公卿の菊亭殿に、上野の妹の菊を義元存生の時祝言させて呉れたから、婿の菊亭をたよりて京へ上る。上野父子を信玄に賴むと云へ、と云つたといふ。それから又其夜更けて源藤齋を招んで、信玄に恨は有るが過ぎて久しいことだ、信

玄にも道理は有る、今信玄の名の盛んなるを耳にして祝着に思ふと信玄に云へ、と云ふことであつた。

それから又信虎は、今川家は大抵十年内外に滅びるであらう、氏眞は遊興を好み、政道武邊の心掛も無く、三州岡崎の家康は義元によつて岡崎へ直つたが、今は氏眞を見限り、信長に親んでゐる。駿遠三は家康信長に取られよう。とて織田徳川今川北條等に對する批判を聽かせて、信玄に云へ、といふので、源藤齋は信虎直判を受けて證として、歸つて信玄に逐一を語つた。信虎は其の十九日に立つて上洛した。信玄は信虎の言には餘り注意を拂はぬやうに見えた。

信虎がまだ駿河に居た間に、竊に人を京都に遣り、大將軍義輝に歎訴して國へ歸ることを請うたこと再三に及んだ。そこで義輝は上野秀政を使として晴信を諭した。信玄は體よく之を斷つたことがある。室町殿日記の記するところである。信虎は氏眞の自分に注意せぬのを幸として、終に京都へ奔つた。義輝は信虎を相伴衆とした。そして將軍家の桐の紋章を信虎に許したといふ。桐の紋など貰つても致方も無いが、義輝も當時實權が無かつたので、遣れるものは紋位であつたらう、情無い談だ。やがて其の將軍も八年の五月、眉尖刀を揮つて自ら戰つたのも甲斐無く、松永彈正に殺されて終つた。十一年には晴信が氏眞を逐出して終つた。信虎は漂浪して後、甲州へは歸れず、伊奈に置かれて、そこで終つたと云はれてゐる。軍鑑には勝頼と信虎對面のところが描いてあつて、桀驁の性、老いて愈々辣く、信虎が刀を揮つたので、小笠原慶庵が刀を奪つた一幕が有る。まるで狂人の沙汰であるが、それは天正二年九月の事としてある。天正二年の三月五日に死し、五月五日には春國和尚が、逍遙軒手寫の信虎像に題した讃さへ出來てゐる。軍鑑は何を書いてゐるのだらう。春國の文中、庵主（信虎を指す）之謂老不惑の時、一朝袂を分つて胡と成り越と成り、終に鱗鴻を通ぜず、徒らに傾を想ふ者は何ぞ、河陽滿縣之桃花、衣に襯する者片々たり、河陽左衛之梅花、襟を襲ふ者芬々たり、□□□三十有餘年の後、意はざりき樂郷の一曲を聽かんとは、是れ烏鉢の華か、合浦の珠か、鬼神も測る無し、三家村裏の野老、萬歳を唱へ、太平を賀するに至つて、嗚呼命なり、斯の人にして斯の疾有るや、今茲孟春の末、訃音忽ち至る、感慨の餘涙、猿も亦叫び、鵑も亦啼き、人も亦慟きて而て涙雨晴れざる者連日也、況んや孝子の哀慕するをや、云々、とある。烏鉢の華、合浦の珠、と云つてあるところを見ると、故郷近く還つて忽ちに死んだやうである。信虎三十餘年の放浪、信虎も亦業縁消盡したであらう。そして信玄も亦其前年死んでゐる。信玄死して、遮ゆるもの無く、甲府へ歸つて死んだのか、文が妙に修飾してあるから不明であるが、不意聽樂郷一曲とあるから、多分然樣であらう。

信虎が今川家に在つた間は隨分短くなかつた。其間は今川家武田家相爭ふことが無かつた。信虎が氏眞時分に、武田刑部入道など〻嘲けらる〻に及んで、又其の監視が緩んだのを幸ひ、駿州を出ようとしたが、氏眞も一度は抑留して、引間（濱松）の大聖寺に置いたとあるが、遂に京に奔るに至つて、信玄は忽ち今川家と弓矢の沙汰に及んだ。信虎信玄の間の事は、何樣もたゞ武田一家の間のみの事では無く、武田今川兩家の間の事のやうである。そして當時の人も、昔も、之を記するを諱んだ爲に、妙に不可解の事になつてゐるのではあるまいか。

編輯だより

◇第一回普選による縣議選擧は近まつた。無産黨も世の物笑ひとならぬやら大局、高所に眼をそそいで邁往してもらいたい。同志打ちや、選擧にきたないことをせないやら徹底的にやつてもらいたい。

◇政友が勝とうが、民政が有利であらふがどちらでもよい。ただ選擧民は選擧の結果を愼重に考へてもらいたい。そしてその人物、主張の兩面より精察して悔いなき一票を行使すべきである。

◇私どもも單に政黨員ばかりをコキ卸したくない。それは一流學者、文藝家の論爭でも、この頃は眞正面から堂々と論ぜず、實際の態度すたれ揚足取に類し、甚しきは罵詈嘲笑をこととする。そしてその重點主流を衝かず、もしくはその人の古き著作を引つ張り出してどうのこうのするは學に忠實なるものといふことは出來ない。遺憾ながら本誌の上にもそうした傾向二三を見るのは眞に殘念のことである。罵詈嘲笑は自他、社會に百害ありて一利なし、私どもはこうした風潮の我國になくなる爲に眞劍に努力すべきだ。

◇現代日本文學全集の十月配本は「芥川龍之介集」のつもりでありましたが、いろいろの意味で準備や交渉がつかず少々遲延します。そのかはり代表作はのこらず網羅して會員諸君の滿足さるる集となしたいと思ひます。「德富蘆花集」は「不如歸」、「自然と人生」、「思出の記」、「黑潮」の四代表作が一頁の省略なく這入ります。その他の名文も採錄します、そして病蓐の中から筆をとられた序文さへ登載します。此集についても私どもは讀者とともに喜びたいと思ひます。

◇「永井荷風集」は配本がすみました。「おかめ笹」「新橋夜話」の二代表作が這入つたことは一つの喜である。

◇小説「[illegible]」は筆者の希望により中止することとなりました。

◇雜誌「改造」はいろいろの意味で二三ヶ月すこし見劣りのするものを編輯して申譯がありませんでした。しかし、漸く諸般の準備成り、新秋と共に大飛躍を遂げます。そして我々の赴くべき方向を適確に指標したいと思ひます。

◇懸賞應募小説はポツポツ集まつてまゐりましたがどうか幾度も申します通り楷書で入念に認めて下さい。

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	五拾錢	參錢
半ヶ年	參圓	郵稅不要
壹ヶ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の際は發送を停止す
▲增大號其他臨時增刊號の時は定價に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

（價五拾錢）

昭和二年九月十八日印刷納本
昭和二年十月一日發行

東京市麴町區內幸町一ノ三　幸ビルヂング
編輯兼發行人　山本三生

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍

發行所　東京麴町區內幸町一ノ三　幸ビルヂング一階
改造社
振替東京八四〇二
電話銀座四五〇八　一四五八
營業部一五〇四六
編輯部一七三三

『マルクス資本論』の豫約募集

『マルクス』資本論は現代思想の大根幹をなす。本書を一讀せずして現代を語ることの不能であり、僭越であることは衆口の一致するところ。今茲に本書を通じて社會に、人生に關心する學徒のために世界で一番の廉價本として本社から發行することとした。
大方の士は本社の意のあるところを諒とせられて坐右に一本を備へられんことを希望する。

邦譯資本論序文

高畠素之

新改譯版について

茲に刊行する新改譯版は、舊改譯版（新潮社版）を基礎として幾多の訂正を加へたものである。訂正の大部分は、誤植、誤字の改修以上に出でなかつたが、なかには譯法に於いて可なり本質的の訂正を加へた點も少なくない。

舊改譯版に對し、小泉信三、堺利彦兩氏より注意を與へられた個所については、熟讀の上、十分兩氏の示教に準據したつもりである。茲に兩氏の好意を謝し、併せてこの新版に對しても、諸家の忌憚なき示教を希求する次第である。

尙。この新改譯版を以つて、一先づ拙譯資本論の定本たらしめんとするものであることを附言して置く。

舊改譯版序文

私が『資本論』の飜譯に著手したのは大正八年七月、最終の分册を刊行し了へたのは大正十三年七月、その間正に五年の星霜を閲してゐる。同一出版物の勞作期間としては可なりに大きな年月と言はねばならぬ。勿論、その間には種々なる餘技的享樂に時間を浪費したこともあるから、五ヶ年の全部を『資本論』のためにのみ沒頭したとは言ひ得ないが、然しこの間に於ける私の注意と努力と時間の主要部分が、『資本論』刊行の一目的に集中されてゐたことは事實である。

それで昨年七月、最終分册を刊行し終つたとき、私の過去五年間の努力は曲りなりにも大成された譯であるから、私としては大いに重荷を卸した氣分になり、祝盃の一つも上げねばならなかつた筈であるが、事實は更らに苦痛を加へるのみであつた。それは私の過去に於ける努作が、甚しく不出來に終つたといふ自意識に原因を置いてゐる。

私の飜譯は、何よりも先づ難解であつた。譯者たる私自身が讀んで見ても、原文を對照しないでは意味の通じない處が無限にある。これは一つには『資本論』の名に脅威されて、私の譯筆が餘りに硬くなり過ぎたことにも起因してゐる。現に『資本論』以外に刊行した『資本論解説』の方は、不出來ながらも難解の缺點は比較的少なかつた。『資本論』も解説一程度にやつてやれぬことはなかつたであらうが、何分にも硬くなつてしまつて日本文の體をなさなくなつた。

第二に、純然たる誤解とすべきものが少なからず見出された。これは大抵ケーアレス・ミステークとして恕し得べきものであつたが、中には私の實力不足に依るものも可なりあつた。

第三に、印刷上の誤植その他不體裁の點が少なからず見出された。ことに舊版第一卷第一、二册の如きは、刊行を急がされたためでもあらうか、隨分物笑ひになりさうな缺點を含んでゐた。

然し、誤譯や誤植を改めるのには、さして時間と努力を要しない。一番困難なことは、難解の譯文をいま一度原文と對照して、日本人に解る日本語に全部譯し換へることである。それも此々たる小册子ならば兎も角、大册三卷に亙り一難去つて更らにこの苦戰をきり拔けねばならぬかと思ふと、さう思つただけで氣が詰りさうになる。それほど、私の神經と理解性の尖端は『資本論』のために麻痺し盡されてゐたのである。

然し、私としては、どうしてもこの仕事だけは完成せねばならぬ、原本が原本だけに恥を後世に遺すやうなことがあつては申譯がない。十分とは行かぬ迄も、せめて日本文が讀めると限定したマルクスから、一流の冷笑を以てあしらはれないだけの成績は收めて置きたい。舊版は正に自ら失敗であつたが、第二戰に於いては少なくとも此處まで漕ぎつけたい、といふのが絶えず私の心頭にこびりついて離れない念願であつた。

さういふ決心を以て着手したのが、この改譯版である。忠實、簡潔の二點は勿論不動の出發點として、それ以外、この改譯版で最も力を罩めたのは、舊版の最大缺點たる難解を一掃して、出來得る限り理解し易い日本文の『資本論』を綴ることであつた。この點に於いて私の努力がどの程度まで功を奏したかは、勿論權威ある評者の評價に待つ外はないが、私としては全力的に精根を絞つたつもりである。時間も可なり費した。昨年八月から着手して、少なくとも昨年一杯には第

一巻だけは仕上げるつもりであつたが、何分にも手入れを要する個所が多く、今月に及んで漸く第一巻を完了したやうな始末、その間十ヶ月は文字通りこの仕事のためにのみ沒頭して來たのである。

改譯については、カウツキー編纂平民版資本論が非常な助けになつた。再版序文にも斷つた通り、私の語學は英獨二語に限られてゐるため、その他の國語で原文のまま掲げられてゐる脚註や引抄は如何とも齒が立たぬのであるが、カウツキーの平民版にはそれが全部ドイツ語に飜譯されてゐるので、この點が先づ助かつた。次に、言ひ現しの曖昧な點、難解な點や、句切りの長い處などは、すべて讀者の便宜を標準として手際よく編纂されてゐる。これらの點も出來得る限り、平民版に從つたが、然し全體の骨子は猶拙譯版通り原本第六版を基礎として、平民版の編輯秩序には準據しなかつた。

以下、讀者の便宜のため、『資本論』全體の成立につき簡單な叙述を與へて置く。

マルクスは第一版序文中にも言つてゐる如く、最初本書を三巻に分つ考であつた。卽ち第一部『資本の生産行程』を第一巻に收め、第二部『資本の流通行程』と第三部『資本の總生産行程』とを第二巻に充て、第四部『餘剩價値學説史』を以つて第三巻の内容たらしめようとしたのであつた。

彼れは第一巻執筆當時、既に全三巻の主要部分をあらかた脱稿し築き上げてゐたのであるが、病氣のため第一巻を完成したきりで、一八八三年三月十四日その第三版印刷中にこの世を去つた。

彼れの死後、エンゲルスは第二巻の編輯に着手したが、その編輯中、彼れはマルクスの最初の計畫を變更して、第二巻には前記の第二部、卽ち『資本の流通行程』のみを含めることを適當と信じた。斯くてこの第二巻は一八八五年五月五日（マルクスの誕生日）、第一巻に後るること正に十八年にして漸く刊行を見ることになつたのである。

第三巻の刊行は更に後れた。一八九三年七月、第二巻再版の公にされたとき、エンゲルスは尚第三巻の編輯に從事してゐた。それが初めて公にされたのは、一八九四年十月四日、第一巻を距ること實に二十七年の後であつた。第三巻はこれを上下に分かち、マルクスが最初第二巻の後半として計畫した前記第三部『資本の總生産行程』を取り扱つた。

第二、第三兩巻の發行が斯く長引いた事と、マルクスの原稿を整理するに當つての困難とについて、エンゲルスはこの兩巻の序文の中に、立ち入つた叙述を與へてゐる。彼れはその勞作に對する彼れ自身の貢獻を努めて低下しようとしてゐるが、事實彼れの苦心努力が如何ばかりであつたかは、到底筆紙に盡し難き所であらうと思ふ。彼れは數年間にわたる衰視のため、人工光線の助けに依つて辛うじて筆を手にし得るに至つたことを第三巻序文中に述べてゐる。實に『資本論』はマルクス、エンゲルスの嚴密の意味に於ける共同の作とい

ふも過言でない程、エンゲルスの努力に負ふところが多かつたのである。

エンゲルスは、マルクスが第三卷として計畫した前記の第四部『餘剩價値學説史』をば第四卷として刊行する豫定であつたが、その目的を達せずして不幸協勞者の跡を追つた。それは一八九五年八月六日、第三卷が刊行されてから、わづかに一年足らずの後であつた。

然し、彼れはかねてこの事あるべきを覺悟してゐたので、死に先だつ數年、ドイツ社會主義者中の碩學カール・カウツキーに第四卷編輯の任を託したのであつた。カウツキーはエンゲルスの死後この事業に着手したが、材料が餘りに豐富であつたため、これを獨立の一書たらしむるを適當と信じ『餘剩價値學説史』と題して刊行した。これは前後三卷より成り、第一卷は一九〇四年十月、第二卷(二部より成る)は一九〇五年八月五日、第三卷は一九一〇年三月十四日に發行された。目下森戸辰男氏等の手に依つて、これが邦譯進行中と聞く。學界のため、大成を所望するものである。

邦譯第二卷は比較的手入れを要する處が少ないから、引續き刊行し得る豫定であるが、第三卷は相當の日子を要するであらうと豫期される。然し成るべく速成し得るやう、努力を集注することは言ふ迄もない。

終りに臨み、本書完成のために蔭ながら好意と間接の鞭韃を與へられてゐると聞く學界の一二權威者に對し、茲に特記して謝意を表する。(大正十四年五月九日　本郷に於いて)

邦譯資本論批評一班

高畠氏の全譯「資本論」

安部磯雄

……私も二十三年前友人の勸めにより「資本論」の飜譯に手を染めたことがあつた。然し「資本論」の讀者には十分了解の出來るやうに、これを判り易く日本語に譯することは容易の事でない。毎日學校で授業する暇に此の如き難澁なる大册子を譯することは殆んど不可能ではないかと考へられた。のみならず私がよし不完全ながらも其れを飜譯し終つたとした處で、明治三十年代の政府が果して其出版を許すであらうかどうかといふことは疑問となつた。此二つの理由が遂に私をして飜譯を斷念せしめたのである。

私の僅ばかりなる經驗によるも「資本論」の飜譯は實に難

事業である。一頁を譯するにも二三時間乃至四五時間を要する。自ら譯した部分を讀んで見れば、自分では勿論解が出來るけれども、他人が讀んで其意義が判るかどうかと考へる時私は何となく心細さを感ぜざるを得なかつた。

高畠氏も言うて居る「私の飜譯は何よりも先づ難解であつた。譯者たる私自身が讀んで見ても、原文を對照しないでは意味の通じない所が無限にある」これがため高畠氏は以前の飜譯に修正を加へて…出版することにした。新版に對する譯者の抱負は序文に現はれた左の一節によりて知ることが出來る「然し私としては、どうしても此仕事だけは完成しなければならない。原本が原本だけに恥を後世に殘すやうなことがあつては申譯がない。十分とは行かないまでも、せめて日本文が讀めると假定したマルクスから、一流の冷笑を以てあしらはれないだけの成績は收めて置きたい」

私は新譯の「資本論」の一部を讀んだに過ぎないから、これに對して詳細なる意見を述べることは出來ない。然し私は高畠氏の飜譯に就ては常に敬服して居る一人である。カウツキーの「マルクス資本論解說」も高畠氏の手によりて飜譯されたのであるが、私は嘗て早大の學生に參考書として使用せしめたのであるから、私自身もこれを熟讀したことがある。

比較的難解である原書をかくも判り易く飜譯した高畠氏の伎倆から推測すれば、同氏が「資本論」の飜譯にも成功して居ることは少しも疑ふ餘地がない。私は第一卷に於ける最初の數十頁を讀んで見たが、經濟學の預備知識を有する人でさへあれば何等の困難なくして其意味を了解することが出來るであらうと考へた。高畠氏は實に我國の讀書子のために知識の寶庫を開いて與れたのである。數百萬乃至數千萬の社會主義者によりてバイブルの如く尊重されて居る「資本論」は今や高畠氏の手によりて我が日本語に飜譯された。明治十二三年頃、基督教のバイブルが日本語に飜譯された時には、日本及び外國人から成る約十人の飜譯委員によりて行はれたといふことを聞いた。其の後改正譯の出來た時にも多人數の委員によりて成されたことは言ふまでもない。

「資本論」は其難解なる點に於て遙にバイブル以上であると同時に、其の量から言うてもバイブルが二つであれば「資本論」は三の割合である。然も高畠氏が獨力（多少の援助はあつたにしても）で此大事業を成し遂げたことは實に學界の驚異に値する。

本書には本文の外に譯者の序文第一版原著者序文、第二版原著者序文、第三版編輯者序文、第四版編輯者序文を載せ、卷末には本文に用ゐた譯語に對する原語及び譯註が附してあるから、讀者はこれによりて多くの便宜を得ることが出來る。（時事新報）

改稿「資本論」

小泉信三

五年前高畠氏の資本論和譯第一卷第一册が出た時にも書いたことだが、今から凡そ二十年前福田博士が「慶應義塾學報」(今の三田評論の前身)に「社會主義研究の栞」といふ一文を載せて、當時の幼稚な社會主義研究に大なる刺戟を與へたことがある。當時博士は資本論の日本語譯などは思ひも及ばぬ事として、せめてその英譯だけでも完成すればいゝといはれたのであつた。

「何れ遠からず續々譯本が出ることゝ確信する。和譯も是非出來ねばならぬのだが、誰かそれだけの忍耐と、根氣とを有するであらうか。何の道まうかる事ではあるまいから、急にはその人を得難いであらう。それより先に兎に角英譯の完成せんことこそ望ましきである。」

當時博士は又別に「難解なる「カール・マルクス」なる一文を草して資本論の難解を歎ぜられた。この一文は當時の學生をして資本論を一種神秘的なものゝ如く感ずるに到らしめた。人は一方切にその內容を知らんと欲すると共に、他方濫りに手を觸れてはならぬものとしてこれを恐れたのである。然るに今日評者等の接觸する青年學生に就いて見受ける所によれば、この人々は特に資本論の前に萎縮しては居らぬやうである。アダム・スミスを讀み、ミルを讀み、或ひはマアシャル、ピグウを讀むことを恐れぬと同樣に——理解の十分不十分は暫く措き——資本論を手にすることを更に昔のやうには恐れて居らぬ。この種の研究は一般に、過去二十年間に實に著しい進步を遂げた。併しその間にあつて特に高畠氏の資本論和譯がこの大著に對する故なき恐怖心を除くに大功があつたことは、何人も認めざるを得ぬ所であらう。多くの者はこの譯文を讀むか、あるひは譯本を賴りにして初めて原文に向ふ勇氣を奮ひ起したのである。

資本論全三卷の飜譯は一旦昨年七月を以て完成した。然るに高畠氏自身は尙その譯文に不滿を感じて、新たにその訂正を企て、ほとんど一年を費して今先づその第一卷の改譯を成就したのである。前年資本論第一分册の出た時、福田博士は譯文を評して、痛々しきまでに忠實綿密なるものだといつた。その評言は無論譯本の長所を擧げたものではあるが、同時にその短所にも當つてゐた。譯文は忠實綿密なるの餘り暢達自由の趣を失つて、確かに讀者に痛々しく感ぜしむる嫌ひがあつたのである。譯本の第二第三卷と第一卷とを比較したものは、概して後に譯出せられたもの程、讀み易くなつてゐるのに氣付いてゐるであらう。それは原文も第二三卷の方が平易(冗漫なると共に)なるにも由るかと思ふが、何よりも譯者が漸くマルクスに慣れ來つた結果なることは爭はれぬと思ふ。譯者もこれを自認してゐる。

「私の譯筆が餘りに硬くなり過ぎた……」

高畠氏の改稿の努力は主にこの硬直を一掃することに向けられたのである。

前年第一分册を紹介する時、私は漫然譯文の二三節を抽出し、これを原文英譯文と併記して讀者の參考に供したが、今再びその同じ箇所に就て新舊兩譯文を對照すれば、譯者努力の一端がうかゞはれる。左の如くである。曰く

「勞働力の所有者は死を免れない。されば彼の市場への出現が貨幣の永續的な資本化がそれを前提する如く永續的である爲には勞働力の販賣者は「總ての生きた個體がみづから不滅にすると同じやうに生殖に依つて」みづからを不滅にしなければならぬ。磨滅と死亡との爲に市場から取除かれた勞働力は、せめてそれと同數と新たなる勞働力に依つて絶えず補充されなければならぬ。故に特殊の商品所有者なるこの種族が商品市場にみづからを不滅にする爲には勞働力の生産に必要なる生活資料の高は補充勞働者即ち勞働者の子女の生活資料をも含んで居る」（舊譯二八五頁）

「勞働力の所有者は死を免れない。そこで市場への彼の出現をば、貨幣の永續的資本化に要する如く永續的ならしむる爲には、勞働力の販賣者は「總ての生きた個體がする如く生殖に依つて」自己を不滅ならしむる事を要する。消耗と死亡との爲、市場から引上げられた勞働力は、少なくとも同一數の新なる勞働力に依つて絶えず補充されねばならない。されば勞働力の生産に必要なる生活資料の總額中には、補充勞働者（換言すれば勞働者の子女）の生活資料も含まれることになるのであつて、斯くすることに依り、特殊の商品所有者なるこの種類は、商品市場に自己を不滅ならしめるのである」（新譯一九三頁）

又曰く

「勞働日の延長に對する衝動を餘剩勞働に對する人狼式の渴望を、我々は之まで、アメリカ印度人に對するスペイン人の發行にも劣らない（とさうあるイギリスのブルジョア經濟學者が謂つて居る）無制限な暴行の爲に資本が遂に法令の鎖に縛られるやうになつた一部面において觀察した。そこで次に、勞働力の吸ひつくしが今日たほ無拘束であるか、或ひは昨日までさうであつたか、その何れかの若干生産部門に一瞥を投じよう」（新譯四三七頁）

「資本の無制限的違法行爲はスペイン人がアメリカ印度人の上に加へた殘虐にも劣らないとは、ある英國ブルジョア經濟學者の謂ふ所であるが、以上の叙述においてはかかる違法行爲が遂に法律上の拘束を受くるに至つた一部面について、勞働日を延長せんとする資本の衝動、換言すれば餘剩勞働に對する人狼的(註)な渴望を觀察したのである。我々はこれより轉じて、今日尙ほ勞働搾取が自由に放任されてゐるか、又昨日までさうであつた若干の生産部門に一瞥を投じよう」（新譯二九三）

改稿の效果は十分顯著である。

譯者は飜譯の底本として獨譯同[illegible]エンゲルス校訂の第六版とし、カウツキイ校訂の平民版に依つてこれを補正して居る。人も知る通り、資本論に就いては、マルクス自身校訂の第二版とエンゲルス校訂本とカウツキイ校訂本との間に多少の長短がある。エンゲルスはマルクスの意を體して第二版に增訂を加へたのであるが、他面不用意なる誤植脫漏を新に輸入した。カウツキイは第二版に據つてこれらの誤りを正したが、彼は勞働者をして資本論に近づき易からしめんことを主眼としたので、マルクス自身が佛譯本の爲に加へた增訂中、マルクス自身の指圖なき分までを採用して居るから、カウツキイ版を底本にすることには多少の異論なきを得まい。高畠氏の如くエンゲルス版を底本とし平民版を以てこれを補ふといふのは、最も穩當の處置としてマルクス學者の承認する所であらう。エンゲルスの目を脫れた誤譯誤植誤脫等にしてカウツキイの指摘したものには譯本には皆訂正せられて居る。

飜譯書における誤譯の有無といふことは讀者の最も興味を感ずる所であらう。本書に就いて言へば原著者第二版序文（一六頁）に

「續いて一八二〇年から三〇年に至る時代は、經濟學上の科學的活氣を以つてイギリスの特徴とした」

とあるのは、正確にいへば、一八二〇年から三〇年に至るまでの時代が經濟學研究の旺盛を以て顯れた時代であるといふべきものかと思はれる。評者の判定は正しくないかも知れぬが、余が本書の大なる部分を通讀して心付いた不審は僅にこれ一つであつた。

譯者は冗漫を厭ふことが甚しい。一字の無駄をも省かうとするものである。普通に視力衰弱といふを衰視となし、人口法則自然法則といふを人口律自然律といふが如きは、その一例である。この緊縮のため、讀者は休息の餘裕を與へられないで、あるひは窮屈を感ずるかも知れぬ。併し譯者のこの文章緊縮の努力は評者の同感に堪へぬところであるから、これを本書の缺點と數へることを欲しないのである。（東京朝日新聞）

「資本論」改譯を讀んで

吉野作造

一

高畠素之君の改譯「資本論」新版第一卷を手にしたのは二ケ月も前のことである。資本論を譯するといふ事すらが大事業であるのに、今度の新版の譯筆の餘りに平明流暢なるに敬服して、同じく學界に棲息する一人として何かいはずにはをれぬやうな義務心を感じたのであつたが、專門外の事に手を出すまでもあるまいと思つて實は久しく控へてゐた。その後

ひまを見てはちよい〱讀んでゐるが、讀めば讀む程能くも斯うまで分り易く日本文に移したものだと、たゞ〱敬服するの外はない。專門家の立場としてはすでに安部磯雄、小泉信三諸氏の批評が新聞に出てゐたが、私はこゝに全くの門外漢としての感想を述べて見たいと思ふ。

「資本論」の邦譯が日本今日の盛運になかるべからざることはいふまでもない。しかしその譯者として高畠素之君が最適任者であることも今日もはや論はない。それは高畠君がすでに一度にその飜譯を完了して第一版を公にしたからばかりではない、從來の種々の著作によつて同君がマルクス學の深い蘊蓄を有せらるることが明であり、またかず多き他の譯書によつて外國語にくはしく日本文に熟達せるを示されてゐるからである。マルクスの原書の難解なること、しかもあの浩瀚なる大册を譯了するには無類の根氣を要することなどを思へば、その飜譯に適する人はよしあつても、その完了を期待し得る人は滅多にあるものでない。この點において高畠君は、懸け値のないところ、資本論の邦譯に當り得る當今唯一の最適任者であるといはなければならぬ。

ゆゑに邦文によつて「資本論」を讀まんと欲する者は、善くも惡くも、高畠君の譯本によるの外はない。今日同君の外に之が飜譯に取り掛かる人のあらう筈なく、又誰がやつたつて高畠君以上にやつてのける見込はないからである。だから私はいふ、出來榮の如何に拘らず、高畠君のこの本は今日のわが國において有し得べき唯一の權威ある邦譯であると。

唯一の權威ある邦譯だからとてそのものが非常いゝかどうかは別問題である。外にこれ以上のものが出來さうにないからとて、そのもの自身が完全無缺だといふ譯には行かぬ。そこで高畠君の邦譯「資本論」を、この意味合から改めて檢討して見ることにする。第一に問題となるのは、邦譯が正確かどうかであるが、この點は專門家たる小泉信三氏の批評に任しておく。安部磯雄氏も時事新報において譯文の正確なるを保證してをられたやうに記憶する。第二に問題となるのは、譯文が普通の日本人に容易に理解され得る程度にこなされてあるかどうかである。私は實は主としてこの點から高畠君の譯本を見た。これ即ち私が一門外漢として同書を卒讀した感想を述べるといつた所以である。

二

門外漢というても、マルクス「資本論」の如きは誰でも讀んで見る本ではない。相當に深い經濟學上の知識のないものがこれを讀んで分る筈なく、出來れば哲學社會學の一ト通りの素養も欲しい、又この程度の素養を具備する程の人なら英語や獨語も少しは讀めると見なければならぬ。であるから「資本論」邦譯の讀者は可なり狹く限られてゐると見てよからう。誰でも讀む種類のものではないのである。さうすれば、つまり私共が少し調子をおろして讀んでみてスラ〱と意味が通ずればそれは非常な成功というてよく、假に時々分

りにくい箇所があつても、これを外國語で想像して見たり、場合によつては原書に引き較べて分る程度なら、又相當の出來榮と稱していゝと思ふ。こんな態度で私は、この一ヶ月あまり高畠君の譯本をちよい〳〵讀んで見たのである。

正直なところこの「資本論」は豫定通り調子をおろし過ぎてはよく分らぬ所もあつた。分つたと思つた時は、可なり緊張してゐたことを後で氣づいたのである。併し考へて見ると、これは譯文の六つかしいためではなくて、マルクスの學說そのもが六つかしいためであつた。マルクスの學說を讀ながら讀んで分ると思ふのが實は十毫間違つてゐるのだが、讀ながらでもちよつと讀めさうに思ふ程、高畠君の譯文のこなされてゐるのには今更ながら驚かされる。それでも私は絕えず反省して見た、自分は幾らかマルクスの學說を聞きかじつてゐるので、そのために割合に早く分るのではあるまいかと、併しさうばかりでもないやうである。しかしてこれだけは間違ひない、私よりもつと素質の乏しい人でも、卷末の原語對照及譯註を便りとすれば大方の理解はつくだらうといふことである。斯ういふ點から私は、あの難解の書を斯くまで分り易く日本文に移されたことを、飜譯界の驚異に値する大成功と許して差支ないと信ずる。敢て必要といふのではないが、斯うした態度の讀者に取つて、も少し註釋を豐富にしたなら一層便宜であつたらうとも思ふ。併しその位の便宜はまた、高畠君などのすでに公にされた他のマルクス學解說書によつても得らるゝことはいふまでもない。

三

終りに私は嚴密な研究者といふやうな立場を取て本書の價値を論じて見よう。マルクスの資本論に獨文の原書でも讀めぬことはない。英譯本なら更に樂に讀める。けれどもあの浩瀚な大册を一々精讀するのいとまもなければ根も續かない、所が恰好の邦譯本が出たからこれを手引として原書を讀んで見よう。こんな考への人も世間に隨分あることゝ信ずる。事によつたら高い金を出して本書を買つた人の大半は、或はこの種の讀書子かも知れない。そこでかうした目的からみて本書の價値はどうか、これも一つ調べて見るの必要がある。原書と對照して見て私共の先づ甚だ愉快に感ずるのは、高畠君は原書に印刷されてある程の文字は悉く丁寧にこれを譯され、不必要と思はれる程のことも捨てやらずさながら原書に直接するの思ひあらしめることである。

さて本文を原書と對照して見ると、私が冒頭にもいつた通りただ〳〵その平明流暢なるに歎服するの外はない。マルクスを原書によつて讀まんとする者がこれによつてどれだけ助かるか分らない。私もその一人である處の世上多くの讀書子に代りこの點を深く高畠君に感謝する。

四

繰返していふ。高畠君は、マルクス紹介者として今日わが國の學界に卓越せる地歩を占めてゐるのみならず、資本論譯

譯者としては唯一の權威である。しかし改譯新版「資本論」は、どの點からみても同君の盛名を傷つくるものではない。專門家からはすでに譯筆正確の折紙がついた。門外漢として讀んだ私の經驗からいへば、この譯書によつて十分にマルクスの學說を窺ひ知る事が出來る。若し多少原書に當つて見るの勞を惜しまざらんか、教育あるドイツ人が原書を理解する程度に吾人のマルクスを理解し得べきは疑をいれない。此の流儀で、第二第三卷をも完了せられるならば、本書は優に我が譯界における一古典として永く珍藏せらるゝ價値を要求し得るものと考へる。(東京日日新聞)

日本思想界への一大貢献

上杉慎吉

マルキシズムが、科學的理論としてどれだけの價値があるか、資本論が現在及び將來の社會の發展にどれだけ貢献するか——これに對して如何なる態度を執るとしても、學問上及び實際上、時代の一大問題たることは爭ふべくもない。

この意義に於て、我々はこれを論評し、または進んでこれを實行せんとして、または實行を躊躇せんとするが爲めに、何よりも先づ、資本論の理論體系が如何なるものであるかを知悉せねばならぬ。マルキシズムの理解は、現代の社會改革の理想家及び實行家に取りて是非必要なるものであることは云ふまでもない。

然るに、資本論の原書は極めて難解で、且つ大部である。私などは二十年前獨逸に居たとき、どうしても讀まねばならぬものとして、讀むは讀んだが、正直によく分らず、辛うじて各種の解說書に依り其の大筋を覺へたばかりであつた。それが、高畠君の飜譯を見るに至つて、十分に分つたのである。されば、私はいつも高畠君の資本論を、日本思想界に對する一大寄與なりとして、自ら感謝し、人に向つて賞讃し、思想の動搖を憂ふる老人にも、國家の前途を考ふる青年にも、私の同志の先輩にも、門下生にも、詳讀を勸誘して居る。而して、これを讀んで社會主義といふものの本體が分り、その理論から云つても、實際から云つても、到底鵜呑みにすることの出來るものでなく、半可通社會主義者の生硬未熟なる議論の如く、これをその儘將來の日本に應用すべきものでないことを知つたと云つてゐる人が、どれだけ居るか分らぬ。

資本論の縮刷廉價版が刊行せらるることを聞いて、私は我が思想界の爲めに、思想の健實の爲めに、これを喜ぶの情に堪えぬ。

「資本論」第一卷

大阪朝日新聞

大鐙閣發行のマルクス全集のうちの資本論は高畠氏の手によつて譯出されたもので、當時既に名譯といはれたが、今回また氏は全文にわたる改譯を發行するに至つた。…裝幀も…今回は極めて平民的となつた、從つて定價も安い、以前の半分よりも更に安い、書物の性質上安い方がよい。以前の譯本も良かつたに違ひないが、稍堅過ぎるの憾があつた、今回の改譯によつて讀み易くなつたのは何よりである。マルクスといへば、コレラか何んぞのやうに怖がる官憲の人々にも一度は讀んで貰ひたいものである。從來の社會主義が空想に止まりしに反しマルクスのそれには學問的の基礎づけがある。だからマルクスの社會主義に反對する人は、學問を以て之に向はなければならぬ、牢屋に叩き込めば、社會主義が滅びるなど丶思ふならば、それは笑ふべき淺見だ、本譯書を手にとつて先づ其學問的權威を見よ。本譯書に收むるところを簡單にいへば次の如し、先づ有名なる勞働價値說に始まる、これが第三卷の平均利潤說と矛盾するや否やに關しては學界に喧ましい問題となつてゐる、我國においても、慶大の小泉信三氏（矛盾すとの說）と京大の河上肇氏、大原研究所の櫛田民藏氏（矛盾せずとの說）との間に幾度か論爭せられ、いまなほいづれとも決著を見ない。之に次いで餘剩價値說の說明がある、すなはち資本主義社會の祕密ともいふべき利潤、利子、地代等の餘剩價値のよつて來る所以を究める、マルクスの見るところによれば、畢竟、勞働者が搾取せられるといふことになるのである、この勞働者の搾取の行はれつ丶ある歷史的事實の研究は實に詳細を極めてをり、かつ權威ある資料にのみ據つて居る。河上博士が資本論略解において試みたやうに假想的の小說を例に引くといふことは、マルクスのせざるところ、マルクスは工場監督官の報告をよく引いてゐるが、この歸納的の研究が資本論をして更らに學界に重きをなさしめた所以である。第三に本書の最終編は資本の蓄積行程の說明である。謂はゆる本來的の蓄積なる一章、殊にその最後の節なる「資本制蓄積の歷史的傾向」は實に名文で、たゞ讀んだだけでも面白い、ロッシヤアの節慾說を皮肉つたところ、なかなか面白い、大經濟學者もまるで子供が他愛もないことをいふもの丶やうに取扱はれてゐる。この資本の蓄積に就いても獨斷的ではなく、必ず歷史的資料を示した所など、さすがにマルクスの用意のほども窺はれる、いづれ引續いて第二卷第三卷も改譯せらる丶筈であるが、第一卷がかほどまで完備して改譯されたことは共に慶してよいと思ふ。マルクスを危險視する人々も是非讀んでもらひたいがまたマルクスに心醉して居る人々のうちにも未だ資本論を熟讀せぬ人が多い、さしあたり大學の社會科學研究會などは、學問的には怪しげ

な宣傳本などをテキストとせずに、寧ろ此資本論の譯本を深く研究して貰ひたいものである。評者は學問的にもまた社會的にも、この譯本の出版を歡迎し、廣くその熟讀を薦めたい。

高畠氏の大業

報知新聞

資本論が日本語に譯されたからといつて特に大騒ぎをする程のこともあるまい。なぜなれば、それは當然過ぎるほど當然なことであるからである。

今こゝに高畠素之氏の資本論譯を手にして何か批評を書けといはれても、資本論そのものに對する批評は、世界にわたつて廣く行はれて來てゐることで、今さら僕等の批評を加へる餘地はあるまい。それならば譯の善し惡しはどうかといふ點になるのであらうか、高畠氏の譯なるものは、世に大抵その定評があるところで、これとて今さら批評するほどの必要はない。

けれども、今新たにこゝに修正版を手にして見ると、今更の如くに、譯者の眞劒な態度に敬意を表せざるを得ない。そしてそこに何かいはなければ、氣が濟まないやうな心持ちになる。…この大冊を手にしたゞけでも、その梁の並大抵の努力でないことを思はせられるが、それを三卷も、しかも、二度も譯返して譯出するといふことは、その精力に對してだけでも驚異を感ぜずにはゐられぬ。氏は本書を正譯に近いものとするために、一生この努力を斷たないといつてゐるが、そこに氏の學者的良心も窺はれて嬉しい。

自分はかつてドイツ語を習ひはじめた頃、譯出の練習の爲に、同氏の譯したカウツキーの資本論解說を字引にして、原書と首つ引きでやつたことがある。その時には自分の語學が貧しいので、その譯が巧いのか、下手なのか、正しいのか、間違つてゐるのかの判別もつかず、無條件に高畠氏の譯文を信じて、そのつもりで語學の練習をした。それが後になつて少しばかり語學の目が開けて來た頃、同氏の譯文の輕視すべきものでないことが、朧氣に分るやうになつた。その時以來、同氏は自分に取つて間接の語學の先生であるやうな氣持ちでゐた。そして資本論の譯が、大鐙閣から出たといふことを聞いた時にも、遙かに喜んでゐたのである。この意味において、自分は、同氏の今度の修正版に對して敬意を表すると共に、ある意味の感謝の意を示しておきたいと思つて、ペンを執つた次第である。

中味については、實際、今こゝにくど〲しく批評したり紹介したりする必要がないと思ふから省略する。――初齋生

改譯資本論廉刷の擧を聞いて

福田德三

高畠君の改譯資本論が廉刷版となつて出版せられることは、萬人の歡迎するところであらうと思ふ。私は豫てから、其事を切望して居たのであるが、此度改造社の英斷によつて、其れが實現せられる由を聞いて、誠に欣に堪へぬものである。

思ひ出せば、大正三四年の頃かと思ふ。堺枯川老が、高畠君同伴私の宅へ訪られて、此人こそ、資本論全部を譯了する力と根氣とを有つ人であると紹介せられたのは。其後色々な變遷があつて、私は、高畠君の資本論全譯を熱望しつゝ、思ふ樣に、御手傳することも出來ず、否、却つて第一卷の譯出が、未だ半にも達せぬ前に、同君の事業とは、全く緣を絕つこととさへなつた。此間には、色々な事情もあつたが、要するに、私の不德の致すところであつたに相違ない。爾來、高畠君は、百の障碍、千の困難に些もめげることなく、孜々として譯筆を續け、獨力獨行遂いに、全部の譯出を完うしたのみならず、更らに、改譯を企て、其れも、先頃滯なく完了した。其の精勵、其の刻苦、實に尋常學究の徒を愧死せしめるに足りるのである。私は、元より、同君が、此大事業を必ず完成する人なることを、深く信じて居たものであるが、斯くも短日月の間に、而して斯くまで立派に仕上げられたことに對して、驚異の念に打たれざるを得ぬのである。私は、若干部分を、原本と對照して、時には可なり念入に比べて見たことがあるが、實に美事な出來榮である。元より人各好むところあり、自分が譯筆を下すものとして見れば、此處彼處異存を挾みたいところの見出さるべきは、當然である。殊にマルクスの此書の文一句一節に、含蓄極めて深く、行文は簡潔其ものであり、處によると、難澁を極めたもので、殆んど、意の通せぬとさへ見えるところもある。從つて、其譯出方は、殆んど無數に可能であらう。英、佛、伊、蘭、露等の諸譯本夫れ／＼に、趣きを異にして居るを見て、直ぐ分ることである。

私は、近來、自分に必要があつて、マルクスやエンゲルスの著作の無數なる邦譯諸本を、可なり多く涉獵したことがあるが、其等の何れに比べても、高畠君の改譯資本論は、如何なる點に於ても、決して遜色のないものであり、全體を通じて見れば、其等の何れに決しても確かに、幾多の優れた點々を有つてゐるものなるを見出した。エンゲルスの著作は、マルクスよりは遙かに、譯出に容易なりと考へられるが、其のエンゲルス邦譯の何れを以つて、高畠譯本に比べても、其以上に出づるとは言ひ得られない。河上博士のマルクス文邦譯は、恐らく天下一品を以て稱す可きものであらう。而して、高畠君の改譯資本論は、量に於いて、河上諸譯を合して、其

何倍かに當るものであらうが、部分的には、河上氏譯文の遙かに勝れたところはあるが、全體として見れば、優に其れに伍し得るものと思ふ。元より、望蜀の念を以てすれば、其改譯文を以てしても、猶、高畠本には、修補添削の望ましいところは、數々あることは、否定し得られぬであらう。思ふに、同氏は、向後と雖も、絶へず改修を努めて倦まないことであらう。然し、現在の儘を以てしても、私は、此書を以て、我邦社會科學文獻の第一位に置かる可き學致なりと云ふに躊躇せざるものであつて、邦文を以て、資本論を讀まんと欲する人々に向つては、私は一の憚るところなく、此の改譯本をすゝめ得ると信ずる。

唯一つ遺憾であつたことは、從來の刊本は、定價が嵩んでゐたことこれである。然し、カウツキー編の民衆版でも、最近刊行の第二卷は、定價七圓五十錢斗りである。又た、極く近頃刊行を始めたリヤザノフ氏編の獨文マルクス全集は、資本論のみで、十三册を占むる計劃であるが、一册九圓強、全部で百二十圓斗りとなる筈である。其割合で行けば、從來の高畠譯刊本も決して不廉なりとは云へぬ。唯だ、和蘭譯本に、定價の甚だ安いものがある。殊に近年モリトル氏の非常なる努力によつて、獨力で續刊しつゝある佛譯マルクス全集（コスト社出版）は、佛貨下落の爲めもあるが、甚だ低廉なものである。今改造社の大奮發によつて、此のモリトル佛譯本に劣らざる低價を以つて、邦譯の廉刷が刊行せられることは、たしかに、日本の讀書界一般、就中、勞働階級に取つて、無上の慶事と云はねばならぬ。私は、双手をあげて、此企を歡迎せざるを得ぬものである。（二・九・八・）

資本論の讀み方

『資本論』は難解を以つてきこえてゐる。しかし、他の各方面の原理的著作に比べて、『資本論』が特別に難解だとはどうしても考へられぬ。無論、難解の個所もある。しかし、ピンからキリまで難解といふ譯ではない。一番難解なのは、第一卷第一篇第一章であつて、これが相憎く冒頭を占めてゐるため、卷を開いて直ちに辟易してしまふ。鬼ヶ島の鐵門である。この鐵門を突破せずしては、どうしても城内に入ることが出來ぬ。この點はマルクス自身も認めてゐた。彼れは第一卷第一版序文の中で『何事も初めが困難である。これは如何なる科學についても、言ひ得ることである。されば本書に就いても、第一章、特にその中の商品分析を含む一節の理解は、蓋し最大の困難を呈するであらう』と言つてゐる。

そこで『資本論』の讀み方としては、この第一章を後廻にすべしと說く學者が大分ある。例へば、アメリカの社會主義學者サイモンズは、『資本論』第一卷の講讀順序としては、先づ最も平易にして興味多き第四篇第十三章『機械及び大工業』から始め、次に第七篇第二十四章『謂はゆる本來的の蓄積』

を讀み、それから溯つて第一章を繙き、以下順を追ふて進むべしと說いてゐる。蓋し機械論、蓄積論は、誰れが讀んでも面白く理解することができ、讀者の興味を喚ることが多いから、玆で先づ十分讀者の關心を引着けて置いて、それから徐々に難關へとおびき寄せようといふ考へであらう。成る程、それも一工風であらうと思ふ。

又ドイツのゾンバルトは、次の繙讀順序を勸めてゐる。

(一)第一卷、第三篇、第四篇、第七篇
(二)第三卷全部
(三)第一卷殘部
(四)第二卷全部

更に我が福田德三博士の主張する順序は次の如くである。

(一)第三卷第一章から二十八章迄
(二)第一卷、第三篇及び第四篇
(三)第二卷全部
(四)第三卷、第二十九章以下全部
(五)第一卷、第七篇
(六)第一卷、第五篇及第六篇
(七)第一卷、第一篇及び第二篇

以上諸家の說くところは、いづれも獨特の體驗から割出した順序で、とり〲に特徵もあり意味もあることは勿論と信ずるが、私一個の經驗からいふと、矢張り原編輯通りの順序で讀むのが一番善いと思ふ。

唯、『資本論』の大體の方向と術語とに慣熟する爲に、解說書を先きに讀んで置く必要がある。『資本論』の解說書としては、何といつてもカウツキーの『資本論解說』(改造社發行定價一圓)が一番善い。『資本論』繙讀に着手する前、ぜひこの解說書を再三熟讀して頂きたいと思ふ。さうすれば、問題の第一卷第一章の如きも、難解ながら大體の見當がつく。ただ、この解說書は第一卷を骨子として、僅かに第三卷の一半に觸れてゐるだけであるから、第二卷全部と第三卷後半(地代論)とは別の手引に頼らねばならぬ。石川準十郎氏の『マルクス經濟學入門』は幸ひに、第二卷の內容にも觸れてゐる。これは、ぜひ一讀して頂きたいと思ふ。また、第三卷後半(地代論)については、拙著『マルクス十二講』の中で、簡單ながら解說を與へてゐるから、それもついでに併讀して頂きたい。

要するに參考書は多きを要せず、以上三册、殊に『資本論解說』を十分にこなしさへすれば、それで『資本論』繙讀の資格は申分なく具備せられ得るものと信ずる。

カール・マルクス小傳

カール・マルクスは一八一八年五月五日獨逸トリーアに生る。その成人後の著者『猶太人問題』の中で猶太人に對する當時のプロイセン政府の暴虐なる行爲を攻擊した彼れは、父から猶太

人の血をうけてゐたのである。郷里普通學校卒業後、ボン大學に入學し、後ち一八三六年ベルリン大學に轉じて哲學・法律學・歷史・文學等を研究した。彼れがヘーゲル左黨の青年文學者の間に堅き地歩を占めたのは、それから間も無い後のことであつた。

二十四歲の時、當時ライン地方に漲つてゐた反抗と自由との精神のうちに身を投じ、ライン新聞の主筆となつて、時の檢閲官と頑强に戰つた。一八四三年、官憲は遂にライン新聞の發行禁止を命じた。その後、彼れは友人等と協力して『獨佛年報』を發行したが、これも亦、前同樣の運命に遭つた。然しこの事業を機緣として、彼れは終生の盟友エンゲルスと相知るを得たのであつた。一八四三――四年頃は、マルクスの內的生活に於ける重大な時期であつた。彼れが社會主義者となつたのは、その頃である。

『獨佛年報』の廢刊後、一八四五年にマルクスはエンゲルスとの連名を以つて『神聖家族』を刊行して、當時の思辯的哲學を痛烈に批評した。その後、彼れの研究の對象は經濟學に向けられたが、一八四七年に刊行された『哲學の窮乏』は、獨逸哲學から英吉利經濟學への彼れの研究の轉向の跡を示すものとして、注目に値するものである。マルクスは、その間たえず、普魯西政府に對する筆硯の戰を怠らなかつたが、そのため、同政府はフランスに迫つてマルクスを國外に放逐せしめた。彼れは白耳義ブラッセルに奔つた。

一八三六年、巴里在住の獨逸亡命者によつて『共産主義同盟』がつくられ、マルクスもその一員となつた。一八四八年この同盟はその第二回大會の宣言の起草をマルクス及エンゲルスに一任した。かくして生じたものが、卽ち有名なる『共産黨宣言』である。共産黨宣言の發表後間もなく、獨逸に二月革命が起つた。その影響をうけて、ブラッセルにも不安の氣がただよひ始めた。白耳義政府は直ちにマルクスを國外に逐ひ、彼れは巴里に奔つた。然しその後も依然として祖國革命の援助のために力を盡してゐた。

やがて、彼れの爲に革命的活動の舞臺が祖國にひらけた。一八四八年三月、彼れは祖國に歸り來つて、先きに禁止されたライン新聞の再興を計畫した。六月、エンゲルス等をも記者として勇敢なる戰鬪を開始したけれども、またもや政府の爲に强壓せられ、翌年の五月には赤色に印刷された終刊號を出さねばならなかつた。一八四八年六月以降漸く衰へかけて來た革命運動は、翌年九月再び燃え始めた。マルクスはフランスに奔つた。然し滯留を拒まれたので、更らに倫敦に奔らねばならなかつた。マルクスの一生に於ける最大の犧牲時代はこれより始まる。

かの『共産主義同盟』は一八五二年末に解散した。そしてマルクスはその後主として科學的研究に從來し、一八五九年には『經濟學批判』を公けにした。一八六四年、倫敦に集つたフランス、ドイツ、ポーランド、イギリス、アメリカ等の勞働者の代表者の協議會を開いて、國際勞働者同盟の設立を議した。一八

六四年九月二十八日を以つて『國際勞働者同盟』が倫敦に設立せられ、マルクスはその宣言綱領等を起草した。十六年前共產宣言によつて叫ばれた『萬國勞働者團結せよ』とのアピールは、玆にその一部分を實現したのである。そしてこの運動の中心人物は、マルクスその人であつた。

マルクスはその間にも絕えず科學的研鑽に刻苦精勵してゐたのであるが、一八六七年、遂にかの不朽の大著『資本論』第一卷を刊行した。マルクスの最初の計畫では『資本論』を三卷に分ち、第一卷は資本の生產行程を取扱ひ、第二卷は資本の流通行程及び資本の總行程を取扱ひ、第三卷は學說史を取扱ふ筈であつたが、不幸にして第一卷を完成しただけで死んでしまつたので、後にエンゲルスが右の第二卷の前半の草稿を整理して資本論第二卷として公けにし（一八八五年）、更らに後半を第三卷として公けにした（一八九四年）。更らにその後、マルクス門下隨一の學者たるカウツキーがエンゲルスの委託に從ひ、前記計畫の第三卷『學說史』を『剩餘價値學說史』として公けにした（一九〇四――一九一〇年）。

一八七〇年に普佛戰爭が勃發した。翌一八七一年には、有名なる巴里コムミユンが起つた。萬國勞働者同盟は、勞働階級の勝利のためにこの一擧を指揮したが、その效なくコムミユンは慘敗に終つた。コムミユンの意義如何。その慘敗の經驗は何事を敎へるか。マルクスによつて書かれた『佛國內亂』は、實にこの質問に答へてくれる。巴里コムミユン敗北後の萬國勞働者同盟は、對外的並びに對內的に大なる變化を生じた。一八七一年マルクス派とバクーニン派との分裂を來たした。一八七三年のゼノア會議は、同盟の解散を決議した。

これより後、マルクスは主として學理の研究に從事しながら各國、ことに獨逸の勞働運動に絕えず怠らざる注意をむけてゐた。そして一八七五年のゴータ大會へは、その綱領を批評せる貴重なる文獻を送つた。彼れのロンドン生活は全く犧牲的のそれであつた。彼れの全生涯を通じて、最も甚だしき苦悶の期間であつた。病弱と貧困とは容赦なく彼れを苛んだ。一八七七――七八年の頃、やや健康を回復したので、その手記の整理と、資本論第二卷の印刷の完成とに努力したのであつたが、その努力の酬いられるを見る前に、彼れは自己の勞作力がやがて最後に近づくであらうことを認めねばならなかつた。南フランスへの轉地の後、一八八三年三月十四日、この偉大なる存在は遂に去つたのである。

彼れの主なる著作には次の如きものがある。『資本論』全三卷『剩餘價値學說史』『經濟學批判』『哲學の窮乏』『神聖家族』『佛國階級鬪爭』『革命と反革命』『ヘーゲル法理哲學の批判』『道德批判と批判道德』『歷史法學派の哲學的宣言』『テモクリトス及びエピクーア自然哲學の比較』『價値・價格及び利潤』『賃銀勞働と資本』『ルキ・ボナパルト』『猶太人問題』『自由貿易論』『共產黨宣言』等。

改造社出版圖書目錄

（昭和二年七月現在）

著（譯）者名	書名	型頁數	定價送料 円
法學博士 穗積重遠著	離婚制度の研究	菊上 九四〇頁内	一〇・〇〇 ・三六
河西太一郎著	農業問題研究	四六上 四三五	二・三〇 ・二二
帝大教授 宮本英雄著	婚姻の基調	四六上 二〇八	一・五〇 ・一八
法學博士 福田德三著	社會運動と勞銀制度	四六上 四二〇	二・五〇 ・二〇
慶大教授 小泉信三著	改訂 價値論と社會主義	菊上 四三三	三・二〇 ・二八
慶大教授 孫田秀春著	勞働法總論	菊上 三四〇	二・六〇 ・二六
經濟學博士 本庄榮治郎著	日本社會史	菊上 二九六	二・四〇 ・二四
經濟學博士 本庄榮治郎著	日本財政史	菊上 三一六	二・五〇 ・二四
經濟學博士 本庄榮治郎著	近世農村問題史論	四六上 三六〇	二・三〇 ・二二
法學博士 河田嗣郎著	農村問題と對策	四六上 三四四	二・〇〇 ・二〇
法學博士 河田嗣郎著	社會問題綱要	菊内 六四四	四・五〇 ・二七
法學博士 河田嗣郎著	農政四十三講	四六上 六九八	二・五〇 ・二二
法學博士 河田嗣郎著	家族制度と婦人問題	四六上 三五三	二・〇〇 ・二〇
京大助教授 平野義太郎著	法律における階級鬪爭	菊上 三四一	二・五〇 ・二六
農學博士 小野武夫著	農村研究講話	四六上 三二八	一・五〇 ・一八
農學博士 小野武夫著	日本農民史語彙	四六上 四九三	三・五〇 ・二二

著（譯）者名	書名	型頁數	定價送料 円
法學博士 末弘嚴太郎著	農村法律問題	四六上 三一八	二・五〇 ・二二
法學博士 末弘嚴太郎著	嘘の效用	四六上 三五四	二・〇〇 ・二〇
法學博士 末弘嚴太郎著	法窓閑話	四六上 三四三	二・五〇 ・二〇
法學博士 末弘嚴太郎著	勞働法研究	四六上 五七六	三・〇〇 ・二二
法學博士 堀江歸一著	國際經濟總論	菊上 四一七	三・五〇 ・二六
法學博士 堀江歸一著	改訂增補 國際經濟と國民經濟	菊上 三四三	二・五〇 ・二六
法學博士 堀江歸一著	續國際經濟と國民經濟	四六上 三九四	二・五〇 ・二二
法學博士 堀江歸一著	貨幣・銀行・外國爲替（上卷）	菊上 三八四	三・〇〇 ・二六
法學博士 堀江歸一著	貨幣・銀行・外國爲替（下卷）	菊上 五一二	四・〇〇 ・三〇
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理（分册一）	菊上 五一六	三・五〇 ・二四
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理（分册二）生產要因	菊上 四〇〇	三・〇〇 ・二四
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理（分册三）需要・供給・價値の一般關係	菊上 四九八	三・五〇 ・二八
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理（分册四）國民所得の分配	菊上 六五〇	三・七〇 ・二八
文學博士 高田保馬著	階級及第三史觀	菊上 三八四	二・八〇 ・二四
慶大教授 野村兼太郎著	近世商業史	菊上 五六四	四・〇〇 ・二六
京大講師 山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	四六上 二五三	一・五〇 ・一八

著者	書名	體裁	定價
トロツキイ著 茂森唯士譯	文學と革命	四六上 一九八	二・〇〇 ・二〇
ブハーリン著 富士辰馬・横田千元譯	唯物史觀	四六上 六三〇	三・五〇 ・二八
ブハーリン著 富士辰馬譯	世界經濟論	四六上 三三六	二・〇〇 ・二〇
ニコライ・レーニン著 茂森唯士譯	レーニニズム	四六並 二一四	一・二〇 ・一六
チ・ジノヴィエフ著 富士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	四六並 一六四	一・九〇 ・一四
持地六三郎著	日本植民地經濟論	菊上 三一〇	二・八〇 ・二〇
佛國蔵相カイヨー著 龜井貫一郎譯	民衆の苦悶	四六並 二四〇	一・五〇 ・一六
森戸辰男著	靑年學徒に訴ふ	四六並 一六〇	・三〇 ・一二
森戸辰男著	學生と政治	四六並 一六六	・三五 ・一二
森戸辰男著	思想鬪爭史上に於ける社會科學運動の重要性	四六並 一七七	・三五 ・一二
森戸辰男著	思想と鬪・爭	四六上 三八六	二・〇〇 ・二〇
ウンターマン著 森喜一譯	哲學思想の史的考察	菊上 二四二	二・〇〇 ・二〇
ヨゼフ・ディーツゲン原著 山川均譯	無產階級の哲學	四六上 三八八	二・五〇 ・二二
高橋龜吉著	資本主義末期の研究	四六上 五三八	二・五〇 ・二四
渡邊一郎著	勞働問題原理	四六上 三九〇	二・〇〇 ・二〇
高畠素之著	マルキシズムと國家主義	四六並 二八〇	一・〇〇 ・一八
アーサー・レウヰス著 高畠素之譯	改訂社會主義社會學	四六並 二四八	一・〇〇 ・一六
高畠素之著	社會主義と進化論	四六並 二三三	一・〇〇 ・一八
カウツキイ著 高畠素之譯	改譯資本論解説	四六並 五二八	一・〇〇 ・一八

著者	書名	體裁	定價
口田康信著	國家思想の研究	四六上 三四四	二・〇〇 ・二〇
早大教授 大山郁夫著	現代日本の政治過程	四六上 三五四	二・五〇 ・二二
法學博士 森莊三郎著	法制講話	四六上 四三四	二・五〇 ・二二
文學博士 朝永三十郎著	カントの平和論	四六上 二四六	一・五〇 ・一八
阪内務事務官 三宅司法書記官著	增補普通選擧法要綱	菊半截 二三六	・八〇 ・一六
帝大教授 田中耕太郎著	法と宗教と社會生活	四六上 四〇八	二・五〇 ・二〇
帝大助教授 廣濱嘉雄著	私法學序説	菊上 四六〇	三・〇〇 ・二六
京大教授 末川博著	ソヴィエトロシアの民法と勞働法	四六上 四〇二	二・五〇 ・二二
法學博士 高柳賢三著	現代法律思想の研究	菊上 八二〇	四・五〇 ・二七
文學博士 松本亦太郎著	心理學講話	四六上 五四六	四・〇〇 ・二六
文學博士 松本亦太郎著	智能心理學	菊上 一〇四〇	九・〇〇 ・四六
文學博士 桑田芳藏著	ヴントの民族心理學	四六上 五一六	三・五〇 ・二四
文學博士 米田庄太郎著	文化哲學叢書第一篇 リッケルトの歴史哲學	四六上 品切	四・七〇 ・二六
板垣鷹穗著	文化哲學叢書第二篇 新カント派の歴史哲學	四六上 二一八	一・五〇 ・一八
帝大教授 恒藤恭著	文化哲學叢書第三篇 ジムメルの經濟哲學	四六上 品切	三・〇〇 ・二〇
廣島高師教授 勝部謙造著	文化哲學叢書第四篇 ディルタイの哲學	四六上 三一七	二・〇〇 ・二〇
京大教授 植田壽藏著	藝術哲學	菊上 三四四	二・七〇 ・二四
廣島高師教授 淸原貞雄著	日本道德論	菊上 五六四	四・五〇 ・三〇
廣島高師教授 長田新著	現代教育哲學の根本問題	菊上 八〇〇	五・〇〇 ・二四

著者	書名	判型	頁數	定價	送料
賀川豊彦著	生存競爭の哲學	四六上	三六〇	二・〇〇	・一二
帝大教授 武内義雄著	老子の研究	菊上	五一三	三・五〇	・二八
佐藤繁彦著	體驗宗教の研究	四六上	三六六	二・〇〇	・二〇
スティルネル著 辻潤譯	自我經	四六上	六六八	二・八〇	・二〇
理學博士 桑木彧雄著	物理學と認識	四六上	二五四	一・五〇	・一八
東京帝大教授 關寬之著	學校兒童心理學	四六上	四七三	二・七〇	・二〇
エムシー・コールダイ著 長尾正人譯	遺傳學概論	四六上	三〇八	一・八〇	・二〇
松崎實編	校註切支丹鮮血遺書	四六上	六六三	三・五〇	・一八
有島武郎著	愛する人々へ	四六上	五〇四	三・〇〇	・二四
吉江喬松著	近代文明と藝術	四六上	三三四	二・〇〇	・二〇
里見弴著	文藝管見	四六上	一九八	一・二〇	・一六
文學博士 厨川白村著	苦悶の象徴	四六上	二一四	一・八〇	・二〇
文學博士 厨川白村著	近代の戀愛觀	四六上	三七〇	二・五〇	・二〇
昇曙夢著	露國現代の思潮及文學	四六上	七八六	四・八〇	・四〇
帝大教授 阿部次郎著	學藝論鈔	四六上	四一三	二・二〇	・二〇
帝大教授 阿部次郎著	北郊雜記	菊半上	五〇三	一・九〇	・一八
帝大教授 村岡典嗣著	吉利支丹文學抄	菊上	三六〇	三・五〇	・二六
武者小路實篤著	文學に志す人に	四六上	二六六	一・五〇	・一八
京大助教授 太宰施門著	ロマンチック時代	四六上	二六八	二・〇〇	・一八
理學博士 石原純著	戀愛價値論	四六上	二八三	一・六〇	・一八
親鸞文學會編	ゆかり	四六上	四四六	三・五〇	・二〇
文學博士 高野辰之著	日本演劇の研究	菊上	四一二	四・〇〇	・四〇
菊池寛著	文藝當座帳	四六上	二四〇	一・五〇	・一八
正宗白鳥著	文藝評論	四六上	三三三	一・八〇	・二〇
齋藤茂吉著	現代代表自選歌集 朝の螢	四六上	一五四	一・五〇	・一八
島木赤彦著	現代代表自選歌集 十年	四六上	一四〇	一・五〇	・一八
古泉千樫著	現代代表自選歌集 川のほとり	四六上	一八八	一・八〇	・一八
中村憲吉著	現代代表自選歌集 松の芽	四六上	一八〇	一・八〇	・二〇
釋迢空著	現代代表自選歌集 海やまのあひだ	四六上	二六六	一・八〇	・二〇
木下利玄著	現代代表自選歌集 立春	四六上	一七六	一・八〇	・二〇
與謝野晶子著	現代代表自選歌集 人間往來	四六上	一三七	一・八〇	・二〇
前田夕暮著	現代代表自選歌集 原生林	四六上	二〇四	一・八〇	・二〇
土岐哀果著	現代代表自選歌集 空を仰ぐ	四六上	一九六	一・八〇	・二〇
若山牧水著	現代代表自選歌集 野原の郭公	四六上	二三〇	一・八〇	・二〇
窪田空穗著	現代代表自選歌集 槻の木	四六上	一九四	一・八〇	・二〇
倉田百三著	超克	四六上	三九四	二・二〇	・二〇
賀川豊彦著	星より星への通路	四六上	三六八	二・〇〇	・二〇
若山牧水著	樹木とその葉	四六上	三六〇	二・〇〇	・二〇

著者	書名	判型・頁數	定價・送料
長谷川如是閑著	改造社隨筆叢書第一篇 犬・猫・人間	四六並 四〇三	一・八〇 ・一六
堺利彦著	改造社隨筆叢書第二篇 野外劇の一幕	四六並 二六八	一・五〇 ・一六
中澤臨川著	改造社隨筆叢書第三篇 嵐の前	四六上 二五四	一・五〇 ・一六
高濱虚子著	改造社隨筆叢書第四篇 朝の庭	四六並 三〇五	一・七〇 ・一六
武者小路實篤著	改造社隨筆叢書第五篇 筆のむくまゝ	四六並 二〇四	一・二〇 ・一四
河東碧梧桐著	改造社隨筆叢書第六篇 二重生活	四六並 二二〇	一・三〇 ・一六
文學博士 新村出著	南蠻更紗	四六上 三九八	二・六〇 ・二三
野口米次郎著	先驅者の言葉	四六上 三一〇	一・八〇 ・一六
野口米次郎著	坐る人間の評論	四六上 三二六	二・〇〇 ・一八
富田渓仙著 下店靜市編	渓仙八十一話	菊上 三四二	三・〇〇 ・一六
岸田國士著	言葉・言葉・言葉	四六上 二四八	一・八〇 ・一八
文學博士 幸田露伴著	幽秘記	菊上 三四八	二・八〇 ・一四
文學博士 幸田露伴著	龍姿蛇姿	四六上 三三三	二・八〇 ・二二
醫學博士 土肥慶藏著	鶚軒游戲	四六上 四六六	三・〇〇 ・二四
文學博士 瀧精一著	文人畫概論	菊上 品切	二・〇〇 ・二〇
板垣鷹穗著	美術史論集 表現と背景	菊上 一九八	三・八〇 ・二三
岸田劉生著	圖畫教育論	菊上 一三八	三・五〇 ・二三
矢代幸雄著	太陽を慕ふ者	四六上 二二四	一・五〇 ・一八
醫學博士 木下杢太郎著	支那南北記	四六上 五八六	三・〇〇 ・二二

著者	書名	判型・頁數	定價・送料
改造社編	大正大震火災誌	四六倍 八〇〇内外	一五・〇〇 ・四五
ビシャラ・ナハス著 高濱毅譯	ツタンカーメンの生涯と時代	四六上 一三二	一・八〇 ・一六
村松梢風著	近世名匠列傳	四六上 五六六	二・五〇 ・二〇
山川均著	改版 レーニンとトロツキー	四六上 二六八	一・五〇 ・一八
大杉榮著	自敍傳	四六並 三四四	二・〇〇 ・一八
文學博士 幸田露伴著	蒲生氏郷 平將門	菊上 二六二	二・〇〇 ・二二
文學博士 幸田露伴著	賴朝・爲朝	菊上 二五八	二・〇〇 ・二二
柳澤健著	ジャン・ジョレス	四六上 二三三	一・五〇 ・一八
堺利彦著	堺利彦傳	四六上 四四四	一・九〇 ・二〇
野口源三郎著	オリンピアへの旅	四六上 四〇八	二・八〇 ・二〇
芥川龍之介著	支那游記	四六上 二七六	二・〇〇 ・二二
賀川豐彥著	雲水遍路	四六上 五六六	三・〇〇 ・二六
帝大教授 河合榮治郎著	在歐通信	四六上 三三三	二・〇〇 ・一八
理學博士 石原純、理學士 山田光雄、理學士 [illegible]、理學士 阿部良夫 共譯	アインスタイン全集 全四冊	菊上	各冊 五・〇〇 ・二六
理學博士 桑木彧雄著	物理學と認識	四六上 二四四	一・五〇 ・一八
佐藤充・庄司彥六共著	近代物理學概觀	菊上 二五四	三・〇〇 ・二三
中澤臨川著	電子説から見た世界	四六上 品切	一・八〇 ・一八
佐藤春夫著	童話 ピノチオ	四六上 二九六	一・八〇 ・一八
關寛之著	學校兒童心理學	四六上 四〇二	二・七〇 ・二三

大衆に呼びかける

大山郁夫著

既成政黨は其腐膓を民衆の前に暴露した。今や我が國は今回の府縣會議員選擧を前にして、晴れがましき政治上の一大轉開に遭逢した。此秋新興階級の先鋒たる著者は無産的立場より何を大衆に向つて叫ばんとするか？而して如何に無産階級的利害を抽出し指導し、組織化して既成政黨と對立せんとするか？大衆は本書について政治の轉向を知りそして我々の眞實に、はた、勇敢に歩く道を會得すべきである。

九月廿日發賣

定價五拾錢　送料四錢

發行所　改造社

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, UCHISAIWAI-CHO COGIMACHI-KU, TOKIO.

株式會社秀英舍印刷